

(府営大東北新町住宅建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査)

北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書

大阪府大東市北新町所在

(本文編)



「東大寺」刻印

1997

大東市北新町遺跡調査会

(府営大東北新町住宅建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査)

北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書

大阪府大東市北新町所在

(本文編)



「東大寺」刻印

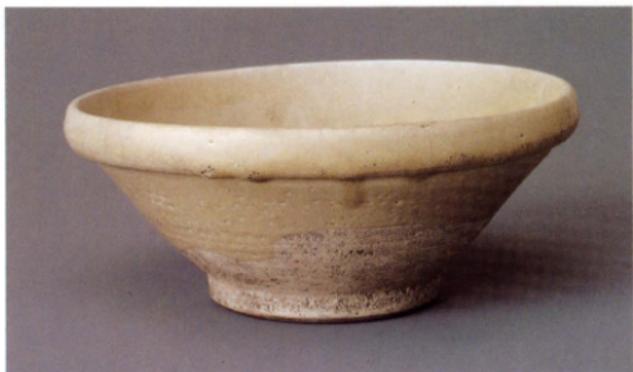
1997

大東市北新町遺跡調査会





L区 出土 ヒスイ製勾玉



M区 SK-10 出土 白磁碗



M区 SP-244 出土 綠釉陶器



M区 SK-06 出土 東大寺瓦



同「東大寺」 刻印



K区 遺構及び包含層出土 青磁



同 包含層出土 白磁



L区 遺構出土 青磁



H 包含層出土 青磁



M区 遺構出土 青磁



同 包含層出土 青磁



M区 遺構出土 緑釉・灰釉陶器



同 包含層出土 緑釉陶器

は し が き

北新町遺跡は昭和60年に当地に所在する府営大東北新町住宅（当時の名称は大東四条塚住宅）の建替え工事がきっかけで発見された遺跡です。これによって建替え工事には、事前の発掘調査が必要であることがわかり、以後北新町遺跡調査会によって順次発掘調査が実施されており、多大な成果が得られています。

今回報告を致しますのは、平成2年12月から平成4年3月まで実施しました住宅敷地の南側部分を対象とする第Ⅲ期調査に関するものであります。調査結果の詳細につきましては本文を参照していただければ幸いと存じますが、今回の調査におきましても前回、前々回と同様に、当遺跡が縄文時代から近世に至る複合遺跡であることが再確認できました。その中でも特に注目されるのは、中世（平安時代末～鎌倉時代前半）の遺構が濃密に検出されたことで、井戸、土坑、そして建物に伴う柱穴などが多数見つかっています。これらの遺構から推定しますに、当時この場所にはかなりの規模の集落が営まれていたと考えられます。加えて出土した遺物には、和泉地方や大和地方そして枚方楠葉で焼かれた瓦器碗、京都産の緑釉陶器、東播磨地方の須恵器、常滑焼、九州地方で産する石鍋や当時東大寺を再建するために吉備地方で焼かれた瓦など各地方のものが見られる他、青磁、白磁など当時の中国から輸入されたものも出土しています。これらの遺物からは、当時の人々の活発な活動を窺い知ることができます。また、当時集落の西側一帯には深野池が広がっており、想像の域を出ませんが、これら各地の製品は池を利用した舟運によって、この集落に運ばれてきたのでしょうか。そしてさらに言うなら、この集落は水上交通の要所としての役割を果たしていたのかも知れません。少々話が飛躍しましたが、このように想像をするだけでも、今まで遠い存在であった歴史が身近なものになったような気がします。今回の調査結果が大東の歴史の解明に、役に立てば幸いと存じます。

最後になりましたが、今回の調査にご協力いただいたすべての方々に対し、記して感謝の意を表します。

平成9年3月

大東市北新町遺跡調査会

委員長 大東元二

例 言

1. 本書は大阪府建築部住宅建設課が計画している、大東市北新町に所在する府営大東北新町住宅建替え第3期建築工事に伴って実施した、北新町遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は大阪府建築部住宅建設課の委託を受けて、府住宅建設課、府文化財保護課、大東市教育委員会の三者において設立した北新町遺跡調査会が実施した。
3. 本調査は平成2年11月27日から平成3年5月18日まで道路拡幅及び水路整備を含む住宅建築予定地約2544㎡（M・N区）を、平成3年7月29日から平成4年2月14日まで住宅建築予定地と貯留槽部分約2071㎡（L・O・Q区）を、平成4年7月13日から平成5年3月3日まで住宅建築予定地及び浄化槽部分、水路整備部分約2071㎡（K・P区）を第Ⅲ期の現地調査として実施した。土器の洗浄、接合等基礎的な整理作業については、上記の現地調査と並行して実施していたが、平成5年7月1日に第4期建築工事に伴う第Ⅳ期の現地調査が開始されたため一時中断し、平成8年4月1日から再開し、以後報告書作成のため整理作業を続け、平成9年3月31日に本報告書を完成している。
4. 本調査は大阪府教育委員会及び北新町遺跡調査会調査指導部長田代克巳（帝塚山短期大学教授）の指導の下同調査指導員黒田淳（大東市立歴史民俗資料館）が担当した。
5. 本調査に要した費用は大阪府建築部が負担した。
6. 現地調査及び内業整理作業の過程においては、下記の諸氏、諸機関より有益な御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）
岡山県立博物館田村啓介、東大寺史研究所堀池春峰、瀬戸町教育委員会焰硝岩哲郎、帝塚山大学堅田直、四條畷市立歴史民俗資料館野島稔、寝屋川市教育委員会濱田延充、中世土器研究会、奈良国立文化財研究所
7. 現地調査及び内業整理作業にあたっては、下記の諸氏の協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

辻本智英、大山清、山田芳樹、山本芳子、池田かずえ、益子澄子、浮田清子、宮田君子、吉木てるみ、野村香枝、清水芳子、宮田八重子、小矢田誠司、北田享子、倉奈津子、松永茂子、森石千枝子、井戸上照子、大谷聡、古川佳和、上島甲子三、鈴木真

澄美、末包知伸、辻照江、村上充紀、丸山茂男、湧川芳郎、塚山彦一郎、榎慎次郎、
沖村保男、井尻由美子、徳田登喜子、嶺野幸一、皆見秀久、徳毛美佐子、清水崇子、
仲上徹、小堀直子、古木あずさ、真下穂、松岡美佳子、中浜香織、沢田起代子、柴村
智美、岩田令子、金城慶子、岩上直子

8. 本調査で出土した木製品及び金属製品の科学的保存処理については、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
9. 本調査で実施した花粉・プラントオパール分析は、川崎地質株式会社委託し、その報告を受けている。その分析結果は来年度刊行予定の第4次建替えの報告書に掲載することになっている。
10. 本調査で出土した遺物の写真は有限会社阿南写真工房の阿南辰秀氏に委託した。
11. 本書の執筆、編集は黒田が行なった。
12. 調査において作成した写真、実測図、カラースライド等は、大東市立歴史民俗資料館において保管している。今後、広く利用されることを希望する。

北新町遺跡調査会組織表

第Ⅲ期調査開始時

平成2年9月

委員長	大東市教育委員会教育長	中野昭明
委員兼調査部長	帝塚山短期大学教授	田代克巳
委員	大阪府教育委員会文化財保護課長	川瀬 誠
委員	大阪府建築部住宅建設課長	井上正義
委員	大東市教育委員会管理部長	北本慶三
委員	大東市教育委員会指導部長	大東元二
委員	大東市文化財保護委員会会長	萩家大藏
監査委員	大東市教育委員会総合文化センター館長	小矢田光義
監査委員	大東市教育委員会管理部次長兼教育総務課長	部 正次
事務部長	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館長	橋本義一
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	太田基久
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主査	江野弘二
調査指導員	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館技術吏員	黒田 淳

北新町遺跡調査会組織表

第Ⅲ期調査終了時

平成9年3月

委員長	大東市教育委員会教育長	大東元二
委員兼調査部長	帝塚山短期大学教授	田代克巳
委員	大阪府教育委員会文化財保護課長	鹿野一美
委員	大阪府建築部副理事兼住宅建設課長	川崎正嗣
委員	大東市教育委員会管理部長	田口幹雄
委員	大東市教育委員会指導部長	乾 昇一
委員	大東市文化財保護委員会会長	合川昭夫
監査委員	大東市教育委員会総合文化センター館長	池田敦彦
監査委員	大東市教育委員会管理部次長兼教育総務課長	和田久樹
事務部長	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館長	橋本義一
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	江野弘二
事務	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館主幹	森 泰章
調査指導員	大東市教育委員会総合文化センター歴史民俗資料館技術吏員	黒田 淳

凡 例

1. 北新町遺跡の略称は、KSM (KITASHINMACHI site) である。
2. 調査区名は建て替え計画順にローマ数字で表記している。(I~IV期)
3. 調査名は遺跡の略称と調査区名を組み合わせて表記しており、出土遺物の註記はこれに従っている。(例：KSMIII) さらに調査年次順を調査名の後に「-」(ハイフン)を付しアラビア数字で表記している。(例：KSMIII-1、KSMIV-2)
4. 各調査区において設定した地区(トレンチ)名は、住宅敷地の北から南に向かってアルファベット順で表記している。尚、調査年次と調査名、地区名との関係は、第1章第1節 調査に至る経過のなかで詳しく述べている。
5. 遺構及び断面図中の標高は、東京湾標準潮位(T.P.)を基準としてm単位で表示している。
6. 遺構等の実測図作成の測量基準については国土座標第IV系を使用しており、挿図中の北はすべて座標北を基準としている。座標の記載はkm単位で表示している。
7. 各地区の区割りについては、座標のメッシュとは関係なく独自に設定しており、地区名(アルファベット)の後に「-」(ハイフン)、アラビア数字の順に表示している。(例：K-1区)地区割りの詳細については第1章第2節 調査の方法で記述している。
8. 本書で使用する遺構名については、アルファベットとアラビア数字の組合せで表記しており、アルファベットは遺構の種類を、アラビア数字は遺構番号を表している。

本書で登場する遺構の種類については以下に示す通りである。

SA	———	棚	SB	———	建物
SD	———	溝	SE	———	井戸
SF	———	焼土坑	SI	———	土器集積
SJ	———	堰	SK	———	土坑
SM	———	水田、畑	SN	———	畦畔
SP	———	ピット	SR	———	河川
ST	———	池、落ち込み			

なお、遺構検出段階においてSK(土坑)としたものの中には、遺構内掘り下げ後

SE（井戸）であることが判明したもの（その逆の場合もある）があり、遺構記号はそのまま使用しているが、このような場合には、遺構番号の後に実際の遺構の名称記すことにした。（例：SK-06（井戸））

9. 本書で使用している基本層序、遺構面、遺構番号等については、これまで実施されたⅠ期、Ⅱ期の調査のものとは関連しておらず、Ⅲ期の調査で独自に設定したものである。各遺構番号の付し方については、Ⅲ期調査の中で連番で、調査年次順（M区→K区）に付しているが、本文での各地区の遺構の説明は、調査年次順とは関係なく、アルファベット順に記述をしているため、本文中に出てくる遺構は必ずしも順番にはなっていない。また、溝などの遺構で2箇所以上の調査区にわたり検出されて、同一の遺構と判断出来るものについては、なるべく同じ遺構番号を付すようにしている。
10. 遺物の実測図の縮尺は、土器が1/4、石器2/3、木器1/4を基本としているが、一部の遺物についてはそれぞれの大きさに応じて縮尺を変えている。各スケールを参照されたい。遺物の断面は、須恵器・陶磁器類を黒塗りで、土師器類を白抜きで、瓦器・瓦質土器・瓦をスクリーントーンで表現しているが、土器の種類がわかりにくい場合はその種類を実測図中表示している。（例：黒色土器A類（黒A）、緑釉陶器（緑））
11. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修による。

巻頭図版

巻頭図版 1	L区SK-56出土遺物
巻頭図版 2	L区出土ヒスイ製勾玉
巻頭図版 3	M区SK-10出土白磁碗/M区SP-244出土緑釉陶器
巻頭図版 4	M区SK-06出土東大寺瓦/同「東大寺」刻印
巻頭図版 5	K区遺構及び包含層出土青磁/同包含層出土白磁
巻頭図版 6	L区遺構出土青磁/同包含層出土青磁
巻頭図版 7	M区遺構出土青磁/同包含層出土青磁
巻頭図版 8	M区遺構出土緑釉・灰釉陶器/同包含層出土緑釉陶器
はしがき	
例言	
北新町遺跡調査会組織表	
凡例	

本文目次

第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 これまでの調査成果	2
第3節 調査方法	3
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6
第3章 基本層序	13
第4章 遺構	
第1節 K区の遺構	17
第2節 L区の遺構	40

第3節 M・N区の遺構	58
第4節 O区の遺構	82
第5節 P区の遺構	85
第6節 Q区の遺構	89
第7節 ビット	91
第5章 遺物	
第1節 出土遺物の概要	102
第2節 K・P区の出土遺物	105
第3節 L区の出土遺物	118
第4節 M・N区の出土遺物	139
第5節 出土銭貨	177
第6章 木製品	
第1節 出土木製品の概要	180
第2節 K区の出土木製品	183
第3節 L区の出土木製品	193
第4節 M・N区の出土木製品	201
第7章 まとめ	
遺物観察表	237
木製品観察表	294
遺構一覧表	300
報告書抄録	

挿 図 目 次

第 1 図	大東市位置図	1
第 2 図	調査区位置図	4
第 3 図	調査区区割り図	5
第 4 図	市内遺跡分布図	7~8
第 5 図	土層断面柱状図	15~16
第 6 図	S D-55 平面図	18
第 7 図	K 区西側第 2 遺構面上層平面図	19~20
第 8 図	S E-34 平面、断面、土層断面図	21
第 9 図	S E-36 平面、断面、土層断面図	21
第 10 図	S E-38 平面、断面、土層断面図	22
第 11 図	S E-39 平面、断面、土層断面図	22
第 12 図	S E-41 平面、立面図	23
第 13 図	S E-42 平面、立面、土層断面図	23
第 14 図	S E-43 平面、立面、土層断面図	24
第 15 図	S E-44 平面、断面図	25
第 16 図	S E-45 平面、立面、土層断面図	25
第 17 図	S K-92 平面、断面、土層断面図	26
第 18 図	S K-94 平面、断面、土層断面図	26
第 19 図	S K-95 平面、立面図	27
第 20 図	S K-97 平面、立面、断面図	28
第 21 図	S K-98 平面、立面、土層断面図	29
第 22 図	S D-59・68 平面、断面、土層断面図	31~32
第 23 図	S E-46 平面、立面、土層断面図	35
第 24 図	S K-99 平面、立面、土層断面図	36
第 25 図	S K-111 平面、立面、土層断面図	36
第 26 図	S R-02 平面、土層断面図	38
第 27 図	S D-54 平面図	40
第 28 図	L 区西側及び N 区第 2 遺構面上層平面図	41~42

第29图	S E-22平面、立面图	43
第30图	S E-28平面、立面、土層断面图	44
第31图	S E-30平面、立面、土層断面图	44
第32图	S K-56平面、立面、土層断面图	45
第33图	S K-61平面、断面图	46
第34图	S K-67平面、土層断面图	47
第35图	S K-68平面、立面图	48
第36图	S T-02平面、断面、土層断面图	48
第37图	S E-29平面、立面、土層断面图	50
第38图	S E-31平面、土層断面图	51
第39图	S K-70平面、土層断面图	51
第40图	S R-01平面、土層断面图	53
第41图	S K-80平面、立面、土層断面图	54
第42图	S K-84平面、立面图(扩大)	55
第43图	S R-02平面、土層断面图及び土器出土状況图	56
第44图	S J-01平面、土層断面图	57
第45图	S E-03平面、立面、土層断面图	60
第46图	M・N区西侧第2遺構面上層平面图	61~62
第47图	S E-04平面、立面、土層断面图	63
第48图	S E-06平面、立面、土層断面图	63
第49图	S E-07平面、立面、断面图	64
第50图	S E-08平面、土層断面图	64
第51图	S E-09平面、土層断面图	65
第52图	S E-10平面、土層断面图	65
第53图	S E-11平面、立面、土層断面图	66
第54图	S E-12平面、土層断面图	67
第55图	S E-13平面、立面、土層断面图	68
第56图	S K-06平面、土層断面图	69
第57图	S K-08平面、立面、土層断面图	69
第58图	S K-09平面、断面图	69

第59图	S K-14平面、立面、土層断面图	70
第60图	S K-15平面、立面、土層断面图	70
第61图	S K-21平面、立面、土層断面图	71
第62图	S K-25平面、断面图	71
第63图	S K-27平面、断面图	72
第64图	S D-42平面图	72
第65图	S F-01平面、土層断面图	73
第66图	S I-01平面、断面图	74
第67图	S I-02平面、断面图	74
第68图	S E-16平面、断面图	77
第69图	S K-35平面、断面图	78
第70图	S K-39平面、立面、断面图	78
第71图	S K-41平面、立面、土層断面图	78
第72图	S E-17平面、断面、土層断面图	79
第73图	S E-18平面、断面、土層断面图	80
第74图	S E-20平面、断面图	81
第75图	S E-21、S T-04平面、立面、土層断面图	81
第76图	S D-54杭列檢出狀況	82
第77图	P区第2遺構面上層・下層平面图	87~88
第78图	S P-244平面、立面、土層断面图	92
第79图	S P-320平面、断面图	92
第80图	S P-436平面、断面图	93
第81图	S P-799・812・826・1189・1193平面、断面图	94
第82图	S P-106平面、断面图	95
第83图	S P-1677・1779平面、断面图	96
第84图	S P-133・451・879・1176・1509平面、立面、断面图	98
第85图	S P-157・1221~1222・1239・1406平面、立面、断面图	99
第86图	S P-2214・2068平面、立面图	100
第87图	S E-32・34・35・38・39・40出土遺物	106
第88图	S E-43出土遺物	107

第89圖	S E-42・44・45・46・47出土遺物	108
第90圖	S K-92・94・95・96・97出土遺物	110
第91圖	S K-100・101・108・111・120・131出土遺物	112
第92圖	S D-59出土遺物	113
第93圖	S D-68出土遺物	115
第94圖	S R-01・02、S P、包含層出土遺物	116
第95圖	S T-02、S E-22・28・31出土遺物	119
第96圖	S K-56出土遺物(1)	120
第97圖	S K-56出土遺物(2)	121
第98圖	S K-56出土遺物(3)	122
第99圖	S K-56出土遺物(4)	123
第100圖	S K-56出土遺物(5)	124
第101圖	S K-58・61・64・66・67・70・80・82・83出土遺物	126
第102圖	S K-84、S D-39・56出土遺物	128
第103圖	S R-01出土遺物	130
第104圖	S R-02出土遺物	131
第105圖	S R-02・05出土遺物	132
第106圖	L区S P出土遺物(1)	133
第107圖	L区S P出土遺物(2)	136
第108圖	L区包含層出土遺物	138
第109圖	S T-01出土遺物(1)	140
第110圖	S T-01出土遺物(2)	141
第111圖	S T-01出土遺物(3)	142
第112圖	S T-01出土遺物(4)	143
第113圖	S T-02・03・04・05出土遺物	145
第114圖	S E-01・02・03・04出土遺物	147
第115圖	S E-08・09・10出土遺物	148
第116圖	S E-11・12・13出土遺物	150
第117圖	S E-16・17出土遺物	151
第118圖	S E-18・20出土遺物	153

第119圖	S K-06出土遺物	154
第120圖	S K-06・07・08出土遺物	155
第121圖	S K-10・11・12・14・15・16出土遺物	157
第122圖	S K-21・22・25・26・27・28・29・34・35・40出土遺物	159
第123圖	S K-46・54・55出土遺物	161
第124圖	S D-29・30・31・32・33・39・40・42・45出土遺物	162
第125圖	S I-01・02出土遺物	163
第126圖	M・N区S P出土遺物(1)	166
第127圖	M・N区S P出土遺物(2)	167
第128圖	M・N区S P出土遺物(3)	170
第129圖	M・N区S P出土遺物(4)	172
第130圖	M・N区S P出土遺物(5)	173
第131圖	M・N区S P出土遺物(6)	175
第132圖	M・N区包含層出土遺物	177
第133圖	出土錢貨	178
第134圖	S D-87、S E-34・36出土木製品	184
第135圖	S E-41出土木製品(1)	185
第136圖	S E-41出土木製品(2)	186
第137圖	S E-42出土木製品(1)	187
第138圖	S E-42出土木製品(2)	188
第139圖	S E-42・43出土木製品	189
第140圖	S E-43出土木製品	191
第141圖	S E-44出土木製品	192
第142圖	S E-46、S K-98出土木製品	194
第143圖	S R-02、S E-23・24出土木製品	195
第144圖	S K-61・68、S E-30出土木製品	196
第145圖	S P-1847・2108・2130出土木製品	198
第146圖	S P-1714・1904・2164出土木製品	199
第147圖	S P-2004・2173・2214出土木製品	200
第148圖	S P-1905・2084出土木製品	202

第149図	S K-84出土木製品 (1)	203
第150図	S K-84出土木製品 (2)	204
第151図	S J-01出土木製品	205
第152図	S T-01出土木製品	206
第153図	S T-01・05出土木製品	207
第154図	S K-06・10・14・15・40、S D-45出土木製品	209
第155図	S E-07出土木製品	211
第156図	S E-11出土木製品 (1)	212
第157図	S E-11出土木製品 (2)	213
第158図	S E-11出土木製品 (3)	214
第159図	S E-11出土木製品 (4)	215
第160図	S E-11出土木製品 (5)	216
第161図	S E-11出土木製品 (6)	217
第162図	S E-11出土木製品 (7)	218
第163図	S E-11出土木製品 (8)	219
第164図	S E-11出土木製品 (9)	220
第165図	S E-11出土木製品 (10)	221
第166図	S E-11出土木製品 (11)	222
第167図	S E-11出土木製品 (12)	223
第168図	S E-11出土木製品 (13)	224
第169図	S E-11出土木製品 (14)	225
第170図	S E-13出土木製品 (1)	227
第171図	S E-13出土木製品 (2)	228
第172図	S E-13・18出土木製品	229
第173図	S P-157・515・1104・1134出土木製品	230
第174図	S P-451・619・1104・1152・1327出土木製品	231
第175図	S P-1221・1222出土木製品	233

図版目次

- 図版1 K区第1遺構面 全景(北より) / SD-55(南西より)
- 図版2 K区第2遺構面上層 全景(北東より) / SD-59(北西より)
- 図版3 K区第2遺構面上層 全景(北西より) / SD-68(北より)
- 図版4 K区第2遺構面上層 SD-59(北東)より / SK-97(東より)
- 図版5 K区第2遺構面上層 上・SE-38(東より)、下・SE-38(東より)、上・SE-34(西より)、下・SE-43櫛出土状況(西より) / SE-43(西より)
- 図版6 K区第2遺構面上層 SE-42(南より) / SE-42(南より)
- 図版7 K区第2遺構面上層 SK-97(南東より) / SK-98(南より)
- 図版8 K区第2遺構面下層 SK-101(西より) / SK-111(南より)
- 図版9 K区第2遺構面下層 SR-01付近(北より) / 全景(北東より)
- 図版10 K区第3遺構面 全景(北東より) / 全景(北西より)
- 図版11 K区第3遺構面 全景(東より) / 全景(南西より)
- 図版12 K区第3遺構面 SR-02(北より) / SR-02(北より)
- 図版13 K区第4遺構面 全景(東より) / 全景(北西より)
- 図版14 K区第4遺構面 SR-11(北西より) / 南側側溝縄文土器出土地点(東より)
- 図版15 L区第1遺構面 全景(東より) / SD-54(西より)
- 図版16 L区第2遺構面上層 全景(西より) / 全景(北西より)
- 図版17 L区第2遺構面上層 全景(西より) / 全景(北より)
- 図版18 L区第2遺構面上層 SE-28(東より) / 上・SE-22(東より)、下・SE-22(西より)、上・SK-61(南より)、下・SK-67(南より)
- 図版19 L区第2遺構面上層 SK-68(南西より) / SK-68(南東より)
- 図版20 L区第2遺構面上層 SK-56(西より) / 上・SK-56土器出土状況(北より)、下・SK-56植物遺体検出状況(北西より)、上・SK-56植物遺体検出状況(南西より)、下・SK-56土層断面(西より)

- 図版21 L区第2遺構面上層 上・SP-1677瓦器釜出土状況(東より)、下・SP-1677瓦器釜出土状況(西より)、上・SP-1779(北西より)、下・SP-2068(北西より) / 上・SP-2108(南より)、下・SP-2193(南より)、上・SP-2214(東より)、下・SP-2230(北より)
- 図版22 L区第2遺構面上層 全景(西より) / 全景(北東より)
- 図版23 L区第2遺構面下層 SR-01(北東より) / SR-01(北東より)
- 図版24 L区第2遺構面下層 SE-31(南東より) / SK-70(西より)
- 図版25 L区第3遺構面 SK-82~84(北より) / SK-84(北より)
- 図版26 L区第3遺構面 SK-84植物遺体検出状況(北西より) / SK-84植物遺体除去後(北より)
- 図版27 L区第3遺構面 全景(西より) / SR-02付近(北より)
- 図版28 L区第3遺構面 SJ-01(南より) / SJ-01(南西より)
- 図版29 L区第3遺構面 SR-02(北東より) / 上・SR-02凹み石出土状況(南西より)、下・SR-02枕出土状況(北東より)、上・SR-02土器出土状況(西より)、下・SR-02手埴形土器出土状況(南より)
- 図版30 O区第1遺構面 全景(北より) / SD-54(東より)
- 図版31 O区第2遺構面下層 全景(北より) / 全景(東より)
- 図版32 O区第3遺構面 SR-03・04(南東より) / SR-03・04(西より)
- 図版33 M区第1遺構面 全景(東より) / SD-05・06(東より)
- 図版34 M・N区第2遺構面上層 全景(北西より) / 全景(北より)
- 図版35 N区第2遺構面上層 N-1~4・6区全景(南より) / N-7・8区全景(南より)
- 図版36 M・N区第2遺構面上層 SE-03(南より) / 左・SE-06(南より)、右・SE-08(南より)
- 図版37 M区第2遺構面上層 SE-04(東より) / SE-04(北より)
- 図版38 M・N区第2遺構面上層 SE-07(東より) / SE-10(北西より)
- 図版39 M区第2遺構面上層 SE-11(北より) / 上・SE-11(北より)、下・SE-11(北より)、上・SE-11(北より)、下・SE-

11 (北西より)

- 図版40 M区第2遺構面上層 SE-13 (東より) / SE-13 (西より)
- 図版41 M区第2遺構面上層 SK-06 (南西より) / SK-06 (南より)
- 図版42 M区第2遺構面上層 SK-06 (南より) / SK-06 (東より)
- 図版43 M区第2遺構面上層 SK-06 (北より) / SK-06 (東より)
- 図版44 M区第2遺構面上層 SK-08 (東より) / 上・SK-14 (西より)、下・SK-14 (南より)、上・SK-09 (南より)、下・SK-15 (西より)
- 図版45 M区第2遺構面上層 SK-21 (西より) / SK-21 (南より)
- 図版46 M区第2遺構面上層 SK-25 (北より) / SK-27 (南より)
- 図版47 M区第2遺構面上層 SI-01 (北より) / SD-42 (北東より)
- 図版48 M区第2遺構面上層 SF-01 (西より) / SF-01焼土 (南より)
- 図版49 M区第2遺構面上層 SP-157下駄出土状況 (北より) / SP-157柱根、礎石出土状況 (北より)
- 図版50 M区第2遺構面上層 SP-244 (南東より) / SP-244緑釉出土状況 (南東より)
- 図版51 M・N区第2遺構面上層 上・SP-106 (西より)、下・SP-210 (南東より)、上・SP-320 (北西より)、下・SP-359 (北西より) / SP-711 (西より)
- 図版52 M区第2遺構面上層 上・SP-436 (南西より)、下・SP-451 (西より)、上・SP-757 (南より)、下・SP-799 (南より) / 上・SP-803 (北より)、下・SP-812 (西より)、上・SP-826 (南より)、下・SP-1134 (南西より)
- 図版53 N区第2遺構面上層・下層 N-5区第2遺構面上層全景 (東より) / N-5区第2遺構面下層全景 (東より)
- 図版54 M区第2遺構面下層 SB-06 (北より) / ST-01 (北より)
- 図版55 M区第2遺構面下層 ST-01 (北東より) / 上・ST-01石積み出土状況 (西より)、下・ST-01下駄出土状況 (東より)、上・ST-01柱出土状況 (東より)、下・ST-01板材出土状況 (南西より)

- 図版56 M区第2遺構面下層 SE-16 (南西より) / SK-35 (南より)
- 図版57 M区第2遺構面下層 SK-36 (西より) / SK-36 (南より)
- 図版58 M区第2遺構面下層 SK-39 (西より) / SK-39 (南東より)
- 図版59 M区第2遺構面下層 SK-41 (北西より) / SK-41 (東より)
- 図版60 M・N区第2遺構面下層 上・SP-1153 (北西より)、下・SP-1173 (南
より)、上・SP-1176 (北東より)、下・SP-
1189 (西より) / 上・SP-1193 (北西より)、下・
SP-1406 (西より)、上・SP-133 (南西より)、
下・SP-1509 (西より)
- 図版61 N区第2遺構面下層 N-1~4区全景(北より) / N-6~8区全景(南より)
- 図版62 M・N区第2遺構面下層 全景 (北東より) / 全景 (北西より)
- 図版63 M区第3遺構面 全景 (東より) / 全景 (西より)
- 図版64 M区第3遺構面 SE-17 (南より) / SE-17 (南西より)
- 図版65 M区第3遺構面 SE-18 (北西より) / SE-18 (南より)
- 図版66 M区第3遺構面 SD-45(南西より) / SD-45漆器碗出土状況(南より)
- 図版67 M区第3遺構面 ST-04、SE-18 (北より) / ST-04、SE-20・
21 (北西より)
- 図版68 M区第3遺構面 SE-20 (北より) / SE-20 (北東より)
- 図版69 M区第3遺構面 SE-21 (東より) / SE-21 (東より)
- 図版70 M区第3遺構面 SP-1221~1222 (東より) / SP-1239 (北西より)
- 図版71 M区第3遺構面 足跡検出状況 (東より) / 足跡検出状況 (南西より)
- 図版72 M区第4遺構面 全景 (西より) / 同上 (東より)
- 図版73 P区出土遺物 SE-32
- 図版74 K区出土遺物 SE-34・35・38
- 図版75 K区出土遺物 SE-39・42
- 図版76 K区出土遺物 SE-43・45・46・47
- 図版77 K区出土遺物 SK-94・96・97
- 図版78 K区出土遺物 SK-108・111・131
- 図版79 K区出土遺物 SD-59
- 図版80 K区出土遺物 SD-59

- | | | |
|-------|----------|---|
| 図版81 | K区出土遺物 | S D-68 |
| 図版82 | K区出土遺物 | S R-01・02 |
| 図版83 | K区出土遺物 | S P-2505・2506・2510・2675 |
| 図版84 | K区出土遺物 | 遺構及び包含層出土青磁、包含層出土白磁 |
| 図版85 | K区出土遺物 | 包含層出土銭貨、S D-59、S P-2702、包含層 |
| 図版86 | L区出土遺物 | S T-02、S E-28、S R-01、S P-1847、包含層 |
| 図版87 | L区出土遺物 | S E-28・31 |
| 図版88 | L区出土遺物 | S K-56 |
| 図版89 | L区出土遺物 | S K-56 |
| 図版90 | L区出土遺物 | S K-56 |
| 図版91 | L区出土遺物 | S K-70・80・84、S D-39 |
| 図版92 | L区出土遺物 | S E-31・S K-84、包含層 |
| 図版93 | L区出土遺物 | S R-01 |
| 図版94 | L区出土遺物 | S R-02 |
| 図版95 | L区出土遺物 | S R-01・02 |
| 図版96 | L区出土遺物 | S R-02・05、包含層 |
| 図版97 | L区出土遺物 | S P-1677・1845・1937・1939・2016・2105、S E-31 (銭貨)、S P-1593 (銭貨) |
| 図版98 | L区出土遺物 | S P-1604・1608・1792・1880・1896・2098 |
| 図版99 | L区出土遺物 | 遺構及び包含層出土緑釉、包含層出土白磁 |
| 図版100 | L区出土遺物 | 遺構出土青磁、包含層出土青磁 |
| 図版101 | L区出土遺物 | 包含層出土土師器鉢、土馬、勾玉、縄文土器 |
| 図版102 | M区出土遺物 | S T-01 |
| 図版103 | M区出土遺物 | S T-01 |
| 図版104 | M区出土遺物 | S T-01 |
| 図版105 | M区出土遺物 | S T-01 |
| 図版106 | M・N区出土遺物 | S T-01・02 |
| 図版107 | M・N区出土遺物 | S T-02・04・05 |
| 図版108 | M区出土遺物 | S E-08 |
| 図版109 | M・N区出土遺物 | S E-02・04・08・10・13 |

- | | |
|----------------|--|
| 圖版110 M区出土遺物 | S E-11·12 |
| 圖版111 M区出土遺物 | S E-16·17 |
| 圖版112 M区出土遺物 | S E-17 |
| 圖版113 M区出土遺物 | S E-17·18 |
| 圖版114 M区出土遺物 | S E-18 |
| 圖版115 M区出土遺物 | S E-20 |
| 圖版116 M区出土遺物 | S K-06·10 |
| 圖版117 M区出土遺物 | S K-06 |
| 圖版118 M区出土遺物 | S K-06 |
| 圖版119 M区出土遺物 | S K-06·08·10·12·16, S K-08 (鉄貨)、S P-146 (銭貨) |
| 圖版120 M区出土遺物 | S K-10·14·16 |
| 圖版121 M区出土遺物 | S K-21·25·26·28 |
| 圖版122 M·N区出土遺物 | S K-21·22·27·29·34·35·46·55 |
| 圖版123 M·N区出土遺物 | S K-10·55, S D-31·33·45 |
| 圖版124 M·N区出土遺物 | S D-29·30·31·32·33·39·40·42 |
| 圖版125 M区出土遺物 | S I-01 |
| 圖版126 M区出土遺物 | S P-244、遺構出土灰釉、綠釉 |
| 圖版127 M·N区出土遺物 | S P-106·200·203·260 |
| 圖版128 M区出土遺物 | S P-269·280·320·322·408·433·434 |
| 圖版129 M·N区出土遺物 | S P-436·439·593·721·770 |
| 圖版130 M区出土遺物 | S P-436·593·823 |
| 圖版131 M区出土遺物 | S P-757 |
| 圖版132 M区出土遺物 | S P-799 |
| 圖版133 M·N区出土遺物 | S P-37·38·203·803·805·812·823·826·883 |
| 圖版134 M区出土遺物 | S P-919·1078·1164 |
| 圖版135 M区出土遺物 | S P-1189 |
| 圖版136 M·N区出土遺物 | S P-1193·1440·1583 |
| 圖版137 M区出土遺物 | 遺構出土青磁、遺構出土白磁 |
| 圖版138 M·N区出土遺物 | S E-05·06, S T-01, S P-43·604、包含層 |
| 圖版139 M区出土遺物 | 包含層出土青磁(表裏) |

図版140 M区出土遺物	包含層出土灰釉、包含層出土綠釉
図版141 M区出土遺物	包含層出土白磁
図版142 M・N区出土遺物	包含層、S P-436・672・681・1142・1305
図版143 M区出土遺物	包含層
図版144 K区出土木製品	S D-87、S E-34・36・41
図版145 K区出土木製品	S E-41・42
図版146 K区出土木製品	S E-42
図版147 K区出土木製品	S E-43・44
図版148 K区出土木製品	S E-44・46、S K-98
図版149 L区出土木製品	S J-01、S K-61・68、S P-1847・2108
図版150 L区出土木製品	S P-1714・1904・1905・2084・2214・2230
図版151 L区出土木製品	S P-2164・2173、S R-02
図版152 M区出土木製品	S T-01
図版153 M区出土木製品	S T-01・05、S E-07・11
図版154 M区出土木製品	S E-11
図版155 M区出土木製品	S E-11
図版156 M区出土木製品	S E-11
図版157 M区出土木製品	S E-11
図版158 M区出土木製品	S E-11
図版159 M区出土木製品	S E-11・13
図版160 M区出土木製品	S E-13
図版161 M区出土木製品	S E-18、S D-45、S K-10・14
図版162 M・N区出土木製品	S P-157・515・619・1104・1152・1327

付 図 目 次

付図1	第1遺構面全体図
付図2	第2遺構面上層全体図
付図3	第2遺構面下層全体図
付図4	第3遺構面全体図
付図5	第4遺構面全体図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

昭和60年大阪府建築部（以下府建築部）より、J R学研都市線四条駅西側にある府営大東北新町住宅（以前は大東四条駅住宅）建替え工事の計画が出された。その内容は、既存の平屋住宅を順次中層の住宅に建替えていくもので、まず第一期工事分として、全敷地面積約42,000㎡のうち北側の約12,000㎡について実施されることになり、これを受けて大阪府教育委員会（以下府教育委員会）では建替え工事に先立ち、同年7月に試掘調査を実施し、その結果、府営住宅を中心に遺跡の存在することが確認された。試掘調査の結果に基づき、この遺跡を北新町遺跡と命名し新規の遺跡として登録する一方、府建築部に対しては、第一期工事ももちろんのこと、今後の建替え工事についても事前の発掘調査が必要であることを説いた。府建築部も調査の必要性を認識し、大東市教育委員会（以下市教育委員会）を含めた三者で具体的な調査方法について協議を重ねた結果、三者による北新町遺跡調査会（以下調査会）を新たに設立し、その調査部長に帝塚山短期大学田代克己教授を迎え調査を委託して実施することで合意に達した。早速、第一期建替え工事に伴う調査に対応すべく、昭和60年11月25日に市教育委



第1図 大東市位置図

員会社会教育課内に事務局を置く調査会を設立し、府教育委員会文化財保護課技師辻本武が調査指導員として調査を担当することになった。

第Ⅰ期調査は、敷地北側の第一期工事分約12,000㎡のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分などを対象としてA～F区のトレンチを設定して、総面積約4,236㎡の発掘調査を実施した。調査は外業調査を昭和60年12月～翌61年5月まで実施し、引き続き内業整理作業を行い、同年10月にすべての作業を完了して、報告書の刊行をもって調査会を解散している。

第Ⅱ期調査は、第Ⅰ期工事区の南側の第Ⅱ期工事分約12,000㎡のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分に加え水路付け替え部分などを対象としてG～J区のトレンチを設定して、総面積約3,700㎡の発掘調査を実施した。第Ⅰ期調査と同様に、三者による調査会を昭和62年9月大東市立歴史民俗資料館に事務局を置いて設立し、調査部長を田代教授に依頼し、調査指導員は府文化財保護課技師松岡良憲が担当した。調査は外業調査を昭和62年9月から翌63年11月まで実施し、引き続き内業整理作業を行い、平成元年7月に終了し、報告書の完了をもって同年に調査会を解散している。

今回の第Ⅲ期調査は、第Ⅱ期工事区の南側の第Ⅲ期工事分約12,000㎡のうち住棟部分、浄化槽及び受水槽設置部分、埋設管部分、水路付け替え部分、道路拡幅部分などを対象としてK～Q区のトレンチを設定して、総面積約6649㎡について発掘調査を実施することになり、これに伴い平成2年9月4日に前回と同様に調査会を設立した。調査は平成2年11月27日に南側のM区から順次行い、平成5年3月3日にK区の調査が終了し、外業調査を完了した。その後引き続き第Ⅳ期工事に伴う第Ⅳ期調査が開始されるが内業調査はこれと並行して行い、平成9年3月31日をもってすべての作業を完了した。

第2節 これまでの成果

前節で記述したように、府営住宅敷地内ではこれまでに調査会による発掘調査が実施され、その成果が公表されている⁽¹⁾。また、第Ⅱ期調査区と第Ⅲ期調査区間の敷地約2118㎡を対象として、都市計画道路四条駅前西線建設工事に伴い、平成2年5月から平成5年12月の間5次にわたり、大東市教育委員会によって実施されている⁽²⁾。ここではこれまでの各調査における成果の概略を簡単に述べておく。

第Ⅰ期調査

中世（鎌倉時代）、奈良時代、古墳時代中期に対応する遺構面が検出されている。古墳時代の遺構では自然河川とそれに伴う堰が検出された。古墳時代中期の遺構では、建物跡、

自然河川などが検出されているが、遺構の規模や密度は低かった。奈良時代では自然河川と水田が同一面で検出され、それに伴う護岸の杭や、河川から水田に水を取り入れるための堰が検出されている。中世では建物跡、棚列、井戸などが検出され、出土遺物から13世紀前半頃の時期が考えられる。主な出土遺物として、自然河川内から縄文時代中期土器、同後期土器が出土している。古墳時代の自然河川内から庄内式、布留式の土師器が出土している。注目すべきものとしては、奈良時代の自然河川内より、人面墨書土器2点が出土したことである。

第Ⅱ期調査

近世、中世、古墳時代前期、古墳時代後期の遺構面が検出されている。第Ⅰ期調査に比べると各時代の遺構の密度は高く、出土遺物の量も多くなっている。古墳時代では調査区のほとんど全域で水田跡が検出されており、その所属時期は明確ではないが、前期のものと考えられている。また、中期の倉庫群と推定される大型の掘立柱建物が検出されており、同時代に属する井戸からは、井戸枠材に転用されていた木製の戸口装置一式が出土している。中世では建物跡や井戸が検出され、鎌倉時代頃に集落が存在したことが判明した。遺物としては中世の遺物が多く出土したのであるが、古墳時代では初期須恵器、韓式系土器や古墳の竅穴式石室に使用されたのではないかと推定される紅崖石片岩や絹雲母片岩などの石材が出土した。

都市計画道路調査

第Ⅱ期調査と同様に近世、中世、古墳時代の遺構面が検出された。各遺構面の遺構の検出状況もよく似ており、遺構面が連続して広がっていることが確認された。また、注目される出土遺物としては、「美濃」の刻印入り須恵器や、ピットと推定される遺構から12世紀前半頃と考えられる和鏡（花枝双鳥文鏡）が出土したことである。

第3節 調査方法

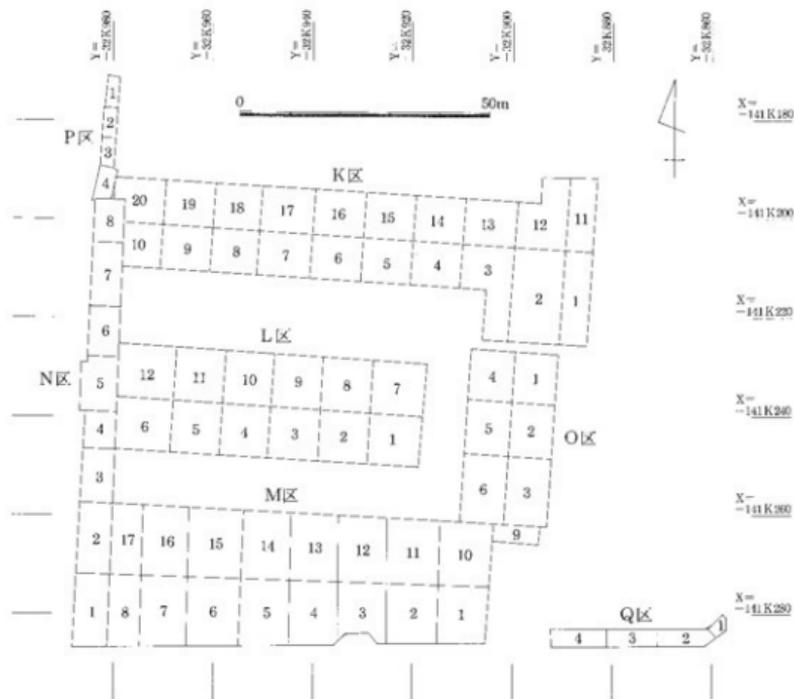
調査トレンチについてであるが、まず住棟部分については各種の埋設管工事が予想される外周部分を考慮して、約1m余分に設定した。また前回と同様に、浄化槽や貯留槽などの付随施設が設置される場所についても調査対象となった他、今回の調査では、敷地西側の水路付替え部分、南側の道路拡幅部分についても調査対象となり、住棟部分とこれらを含めたトレンチを設定している。調査は基本的に、単年度で住棟1棟分とその付随施設部分を調査するものとした。各トレンチ名は第2図に示すとおりこれまでの調査のA～J区に続くK～Q区を大割りの名称として使用した。



第2図 調査区位置図

掘削方法は、これまでの調査結果に基づきGLー約0.5mまでの盛土・旧耕作土部分をバックホウによる機械掘削を行い、GLー約2～2.2mの地山面まで人力掘削を行なった。

記録作業は、従来の実測作業とクレーンによる空中写真測量との併用で図化を行い、作業時間の短縮化を図った。今回対象となった府営住宅の敷地は、ほぼ国土座標のメッシュ



第3図 調査区区割り図

に合致しており、測量などの基準については、国土座標第IV系をそのまま使用した。区割りについては第3図に示す通り、各トレンチを約10m単位で区切る新たなものを設定してアラビア数字を付し、これに大割りの調査区名のアルファベットを冠して表示し（例：K-1区、L-3区など）、遺物の取り上げ、本文中の記述もこれに従っている。

註

- (1) 『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986大東市北新町遺跡調査会
『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991大東市北新町遺跡調査会
- (2) 『北新町遺跡発掘調査報告書』1994大東市教育委員会

第2章 位置と環境

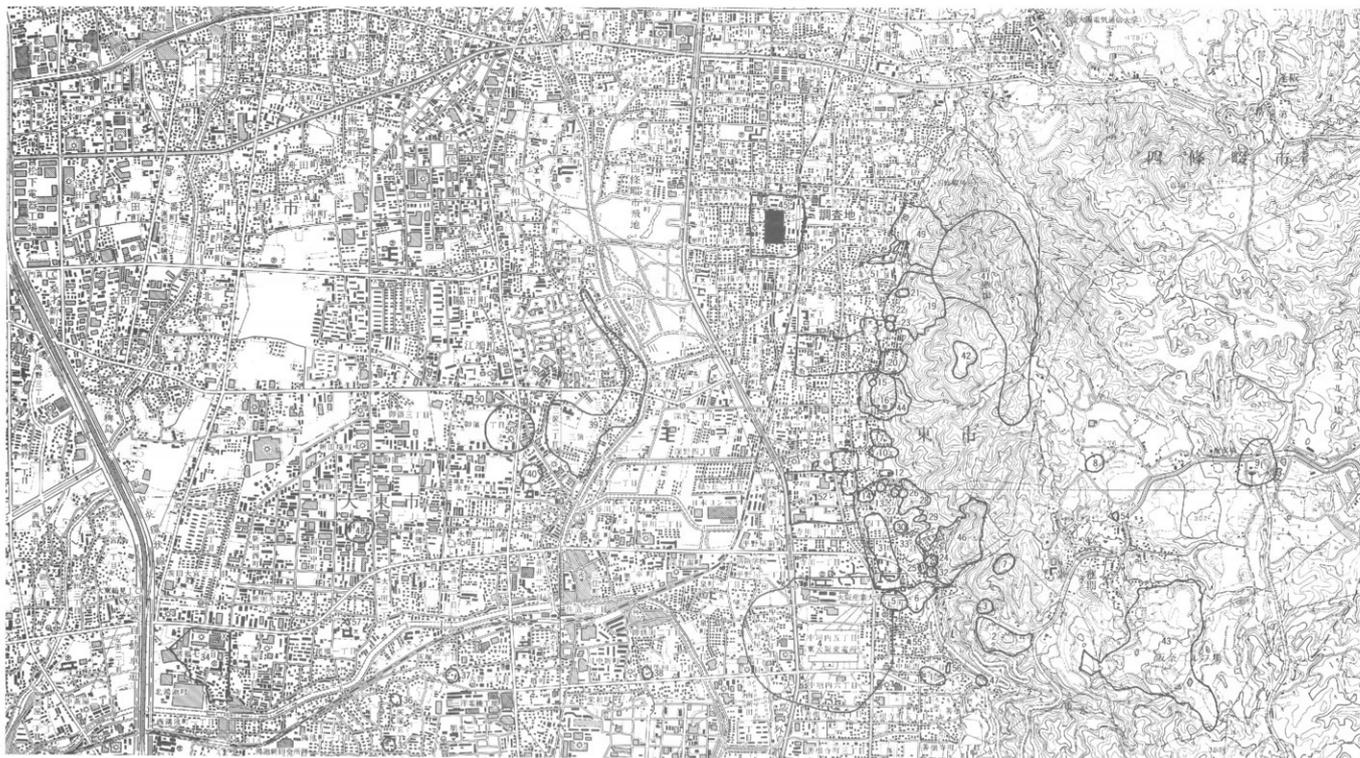
第1節 地理的環境

北新町遺跡の所在する大東市は大阪府の中部にあり、河内平野のほぼ中央部に位置している。市域の周囲は東南端の1部で奈良県生駒市と接するほか、東から北にかけては四條畷市と寝屋川市、西北は門真市、西は大阪市、南は東大阪市に接している。市域の面積は約18,058km²で、人口約13万人（1997年現在）を数える。当地域は旧国名で河内国に当たり、その北部に位置することから枚方、交野、寝屋川、門真、守口、四條畷の各市を合わせて北河内と呼称されることが多い。

市域の地形を概観すると、山地、丘陵地、平地の主な3地形に分類され、山地、丘陵地で市域のほぼ東半分を占めている。山地は生駒山地が南北に走っている。生駒山地は南から信貴山、生駒山と高度を上げるが、山頂から北に向かって一旦高度を下げ、大東市竜間付近から再び高度を上げて、市域の東にある飯盛山に続いている。飯盛山も山頂の標高314mをピークとして、清滝峠に向かって高度を下げており、北西の枚方丘陵へと続いている。山塊の切れる竜間、清滝は古来から河内と大和を結ぶ重要な山越えのルートであり、竜間越え、清滝越えなどと呼ばれて来た。現在も阪奈道路、国道163号線がほぼ旧道に沿って走り、大阪と奈良を結ぶ主要幹線道になっている。山地から西側に向かって張り出した尾根は急激に高度を下げて丘陵地に続き、丘陵地は山地と平地の間にあり、緩やかな傾斜で平地へと続いている。山地、丘陵地には一部大阪層群がみられるが、大部分が眞家花崗岩類で構成されている。市域の西半分を占める平地は沖積地で、山裾には、山地より流れたす中小河川によって小規模な扇状地が形成されており、それから西はほとんど高度を変えずに平坦で、かつては低湿地であったところであり、表土の下には粘土、シルト、砂などの水性堆積の起因による層が堆積している。平地のほぼ中央部である住道で、北から流れてくる寝屋川と南から流れてくる恩智川が合流し西に向かって流れている。これが現在の大東市の地形であるが、ここに至るまでは太古より自然的、人為的影響を受けて地形を変遷させてきたのであり、遺跡の立地と分布はその時代の地形の変遷に深く関係しているものと考えられる。

第2節 歴史的環境

市域の遺跡について述べる時、地形の変遷が深く関わっていることは前節で述べた通



- | | | | | | | |
|------------|------------|------------|----------|--------------|----------|-----------|
| ① 若宮遺跡 | ⑩ 竜間遺跡 | ⑱ 福原寺古墳 | ⑲ 城の越古墳 | ⑳ 寺川遺跡 | ㉑ 泉盛山城跡 | ㉒ 墓谷古墳群 |
| ② 西見高地性遺跡 | ⑪ 福原寺遺跡 | ⑲ 北条西遺跡 | ⑳ 堂山上古墳 | ㉑ 西瀬福遺跡 | ㉒ 北条東古墳群 | ㉓ 御前遺跡 |
| ③ セウノ里古墳 | ⑫ ツノノ遺跡 | ⑲ 宮谷古墳群 | ㉑ 堂山下古墳 | ㉑ 茨塚古墳 | ㉒ 石切橋跡 | ㉓ 城・谷遺跡 |
| ④ 中畑内遺跡 | ⑬ 茶臼内遺跡 | ⑲ 大野塚古墳 | ㉑ 堂山古墳群 | ㉑ 反塚堂田遺跡 | ㉒ 野輪城跡 | ㉓ 寺川筑遺跡 |
| ⑤ 北稻遺跡 | ⑭ 西寺川配水場古墳 | ⑲ 北条古墳 | ㉑ 六地蔵古墳 | ㉑ 反塚水邊福浄水場遺跡 | ㉒ 北新野遺跡 | ㉓ 野崎本瓦遺跡 |
| ⑥ 鍋田川遺跡 | ⑭ 瓦堂遺跡 | ⑲ 北条南古墳 | ㉑ 十林寺古墳 | ㉑ 御供田遺跡 | ㉒ 大谷古墳群 | ㉓ 大谷古墳群 |
| ⑦ 大鼓山遺跡 | ⑭ ヤタ山古墳 | ⑲ 北条遺跡 | ㉑ 寺川古墳群 | ㉑ 三箇遺跡 | ㉒ 大坂城残石 | ㉓ 中畑内東遺跡 |
| ⑧ 竜間ハンサカ遺跡 | ⑭ 野野遺跡 | ⑲ 城の越上の段古墳 | ㉑ 大谷神社古墳 | ㉑ 水野遺跡 | ㉒ 新田遺跡 | ㉓ 若宮東遺跡 |
| | | | | | | ㉓ 詔間江・堂遺跡 |

第4図 市内遺跡分布図

りであるが、それは大阪平野の変遷、歴史そのものを指している。大阪平野の歴史については梶山彦太郎、市原実両氏の研究によって明らかにされつつある。ここでは大阪平野の変遷を辿りつつ、市域の遺跡について時代を迫って説明していくことにする。

旧石器時代

今から約2万年前はウルム氷期の最盛期で、両極での氷河の発達により地球的規模で海水面が約150m低下し、海岸線の後退が起っていた。当時の大阪の海岸線は現在のそれよりもずっと沖にあったと考えられており、大阪湾はもちろんのこと瀬戸内海も陸地化しており、現在の大阪平野よりも広い平野が広がっていたことが推定され、大阪湾を含むこの平野は「古大阪平野」と呼ばれている。約2万年前といえば後期旧石器時代の終り頃に相当するが、市域では北条遺跡、宮谷古墳群で後期に属すると考えられる有舌尖頭器が出土しているのみであり、今のところこの時代の生活面は検出されていない。

縄文時代

約1万年前にかけて、地球規模での気候の温暖化が進み、海水面の上昇が起こった。それでも現在の海水面より約20mは低かったと推定されており、海岸線はまだ沖にあったものと考えられている。南北に伸びる今の上町台地の両側に広がっていたこの陸地は、「古河内平野」と呼ばれている。この時代は考古学的には縄文時代早期に相当するが、市域では鍋田川遺跡で早期末の土器が出土しているのみである。その後も温暖化は進み、約6000年前の縄文時代中期頃には最も海水面が上昇し、古河内平野は上町台地を除き海域となり、「河内湾」と呼ばれる内湾が形成されるに至った。いわゆる縄文海進と呼ばれる現象で、市域のほとんどは海水域となり、飯盛山西麓まで海岸線が迫り山地との間にわずかに陸地を残すのみであったと考えられている。それ以前の遺跡は水没することになりその後の堆積作用により沖積層の下に埋没することになる。結果として旧石器時代も含めた早期から前期の遺跡の発見は、水没を免れた丘陵地以外は期待できない状況となっており、市域では今のところ上方からの流れ込みによる土器の出土はあるが、遺構は検出されていない。その後晩期頃までは湾の状態が続き、前者は「河内湾Ⅰ」、後者は「河内湾Ⅱ」と呼ばれている。中期から晩期まででは本遺跡で奈良時代の自然河川から中期～後期、晩期末の土器が出土しており、丘陵上に立地する城ヶ谷遺跡では晩期末の船橋式土器が、鍋田川遺跡でも晩期の土器が出土しているが、いずれも遺構に伴うものではなく上方からの流れこみによるものである。中垣内遺跡では、土坑と推定される浅い窪地状の遺構から中期の北白川C式土器が出土しており、海岸線に近い水際に集落の存在が推定される。

弥生時代

河内湾はそこへ流れこむ河川などの堆積作用により、次第に外海と隔てられるようになり、縄文時代晩期末～弥生時代前期頃には、湾から「河内潟」となる。その後外海とは完全に隔てられ、弥生時代後期までには「河内湖」と呼ばれる淡水湖が形成される。この時代の遺跡としては、河内潟の水深に立地していたと考えられる中垣内遺跡や北条西遺跡、野崎条里遺跡などがある。特に中垣内遺跡では現在の関西電力東大阪変電所内で集落跡が検出されており、東大阪市鬼虎川遺跡や四條畷市雁屋遺跡と並び前期の拠点集落であったと考えられている。中期では、河内潟の中の低湿地で一時的に特異な立地を見せる西諸福遺跡や、前述の中垣内遺跡でも引き続き集落が営まれていたことが判明している。後期では丘陵部にも立地をするようになり、各遺跡から遺物が出土している。北条遺跡ではこの時期の竪穴住居が検出されており、手焙り形土器が出土している。

古墳時代

河内湖形成以後も堆積作用により湖の規模は縮小するが、以前として市域の大半が水域に覆われていた。飯盛山から派生する丘陵上には古墳が造営され、その西麓の河内湖縁辺部では集落が営まれたようである。古墳に関しては、調査例が少ないため不明な点が多いが、市域では今のところ前期に属するものは確認されていない。中期に入ると三角板皮綴短甲、衝角付冑、鉄刀、鉄鎌などをはじめとする多量の鉄製武器・武具類が出土した堂山1号墳が造営される。この古墳は標高約100mの尾根上にあり、径25mを測る円墳で、出土遺物の内容などから首長墓の性格の強い古墳であると考えられている。このほかに、円筒埴輪が採集された峯垣内古墳、また瓦堂寺院跡では堂山1号墳より遡る5世紀前半の円筒埴輪が採集されている。後期古墳では北条1～3号墳、多量の形象埴輪が出土し、横穴式石室を主体部にもつ宮谷1号墳、横穴式石室基底部が残存し、鉄刀、玉類などの副葬品が出土した城ヶ谷1・2号墳、円筒埴輪が10数本出土したと伝えられる六地蔵古墳のほか、群集墳では堂山古墳群、墓谷古墳群、宮谷古墳群、北条古墳群、寺川古墳群、大谷古墳群などが知られており、後期に入ると数多くの古墳が造営されたと推定されている。集落に関しては、祭祀色の強い前期の中垣内遺跡、鍋田川遺跡があり、本遺跡では中期の倉庫群と推定される掘立柱建物を検出している。また、鍋田川遺跡、北条遺跡、宮谷古墳群、メノコ遺跡、北新町遺跡、堂山下遺跡等で韓式土器、陶質土器、初期須恵器などが出土しており、渡来系の人々との関連が考えられる。

奈良時代～平安時代

この時代は各遺跡より遺物の出土をみるが、具体的な遺構の検出例は少なく、不明な点が多い。北新町遺跡では奈良時代の自然河川が検出され、そこから人面墨書土器が出土している。

中世

中世に入るとこの地域は、古代河内湖がそこへ流れ込む河川の堆積作用により徐々にその範囲を狭められ、勿入湖（広見池）と呼ばれる湖に姿を変え、そして、池の東縁には東高野街道が生駒山麓を南北に走るという水陸両交通の出会う重要な場所であった。この時代の遺跡は東高野街道沿いから湖までの間の低地上に立地していると考えられる。その代表的なものが本遺跡で、鎌倉時代の集落跡が広い範囲で検出されており、この時代の集落の景観を復元するのに大変重要な遺跡となっている。また最近、北新町遺跡の西方に位置し、これまで遺物の採集はあつものの、湖の中の低湿地と考えられていた御領遺跡で、北新町遺跡より時期の下る鎌倉時代終わりから室町時代の集落跡が発見されている。この頃になると勿入湖も、河川の堆積作用などにより水深が浅くなり池の陸地化が進行し、このようにして形成された微高地に新たに集落が営まれたのであろう。他に同様な立地を示す遺跡には灰塚遺跡、灰塚堂田遺跡、西諸福遺跡などがある。また、この時代は各所で開墾、開発が行なわれたようで、丘陵部に立地する城ヶ谷遺跡でも開発の跡を残す段状遺構と杭列が検出されている。東高野街道以東の丘陵地には、遺構は検出していないものの、中世の遺物が各所に散布しており、開発が盛んに行なわれたことを物語っている。時代が少し下降して中世後半には、眼下に東高野街道と池を見下ろすという絶好の交通の要衝にあり、戦国時代に一時的に畿内支配に成功した三好長慶の居城となった飯盛山城や宣教師ルイス・フロイス記述の「日本史」に登場する、キリシタン大名三箇サンチョの居城であった三箇城が存在した。三箇城は池に形成された島に存在したと伝えられており、このことから、当時の池はさらに堆積作用が進行し、微高地から発達した島が池のあちこちに点在していた光景が浮ぶ。残念ながら、今のところ三箇城に関連づけられる遺構・遺物は検出されていない。

近世

近世になると、池は深野池とその西方にある新開池となり、二つの池が形成され、池同士は、一本の川でつながっていた様子が古地図に描かれている。近世の遺跡としては、徳川家により元和六年（1620）から始まる、大坂城再築に伴う石垣用石の採石場が、生駒山中の竜間に存在する。石切場跡遺跡や国見高地性遺跡がそれで、刻印石、矢穴石等が今も

残っている。また、石の運搬経路であった、麓の中垣内1丁目には大坂城残石と呼ばれる巨石が存在するが、これにも石垣工事を請け負った諸藩の刻印がなされている。この場所は竜間山中で切り出され、谷筋を利用して麓まで運ばれた石を、ここから船に引かして、深野池、新開池を通り大坂城に運んだ中継地と考えられている。近世も中垣に入ると、宝永元年（1704）に大和川の付替え工事が行なわれ、これ以後古代河内湖の名残である深野池、新開池等の池沼は新田開発により陸地化が進み、ほぼ現在の大東市に近い姿になる。

参考文献

- 『大東市史』1973 大東市教育委員会
『大阪府史・第一巻古代編1』1978 大阪府
堀山彦太郎・市原実『大阪平野のおいたち』1986 青木書店
『中垣内遺跡発掘調査報告書』1990 大東市教育委員会
『寺川・鍋田川遺跡発掘調査報告書』1991 大東市教育委員会
『中垣内遺跡発掘調査報告書』1997 大東市教育委員会
黒田淳「北条遺跡」「鍋田川遺跡」「宮谷古墳群」『韓式系土器研究II』1989 韓式系土器研究会
中途健一「大東市メノコ遺跡出土の韓式系土器」『韓式系土器研究IV』1993 韓式系土器研究会
『鍋田川遺跡発掘調査概要・I』1992 大阪府教育委員会
『城ヶ谷遺跡発掘調査報告書』1990 大東市教育委員会
『寺川・北条遺跡発掘調査報告書』1987 大東市教育委員会
『堂山古墳群発掘調査概要』1973 大阪府教育委員会
『堂山古墳群発掘調査概要』1994 大阪府教育委員会
『大東市北新町遺跡第1次発掘調査概要報告書』1986 大東市北新町遺跡調査会
『北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書』1991 大東市北新町遺跡調査会
『北新町遺跡発掘調査報告書』1994 大東市教育委員会
『平成7年度発掘調査速報展（御領遺跡）』1996 大東市立歴史民俗資料館
『近世大東の新田開発』1990 大東市立歴史民俗資料館
和田萃「河内の古道」『環境文化』第51号1981 財団法人環境文化研究所
日下雅義「第三章 第1節 第2項 歴史・地理的景観」『河内平野遺跡群の動態I』1987 財団法人大阪文化財センター

第3章 基本層序

河内平野の沖積層の上に立地している本遺跡の土層は、太古から幾層もの層が複雑に重なり合い堆積して現在に至っている。調査で確認された土層をその層位、土色、土質などで分類すると数百にも及ぶので、全調査区の土層断面を図示することは煩雑になり、かえって層序と遺構面の関係を理解しにくくなることになる。したがって、ここではこれらの層を所属時期ごとにまとめた基本層序を設定して各遺構面との関係を示し、各調査区における基本層序を柱状図（第5図）で表すことにする。なお、この基本層序は今回の調査で独自に設定したものであり、府営住宅敷地内で実施されているこれまでの調査（第Ⅰ期、第Ⅱ期、市教委都計道路）の層序と関連していないことを断っておく。

基本層序Ⅰ層

建替え前の平屋の府営住宅建設時の盛土とそれ以前の地表面であった旧耕作土より成る。盛土表面の標高はそれぞれK区でT.P.+5.2~5.4m、L区でT.P.+4.7~4.9m、M区でT.P.+4.2~4.7mを測る。旧耕作土は黒灰色を呈し、後世の削平により消失している場所もあるが、層厚約10~30cmを測り、第Ⅱ期調査区ではほぼ全体に認められる層で、府営住宅が建つ以前は、水田や畑として利用されていたことがわかる。含まれる遺物などから、近世~近代にかけて形成された層である。

基本層序Ⅱ層

旧耕作土の下に堆積する灰白色~青灰色砂混じり粘質土で水田の床土となっていた層とその下に堆積する黄灰色~黄橙色粘質土から成る。南北方向、東西方向に走る無数の耕作痕（鋤溝）が観察され、分層をしづらいものとなっている。間層として薄いシルトや砂層の堆積が認められるが、一時的なものであり、完全に冠水して長期間池や沼地の状態であったわけではなく安定した耕作地として利用されていたようである。第1遺構面のベースとなっている層で、含まれる遺物から中世末~近世に形成された層であると考えている。

基本層序Ⅲ層

調査で認識した層の中で最も遺物を多く含む層であるが、その堆積状況は調査区の西側で明確に認識できるのに比べると、東側ではほとんど認められない。この層の上面で中世の遺構面、下層で奈良時代末~平安時代の遺構面が存在したが、調査では明確に時期別に遺構面を分けて検出することができなかった。含まれる遺物から奈良時代~鎌倉時代に形

成された層であると考えている。

基本層序Ⅳ層

第3遺構面の水田面のベースである褐灰色粘土層が主体となっており、場所によっては上面に砂が薄く堆積している所もある。調査区の南へ行くに従い薄くなる傾向がある。遺物は小片が少量含まれる程度であるため、所属時期を今一つ明確にし得ないが、水田が古墳時代と考えられているので、弥生時代末～古墳時代にかけて形成されたものと考えている。

基本層序Ⅴ層

Ⅳ層直下の堆積層で調査地区によって層厚は異なるが、調査区全域で認められる砂、シルトを主体とする層である。遺物はほとんど含まれていないので所属時期を明確にし得ないが、弥生時代前期～末にかけて形成されたものと推定している。

基本層序Ⅵ層

最終遺構面である第4遺構面のベースとなる黒色粘土層を含む下位の堆積層である。O区で実施した最終面からの土層確認トレンチでは、黒色粘土層から下位では砂、シルト、黒色粘土がほぼ水平に交互に堆積を繰り返している状況であった。従来からいわれているように河内潟、河内湖によって形成された堆積層と推定される。K区では下位の砂層から摩滅の著しい縄文土器が出土しているが、生活面の存在がほとんど期待できない層であり、今回の調査ではいわゆる考古学で言う“地山”と考えた。

第4章 遺構

第1節 K区の遺構

K区は第Ⅲ期調査区の北側に位置し、調査前の地表面の標高はトレンチの東側でT.P.+5.4m、西側でT.P.+5.2mを測り、東から西への傾斜が認められた。

1. 第1遺構面（付図1）

近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝や鋤溝などが検出され、水田や畑などの区画を兼ねた灌漑用の水路と考えられる。検出面は東側でT.P.+4.5m、西側でT.P.+4.2mを測る。

溝

SD-03

K-4・14区で検出された。南北方向に走り、北端、南端はトレンチ外に続く。幅1.2m、深さ0.2mを測り、埋土は基本層序I層の旧耕作土に類似する黒灰色土、灰オリーブ色砂混じり粘質土を主体としており、底部付近に細砂が堆積していたので、水が流れていたことがあったようである。遺物は少量であるが、主に近世の染付を中心とした陶磁器類が出土している。さらに南へ続いておりL・M区でも検出された。

SD-55（第6図）

K-8・18区で検出された。南北方向に走り、北端はトレンチ外に続き、南端はL区に続いている。18区で東西方向のSD-90に合流する。幅1.3m、深さ0.2mを測るが、18区ではその幅を半分程度に縮小している。東側には杭の跡、石が残っていた。埋土は黒灰色土で、遺物は少量で、近世の陶磁器類の他、瓦器碗や土師器皿の小片が出土している。

SD-87

K-1・11区で検出された。南北方向に走り、北端、南端はトレンチ外に続く。幅1.7m、深さは0.1~0.3mを測る。埋土は暗灰黄色砂混じり粘質土、黄褐色砂混じり粘質土を主体としており、底面に細砂が堆積していた。遺物は少量で、近世の染付を中心に陶磁器類が出土している。

SD-88

K-1・2区で検出された。東西方向に走り、東端はSD-87に合流し、西端はトレンチ外に続く。幅1.2m、深さは0.1~0.3mを測る。埋土は暗褐色砂混じり粘質土、灰黄褐

色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

SD-89

K-3・13区で検出された。南北方向に走り、南端はSD-88に合流し、北端はトレンチ外に続いているが、途中で東西方向に走るSD-91を分岐している。幅0.8m、深さは0.1mを測る。埋土は灰黄褐色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

SD-90

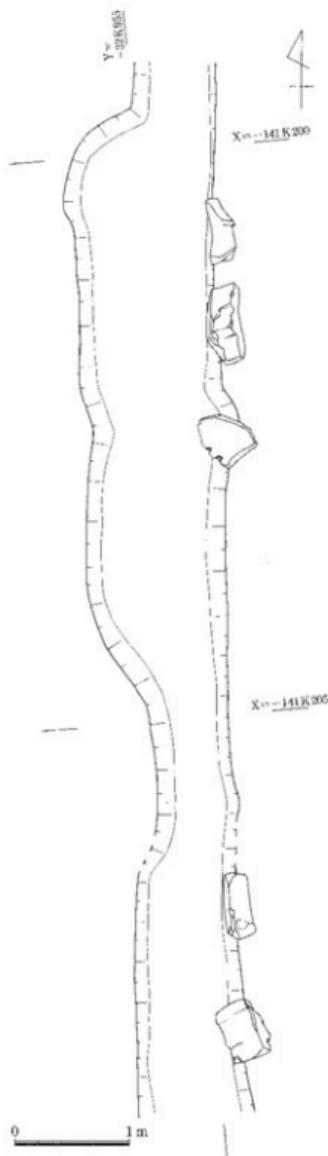
K-14~18区で検出された。東西方向に走り、東端はSD-03に、西端はSD-55にそれぞれ合流する。幅0.5m、深さは0.1mを測る。埋土は灰色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

SD-91

K-11~12区で検出された。東西方向に走り、東端はSD-87に、西端はSD-89にそれぞれ合流する。幅0.4m、深さは約0.1mを測る。埋土は暗灰色砂混じり粘質土が堆積しており、遺物は近世の染付を中心とした陶磁器類が少量出土している。

2. 第2遺構面上層 (付図2、第7図)

トレンチの西側半分で、中世の溝、井戸、土坑、ピットなどを検出しているが、トレンチの中央で検出した南北方向に走る溝SD-68から東側では遺構を検出しておらず、鋤溝が見られる程度であった。ピットは多数検出されており、



第6図 SD-55平面図

建物、櫓が復元されている。検出面は東側でT.P.+4.3m、西側でT.P.+4.1mを測る。
井戸

SE-34 (第8図)

K-18区で検出された。平面形は0.8×0.9mの楕円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。底には水溜用の曲物が2段で置かれており、小型の縦板が曲物を取り囲むようにしてあった。埋土の状況は層位の乱れはないので、当時のそのままの状態で埋没しているものと考えられる。曲物内の上部ではほぼ完形の瓦器椀が2個出土しており、井戸廃絶時に人為的に埋納されたものと考えられる。遺物は他に土師器皿の小片が出土している。時期は12世紀末～13世紀初め頃と考えられる。

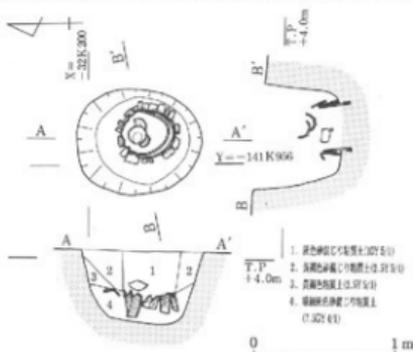
SE-35 (土坑)

K-19区で検出された。平面形は1×1.2mの不整形円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は楕鉢状で、底面はほぼ平坦である。底から、須恵器の壺底部が出土している。曲物やその他の板材などは出土していないので、井戸ではなく土坑と考えた方が良さそうである。

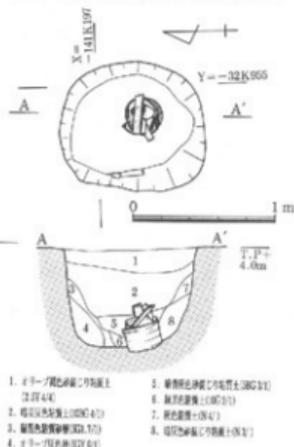
遺物はその他土師器皿、土師器脚付皿、瓦器椀片などが出土している。時期は12世紀末～13世紀初め頃と考えられる。

SE-36 (第9図)

K-18区で検出された。平面形は0.9×1mの不整形円形を呈しており、深さは0.7mを測る。壁は検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面は楕鉢状を呈する。底面の中央やや西側寄りに、北側に傾いた状態で水溜用の曲物が1段置かれていた。本来の位置ではなく、井戸廃絶時の埋め戻し時に移動したものであろう。曲物内には灰色粘



第8図 SE-34平面、断面、土層断面図



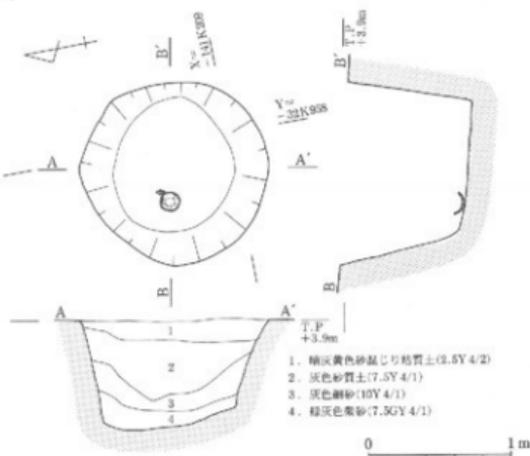
第9図 SE-36平面、断面、土層断面図

土が堆積しており、曲物上部からは板材が重なり合った状態で出土している。これも産絶時のものであろう。遺物は小片ばかりで図化し得るものがなかったが、瓦器碗、土師器皿、須恵器甕などが出土している。時期は明確にし難いが、12世紀末～13世紀初め頃と考えられる。

SE-38 (土坑) (第10図)

K-8区で検出された。

平面形は1×1.3mの不整形円形を呈しており、深さは0.8mを測る。SD-59と重複するが、前後関係は明確ではない。断面形は逆台形状で底面はほぼ平坦である。底には完形の瓦器碗が1個正立した状態で置かれてあった。井戸に関連するようなのは認められなかったので、土坑と考えた方

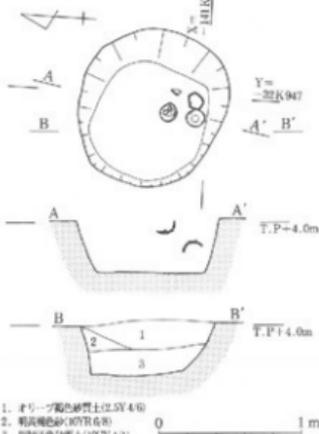


第10図 SE-38平面、断面、土層断面図

が良さそうであるが、井戸の抜き取り跡の可能性も否定できない。遺物は瓦器碗の他に、土師器皿や、須恵器、白磁などの小片が出土している。時期は12世紀後半頃と考えられる。

SE-39 (土坑) (第11図)

K-7区で検出された。平面形は1×1.1mの不整形円形を呈しており、深さは0.4mを測る。断面形は逆台形状で底面は平坦である。井戸に関連するようなのは認められなかったので、土坑と考えた方が良さそうである。遺物は土師器皿の小片の他、瓦器碗が完形品も含め5個体まとまって出土しており、12世紀末～13世紀前半頃の時期を

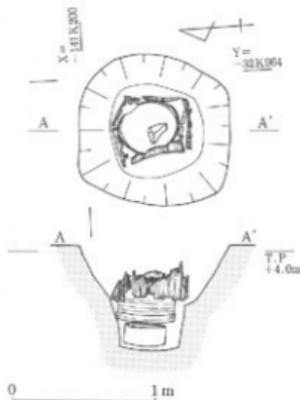


第11図 SE-39平面、断面、土層断面図

示している。

SE-41 (第12図)

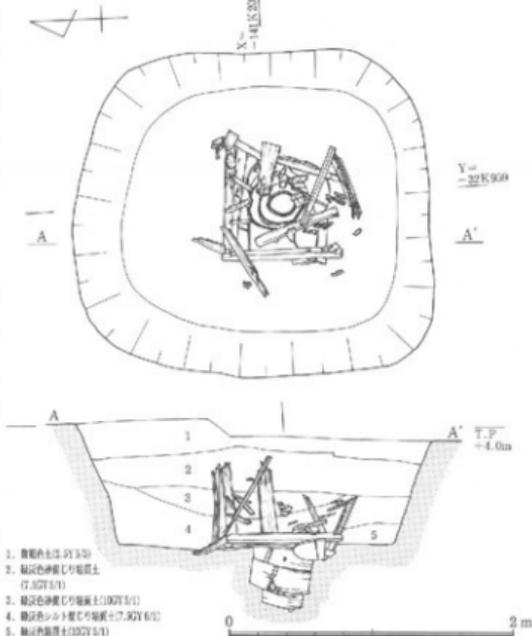
K-19区で検出された。平面形は一辺約1.1mの隅丸方形を呈しており、深さは0.8mを測る。壁は検出面から約0.5mまで斜めに掘り込まれており、後は底面まで垂直に下がる。水溜用として大小2段の曲物が置かれており、井戸側として縦板が方形に曲物を囲んでいた。縦板は上部が欠落していたが、実際は検出面まで存在したのであろう。埋土は掘り形が黄灰色粘質土で、曲物内にはオリブ黒色粘土が堆積しており、上部に割り石が1個置かれてあった。遺物は土師器皿片、黒色土器B類、砥石などが出土しているが、図化し得たものはない。時期は明確に断定できないが、黒色土器B類を混入品とするならば、13世紀前半頃と考えられる。



第12図 SE-41平面、立面図

SE-42 (第13図)

K-8区で検出された。平面形は2.3×2.5mの隅丸方形を呈しており、深さは1.2mを測る。SD-59と重複するが、調査時の遺構検出段階ではSD-59を切っていることが確認できた。断面形は逆台形で、底部はほぼ平坦であるが、そこからさらに掘り下げた状態で、水溜用として曲物が3段置



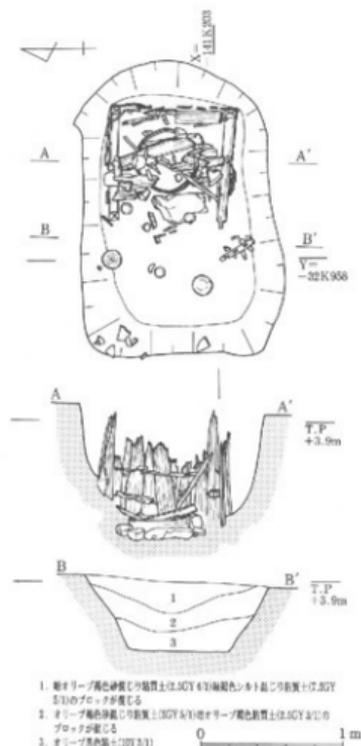
第13図 SE-42平面、立面、土層断面図

1. 黄褐色土 (JY 5-2)
2. 黄灰色沖積じり粘質土 (JG2V 5-1)
3. 黄灰色沖積じり粘質土 (JG2V 5-1)
4. 黄褐色沖積じり粘質土 (JG2V 5-1)
5. 黄褐色腐植土 (JG2V 5-1)

かれてあった。井戸側はすでに崩壊していたが、四隅に隅柱を据え、枘を切って横枘を組み、側板には縦板を使用していたと考えられる。曲物と井戸側の間には、曲物底板、折敷を敷板として使用していた。遺物は瓦器椀、土師器皿などがまとめて出土しており、13世紀前半頃の時期を示している。

SE-43 (第14図)

K-8区のSE-42の北側で検出された。平面形は1.4×2.1mの東西軸が長い隅丸長方形を呈しており、深さは約1mを測る。SD-59と重複しているが前後関係は明確ではなく、調査時の検出面はSD-59の底面からであった。底には水溜用の曲物が1段置かれ、周りには割り石が散在していたが、割り石は曲物を固定させるためと土圧から保護するためのものと考えられる。四隅に隅柱を立て、枘を切り横枘を組み、側板として縦板を使用する方形の井戸側が作られていた。埋土は主に3層に分かれているが、緑灰色シルト混じり粘質土や暗オリーブ褐色粘質土のブロックが混ざっているため、廃絶時に埋め戻されたものと考えられる。遺物は瓦器椀、土師器皿、瓦器釜、瓦器鍋などが出土しており、12世紀末～13世紀前半頃の時期を示している。



第14図 SE-43平面、立面、土層断面図

SE-44 (第15図)

K-18区のSK-97の南側に接して検出された。平面形は1.5×1.9mのほぼ隅丸方形を呈しており、深さは約0.8mを測る。SK-97と一部重複するが、前後関係は明らかではない。また、SD-59とも重複するが前後関係は明らかではなく、調査時の検出面はSD-59の底面であった。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。掘り形のほぼ中央の底に水溜用の曲物が2段置かれてあり、北東隅に花崗岩の割り石が1個残存していた。埋土は人為的に埋め戻された様相を呈し、井戸廃絶時のものと考えられる。遺物は

SE-44 (第15図)

SE-44 (第15図)

K-18区のSK-97の南側に接して検出された。平面形は1.5×1.9mのほぼ隅丸方形を呈しており、深さは約0.8mを測る。SK-97と一部重複するが、前後関係は明らかではない。また、SD-59とも重複するが前後関係は明らかではなく、調査時の検出面はSD-59の底面であった。断面形は逆台形を呈しており、底面はほぼ平坦である。掘り形のほぼ中央の底に水溜用の曲物が2段置かれてあり、北東隅に花崗岩の割り石が1個残存していた。埋土は人為的に埋め戻された様相を呈し、井戸廃絶時のものと考えられる。遺物は

瓦器碗、土師器皿などが出土しており、13世紀前半頃の時期を示している。

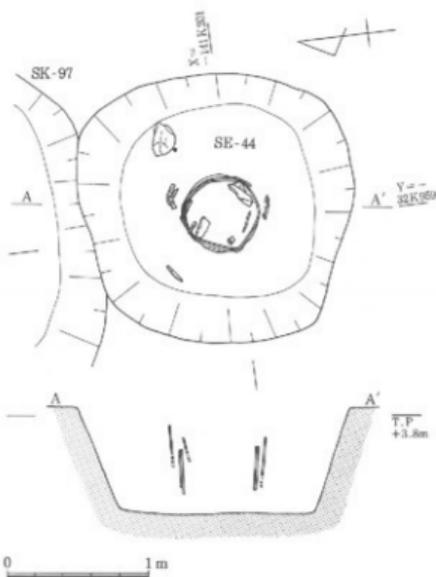
SE-45 (第16図)

K-18区で検出された。すぐ東側にSD-59、南側にSK-94・97があり遺構が密集している場所である。平面形は1.6×1.7mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。埋土は3層に分かれ、上層から灰黄色砂質土、灰色砂質土の混じる緑灰色砂混じり粘質土、緑灰色砂混じり粘質土がほぼ水平に堆積している。内部には割り石が1個残っていただけで、素掘りの状態であった。遺物は瓦器碗、土師器皿、土師器高台付皿、白磁碗片などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

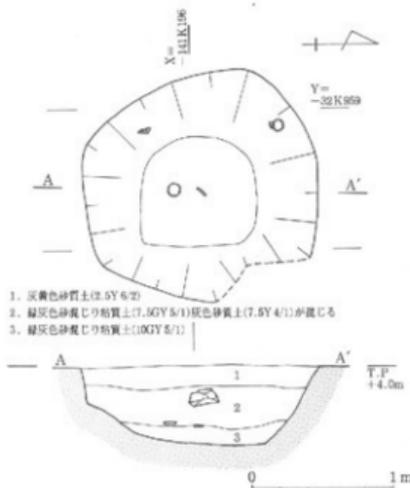
土坑

SK-92 (第17図)

K-19区で検出された。平面形は1.4×1.6mのほぼ円形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は播鉢状で、底面はほぼ平坦である。埋土は検出面から約1/2まで暗オリーブ灰色砂混じり粘質土、暗青灰色粘土、褐色砂質土が主として堆積し、以下底面までは灰色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は瓦器碗、土師器皿、白磁片など

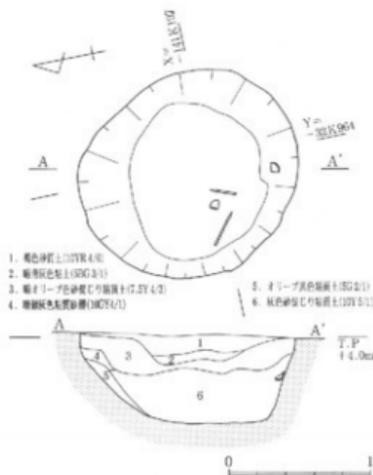


第15図 SE-44平面、断面図



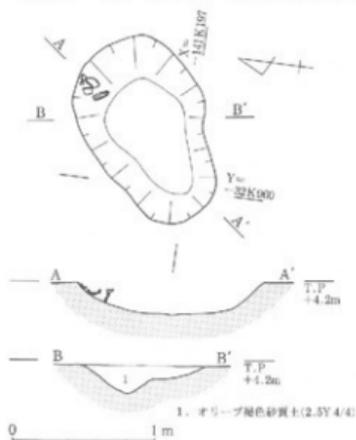
1. 灰黄色砂質土(0.5Y 6/2)
2. 緑灰色砂混じり粘質土(7.5GY 5/1)灰色砂質土(7.5Y 4/1)砂混じり
3. 緑灰色砂混じり粘質土(10GY 5/1)

第16図 SE-45平面、立面、土層断面図



1. 褐色沖積土(1.0YR4/6)
2. 暗褐色土(5YR3/1)
3. 暗オリーブ色砂質土(5Y4/2)
4. 暗褐色灰質砂土(5Y4/2)
5. オリーブ灰色砂土(5Y5/2)
6. 灰質砂質土(5Y5/2)

第17図 SK-92平面、断面、土層断面図



第18図 SK-94平面、断面、土層断面図

1. オリーブ褐色砂質土(2.5Y4/4)

第18図 SK-94平面、断面、土層断面図

が出土しており、時期は13世紀初め頃と考えられる。

SK-94 (第18図)

K-8区で検出された。平面形は1.3×1.4mの不定形を呈しており、深さは0.2mを測る。断面形は浅い楕鉢状で、埋土はオリーブ灰色砂質土が堆積していた。掘り形の北東壁際から瓦器椀、土師器皿、土師器釜などが出土している。遺物はこの他青磁片が出土している。時期は13世紀後半頃と考えられる。

が出土しており、時期は13世紀初め頃と考えられる。

SK-94 (第18図)

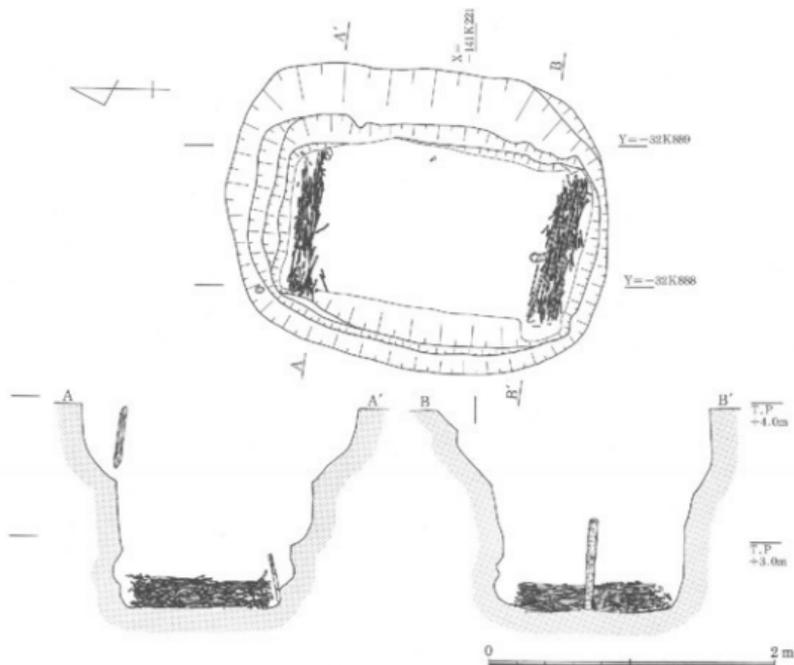
K-8区で検出された。平面形は1.3×1.4mの不定形を呈しており、深さは0.2mを測る。断面形は浅い楕鉢状で、埋土はオリーブ灰色砂質土が堆積していた。掘り形の北東壁際から瓦器椀、土師器皿、土師器釜などが出土している。遺物はこの他青磁片が出土している。時期は13世紀後半頃と考えられる。

SK-95 (第19図)

K-9区で検出された。平面形は2.1×2.7mの隅丸長方形を呈しており、深さは1.4mを測る。壁は検出面から約0.5mまで斜めに掘り込まれているが、後は底面まではほぼ垂直に下がる。底面の南北端に、柴状の枝、自然木が束ねられた状態で埋まっており、南側にはそれらの束を支持するように杭が打ち込まれていた。出土遺物はなく、時期は不明である。

SK-97 (第20図)

K-18・19区で検出された。平面形は一辺約2.7mの隅丸方形を呈しており、深さは0.5mを測る。SD-59と重複しているが前後関係は明確ではなく、調査時の検出面はSD-59の底面からであった。南側でSE-44に接するが、切り合い関係はなさそうである。断面形は楕鉢状で底面はほぼ平坦である。底面の西側約半分に蕨状の植物遺体が約2~4cmの厚さで堆積し、東側には割り石が散在していた。植物遺体は観察するところ、人工的に編んだものではないようである。遺物は埋土内からも出土しているが、蕨状植物遺体の下からも出土している。瓦器椀、土師器皿、須



第19図 SK-95平面、立面図

恵器甕、土師器台付き皿などが出土しており、時期は12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

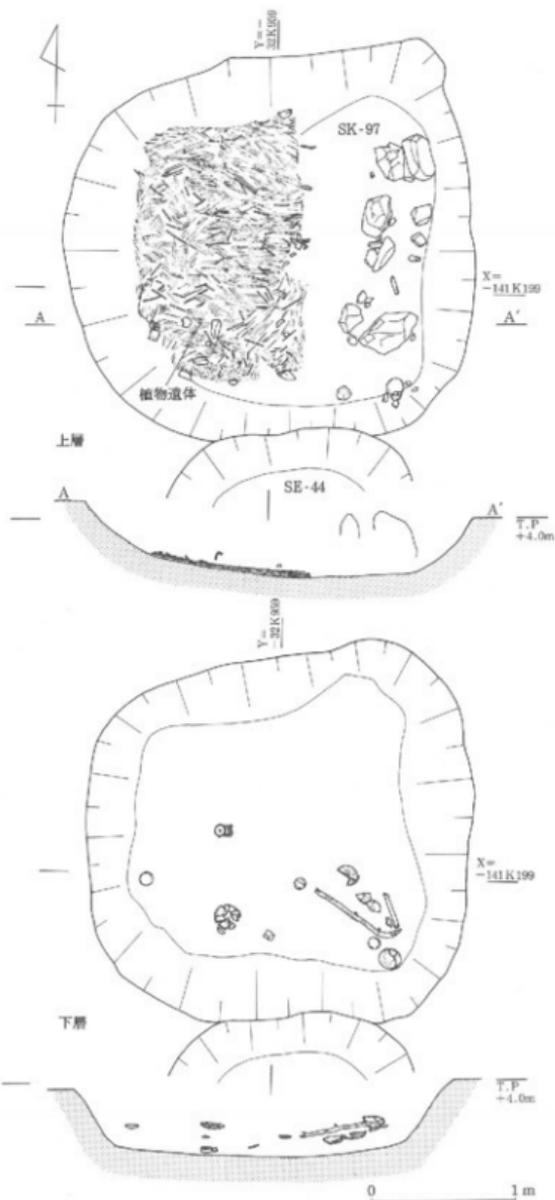
SK-98 (井戸) (第21図)

K-8・9・18・19区にまたがって検出された。平面形は1.9×2.2mの不定形を呈しており、深さは0.2mを測る。断面形は挿鉢状で底面はほぼ平坦である。底面のほぼ中央に水溜用の曲物が置かれてあった。大小2段で構成されており、上段に径の大きいものを載せていた。曲物を囲むように花崗岩の割り石が置かれており、曲物を固定させるためのものであろう。石には熱を受けたような形跡があった。埋土は人為的に埋め戻された土のようで、緑灰色シルトや灰色粘土のブロックを含む土が堆積していた。遺物は瓦器碗片、土師器皿片が出土している。

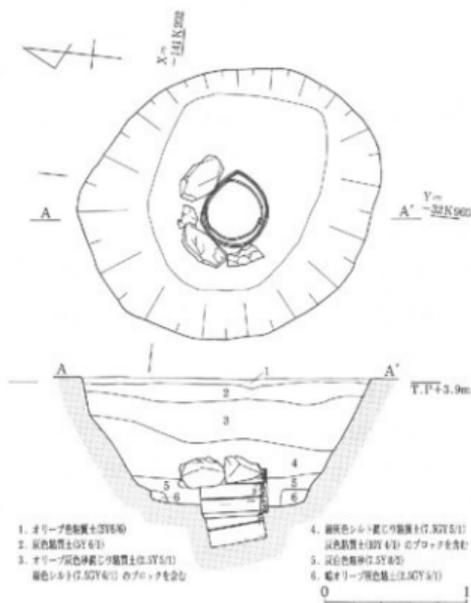
溝

SD-59 (第22図)

K-8・9・18・19
 区で検出された。トレンチを横切る形で南北方向に走り、北端は側溝に切られるがトレンチ外へ続いていることが予想され、南端はトレンチ外に続き、L区で検出され、西向きを変えS T-01につながっている。平面形は幅の広いところと狭いところの差が大きいためいびつになっている。深さは約0.04~0.2mと割合浅く、埋土は暗黄灰色砂混じり粘質土の一層であった。遺構内からは瓦器碗、瓦器皿、土師器皿などが散在して出土しており、時期は13世紀頃と考えられる。その後遺構内を掘り下げたところ、底面を検出面として、北からSK-97、SE-44、SE-43、SE-42、SE-38が検出され、平面形がいびつなのはこれらの遺構と



第20図 SK-97平面、立面、断面図



第21図 SK-98平面、立面、土層断面図

られる。この溝を境に東側は遺構の数が激減し耕作痕（鋤溝）が目立つようになり、屋敷地と耕作地を区画する溝と考えられる。

建物・柵（第7図）

多数のピットの中から建物15棟、柵5列が復元された。さらに多くの建物、柵の存在が考えられるが、復元は困難であった。

SB-16

K区の西側で検出された。SB-17・19・20と重複し、SB-17・20よりも旧いが、SB-19との前後関係は明らかではない。トレンチ隅での検出のため全体の規模は明らかではないが、西側のN区ではこの建物に対応する柱穴は検出されていないので、南北2間（5.2m）×東西2間（4.8m）の建物と考えた。主軸方向はN-8°-Eである。柱間は南北が2.6mの等間隔で、東西が2.3~2.5mで、柱穴の規模は25~55cm、深さは20~45cmを測る。遺物は土師器皿、瓦器碗などの小片が出土している。

SB-17

の重複によるものであった。時的にはSD-59と大差なく、同時期に存在していたと考えられ、排水のための溝と考えられる。

SD-68（第22図）

K-6・16区で検出された。トレンチを横切るように南北方向に走り、北端は側溝に切られてるがトレンチ外へ続いていることが予想され、南端はトレンチ外へ続き、L区で検出されている。幅は広い所で約1.8mで深さは0.1~0.2mと浅い。溝内からは瓦器碗、土師器皿などが散在して出土しており、時期は

12世紀末~13世紀前半頃と考え

S B-16・18と重複し、S B-16よりも新しいが、S B-18との前後関係は明らかではない。東西は2間(4.3m)であるが、トレンチ隅での検出のため南北の規模は不明である。主軸方向はN-8°-Eを示し、S B-16と一致する。柱間は2~2.3mで、柱穴の規模は20~40cm、深さは12~43cmを測る。遺物は土師器皿、瓦器椀、東播系須恵器鉢、瓦器足釜などの小片が出土している。

S B-18

S B-17と重複するが、前後関係は明らかではない。S B-17と同様南北の規模は不明であるが、東西は2間(4.8m)で、主軸方向はN-8°-Eを示し、S B-16・17と一致する。柱間は2.3~2.5mで、柱穴の規模は25~40cm、深さは38~48cmを測る。遺物は土師器皿、瓦器椀などの小片が出土している。

S B-19

S B-16・20・21と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は推定で東西1間(3.3m)×南北2間(3.9m)と考えられるが、東西の柱間が長いので、2間であった可能性もある。南北の柱間は1.9~2mのほぼ等間隔である。主軸方向はN-5°-Eで、柱穴の規模は30~35cm、深さは15~38cmを測る。遺物は出土しなかった。

S B-20

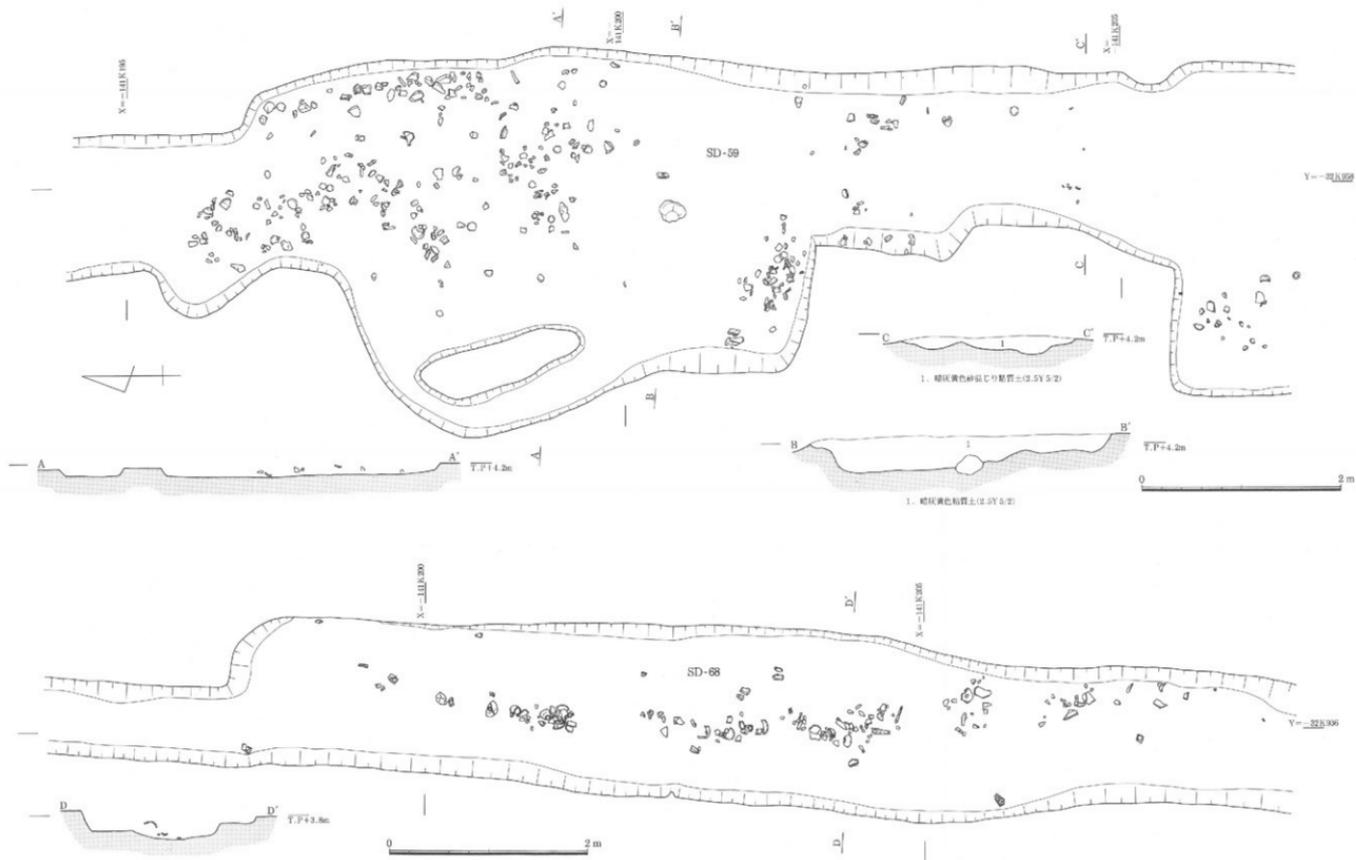
S B-16・19・21と重複しS B-16よりも新しいが、S B-19・21との前後関係は明らかではない。規模は推定で東西2間(5.2m)×南北1間(2.2m)である。東西の柱間は2.3m~2.9mと一定ではない。主軸方向はN-90°-Eで、柱穴の規模は25~35cm、深さは18~41cmを測る。S P-2927には礎石を使用していた。遺物は瓦器椀、土師器片が出土している。

S B-21

S B-16の東側で検出された。S B-19・20と重複するが前後関係は明らかではない。規模は東西2間(4.9m)×南北4間(8.2m)で、主軸方向はN-5°-Eを示し、S B-19と一致する。東西の柱間は2.3~2.6m、南北の柱間は南端1間が2.2mと長くなる他は2mの等間隔で、柱穴の規模は15~50cm、深さは8~52cmを測る。S P-2586・2694に柱根が残存していた。遺物は瓦器椀、土師器皿、須恵器、黒色土器A類などの小片が出土している。

S B-22

S B-21の東側で検出された。S D-92、S B-23と重複するが前後関係は明らかでは



第22图 SD-59·68平面、断面、土层断面图

ない。規模は東西2間(4.2m)で、南北はトレンチ外のため不明であるが2間(4.6m)を検出している。西側南北列の北端はSK-91に切られている。主軸方向はN-5°-Eを示し、SB-19・21と一致する。東西の柱間は2.1mの等間隔で、南北の柱間は2.2~2.4mである。柱穴の規模は25~55cm、深さは4~32cmを測り、SP-2549には礎石が使用されていた。遺物は瓦器碗、土師器皿、須恵器の小片が出土している。

SB-23

SB-22と重複するが前後関係は明らかではない。東西1間(1.8~2m)×南北1間(3.1m)で、主軸方向はN-4°-Eを示し、SB-19・21・22とはほぼ一致する。柱穴の規模は30~55cm、深さは15~32cmを測る。SP-2690に礎石が使用されていた。遺物は土師器皿、須恵器などの小片が出土している。

SB-24

SB-23の東側で検出された。SK-92と重複するが前後関係は明らかではない。北西隅の柱穴は検出されなかったが、推定で東西2間(2.5m)×南北1間(2.2m)の建物と考えた。主軸方向はN-15°-Eである。東西の柱間は1.7mの等間隔で、柱穴の規模は30~65cm、深さは25~42cmを測る。遺物は瓦器碗、瓦器釜、土師器皿などの小片が出土している。

SB-25

SB-24の南側で検出された。内部にSE-41を含み、井戸の覆屋の可能性もあるが、建物の規模が大きいため関連はなさそうである。前後関係は明らかではない。東西2間(4.5m)×南北2間(4.4m)のほぼ正方形で、主軸方向はN-15°-Eである。東西の柱間は2.1~2.4mと一定ではなく、南北は2.2mの等間隔で、柱穴の規模は30~50cm、深さは25~38cmを測る。SP-2676には礎石が使用されていた。遺物は上鉢が一点出土している他は、瓦器碗、土師器皿、須恵器甕などの小片が出土している。

SB-26

SB-25の南側、SB-21の東側で検出された。内部にSE-37を含み、建物の規模から井戸の覆屋と考えられる。北東隅の柱穴は検出されなかったが、推定で東西1間(1.7m)×南北1間(1.9m)の建物と考えられる。主軸方向はN-3°-Eを示し、柱穴の規模は28~30cm、深さは15~28cmを測る。遺物は出土していない。

SB-27

SD-59の東側で検出された。東西2間(4.3~4.6m)×南北1間(2.3m)で、柱の

通りは悪い。主軸方向は $N-86^{\circ}-W$ である。東西列の柱間は北側が2.3mのほぼ等間隔であるが、南側は1.9~2.4mと一定ではない。柱穴の規模は20~50cm、深さは15~28cmを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿などの小片が出土している。

S B-28

S B-27の東側で検出され、南西隅の一部でS B-27と重複するが、前後関係は明らかではない。東西1間(4.6~4.8m)×南北1間(3.2m)であるが、東西列の北側、南側それぞれの間にピットがあり、柱間は一定ではないが、東西2間であった可能性もある。主軸方向は $N-80^{\circ}-W$ を示し、柱穴の規模は20~30cm、深さは13~24cmを測る。遺物は土師器皿などの小片が出土している。

S B-29

S B-28の東側で検出され、S B-28・30と重複しており、S B-30より旧いが、S B-28との前後関係は明らかではない。東西2間(4.7m)×南北3間(7.4m)で、主軸方向は $N-5^{\circ}-E$ である。東西の柱間は2.4mで、南北は1.8~3.2mと一定ではなく、柱穴の規模は30~50cm、深さは8~39cmを測る。S P-2754・2760に柱根が残存していた。遺物は瓦器碗、灰釉陶器、土師器皿などの小片が出土している。

S B-30

S B-29とS D-68の間で検出された。S B-29と重複するが、S B-29より新しい。東西1間(2.7m)×南北1間(2.6m)のほぼ正方形で、主軸方向はS B-29と同じく $N-5^{\circ}-E$ を示す。柱穴の規模は25~44cm、深さは18~26cmを測る。S P-2841には礎石が使用されていた。遺物は瓦器碗、土師器皿、須恵器甕、瓦器釜、土師器釜などが出土している。

S A-23

S B-24の東側、S D-59との間で検出された。方位は $N-3^{\circ}-E$ 、2間で長さは5.5m、柱間はほぼ等間隔で2.7mを測る。柱穴の規模は35~40cm、深さは22~28cmを測る。S P-2662は柱根が残存していた。遺物は瓦器碗、土師器皿、東播系須恵器片口鉢などの小片が出土している。

S A-24

S B-25・26の東側、S D-59との間で検出された。方位はほぼ南北方向に一致し、2間で長さは4.7m、柱間はほぼ等間隔で2.4mを測る。柱穴の規模は25~40cm、深さは24~32cmを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿などの小片が出土している。

SA-25

SB-26の南側で検出された。方位は $N-84^{\circ}-W$ 、2間で長さは4.6m、柱間は等間隔で2.3mを測る。柱穴の規模は $15\sim 40\text{cm}$ 、深さは $22\sim 41\text{cm}$ を測る。遺物は瓦器碗、土師器皿、東播系須恵器片口鉢などの小片が出土している。

SA-26

SB-27の北側で検出された。方位は $N-6^{\circ}-E$ 、2間で長さは4m、柱間は等間隔で2mを測る。柱穴の規模は $20\sim 23\text{cm}$ 、深さは $12\sim 21\text{cm}$ を測る。遺物は出土していない。

SA-27

SB-29・30の北側で検出された。方位は $N-86^{\circ}-W$ 、2間で長さは4.3m、柱間はほぼ等間隔で2.2mを測る。柱穴の規模は $20\sim 25\text{cm}$ 、深さは $12\sim 37\text{cm}$ を測る。SP-2856には柱根が残存していた。

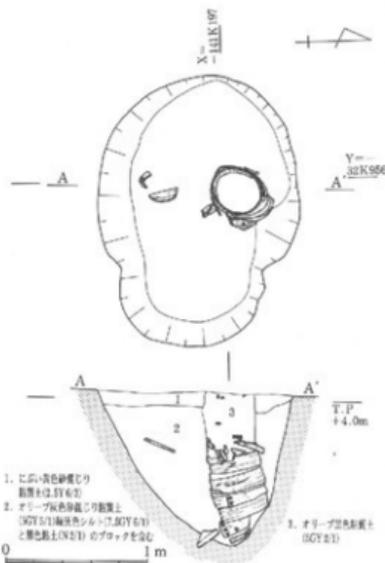
3. 第2遺構面下層 (付図3)

井戸、土坑、ピット、自然河川などが検出されている。第2遺構面上層で未検出の遺構も含まれているが、トレンチの東側では新たに中世の土坑、ピットなどが検出された。しかし、第2遺構面上層のように、建物を復原するまでには到らなかった。基本的には中世の遺構面と考えられるが、古墳時代の土坑、自然河川も検出されている。検出面は東側でT.P.+4.2m、西側でT.P.+3.9mを測る。

井戸

SE-46 (第23図)

K-18区で検出された。平面形は $1.4\times 1.9\text{m}$ の不定形を呈しており、深さは1.1mを測る。掘り形内の北寄りに曲物が5段重ねた状態で検出されており、検出時は南側に傾いていた。曲物は5段以上存在したと推定され、土層断面を見ると井戸廃絶時に上部の曲物を抜き取ったようであるが、かなり無理に抜き取った



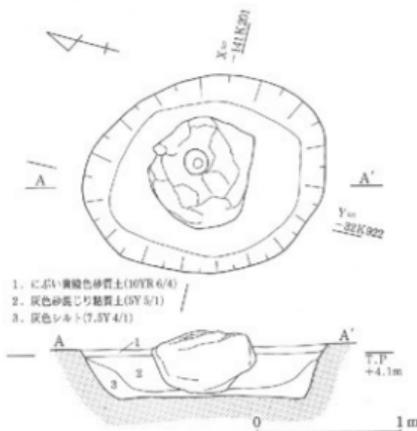
第23図 SE-46平面、立面、土層断面図

ためか途中で曲物が破損している。井戸側などの施設は存在しないので、水溜用の曲物が井戸側を兼ねていたものと考えられる。遺物は瓦器碗、土師器皿、瓦器釜などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

土坑

S K-99 (第24図)

K-15区で検出された。平面形は1.4×1.7mの長円形を呈しており、深さは0.4mを測る。断面形は楕円状で底面はほぼ平坦である。遺構内には約×mの花崗岩製の礎石が据えてあった。石の上部は面を取りほぼ平坦に加工され、ほぼ中央に径約20cm、深さ8cmの穴が穿孔されており、形状からして塔心礎ではないかと考えられるが、周辺には関連するような遺構は検出されておらず、遺物もほとんど出土していない。



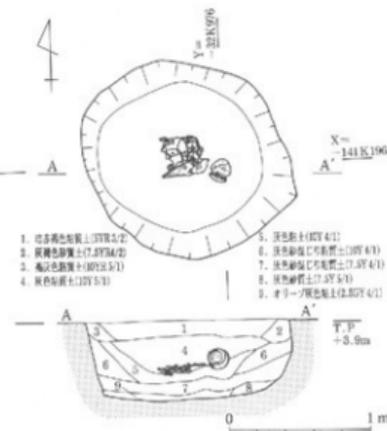
1. 濃い黄褐色粘質土(10YR 4/4)
2. 灰色砂状じり粘質土(5Y 5/1)
3. 灰色シルト(7.5Y 4/1)

第24図 S K-99平面、立面、土層断面図

掘り形内からの出土遺物も少量で、土師器皿片、瓦器足釜の脚部片などが出土しているにすぎないため、時期は明らかではない。

S K-111 (第25図)

K-20区で検出された。平面形は1.4×1.6mの不整形円形を呈しており、深さは0.6mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦であった。埋土は暗赤褐色～灰色の粘質土が堆積している。遺物は掘り形の中央で土師器甕が破砕された状態で出土し、そのすぐ東側で、ほぼ完形に近い土師器甕が口縁部を南側に向けて横置き状態で出土している。時期は古墳



1. 暗赤褐色粘土(10YR 4/2)
2. 灰褐色粘質土(7.5Y 3/4)
3. 赤褐色粘土(10Y 3/3)
4. 灰色粘土(10Y 5/3)
5. 灰色粘土(10Y 4/1)
6. 灰色砂状じり粘質土(10Y 4/1)
7. 灰色砂状じり粘質土(7.5Y 4/1)
8. 灰色粘土(7.5Y 5/1)
9. オリーブ褐色粘土(10Y 4/1)

第25図 S K-111平面、立面、土層断面図

時代前期と考えられる。

自然流路・河川

SR-01

K-7・17区で検出された。南側にあるL区で検出された北東から南東方向に走るSR-01の続きと考えられ、K区では向きを変えほぼ南北方向で検出された。幅1.5～5m、深さは0.5～0.8mを測る。北端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いていると考えられる。埋土は粗砂、細砂、シルトなどが堆積しており、自然河川と考えられる。遺物は古墳時代の須恵器杯身、杯蓋などが出土しており、古墳時代後期の5世紀後半～6世紀初め頃と考えられる。

4. 第3遺構面（付図4）

土坑、自然河川が検出されている。SR-02の出土遺物から古墳時代前期の遺構面と考えられるが、他の遺構からは遺物が出土していないので、各遺構の時期は明確ではない。これまでの調査で検出されている、古墳時代の水田面は検出されなかったが、トレンチの東側で北東から南西方向に走る畦状の高まりと溝が検出された。水田面のベースとなる粘土層が認められず、削平されたか流失したものと考えられ、大型の畦畔がかるうじて残ったものと推定される。検出面は東側でT.P.+4.1m、西側でT.P.+3.7mを測る。

土坑

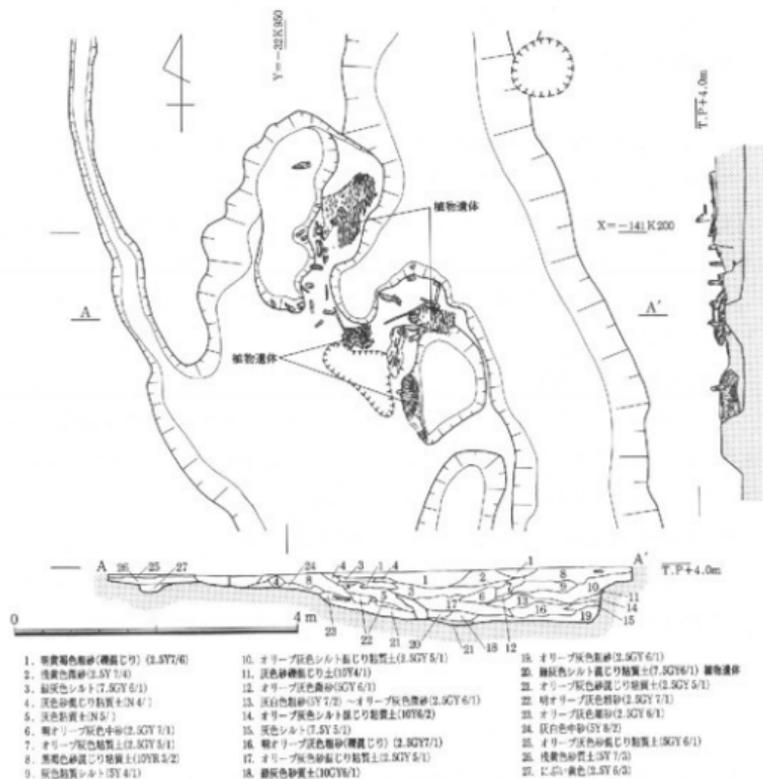
SK-126

K-20区で検出された。平面形は1×2.5mの隅丸長方形を呈するが、北東の短辺が少し膨らんだ形状をしている。深さは0.5mを測るが、調査時に掘り過ぎてしまったため、実際の底面は、オリーブ灰色粗砂の上面であると考えられ、深さは0.3m程度である。断面形を見ると2段掘りになっており、埋土はにぶい黄褐色砂混じり粘質土が堆積している。遺物は出土していないので時期は特定できないが、形状から土壌墓の可能性もある。

自然流路・河川

SR-02（第26図）

K-7・17・18区で検出された。南北方向に走り、第2遺構面下層で検出されたSR-01と重複しており、同一の流路と考えられる。北端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いていると考えられる。南側にも続いており、L区では北東から南西方向に走る形で検出されている。幅約7m、深さは0.3mを測る。埋土は砂層やシルトが堆積しており、ラミナが認められた。中央部に杭が打ち込まれており、そこから菖葦の植物遺体が検出さ



第26図 SR-02平面、土層断面図

れた。藪は厚さ約2～4 cmを測り、杭と一緒に川の中央部に敷かれていたようで、堰などの施設と考えられる。遺物は少量であるが、古墳時代前期の土師器が出土している。

5. 第4遺構面(付図5)

基本層序VI層の黒色粘土をベースとする最終遺構面である。トレンチ全面に黒色粘土が検出され、蛇行をしながら南北に走る畦状の高まりが検出された。遺構検出当初は畦状遺構として理解していたが、調査区壁の断面観察したところ、黒色粘土の下に灰白色の砂がレンズ状に堆積しているのが認められたため、自然河川の跡であることがわかった。この自然河川は上面の黒色粘土を掘込んで流れていたのではなく、黒色粘土は河川が埋没してから堆積しているので、検出面とは時間的にかなりの差があるものと考えられる。遺物は

まったく出土していないので時期は明らかではないが、この黒色粘土は「河内潟」、「河内湖」起因によるものと考えられるので、時期は弥生時代以前として考えている。この高まりを河川として掘削したのはK区においてだけで、他のトレンチでは高まりのままで調査を終了している。検出面は東側でT.P.+3.3m、西側でT.P.+2.8mを測り、かなりの高低差がある。

自然流路・河川

SR-11

K-3・13・14区で検出された。蛇行をしながら南北方向に走り、両端は側溝に切られるが、トレンチ外に続いている。幅約2m、深さは0.5mを測り、埋土は灰白色砂層が堆積しており、自然河川と考えられる。遺物は出土していない。

SR-12

K-1・2・11区で検出された。蛇行をしながら南北方向に走り、両端は側溝に切られるが、トレンチ外に続いている。幅3.8~4.3m、深さは0.8mを測り、埋土は灰白色砂層とオリープ灰色微砂が堆積しており、自然河川と考えられる。遺物は出土していない。

第2節 L区の遺構

L区はK区の南側に位置しており、調査前の地表面の標高は東側でT.P.+4.9m、西側でT.P.+4.7mを測り、東から西への傾斜が認められた。

1. 第1遺構面(付図1)

近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝や鋤溝などが検出された。水田や畑などの区画を兼ねた用水路と考えられる。検出面は東側で4.3m、西側で4.1mを測る。

溝

SD-03

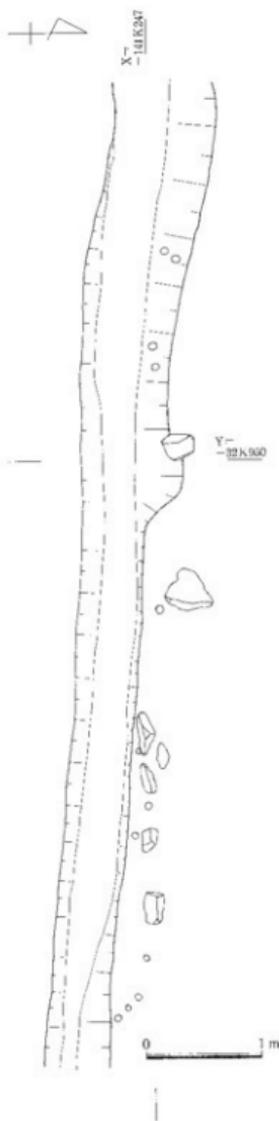
L-1・7区で検出された。トレンチを横切るように南北方向に走り、北はK区から続いており、南はさらにM区へと続いている。幅0.3~0.5m深さ約0.1mを測り、埋土は灰黒色土で遺物は近世の染付など陶磁器類が出土している。南端で東西方向に走るSD-54と交差するようである。

SD-54(第27図)

L-1~6区で検出された。東西方向に走り、東端は側溝に切られるがO区へ続いており、西端はN区に続くようである。トレンチの南側側溝に沿って検出されているために、遺構の全体幅を検出するに至らなかった。検出幅は1区で約1.2mを測り、深さは約0.1mを測る。北側には杭と石が残っていた。埋土は黒灰色土で、遺物は近世の染付などの陶磁器類が出土している他、土師器皿片や瓦器碗片が混入している。

SD-55

L-4・14区で検出された。南北方向に走り北はK区から続いており、南端で東西方向に走るSD-54に合流していた。幅約1.3m、深さは0.1~0.3mを測る。埋土



第27図 SD-54平面図



第28図 L区西側及びN区第2遺構面上層平面図

※ スクリーントーンは柱根、礎石、礎板、土器埋納を伴うピット

は黒灰色土で、遺物は近世の染付などの陶磁器類が出土している他、土師器皿片や瓦器碗片が混入している。

2. 第2遺構面上層(第28図、付図2)

K区と同様に、トレンチの西側半分で、中世の溝、井戸、土坑、水路、ピットなどを検出しているが、東側半分では鋤溝が見られる程度であった。ピットは多数検出されており、建物、柵が復原できた。検出面は東側でT.P.+4.2m、西側でT.P.+3.9mを測る。

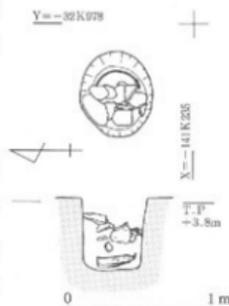
井戸

SE-22(第29図)

L-12区で検出された。平面形は0.5×0.6mの楕円形を呈しており、深さは0.5mを測る。検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。底には水溜用の曲物が1段置かれており、検出時には上部は花崗岩の割り石によって塞がれていた状況であった。割り石は井戸廃絶時に埋め戻されたものと考えられるが、石積みの井戸側に使用されていた可能性も否定できない。出土遺物は少なく、土師器皿、須恵器甕などがあり、時期を特定するのは難しいが、13世紀後半頃と考えている。

SE-23

L-12区で検出された。平面形は0.9×1mの不整円形を呈しており、深さは0.7mを測る。検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。埋土は3層に分かれており、上から灰黄褐色土、褐灰色砂混じり粘質土、オリーブ黒色砂混じり粘質土が水平に堆積していた。遺物は瓦器碗、土師器皿などの小片が少量出土しているだけで、時期は明らかではない。



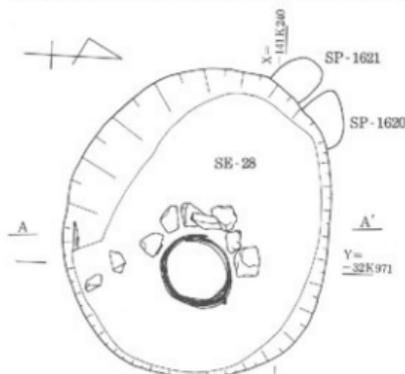
第29図 SE-22平面、立面図

まったくの素掘りのため、井戸とは断定できないが、抜き取り跡の可能性も否定できない。

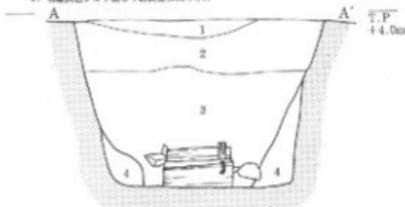
SE-28(第30図)

L-6区で検出された。平面形は2.2×2.4mの楕円形を呈しており、深さは1.2mを測る。断面形は播鉢状で、底面はほぼ平坦である。底には水溜用の曲物が2段置かれており、その東側には曲物を取り囲むように割り石が散在していた。埋土は3層に分かれており、中層、下層はブロックの混入する土であり、人為的に埋め戻された堆積状況を示す。割り石は井戸側に使用されていたものと考えられ、元々は検出面まで石積みの井戸側が存在していたことが推定される。井戸廃絶時に、ある程度上部の石を抜き取り、底部の石と曲物

を残した状態で埋め戻されたと考えられる。遺物は瓦器碗、瓦器皿、瓦器釜、白磁片、などが出土している。瓦器皿は破片も含めて約5個体を出土している。その他混入品と考え



1. 灰黄褐色砂混じり土 (0YR 4/2)
2. 暗灰褐色砂混じり粘質土 (2.5Y 4/2) 黄褐色粘質土 (2.5Y 5/4) がブロック状で混入する
3. 暗灰色砂混じり粘質土 (8GY 6/2)、黄灰色砂混じり粘質土 (N2) がブロック状で混入
4. 暗緑灰色シルト混じり粘質土 (8GY 7/1)

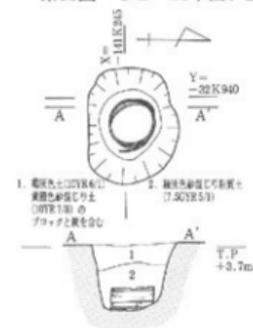


第30図 SE-28平面、立面、土層断面図

られる縄蓆文が施された須恵器甍片が出土している。時期は12世紀前半頃と考えられる。

SE-30 (SK-62) (第31図)

L-3区で第2遺構面下層の遺構として検出された。検出面での平面形は0.8×0.5mの長円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は台形で、底には水溜用の曲物が1段置かれてあった。しかし、第2遺構面上層で検出したSK-62と重複しており、同一遺構と考えられるため、実際の平面規模は0.8×0.9mと大きくなり、断面形は二段掘りとなっていたようである。遺物は小片ばかりで図化し得るものはなかったが、土師器皿、須恵器、青磁、黒色土器A類などが出土している。



1. 暗灰色土 (2.5Y 4/2) 粘質土 (0YR 1/3) のブロックと混入
2. 暗褐色砂混じり粘質土 (7.5CYR 5/1)

第31図 SE-30平面、立面、土層断面図

土坑

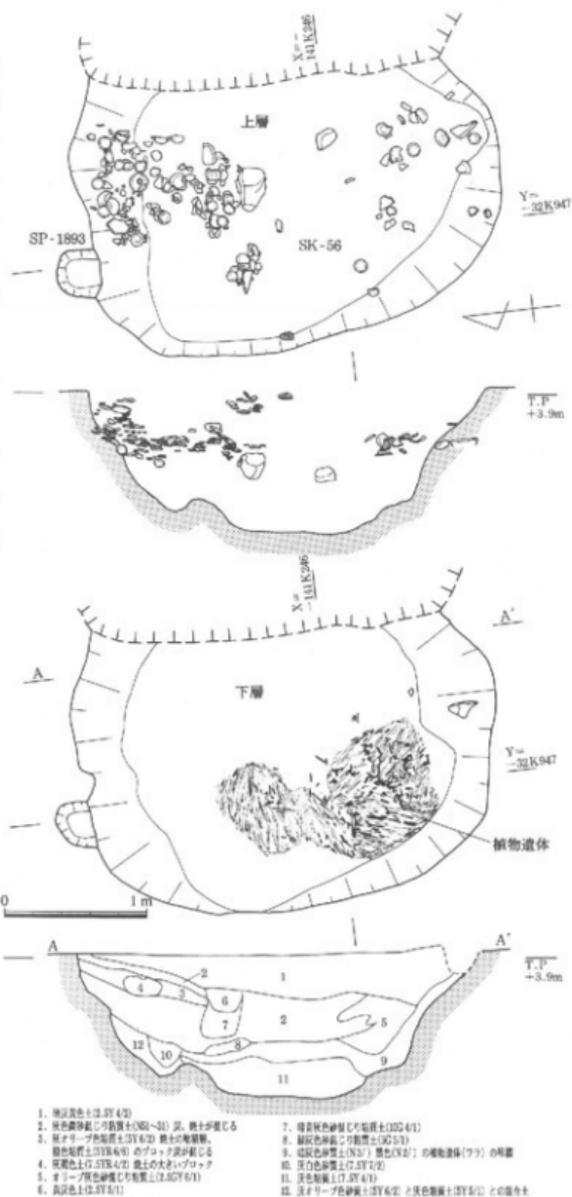
SK-56 (第32図)

L-3区で検出された。東側を攪乱によって切られており、検出規模は1.8×3mで、平面形は不定形を呈し、深さは約1mを測る。検出面から約20~40cmの間に堆積する炭化物、焼土の混じる灰色砂混じり粘質土から瓦器碗、土師器皿がまとまって大量に出土している。その数量は図化可能なものでも瓦器碗28個体、土師器皿243個体あるが、実数はさらに多い。また検出面から約40cm下には、孤状の植物遺体が約0.8×1.8mの範囲で約1cmの厚さで堆積していた。径約3mmの植物の茎からなるが、1本1本の方向は

不揃いであるため人工的に編まれたものではなくさそうである。土器は破碎しているものが多く見られることから、使用できなくなったものを廃棄した土坑であろう。時期は13世紀初め～後半と考えられる。遺物としては他に青磁、白磁片や、混入品と考えられる須恵器杯身などが出土している。

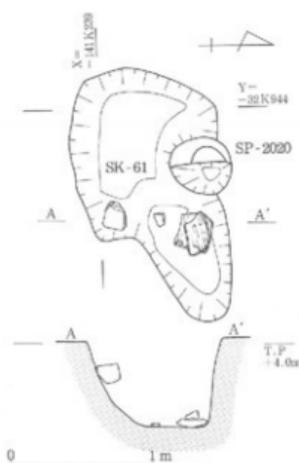
SK-6I (第33図)

L-3区で検出された。北側でSP-2020に切られており、平面形は1×1.9mの不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。遺構検出時では土坑と考えていたが、遺構内を掘り下げたところ、礎板と礎石とが底面で検出され、これらの出土位置から少なくとも3個のピットが重複



1. 褐色灰土(土層4区)
2. 褐色灰土(土層5区)
3. 灰ナリ土(土層6区) 礎石の基礎層
褐色灰土(土層6区) のフック状が散見
4. 灰褐色土(土層4区) 礎石の大ききフック
5. オリーブ褐色砂質(土層7区)
6. 灰褐色土(土層4区)
7. 褐色灰土砂質(土層5区)
8. 褐色灰土砂質(土層5区)
9. 褐色灰土砂質(土層5区) の礎石(土層7区) の基礎層
10. 灰褐色土(土層7区)
11. 灰褐色土(土層7区)
12. 灰ナリ土(土層6区) と灰褐色土(土層5区) との境界

第32図 SK-56平面、立面、土層断面図



第33図 SK-61平面、断面図

SK-68 (井戸) (第35図)

L-12区で検出された。平面形は径約0.7mのほぼ円形を呈しており、深さは0.8mを測る。検出面から垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦であった。底面には完形の柄杓が口を下にして伏せた状態で置かれてあった。遺物は土師器皿、瓦器碗の破片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。水を汲むための柄杓が出土しているため、この遺構は素掘りの井戸の可能性も否定できない。

水路・落ち込み

ST-02 (第36図)

L-11・12区で検出された。東西方向に走り、幅約3m、深さは0.7mを測る。東端は幅が狭くなってSD-59となり、直角に方向を変えて北に向かい、側溝に切られるがトレンチ外へ続き、K区でもその続きを検出している。北からはSD-61が合流する。西端も側溝に切られるが、トレンチ外へ続いておりN区でも検出されており、さらに西側へ続いている。埋土は上層が灰黄褐色土、灰色砂混じり粘質土で下層には灰色粘土、底面付近にはオリブ灰色砂質土が堆積しており、埋土の状況からかつては水が停滞した状態にあったと考えられる。東西方向に直線的に走ることから、人為的に開削された水路と考えられる。

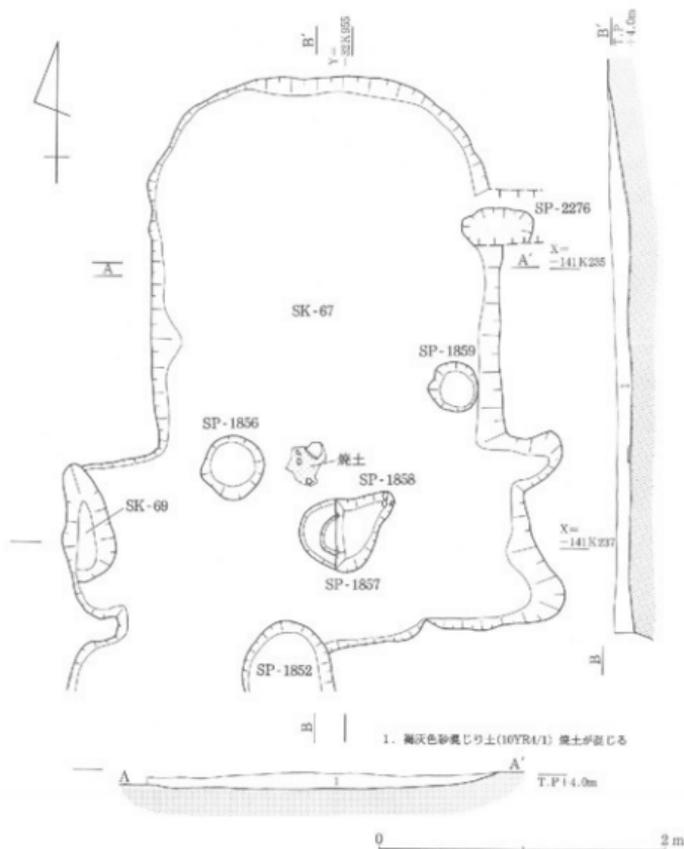
建物・柵列 (第28図、付図2)

建物7棟、柵3列が復原された。さらに多くの建物、柵の存在が考えられるが、復原は

しているものと考えられ、平面形がいびつなのはこのためであろう。各ピットどうしの前後関係は明らかではないが、遺物は瓦器碗、土師器皿などが出土しており、時期は13世紀前半頃を示す。

SK-67 (第34図)

L-10区で検出された。平面形は3.3×4.4mの不定形を呈しており、深さは0.12mと浅い。SK-69、SP-1852に切られており、底面では複数のピットが検出されているが、前後関係は明らかではない。埋土は焼土の混じる褐灰色砂混じり土で、特に中央で検出した土器片の周囲に、焼土が多く混入しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。



第34図 SK-67平面、土層断面図

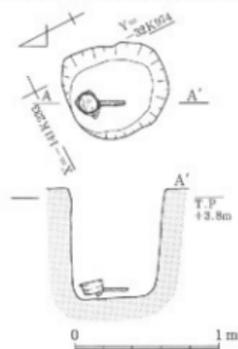
困難であった。

SB-07

L区の西側で検出された。規模はN区で検出した柱穴を含めて、東西4間(9.1m)×南北2間(4.2m)で、主軸方向はN-86°-Wを示す。東西の柱間は1.7~2.5mと間隔にばらつきがあり、南北は2.1mのほぼ等間隔であるが、N区で検出した2間は柱の通りが悪い。柱穴の規模は40~57cmと大型で、深さは12~50cmを測る。SP-1594には礎石が使用されていた。遺物は瓦器椀、土師器皿、青磁碗、白磁、須恵器などの小片が出土している。

SB-08

L区の西側、SB-07の南側で検出された。規模はN区で検出した柱穴を含めて、推定で東西2間(5.9m)×南北2間(4.9m)であると考えた。主軸方向は $N-86^{\circ}-W$ を示し、SB-07と一致する。東西の柱間は2.8~3.1mと広めて、南北は1.9~2mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は35~50cm、深さは20~33cmを測る。SP-2244には柱根が残存

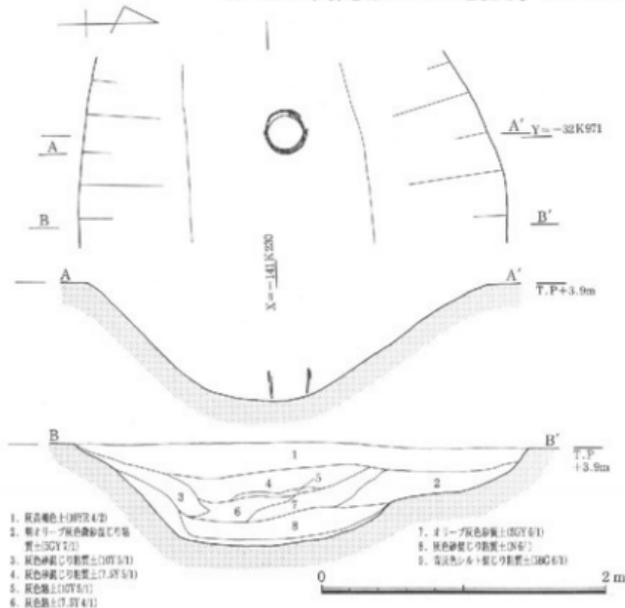


第35図 SK-68平面、立面図

していた。遺物は瓦器碗、土師器皿、白磁、須恵器などの小片が出土している。

SB-09

L区の中央よりやや西側で、SD-31とSD-58の間で検出された。SB-10と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西2間(4.3m)×南北2間(4.4m)の正方形で、主軸方向は $N-4^{\circ}-E$ である。東西の柱間は北側で2.6~2.7mと一定ではなく、南北は2.2mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は大型のものが多く30~100cm、深さは35~64cmを測る。SP-1849には柱



第36図 ST-02平面、断面、土層断面図

1. 灰赤褐色土(0P242)
2. 紫灰色土(0P242)
3. 灰赤褐色土(0P242)
4. 灰赤褐色土(0P242)
5. 灰赤褐色土(0P242)
6. 灰赤褐色土(0P242)

7. 灰赤褐色土(0P242)
8. 灰赤褐色土(0P242)

根が残存し、S P-1775・1791には礎石が使用されていた。遺物は瓦器碗、土師器皿、瓦器釜、須恵器の小片の他に、各柱穴から焼土塊が出土している。

S B-10

L区の中央よりやや西側で、S D-31とS D-58の間で検出された。S B-9・11と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西2間(4.9m)×南北1間(3.3m)で、主軸方向はN-90°-Eである。東西の柱間は北側で2.4~2.5mで、柱穴の規模は大型のものが多く22~80cm、深さは21~53cmを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿、瓦器足釜、黒色土器A類の小片が出土している。

S B-11

L区の中央よりやや西側で、S D-31とS D-58の間で検出された。S B-10と重複するが、前後関係は明らかではない。トレンチの端のため全体の規模は不明であるが、推定で東西3間(6.8m)×南北1間以上で、南側に続くものと考えられる。主軸方向はN-4°-Eである。東西の柱間は2.3mの等間隔で、柱穴の規模は28~101cm、深さは8~45cmを測る。S P-1972に礎石が使用されていた。遺物は瓦器碗、土師器皿、須恵器などの小片が出土している。

S B-12

L区の中央よりやや東側で、S D-39とS D-58の間で検出された。規模は東西2間(4.2m)×南北3間(5.6m)で、主軸方向はN-2°-Eである。東西列の北側の中央のピットはS K-61と重複しており、掘り方は検出されなかったが、礎石が残存していたので柱とみなした。南北の柱の通りは悪く、柱間は1.9~2.4m、柱穴の規模は20~88cm、深さは20~37cmを測る。S P-2026には柱根が、S P-2098には礎板が、S P-2108には柱根と礎板が残存していた。遺物は瓦器碗、土師器皿、土師器、須恵器などの小片が出土している。

S B-13

L区の中央よりやや東側で、S B-12の南側で検出された。トレンチの端で柱穴が3個東西に等間隔で並ぶため、建物とした。全長は3.1mを測り、主軸方向はN-2°-Eで、S B-12と一致する。柱間は1.6mの等間隔で、柱穴の規模は34~66cm、深さは10~46cmを測る。S P-2004には礎板が残存し、S P-2010・2060には礎石が使用されていた。遺物は瓦器碗、土師器皿、須恵器などの小片が出土している。

S A-10

L区の西側で検出された。方位はN-5°-E、2間で長さ4.3m、柱間は2~2.3mを

測る。柱穴の規模は22～45cm、深さは13～27cmを測る。遺物は出土していない。方位は西側で検出されたS B-07・08の主軸とほぼ一致する。

S A-11

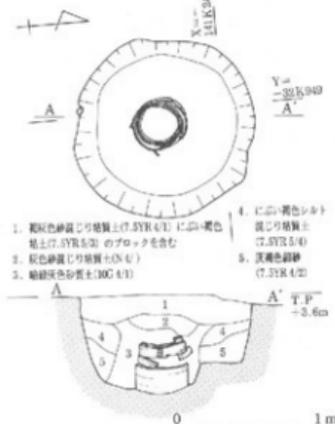
L区の西側、S A-10の南側で検出された。方位はN-4°-E、2間で長さ5.2m、柱間は約2.6mの等間隔であるが、さらに南側へ続くようである。柱穴の規模は34～40cm、深さは21～29cmを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿の小片が出土している。方位は西側で検出されたS B-07・08の主軸と一致する。

S A-12

L区のはほぼ中央で検出された。方位はN-89°-Eではほぼ東西方向に並び、7間で長さ16.1m、柱間は2.2～2.5mで、柱穴の規模は34～65cm、深さは2～50cmを測る。S P-2128・2179を除くすべての柱穴に礎石や礎板または柱根が残存していた。遺物は瓦器碗、土師器皿、束播系須恵器片口鉢、瓦器足釜の小片が出土している。方位は西側で検出されたS B-07・08の主軸と一致する。

3. 第2遺構面下層(付図3)

井戸、土坑、ピット、自然河川などが検出された。トレンチの東側では中世の土坑、ピットが検出され、建物、柵を復原することができた。基本的には中世の遺構面と考えられるが、古墳時代の土坑、自然河川も検出されている。検出面は東側でT.P.+3.9m、西側でT.P.+3.6mを測る。



第37図 SE-29平面、立面、土層断面図

1. 黒褐色砂質じり質土(7.5YR 4/1) に黒褐色土(7.5YR 5/2) のブロックを含む
2. 黒褐色砂質じり質土(5N 7)
3. 輪切灰色砂質土(10G 4/1)
4. 白褐色砂質じり質土(7.5YR 5/4)
5. 灰褐色砂質土(7.5YR 4/2)

井戸

SE-29 (第37図)

L-3・4区で検出された。平面形は径約1.3mの円形を呈しており、深さは0.7mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、北側には段がある。底面のはほぼ中央に水溜用の曲物が2段置かれてあった。埋土の状況は、上層の土はブロックを含む層で、人為的に埋め戻された土のようであるが、下層は曲物の両側に縦方向の土層の境が認められ、これが井戸掘削時に掘り込まれた曲物を据えるための掘り形であろう。遺物は小片ばかりで図化し得るものはなかった。

SE-31 (第38図)

L-3区で検出された。平面形は1.4×1.7mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。埋土を見ると、縦方向の土層の境があり、掘り形の中央に径約0.6mの円形の穴が、底まで掘り込まれていたようである。かつては、ここに水溜用の曲物が据えてあったと推定され、井戸廃絶時に曲物が抜き取られた跡と考えられ、側板の木片が残っていた。遺物は底部外面にそれぞれ「□福」、「西」の墨書がある黒色土器A類碗や土錘などが出土している。時期は10世紀前半頃と考えられる。

土坑

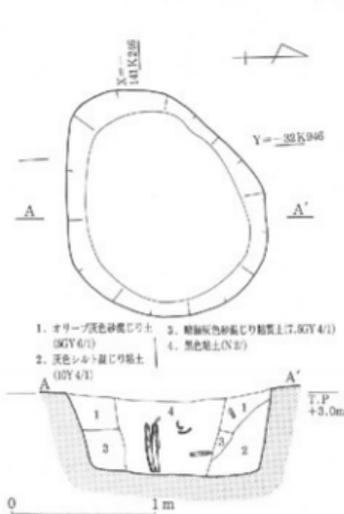
SK-70 (第39図)

L-3区で検出された。平面形は径約1.7mのほぼ円形を呈しており、深さは0.6mを測る。掘り形の中央で蕨状の植物遺体と炭化材が検出されている。遺物は掘り形の東寄り、土師器壺が破砕された状態で出土している他、そのすぐ隣で小型の壺が出土している。また埋土内から滑石製の白玉が1点出土している。時期は古墳時代前期頃と考えられる。

自然流路・河川

SR-01 (第40図)

L-5・6・10・11区で検出された。北東から南西方向に走り、幅約1.7m、深さ0.4～



第38図 SE-31平面、土層断面図



第39図 SK-70平面、土層断面図

0.7mを測る。埋土は主に明黄褐色や黄褐色の細砂～粗砂が堆積している。遺物は古墳時代の須恵器杯蓋、杯身が出土している。時期は古墳時代後期である。

建物・柵列（付図3）

建物2棟、柵5列が復原された。

SB-14

L区の北東隅で東西2間（3.3m）、南北2間（3.2m）を検出しており、建物と考えた。トレンチ外に続くものと考えられるが、全体の規模は不明である。柱間は1.1～1.6mで、主軸はN-3°-Eを示す。柱穴の規模は18～52cm、深さは5～29cmを測る。遺物は瓦器碗の小片が出土しているが、全体としては少量である。

SB-15

L区の東端で東西2間（4.4m）、南北2間（1.7m）を検出しており、建物と考えた。さらに東側へ続くものと考えられるが、全体の規模は不明である。柱間は2.2mの等間隔で、主軸はN-3°-Eを示す。柱穴の規模は20～36cm、深さは14～29cmを測る。遺物は土師器皿、黒色土器A類などの小片が出土している。

SA-13

L区の西側で検出された。方位はN-37°-W、3間で長さ6.9m、柱間は1.2mでほぼ等間隔である。柱穴の規模は30～57cm、深さは4～20cmを測る。遺物は出土していない。

SA-14

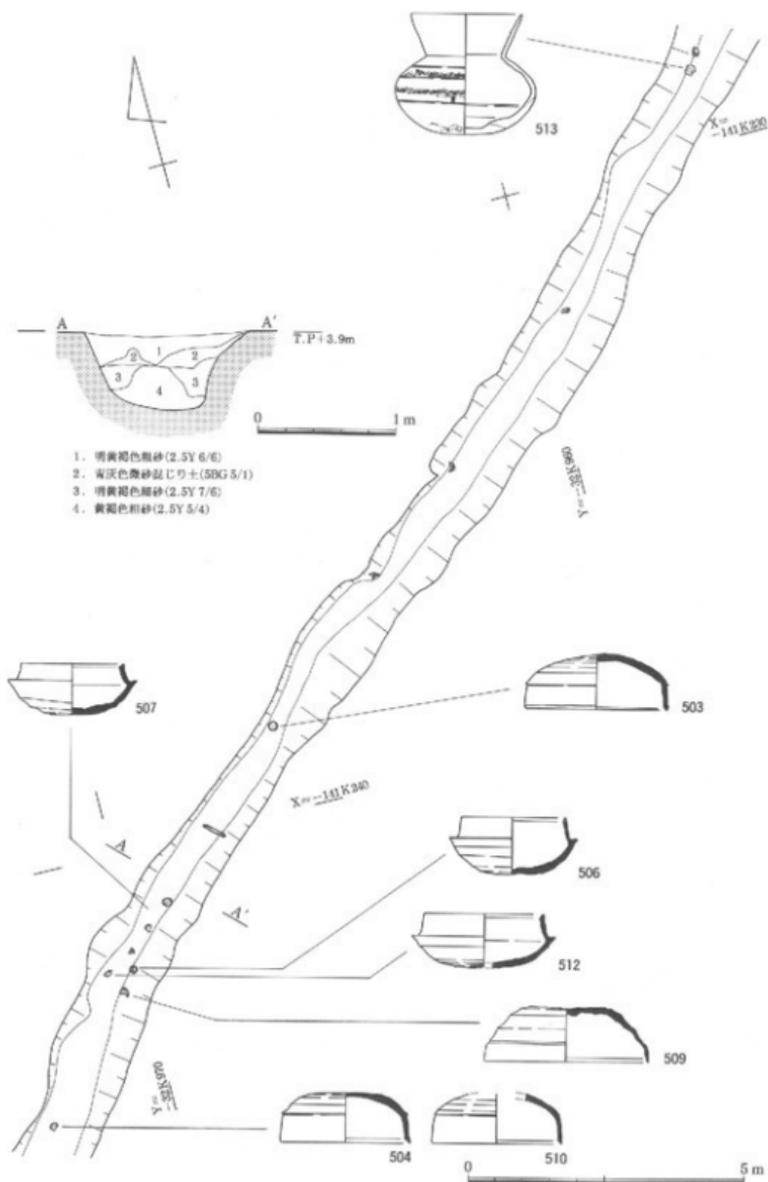
L区の西側で検出された。方位はN-75°-E、2間で長さ2.3m、柱間は1.8～2.2mである。柱穴の規模は20～39cm、深さは13～30cmを測る。遺物は出土していない。

SA-15

L区の西側で検出された。方位はN-11°-W、2間で長さ4.5m、柱間は2.1～2.4mである。柱穴の規模は23～36cm、深さは3～19cmを測る。SP-2331には柱根が残存していた。遺物は出土していない。

SA-16

L区の西側で検出された。方位はN-82°-Eである。6間で長さ8.5mを検出しているが、さらにトレンチ外に続くものと考えられる。柱間は1～1.8mで、柱穴の規模は15～29cm、深さは10～21cmを測る。SP-2348には柱根が残存していた。遺物は土師器皿、須恵器の小片が出土している。



第40図 SR-01平面、土層断面図

SA-17

L区の西側、SB-14の南側で検出された。方位はN-87°-Eで、SB-14の方向と一致する。2間の長さ4.3mを検出しているが、さらにトレンチ外に続くものと考えられる。柱間は2.1~2.2mで、柱穴の規模は31~46cm、深さは28~35cmを測る。遺物は土師器片が出土している。

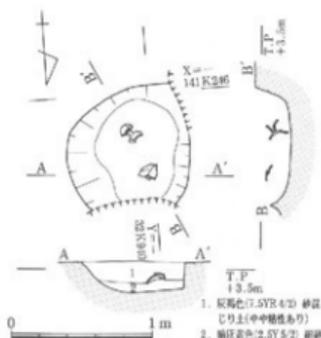
4. 第3遺構面(付図4)

土坑、自然河川などが検出されているが、その数は少ない。古墳時代前期の遺構面と考えられるが、水田面は確認することはできなかった。検出面は東側でT.P.+3.7m、西側でT.P.+3.5mを測る。

土坑

SK-80(第41図)

L-3区で検出された。北側と東側を攪乱によって切られており、平面形は推定で0.9×1mの長円形を呈しており、深さは0.2mを測る。断面形は楕円状で、埋土は上層から灰褐色砂混じり土、暗灰色細砂の2層が堆積している。遺物は古墳時代前期に属する土師器高杯が出土した。



第41図 SK-80平面、立面、土層断面図

02が流れていたと考えられ、川に関連するものと想像される。出土遺物は少なく、古墳時代前期の土師器の破片が出土している。

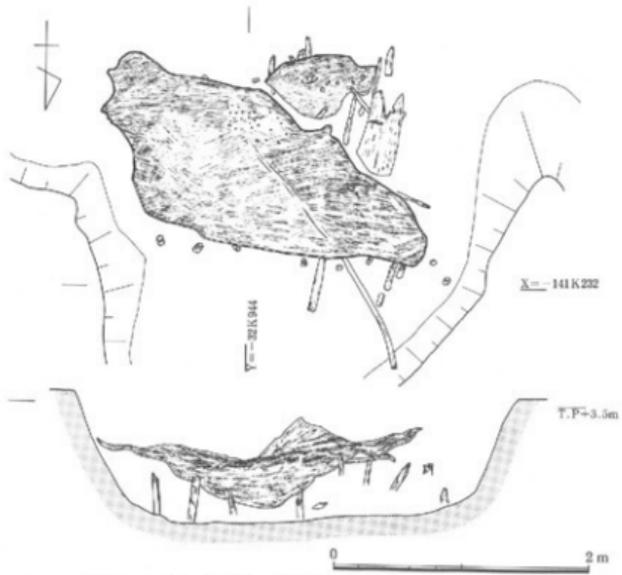
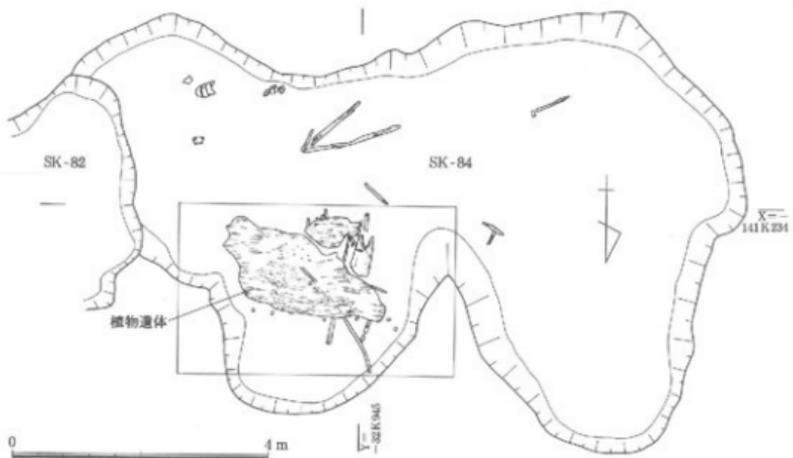
自然河川・流路

SR-02(第43図)

L-5・6・10・11区で検出された。北東から南西方向に走り、幅2.5~3.8m、深さは

SK-84(第42図)

L-9・10区で検出された。東側をSK-82に切られており、平面形は7×10mの不定形を呈しており、深さは0.4mを測る。埋土はシルトや微砂、細砂などが堆積しており、堆積状況は自然河川の埋土に近い。掘り形内の東側で蕨状の植物遺体が検出された。厚みは約0.5~1cm程で、その周囲と下には杭が打ち込まれており、人為的に造られた何らかの施設であり、その用途を明確にし得ないが、すぐ西側をSR-



第42図 SK-84平面、立面図(拡大)

0.1~0.7mを測る。上面で検出したS R-01と同一の流路であり、幅は広がっている。遺物は古墳時代前期の土師器を中心に出土しており、北東端の底の浅い地点から手焙り形土器がほぼ1個体分破砕された状態で出土しているほか、敲き石、凹石がセットで出土している。掘り形内の東側壁には所々に枕列が見られ、人為的に護岸が為されているようである。

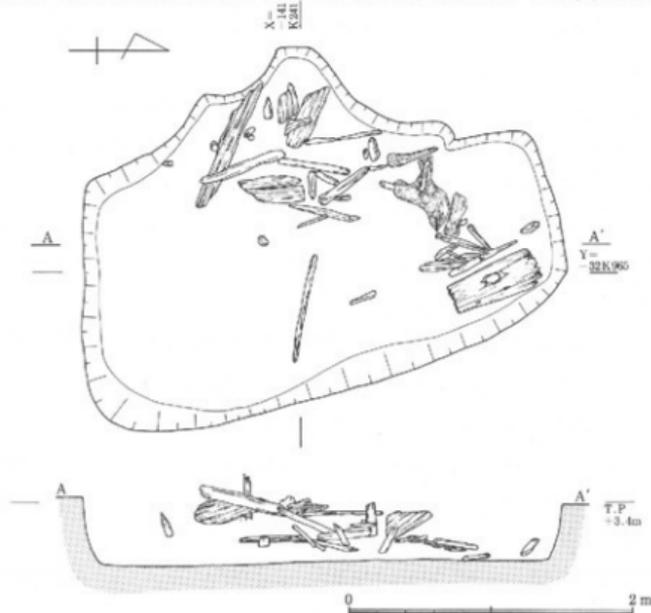
堰・柵

S J-01 (第44図)

L-5区で検出された。平面形は2.5×3.5mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。掘り形内には杭が打ち込まれ、板材や棒などの木製遺物が散在した状態で検出されているが、大半が自然木である。なかには一部に人為的に加工が施されているものも認められるが、用途は不明である。人為的に何らかの施設が築かれていたと考えられるが、不明である。土器は出土しなかった。時期はS R-02と同様に古墳時代前期頃と考えている。

5. 第4遺構面 (付図5)

トレンチの東側で蛇行しながら南へ続く畦状の高まりを検出されたが、K区の項でも述べたように自然河川であり、K区から続いていると考えられるS R-11が検出された。



第44図 S J-01平面、立面図

第3節 M・N区の遺構

M区は第Ⅲ期調査区の南側に位置しており、N区は西側に位置する。調査はM・N区を一つのトレンチとして掘削したが、N区は水路改修部分にあたり、掘削の深度はGL一約1.5mまでで、第2遺構面下層で調査を終了している。調査前の地表面の標高は、M区の東側でT.P.+4.7m、西側でT.P.+4.2mを測り、N区の北側でT.P.+5.1m、南側でT.P.+4.1mを測る。

1. 第1遺構面(付図1)

近世の水路と考えられる東西方向及び南北方向に走る溝や鋤溝、土坑などが検出された。溝は水田や畑などの区画を兼ねた灌漑用の水路で、土坑は水溜用の野井戸と考えられる。検出面はM区の東側でT.P.+4.0m、西側でT.P.+4.1mを測り、ほぼ平坦であった。

溝

SD-01

M-9区で検出された。南北方向に走り、南端はトレンチ外へ続いているものと考えられるが、北端はO区で検出されなかったため、途中で終わっているようである。幅0.9m、深さは0.2mを測る。埋土は灰色土で、遺物は染付の小片が出土している。

SD-02

M-10区で検出された。東西方向に走り、検出長6.4m、幅0.3m、深さは0.1mを測り、埋土は灰色土である。遺構検出段階では溝としたが、トレンチ全体で見られた耕作痕(鋤溝)の一つで、深度が深かったために溝のように検出されたものである。SD-02の他にSD-04・06・08~23がそれに該当し、SD-22・24・25なども幅は広いものの、複数の鋤溝が集まったものと考えられ、水路としての溝とは区別されるべきものである。

SD-03

M-2・11区で検出された。南北方向に走り、両端とも側溝に切られ、北側はトレンチ外へと続いており、L・O区でも同一遺構と考えられる溝が検出されている。南側もさらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。幅は0.8~1.6mを測るが、途中SD-05に合流する地点からその幅を半分に狭めている。埋土は灰色土及び灰色砂質土で、遺物は染付などの陶磁器類が少量出土しているだけである。

SD-05

M-11~17区で検出された。東西方向に走り、東端はSD-03に合流し西端は側溝に切られるが、トレンチの西側に続いているようである。途中の15区でSD-07が合流してい

る。幅0.4~0.8m、深さは0.3mを測り、埋土は黒灰色土で、遺物は少量の土師器皿や瓦器碗の小片が混入するが、近世の陶磁器類を中心に出土している。

SD-07

M-6・15区で検出された。南北方向に走り、北端はSD-05に合流し南端は側溝に切られるが、トレンチの南側に続いているようである。幅0.6~1.2m、深さは0.3mを測り、埋土はオリブ黒色土で、遺物は少量の土師器皿や瓦器碗の小片が混入するが、近世の陶磁器類を中心に出土している。

SD-26

N-4・5区で検出された。東西方向に走り、検出長2.6m、幅2.2m、深さ0.2mを測る。西端は舌状に終わり東側はトレンチ外へ続いているが、L区では検出されておらず途中で終わっているようで、全長は3m未満と推定される。幅広の溝で、畝状遺構と考えられる。埋土は黄灰色土が堆積しており、遺物は染付の他、瓦器碗、土師器皿などの小片が混入して出土している。

SD-26

N-5区、SD-26の北側で検出された。SD-26に平行して東西方向に走り、検出長2.7m、幅1.6m、深さ0.1mを測る。検出状況、形状、規模、埋土、出土遺物はSD-26と同様の状況を示しており、畝状遺構と考えられる。

土坑

SK-01

M-1区で検出された。平面形は径約0.8mの円形を呈しており、深さは0.8mを測る。埋土は灰黒色土で、遺物は出土しなかった。用途は不明であるが、耕作地に水を供給するために雨水などを一時的に貯めておく水溜用の野井戸と考えられる。

SK-02

M-13区で検出された。平面形は0.8×1.2mの楕円形を呈しており、深さは0.6mを測る。埋土はオリブ黒色土で、遺物は出土しなかった。水溜用の野井戸と考えられる。

SK-03

M-6区で検出された。平面形は0.6×1mの隅丸長方形を呈しており、深さは0.5mを測る。埋土は灰黒色土で、遺物は出土しなかった。水溜用の野井戸と考えられる。

SK-04

M-15区で検出された。平面形は0.6×1.5mの楕円形を呈しており、深さは0.5mを測

る。埋土は灰黒色土で、遺物は出土しなかった。水溜用の野井戸と考えられる。

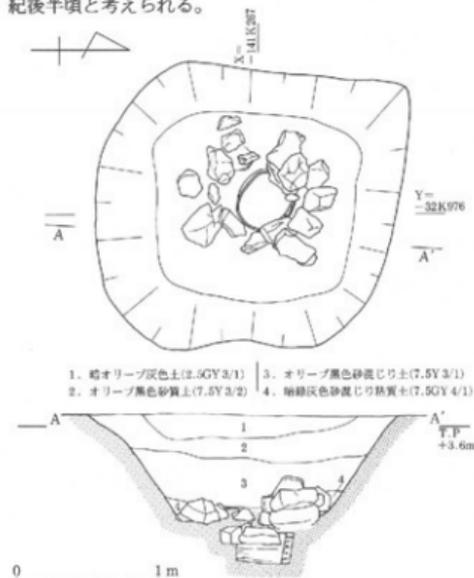
2. 第2遺構面上層 (第46図、付図2)

M区の西側、N区の全域で中世の溝、井戸、土坑、ピットなどが検出され、M区の東側では遺構は検出されておらず跡跡が見られる程度であった。ピットは多数検出されており、建物、櫓が復原できた。検出面はM区の東側でT.P.+3.8m、西側でT.P.+3.7mを測り、N区の北側でT.P.+4.1m、南側でT.P.+3.7mを測る。

井戸

SE-03 (第45図)

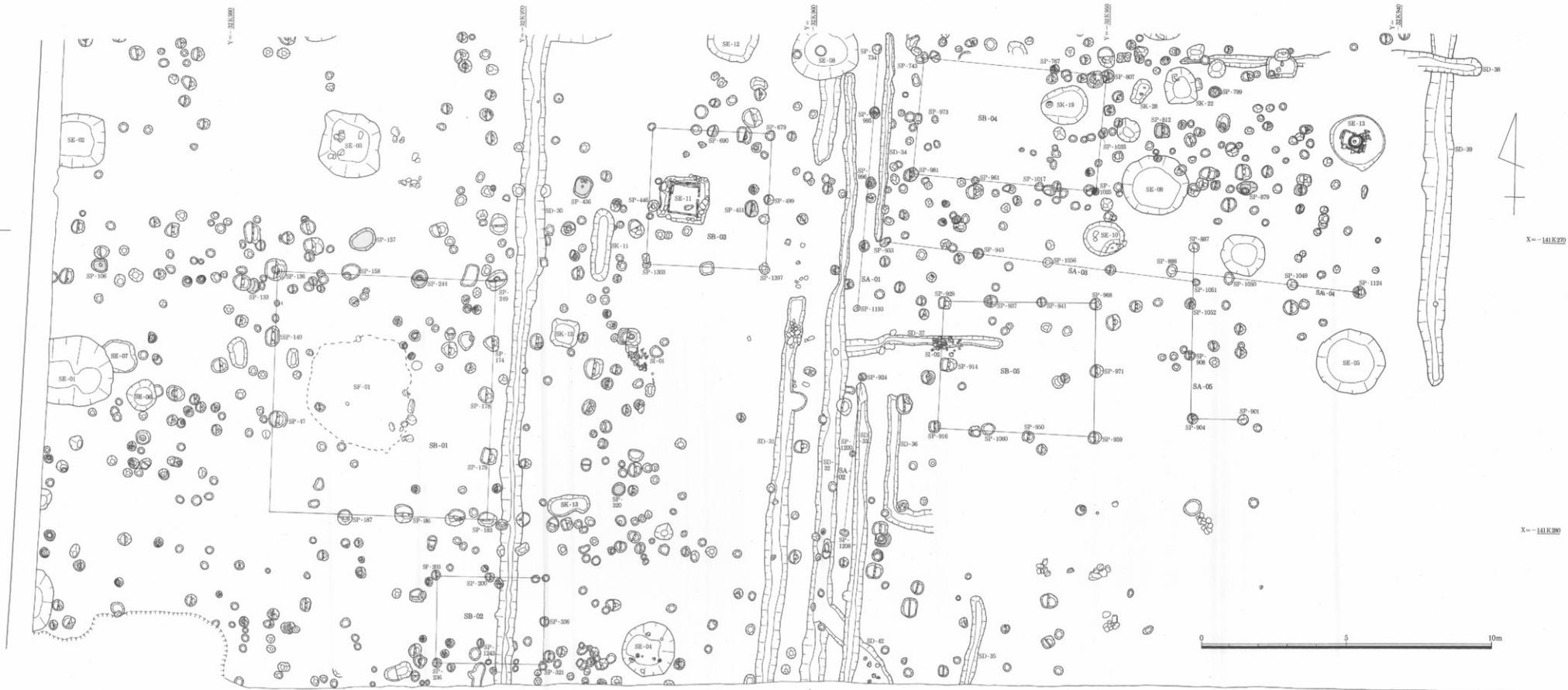
M-17区で検出された。平面形は2.1×2.2mの隅丸方形を呈しており、深さは0.9mを測る。断面形は楕円状で、底面はほぼ平坦である。掘り形の中央に水溜用の曲物が底面からさらに掘り下げて1段置かれており、その上部には曲物が隠れないように花崗岩の割り石が曲物の周囲を取り囲んでいた。石は井戸側に使用されたものと考えられ、元々は石積み検出面まで存在していたと推定され、井戸廃絶時に上部にあった石を抜き取り、埋め戻されたものと考えられる。遺物は瓦器碗、土師器皿の小片が出土しており、時期は13世紀後半頃と考えられる。



第45図 SE-03平面、立面、土層断面図

SE-04 (第47図)

M-6・7区で検出された。平面形は径約1.8mの円形を呈しており、深さは1.8mを測る。断面形を見ると、上段は検出面から垂直に近い傾斜で掘り込まれており、下段は掘り形が一辺約1.2mの隅丸方形となり、そこから底面まで、西壁以外の壁は垂直に掘り込まれている。上段と下段の境はテラス状を呈している。四隅に隅柱を立て、横棧と縦板を使用した方形の井戸側であるが、検出時は南側と西側の縦板が、土圧により傾いた



第46図 M区西側及びN区第2遺構面上層平面図

※ スクリーントーンは柱根、礎石、礎板、土器埋納を伴うピット

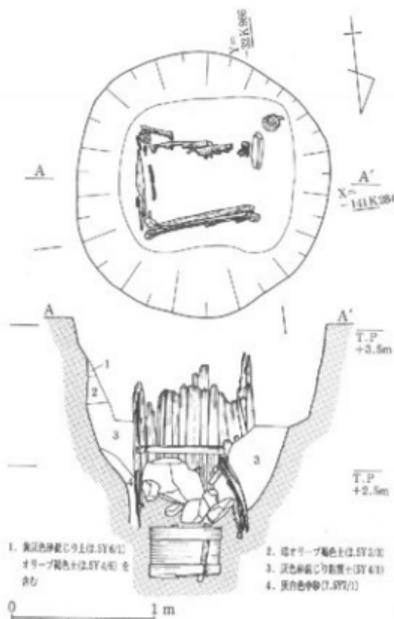
X=141.820

X=141.820

状態であった。井戸側の底には水溜用の曲物が1段置かれており、曲物の上部は井戸の廃絶時に入れられたと推定される花崗岩の割り石で塞がれていた。遺物は土師器皿、瓦器碗、常滑甕、砥石などが出土しており、土師器皿は11世紀前半の時期を示し、瓦器碗は13世紀初の時期を示している。出土遺物の年代幅が広いが、井戸の廃絶時期を13世紀初～前半頃と考えている。

SE-06 (第48図)

N-1区で検出された。SE-01・07のすぐ東側で検出されており、3個の井戸が集中して存在している。平面形は1.1×1.4mのやや隅丸方形に近い不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は挿鉢状で底面は平坦である。掘り

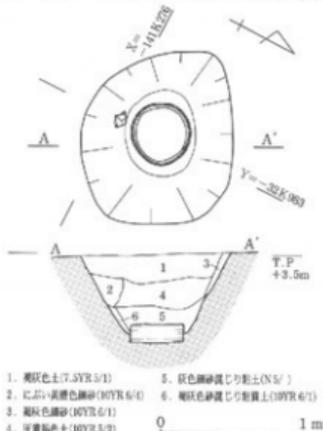


第47図 SE-04平面、立面、土層断面図

形の底には水溜用の曲物が1段置かれてあった。遺物は瓦器碗、土師器皿などの小片が出土しており、時期は明確にし得ないが、13世紀代と考えられる。

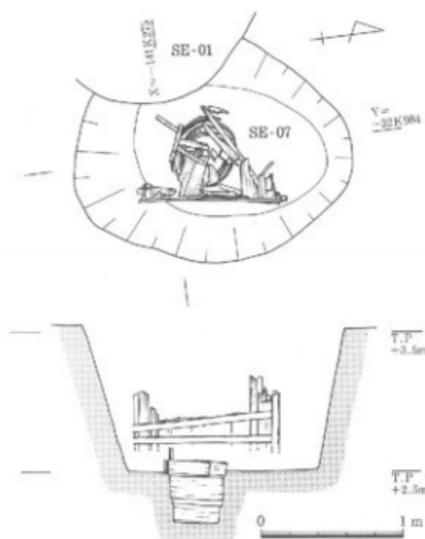
SE-07 (第49図)

N-1区で検出された。SE-01東側で検出されており、切られている。平面形は1.7×2mの不定形を呈しており、深さ1.4mを測る。断面形は逆台形で、底面は平坦である。底面からさらに掘り下げた所で水溜用の曲物が3段重ねて置かれてあった。井戸側は隅柱を立て、横棧と縦板で方形に囲んでいたようであるが、遺

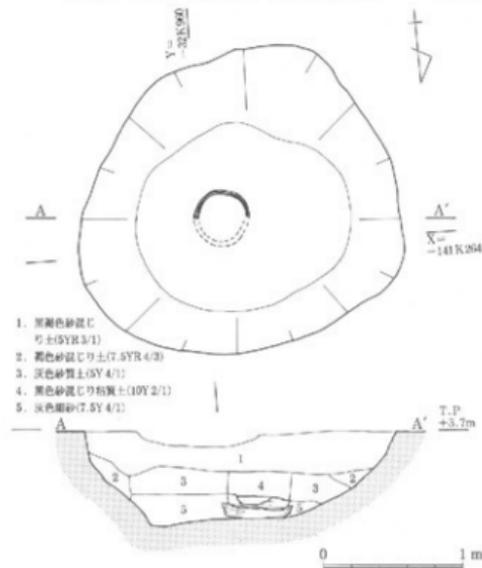


第48図 SE-06平面、立面、土層断面図

存していたのは東側部分だけであった。遺物は瓦器碗、土師器皿、常滑甕などが出土して



第49図 SE-07平面、立面、断面図



1. 黒褐色砂混じり土(5YR3/1)
2. 褐色砂混じり土(7.5YR4/3)
3. 灰色砂質土(5Y4/1)
4. 黒色砂混じり粘質土(10Y2/1)
5. 灰色層砂(7.5Y4/2)

第50図 SE-08平面、土層断面図

いるが、出土量も少なく、破片ばかりで凶化し得たものはない。時期は特定し難いがSE-01との切り合い関係から13世紀初頭～前半頃と考えている。SE-08(第50図)

M-15区で検出された。平面形は2.2×2.3mの不整形円形を呈しており、深さは0.7mを測る。断面形は楯鉢状で、底面はほぼ平坦である。水溜用の曲物が底面の中央やや東寄りに置かれていたが、遺存状況は悪く曲物の上部は既に破損していた。土層断面を見ると、井戸廃絶時に埋め戻す前に曲物を抜き取った跡があり、少なくとも2段以上の曲物が上に重ねられていたと推定される。

遺物は完形に近い瓦器碗や、土師器皿、青磁などの破片が出土しており、瓦器碗には古い形態の特徴が見られるので、時期は11世紀末～12世紀前半頃と考えられる。

SE-09(第51図)

M-14区で検出された。北側はSP-1040・1041の2個のピットに切られているが、平面形は2×2.2mの長円形を呈しており、深さは0.7mを測る。断面形は楯鉢状で、底面はほぼ平坦である。水溜用の曲物が3段置かれていたが、掘り形の南壁に

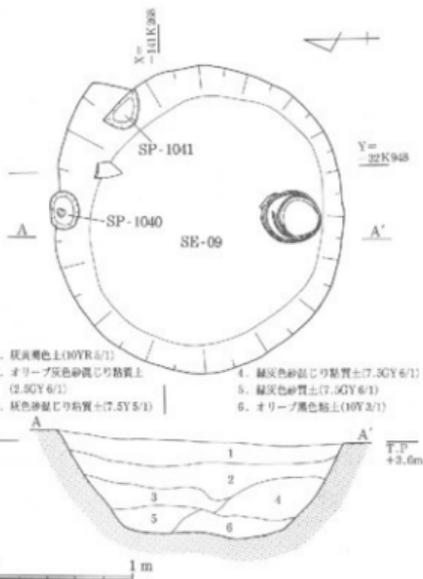
寄せられており、井戸廃絶時の埋め戻しの際に移動されたものと推定される。検出時は素掘りの状態であったが、掘り形が大きいので井戸側などの上部施設が存在した可能性も考えられる。遺物は瓦器碗、土師器皿、常滑甕と混入品と考えられる須恵器杯身が出土しており、時期は12世紀後半～13世紀初め頃と考えられる。

SE-10 (土坑) (第52図)

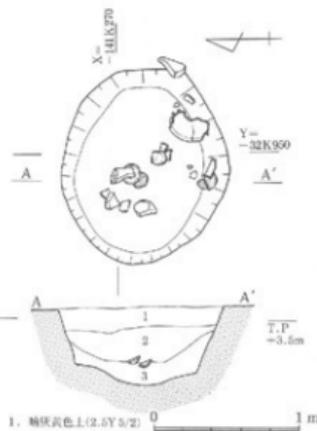
M-14区で検出された。平面形は1.2×1.4mの長円形を呈しており、深さは0.6mを測る。埋土は3層に分かれており、上層、中層は炭化物を含み、黄褐色土、明緑灰色土のブロックが混ざるので人為的に埋め戻された土で、下層は灰色粘質土で、底面近くに細砂が堆積している。遺物の出土状況を見ると、底面付近に瓦器碗と白磁碗が重なり合い、白磁碗の上に砥石が置いてあった他、上層の掘り形の南東寄りから、土師器脚付き鍋、瓦器碗、瓦器足釜などが出土している。遺構検出時では井戸としていたが、井戸と決定づけるようなものは検出されず、土坑と考えた方が良さそうである。時期は12世紀初頭～13世紀初頭頃と考えられる。

SE-11 (第53図)

M-15区で検出された。平面形は一辺が約1.7mのほぼ方形を呈しており、深さは1.4mを測る。掘り形の壁は検出面から約1.2m程度まで斜めに



第51図 SE-09平面、土層断面図



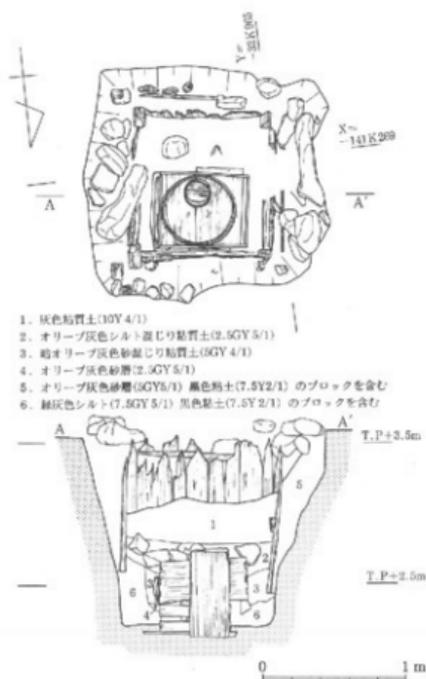
第52図 SE-10平面、土層断面図

掘り込まれており、そこから底面まではほぼ垂直に下がり、底面は平坦である。方形の井戸側とその内部の底には水溜用の曲物が置かれていた。井戸側は四隅に角材で隅柱を立て、それに穴を切り横棧を組んでおり、縦板を立て並べて囲んでいる。南側、西側では、さらにその外側に縦板を充てて、補強している部分も見られる。底面には水溜用の曲物が置かれており、底板として板材が2枚合わせて敷かれていた。曲物内には小型の曲物容器が入っており、水汲み用として使用されていたものであろう。曲物上部の外側には、土圧から曲物を保護するため箱枠をかぶせ、箱枠を支えるように北側と南側に縦板を当ている。検出面では割り石が井戸側を囲むようにして残っており、上部施設として石積みによる井桁が存在していたと推定される。井戸側内の埋土は灰色粘質土の1層で、井戸廃絶時の埋め戻しの土である。また、井戸側の外側を囲むようにして、隅柱を立て縦板を立てた別の井戸側が存在していたようであるが、残念ながら調査時にはそのような問題意識はなく、土

層断面でも確認することはできなかった。しかしながら、井戸側は1度作り換えられてると考えられ、最初に作られた井戸側の内側に、2度目の井戸側が作られていたようである。遺物は土師器壺、須恵器壺、須恵器甕、緑釉陶器、黒色土器A類・B類碗、土師器皿、土師器碗など出土しているが、掘り形内、井戸側内の遺物とも10世紀末～11世紀初頃の時期を示している。黒色土器A類碗の底部外面に「廣正？」の墨書がされていた。

SE-12 (第54図)

M-15区で、SE-08の西側で検出された。平面形は1.9×2.4mの不定形を呈しており、深さは0.8mを測る。断面形は錐鉢状で、底面はほぼ平坦であるが、底面検出時に掘り



1. 灰色粘質土(10Y 4/1)
2. オリーブ灰色シルト混じり粘質土(2.5GY 5/1)
3. 暗オリーブ灰色砂混じり粘質土(5GY 4/1)
4. オリーブ灰色砂層(2.5GY 5/1)
5. オリーブ灰色砂層(5GY 5/1) 黒色粘土(7.5Y 2/1) のブロックを含む
6. 緑灰色シルト(7.5GY 5/1) 黒色粘土(7.5Y 2/1) のブロックを含む

第53図 SE-11平面、立面、土層断面図

下げ過ぎてしまったようで、実際の底面は土層断面図のオリブ灰色砂層の上面であったと考えられる。井戸であったことを示すような施設は検出されなかったが、板材や木片などが残っており、また底面の中央部が窪んでいるのは、水溜用の曲物が置かれていたためと推定されるので、井戸の抜き取り跡と考えられる。遺物は瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、土師器高台付皿、白磁片などが出土しており、井戸の廃絶時期は12世紀末～13世紀初頃と考えられる。

SE-13 (第55図)

M-13区で検出された。平面形は上部を攪乱によって削平されていたため不明であるが、推定で径約1.8～2mの円形を呈していたと考えられ、深さは約1.2mを測る。掘り形は3段掘りになっており、上段は挿鉢状に検出面から斜めに掘り込まれており、中断は袋状に壁を扶けるように掘られ、下段は曲物が入る程度の穴を垂直に掘り込んでいる。隅柱と縦板を使用した方形の井戸側であるが、上部は朽ちており、横棧はなかった。水溜用の曲物は4～5段で構成されており、井戸側の縦板と曲物の間には石が充填されていたようで、割り石が数個残存していた。遺物は曲物内底部で完形の土師器皿が出土している。時期は11世紀中頃～後半頃と考えられる。



- 1. 暗灰黄色砂質土(2.5Y 5/2)
- 2. 黄褐色砂質じり土(2.5Y 5/3)
- 3. 黄褐色砂質じり粘質土(2.5Y 5/1)
- 4. オリブ灰色砂質土(2.5GY 5/1)
- 5. 黄褐色砂質土(2.5Y 5/1)
- 6. オリブ灰色砂質土(5GY 5/1)
- 7. オリブ灰色砂層(2.5GY 6/1)

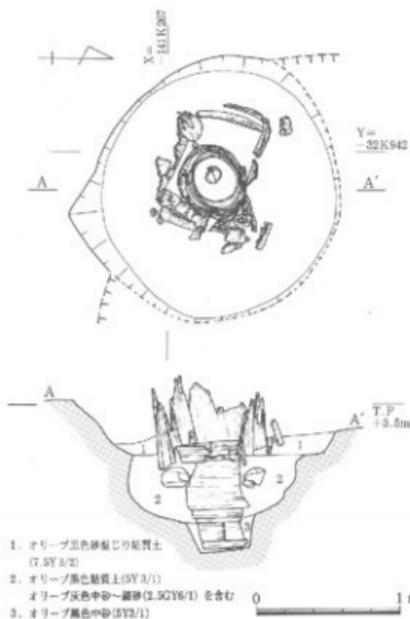
第54図 SE-12平面、土層断面図

土している。時期は11世紀中頃～後半頃と考えられる。

土坑

SK-06 (井戸) (第56図)

M-17区で検出された。北側の一部分をSD-29と重複するが、前後関係は明確にし得なかった。平面形は2×2.5mの不定形を呈しており、深さは1.3mを測る。南側の壁は検出面から斜めに掘り込まれ、北側は垂直に掘り込まれている。遺構検出時は土坑と考えていたが、掘り形内で常滑甕の上半部とその下から水溜用の曲物が検出されたため、井戸で



1. オリーブ灰色硬質じり粘質土 (7.5Y 3/2)
2. オリーブ灰色粘質土 (5Y 3/1)
オリーブ灰色中砂～細砂 (2.50Y8/1) を含む
3. オリーブ灰色中砂 (5Y3/1)

第55図 SE-13平面、立面、土層断面図

大きい曲物があり、これが井筒の最上部になっている。また、その曲物を囲むように、周囲に割り石が残っていたので、検出面まで石積みによる井戸側が存在していた可能性も考えられる。遺物は前述の平瓦、常滑甕の他に、東播系須恵器片口鉢、瓦器鍋、土師器皿、鉄釘などが出土している。この中で注目されるのは、最下部の曲物を囲んでいた平瓦の1枚に「東大寺」の刻印が施されていたことである。この瓦は平安末から鎌倉時代初頃にかけて、東大寺再建のため岡山県瀬戸町にある万富瓦窯で焼かれたものであることはほぼ確実であり、12世紀末～13世紀初頃のものである。他の2枚の瓦も刻印はないものの、タタキメの文様の特徴から同窯産と推定され、どの時期で井戸に使用されたかは明確ではないが、土器の時期は13世紀前半頃を示している。

S K-08 (第57図)

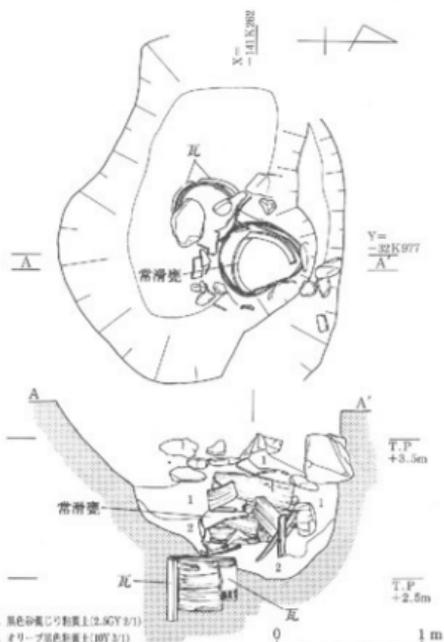
M-16区で検出された。平面形は1.5×1.8mの不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は錐鉢状で、埋土は中央が窪むレンズ状の堆積をしており、底部には灰色砂層の地積が認められた。遺物は瓦器足釜、土師器皿、土師器高台付き皿などが出土している。

あることが判明した。井戸の構造は、底面からさらに掘り下げた最下部に水溜用の曲物を置いていた。曲物の外側には土圧による曲物の変形を防ぐためか、3枚の平瓦を密着させた状態で曲物を囲んでいたが、平瓦はその内1枚が完形で、3枚の瓦でできる円弧と曲物の円弧はよく符合していた。曲物の上には底部を欠く常滑大甕が載せられていたが、崩壊して北東へずれた状態で検出された。甕内部にも曲物があり、その径は下の曲物のそれとほぼ一致するので、元々真上に載っていたものが、井戸廃絶時の埋め戻しの際に移動したと考えられる。さらに甕の上部には、甕の口縁部を取り巻くように径の大きい曲物があり、これが井筒の最上部になっている。また、その曲物を囲むように、周囲に割り石が残っていたので、検出面まで石積みによる井戸側が存在していた可能性も考えられる。さらに甕の上部には、

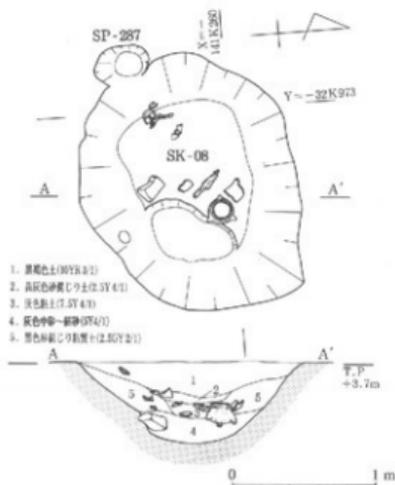
時期は13世紀中頃～後半頃と考えられる。

S K-09 (第58図)

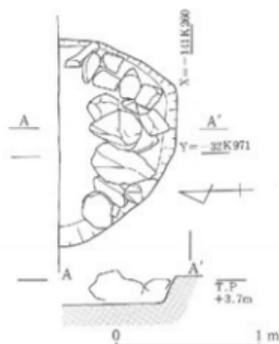
M-16区で、S K-08の北東に接して検出された。北側を側溝により切られているため半円形で検出されているが、平面形は推定で径約1.4mのほぼ円形を呈しているものと考えられる。深さは0.2mと浅く、掘り形内で花崗岩の割り石がほとんど隙間なく置かれた状態で検出された。石を除去して底面を調べたが、何も検出されなかった。遺物は瓦器碗や土師器皿の小片が出土しているが、時期は特定し難い。



第56図 S K-06平面、立面、土層断面図



第57図 S K-08平面、立面、土層断面図



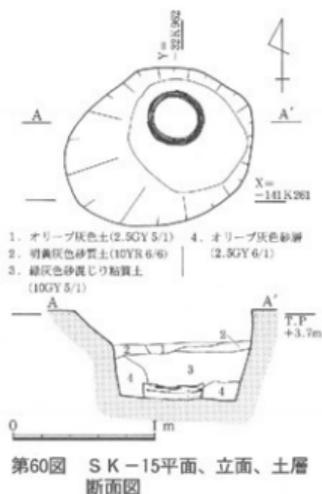
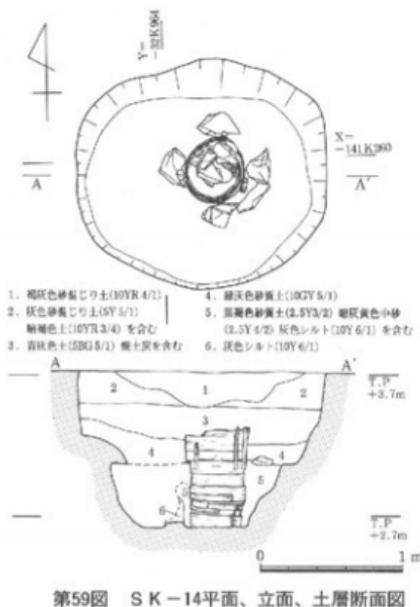
第58図 S K-09平面、断面図

SK-14 (井戸) (第59図)

M-15区で検出された。北側を側溝に切られており、平面形は推定で1.7×1.8mのほぼ円形を呈しており、深さは1.1mを測る。壁は検出面から約0.6m程までは垂直に、そこから底面までは斜めに掘り込まれている。底面はほぼ平坦で、中央に水溜用の曲物が5段置かれてあった。最上段の曲物の周りには杭を打ち込み、曲物を固定していたようである。また、割り石が囲んでおり、石積みの井戸側が存在した可能性がある。埋土はおよそ5層に分かれており、褐色砂混じり土、暗褐色土の混じる灰色砂混じり土、焼土や炭化物の混じる青灰色土が堆積しており、井戸廃絶時に人為的に埋め戻された土であり、下層の曲物の掘り込まれている砂質土は、湧水層と考えられる。遺物は瓦器鉢、土師器皿、瓦器釜などが出土しており、時期は12世紀末～13世紀前半頃と考えられる。

SK-15 (井戸) (第60図)

M-15区で検出された。平面形は0.9×1mの楕円形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形を見ると東壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれるが、西壁は検出面から約0.2m程まで斜めに掘り込まれた後、底面まで垂直に下がる。底面はほぼ平坦である。掘り形の北寄りの底面に、水溜用の曲物が2段



置かれてあったので井戸と考えられる。遺物は少量の瓦器碗、土師器皿が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

SK-21 (井戸) (第61図)

M-14区で検出された。平面形は1.7×1.8mの不整形形を呈しており、深さは1.3mを測る。断面形は掘鉢状を呈し、底面の南寄りに、水溜用の曲物が5～6段置かれていたので井戸と考えられる。検出面から曲物の約上半部まで黄褐色粘質土、緑灰色砂混じり粘質土のブロックが混入する灰褐色土、灰色粘質土、オリーブ黒色砂混じり粘質土の3層が水平に堆積しており、井戸廃絶時の埋め戻しの土と考えられる。

曲物内上部には土師器皿10数枚がまともに出土しており、井戸廃絶時に人為的に埋納されたものと考えられる。遺物は他に瓦器碗が出土しており、時期は13世紀前半～後半頃と考えられる。

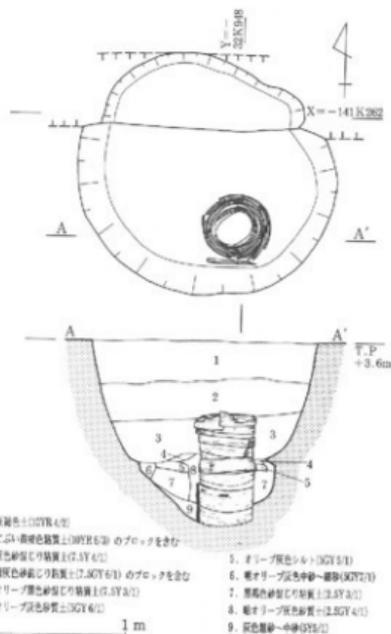
SK-22

M-14区で検出された。平面形は1×1.3mの隅丸方形を呈しており、深さは0.6mを測る。断面形は掘鉢状で、底面はほぼ平坦である。埋土は灰色土、オリーブ灰色砂混じり粘質土が堆積している。検出面から約0.3mの深さ北壁寄りの所で、

土師器皿、瓦器足釜の破片がまともに出土している。時期は13世紀前半頃と考えられる。

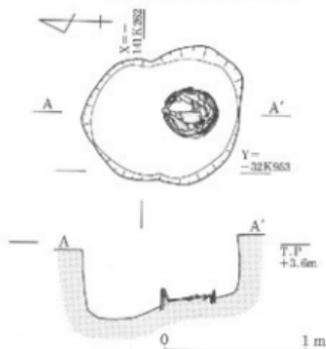
SK-25 (井戸) (第62図)

M-14区で検出された。平面形は1×1.1mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。



1. 黄褐色土(SGYR42)
2. 灰褐色粘質土(SGYR52) のブロックを含む
緑灰色砂混じり粘質土(SY42)
3. オリーブ黒色砂混じり粘質土(SGYR51) のブロックを含む
緑灰色砂混じり粘質土(SY42)
4. オリーブ灰色粘質土(SGY42)
5. オリーブ灰色土(SGY51)
6. 黒オリーブ灰色中砂混雑土(SY72)
7. 黒褐色砂混じり粘質土(SY42)
8. 黒オリーブ灰色粘質土(SGY42)
9. 灰色粘質土(SY42)

第61図 SK-21平面、立面、土層断面図

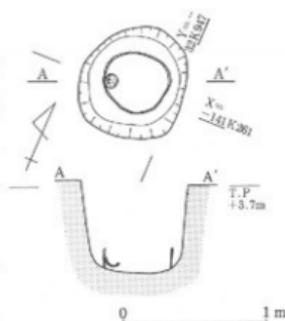


第62図 SK-25平面、断面図

壁は検出面から垂直に掘り込まれており、底面は北側でやや深くなっている。底面の南寄りでは水溜用の曲物が1段置かれており、井戸と考えられる。曲物内は灰色粘土が堆積し、上部から曲物の破片や割り石が検出された。瓦器碗、土師器皿などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

S K-27 (井戸) (第63図)

M-14区で検出された。平面形は0.7×0.8mの不定形を呈しており、深さは0.7mを測る。掘り形の壁は検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。底面には水溜用の曲物が1段置かれており、井戸と考えられる。曲物内からは瓦器碗が完形で出土している他、土師器皿、瓦器釜片が出土しており、時期は13世紀中～後半頃と考えられる。



第63図 S K-27平面、断面図

溝

S D-42 (第64図)

M-6区で検出された。北西から南東方向に走り、南東側は側溝に切れ、中央をS D-33に切られている。南東端はさらにトレンチ外へ続いているものと考えられるが、北西端はS D-32に切られて終わっている。幅は約1.3mで、深さは0.1~0.2mを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿が点在して出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

焼土坑

S F-01 (第65図)

M-7・8区で検出された。平面形は3.6×4mの不定形を呈しており、深さは0.3~0.4mを測る。断面形は掘鉢状で底面は平坦である。埋土には暗赤褐色やにぶい黄褐色を呈する焼土のブロックと炭化物が含まれており、特に土坑内の西北側に多く見られた。また、東側には花崗岩の割り石がかたまって検出されている。遺物は土師器、黒色土器A類杯などの小片が出土している。



第64図 S D-42平面図

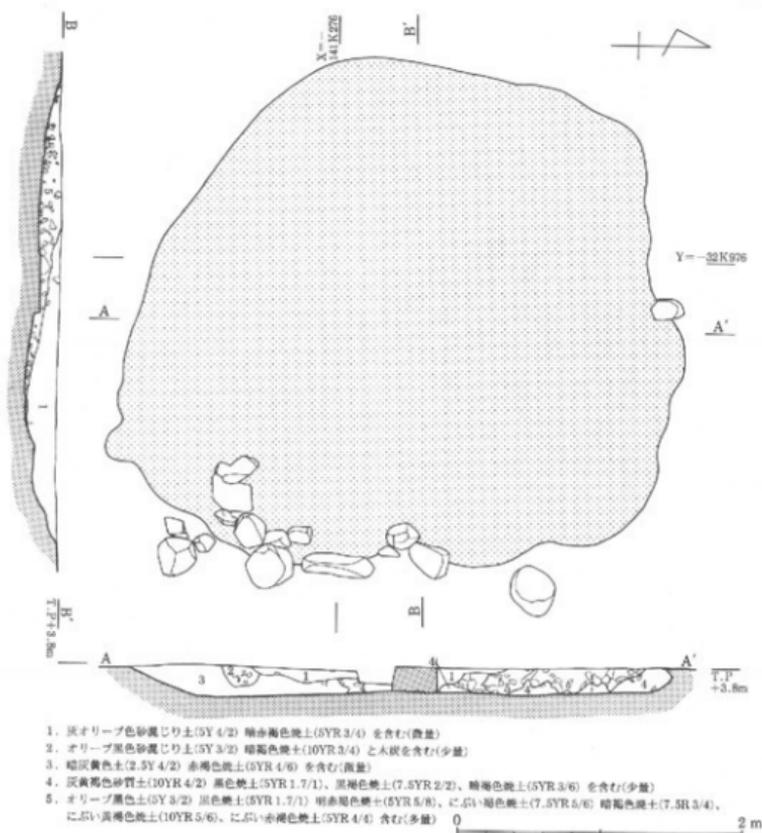
土器集積・土器群

S I-01 (第66図)

M-7区で検出された。約0.8×1mの範囲で、遺構の掘り形を伴わずに割り石と土器が集積していた。その内容は黒色土器A・B類、瓦器椀、土師器皿、土師器釜、土師器鍋などで、10世紀末～11世紀前半頃の時期を示している。

S I-02 (第67図)

M-6区で検出された。遺構の掘り形を伴わずに割り石の集積と伴に土器が出土している。その内容は瓦器椀、土師器皿、瓦器足釜などで、時期は12世紀後半頃と考えられる。



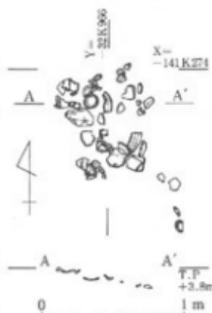
第65図 SF-01平面、土層断面図

建物・柵列（第45図、付図2）

多数のピットの中から建物5棟、柵9列、が復原された。さらに多くの建物、柵の存在が考えられるが、復原は困難であった。

SB-01

M区の西側で検出された。竃土坑SF-01と重複しており、その前後関係は明らかではないが、SF-01を囲むようにしているので、同時期に存在し、関連するものと考えられる。規模は東西3間（7.6m）×南北4間（8.4m）で、主軸はN-2°-Eを示す。柱間は東西が2.1~2.9m、南北が1.8~2.9mと一定せず、西側の東西列は3間のようなものである。柱穴の規模は50~70cm、深さ22~54cmを測る。遺物は黒色土器A類、緑軸陶器、須恵器、土師器などの小片が出土している。

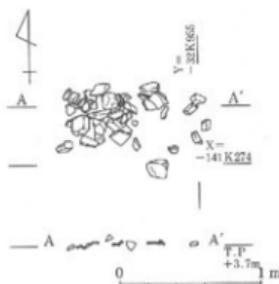


第66図 S I-01平面、断面図

SB-02

SB-01の南側で検出された。規模は東西2間（3.8m）×南北2間（3m）で、主軸はN-90°-Eである。

柱間は南北が1.9m、東西が2mのほぼ等間隔であるが、西側の南北列は1間の検出である。柱穴の規模は19~33cm、深さ6~37cmを測る。遺物は瓦器碗、黒色土器A類、須恵器、土師器などの小片が出土している。



第67図 S I-02平面、断面図

SB-03

M区の中央やや西寄りで検出された。SE-11と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西2間（3.9m）×南北2間（4.6m）で、主軸はN-3°-Eである。柱間は東西が1.9~2mのほぼ等間隔であるが、南北は1.9~2.4mで一定していない。柱穴の規模は24~38cm、深さ4~31cmを測る。遺物は黒色土器A類、須恵器、土師器などの小片が出土している。

SB-04

M区の中央やや西寄りで検出された。攪乱の影響を受けて北側の東西列の柱穴を検出していないが、南北列と南側の東西列との組合せから、推定で東西3間（6.3m）×南北2間（3.9m）の建物と考えた。主軸はN-85°-Wである。柱間は南北が1.9mのほぼ等間

隔であるが、東西は1.9～2.2mで一定していない。柱穴の規模は22～55cm、深さ15～34cmを測り、SP-767・807・981・1025には柱根が残存していた。SK-19と重複するが、前後関係は明らかではない。遺物は瓦器碗、土師器皿、黒色土器A類などの小片が出土している。

SB-05

M区の中央やや西寄りで検出された。SD-37と重複するが、前後関係は明らかではない。規模は東西3間(5.2m)×南北2間(4.7m)で、主軸はN-88°-Wである。柱間は1.5～2.3mで、柱穴の規模は34～52cm、深さ4～36cmを測る。SK-19と重複するが、前後関係は明らかではない。遺物は瓦器碗、土師器皿、土師器釜、東播系須恵器片口鉢、黒色土器B類、白磁などの小片が出土している。

SA-01

SB-04の西側で検出された。方位はN-3°-E、4間で、SB-03・04の主軸の方向と一致する。長さ8.9m、柱間は2.2～2.4mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は20～37cm、深さ6～37cmを測る。SP-995・996には礎石が使用されていた。遺物は瓦器碗、土師器皿の小片が出土している。

SA-02

SB-05の西側で検出された。方位はN-3°-E、2間で長さ5.5m、柱間は2.7～2.8mのほぼ等間隔である。柱穴の規模は20～30cm、深さ12～20cmを測る。遺物は出土していない。

SA-03

SB-04とSB-05の間で検出された。方位はN-83°-W、4間で長さ10.8m、柱間は1.9～3.2mと間隔が一定ではない。柱穴の規模は22～36cm、深さ3～29cmを測る。SP-943に礎石が使用されていた。遺物は瓦器碗、土師器皿が出土している。

SA-04

SA-03の東側で検出された。方位はN-84°-E、3間で長さ6.4m、柱間は2～2.2mで一定ではない。柱穴の規模は32～45cm、深さ24～36cmを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿、黒色土器A類、須恵器の小片が出土している。

SA-05

SB-05の東側で検出された。南北3間(4.9m)、東西1間(1.8m)のL字状に柱穴が並ぶ。方位は東西南北の方向に一致し、柱間は1.8～2.2mである。柱穴の規模は34～35

cm、深さ11～31cmを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿、須恵器の小片が出土している。

S A-06

N区の中央やや南寄りで検出された。検出状況からトレンチの東側、西側に続いているものと考えられる。方位はN-82°-E、4間で長さ3.9m、柱間は短い0.9～1mで等間隔である。柱穴の規模は30～34cm、深さ4～27cmを測る。遺物は瓦器碗、土師器皿、黒色土器A・B類、須恵器の小片が出土している。

S A-07 (第28図)

N区の中央やや南寄りで検出された。方位はN-4°-E、5間で長さ11.2m、柱間は1.9～2.4mである。柱穴の規模は23～45cm、深さ8～43cmを測る。遺物は土師器皿、土師器釜、緑釉陶器、東播系須恵器鉢の小片が出土している。

S A-08 (第28図)

N区の中央やや北寄りで検出された。方位はN-83°-W、東側のL区で検出された柱穴を含めて、3間で長さ5.1m、柱間は1.7～2.6mである。柱穴の規模は31～45cm、深さ5～45cmを測る。遺物は瓦器碗の小片が出土している。

S A-09 (第7図)

N区の北端で検出された。方位はN-49°-E、2間で長さ3.4m、柱間は1.7mであるが、トレンチ外へ続くものと推定され、2間以上の規模を持つと考えられる。柱穴の規模は41～50cm、深さ27～38cmを測る。遺物はいずれの柱穴からも古墳時代前期の土師器甕、高杯が出土しており、中世の遺物がまったく含まれていないので、古墳時代前期の遺構と考えられる。

3. 第2遺構面下層(付図3)

M・N区で中世の溝、井戸、土坑、ピット、落ち込み、水路などが検出された。M区では西側に遺構が集中している。検出面はM区の東側でT.P.+3.8m、西側でT.P.+3.7mを測り、N区の北側でT.P.+3.9m、南側でT.P.+3.7mを測る。

落ち込み・池

ST-01

M-4～6区で検出された。南側を側溝に切られるがトレンチ外に続いており、検出規模は約10×16.7mで、深さは0.8mを測る。埋土は上層に黒色砂混じり粘質土や黒色砂混じり粘質土が見られるが、下層は完全な粘土が堆積しているので、ST-01は常時水が停滞した状態で存在したと推定され、池のような遺構と考えられる。遺物は廃棄されたものと考えられ、瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、須恵器、鬼瓦など、この時期のほとんどの種類のもので大量に出土しており、土器類の他に木製品も多く出土している。遺物が示す時期は、11世紀末～13世紀後半頃と年代幅があり、これがST-01の存続した期間と考えている。

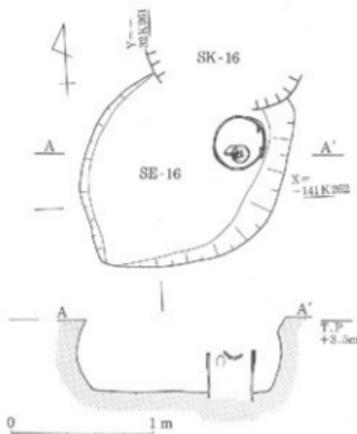
井戸

SE-14

M-6区で検出された。平面形は径約1.5mのほぼ円形を呈しており、深さは0.8mを測る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。素掘りで、井戸側や水溜用の曲物などが検出されていないので、井戸と断定し難いが、井戸の抜き取り跡と考えている。遺物は小片ばかりで、また出土量も少ないため時期は特定できない。

SE-16 (第68図)

M-15区で検出された。北側でSK-16と重複するが、前後関係は明らかではない。平面形は1.4×2.4mの不定形を呈しており、深さは0.6mを測る。壁は検出面から抉るように掘り込まれており、底面は平坦である。掘り形の東寄りに水溜用の曲物が3段階かれてあった。遺物は瓦器碗、土師器皿、瓦器釜、瓦器鍋などが出土しており、12世紀初～13世紀初頃と考えられる。

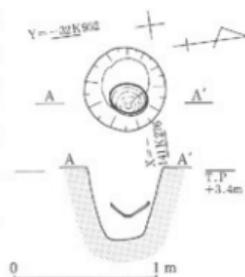


第68図 SE-16平面、断面図

土坑

SK-35 (ピット) (第69図)

M-5区で検出された。平面形は径0.6mの円形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は楕鉢状で、底面はほぼ平坦である。検出面から約0.3mの下で、完形の東播系須恵器片口鉢が正立の状態で見出された。平面形と規模からピットの可能性が高く、須恵器鉢は礎板に使用されていたと考えられる。時期は12世紀末～13世紀初頭頃と考えられる。



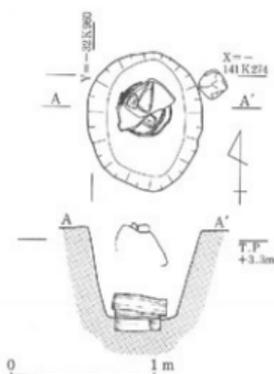
第69図 SK-35平面、断面図

SK-39 (井戸) (第70図)

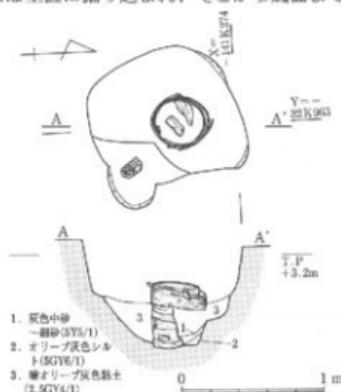
M-6区で検出された。平面形は0.8×1mの楕円形を呈しており、深さは0.7mを測る。断面形は楕鉢状で底面は平坦である。底面のほぼ中央で水溜用の曲物が2段検出されているので、井戸と考えられる。曲物の真上には花崗岩の割り石が検出されており、井戸廃絶時に入れられたものであるが、曲物との間には距離があり、曲物がある程度埋められてから置かれたようである。遺物は瓦器碗、土師器皿が出土している他、黒色土器A類が混入していた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

SK-41 (井戸) (第71図)

M-6区で検出された。平面形は1.1×1.2mの不定形を呈しており、深さは0.8mを測る。壁は検出面から約0.4mまでほぼ垂直に掘り込まれ、そこから底面までは斜めに掘り



第70図 SK-39平面、立面、断面図



第71図 SK-41平面、立面、土層断面図

込まれており、断面形は楕円状を呈する。底面のほぼ中央に水田用の曲物が3～4段重ねられて置かれてあった。遺物は瓦器碗、土師器皿が少量出土している程度で、時期は明確ではないが、13世紀頃と考えている。また、掘り形内の南東寄りで柱根が検出されており、重複するピットのものと考えられるが、前後関係は明らかにし得なかった。

建物

S B-06

M区の中央北端で検出された。南西隅の柱穴は擾乱の影響で未検出であるが、東西列は3間(6.4m)で、南北列は2間(4m)を検出しているが、さらにトレンチ外へ続くものと考えられる。柱間は2～2.2m、主軸はN-2°-Eを示す。柱穴の規模は30～85cm、深さは14～47cmを測る。遺物は土師器甕、甌、黒色土器A類などの小片が出土している。

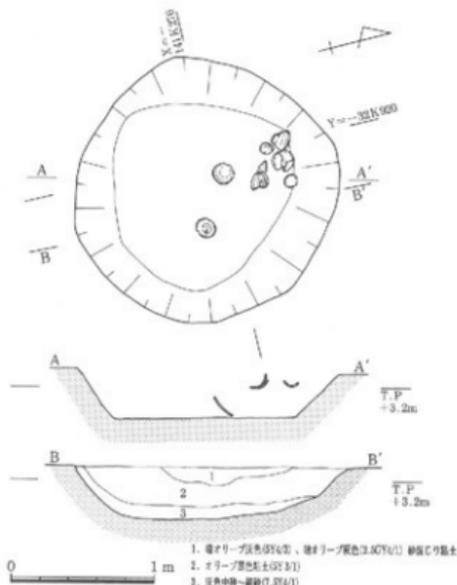
4. 第3遺構面(付図4)

土坑、井戸、溝、水田跡を検出している。水田跡は遺存状況が悪く、トレンチの西側でかろうじて、水路と考えられる溝に伴う大型畦畔と小畦畔が、また、南東隅では、足跡が無数に残る畦畔が検出された。出土遺物が少ないので時期は明確ではないが、古墳時代前期と考えられる。基本的には古墳時代の遺構面であるが、同一面で中世の井戸や落ち込み、奈良時代の井戸を検出している。検出面は、調査区の東側でT.P.+3.4m、西側でT.P.+3.3mを測る。
井戸

S E-17(土坑)(第72図)

M-2区で検出された。トレンチの東側にあり、遺構の密集する西側と異なり、周囲にはこれ以外に遺構は検出されておらず単独で孤立した状態で検出された。平面形は径約1.9mのほぼ円形を呈しており、深さは約0.4mを測る。

断面形は楕円状で、底面はほぼ平



第72図 S E-17平面、断面、土層断面図

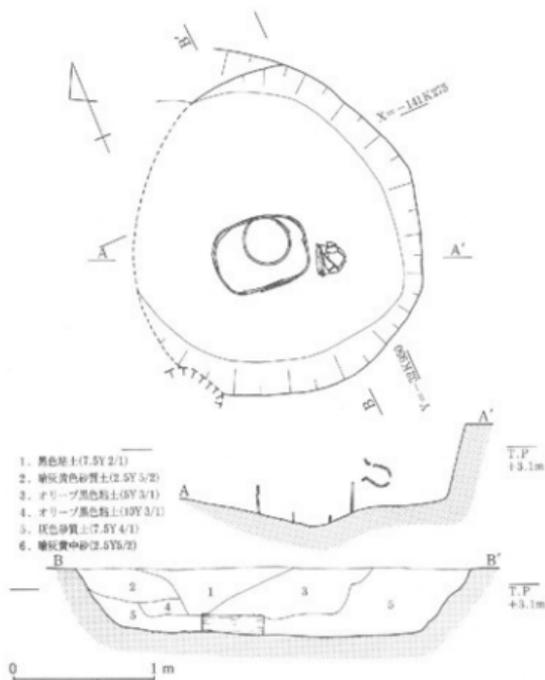
坦である。埋土は3層に分かれるが、最下層の灰色中砂～細砂は底面検出時の掘り下げ過ぎによるもので、遺構内の埋土とは考え難い。遺物は完形に近い瓦器碗、瓦器皿などが出土しており、瓦器碗には古い形態の特徴があり、時期は11世紀後半から12世紀初頃と考えられる。

SE-18 (第73図)

M-5区で検出された。平面形は2.2×2.8mの長円形を呈しており、深さは0.5mを測る。東側を平面形2.8×3.2mの不定形の遺構と重複しているが、前後関係は明らかではない。断面形は楕円状で、底面は平坦である。底面に木溜用として隅丸長方形の曲物が置かれ、その内部には北寄りの位置に円形の曲物が置かれていた。曲物の東側には土師器甕がほぼ1個体が破碎された状態で出土している他、曲物内より「⊗」の墨書の入った須恵器蓋付や鉢などが出土している。時期は8世紀後半頃と考えられる。

SE-20 (第74図)

M-4区で検出された。東側をST-04、西側をSD-45の双方の遺構に上部を切られており、検出規模は1.6×1.7m、深さは0.6mを測り、底面は平坦である。平面形は下部の検出面での形状から推定すると隅丸方形を呈しており、深さは約1mはあったであろうと考えられる。埋土は上層に灰色砂混じり土、下層に黒褐色粘土、オリーブ黒色粘土が堆積してい



第73図 SE-18平面、断面、土層断面図

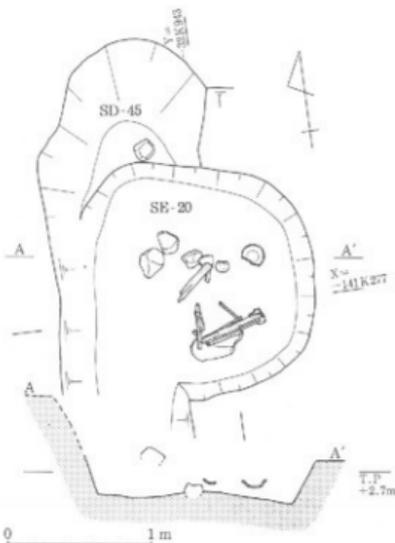
る。井戸の抜き取り跡と考えられ、掘り形内には土器の他、花崗岩の割り石や、井戸側に使用されていたと考えられる板材や木片などが散在して出土している。遺物は瓦器碗、瓦器皿、土師器皿、白磁碗などが出土しており、時期は11世紀末～12世紀前半頃と考えられる。

SE-21 (第75図)

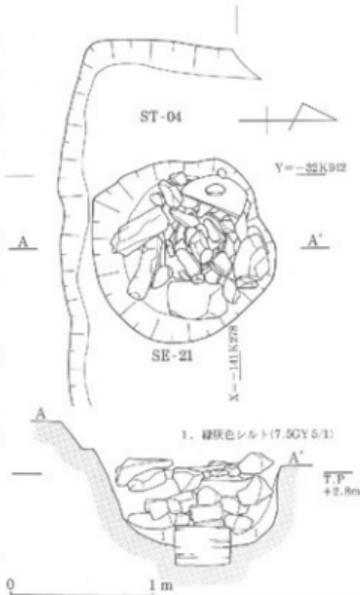
M-4区のST-04内で重複して検出された。前後関係は明確ではないが、ST-04の検出時ではSE-21の遺構の輪郭は確認されておらず、ST-04を底面まで掘り下げた段階で初めて検出することができたので、ST-04よりも前か、同時期に存在していたと考えられる。平面形は径約1.3mの円形を呈しており、深さはST-04の底面から0.5mを測る。北側の壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、南側は傾斜をもって平坦な底面に続く。底部には水溜用の曲物が1段置かれており、その上には掘り形内を隙間なく埋めるようにして、花崗岩の割り石で覆われていた。割り石は石積みの井戸側に使用されていたもので、井戸廃絶時の際にこのような状態で埋め戻されたものであろう。遺物は出土していないので時期は明らかではないが、12世紀代と考えている。

5. 第4遺構面(付図5)

調査区を蛇行しながら南北方向に走る、畦畔状に高まりが検出されたがK区、L区の項でも述べたように、自然河川の跡と考えられる。



第74図 SE-20平面、断面図



第75図 SE-21、ST-04平面、立面、土層断面図

第4節 O区の遺構

O区はK区の東側に位置しており、調査前の地表面の標高はT.P.+約4.9mであった。

1. 第1遺構面（付図1）

水路と考えられる溝を1条検出している以外は、南北方向に走る鋤溝が見られるだけであった。

溝

SD-54（第76図）

O-3・6区で検出された。東西方向に走り両端は側溝に切られるが、西側へさらに続いてK区でも検出されており、東側もさらにトレンチ外へ続いている。幅約1.2m、深さは0.1~0.3mを測り、埋土は灰色土が堆積する。溝の底面中央部に杭列の跡が残っていた。遺物は近世の陶磁器類の破片が出土している。近世から近代にかけて利用されていた農業用の水路と考えられる。

2. 第2遺構面上層（付図2）

南北方向に走る鋤溝が検出されただけで他に遺構は検出されなかった。中世の面に相当すると思われるが、居住地ではなく耕作地として利用されていたようである。

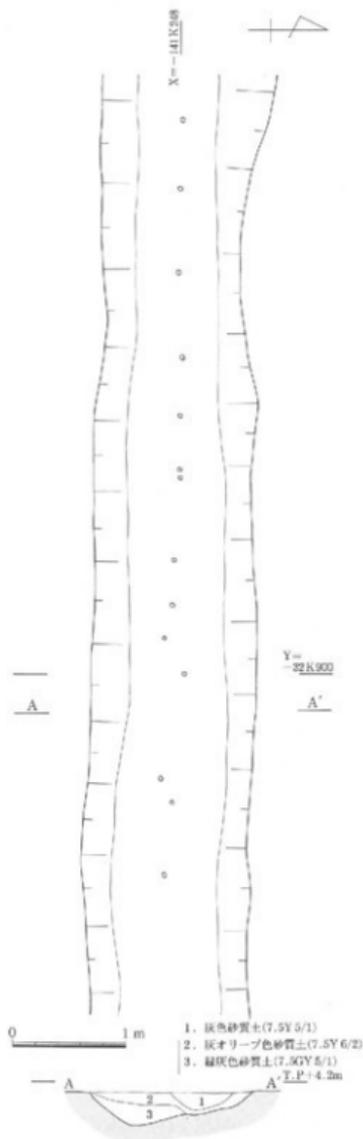
3. 第2遺構面下層（付図3）

土坑、ピットが散在的に検出されており、棚を復原することができたが建物は復原することができなかった。

土坑

SK-76

O-3区で検出された。平面形は径約0.7m



第76図 SD-54平面、土層断面図

の不整形を呈しており、深さは0.3mを測る。埋土は黄灰色砂混じり粘質土で、遺物は出土していない。

SK-78

O-4区で検出された。平面形は0.7×0.8mの隅丸方形を呈しており、深さは0.6mを測る。埋土は黄灰色砂混じり粘質土で、遺物は出土していない。

柵列

SA-18

O区の北側で4間の長さ6.4mを検出しているが、さらにトレンチの北側に続くものと考えられる。方位はN-7°-Wである。柱間はほぼ等間隔の1.6mを測る。柱穴の規模は18~26cm、深さは6~14cmである。遺物は出土していない。

SA-19

O区の中央、西側で検出された。方位はN-4°-E、3間で長さ11m、柱間は3.7mとやや広めで、ほぼ等間隔である。柱穴の規模は23~50cm、深さは8~17cmを測る。遺物は出土していない。

SA-20

SA-19の西側で検出された。方位はN-3°-E、5間で長さ12.3m、柱間は2.2~2.8mで一定ではない。柱穴の規模は31~95cm、深さは9~25cmを測る。遺物は土師器皿、土師器などの小片が出土している。

SA-21

O区の北西隅で、SK-98をコの字形に囲むように検出している。東西2間(2.1m)、南北1間(1m)で、主軸はN-5°-Eを示す。柱間は0.9~1.2m、柱穴の規模は15~35cm、深さは19~30cmをはかる。遺物は出土していない。

SA-22

O区の南側で4間の長さ12.8mを検出しているが、さらにトレンチ外へ続くものと考えられる。N-81°-Wである。柱間は3.5mであるが、東側の1間分が5.9mと広がっている。間に柱穴が1個存在したようであるが、攪乱の影響で消失している。柱穴の規模は24~48cm、深さは9~25cmを測る。遺物は出土していない。

4. 第3遺構面(付図4)

自然河川と土坑、溝が散在的に検出された以外は遺構は検出されていない。

土坑

SK-85

O-6区で検出された。平面形は1.2×1.3mの不定形を呈しており、深さは0.4mを測る。埋土は暗緑灰色砂質土が堆積しており、遺物は出土してない。

SK-86

O-5区で検出された。西側は側溝に切られており、平面形は1.2×1.3mの不定形を呈しており、深さは0.4mを測る。埋土は暗緑灰色砂質土が堆積しており、遺物は出土してない。

自然流路・自然河川

SR-03

O-1・2・4区で検出されており、大きく蛇行をしながら北西方向から南東方向に走る。幅約2.6m、深さは0.6mを測り、埋土は灰オリブ色～オリブ黄色砂層が堆積している。遺物は土器片が1点のみ出土しているが、磨耗が激しく種類、時期などは特定できない。検出状況から自然河川と考えられ、北端は側溝に切られるがトレンチ外に続いておりK区でも検出されている。また東端も側溝に切られているが、さらにトレンチの東側へ続いているものと考えられる。

SR-04

O-1区で検出された。トレンチ北東隅での検出のため規模は不明であるが、埋土はオリブ灰色砂層が堆積しており、SR-03と同様に自然河川と考えられる。両端ともトレンチ外へ続いていると考えられ、北側でSR-03と合流しているようである。

SD-73

O-6区で検出された。北東から南西方向に走る溝で、幅0.4m、深さは0.03～0.08mと浅い。埋土は灰オリブ色微砂、オリブ色シルトが堆積しており、自然流路と考えられる。

5. 第4遺構面（付図5）

第4遺構面は基本層序VI層の黒色粘土をベース面として、蛇行しながらほぼ南北方向に走る畦状の高まりが検出された。幅約1～2m、高さ約15～20cmを測る。両端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。北側、南側の土層断面を観察すると、ちょうどこの高まり部分の下層には、灰色砂層がレンズ状に堆積しているのが認められるので、自然河川が埋まった跡であると考えられる。畦状の高まりは、この砂の

堆積に起因するもので、河川が埋まった後水没して、上層に黒色粘土が堆積しても高まりが残ったようである。ここでは砂層を掘削しなかったが、K区では自然河川として検出している。

第5節 P区の遺構

P区は第Ⅲ期調査区の北西隅にあり、K区の北側に位置する。調査前の地表面の標高はT.P.+4.9m前後であった。

1. 第1遺構面（付図1）

近世の水路と考えられる東西方向に走る溝を1条検出した以外は、他に遺構は検出しておらず、東西方向に走る鋤溝が見られる程度である。

SD-81

P-2区で検出された。東西方向に走る溝で、幅2.4m、深さ0.5mを測る。両端は側溝に切られるが、さらにトレンチ外に続いているものと考えられる。埋土は灰色土で、遺物は近世～近代の陶磁器類が少量出土しているだけで、図化し得るものはなかった。水田、畑などに伴う水路と考えられる。

2. 第2遺構面上層（付図2、第77図）

調査区北半分で溝、土坑、ピットなどが検出されており、中世の面に対応する。

SD-81

P-1区で検出された。ほぼ南北方向に走る溝で、幅0.5m、深さ約0.1mを測る。南端はSK-89に切られて終わっており、北端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いているものと考えられる。埋土は灰色土で、遺物は瓦器碗、土師器皿などの小片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

SD-83

P-1区で検出された。SD-82の東側に接し、平行してほぼ南北方向に走る。幅0.6m、深さ0.4mを測る。南端はSK-89に切られて終わっており、北端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いているものと考えられる。埋土は灰色土で、遺物は瓦器碗、土師器皿などの小片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。なお、掘り形内で複数のピットと重複するが、前後関係は明確ではない。

SD-84

P-2区で検出された。東西方向に走る溝で、幅0.5m、深さ0.1mを測る。東端はSK-88・89に切られて終わっており、西端は側溝に切られるがさらにトレンチ外に続いてい

るものと考えられる。掘り形内で2個のピットと重複するが前後関係は明らかではない。遺物は出土しておらず、時期を明確にすることはできないが、SD-83と同様の13世紀前半頃と考えられる。

SK-88

P-2区で検出された。東側を側溝に切られるが、平面形は推定で1.6×1.6mの不定形を呈しており、深さは0.3~0.4mを測る。断面形は楕円状で、底面はほぼ平坦である。掘り形内では板材が散在した状態で検出されており、井戸の抜き取り跡とも考えられるが、検出面から底面までが浅いためその可能性は低く土坑と考えた。遺物は土師器皿、土師器釜、東播系須恵器片口鉢、足釜の破片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

SK-89

P-1区で検出された。東側を側溝に切られるが、平面形は推定で1.3×1.7mの不定形を呈しており、深さは約0.1mを測る。断面形は楕円状で、底面はほぼ平坦である。埋土は褐灰色砂混じり粘質土で、遺物は瓦器碗、土師器皿などの小片が出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

ピット

この面において確認されたピットは17個を数えるが、調査範囲に限られているため建物を復元するまでには至らなかった。

3. 第2遺構面下層(付図3、第77図)

溝とピットが散在して検出された。

SD-85

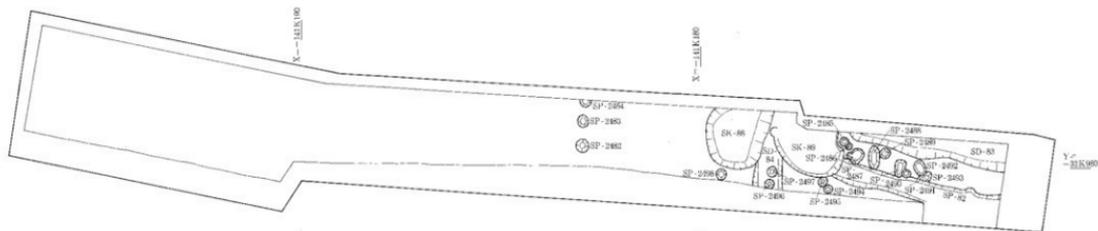
P-4区で検出された。トレンチ隅での部分的な検出のため詳細は不明であるが、北東から南西方向に走る溝のようである。深さは0.1~0.2mを測る。埋土は褐灰色粘質土の1層で、遺物は出土していない。

SD-86

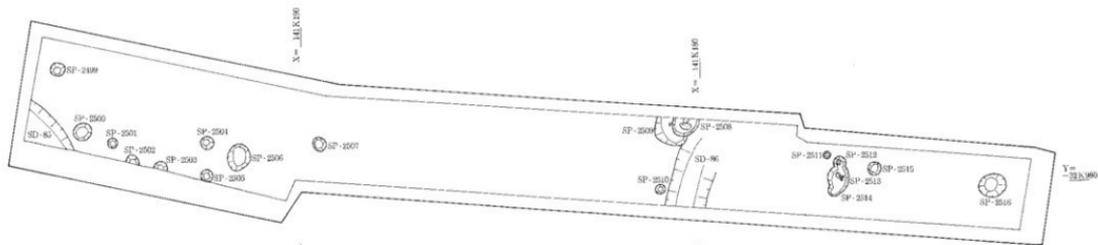
P-2区で検出された。東西方向に走る溝で、両端は側溝に切られるがさらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。幅1m、深さは約0.2mを測る。西端付近ではSP-2508に切られている。埋土は褐灰色砂混じり粘質土の1層で、遺物は土師器皿、須恵器などの小片が出土しているが、その出土量は少なく時期を明確にすることはできない。

ピット

この面において確認されたピットは17個を数え、SP-2305には柱根が、SP-2508・



第2透横面上層



第2透横面下層



第77图 P区第2透横面上層・下層平面图

2509・2512・2513には礎石が残っていたが、調査範囲が限られているため建物を復元するまでには至らなかった。また、土師器皿が埋納されたピット（SP-2505）が検出された。
SP-2505

P-4区で検出された。平面形は径約0.3mの円形を呈しており、深さは0.2mを測る。掘り形内部に完形の土師器皿が4～5枚重ねられた状態で置かれていた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

4. 第3遺構面（付図4）

自然河川と考えられる遺構と井戸が検出された。

SE-32

P-2区で検出された。平面形は径約1mの円形を呈しており、深さは約0.3mを測る。本来ならば上面の第2遺構面上層或いは下層で検出されるべき遺構であったため、実際の平面規模と深さはさらに大きくなるものと推定される。内部には水涵用の曲物が2～3段で置かれていたようであるが、上部は欠落している。遺物は曲物内から瓦器碗、土師器皿、土師器高台付き皿などが出土しており、時期は13世紀前半頃と考えられる。

SR-06

P-1・2区で検出された。北東から南西方向に走り、幅1m、深さは約0.2mを測る。埋土は褐灰色中砂が堆積しており、自然河川と考えた。遺物は出土していない。

5. 第4遺構面（付図5）

基本層序VI層である黒色粘土の上面まで掘削したが、この面での遺構は検出されなかった。

第6節 Q区の遺構

Q区は第III期調査区の南東隅にあり、M区の東側に位置する。調査前の地表面の標高はT.P.+4.8m前後であった。

1. 第1遺構面（付図1）

近世の水路と考えられる溝が2条検出されている。それ以外の遺構は検出されておらず、南北方向の無数の鋤溝が見られるだけであった。

SD-74

Q-4区で検出された。南北方向に走る溝で、両端は側溝により切られるが、さらにトレンチ外へ続いているものと考えられる。幅1.7m、深さ0.3mを測り、埋土には旧耕作土に類似する灰色土が堆積していた。遺物は近世～近代の陶磁器類の他に、瓦器碗、土師器皿などが混入して出土しているが、小片ばかりで図化できるものはなかった。水田、畑な

どに伴う用水路と考えられる。

SD-75

Q-3区で検出された。南北方向に走る溝で、両端は側溝により切られるが、さらにトレンチ外へ続いていると考えられる。幅1.8m、深さ0.2mを測り、この溝を境にして東側の検出面は、西側よりも約5cm程高くなっており、段差があるようである。埋土には旧耕作土に類似する灰色土である。遺物は近世～近代の陶磁器類の他に、瓦器碗、土師器皿などが混入して出土しているが、小片ばかりで図化できるものはなかった。SD-74と同様で用水路と考えられる。

2. 第2遺構面上層(付図2)

中世の面に対応すると考えられるが、土坑を1基検出した以外は遺構は検出されておらず、検出面全体に南北方向に走る鋤溝が見られるだけで、集落の範囲からは外れているようである。

SK-87

Q-2区で検出された。平面形は径約1mの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。壁は検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。埋土は緑灰色砂混じり粘質土の1層で、遺物は出土しなかった。

3. 第2遺構面下層(付図3)

第2遺構面上層と同様で鋤溝が走り、遺構は南北方向に走る溝が検出されているだけである。

SD-76

Q-3区で検出された。南北方向に走る溝で、幅2.3m、深さは0.9mを測る。両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へ続いていると考えられる。埋土は明黄褐色～褐色粘土のブロックが混じる灰色砂混じり粘質土や明オリブ灰色～灰色砂質土、灰黄色～オリブ灰色粘土が堆積する。土層堆積状況はST-02とよく似ており、常時水が滲水していたような状況を示している。遺物はほとんど出土しておらず、瓦器碗、土師器皿の小片が散見する程度で時期を確定するのは難しいが、中世前半頃と考えられる。

4. 第3遺構面(付図4)

自然河川と考えられる北東から南西方向に走る溝が2条検出された以外は、遺構は検出されていない。

SD-78

Q-4区で検出された。幅3.3m、深さは0.3mを測る。北東から南西方向に走り、両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へと続いていると考えられる。埋土には灰色砂層やシルトが混ざり、ラミナも認められるので自然河川と考えられる。遺物が出土していないため時期を確定するのは難しいが、今のところ古墳時代頃と考えている。

SD-79

Q-3区で検出された。幅2.4m、深さは0.3~0.5mを測る。北東から南西方向に走り、両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へと続いていると考えられる。埋土はSD-78と同様の様相を呈するので自然河川と考えられる。遺物は出土していないが時期は古墳時代頃と考えられる。

5. 第4遺構面(付図5)

第3遺構面と同様で、自然河川と考えられる北東から南西方向に走る溝が検出されたが、これ以外には遺構は検出されなかった。

SD-80

Q-4区で検出された。幅2.4m、深さは0.1~0.2mを測る。両端は側溝により切られているが、さらにトレンチ外へと続いていると考えられる。第3遺構面で検出したSD-79とはほぼ重複しており、同一河川の下層部分を検出したものと考えられる。遺物は出土しておらず、時期を明確にするのは難しいが、弥生時代以前に形成された自然流路と考えている。

第7節 ピット

1. 埋納ピット

ここで取り上げるのは、何らかの理由により明らかに人為的に土器を埋納しているピットで、その性格は建物柱穴とは異なると考えられるものである。以下調査で検出された埋納ピットについて、主なものを報告する。

SP-244(第78図)

M-16区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.6mの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。ピット内から洛北産の緑釉陶器が出土している。出土状況は、底面で東に少し傾きながら底部を上に向けた状態で埋納されていた。埋土の土層断面を見ると、柱が抜き取られた様相を示しており、建物の柱穴を兼ねていたようである。土器の出土位置から推定すると、土器は柱を立てる際に埋納された可能性が高い。また、近くで検出されたSP-172から同一個体の破片が出土しており、接合することができたことは興味深

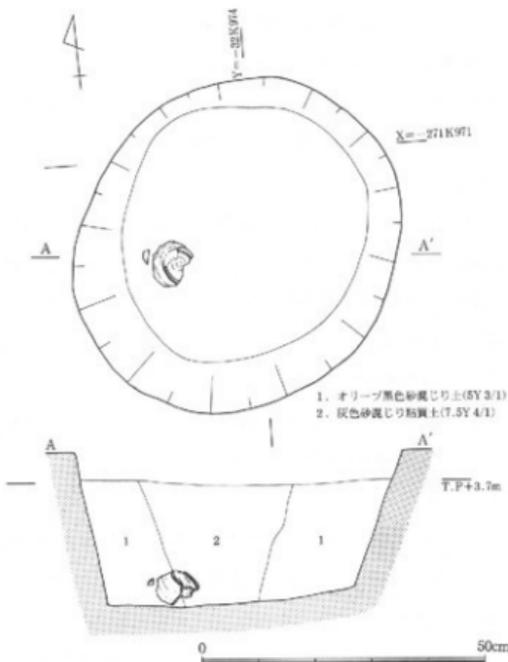
い。建物の柱を立てる時に何らかの理由で埋納されたものと考えられる。時期は9世紀末～10世紀前半頃と考えられる。

S P-320 (第79図)

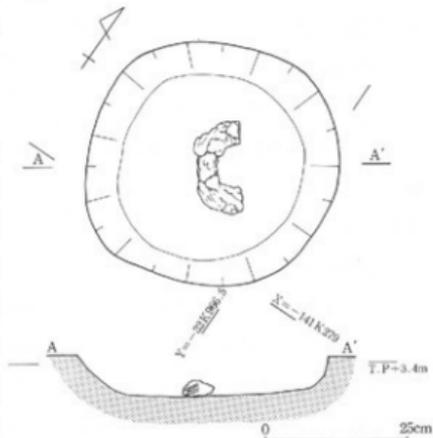
M-7区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.5mのほぼ円形を呈しており、深さは0.2mを測る。ピット内からは鉄製の鎌先が出土している。出土状況を見ると、底面の中央で刃先を南西に向け水平に置かれていた。攪乱の底面で検出しているため、上部は削平の影響を受けているが、削平の分を差し引いても深さは0.3mと浅いので柱穴とは異なるピットと考えられる。

S P-436 (第80図)

M-16区、第2遺構面上層で検出された。平面形は一边が約0.6mの隅丸方形を呈しており、深さは0.3mを測る。検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。ピット内からは土師器甕、土師器杯、黑色土器A類碗、土鍾などが出土している。出土状況を見ると、土器は完形ではなく破砕された状態で出土しており、その



第78図 S P-244平面、立面、土層断面図

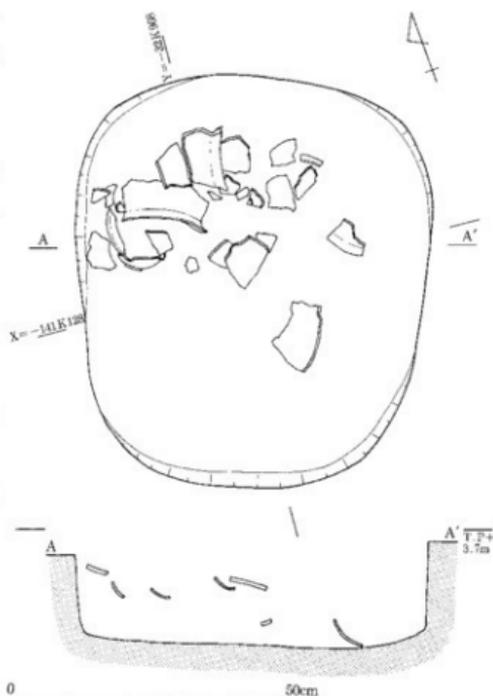


第79図 S P-320平面、断面図

内容は甕三点、黒色土器八点、杯二点であった。黒色土器の中の一点には、底部外面に「庚」の線刻が刻まれていた。完形品の埋納がないので埋納ピットというよりも、廃棄土坑と考えた方が良いかも知れない。時期は10世紀前半～後半頃と考えられる。

SP-799 (第81図)

M-14区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.4mの円形を呈しており、深さは0.1mを測る。ピット内からは土師器皿が約25点出土している。出土状況を見る限り、土器は正立して置かれるものや底部を上に向けたものなど、埋納のされ方には規則性ないようである。後世の削平や検出過程の削平のため上部の土器が破砕されているが、埋納時は完形品だけを入れたと考えられる。時期は13世紀前半頃と考えられる。



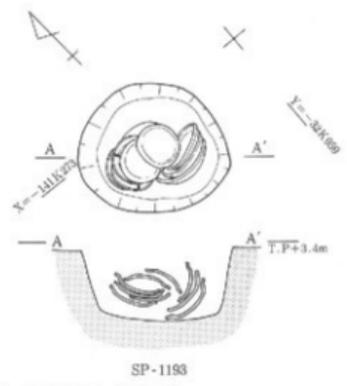
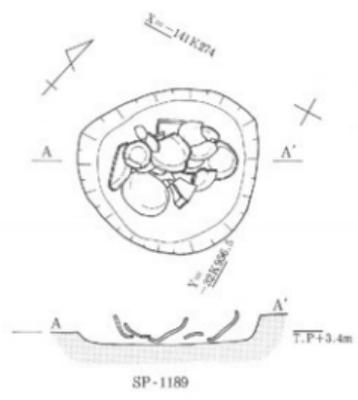
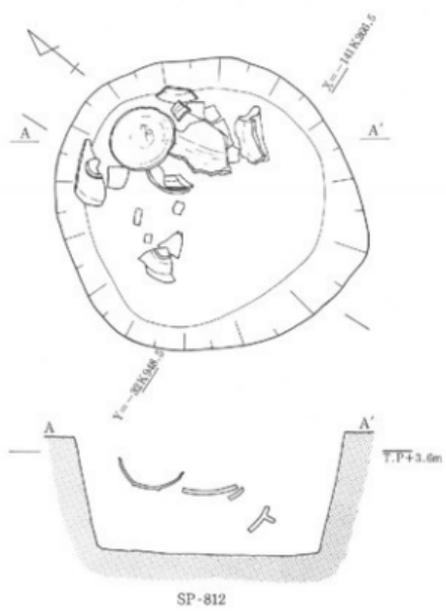
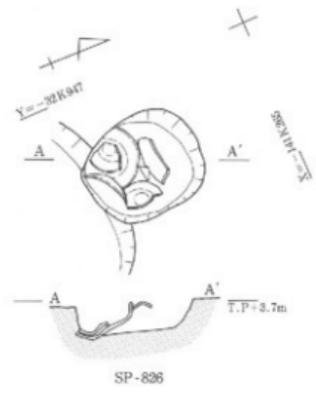
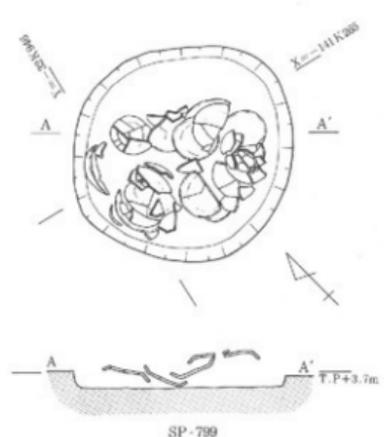
第80図 SP-436平面、断面図

SP-812 (第81図)

M-14区、第2遺構面上層で検出された。平面形は一辺が約0.5mの隅丸方形を呈しており、深さは0.3mを測る。検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦であった。ピット内からは瓦器碗、瓦器釜が出土しているが、完形で出土したのは瓦器碗一点だけである。出土状況を見ると、掘り形内の北寄りに破片が集まり、その上に完形の瓦器碗が正立して出土した。時期は13世紀前半頃と考えられる。

SP-826 (第81図)

M-14区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.2mの不整形円形を呈しており、深さは0.1mを測る。ピット内からは土師器皿が5点出土している。出土状況を見ると、



第81圖 SP-799・812・826・1189・1193平面、断面圖

正立に置かれたものや、垂直に近い縦置きものがあり、全体では南に傾いた状態で出土している。この状況が埋納時の土器の原位置を示しているとは考え難く、元々は垂直に重ねられていたと考えられる。時期は13世紀前半頃と考えられる。

SP-1189 (第81図)

M-6区、第2遺構面下層で検出された。平面形は径約0.3mの不整形円形を呈しており、深さは0.1mを測る。底面はほぼ平坦である。ピット内からは土師器皿が12点出土している。出土状況は完形品も含めて破片が重ねられており、正立に置かれるものと、底部を上向きにして置くものが半々である。時期は13世紀前半頃と考えられる。

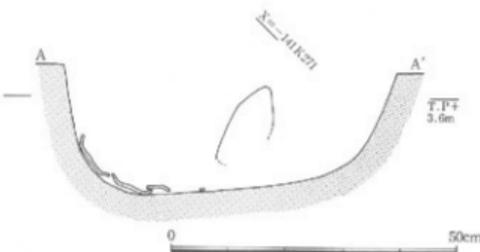
SP-1193 (第81図)

M-15区、第2遺構面下層で検出された。平面形は径約0.2mの不整形円形を呈しており、深さは0.2mを測る。ピット内からは土師器皿が10点出土している。出土状況は10点の内7点が垂直方向に重ねられており、3点はその隣で傾いた状態で出土している。垂直方向に重ねられた7点の内5点が正立に置かれ、2点が底部を上に向けて置かれてあった。残りの3点の検出状況を見ると、この3点は元々は底部を上に向けた状態で垂直に重ねられていたものが、移動したものと推定される。したがって埋納時の状況は、底面から5点の皿を正立の状態を重ね置き、残りの5点を底部を上に向けて被せるように置かれていたものと推定される。時期は口縁端部に「て」の字状の形態が見られるので、10世紀末頃と考えられる。



SP-106 (第82図)

N-2区、第2遺構面上層で検出された。平面形は0.5×0.6mの不定形を呈しており、深さは0.5mを測る。断面形は楕円状を呈し、底面はほぼ平坦である。ピット内からは土師器皿と



第82図 SP-106平面、断面図

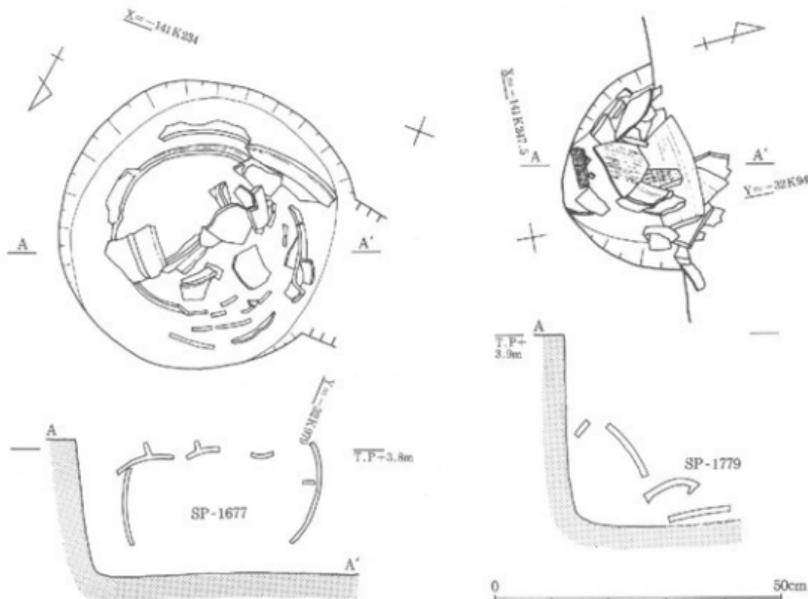
礎石と考えられる花崗岩の割り石が出土している。出土状況を見ると、土師器皿は南西隅にかたまって出土しているが、柱を立てる際、同時に埋納されたものと考えられる。時期は13世紀前半頃と考えられる。

SP-1677 (第83図)

L-12区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.5mの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。検出面からはほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。ピット内からは瓦器釜が大小2点出土している。出土状況を見ると、径の大きい瓦器釜を正立の状態で置き、その内側に小さい瓦器釜を置いてあった。遺構検出時ではピットと考えたが、両方の瓦器釜には底部が残存していなかったため、曲物の代わりに瓦器釜を水溜用に転用した井戸であった可能性もある。時期は13世紀後半頃と考えられる。

SP-1779 (第83図)

L-3区、第2遺構面上層で検出された。北側を側溝に切られているが、平面形は推定で径約0.3mの円形を呈しており、深さは0.4mを測る。土器は完形ものではなく須恵器壺片、黒色土器B類片、瓦器碗片が出土している。破片しか出土していないので埋納ピットとい



第83図 SP-1677・1779平面、断面図

うよりも破片を転用して礎板に使用していたものではないかと考えられる。時期は11世紀後半頃と考えられる。

2. 礎石・礎板・柱根を伴うピット

建物の柱穴には、柱の沈み込みを防ぐため下に敷かれた礎板や、礎石を伴うものや、柱の抜き取りが行なわれずに、柱根がそのまま残っている柱穴が検出されている。調査では多数検出されており、ここでは一部であるが紹介する。

SP-133 (第84図)

M-17区、第2遺構面上層で検出された。平面形は0.4×0.5m楕円形を呈しており、深さは0.3mを測る。断面形は錐鉢状で、底面は平坦である。平瓦の破片を礎板として転用していた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

SP-451 (第84図)

M-15区、第2遺構面上層で検出された。平面形は0.4×0.6m隅丸長方形を呈しており、深さは0.5mを測る。穴を切った板材を半分に縦割りにしたものを礎板に使用していた。

SP-879 (第84図)

M-13区、第2遺構面下層で検出された。平面形は径約0.5mの円形を呈しており、深さは0.3mを測る。花崗岩の割り石の上面を平坦に加工して、礎石にしている。

SP-1176 (第84図)

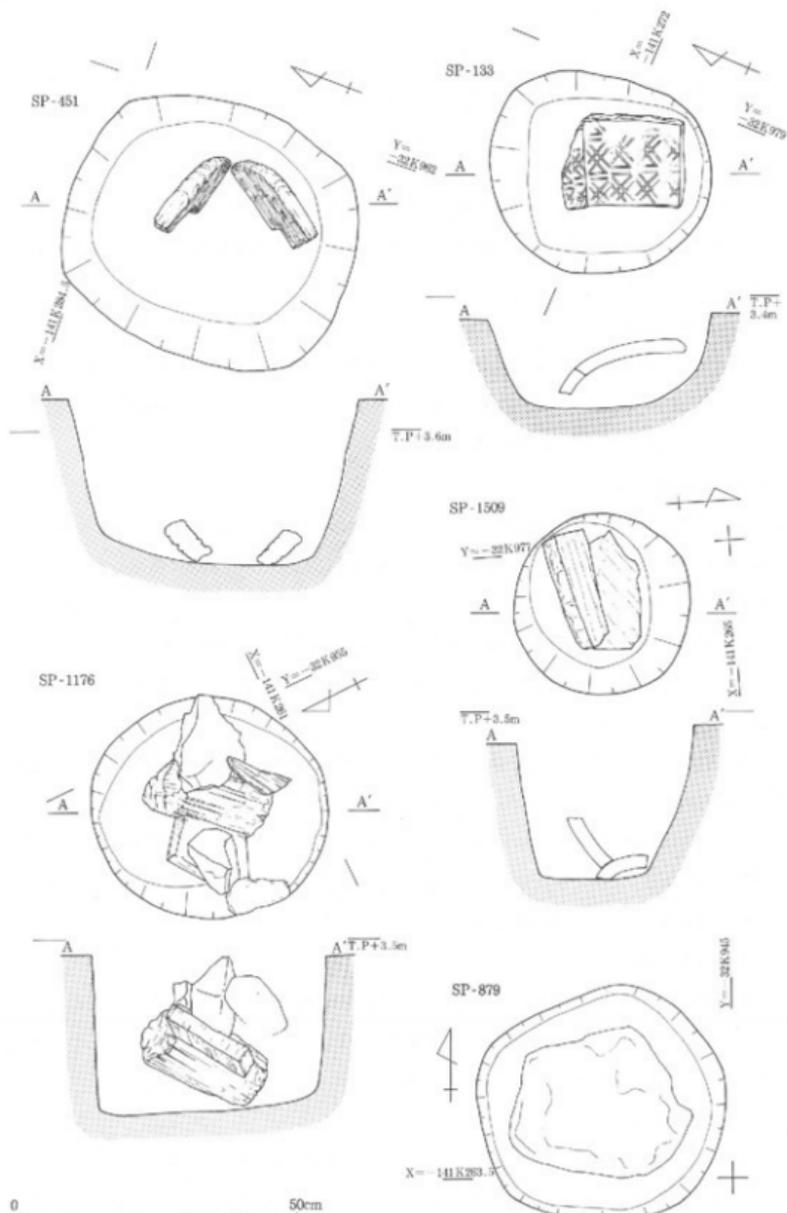
M-15区、第2遺構面下層で検出された。平面形は径約0.4mの円形を呈しており、深さは0.4mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。掘り形内には柱根が斜めに倒れた状態で、その傍らには礎板と考えられる板材と花崗岩の割り石が出土している。出土状況から礎板を底に敷き柱を立て、その周りを石によって囲み柱を固定させていたものと推定される。

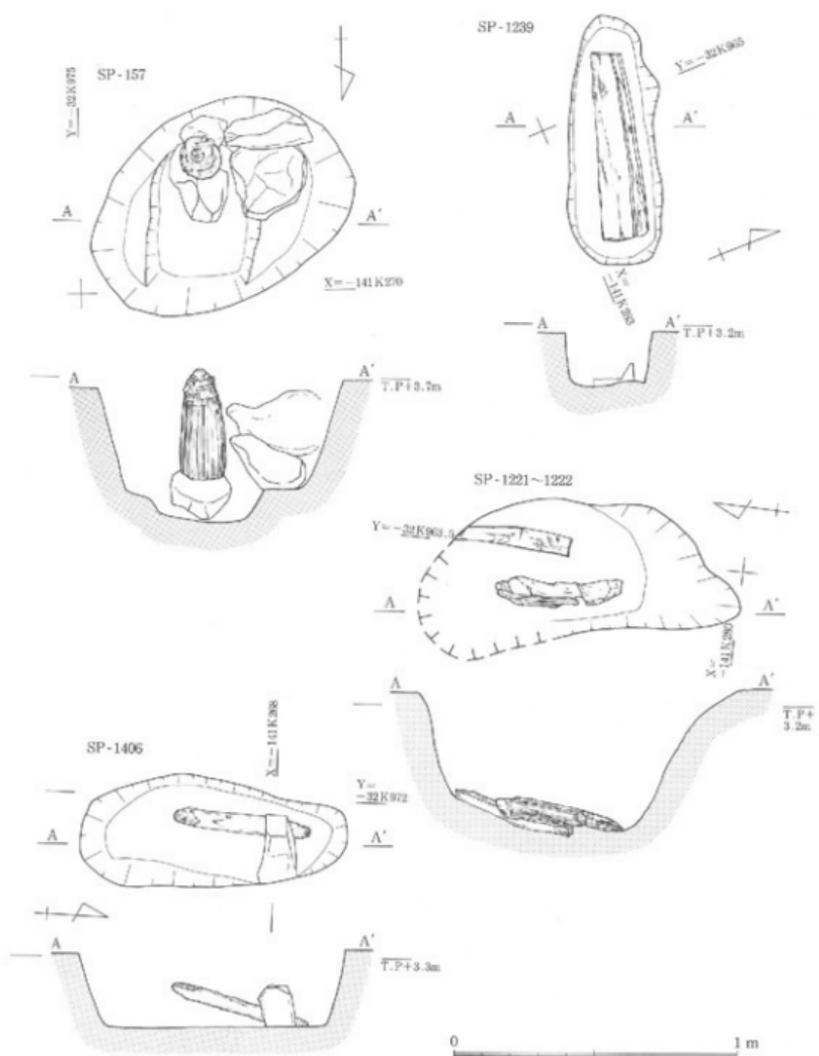
SP-1509 (第84図)

M-17区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.3mの円形を呈しており、深さは0.4mを測る。断面形は錐鉢状で、底面は平坦である。平瓦の破片を礎板として転用していた。時期は13世紀前半頃と考えられる。

SP-157 (第85図)

M-17区、第2遺構面上層で検出された。平面形は0.7×0.9mの長円形を呈しており、深さは0.5mを測る。礎石の上に柱根が載っている状態で、柱根の周りには、固定させるための割り石が置かれてあった。





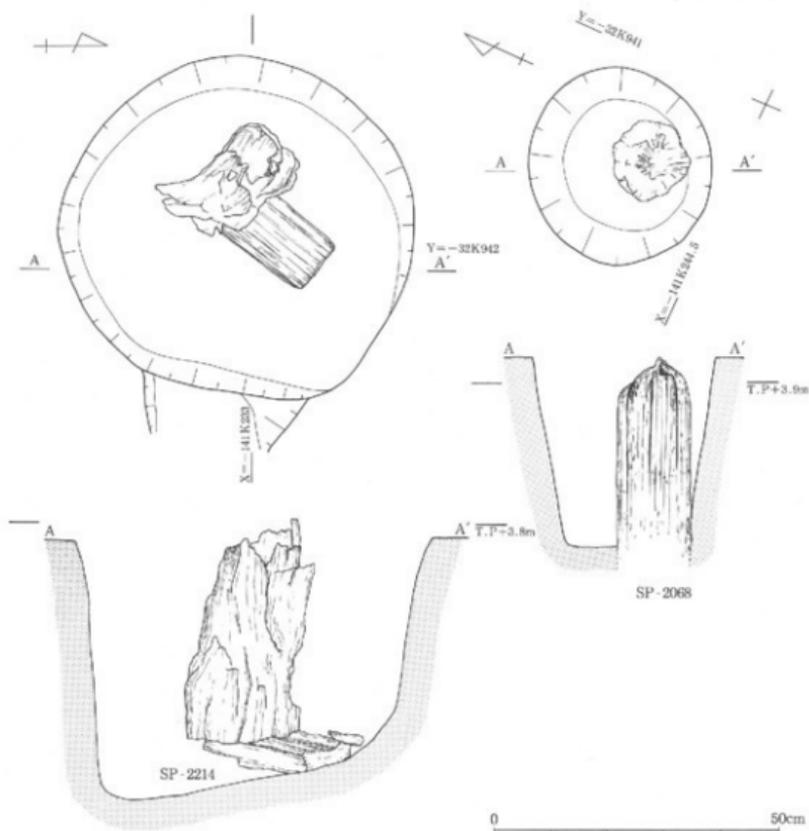
第85図 SP-157・1221~1222・1239・1406平面、立面、断面図

S P-1239 (第85図)

M-6区、第2遺構面下層で検出された。平面形は0.2×0.8mの不定形を呈しており、深さは0.2mを測る。長い板状の材が底に敷かれていた。このような形状の遺構が果たして柱穴であるかどうかは、疑問が残る。

S P-1221~1222 (第85図)

M-6区、第2遺構面下層で検出された。遺構検出時には2個のピットが重複しており、ピット内を掘り下げたところ図のような平面形0.3×0.9mの不定形の掘り形となった。2個のピットの前後関係は明ではないが、それぞれのピットには底面に長い板状の材と角



第86図 S P-2214・2068平面、立面図

材が置かれており、礎板として考えた。を呈しており、深さは0.2mを測る。長い板状の材が底に敷かれていた。しかしSP-1239と同様、柱穴であるのかどうかは疑問が残る。

SP-1406 (第85図)

M-16区、第2遺構面下層で検出された。平面形は0.3×0.5mの楕円形を呈しており、深さは0.4mを測る。底面に柱状の材が横たわり、その隣に角材が立った状態で出土した。底面はほぼ平坦である。SP-1221~1222、1239と同様、柱穴であるのかどうかは疑問が残る。

SP-2214 (第86図)

L-9区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.5mの円形を呈しており、深さは0.5mを測る。壁は検出面からほぼ垂直に掘り込まれており、底面に礎板と考えられる板材が敷かれ、その上に柱根が載せられている状態で検出された。

SP-2068 (第86図)

L-3区、第2遺構面上層で検出された。平面形は径約0.3×0.4mのほぼ円形を呈しており、壁は検出面からやや斜めに垂直に掘り込まれており、掘り形内には円柱形の柱根が残存していた。

第5章 遺物

第1節 出土遺物の概要

調査では中世の遺物が大量に出上しているが、それ以外にも各時代の出土遺物が見られる。木製品については次章の第6章に説明を譲り、ここではそれ以外の出土遺物について概略を述べる。

陶磁器類

近世～近代までのものが、第1遺構面で検出した溝（水路）や基本層序Ⅱ・Ⅲ層から出土している。染付が中心で、出土量は少なく破片ばかりで、図示できるものはなかった。

瓦器碗

中世を代表する土器である瓦器碗は「楠葉型」、「大和型」、「和泉型」があり、それぞれ特徴を持った出土の仕方をしている。「楠葉型」は当遺跡から生産地が近く出土量も多いと考えられたが、予想に反して出土量は少なかった。瓦器碗の初現期である11世紀から13世紀末頃までのものが見られるが、量的には主流を占めるまでには至っていない。これに対して「大和型」は12世紀後半頃から多くなるようで、12世紀末～13世紀代に入ると当遺跡では完全に主流となるようである。「和泉型」はその生産地が遠いためか流通圏外となっているようで、やはりその出土量は少なかった。

瓦器皿

瓦器碗と同じ焼成法で作られたもので、形態的には口縁部に強いヨコナデが施されたために端部が外反するものと、そのまま斜め上方に向かって終わるものと、大きく2つに分類されるようである。見込みの暗文は、ジグザグを見込み全体に隙間なく施すもの、粗いジグザグ状、ジグザグの方向を変えて格子状に施されるもの、2条の幅狭のジグザグを直交させて十字状に施されるものなどがあり、その手法は瓦器碗のそれと同じである。概観すると12世紀後半～13世紀初頭頃までの間で見られるようである。

土師器皿

土師器皿は11世紀代の「て」の字状口縁を呈するものもあるが、12～13世紀代のものが圧倒的に多く出土している。口径の大きさで、小皿と中皿に分類できるが小皿の出上量が多い。小皿では口縁端部を内側に折り曲げるものが、少数ではあるが出土している。また、小皿の底部に高台を付けるものもあり、中には高い高台が付いている高杯のような形態を

尾するものもある。

土釜

口縁部付近に鈔をめぐらす煮炊き道具で、羽釜とも呼ばれる。その材質によって瓦器釜、土師器釜に分けられる。完形での出土はなくそのほとんどが破片であるが、口縁部と鈔の形態の特徴により「河内型」、「大和型」、「摂津型」、「山城型」があり、それぞれ出土している。「河内型」、「大和型」の出土量が多いようである。

瓦器足釜

扁平球状の瓦質の体部に短いための鈔をめぐらし、三方に棒状の脚が付くもので、その形状から三足とも呼ばれる。破片も含めて個対数は多い。底部の下で直接火を焚いて使用されたため、出土時は全体に煤が付着しているのが通常である。

土師器足付き鍋

形状は足釜によく似るが、口縁の形態が受け口状を呈するものである。出土数は少なく調査では1点しか確認されていない。

須恵器

時代的には古墳時代～中世のものまで幅広く出土しており、古墳時代のものには、破片ではあるが初期須恵器も数点含まれ、また、韓式系土器も少量であるが出土している。奈良時代の須恵器では、蓋杯に「☉」の墨書が記されたものが出土している。中世では13世紀代の東播系須恵器片口鉢の出土が目立つ。

常滑

粟の破片がほとんどで、12世紀代～13世紀代のものが出土している。

緑釉陶器

破片で出土量はさほど多くないが、洛北産、近江産のものが見られる。

輸入陶磁器

白磁、青磁が出土しており、白磁は玉縁口縁を呈する碗が多く、一部外反するものも見られる。青磁は碗、皿ともに見られ、同安窯系、竜泉窯系のものが出土している。

瓦類

井戸側（井筒）、礎板に使用されていた平瓦と、鬼瓦などがあるが、概して出土量は少ない。井戸に使用されていた平瓦の1枚には、「東大寺」の刻印が施されていた。

黒色土器

A・B類とも出土しているが、その出土量は少ない。A類の方の出土が目立つ。A類で

は「廣」の線刻、「西」の墨書が記されていたものが出土している。

土師器

皿以外の器種では、古墳時代～中世まで幅広く出土している。古墳時代では前期の庄内式～布留式期に比定されるものが少量出土しており、奈良時代の土師器も少量ではあるが出土している。土師器杯では「廣」の墨書が記されているものが出土している。

弥生土器

前期～後期のものが少量出土しているが、自然河川や包含層からの出土であり、上方からの流れ込みによるものがほとんどである。

縄文土器

遺構からの出土はなく、破片が少量出土しているが、上方からの流れこみによるものである。中期～後期のものが出土している。

その他

土器以外の遺物として、土錘、土馬、紡錘車などが出土しているが、量は少ない。土錘には中央に孔が貫通する紡錘形のもの、両側に溝を切る「工」字形のものがある。金属製品も出土量は少なく、銅銭、鉄製鋸先、鉄製刀子などが出土している。石製品ではヒスイ製勾玉、碧玉製白玉やサヌカイト製石鏃、剝片が出土しているが量は少ない。また、蔽き石、凹み石がセットで出土している。その他第Ⅱ期調査で出土していた桐雲母片岩、紅簾石片岩、石英安山岩などの石片も量は少ないが出土している。

第2節 K・P区の出土遺物

SE-32 (第87図)

楠葉型瓦器碗(1~3)と土師器高台付皿(4)が出土している。瓦器碗は橋本編年⁽¹⁾のI-3~II-1期(以下I-3~II-1と記す)に属し、外面に分割ヘラミガキ、内面には細く密な圈線ミガキが施され、見込みの暗文は連結長楕円状、連結輪状が主体を成す。

SE-34 (第87図)

楠葉型瓦器碗(5・6)が出土している。内面の圈線ミガキは比較的粗くなっており、外面には分割ヘラミガキが施されるが省略化の傾向が見られる。見込みには連結輪状の暗文が施されている。II-3に属する。

SE-35 (第87図)

土師器高台付皿(7)、須恵器壺底部(8)が出土している。7は口縁端部にヨコナデを施す他は脚部、杯部には指押さえの痕が顕著に残る。

SE-38 (第87図)

瓦器碗(9)が出土している。楠葉型で内面は密な圈線ミガキ、外面は底部付近まで分割ヘラミガキが施される。見込みには連結輪状の暗文が施されている。II-2に属する。

SE-39 (第87図)

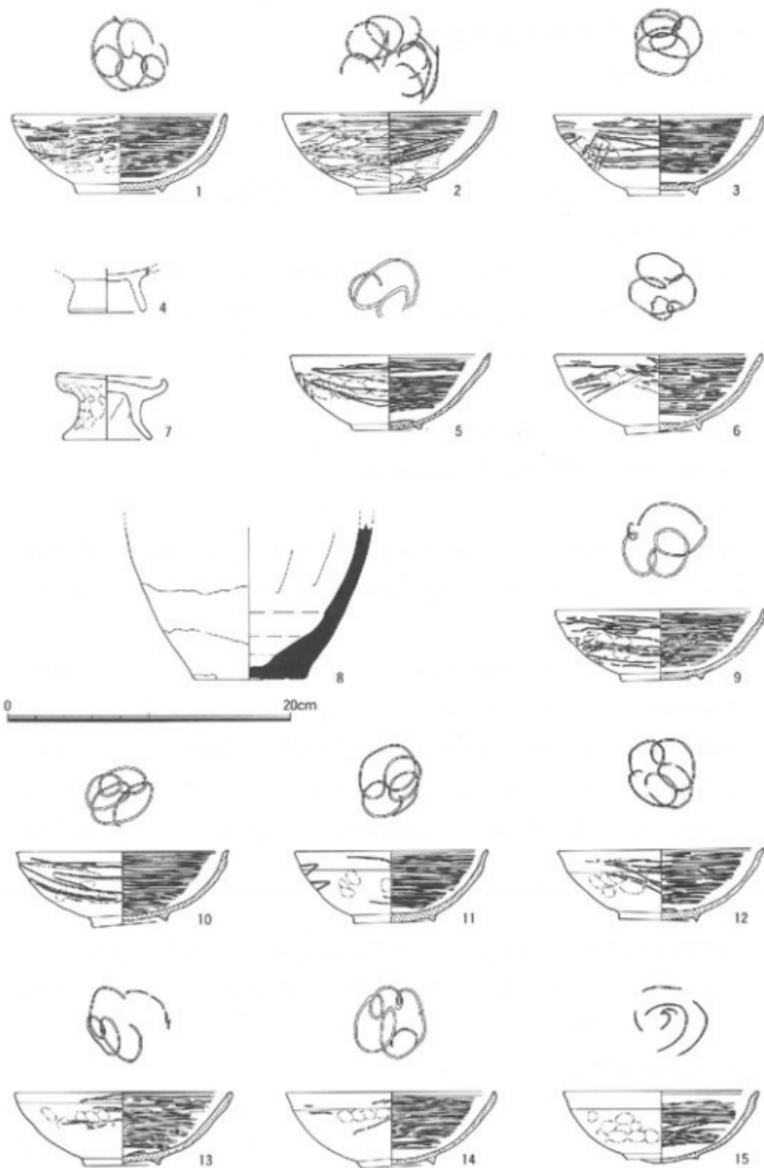
大和型瓦器碗(10~12)、楠葉型瓦器碗(13・14)が出土している。大和型は川越編年⁽²⁾の第Ⅲ段階A型式(古)以下(Ⅲ-A(古)と記す)に属すると考えられ、見込みの暗文は連結輪状で、外面には粗い分割ヘラミガキが施されている。楠葉型はII-3に属する。13は内面にハケメの上から圈線ミガキが施され、外面のヘラミガキは口縁部付近に施されるのみで、省略されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。14も同様で外面のヘラミガキはほとんど見られない。

SE-40 (第87図)

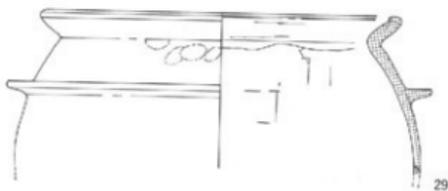
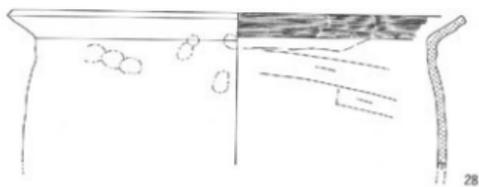
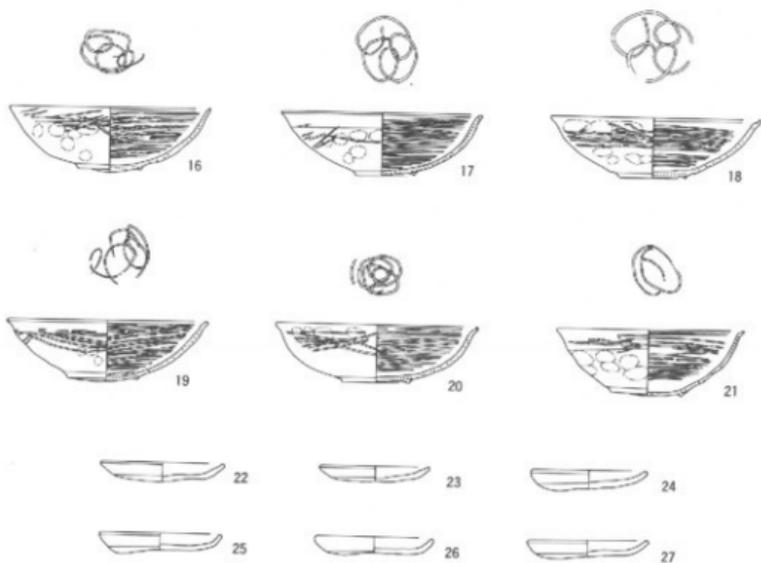
大和型瓦器碗(15)が出土している。内面には粗い圈線ミガキが施され、外面のヘラミガキはほとんど見られない。見込みの暗文は磨耗のため不鮮明であるが、連結輪状であろう。Ⅲ-A(新)に属する。

SE-42 (第89図)

大和型瓦器碗(30~32)、土師器皿(33~39)が出土している。瓦器碗は30に見込みの暗文の省略化が見られる。いずれもⅢ-Bに属する。土師器皿は34が口縁端部を外側に開いた状態で終っている。

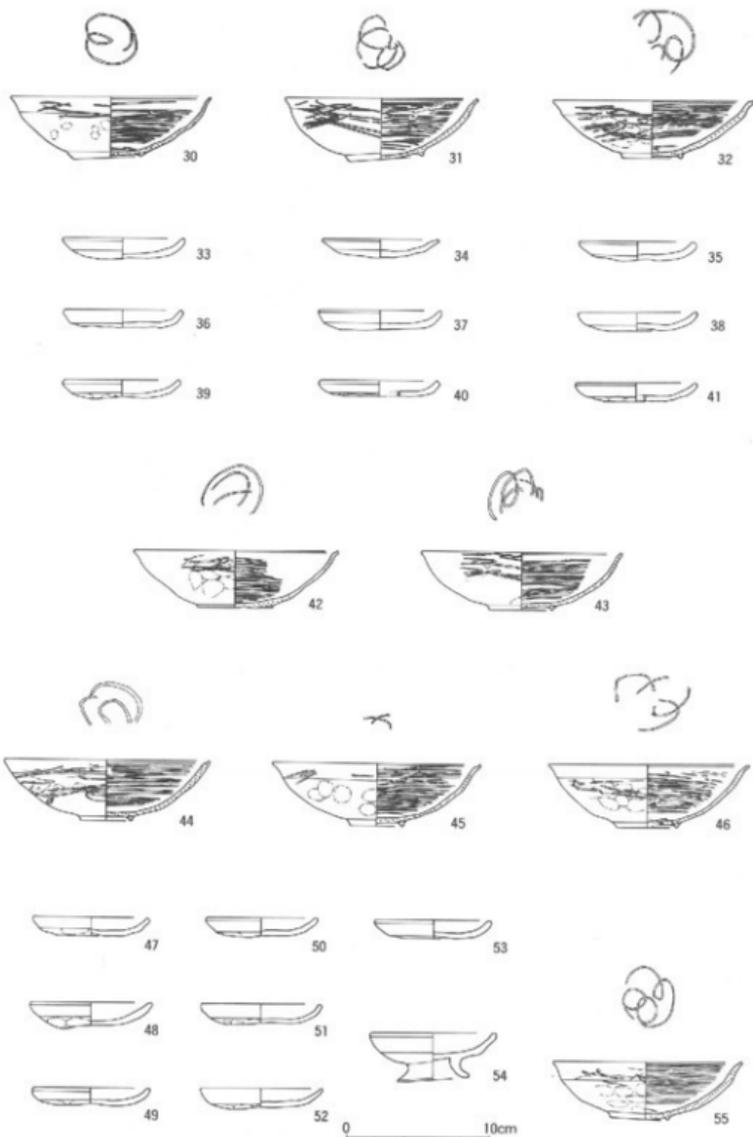


第87圖 SE-32・34・35・38・39・40出土遺物



0 20cm

第88圖 S E - 43出土遺物



第89圖 SE-42・44・45・46・47出土遺物

SE-43 (第88図)

大和型瓦器碗(16~21)、土師器皿(22~27)、瓦器鍋(28)、瓦器釜(29)が出土している。瓦器碗は退化した高台を持ち、器高も低くなる傾向を示している。17には暗文の省略化が見られる。16・17・20がⅢ-A(新)で、18・19・21がⅢ-Bに属すると考えられる。29は口縁端部を内側に折り返すのが特徴で、菅原編年の大和B₁型に属する。

SE-44 (第89図)

土師器皿(40・41)、大和型瓦器碗(42・43)が出土している。42は高台の退化と暗文の省略化が見られ、42はⅢ-B、43はⅢ-A(新)に属する。

SE-45 (第89図)

大和型瓦器碗(44~46)、土師器皿(47~53)が出土している。瓦器碗はいずれも見込みの暗文の省略化が見られ、内面の圏線ミガキも隙間が出来る程、粗くなっている。Ⅲ-A(新)に属する。

SE-46 (第89図)

大和型瓦器碗(55)が出土している。Ⅲ-A(新)に属し、外面のヘラミガキは省略化され、見込みには連結輪状の暗文が施されている。

SE-47 (第89図)

土師器高台付皿(54)が出土している。

SK-92 (第90図)

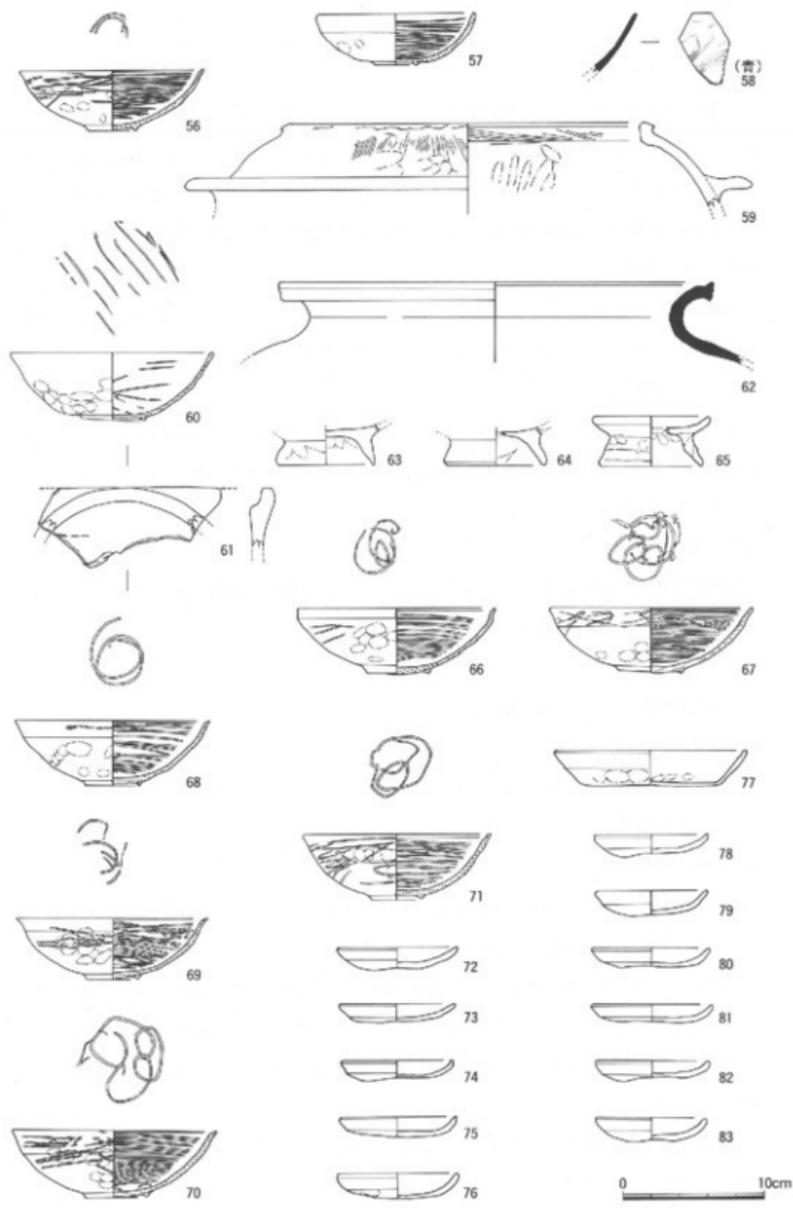
大和型瓦器碗(56)が出土している。Ⅲ-A(新)に属し、外面は体部上半部まで分割ヘラミガキが施されている。

SK-94 (第90図)

瓦器碗(57)、青磁片(58)、土師器釜(59)が出土している。57は楕葉型で法量が縮小し、内面の圏線ミガキは粗く、外面にはヘラミガキはほとんど施されていない。Ⅲ-2~3に属する。58は青磁碗口縁部片で、内面に櫛状もしくはヘラ状工具による花文が施されている。龍泉窯系青磁と考えられ、横田・森田編年の碗I-2類に属する。59は内外面ともハケメによる調整が施され、口縁端部は直立気味にたちあがり、河内B₁型に属する。

SK-95 (第90図)

土師器の円筒形製品(61)が出土している。形状は丸瓦に類似しており、同形のもを連続して差し込んで使用したようである。樋のようなものか。



第90図 S K - 92・94・95・96・97出土遺物

S K-96 (第90図)

瓦器椀 (60) が出土している。和泉型で外面のヘラミガキはほとんど省略化れ、内面の
隠線ミガキもやや粗い。見込みの暗文は粗い平行線状である。尾上編年のⅡ-3期(以下⁽⁵⁾
Ⅱ-3と記す)に属する。

S K-97 (第90図)

須恵器甕 (62)、土師器高台付皿 (63~65)、瓦器椀 (66~71)、土師器皿 (72~83) など
が出土している。63~65は、底径の大きい「ハ」の字状に開くしっかりとした高台が付
く。瓦器椀は大和型で、型式的にはいずれもⅢ-A(新)~B相当するようである。

S K-100 (第91図)

瓦器椀 (84) が出土している。大和型で外面のヘラミガキは省略化され、見込みには連
結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-Bに属する。

S K-101 (第91図)

瓦器椀 (85)、土師器皿 (86・87)、青磁皿 (88) が出土している。85は大和型で見込み
の暗文は省略化されている。Ⅲ-A(新)に属する。88は同安窯系で、内面に片彫りの花
文が施されている。皿Ⅰ-1類に属する。

S K-108 (第91図)

瓦器椀 (89・90)、土師器皿 (91)、が出土している。89は大和型でⅡ-A~Bに属し、
90は楠葉型でⅡ-2~3に属する。

S K-111 (第91図)

土師器甕 (92・93) が出土している。いずれも器壁の薄い球形の体部から「く」の字状
に屈曲する短い口縁部が付き、口縁端部は内側に肥厚して終る。92には体部の2箇所に穿
孔が施されている。布留式に属する。

S K-120 (第91図)

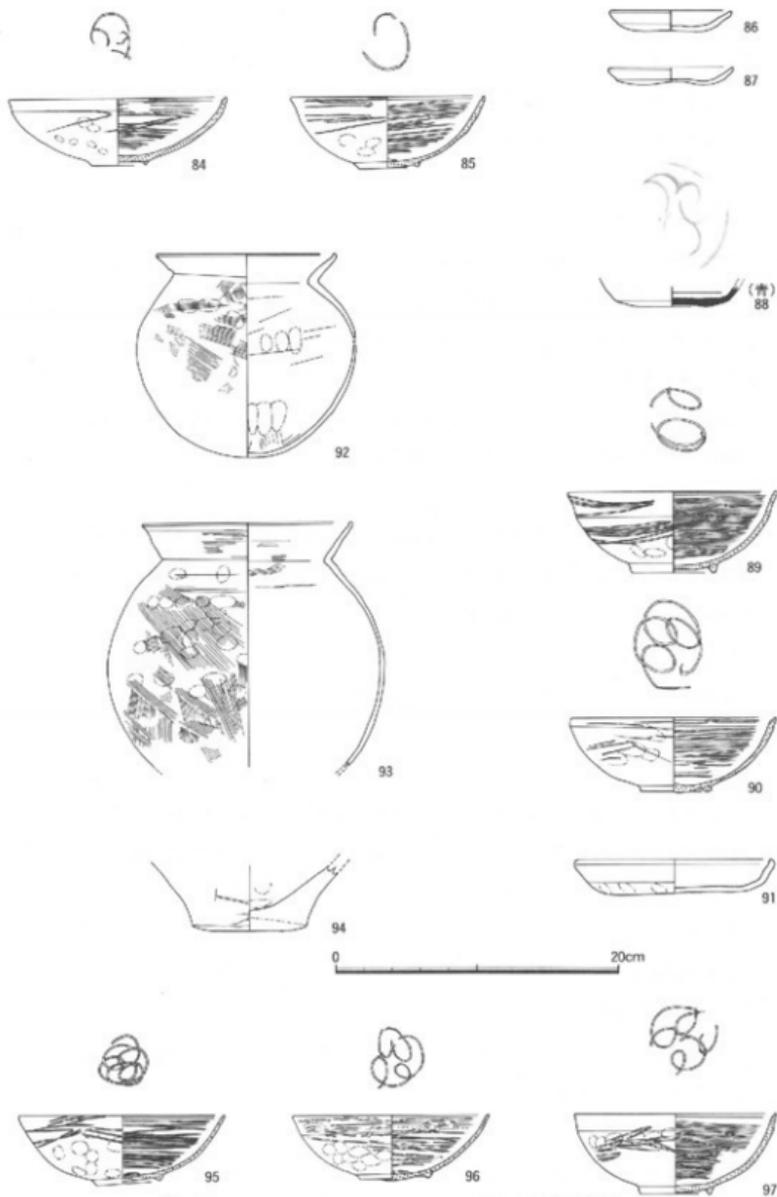
弥生土器底部 (94) が出土している。

S K-131 (第91図)

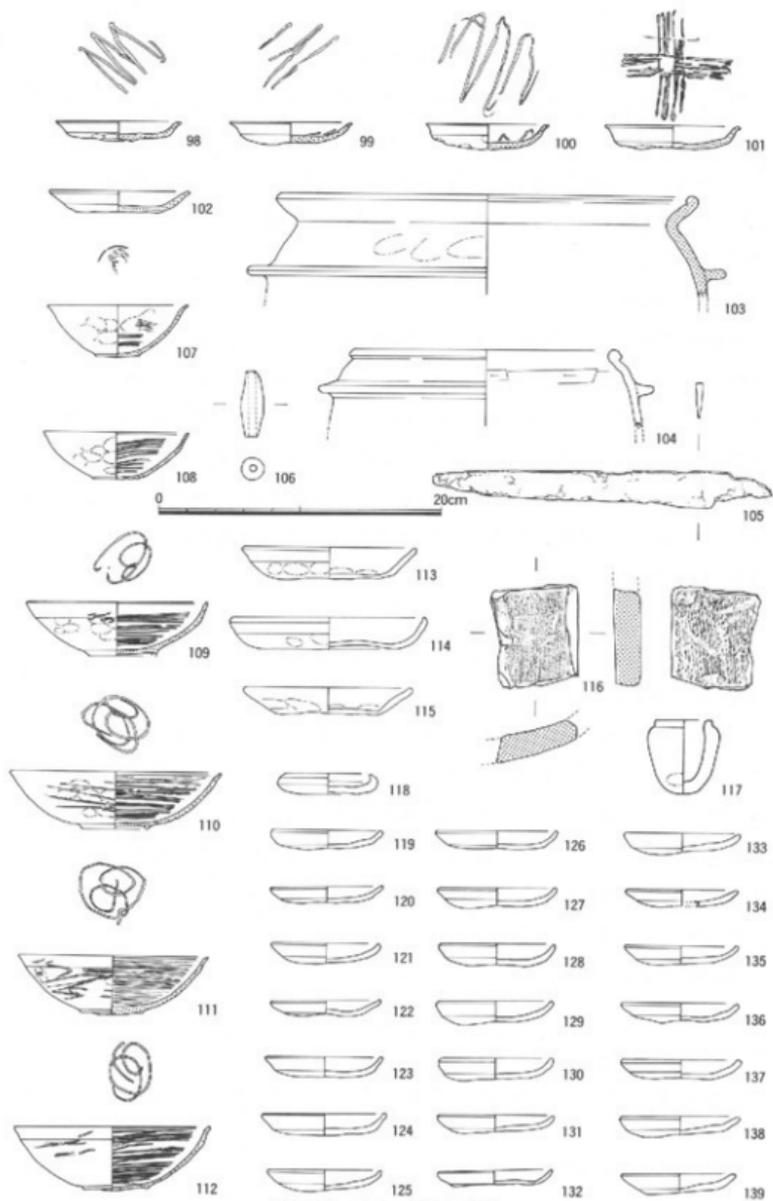
瓦器椀 (95~97) が出土している。いずれも大和型で、見込みには連結輪状の暗文が施
されている。Ⅲ-Aに属する。

S D-59 (第92図)

瓦器皿 (98~102)、瓦器釜 (103)、土師器釜 (104)、瓦器椀 (107~112)、土師器皿
(113~115、118~139)、鉄製刀子 (105)、土錐 (106)、瓦 (116)、小型壺 (117) などが



第91圖 S K-100・101・108・111・120・131出土遺物



第92图 S D-59出土遗物

出土している。瓦器皿は見込みの暗文がジグザグ状のもの（98～100）とジグザグの方向を変えて2度施した十字状のもの（101）、暗文の施されないもの（102）がある。103は大和B₁型で12世紀後半～13世紀前半頃の時期を示す。104は河内B₁型か。瓦器椀はいずれも大和型であるが、型式はⅢ-A（新）～Ⅲ-Eの範囲で、時期的には12世紀末～14世紀初頃と広い年代幅を示している。土師器皿は113～115が中皿である。118は口縁端部を内側に折り返している。

SD-68（第93図）

瓦器椀（140～147）、白磁碗（148）、土師器皿（149～151、153～156）、瓦器皿（152）、土師器釜（157）、常滑甕（158）などが出土している。瓦器椀はいずれも外面のヘラミガキが省略化の傾向を示し、見込みには連結輪状の暗文が施されている。141・142は桶葉型で、Ⅱ-3～Ⅲ-1に属し、140、143～147は大和型でⅢ-A（新）～Ⅲ-Bに属する。白磁碗は底部のみの出土であるが、厚くて低い高台を持ち碗Ⅳ-1類に属する。土師器釜は短い鑿を持ち、口縁端部は内側に肥厚して終る。大和B₁型に属する。

SR-01（第94図）

須恵器（160・161・163）が出土している。160・161は須恵器杯蓋で、中村編年のⅡ型式Ⅰ段階（以下Ⅱ-1と記す）に属する。⁽⁶⁾163は須恵器杯身で、Ⅱ-1に属する。

SR-02（第94図）

須恵器（159・162・164）と土師器（165・166）が出土している。159は須恵器提瓶で、把手は欠損している。口縁部は直立気味に立ち上がり、外反して後端部は肥厚し丸く終る。162は須恵器高杯蓋で、Ⅰ-5に属する。164は須恵器杯身で、Ⅱ-1に属する。165は土師器杯で、外面にヘラケズリが施されている。166は布留式甕である。体部外面には不定方向のハケメが施されており、内面にはヘラケズリの痕が認められる。

SP-2505（第94図）

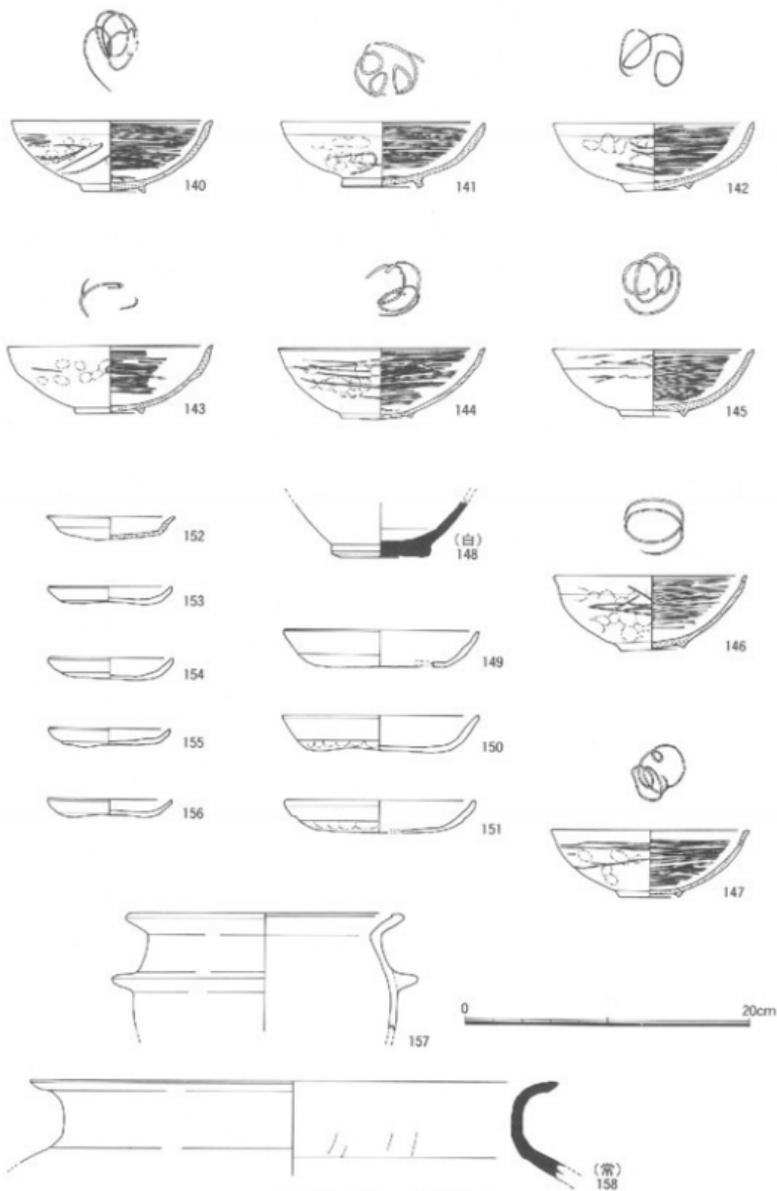
瓦器椀（167）、土師器皿（168～171）が出土している。167は大和型でⅢ-A（新）に属する。

SP-2506（第94図）

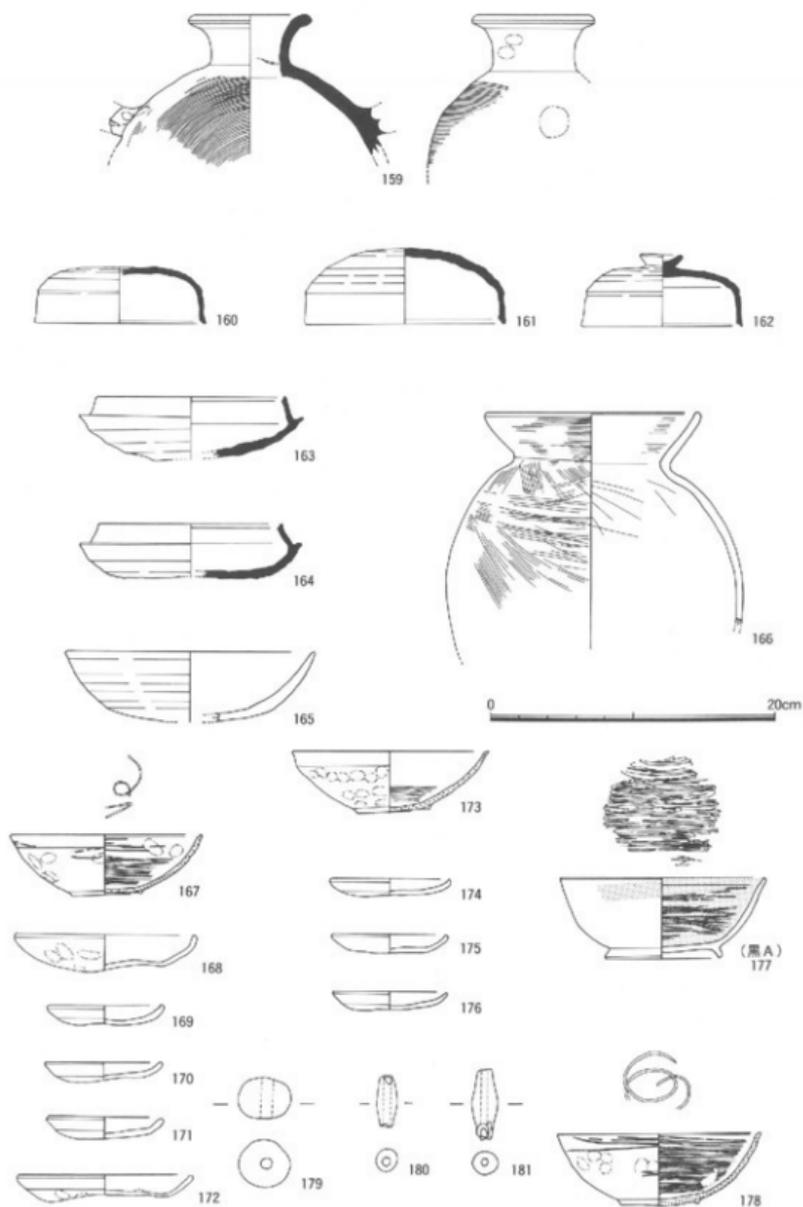
土師器中皿（172）と大和型瓦器椀（173）が出土している。Ⅲ-A（新）に属する。

SP-2510（第94図）

球状の土錘（179）が出土している。



第93图 S D-68出土遗物



第94図 SR-01・02、SP、包含層出土遺物

S P - 2531 (第94図)

土師器皿 (174・175) が出土している。

S P - 2640 (第94図)

土師器皿 (176) が出土している。

S P - 2675 (第94図)

黒色土器A類 (177) が出土している。森編年⁽⁷⁾の畿内系Ⅲ類に属する。

S P - 2702 (第94図)

紡錐形の土錐 (180) が出土している。

S P - 2828 (第94図)

大和型瓦器椀 (178) が出土している。Ⅲ-A (新) に属する。その他、包含層 (Ⅲ層) から紡錐形の土錐 (180) が出土している。

第3節 L・O・Q区の出土遺物

ST-02 (第95図)

瓦器碗(182~187)、土師器皿(188~196)、瓦器皿(199)、瓦器足釜(197)、砥石(198)などが出土している。瓦器碗は184が和泉型、187が桶葉型で、その他は大和型である。182は大和型で、外面のヘラミガキが口縁部付近に施される程度で、内面の圏線ミガキも粗く隙間がある。Ⅲ-Cに属する。183も大和型瓦器碗で、法量の縮小化見られ内面の圏線ミガキもさらに粗くなっている。Ⅲ-Dに属する。184は和泉型瓦器碗で、外面のヘラミガキは施されずほとんど省略化され、内面の圏線ミガキも下部に粗く施されている。Ⅳ-1に属する。186は大和型瓦器碗で、法量の縮小化が見られ、外面にはヘラミガキが施されず、内面は粗い圏線ミガキと見込みに渦巻き状の暗文が施されている。Ⅲ-Eに属する。187は桶葉型瓦器碗で、外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面の圏線ミガキは粗く、見込みの暗文も粗いジグザグ状である。Ⅲ-3に属する。瓦器皿(199)は、見込みにジグザグの方向を変えた十字状の暗文が施されている。

SE-22 (第95図)

土師器皿(206)が出土している。底部の外側から径約2mmの穿孔が施されている。

SE-28 (第95図)

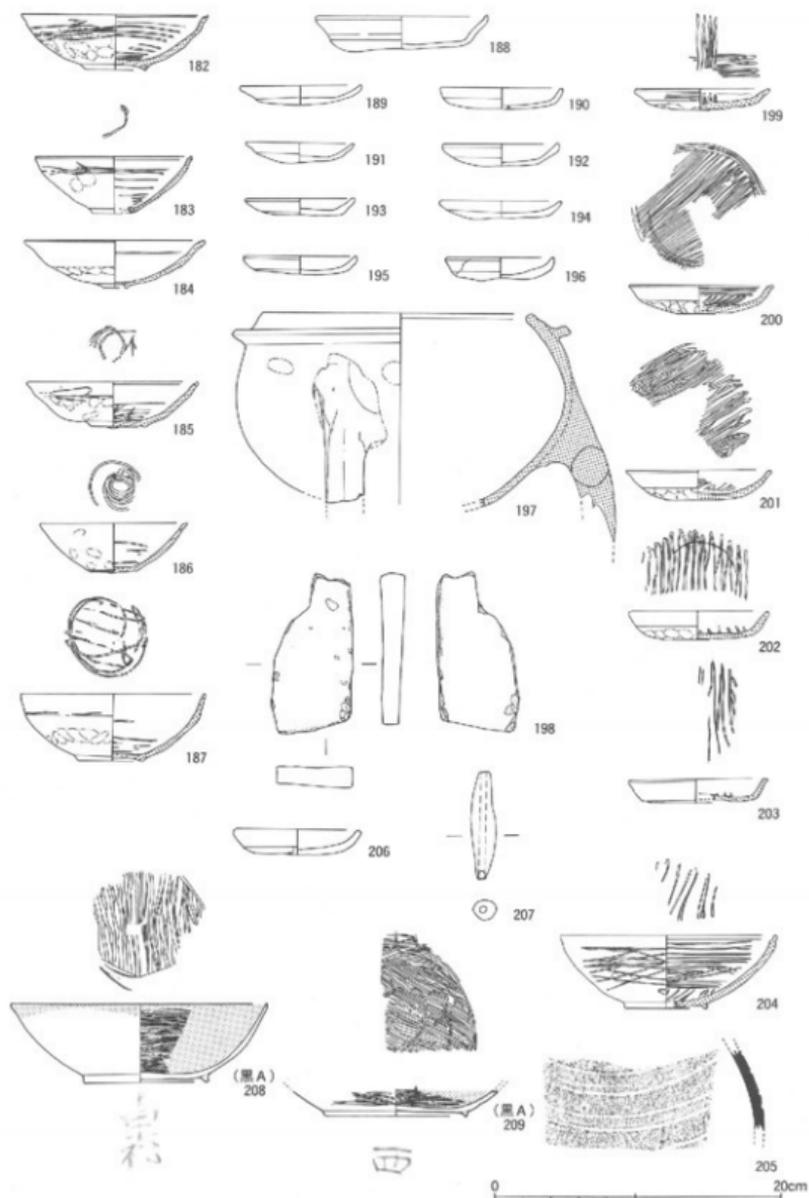
瓦器皿(200~203)、瓦器碗(204)、須恵器片(205)が出土している。200は内面に密な圏線ミガキが施され、見込みに密なジグザグ状の暗文が施されている。201は見込みに複雑なジグザグ状の暗文が施されている。202・203は粗いジグザグ状の暗文が施されている。204は大和型で、外面は粗い分割ヘラミガキ、内面は粗い圏線ミガキと見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。Ⅱ-Bに属する。205は混入品の須恵器片である。甕の体部と推定され、外面には縄蓆文と圏線が施されている。

SE-31 (第95図)

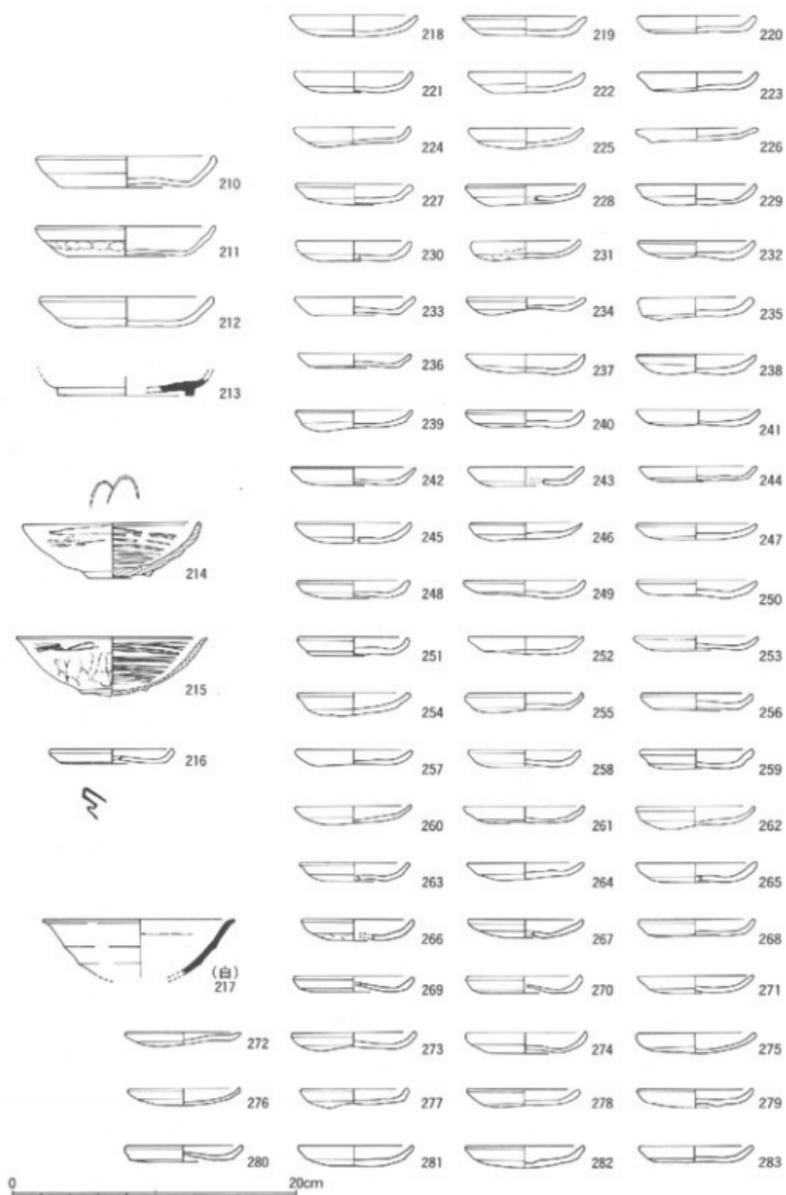
土錘(207)、黒色土器A類(208・209)が出土している。208は太めのヘラミガキを密に施しており、底部外面に「□福」の墨書があるが、1文字は読解不能である。209は細いヘラミガキを密に施しており、見込みには螺旋状の暗文が施されている。底部外面に「西」1文字の墨書がある。いずれも畿内系Ⅲ類に属する。

SK-56 (第96・97・98・99・100図)

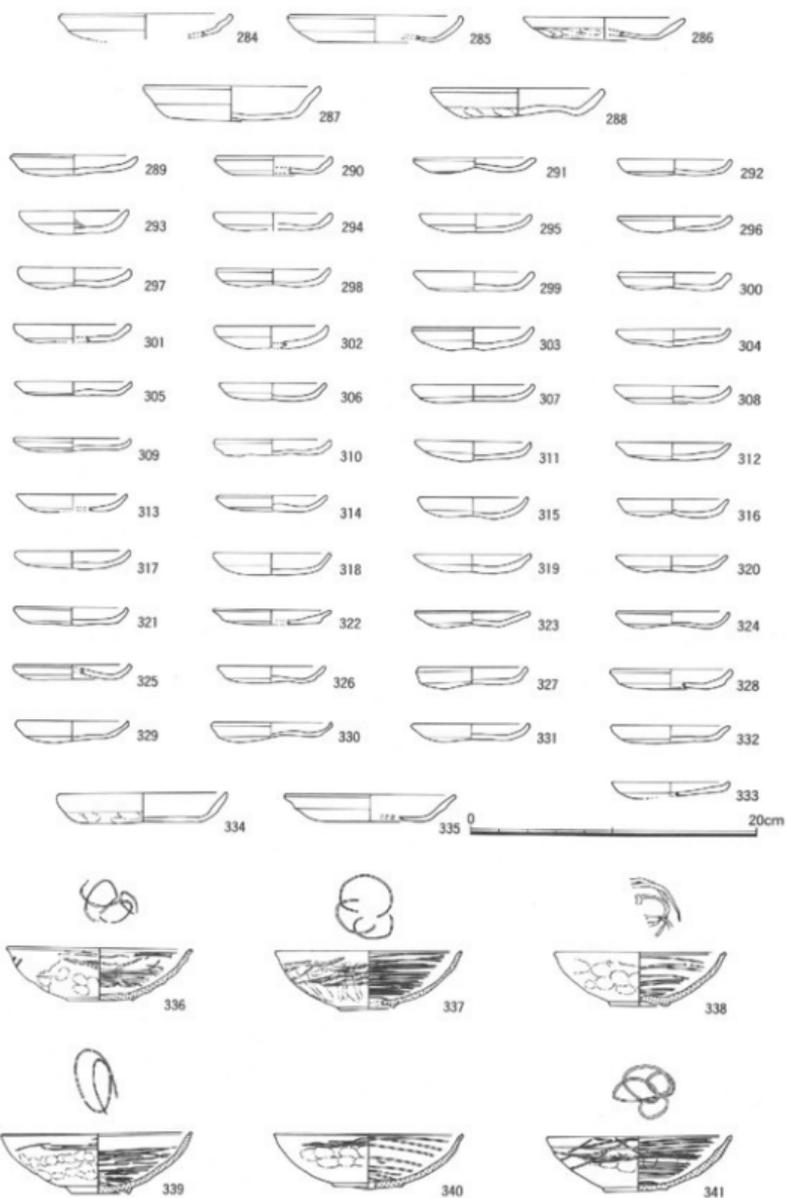
廃棄土坑と考えられるこの遺構からは、大量の遺物が出土した。種類別には土師器皿が最も多く出土しており、形式的には大体13世紀代の時期に相当すると考えている。そのう



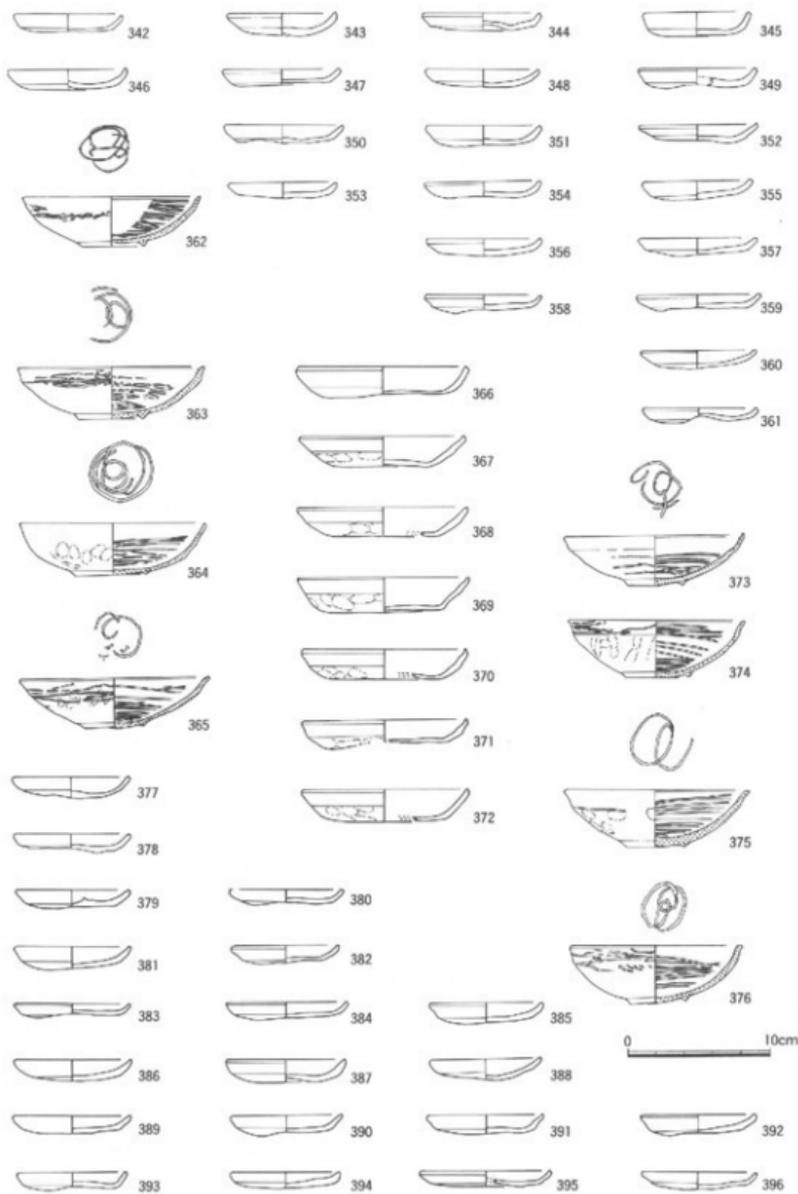
第95図 ST-02、SE-22・28・31出土遺物



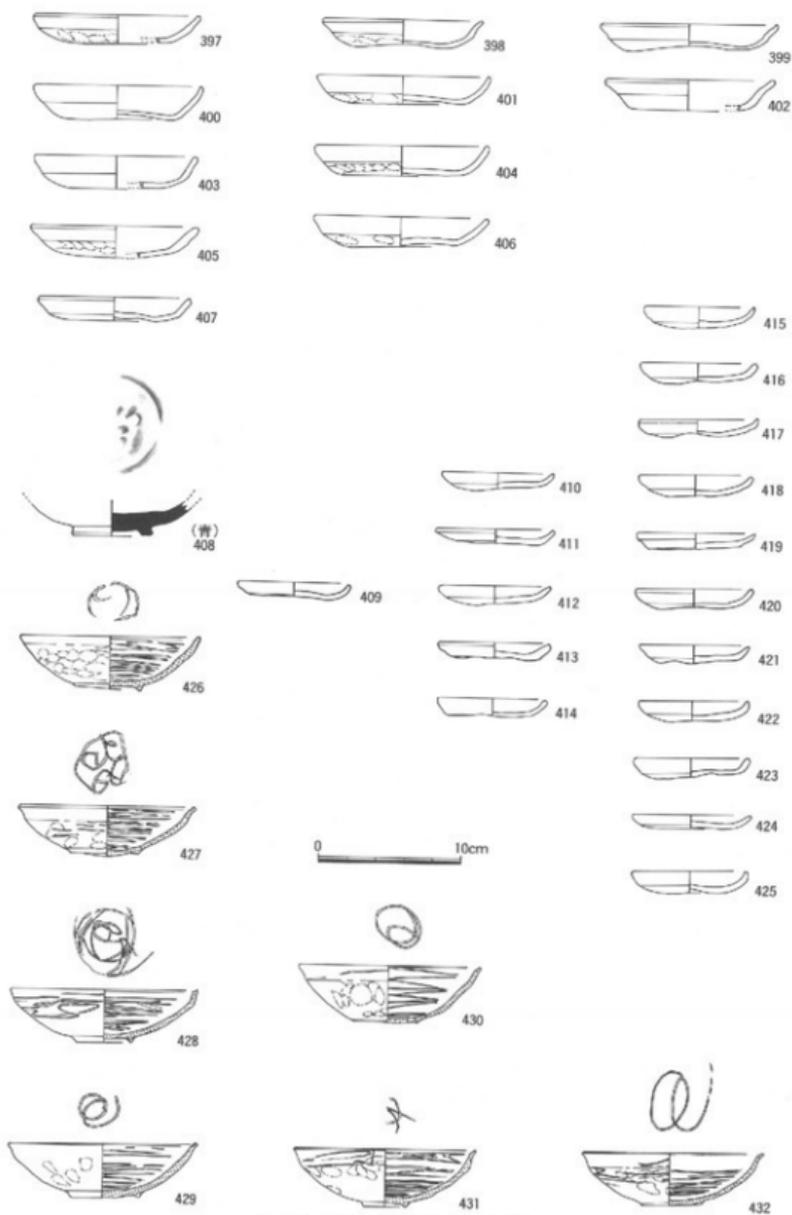
第96図 SK-56出土遺物(1)



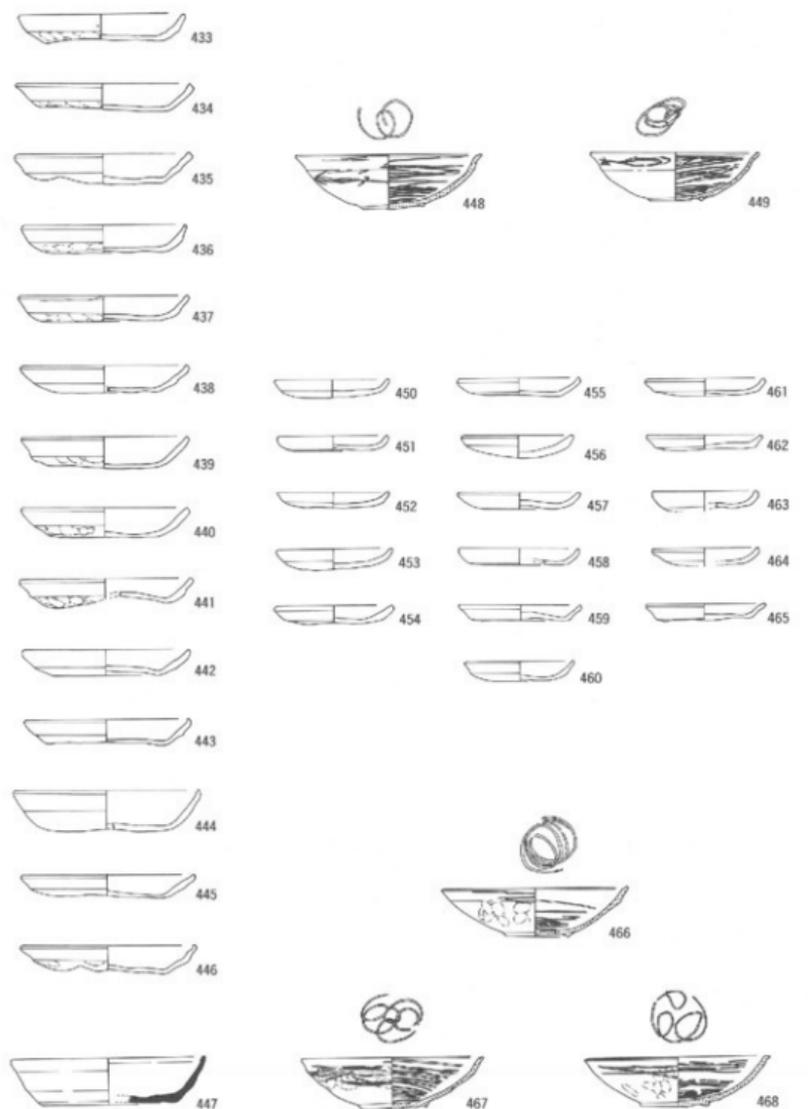
第97圖 SK-56出土遺物(2)



第98圖 S K-56出土遺物(3)



第99圖 SK-56出土遺物(4)

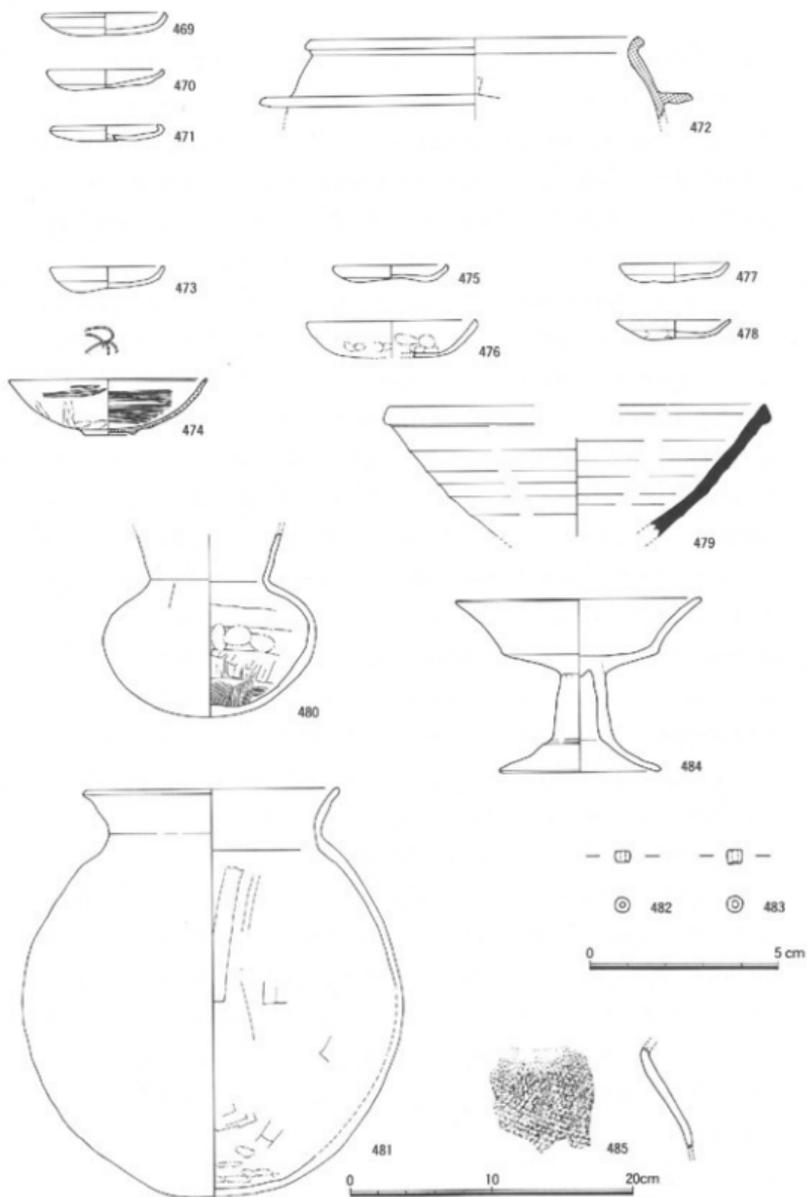


第100圖 SK-56出土遺物(5)

ち216の底部外面には、意味不明の記号の墨書がされていた。土師器皿の他には瓦器碗（214・215、336～341、362～365、373～376、426～432、448・449、466～468）、白磁（217）、青磁（408）や混入品の遺物として須恵器杯身（213・447）などが出土している。瓦器碗は214が楠葉型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化されており、内面は粗い圏線ミガキと、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-1に属する。215は大和型瓦器碗で、外面のヘラミガキは口縁部付近に限られ省略化され、内面は粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-Cに属する。336～341はいずれも大和型瓦器碗で見込みの暗文が連結輪状のもの（336～338、341）、長楕円状のもの（339）、省略されるもの（340）がある。圏線ミガキは338・340が粗く、隙間が大きい。336がⅢ-B～C、337がⅢ-B、338がⅢ-C～D、339がⅢ-B、340がⅢ-C、341がⅢ-Bに属する。362・363は大和型瓦器碗で見込みに連結輪状の暗文が施されており、Ⅲ-Bに属する。364は外面のヘラミガキは省略され、内面には粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は渦巻き状である。形態的に楠葉型と考えられ、Ⅲ-1～2に属する。365は大和型瓦器碗で、外面は口縁部付近に粗いヘラミガキが施される程度で、内面の圏線ミガキも粗い。見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-Cに属する。373は外面のヘラミガキはほとんど省略化されており、内面には粗い圏線ミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施されている。楠葉型と考えられ、Ⅲ-3に属する。374～376は大和型瓦器碗で、374はⅢ-B、375・376は外面のヘラミガキと内面の圏線ミガキの省略化が大で、Ⅲ-C～Dに属する。426は外面のヘラミガキが省略され、内面には粗い圏線ミガキ、見込みにも省略化された連結輪状の暗文が施されている。楠葉型と考えられ、Ⅲ-2に属する。427～432は大和型瓦器碗で、外面のヘラミガキ、内面の圏線ミガキ、見込みの暗文が省略化の傾向を示す。427・429・430がⅢ-C～Dに属し、428・431・432がⅢ-B～Cに属する。448・449、466～468は大和型瓦器碗で、いずれもⅢ-Cに属する。217は白磁碗で、底部は欠損するが口縁部を外反させ端部を水平に伸ばす。碗Ⅶ-1類に属する。408は青磁碗底部で、器壁が厚く断面四角形の高台を「ハ」の字状に削り出している。見込みには草花文と推定される文様が施されている。龍泉窯系碗Ⅰ-2類に属する。213は須恵器杯身で断面四角形の高台がやや内傾気味に付いており、Ⅳ型式の範疇に入ると考えられる。447は無高台で、底部外面は未調整であるⅣ-4に属する。

SK-58（第101図）

土師器皿（469～471）、瓦器釜（472）が出土している。471は口縁部を内側に折り返し



第101圖 S K-58・61・64・66・67・70・80・82・83出土遺物

ている。472は河内B₁型に属する。

S K-61 (第101図)

土師器皿(473)、大和型瓦器碗(474)が出土している。474は外面のヘラミガキが口縁部付近にのみ施され、内面にはやや粗い圏線ミガキが、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-A(新)に属する。

S K-64 (第101図)

深めの形態の土師器皿(476)が出土している。

S K-66 (第101図)

土師器皿(475)が出土している。

S K-67 (第101図)

土師器皿(477・478)、東播系須恵器片口鉢(479)が出土している。

S K-70 (第101図)

古墳時代の土師器壺(480)、土師器甕(481)、碧玉製白玉(482)が出土している。

S K-80 (第101図)

古墳時代前期に属する土師器高杯(484)が出土している。

S K-82 (第101図)

韓式系土器(485)が出土している。口縁部近くの体部の破片で、全面に格子タタキメが施されている。

S K-83 (第101図)

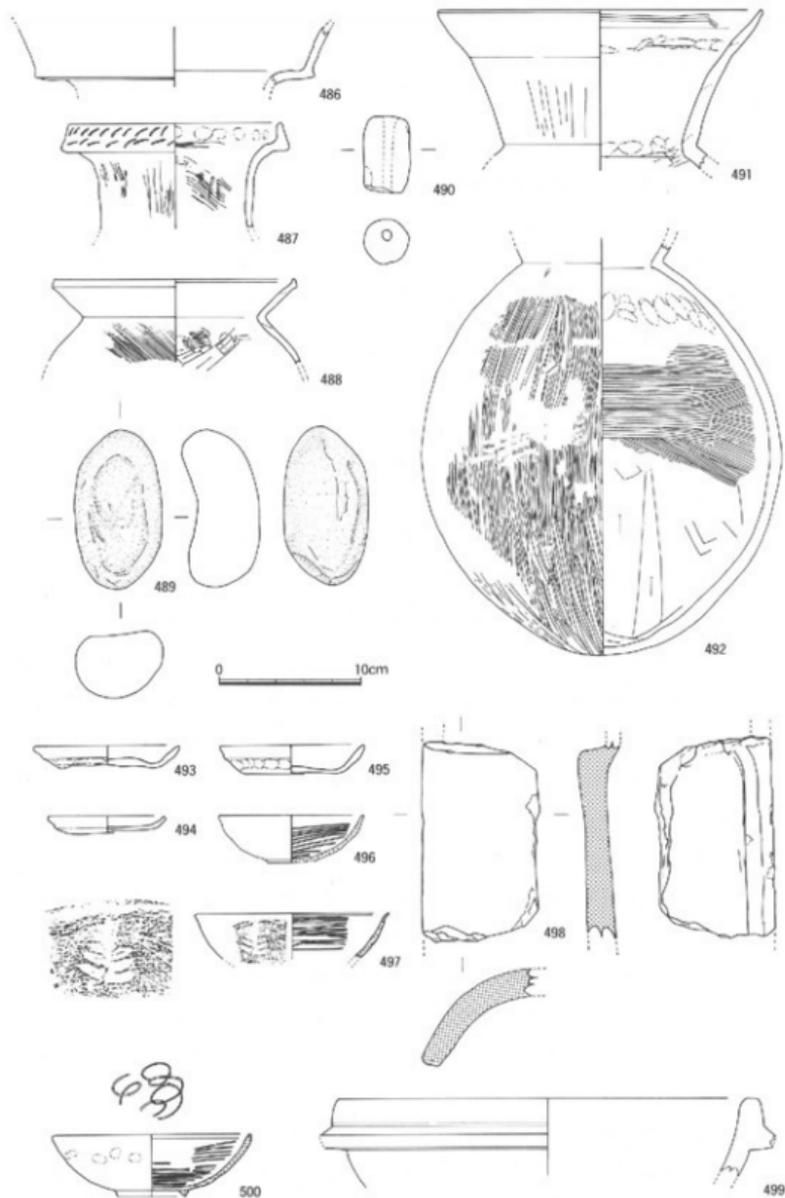
碧玉製白玉(483)が出土している。

S K-84 (第102図)

古墳時代前期に属する土師器を中心に出土している。486は壺口縁部で二重口縁を呈する。487は弥生時代中期の壺口縁部で、口縁部は受け口状に段を成し、端部外面には櫛描き烈点文が施されている。Ⅲ様式に属する。488は布留式の甕である。491は壺口縁部、492は壺の体部である。489は丸石で用途不明品。片側に凹面があり一部に熱を受けた形跡がある。490は土錘で、円柱形を呈し中心からやや外れた位置に径約7mmの孔が貫通する。

S D-39 (第102図)

土師器皿(493~495)、瓦器碗(496・497)、丸瓦(498)、滑石製石鍋(499)が出土している。瓦器碗はいずれも大和型で、496は外面のヘラミガキが省略され、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-C~Dに属する。497は外面に葉文(シダか?)が付い



第102図 SK-84、SD-39・56出土遺物

ている。内面には粗い圈線ミガキが施されており、III-B～Cに属する。498は磨耗が激しいため調整は不明である。

SD-56 (第102図)

滑石製石鍋(499)、瓦器碗(500)が出土している。瓦器碗は楠葉型で、外面のヘラミガキが省略され、内面には粗い圈線ミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施されている。III-1に属する。

SR-01 (第103図)

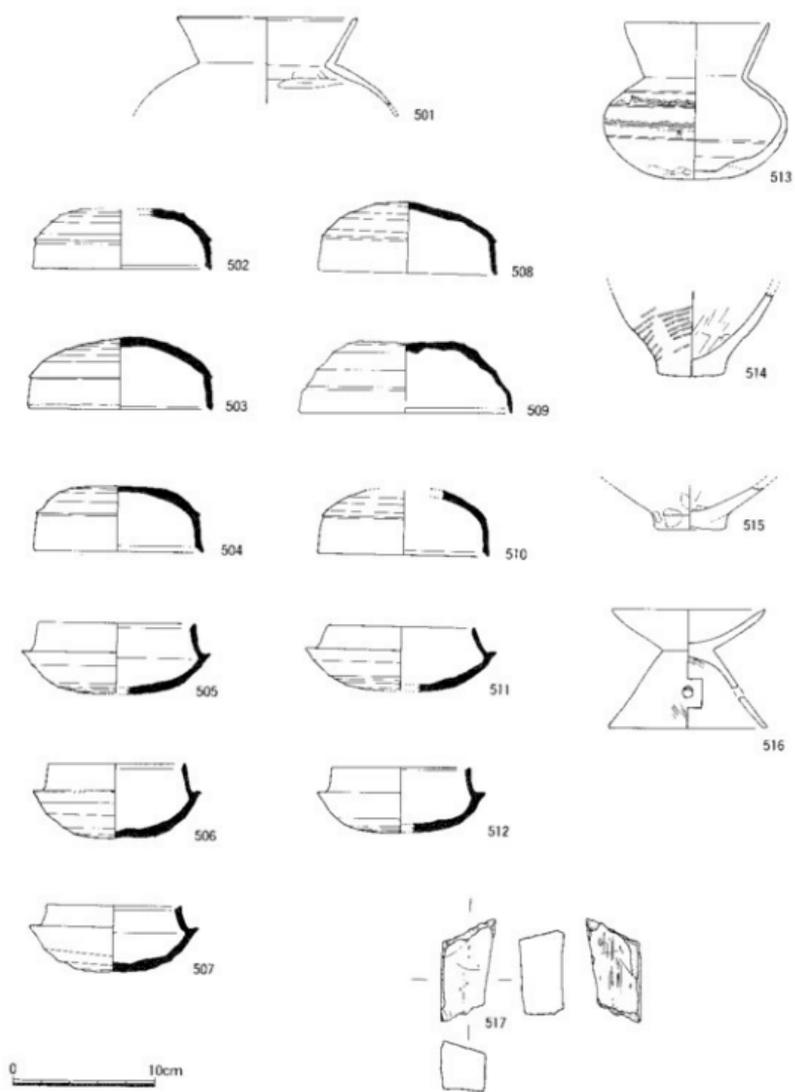
須恵器、土師器など、主に古墳時代の遺物が出土している。須恵器には杯蓋(502～504、508～510)、杯身(505・506・511・512)がある。杯蓋は縁が短く口縁端部には明確な段があり、器高は口径に対して比較的高く、天井部の約1/2に回転ヘラケズリが施されている。杯身は立ち上がりが比較的高く内傾気味で、端部は蓋と同様に内傾する明確な段を成す。I-5～II-1に属する。501は土師器の甕で、内面にヘラケズリによる調整が施され、口縁端部は内側に肥厚し折り曲げて終る。513は土師器壺で、扁平な体部に逆「ハ」の字状に開く口縁部が付き、底部は僅かに平坦な面を残す。体部には沈線と波状文が施されている。514・515は底部のみの出土で、515にはタタキメが残る。516は土師器器台で、脚部に円形の透かし孔がある。517は砥石で、砂岩製である。使用により両面に凹面を持つ。

SR-02 (第104・105図)

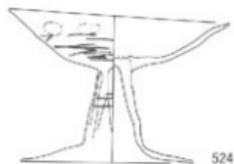
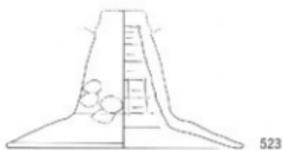
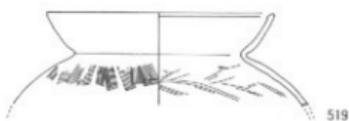
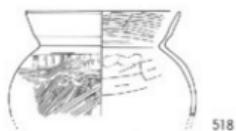
古墳時代前期の土師器の他、弥生土器、石製品が出土している。518・519は甕で、球形の体部に短い口縁が付く。519は端部が内側に肥厚する。520は器台の脚部で、四方向から円形の透かし孔が施されている。522はミニチュアの甕。521は底部のみの出土でタタキメが残る。523～525は高杯、528は小型の甕、529も甕である。532は手培り型土器で、天井部は欠損する。体部に貼り付けによる刻目突帯が付く。526は石英安山岩の板石で、表面に使用痕が認められるので砥石と考えられるが、古墳の石室石材に使用されていた可能性も考えられる。530は敲き石で、先端部に使用痕が認められる。角礫岩製で非常に堅緻である。531は凹石で530とのセットでの使用が考えられる。円盤状で、両面の中央に凹面があるが、一方の窪みが深い。砂岩製で軟らかい。

SR-05 (第105図)

石匙(533)が出土している。



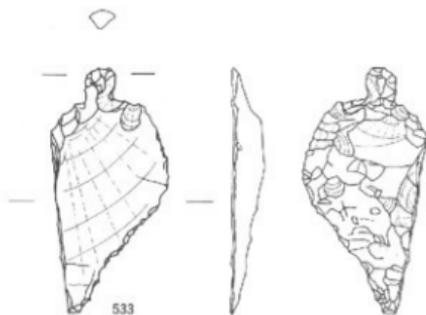
第103图 SR-01出土遗物



第104図 S R-02出土遺物



529

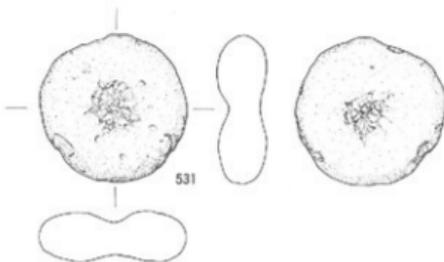


533

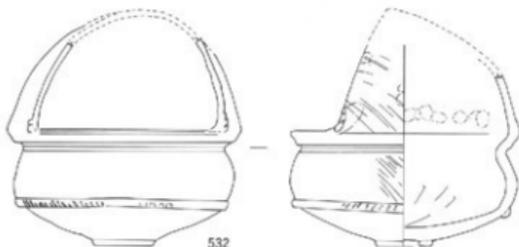
0 5 cm



530



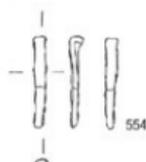
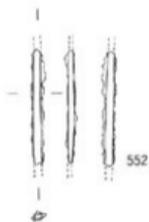
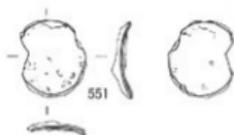
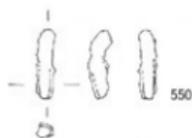
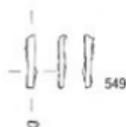
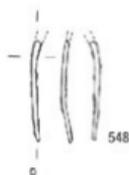
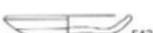
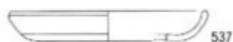
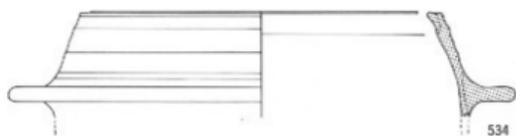
531



532

0 20cm

第105圖 S R - 02 · 05出土遺物



0 10cm

第106圖 L区SP出土遺物(1)

S P - 1608 (第106図)

瓦器釜 (534) が出土している。河内D₁型に属する。

S P - 2047 (第106図)

韓式系土器片 (536) が出土している。

S P - 2054 (第106図)

韓式系土器片 (535) が出土している。

S P - 1604 (第106図)

土師器皿 (537・540) が出土している。

S P - 1939 (第106図)

土師器皿 (538) が出土している。

S P - 2105 (第106図)

土師器皿 (539) が出土している。

S P - 1781 (第106図)

土師器皿 (541) が出土している。

S P - 1820 (第106図)

土師器皿 (542・543) が出土している。

S P - 1917 (第106図)

土師器皿 (544) が出土している。

S P - 1939 (第106図)

土師器皿 (546・547) が出土している。546はやや深めの形態を呈する。

S P - 1842 (第106図)

鉄釘 (548) が出土している。断面は角形で頭部は欠損している。

S P - 1858 (第106図)

鉄釘 (549) が出土している。断面は角形で両端は欠損している。

S P - 1920 (第106図)

鉄製品 (550) が出土している。断面は円形に近く両端は欠損している。用途不明品。

S P - 2044 (第106図)

鉄製品 (551) が出土している。円形で厚さは薄く傘型を呈する。用途不明品。何かの飾り金具か。

S P - 2038 (第106図)

鉄釘 (552) が出土している。断面は角形で両端は欠損している。

S P - 2150 (第106図)

鉄釘 (553) が出土している。厚さは薄く、形状からしてノミのような工具の刃先のようなものである。

S P - 2181 (第106図)

鉄釘 (554) が出土している。断面は角形で折り返しにより頭部を作り先端部は欠損している。

S P - 2049 (第106図)

土師器皿 (555) が出土している。

S P - 2105 (第106図)

土師器皿 (556・557) が出土している。

S P - 2121 (第106図)

土師器皿 (558) が出土している。

S P - 2122 (第106図)

土師器皿 (559) が出土している。

S P - 2158 (第106図)

土師器皿 (560～562) が出土している。

S P - 2265 (第106図)

土師器皿 (563) が出土している。

S P - 1880 (第107図)

土師器甕 (564) が出土している。外面に指押さえの痕が顕著にのこる。

S P - 1896 (第107図)

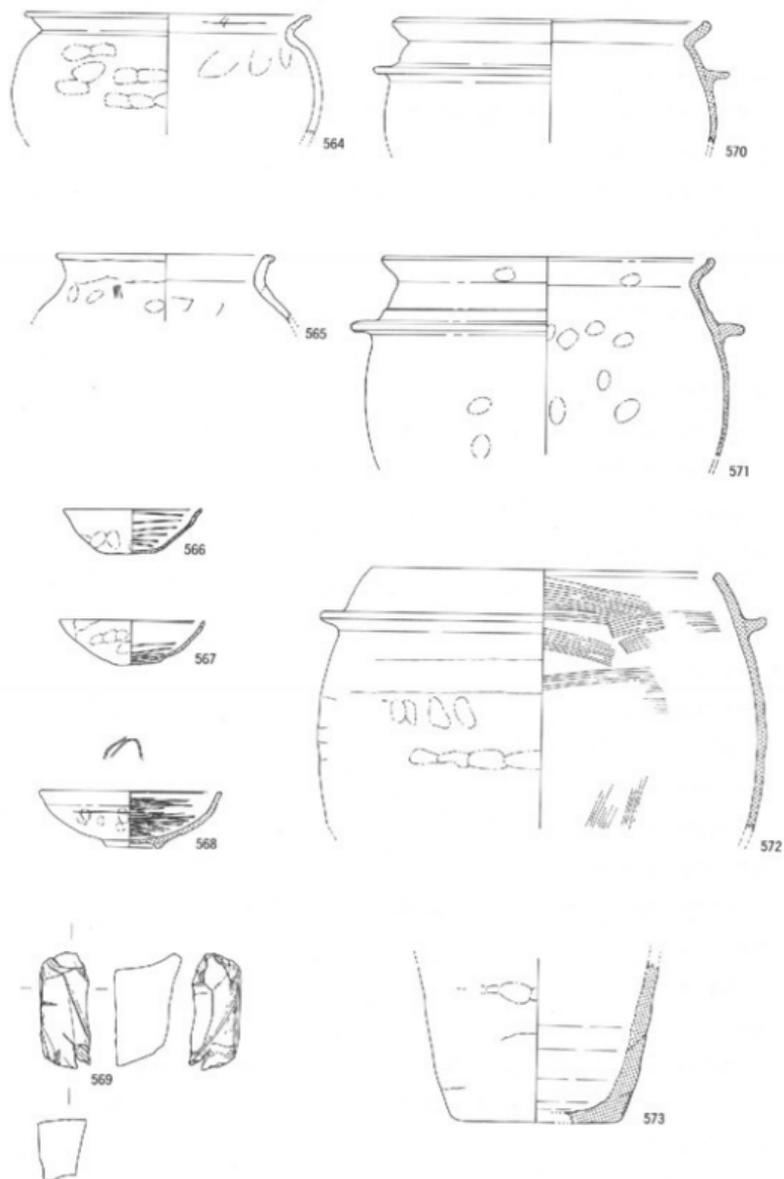
土師器甕 (565) が出土している。

S P - 1937 (第107図)

土師器皿 (545) と大和型瓦器椀 (566) が出土している。566は法量は縮小し、外面にはヘラミガキが施されず、内面には粗い圈線ミガキが施されている。Ⅲ-Eに属する。

S P - 2016 (第107図)

大和型瓦器椀 (567) が出土している。Ⅲ-Eに属する。



第107图 L区SP出土遗物(2)

S P-1845 (第107図)

大和型瓦器碗(568)が出土している。外面にはヘラミガキがほとんど施されず、内面には粗い圈線ミガキが施されている。見込みの暗文は簡略化された連結輪状のようである。III-A(新)~Bに属する。

S P-1847 (第107図)

砥石(569)の破片が出土している。

S P-1792 (第107図)

瓦器釜(570)が出土している。短い鑄と屈曲する口縁部を持ち、端部は肥厚し内側に折り返している。大和B₁型に属する。

S P-1677 (第107図)

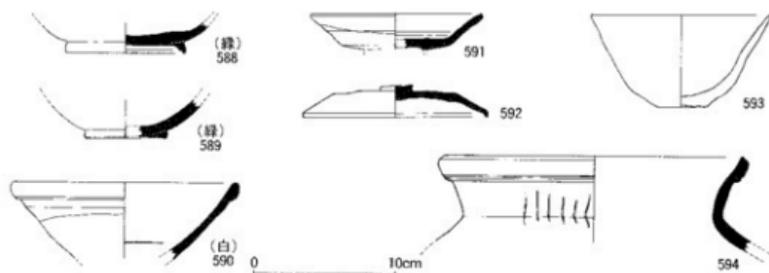
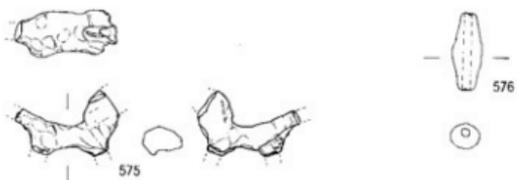
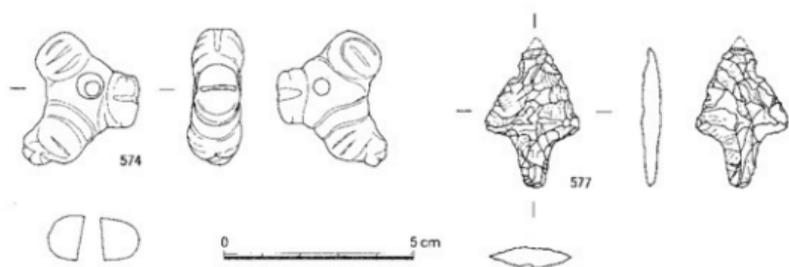
瓦器釜(571・572)が出土している。571は短い鑄と屈曲する口縁部を持ち、端部は肥厚し内側に折り返している。大和B₁型に属する。572はやや上向きに短い鑄が付き、口縁部は内傾して端部は内側に面を持つ。摂津E型に属する。

S P-2098 (第107図)

瓦器製の壺底部(573)が出土している。

包含層出土遺物(第108図)

574はヒスイ製勾玉である。青緑がかった乳白色を呈し、線刻により装飾が施されている。575は土馬で、頭部、脚部、尾部は欠損している。576は土鍾。577は有基式石畿で、やや大型である。578~587は縄文土器である。588・589は緑釉陶器碗である。588は貼り付けの有段輪高台で、589は削り出しの平高台である。590は白磁碗で、玉縁口縁を呈し、碗Ⅳ類に属する。591・592・594は須恵器で、591は皿で、底部に高台が付いていたものと推定される。592は杯蓋で、Ⅳ-2に属する。594は甕の口縁部である。593は土師器鉢である。

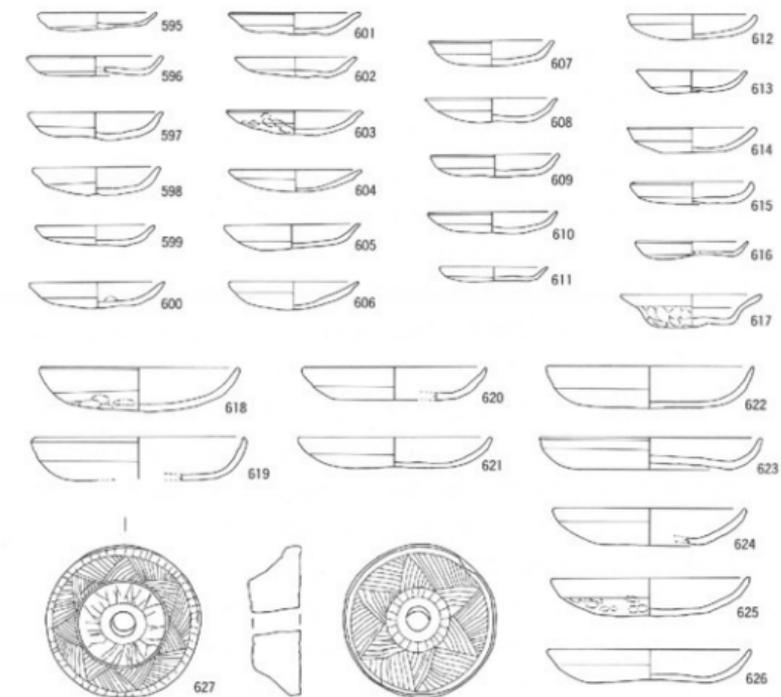


第108圖 L区包含層出土遺物

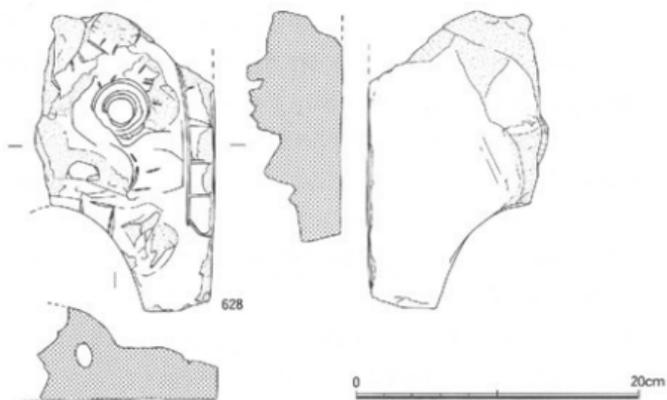
第4節 M・N区の出土遺物

ST-01 (第109・110・111・112図)

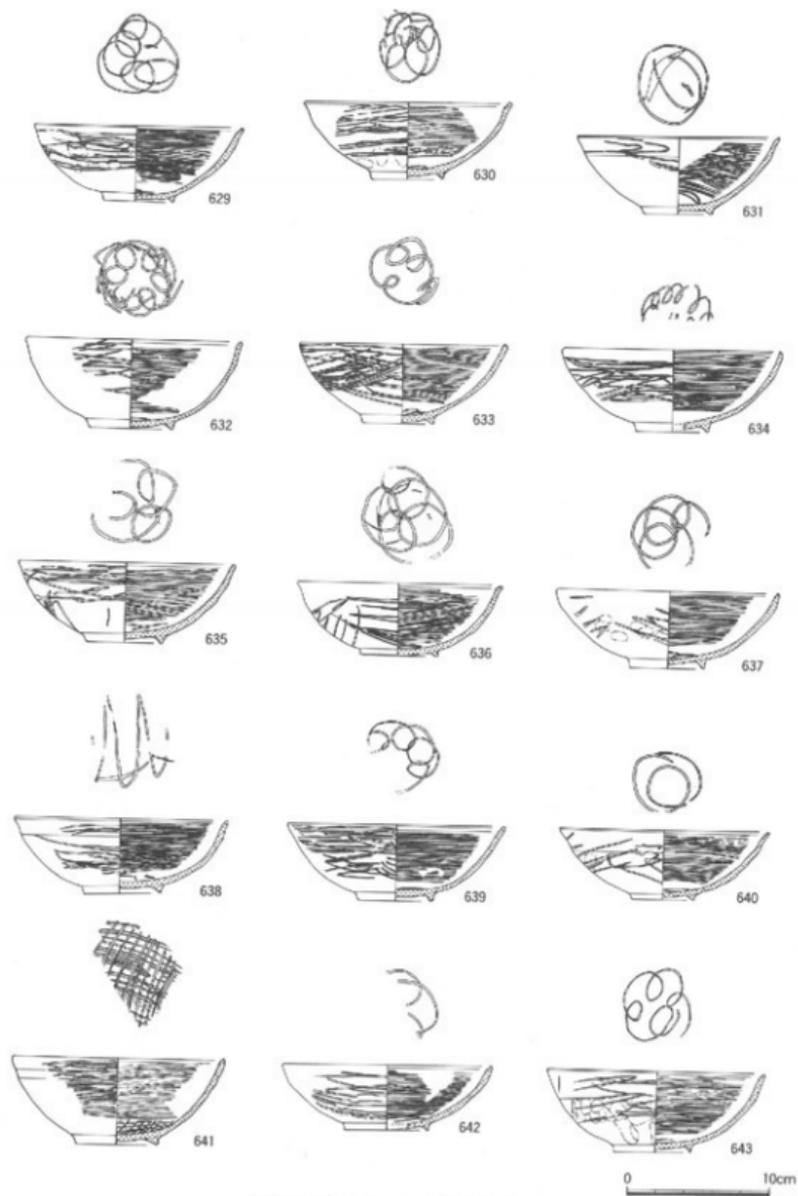
池々の遺構で、種々の遺物が出土している。595～617は土師器皿、618～626が土師器中皿である。またこの他に高台が付くもの(674～677)、口縁を内側に折り返すもの(678)が出土している。677は瓦質である。627は滑石製紡錘車で、細い線刻により花文を表現している。628は鬼瓦で、形式的には13世紀中頃のものと考えられる。629～659は瓦器椀である。629は大和型で、外面は全体の約1/2の範囲に分割ヘラミガキが施され、内面の圏線ミガキは割合密で、見込みには連結輪状の暗文が施されている。II-A～Bに属する。630も同様で大和型のII-A～Bに属する。631は大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略されているが、内面には密な圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は二重の輪を大きく描く程度である。II-B～III-A(古)に属する。632は大和型で、深い碗形態を呈し、外面には分割ヘラミガキ、内面は密な圏線ミガキが施されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。II-Aに属する。633は楠葉型で、外面は分割ヘラミガキ、内面は密な圏線ミガキで、見込みには太めの連結輪状の暗文が施されている。II-1～2に属する。634も同様で、楠葉型のII-1～2に属する。635は大和型で、外面は分割ヘラミガキ、内面に密な圏線ミガキが施され、見込みには連結輪状の暗文が施されている。II-B～III-A(古)に属する。636も同様で、大和型のII-B～III-A(古)に属する。637は楠葉型で、外面の分割ヘラミガキは省略化傾向にあり、内面は割合密に圏線ミガキが施され、見込みは連結輪状の暗文が施されている。II-2に属する。638は大和型で、外面の分割ヘラミガキは底部付近まで施され、内面は密な圏線ミガキで、見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。II-Aに属する。639は楠葉型で、外面の分割ヘラミガキは底部付近まで施され、内面には密な圏線ミガキと見込みには連結輪状の暗文が施されている。II-1に属する。640は大和型で、外面の分割ヘラミガキは省略化されており、内面の圏線ミガキもやや粗いものとなっており、見込みの暗文は簡略化された輪状になっている。III-A(古)に属する。641は大和型で、外面には密な分割ヘラミガキが施され、内面も密な圏線ミガキで見込みには斜格子状の暗文が施されている。I-Cに属する。642は大和型でIII-A(古)、643も大和型で、II-B～III-A(古)に属する。644～646は楠葉型で、644は外面の分割ヘラミガキが底部付近まで施され、II-2に属し、645・646は外面の分割ヘラミガキが省略化傾向にあり、II-2～3に属する。647～654は大和型で、外面の分割ヘラミガキがほとんど省略化され、内面の圏線ミガキも隙間が空く程度に粗くなっ



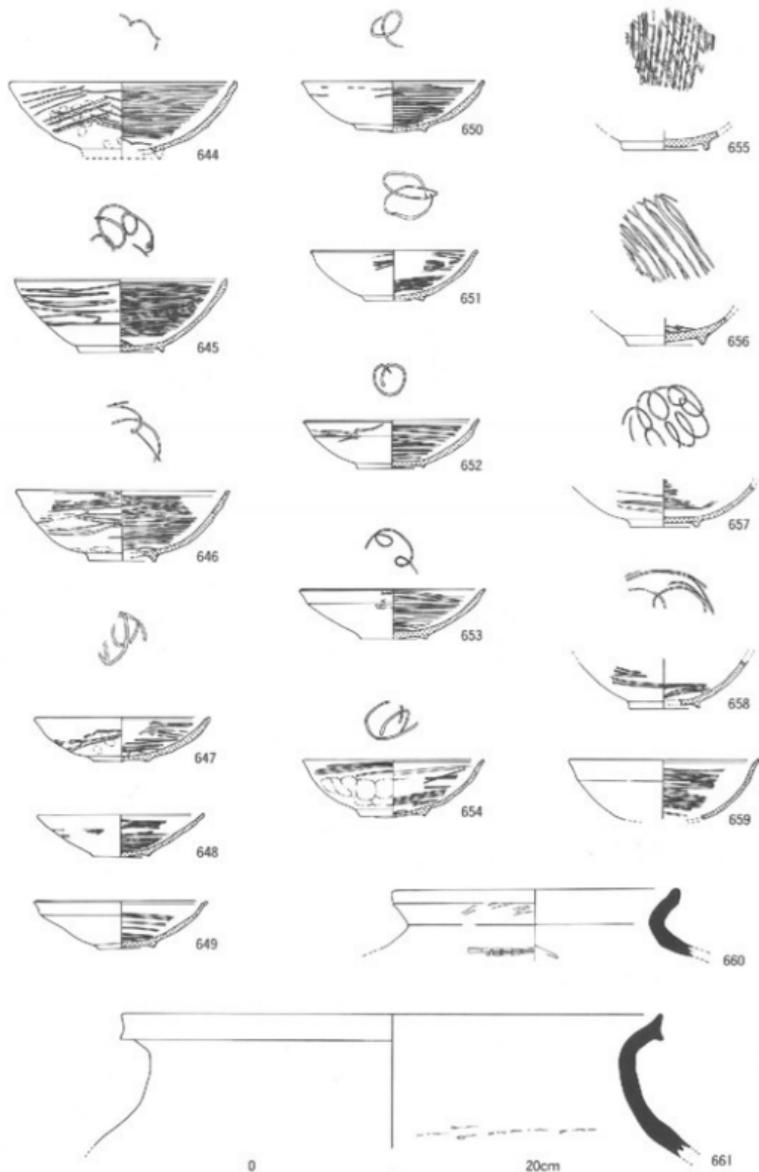
0 5 cm



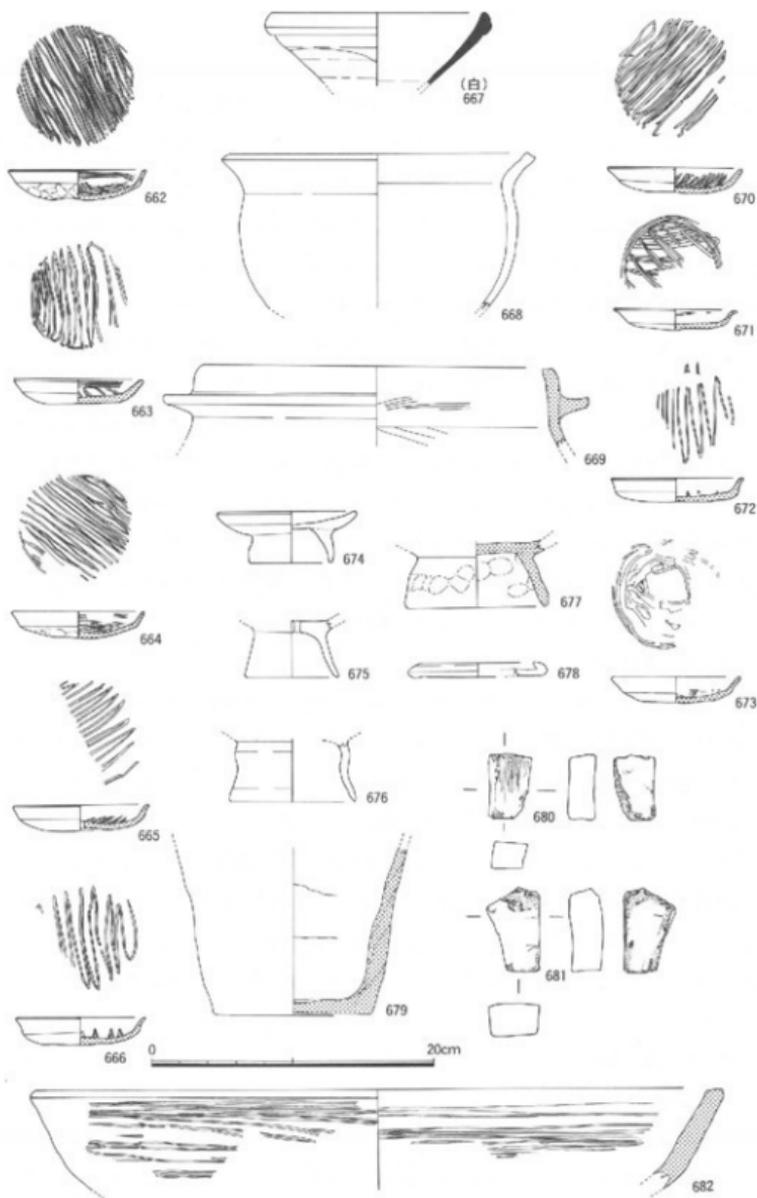
第109圖 ST-01出土遺物(1)



第110圖 ST-01出土遺物(2)



第111圖 ST-01出土遺物(3)



第112図 ST-01出土遺物(4)

ている。見込みの暗文も簡略化れた輪状のもが施されている。Ⅲ-B～Cに属する。655は底部の破片で、しっかりした高台が付き、見込みの暗文は斜格子状である。大和型か。Ⅰ-D～Ⅱ-Aに属する。656も底部の破片で、断面三角形のしっかりした高台が付き、見込みの暗文はジグザグ状である。楠葉型か。Ⅱ-2に属する。657は外面の分割ヘラミガキが底部付近にまで施され、内面の圏線ミガキも密である。見込みには連結輪状の暗文が施されている。大和型でⅡ-Bに属する。658は外面に分割ヘラミガキ、見込みには連結輪状の暗文が認められる。大和型でⅡ-Bに属する。659は大和型で、口縁部は強いナデにより外反している。外面の分割ヘラミガキは省略化され、内面にはやや粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-Bに属する。660・661は須恵器甕口縁部である。660には平行タタキメが残る。662～666、670～673は瓦器皿で、見込みの暗文はジグザグ状が主流であるが、671のようにジグザグの方向を変えて斜格子状に施したものや、673のような不定方向のものがある。667は白磁碗で、玉縁口縁を成し、碗Ⅳ類に属する。668は土師器鍋で、外面全体に煤が付着している。669は瓦器釜で、山城F型に属する。679は瓦質で底部のみの出土で、器種は不明である。680・681は砥石である。682は瓦器火鉢である。外面にヨコ方向のミガキ、内面は割合密なミガキが施されている。

S T-02 (第113図)

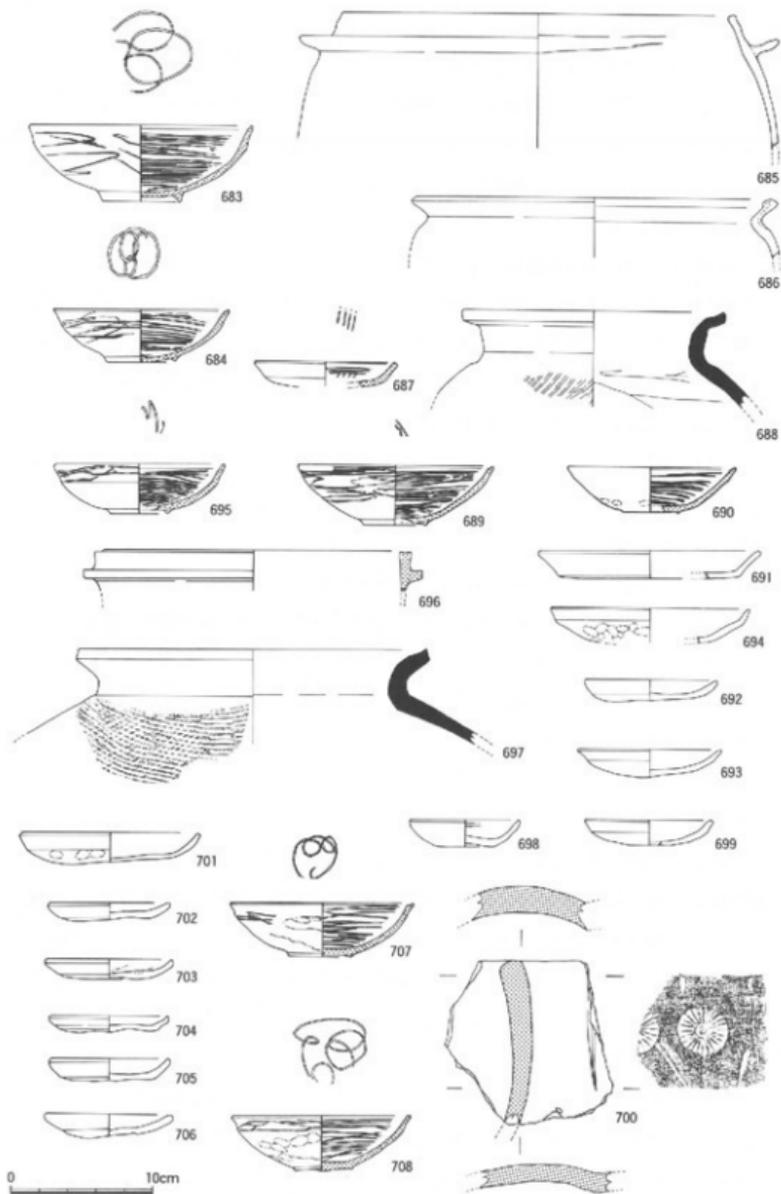
大和型瓦器碗 (683・684・689・690)、瓦器皿 (687)、土師器釜 (685・686)、須恵器甕 (688)、土師器中皿 (691) が出土している。683は外面の分割ヘラミガキが省略されており、内面は密な圏線ミガキで、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-Bに属する。684は法量が縮小化し、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-Cに属する。689は粗い分割ヘラミガキが体部全体の約1/2を超える程度に施されており、内面はやや密な圏線ミガキが施されている。Ⅲ-B～Cに属する。690は法量の縮小化が見られ、外面のヘラミガキはほとんど省略されており、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-Dに属する。685は摂津E型である。686は罫が欠損しているが、大和B₁型に属していると考えられる。

S T-03 (第113図)

土師器皿 (692・693) が出土している。

S T-04 (第113図)

土師器皿 (694・698・699)、瓦器碗 (695)、土師器釜 (696)、須恵器甕 (697)、瓦器火鉢 (700) などが出土している。695は大和型で、外面のヘラミガキは口縁部付近に施され



第113图 S T-02·03·04·05出土遗物

る程度で、内面は圏線ミガキが施されている。Ⅲ-B～Cに属する。696は直立する口縁に短い罫が付く。摂津C₁型に属する。697は器壁は厚く外面に格子タタキが施されている。700は奈良火鉢の破片で、平面形は六弁ないし、八弁の輪花形を呈するものと推定される。外面に花文のスタンプを押捺している。

ST-05 (第113図)

土師器中皿(701)、土師器皿(702～706)、瓦器碗(707・708)などが出土している。瓦器碗はいずれも大和型で、707は外面のヘラミガキがほとんど省略されており、内面には粗い圏線ミガキと、見込みに連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-Cに属する。708は外面のヘラミガキが口縁部に限られており、内面には粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状である。Ⅲ-Cに属する。

SE-01 (第114図)

瓦器釜(709)が出土している。直立する口縁に短い罫が付く。摂津E型に属する。

SE-02 (第114図)

土師器皿(710・711)、瓦器皿(712)、東播系須恵器片口鉢(713)、大和型瓦器碗(714)などが出土している。712は見込みにジグザグの方向を変えた格子状の暗文が施されている。714は外面のヘラミガキがほとんど省略されており、内面も粗い圏線ミガキが施される程度である。Ⅲ-B～Cに属する。

SE-03 (第114図)

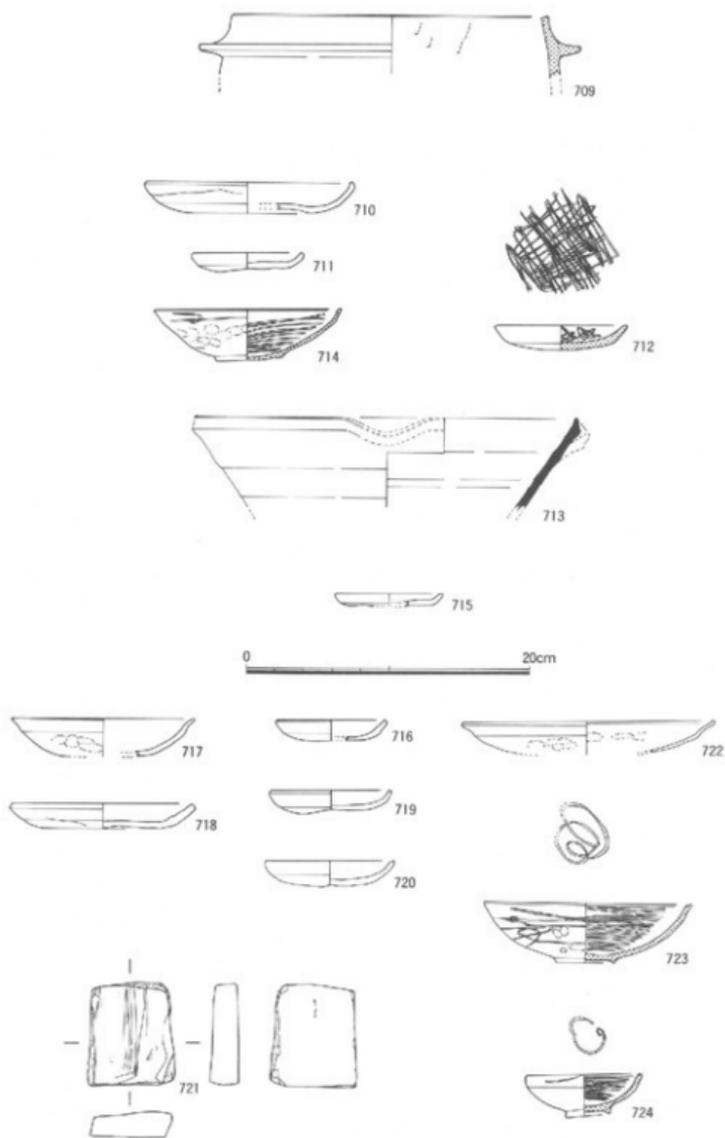
土師器皿(715・716)が出土している。

SE-04 (第114図)

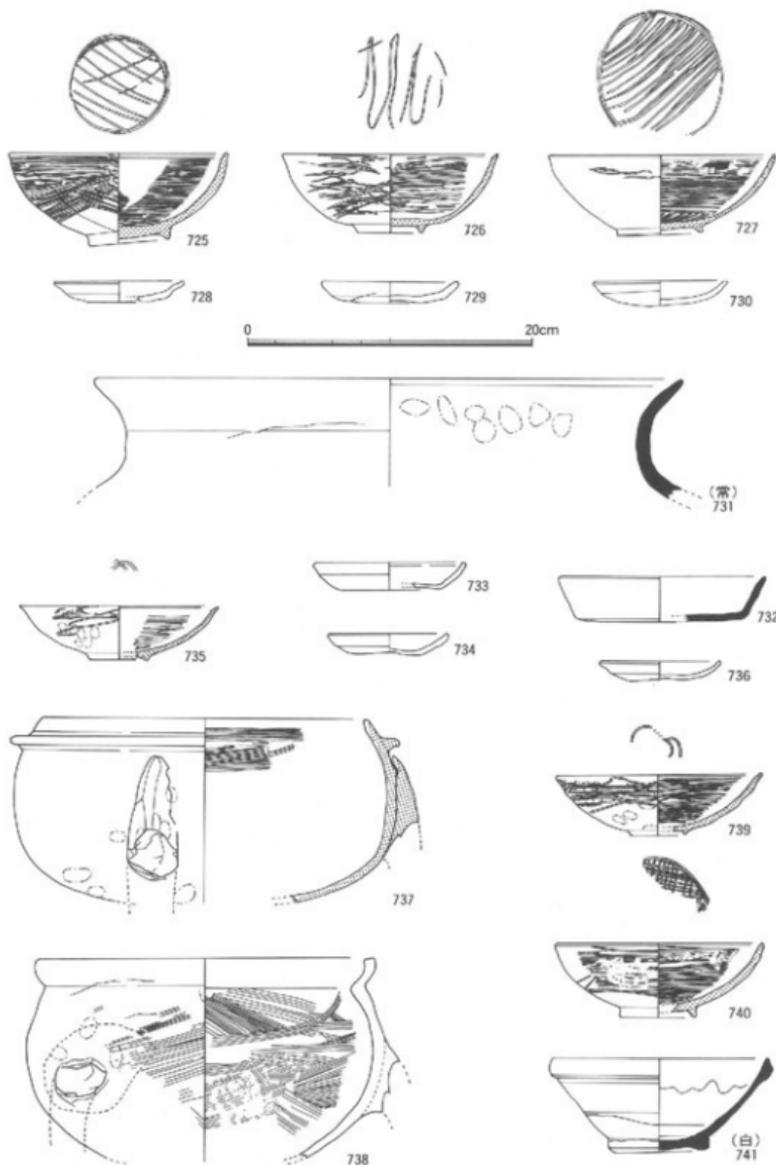
土師器皿(717～720、722)、瓦器碗(723・724)、砥石(721)などが出土している。土師器皿では717が口縁部が強いナデにより外反して終る。722はいわゆる「て」の字形口縁を呈する。723は大和型で、外面のヘラミガキに省略化が見られ、内面は割と密な圏線ミガキが施されており、見込みの暗文は連結輪状である。Ⅲ-A(新)に属する。724は小型の瓦器碗で燻しが足りないせいか全体に灰白色を呈する。

SE-08 (第115図)

瓦器碗(725～727)、土師器皿(728～730)が出土している。725は桶葉型で、外面の分割ヘラミガキは密で、内面には密な圏線ミガキが施されており、見込みの暗文はジグザグ状である。I-3に属する。726は大和型で、外面のヘラミガキは底部付近まで施され、内面は密な圏線ミガキと、見込みには間隔の大きなジグザグ状の暗文が施されている。I



第114図 SE-01・02・03・04出土遺物



第115図 SE-08・09・10出土遺物

—Dに属する。727は楠葉型で、外面にはヘラミガキがほとんど施されないが、内面には密な圏線ミガキと、見込みにジグザグ状の暗文が施されている。II-1~2に属する。728・730は口縁部が外反気味に終る。

SE-09 (第115図)

常滑甕 (731)、須恵器杯身 (732)、土師器皿 (733・734)、瓦器碗 (735) などが出土している。732は無高台の杯身で、混入品である。735は大和型で、III-A (新) に属する。

SE-10 (第115図)

土師器皿 (736)、瓦器足釜 (737)、土師器足付き鍋⁽⁸⁾ (738)、瓦器碗 (739・740)、白磁碗 (741) などが出土している。737は体部内面にハケメ調整、全体に煤が付着する。738は口縁部が受け口状で内外面ともハケメによる調整が施されている。739は大和型で、外面には体部上位の約1/2に分割ヘラミガキが施され、内面には圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状文であろう。III-A (古) に属する。740は楠葉型で、外面は底部付近まで密な分割ヘラミガキ、内面には密な圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は格子状である。II-1に属する。741は玉縁口縁で、幅広の削り出し高台を持つ。碗IV-2類に属する。

SE-11 (第116図)

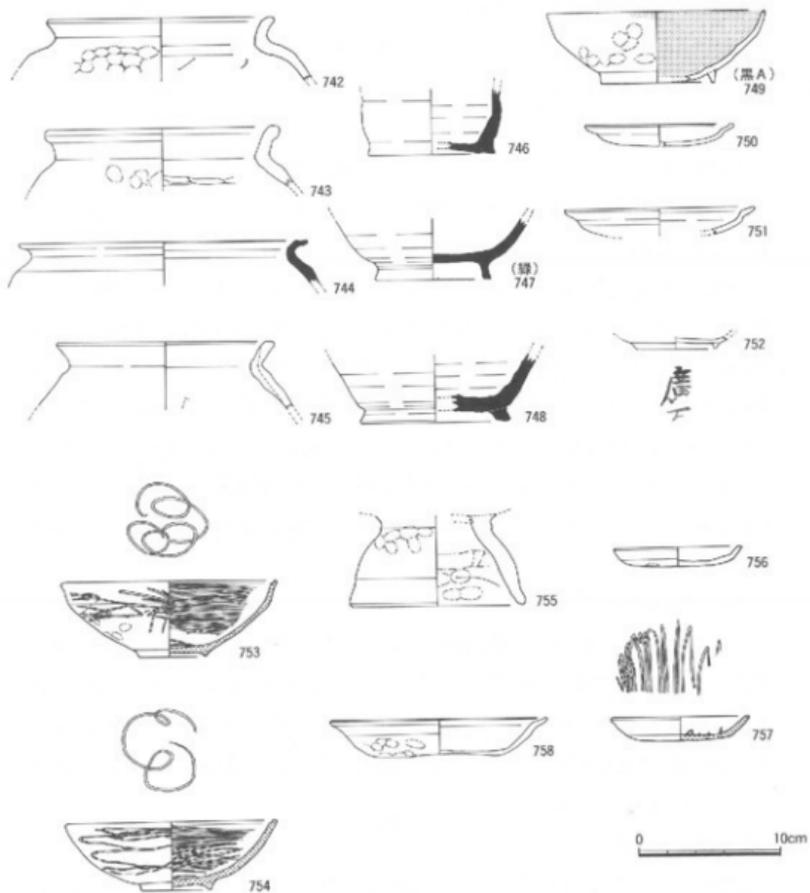
土師器甕 (742・743・745)、須恵器甕 (744)、須恵器瓶 (746)、須恵器壺 (748)、緑釉陶器碗 (747)、土師器皿 (750・751)、土師器杯 (752)、黒色土器A類 (749) など主に10世紀末~11世紀頃のものが出土している。須恵器746・748はV-2に属し、748は長頸壺か。749は畿内系III類に属する。752には底部外面に「廣正？」の墨書がある。750・751は「て」の字状口縁を呈する。

SE-12 (第116図)

瓦器碗 (753・754)、土師器高台付き皿 (755)、土師器皿 (756)、瓦器皿 (757) などが出土している。753は大和型で、外面のヘラミガキは省略化されつつも、内面の圏線ミガキは割と密に施されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。III-Bに属する。754も同様でIII-A (新) に属する。757は見込みにジグザグ状の暗文を施している。

SE-13 (第116図)

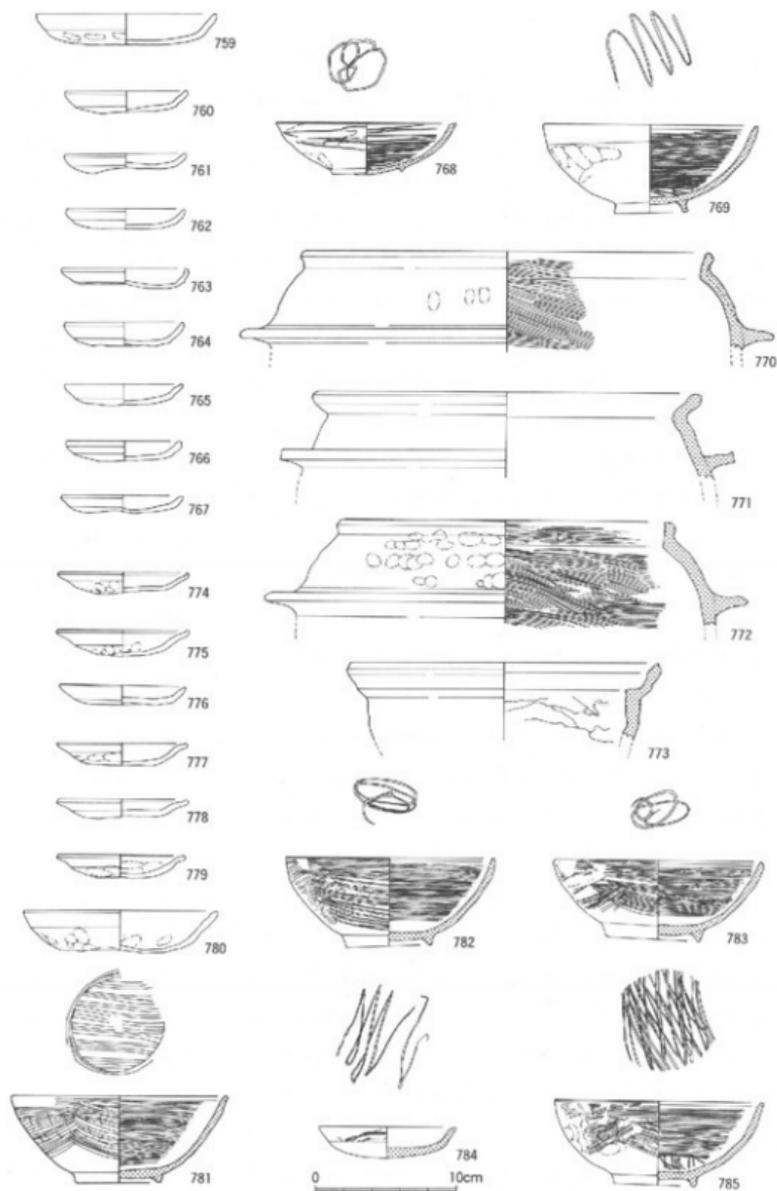
土師器皿 (758) が出土している。体部下半には指押さえの痕が顕著に残り、上半は2段ナデにより、端部は外反している。煤の付着が認められる。



第116図 SE-11・12・13出土遺物

SE-16 (第117図)

土師器皿 (759~767)、瓦器椀 (768)、瓦器釜 (770~772)、瓦器鍋 (773) などが出土している。768は大和型で、外面にはヘラミガキが僅かに施され、内面の圓線ミガキはやや粗い。見込みには連結輪状の暗文が施されている。III-B~Cに属する。770・772は口縁部を直立気味に外反させるもので、河内B₁型に属するものと考えられる。771は屈曲する口縁部で、端部を肥厚させており、大和B₁型に属する。



第117圖 SE-16・17出土遺物

SE-17 (第117図)

「て」の字状口縁を呈する土師器皿(774~779)、土師器杯(780)、桶葉型瓦器碗(769、781~783)、大和型瓦器碗(785)、瓦器皿(784)が出土している。769は桶葉型で、外面にはヘラミガキが認められなかったが、内面には圏線ミガキが密に施されている。見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。I-2~3に属する。781は体部外面の約2/3程度まで密なヘラミガキが、内面には底部まで密な圏線ミガキが施され、見込みの暗文はジグザグ状である。I-2に属する。782・783も同様であるが、見込みの暗文は連続長楕円状である。I-2~3に属する。785は外面に密な分割ヘラミガキが施され、内面には密な圏線ミガキと、見込みにはジグザグの方向を変えた斜格子状の暗文が施されている。I-Cに属する。

SE-18 (第118図)

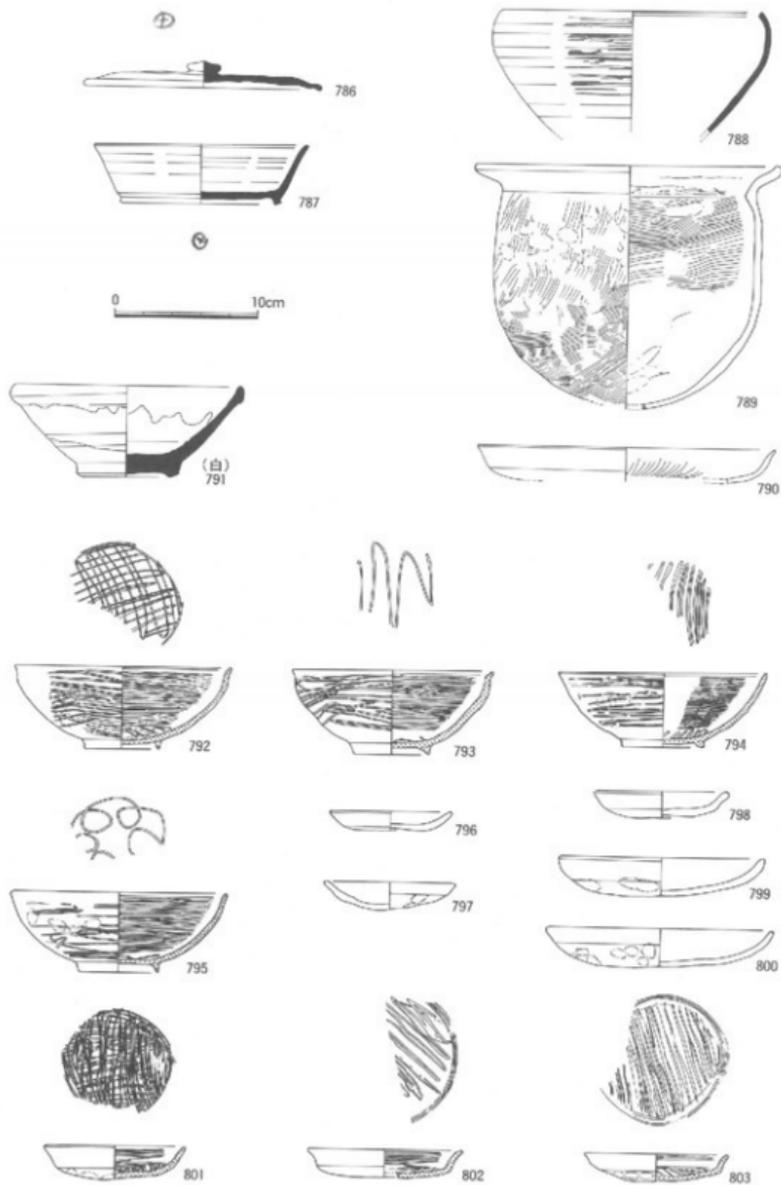
須恵器杯蓋(786)、杯身(787)、須恵器鉢(788)、土師器甕(789)、土師器盤(790)などが出土している。須恵器786・787はIV-4に属しており、786の外面と787の底部外面に墨書で「⊗」の記号が書かれている。788は鉄鉢形をしている。789は体部の上半部は粗いハケメ、過半部は細かいハケメによる調整が施されており、内面上半部にもハケメによる調整が施されている。790は内面に放射状の暗文が施されている。

SE-20 (第118図)

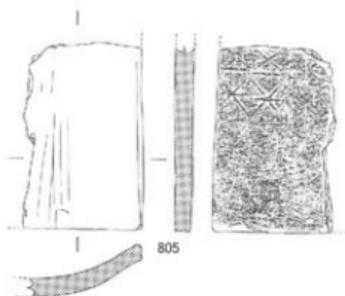
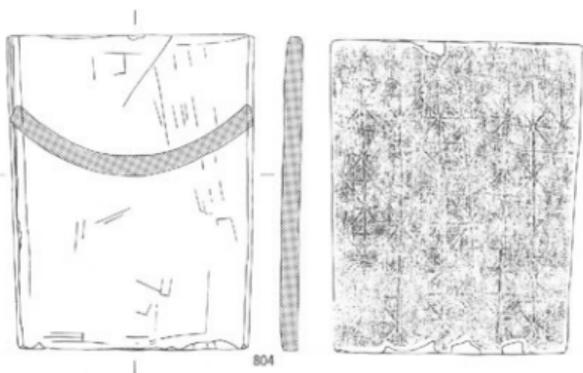
白磁碗(791)、瓦器碗(792~795)、土師器皿(796~800)、瓦器皿(801~803)などが出土している。791は碗IV-1類に属する。瓦器碗はいずれも大和型である。792は外面の底部付近まで分割ヘラミガキが施され、内面にも密な圏線ミガキが施されている。見込みにはジグザグの方向を変えた格子状の暗文が施されている。I-C~Dに属する。793も同様であるが、見込みの暗文は隙間の広いジグザグ状である。I-D~II-Aに属する。794も見込みにジグザグ状の暗文が施されており、I-Dに属する。795は外面のヘラミガキは底部付近まで施されるが粗く、内面は密な圏線ミガキが施されている。見込みに連続輪状の暗文が施されている。II-Aに属する。801は口縁端部が外側上方向に伸び、見込みにはジグザグの方向を変えた格子状の暗文が密に施されている。802・803は強いヨコナデにより口縁部が外反しており、見込みにジグザグ状の暗文が施されている。

SK-06 (第119・120図)

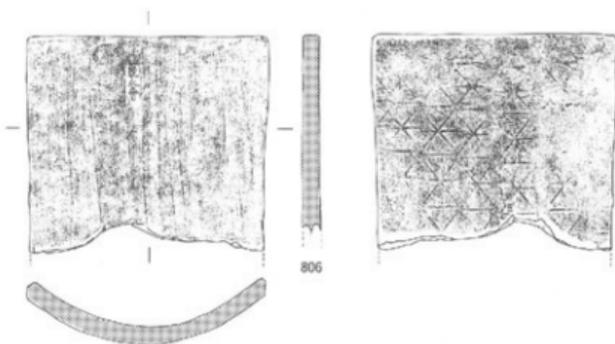
平瓦(804~806)、東播系須恵器片口鉢(807・808)、瓦器鍋(809)、常滑甕(810)、鉄釘(819)、土師器皿(811~818)などが出土している。804は完形で、凸面は菱形文に縦



第118図 SE-18・20出土遺物

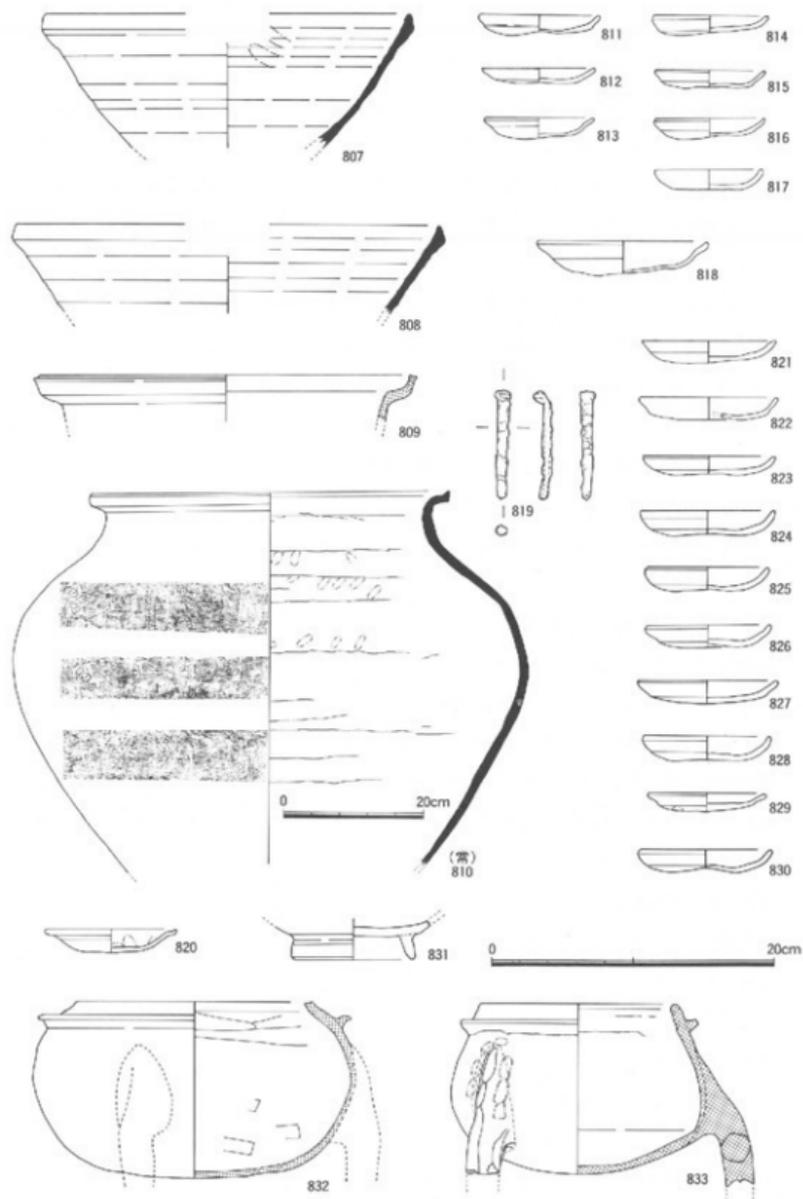


「東大寺」刻印



0 10cm

第119図 SK-06出土遺物



第120図 S K - 06 · 07 · 08出土遺物

線と横線が菱形の交点で交差するタタキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残る。805は804と同様の菱形文であるが、縦線がなく横線だけを配するタタキメである。凹面には板ナデの痕が残る。806は805と同様のタタキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残り、「東大寺」の刻印が上部に施されてあった。この瓦はタタキメの文様の特徴から、岡山県瀬戸町の万富東大寺瓦窯で焼かれたもので、平安時代末から鎌倉時代初めにかけて行なわれた、重源による東大寺再建のために焼かれた瓦である。804・805も刻印はないもののタタキメの文様から、同窯の産と考えられる。807・808は口縁端部が上方に向かって伸びている。13世紀前半頃の時期を示す。810は井筒に転用されていたので底部は欠くが、形態的には13世紀前半頃の時期を示す。

S K-07 (第120図)

「て」の字状口縁を呈する土師器皿(820)が出土している。

S K-08 (第120図)

土師器皿(821~830)、土師器椀高台(831)、瓦器足釜(832・833)などが出土している。

S K-10 (第121図)

瓦器椀(834~836)、土師器皿(837~840)、土師器釜(841)などが出土している。瓦器椀はいずれも大和型で、834・835は外面に省略化された分割ヘラミガキが施され、内面に圏線ミガキ、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-A(古)~(新)に属する。836も同様にⅢ-A(新)に属する。839は口縁部を内側に折り曲げている。841は頸部に幅広の鈔が水平に伸び、短い口縁が外側に開き気味に立ち上がる。体部は肩が張り気味に下部へ続き、体部器壁は口縁部に比べると薄い。体部の器形は長胴形と推定され、10世紀頃の大和型B₁型と考えられる。

S K-11 (第121図)

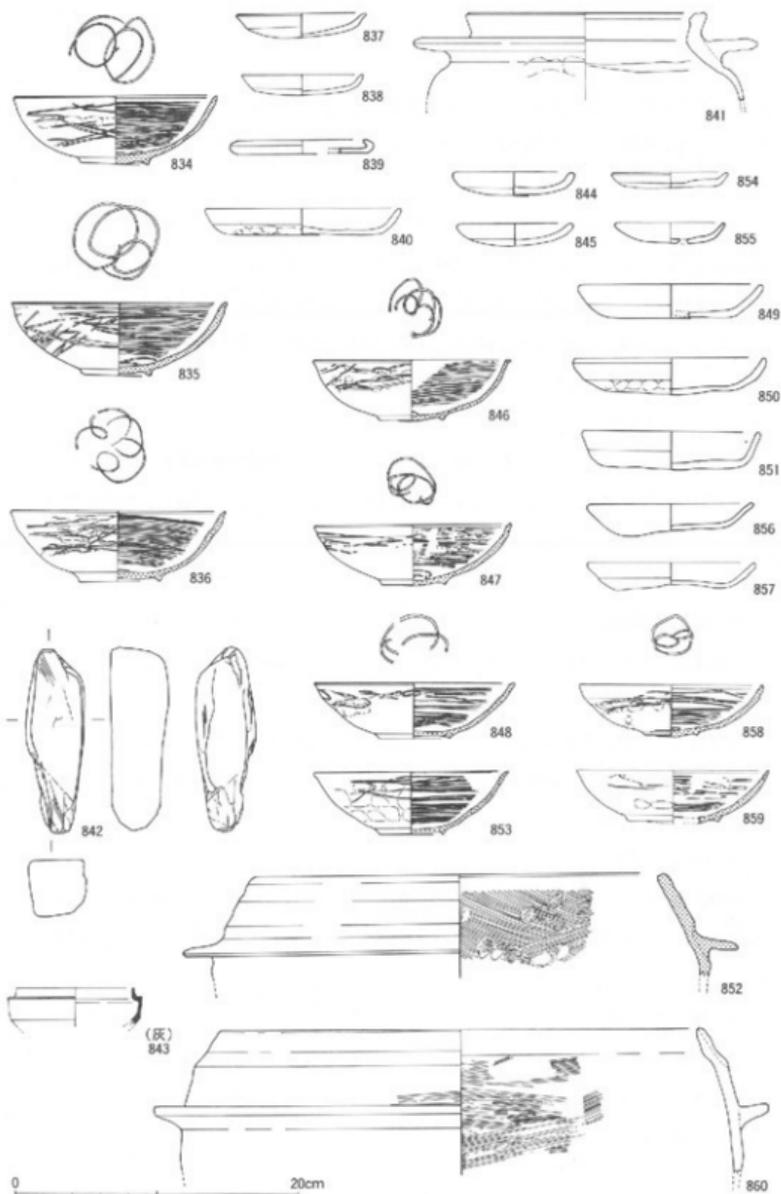
砥石(842)が出土している。

S K-12 (第121図)

灰釉陶器合子(843)の破片が出土している。

S K-14 (第121図)

土師器皿(844・845、849~851)、瓦器椀(846~848)、瓦器釜(852)が出土している。瓦器椀はいずれも大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面にはやや粗い圏線ミガキが施されている。見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-A(新)~Bに属する。852は内面に細かいハケメが施されている。河内D₁型に属する。



第121圖 SK-10・11・12・14・15・16出土遺物

SK-15 (第121図)

大和型瓦器椀 (853) が出土している。外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面にはやや粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-A (新) ～Bに属する。

SK-16 (第121図)

土師器皿 (854～857)、瓦器椀 (858・859)、土師器釜 (860) などが出土している。土師器皿は856・857が中皿である。瓦器椀はいずれも大和型で外面のヘラミガキは省略化され、内面には粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文も簡略化された連結輪状である。Ⅲ-Cに属する。860は短い鈔が上向きに付き、内側には細かいハケメ調整が施されている。河内D₁型に属する。

SK-21 (第122図)

土師器皿 (861～874)、瓦器椀 (875) が出土している。土師器皿は871～874が中皿である。瓦器椀は大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化され、内面には粗めの圏線ミガキが施されている。見込みには簡略化された連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-Bに属する。

SK-22 (第122図)

瓦器足釜 (878) が出土している。内面にはハケメによる調整が施されている。

SK-25 (第122図)

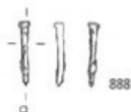
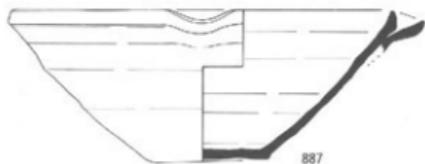
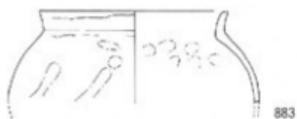
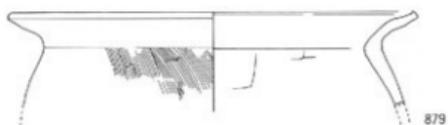
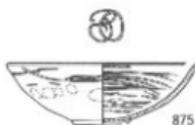
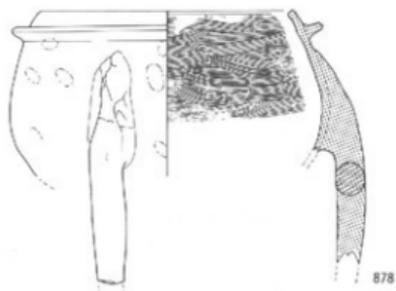
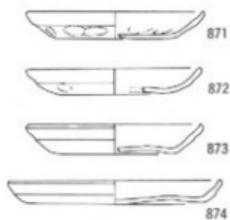
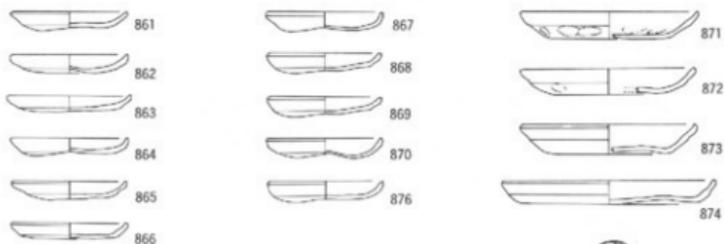
土師器皿 (876)、瓦器椀 (877) が出土している。瓦器椀は外面に省略化されたヘラミガキと、内面にやや粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状である。Ⅲ-A (新) ～Bに属する。

SK-26 (第122図)

土師器甕 (879) が出土している。体部から「く」の字に屈曲する口縁部を持ち、口縁端部上部には平坦面がある。外面にハケメによる調整、内面は板状によるナデが施されている。

SK-27 (第122図)

土師器皿 (880)、瓦器椀 (881) が出土している。881は大和型で、外面のヘラミガキは省略化され、口縁部にわずかに施される程度で、内面は粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-Cに属する。



0 20cm

第122図 S K-21・22・25・26・27・28・29・34・35・40出土遺物

S K-28 (第122図)

瓦器碗(882)、土師器甕(883)が出土している。882は大和型でⅢ-A(新)に属する。883は球形の体部に短い口縁部が外側に開いて付き、端部は上面に平坦面を持つ。内外面とも指押さえの痕が顕著に残る。

S K-29 (第122図)

大和型瓦器碗(884)が出土している。内面に粗い圈線ミガキが施され、Ⅲ-Cに属する。

S K-34 (第122図)

土師器皿(885・886)が出土している。

S K-35 (第122図)

東播系須恵器片口鉢(887)が出土している。

S K-40 (第122図)

鉄釘(888)が出土している。断面は長方形で、頭部は折り返している。

S K-46 (第123図)

大和型瓦器碗(889)が出土している。Ⅲ-A(新)に属する。

S K-54 (第123図)

瓦器皿(890)が出土している。口縁部は強いヨコナデにより外反する。見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。

S K-55 (第123図)

瓦器碗(891~895)、土師器皿(896~900)、瓦器釜(901~903)が出土している。瓦器碗は大和型で、Ⅲ-A(新)~Bに属する。901は肩部のやや下方に短い鑿を付け、口縁部は「く」の字状に屈曲し端部は内側に折り返す。大和B₂型に属する。902は口縁部を欠くが901と同様の形態を示し、大和B₂型に属する。903は直立気味の口縁部に幅の狭い鑿を水平にめぐらしている。山城F型に属する。

S D-29 (第124図)

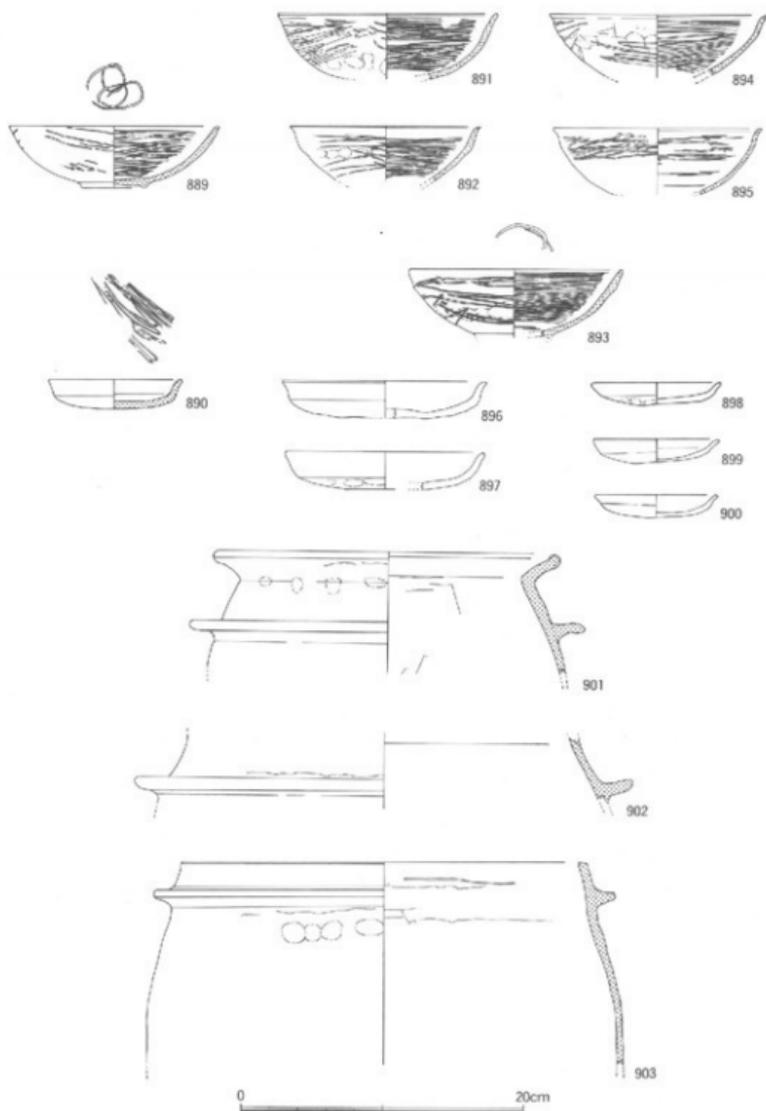
土師器皿(904)が出土している。

S D-30 (第124図)

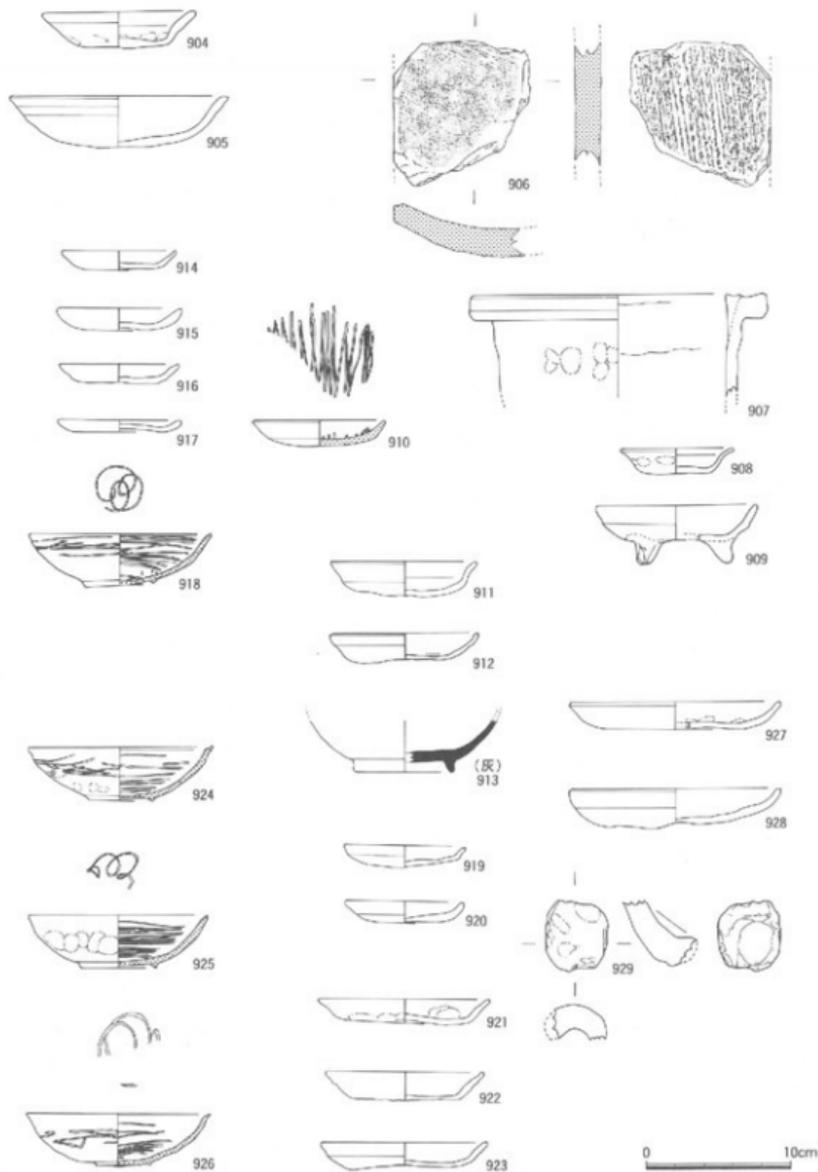
土師器皿(905)が出土している。

S D-31 (第124図)

平瓦片(906)、土師器釜(907)、土師器皿(908)、土師器脚付き皿(909)などが出土している。906は凹面に布目、凸面に縄目が残る。907は口縁部に続けて厚い鑿を水平にめぐらしている。



第123図 S K-46・54・55出土遺物



第124图 S D-29·30·31·32·33·39·40·42·45出土遗物

ぐらしている。11世紀頃の摂津C₁型に属する。909は破片での出土であるが、底部が三足の形態を呈するものと推定される。

SD-32 (第124図)

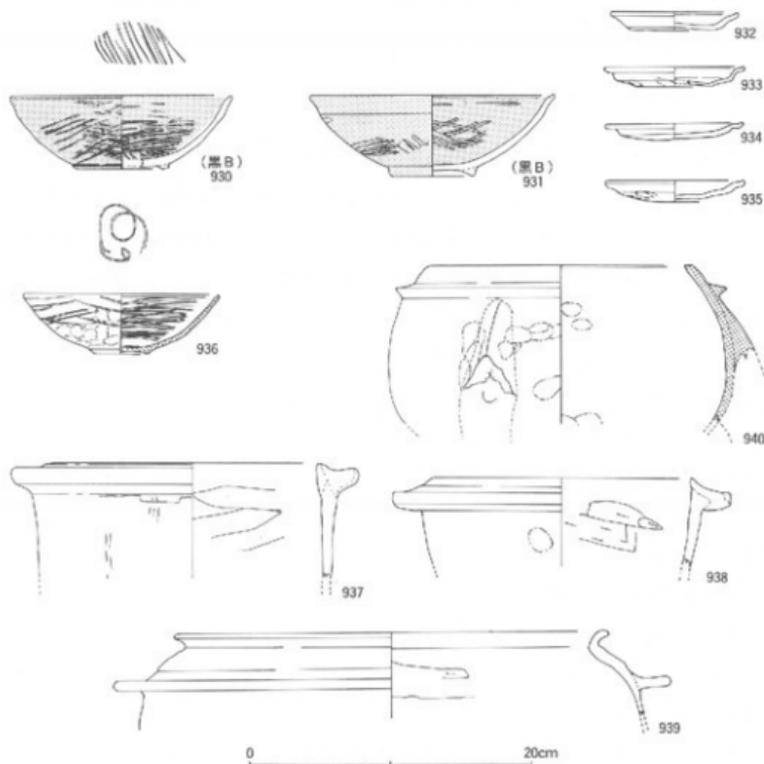
瓦器皿 (910) が出土している。見込みにはジグザグ状の暗文が施されている。

SD-33 (第124図)

土師器皿 (911・912)、灰釉陶器碗 (913) が出土している。

SD-39 (第124図)

土師器皿 (914~917)、大和型瓦器碗 (918) などが出土している。918は見込みの暗文はほとんど省略され、内面に粗い圏線ミガキが施されている。III-B~Cに属する。



第125図 S I - 01・02出土遺物

SD-40 (第124図)

土師器皿(919・920)が出土している。

SD-42 (第124図)

土師器皿(921~923)、瓦器碗(924~926)が出土している。924は大和型で、外面のヘラミガキは省略され、内面に粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-B~Cに属する。925は外面のヘラミガキは省略されるが、内面には割と密な圏線ミガキが施されている。楠葉型か。Ⅲ-1~2に属する。926は大和型で、外面のヘラミガキは省略化されており、内面には粗い圏線ミガキと、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-Cに属する。

SD-45 (第124図)

土師器皿(927・928)、土師質不明品(929)が出土している。929は中空状で脚部の破片か。全体に熱を受けているようで、赤味を帯びている。

SI-01 (第125図)

黒色土器B類(930・931)、土師器皿(932~935)、瓦器碗(936)、土師器釜(937~939)などが出土している。930・931とも強いヨコナデにより口縁部は外反する。畿内系V類に属する。932~935は「て」の字状口縁を呈する。936は大和型で、体部全体の約1/2に粗いヘラミガキが施され、内面にはやや粗い圏線ミガキと、見込みには連結輪状の暗文が施されている。Ⅲ-Cに属する。937・938は口縁部に続けて厚い鋳をめぐらし、外面にはハケメが残る。両者とも摂津C₂型に属する。939は「く」の字状に外反する口縁部に細い鋳を水平にめぐらしている。河内B₁型に属する。

SI-02 (第125図)

瓦器足釜(940)が出土している。

SP-37 (第126図)

平瓦(941)が出土している。にぶい橙色を呈し、凸面に罫目が残る。

SP-75 (第126図)

大和型瓦器碗(942)が出土している。Ⅲ-Bに属する。

SP-118 (第126図)

瓦器足釜(943)が出土している。

SP-106 (第126図)

埋納ピットと考えられる遺構から瓦器皿(944・945)、土師器皿(946~953)などが一括して出土している。944は見込みの暗文はジグザグ状で、945はジグザグの方向を変えて

十字状に施されている。

S P-38 (第126図)

土師器高台付皿 (955) が出土している。

S P-43 (第126図)

滑石製紡錘車 (954) が出土している。

S P-75 (第126図)

土師器皿 (956) が出土している。

S P-131 (第126図)

瓦器皿 (957) が出土している。口縁端部はヨコナデにより外反している。見込みの暗文はジグザグの方向を変え十字状に施されている。

S P-157 (第126図)

土師器皿 (958) が出土している。

S P-161 (第126図)

土師器皿 (959) が出土している。

S P-200 (第126図)

土師器皿 (960) が出土している。「て」の字状口縁を呈する。

S P-203 (第126図)

土師器甕 (961)、瓦器碗 (962) が出土している。961は短い頸部が直立気味に立ち上がり口縁部は外反している。口縁端部の上面は平坦面を成す。962は大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化されており、内面には粗い圈線ミガキが施されている。III-Dに属する。

S P-244 (第127図)

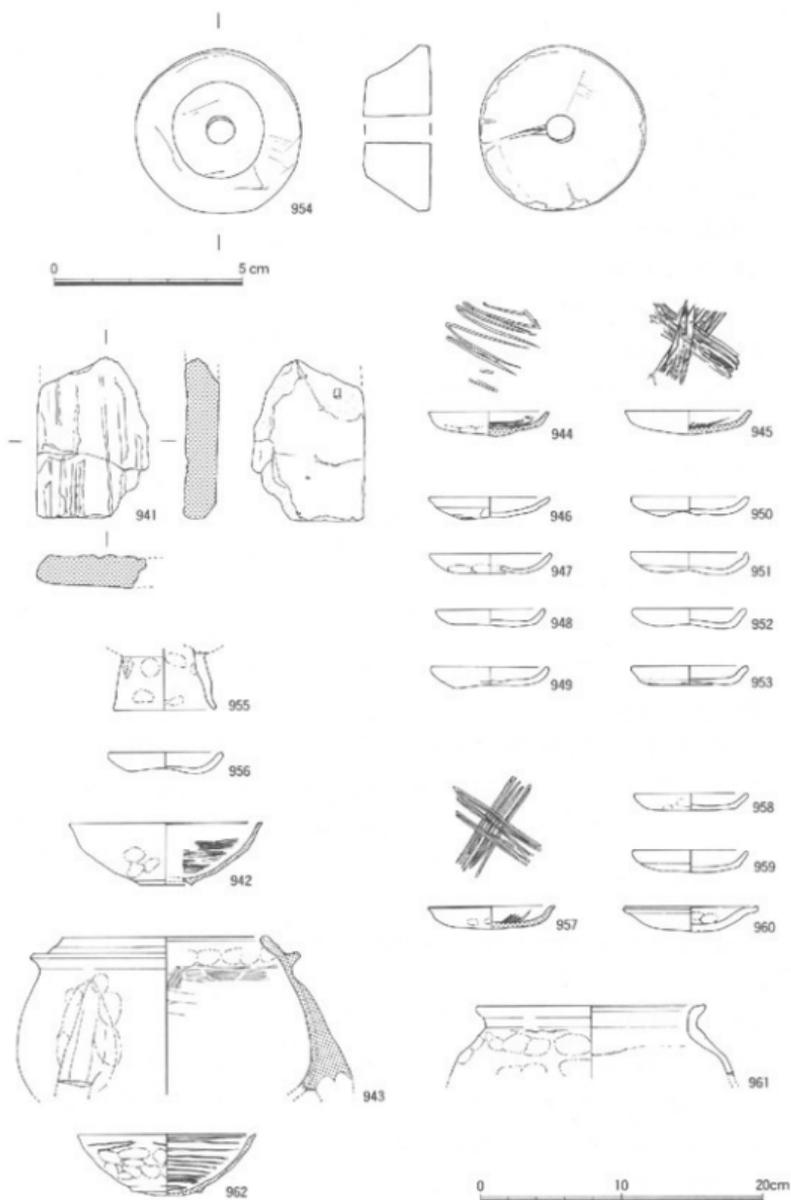
緑釉陶器 (963) が出土している。焼成は軟質で胎土の色は赤橙色を呈する。洛北産であろう。

S P-260 (第127図)

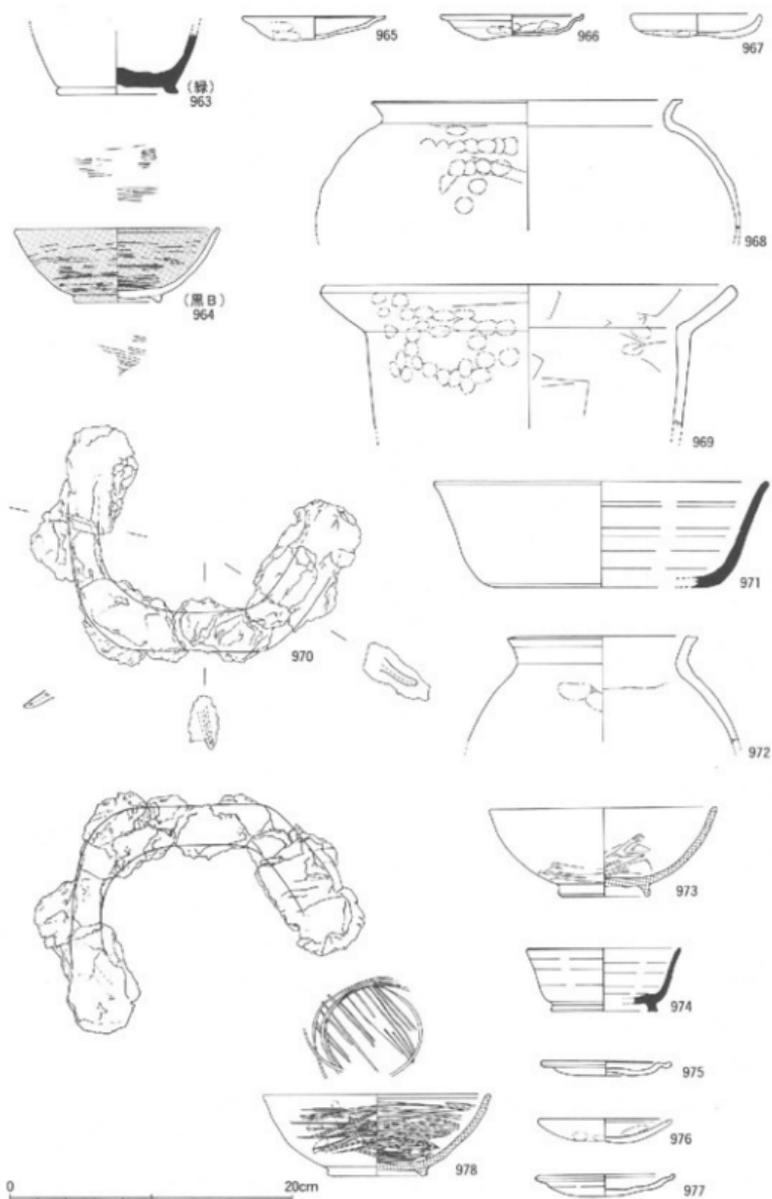
黒色土器B類 (964)、土師器皿 (965・966) が出土している。964は内外面とも密なヘラミガキが施され、見込みの暗文はジグザグ状に隙間無く施されている。畿内系V類に属する。965・966は「て」の字状口縁を呈する。

S P-270 (第127図)

土師器皿 (967) が出土している。



第126图 M·N区SP出土遗物(1)



第127図 M・N区SP出土遺物(2)

S P-269 (第127図)

土師器甕(968)が出土している。球形の体部から短い口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部は外反してやや斜め上方向に尖り気味に終る。端部の上面には平坦面を持ち、体部外面に指押さえの痕が残る。

S P-280 (第127図)

土師器鍋(969)が出土している。

S P-320 (第127図)

鉄製の鍬先(970)が出土している。

S P-322 (第127図)

須恵器杯(971)が出土している。V型式のものか。

S P-408 (第127図)

土師器甕(972)、土師器皿(975)が出土している。975の口縁部は「て」の字状を呈する。

S P-425 (第127図)

瓦器椀(973)が出土している。深い椀形態を呈し、内外面に不定方向の太いミガキが施されている。口縁端部に沈線は無く、和泉型と考えられる。

S P-426 (第127図)

須恵器杯身(974)が出土している。断面四角形の高台が外側に向かって「ハ」の字状に付く。

S P-433 (第127図)

土師器皿(976)、瓦器椀(978)が出土している。976は口縁部がやや屈曲気味に伸び、端部は肥厚し丸く納める。「て」の字状口縁の一種か。978は外面の分割ヘラミガキは密で、内面の園線ミガキも密に施されている。見込みは粗いジグザグ状の暗文が施されている。楠葉型で、I-2に属する。

S P-434 (第127図)

土師器皿(977)が出土している。「て」の字状口縁を呈する。

S P-436 (第128図)

土師器甕(979~981)、土師器杯(982・983)、黒色土器A類(984~990、992)土錘(991)などが出土している。979・981は球形の体部に短い口縁部が付き、端部は外反気味に開き端部上面には平坦面を持つ。体部の外面には指押さえの痕が顕著に残る。980は端部が肥厚し、水平方向に伸びて丸味を帯びて終る。982・983は口縁部はヨコナデにより

外反し、体部下半には指押さえの痕が残る。黒色土器A類はやや浅めの碗形態に、小さな輪高台が付く。992には底部外面には線刻で「廣」の字が彫られている。畿内系III類に属する。

SP-439 (第128図)

土師器杯(993)が出土している。

SP-721 (第128図)

土師器皿(994)が出土している。

SP-593 (第128図)

土師器杯(995)、瓦器碗(999)が出土している。瓦器碗は桶葉型で、法量の縮小化がみられ、外面のヘラミガキは省略されている。内面には粗い圏線ミガキが施されている。IV-2に属する。

SP-558 (第128図)

土師器皿(996)が出土している。「て」の字状口縁を呈する。

SP-537 (第128図)

大和型瓦器碗(997)が出土している。外面には粗いヘラミガキが施され、内面にもやや粗い圏線ミガキが施されている。見込みの暗文は連結輪状のようである。III-A(新)~Bに属する。

SP-604 (第128図)

鉄釘(998)が出土している。断面長方形を呈しており、頭部を折り曲げている。

SP-672 (第128図)

紡錘形の土錘(1000)が出土している。

SP-734 (第128図)

鉄釘(1101)が出土している。断面は長方形で、頭部は欠損している。

SP-757 (第129図)

埋納ピットと考えられる遺構で、土師器皿(1002~1016)が一括で出土している。

SP-766 (第129図)

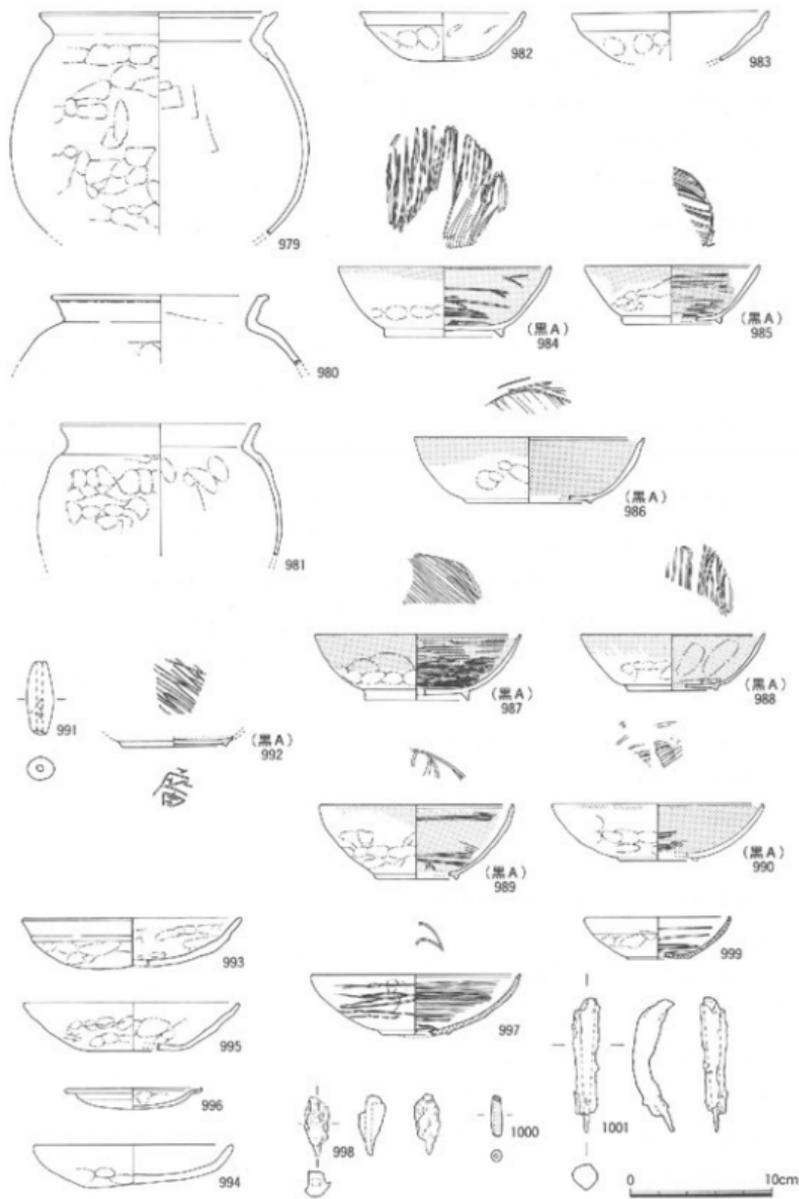
土師器皿(1017)が出土している。

SP-770 (第129図)

土師器皿(1018・1019)が出土している。

SP-799 (第129図)

埋納ピットと考えられる遺構から土師器皿(1020~1044)が一括で出土している。



第128図 M・N区SP出土遺物(3)

S P-803 (第129図)

瓦器椀 (1045・1050・1051)、土師器皿 (1046~1048)、土師器杯 (1049) が出土している。瓦器椀は1045が大和型で、外面の分割ヘラミガキは省略化され、内面には粗い圈線ミガキが施されている。Ⅲ-Bに属する。1050・1051が桶葉型でそれぞれⅢ-3、Ⅳ-2に属する。

S P-805 (第129図)

土師器皿 (1052)、土師器杯 (1053)、瓦器椀 (1054) が出土している。1054は大和型で、Ⅲ-B~Cに属する。

S P-812 (第129図)

瓦器椀 (1055~1057) が出土している。いずれも大和型で、1055がⅢ-B~C、1056がⅢ-C~D、1057がⅢ-Bに属する。

S P-823 (第130図)

黒色土器A類 (1058・1059) が出土している。1058は畿内系Ⅲ類、1059が畿内系Ⅱ類に属する。

S P-826 (第130図)

土師器皿 (1060~1062)、土師器中皿 (1063・1064) が出土している。

S P-835 (第130図)

土師器盤 (1065) が出土している。

S P-878 (第130図)

土師器中皿 (1066)、土師器皿 (1067) が出土している。

S P-883 (第130図)

土師器杯 (1068) が出土している。

S P-919 (第130図)

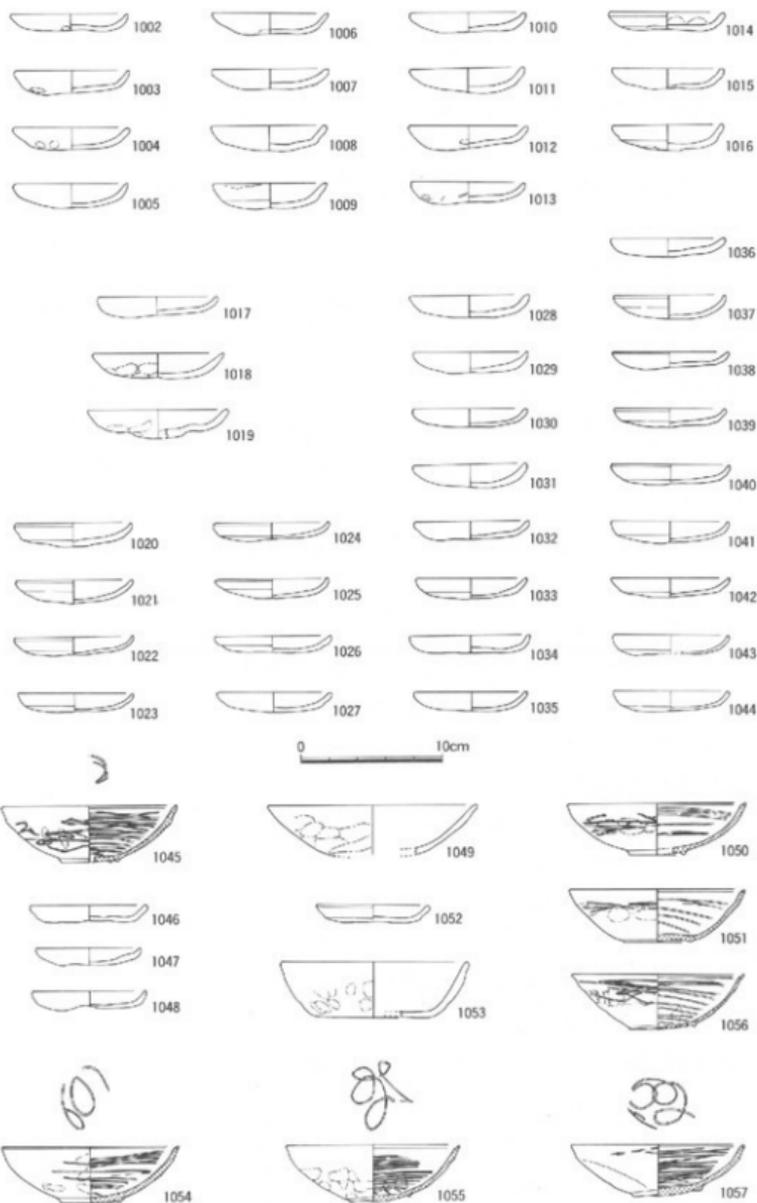
埋納ピットと考えられる遺構で、土師器皿 (1069~1078) が一括で出土している。

S P-1095 (第130図)

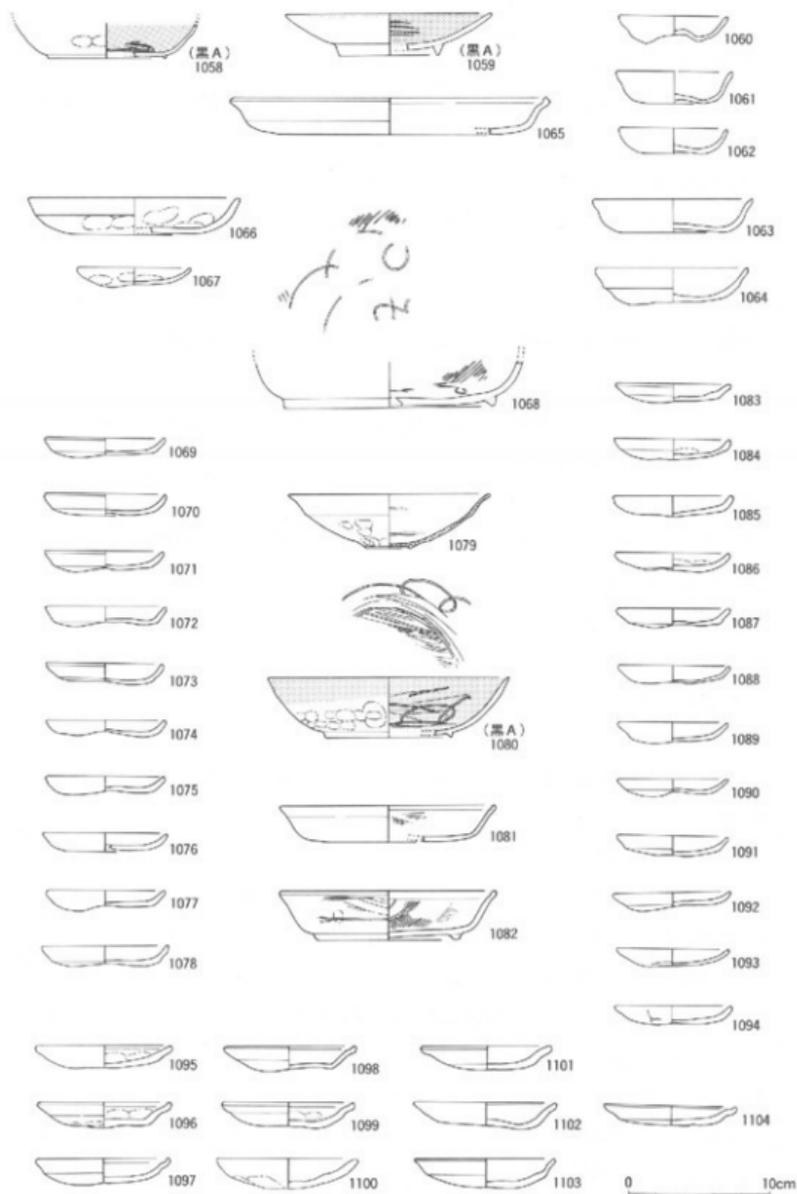
和泉型瓦器椀 (1079) が出土している。Ⅳ-1に属する。

S P-1164 (第130図)

黒色土器A類 (1080) が出土している。内面に連結輪状の暗文が施され、見込みはジグザグ状の暗文が隙間なく施されている。畿内系Ⅲ類に属する。



第129图 M·N区SP出土遗物(4)



第130图 M・N区SP出土遗物(5)

S P-1178 (第130図)

土師器杯(1081)が出土している。無高台で、口縁部は肥厚し内側に向かって丸く納めている。

S P-1078 (第130図)

土師器杯(1082)が出土している。低い高台が付き、口縁端部は肥厚し内側に向かって丸く納めている。

S P-1189 (第130図)

埋納ピットと考えられる遺構から土師器皿(1083~1094)が一括で出土している。

S P-1193 (第130図)

埋納ピットと考えられる遺構から土師器皿(1095~1104)が一括で出土しており、いずれも「て」の字状口縁を呈する。

S P-1304 (第131図)

黒色土器B類(1106)が出土している。細く低い高台が付き、畿内系IV類に属する。

S P-1228 (第131図)

土師器杯(1105)が出土している。

S P-1383 (第131図)

土師器皿(1107)が出土している。

S P-1403 (第131図)

瓦器椀(1108)、土師器甕(1109)が出土している。1108は大和型で、Ⅲ-A(新)~Bに属する。

S P-1438 (第131図)

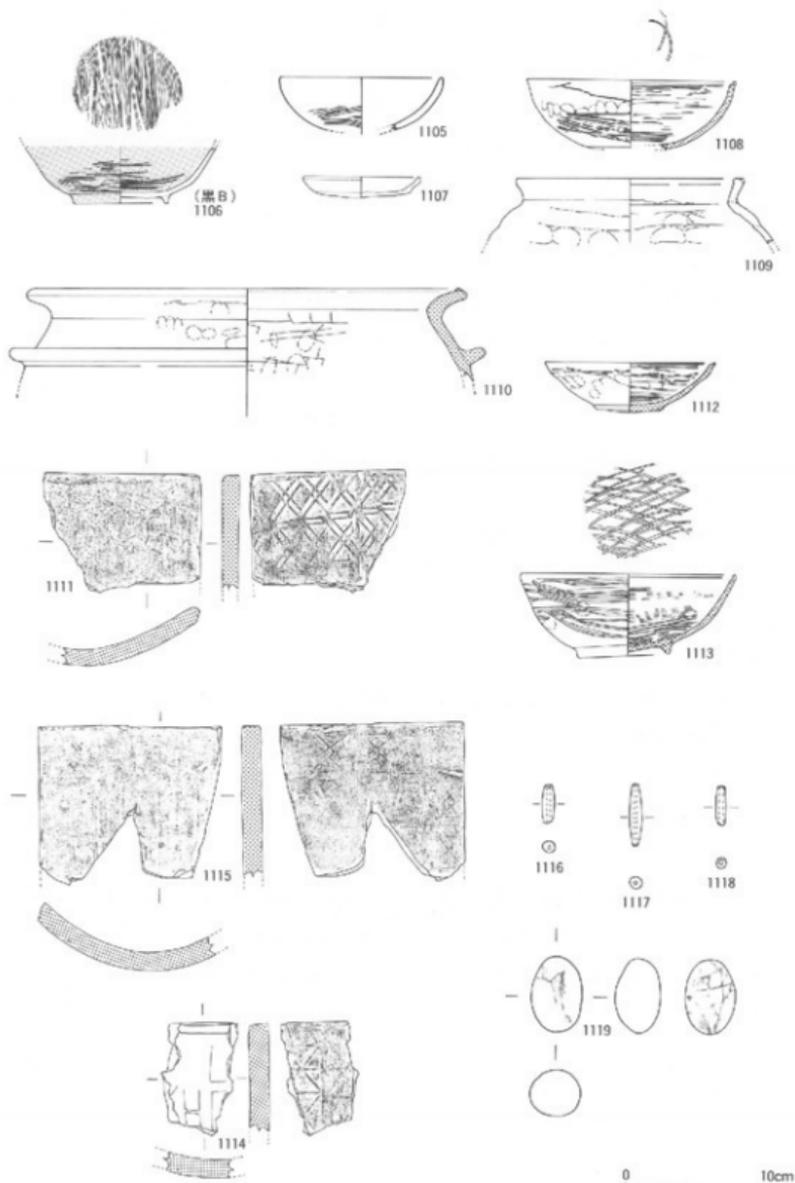
瓦器釜(1110)が出土している。「く」の字形に屈曲する口縁部に短い鈎をめぐらし、口縁端部は肥厚し内側に折り返している。大和B₁型に属する。

S P-1436 (133) (第131図)

平瓦(1111)が出土している。凸面は菱形文に横線が交差する2重線のタクキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残る。万富瓦窯産である。

S P-1440 (第131図)

瓦器椀(1112)が出土している。大和型で、外面のヘラミガキはほとんど省略化されており、内面には粗い圏線ミガキが施されている。Ⅲ-Cに属する。



第131图 M·N区SP出土文物(6)

SP-1583 (第131図)

瓦器腕(1113)が出土している。口縁端部は尖り気味にやや丸く納め、沈線はやや下がった位置に施されている。外面は密な分割ヘラミガキが底部付近まで施されており、内面には密な圈線ミガキと、見込みにはジグザグの方向を変えた斜格子状の暗文が施されている。桶葉型で、I-2に属する。

SP-1515 (第131図)

平瓦(1114)が出土している。凸面は菱形文に横線が交差するタタキメが施されており、凹面には板ナデの痕が残る。万富瓦窯産である。

SP-1509 (第131図)

平瓦(1115)が出土している。凸面は、菱形文に横線が交差する2重線のタタキメが施されており、凹面は板ナデと布目痕が残る。万富瓦窯産である。

SP-681 (第131図)

紡錘形の土鍾(1116)が出土している。

SP-1142 (第131図)

紡錘形の土鍾(1117)が出土している。

SP-1305 (第131図)

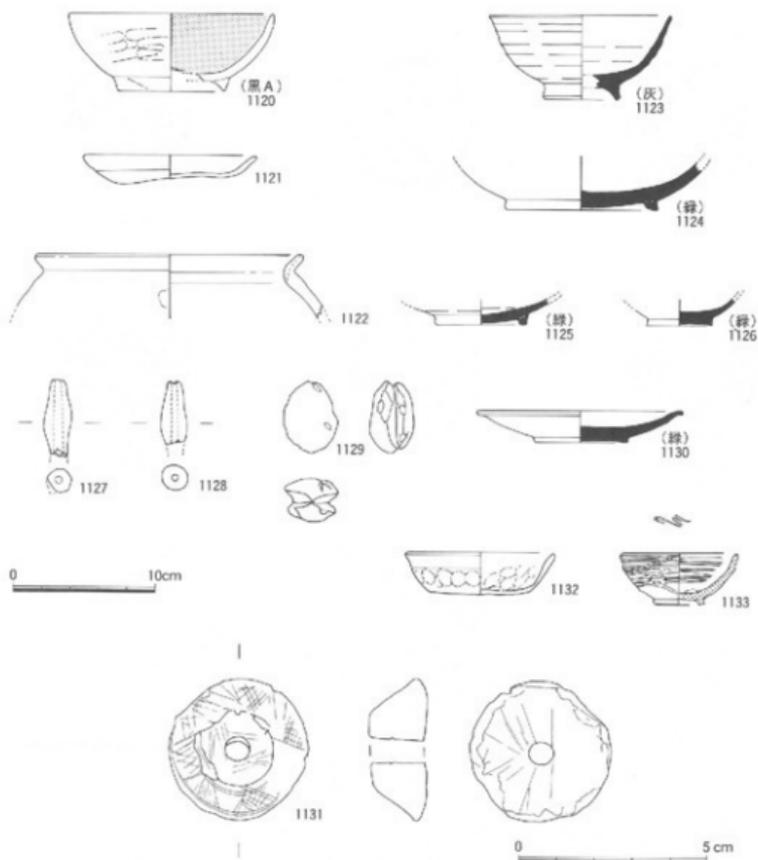
紡錘形の土鍾(1118)が出土している。両端部は欠損している。

SP-407 (第131図)

投弾?(1119)が出土している。卵状を呈する自然石であるが、形は整っており表面は滑らかである。

包含層出土遺物 (第132図)

黒色土器A類(1120)、土師器皿(1121)、土師器壺(1122)、灰釉陶器腕(1123)、緑釉陶器腕(1124~1126)、緑釉陶器皿(1130)、土鍾(1127~1129)、土師器杯(1132)、紡錘車(1131)、小型の瓦器腕(1133)などが出土している。1129は両側縁に溝が切られ、断面が「工」字形を呈する土鍾である。



第132図 M・N区包含層出土遺物

第5節 出土銭貨

調査を通して数は少ないが銅銭が出土している。その主なものは初鋳年代を北宋時代に求められる渡米銭であるが、他に皇朝十二銭も出土している。(第133図)

1134は「皇宋通宝」で、真書体・対読、初鋳年は1038年(北宋)である。M区SK-08から出土している。1135は「嘉祐通宝」で、真書体・対読、初鋳年は1056年(北宋)である。M区SP-146から出土している。1136はL区包含層からの出土であるが、遺存状態は悪く判読不能である。1137は「隆平永宝」で、真書体・順読、初鋳年が796年の皇朝十



1134
皇宋通宝
1038年
北宋



1136



1139
皇宋通宝
1038年
北宋



1135
嘉祐通宝
1056年
北宋



1137

隆平永宝
796年



1140
天禧通宝
1017年
北宋



1138

皇宋通宝
1038年
北宋



第133図 出土銭貨

二銭の一つである。L区SE-31から出土している。1138は「皇宋通宝」で、篆書体・対読、初鑄年は1038年（北宋）である。L区SP-1593から出土している。1139も「皇宋通宝」で、篆書体・対読。K区包含層出土。1140は「天禧通宝」で、真書体・順書、初鑄年1017年（北宋）である。K区包含層出土。

註

- (1)橋本久和「第5章 第2節 高槻における中世土器の編年」『上牧遺跡発掘調査報告書』1980高槻市教育委員会
- (2)川越俊一「大和出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』1983
- (3)菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1982
- (4)横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
- (5)尾上実「南河内の瓦器碗」『藤沢一夫先生古希記念考古文化論集』1983

(6)中村浩『和泉陶器窯の研究』1981柏書房

(7)森隆「西日本の黒色土器生産(上)(中)(下)」『考古学研究』第37巻第2・3・4号1990・91

(8)橋本久和「脚付き土師質磁について」『高槻市文化財年報平成4年度』1994高槻市教育委員会

(9)『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』1980岡山県教育委員会

参考文献

白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』第54号1969

白石太一郎「瓦器の生産に関する二・三の覚え書き」『古代文化』第27巻第1号1977

橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報昭和63・平成元年度』1991高槻市教育委員会

山本信夫「北宋貿易陶磁器の編年」『貿易陶磁研究』No.8 1988

中村浩『研究入門 須恵器』1990柏書房

『神出』1986妙見山麓遺跡調査会

中世土器研究会編『概説中世の土器・陶器』1995真隔社

鶴柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』1988日本中世土器研究会

百瀬正恒「平安時代の緑釉陶器」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』1986日本中世土器研究会

巽淳一郎「平城京における平安時代の焼物」『愛知県陶磁資料館研究紀要2』1983

斎藤孝正「猿投窯における灰釉陶器の展開」『考古学ジャーナルNo.211』1982ニュー・サイエンス社

前川要「平安時代における緑釉陶器の編年的研究」『古代文化』第41巻第5号1989

久光重平・今井育雄『中世・近世渡来銭標本集』1981日本文化資料センター

坂詰秀一編『出土渡来銭』1986ニュー・サイエンス社

永井久美男編『中世の出土銭』1994兵庫埋蔵銭調査会

第6章 木製品

第1節 出土木製品の概要

木製品は古墳時代から近世のものまで出土しており、量的には中世（12世紀から13世紀代）のものが全体の約8割を占めている。ほとんどが遺構からの出土であるが、完形よりもむしろ破片の状態で出土するが多い。したがって、破片によっては製品名の把握が困難な場合も多々ある。ここでは主に古墳時代から中世のもので、実測可能で製品名が判るものはもちろんのこと、破片であってもその製品名が推定できるものや、一部不明品も含めてできる限り図化した。また製品名が判るものでも、本来の用途とは違う使用のされ方の状態で出土している場合もあるので、注意が必要である。特に中世の木製品には、このような転用品が多いので、出土木製品を遺構ごとに表にまとめたが、製品名と特徴の他に遺構での使用のされ方も示すことにした。

近世

近世では水路の護岸用として使用されていた杭や燭台が出土している。杭は径4～6cmの丸木や自然木の先端を斧状工具のようなもので尖らせている。

中世

中世では前述のように、多くの木製品が出土している。これらの木製品を大まかに分類すると、日常生活全般にわたって使用されていた生活用具と建物やその他の構造物に用いられていた構築部材に分けられる。

1. 生活用具

ひとくちに生活用具といってもその種類は多岐にわたっている。以下、調査で出土した製品名の判っているものについて簡単に説明する。

曲物

曲物がいつ頃から使用され始めたのかは、未だ明確にはされていないが、平城京跡からまとまった量の出土が報告されているので、奈良時代には既に、ある程度使用されていたようである。中世になるとさらに普及したようで、広く一般に使用されていたということは、各地の中世遺跡から出土する曲物の量が物語っている。

曲物は通常、側板と呼ばれる薄板に刃物で刻み目を入れ円形に曲げ重ね合わせて棒皮で綴じたものと、円形の底板から成る。底板は1枚のものや、2枚以上合わせたものがあり、

樺皮や木釘などで側板に固定される。円形の他に、四隅の曲がり角だけに刻み目を入れた角形のものも存在する。曲物は側板と底板から構成されるのが普通であるが、強度を高めるため側板を2重にしたり、さらに側板の外側に帯状に薄板を巻いて締め付けているものもある。この帯状の板はマワシと呼ばれている。また、マワシと側板とをしっかりと固定させるために、側板とマワシの隙間に薄板を差し込む場合があるが、この薄板をヘギと呼んでいる。ヘギは側板とマワシを固定させるだけでなく、同時に強度を高める役割もしている。文献や絵巻物などに散見されるように、曲物は当時の一般的な容器であったがその使用方法は様々で、調査では容器の他に柄杓の筒部や、側板だけを使用することが多い井戸の水溜、井筒に利用された状態で出土している。

折敷

折敷は方形若しくは長方形の薄板の四方に、折りまわした縁を付けたもので、食器や神饌を載せるのに用いられたもので、四隅を切り落とされているものが多いので隅切り盆、または角切り(すみきり)折敷ともいう。調査では完形品は出土しなかったが、破片であっても薄板のへりに縁を取り付けるための縦じ皮を通す穴のあるものは、折敷と判断した。

箱

板材を四角に組んで底板を付けたもので、板材を組むために両端を加工して、さらに釘、木釘、樺皮などを使用して組み合わせている。中には表面に漆を塗布しているものもある。調査では井戸に使用されていたものが多く、底板を外して箱枠の状態にしてその内側に曲物を入れ、水溜用として井戸の底に置いたり、解体して井戸側の縦板に転用された状態で出土している。

漆器

当時は土器とともにかなり一般的な食器として使用されていたと考えられるが、調査では椀が2点出土しているだけである。

櫛

横櫛、竖櫛があり、用途によって解き櫛、梳き櫛などがある。調査では横櫛が出土している。

下駄

下駄には一木製の連歯下駄と、台と歯が別材で作られる差歯下駄があるが、調査では連歯下駄が出土している。

草履状木製品

いわゆる金剛板と呼ばれるもので、左右対称にした薄板を2枚敷き合わせて、これを芯

板にして、外側に藁を編んで緒を付けたものである。素材の性質から芯板のみの出土例が多いが、草戸千軒町遺跡では藁が付着した状態のものが出土している。形態の特徴としては端部に穴があり、外縁にあたるところに1ヶ所の切り込みがある。調査では芯板の片方が出土している。

編具

俗にツチノコと呼ばれるもので、藁などを編むときに使用される錘である。

球（毬）状木製品

木片を球状に削り整えたもので、表面が粗削りなものと、丁寧に丸く仕上げられ中央に穴が貫通しているものが出土している。前者は当時の遊戯の一種である打毬に使用された毬であろう。後者は用途不明である。

木製挽き臼

円柱形の材に中心から放射上に溝を切ったもので、凹形と凸形のものを重ねて回転させて使用した。材自体が頑丈なので、断ち割って礎板に使用されていた。

栓

角型の頭部と穴に差し込む棒状の部分を一木で作っている。桶などの穴に差し込んで使用されたものか。

礎板

礎板そのものの出土は確認されていないが、折敷などに多数の刃物傷が残るものがあり、これらを転用して礎板として使用されていたのであろう。

2. 構築材

構築材としては井戸側の隅柱、縦板、横棧などに使用されていた角材、板材があり、納穴を切っているものもある。柱穴からは柱根、礎板が出土しており、柱根には六角形に成形してあるものなどがあり、礎板には普通板材が使用されているが、よく観察すると他の製品の板材を転用していることが多い。鼻縁は材木を運搬する際に縄などを掛けるための穴を木材の端部に削り出したもので、材木を使用する時に切り落とされたもので、形状は台形を呈しており、ドーナツ状の穿孔がある。調査ではピットから出土しており、礎板に転用されていたようである。

奈良時代～平安時代

この時代の木製品としては、井戸（SE-18）より水溜に使用されていた曲物側板が出土しており、大型で方形のものと円形のものがある。曲物の形状自体、中世のものと同様

りはないが、側板内側の刻み目の方向が斜めに入っており、古い様相を示している。

古墳時代

河川（SR-02）の護岸用の杭や、河川に接して検出された土坑（SK-84、SJ-01）などから出土した杭、板材のほか蕨状、木樋状のものが出土しているが、その用途は明らかではない。

第2節 K区の出土木製品

SD-87（第134図）

燭台（1）が出土している。円形の板の中心部に釘状の金属が刺してある。周縁部には削り出しによって段がある。

SE-34（第134図）

井筒として使用されていた曲物側板（4）が出土している。側板は2重で1枚のマワシが付く。

SE-36（第134図）

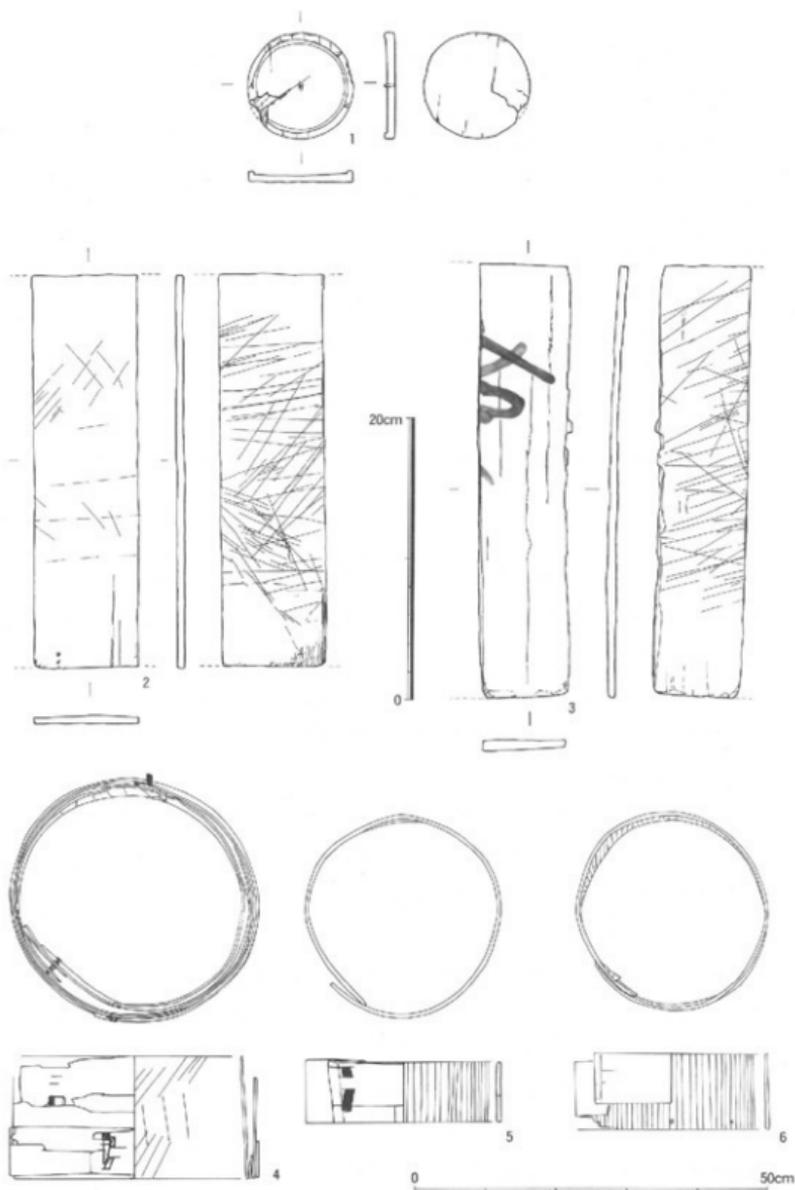
折敷（2・3）、曲物側板（5・6）が出土している。曲物側板は井筒に使用されていたもので、6には底板を取り付けるための木釘穴があるので、もともとは容器として使用されていたのであろう。5・6とも1重の側板から成り、木質や刻み目の様子から同一個体のものと考えられる。2・3はともに破片で、片面に無数の刃物傷が残っており、組板としても使用されている。3には墨書があるが意味は不明である。

SE-41（第135・136図）

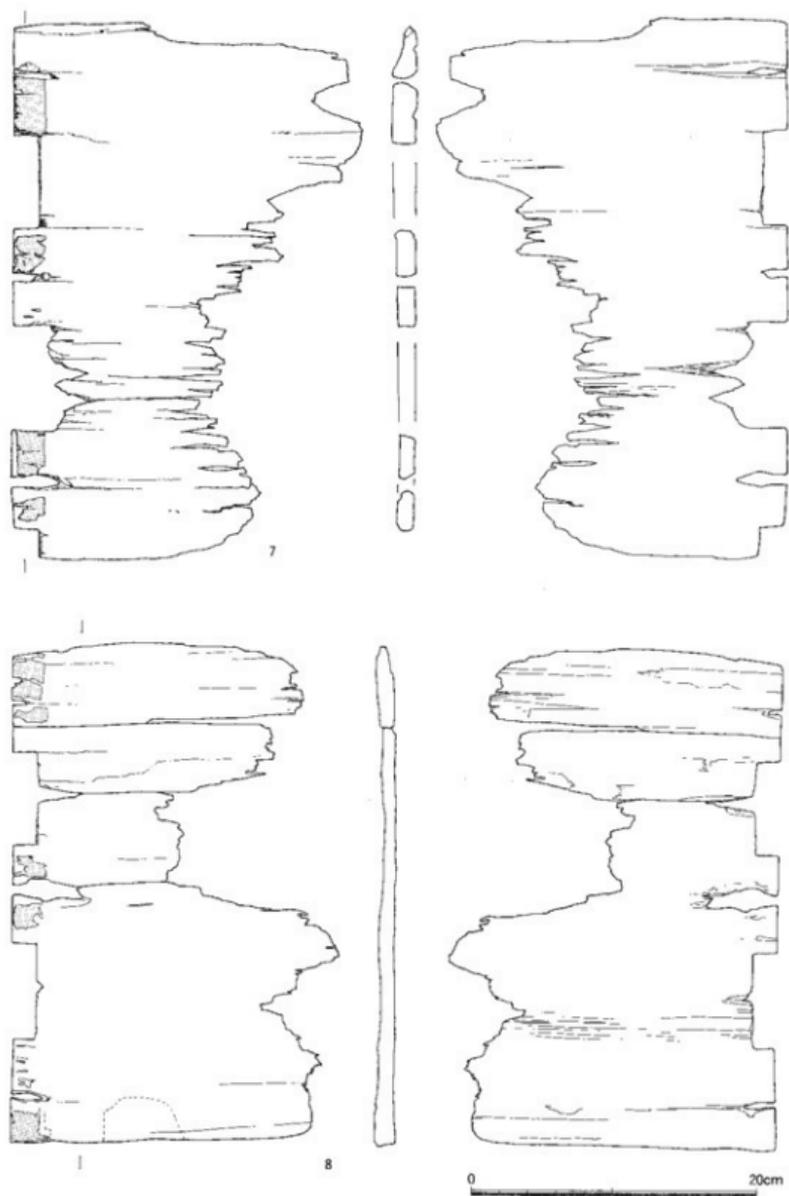
箱材（7～9）、杭（10～13）が出土している。箱材は井戸側の縦板に使用されていたもので、端部には組み合わせるために凹凸状の加工が施してある。組合せ部分には釘穴があり、樺皮も残っている。杭も井戸側に使用されていたものである。

SE-42（第137・138・139図）

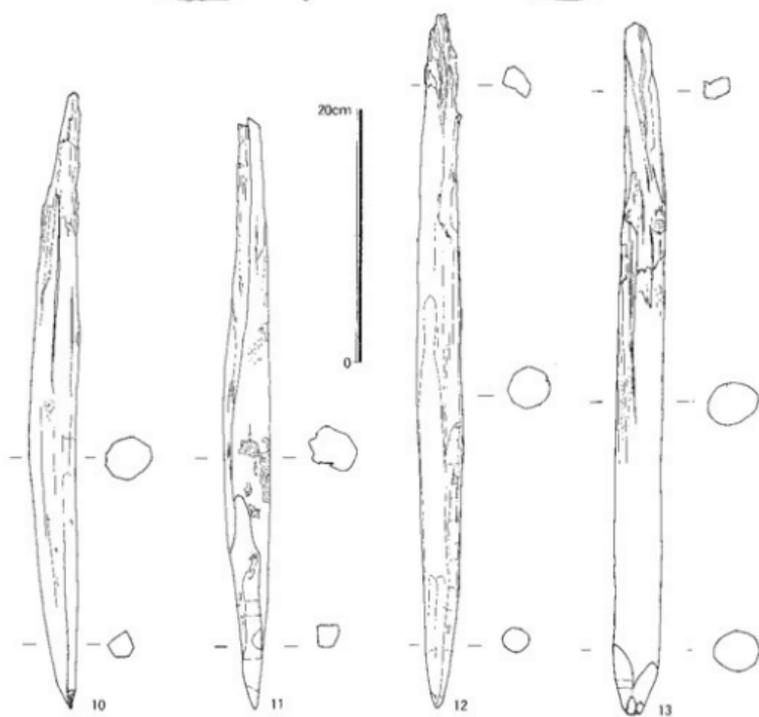
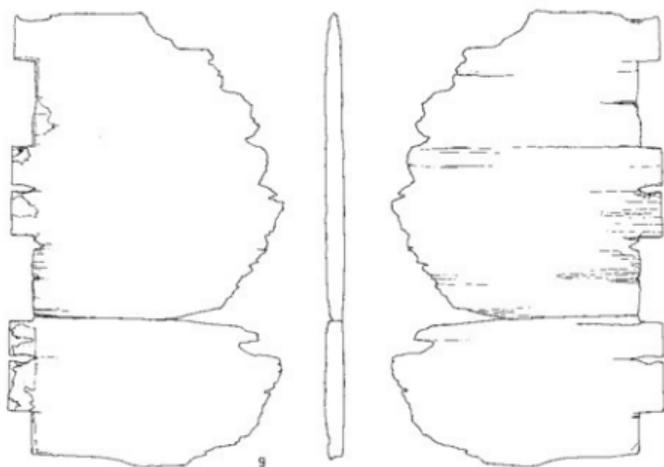
曲物底板（14～16、23・24）、曲物側板（17・18）、曲物（底板付き）（26）、角材（19～21）、不明品（25）が出土している。曲物底板は、井戸底面の曲物側板を使用した水溜と井戸側の間に敷き詰められていたものである。14・15は周縁部から約1.5cm内側に等間隔で縦穴があり、樺皮も一部残っており、表側に側板の跡が着く。また、刃物傷が無数にみられるので、組板として使用されていたらしい。16・23・24は底板を三日月状に削り、曲線を作っている。これは水溜と井戸側の間に敷く時に、水溜の曲物側板とうまく隙間なく合うようにするためであろう。16・24には縁に木釘穴の跡が残り、23には縦穴、樺皮



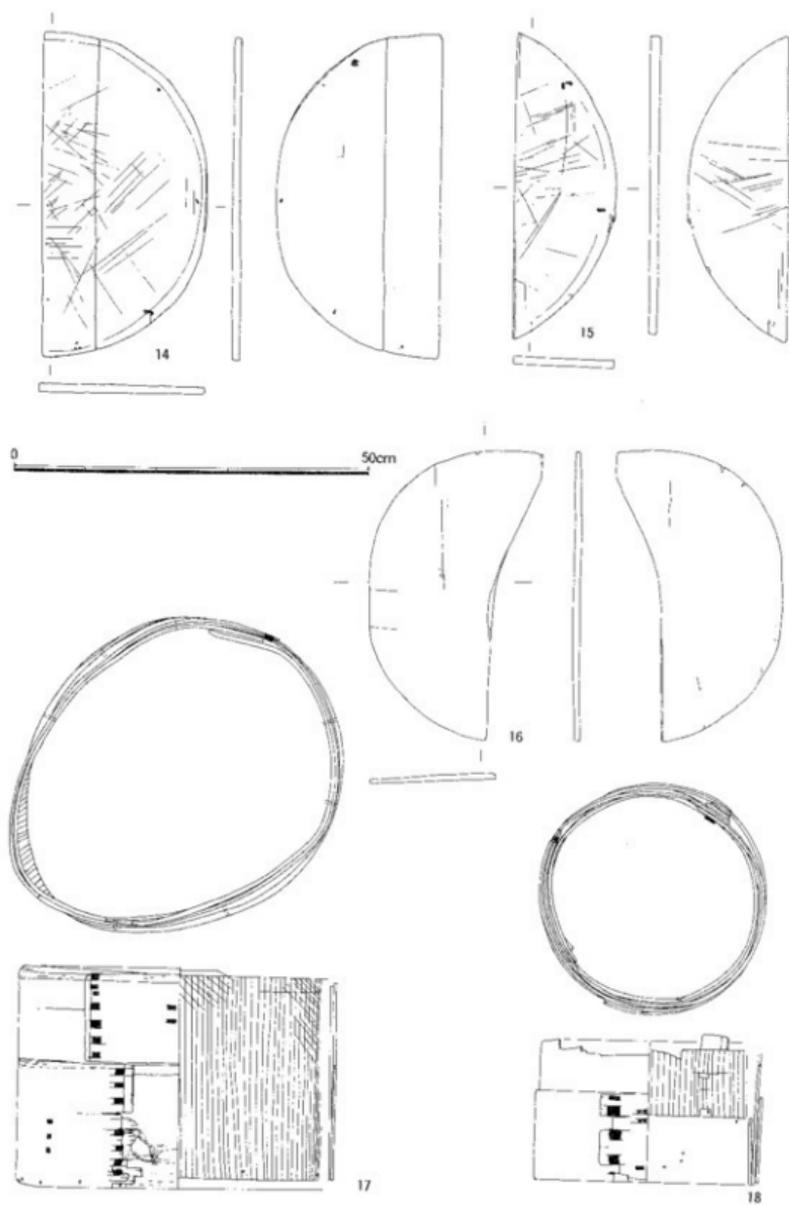
第134图 SD-87、SE-34・36出土木製品



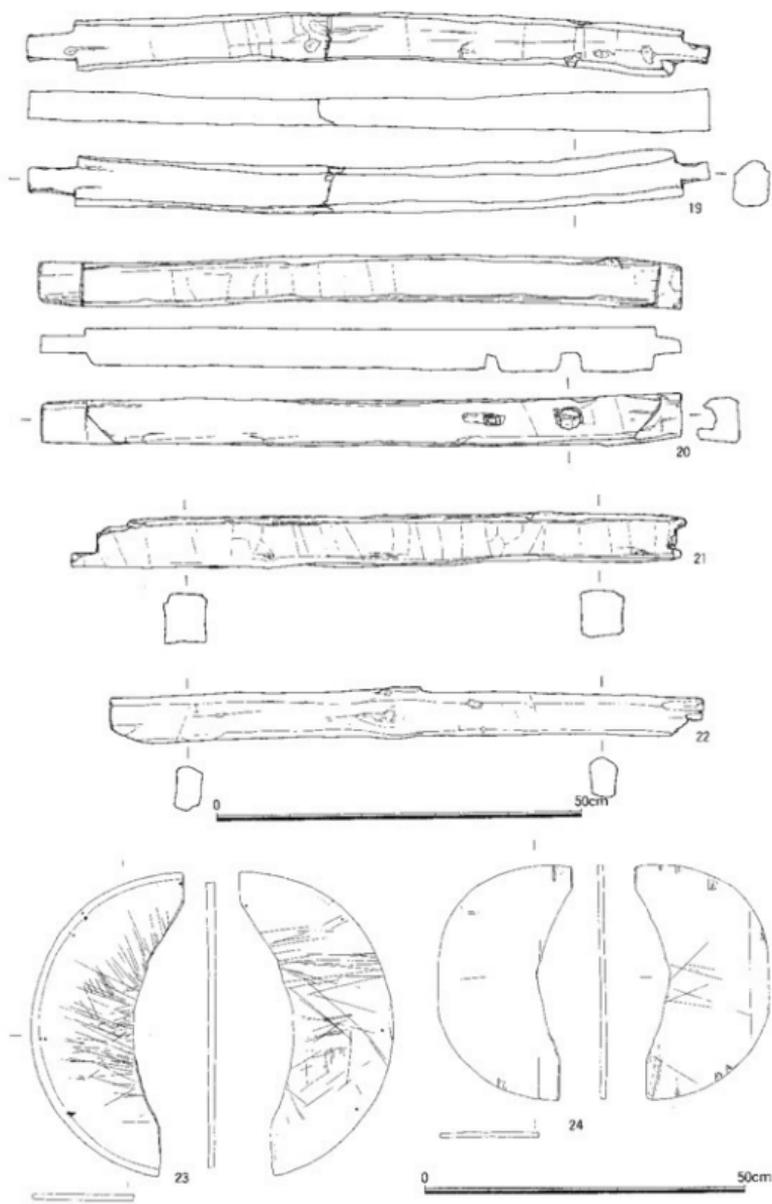
第135図 SE-41出土木製品(1)



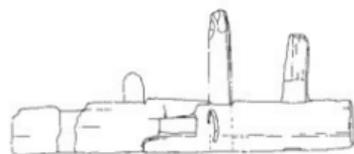
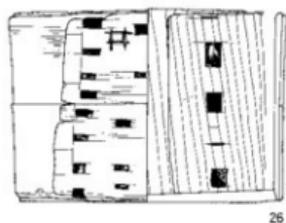
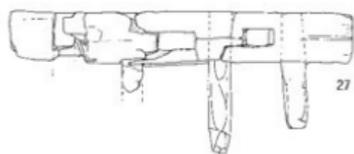
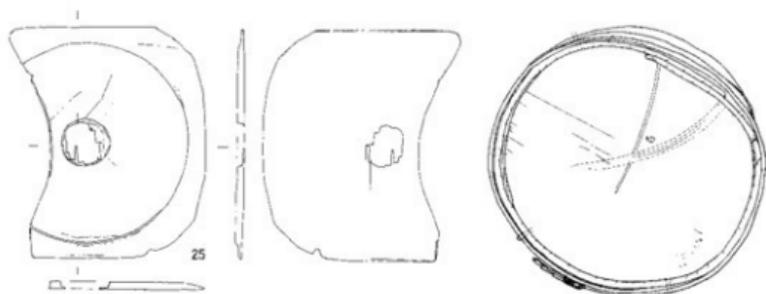
第136図 SE-41出土木製品(2)



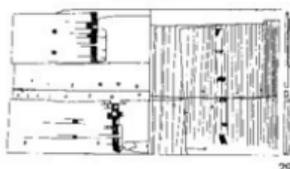
第137図 SE-42出土木製品 (1)



第138圖 SE-42出土木製品(2)



0 20cm



0 50cm

0 5cm

第139圖 S E - 42・43出土木製品

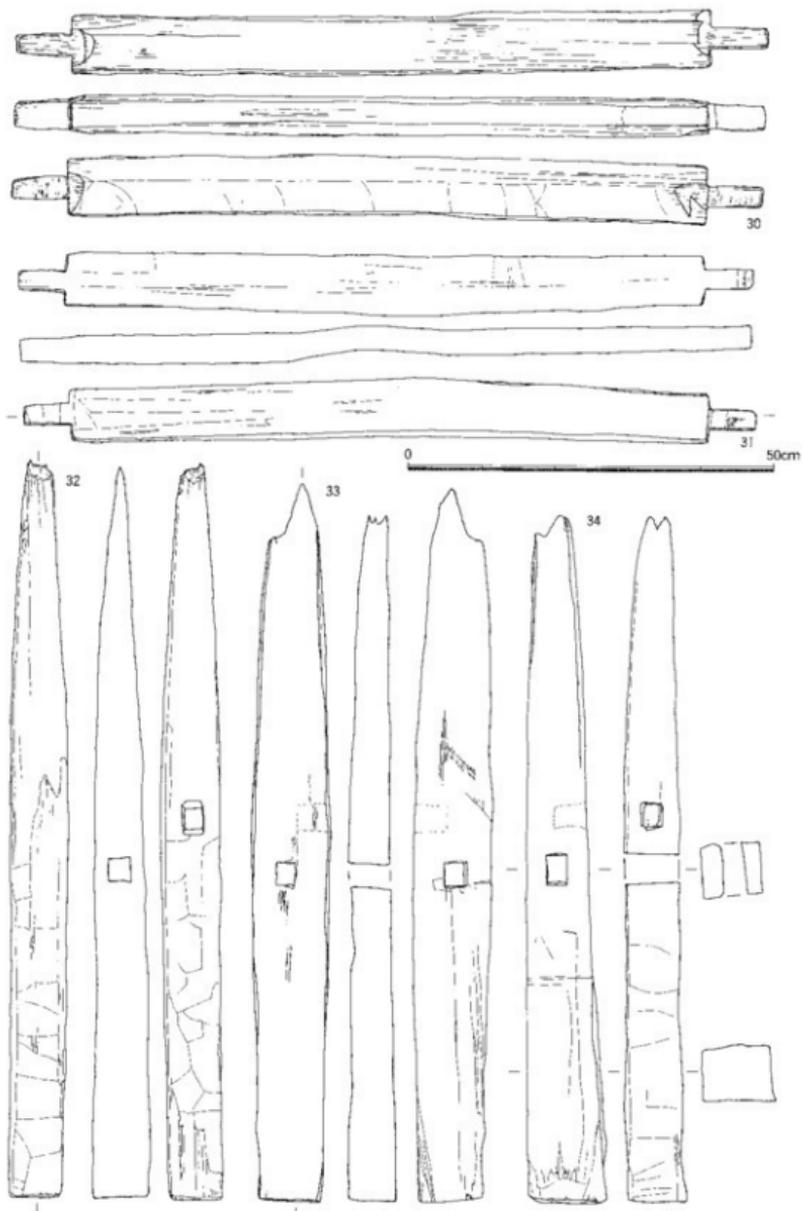
と側板の痕跡が残る。23は組板として使用されており、両面に対物傷が無数にみられる。25は隅丸方形に整形してある板材であるが、やはり湾曲状に削られている。周縁部から約3cm内側で段状の円形の削りだしが施されており、中央に円形の穴が開けられている。穴は貫通しておらず、削り端が残っているので制作途中で転用されたものかも知れない。円形の削りだしは、そこに側板が取り付くことを意識して作られたと考えられるが、底板になるのか蓋になるのかは不明である。17は1重の側板に幅広の2枚のマワシから成り、側板はマワシに隠れて外側からは見えない。側板内面の刻み目は、縦方向と上部に1部に斜め方向のものが見られる。底部に木釘穴がある。18は1重の側板と幅広のマワシ1枚からなり、内側下部にも補強のためのマワシがある。外側のマワシと側板の間にはヘギが差し込まれている。側板内面の切り込みは縦方向である。26は1重の側板に幅広のマワシ2枚からなり側板はマワシに隠れて外側からは見えない。側板内面の刻み目は、やや斜め方向で、底板は厚みのある円形板を側板の内側にはめこむいわゆる落とし底である。上段のマワシの緩じ皮の横に「#(井?)」の記号が刻まれている。17・18・26を組み合わせて3段からなる水溜として使用されており、26が最下段であった。19・20は両端を凸形に、21は凹形に作られている。22は片側のみを削り、幅を狭くしている。これらの角材は、井戸側の横棧に使用されていた。

SE-43 (第139・140図)

用途不明品(27)、桶(28)、曲物側板(29)、角材(30~34)などが出土しているが、この他に図示はしていないが、井戸側の縦板に使用されていた板材が出土している。28は横櫛で、歯の間隔が密なので梳櫛であろう。29は水溜に使用されていたもので、1重の側板に上下2枚のマワシで構成され、側板内面の刻み目は、縦方向である。上下約半分に破損したらしく、修繕のためと考えられる緩じ穴がそれぞれ中間に残っている。30・31は井戸側の横棧に使用されていたもので、両端を凸状に作り出している。32~34は井戸側の隅柱に使用されていたもので、直角になる2面に横棧を差し込む穴が開けられている。27は円柱状の材に7ヶ所の長方形の穴があり、中央の穴が最も大きく材を貫通し、両側にも穴がある。残り4ヶ所は、中央の穴に対して角度がほぼ直角で開けられており、そのうち3ヶ所には先端を削ってやや尖らせた棒状の材が差し込まれている。中央の穴に柄を差し込み、両側の穴は柄を支える材のためのものとするれば、形状は柄振に類似している。

SE-44 (第141図)

井戸の水溜に使用されていた曲物側板(35~38)が出土している。35は2重の側板で、



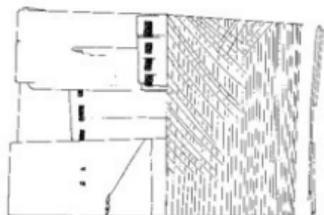
第140圖 SE-43出土木製品



35



36



37



38

0 50cm

第141圖 SE-44出土木製品

内面の刻み目は縦方向である。36は1重の側板に2枚のマワシから成り、内面の刻み目は縦方向である。37は1重の側板に2枚のマワシから成り、内面の刻み目は縦方向と斜め方向がある。38も同様で、縦方向の刻み目の他に、上下に1部斜め方向の刻み目が認められる。

SE-46 (第142図)

井戸の水溜に使用されていた曲物側板(39~41)が出土している。39は1重の側板に1枚のマワシが付き、下部に木釘穴が残る。内面の刻み目は縦方向である。40は1重の側板で上部に幅広の、下部に細めのマワシが付けられている。刻み目は縦方向である。41は側板のみで、下部に木釘穴が残り、内面の刻み目は縦方向と間隔の広い斜め方向のものが施される。

SK-98 (第142図)

井戸の水溜に使用されていた曲物側板(42・43)が出土している。42は1重の側板をほとんど隠すように幅広の2枚のマワシが上下に付き、内面の刻み目は縦方向と1部に斜め方向が見られる。43は1重の側板をほとんど隠すように3枚のマワシが付き、内面の刻み目は縦方向と斜め方向のものが見られる。

第3節 L区の出土木製品

SR-02 (第143図)

杭(44)と用途不明品(45)が出土している。44は護岸用に打ち込まれていた杭で、他に10数本出土しているが、どれも遺存状況は悪い。先端部に加工の跡が認められる。45は一木製で、缺状を呈し、先端はかなり鋭く尖っている。

SE-23 (第143図)

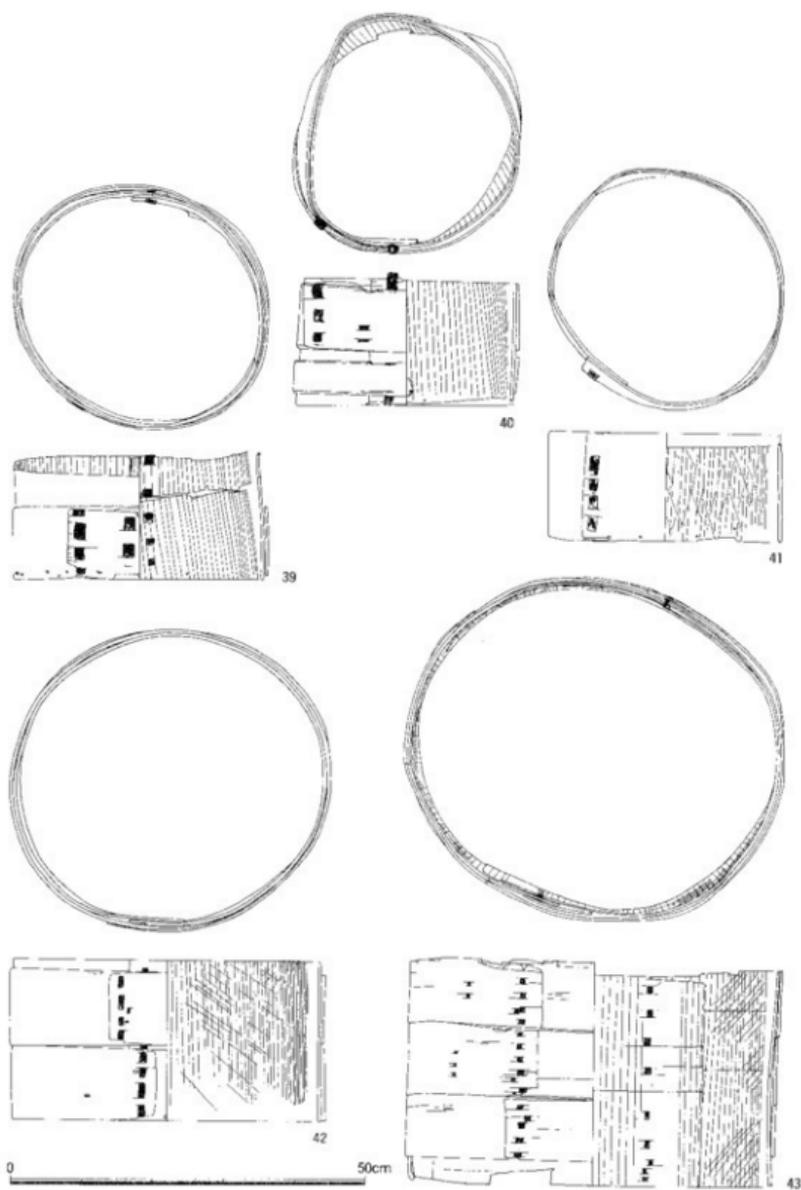
井戸の水溜に使用されていた曲物側板(46)が出土している。1重の側板に2枚のマワシが付き、ヘギを4ヶ所に差し込んでいる。内面の刻み目は縦方向であるが、上部と下部の1部に斜め方向のものが見られる。

SE-24 (第143図)

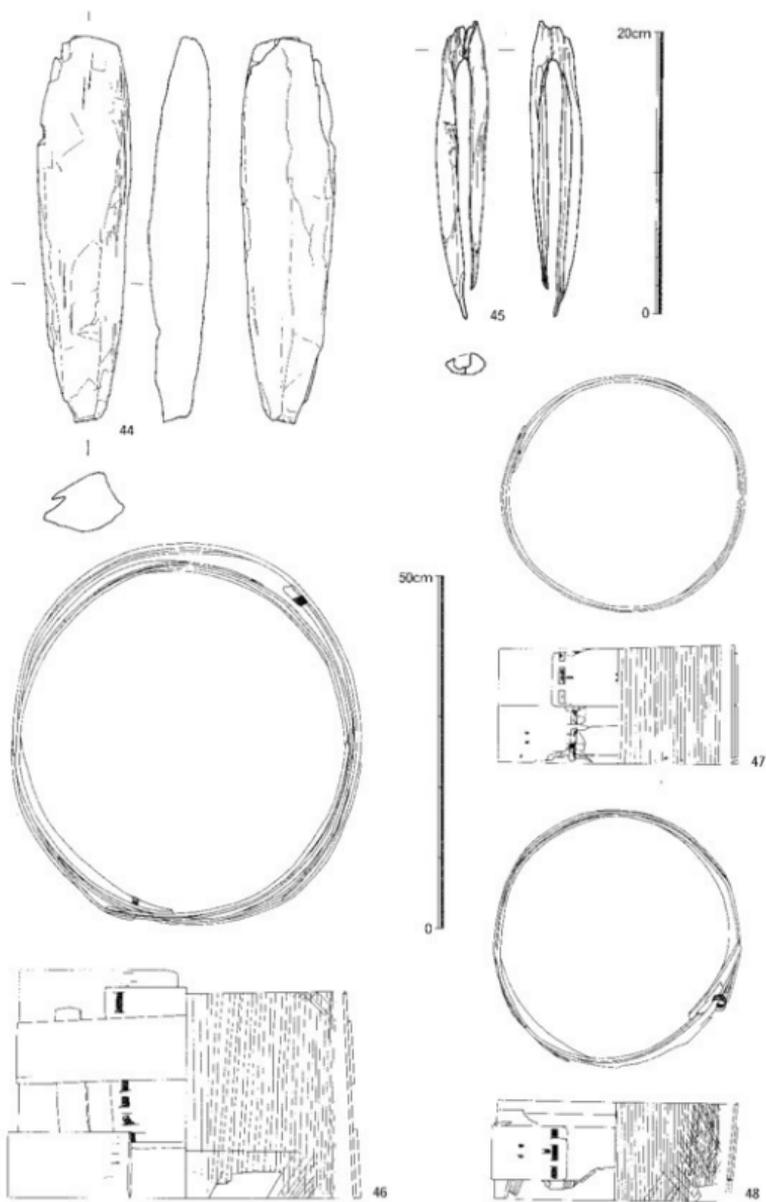
井戸の水溜に使用されていた曲物側板(47・48)が出土している。遺構内での出土位置関係は、47が上段で48が下段で使用されていた。47は1重の側板に2枚のマワシが付き、内面の刻み目は縦方向である。48は1重の側板に1枚のマワシが付き、内面の刻み目は縦方向と斜め方向のものが見られる。

SE-30 (第144図)

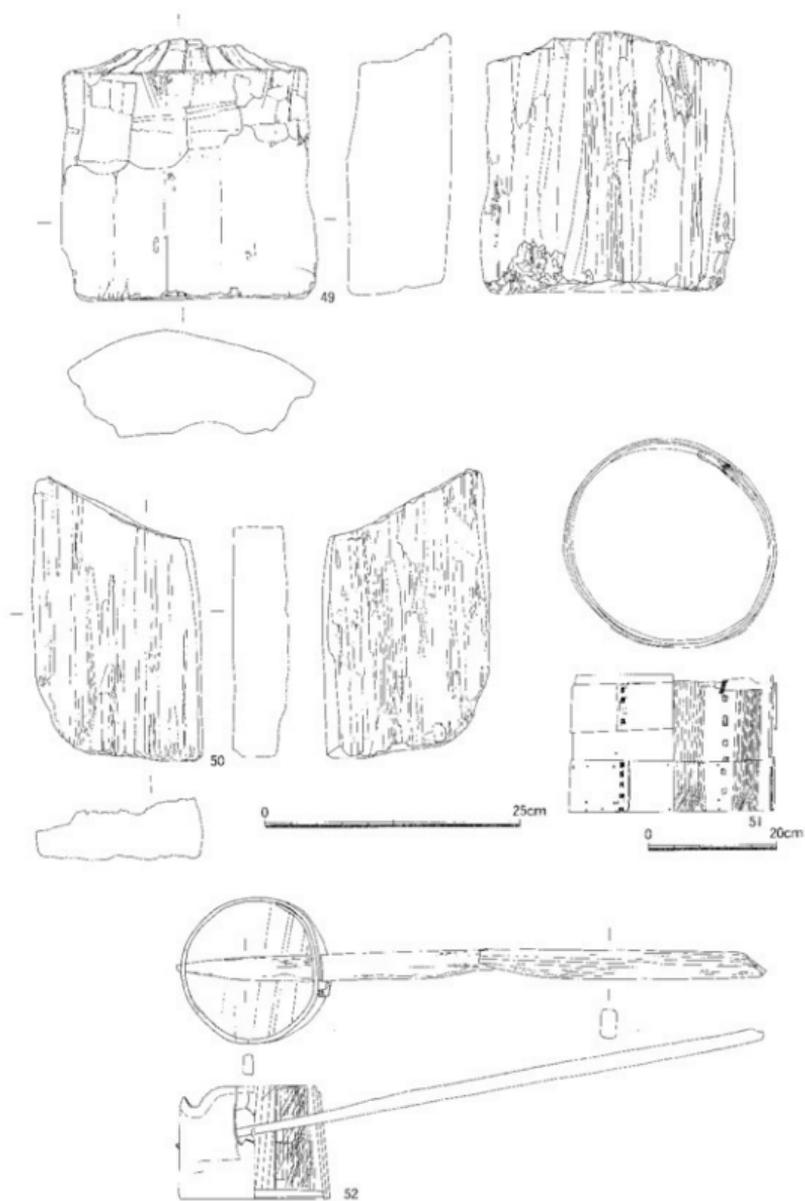
井戸の水溜に使用されていた曲物側板(51)が出土している。1重の側板に2枚のマワ



第142圖 SE-46、SK-98出土木製品



第143圖 SR-02、SE-23・24出土木製品



第144図 SK-61・68、SE-30出土木製品

シが付いている。下段のマワシには側板まで貫通する木釘穴がみられる。内面の刻み目は縦方向が主であるが、下部に斜め方向のものが見られる。

S K - 61 (第144図)

木製挽き臼(49・50)が出土している。49・50は後述するS P - 1847出土(54)とS P - 2108出土(53)と同一個体である。これらを合わせると上部が凸状の円柱状を呈し、上部中心から外へ放射状に溝が彫られており、これに凹状のものを上に被せ回転させて使用したのであろう。礎板に使用されていた。

S K - 68 (第144図)

柄杓(52)が出土している。小型の曲物に柄を差し込んであり、柄の中央部、ちょうど握り部分にあたる場所は、使用によるものか、擦り減りへこんでいる。

S P - 2108 (第145図)

礎板に使用されていた木製挽き臼(53)が出土している。S K - 61出土(49・50) S P - 1847出土(54)と同一個体である。

S P - 1847 (第145図)

礎板に使用されていた木製挽き臼(54)が出土している。S K - 61出土(49・50) S P - 2108出土(53)と同一個体である。

S P - 2230 (第145図)

柱根(55)が出土している。円柱形で、底部に加工度が認められる。

S P - 1904 (第146図)

柱根(56)が出土している。面取りをされた角材で、柄穴と推定される3方向からの穴が開けられていたようで、何らかの構築部材を転用していると考えられる。柱根ではなく礎板として使用されていた可能性もある。

S P - 1714 (第146図)

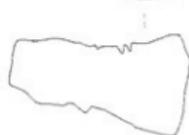
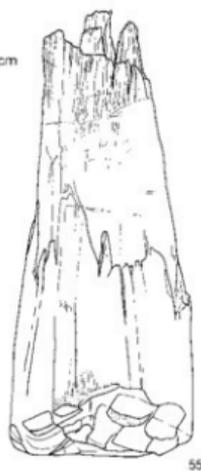
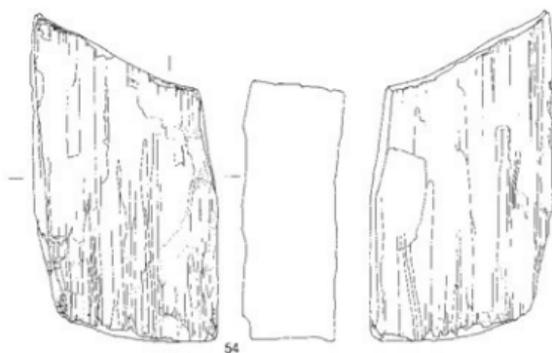
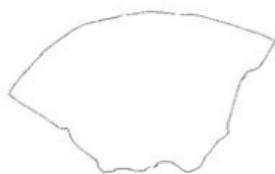
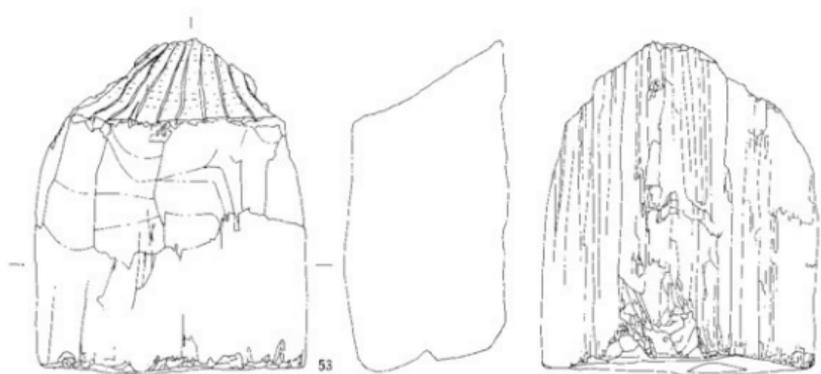
柱根(57)が出土している。遺存状態は悪いが面取りをされた角材で、柄穴と推定される穴が開けられていたようで、何らかの構築部材を転用していると考えられる。柱根ではなく礎板として使用されていた可能性もある。

S P - 2164 (第146図)

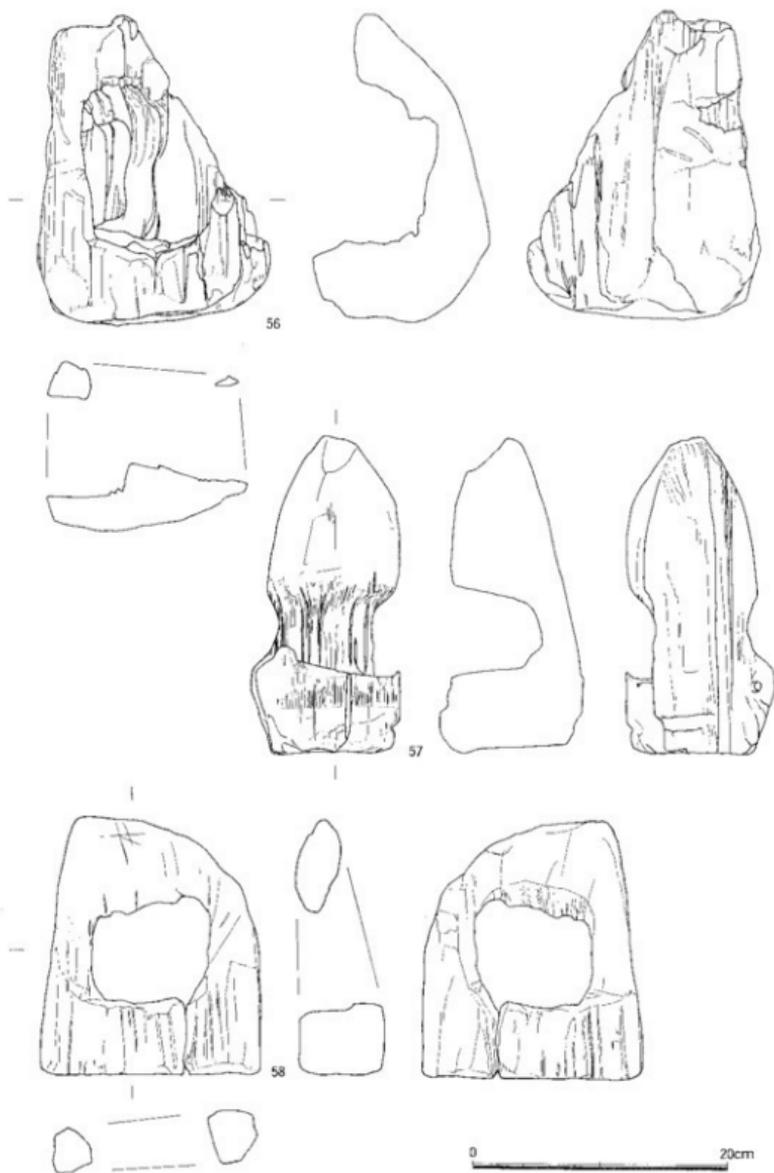
礎板に使用されていた鼻縁(58)が出土している。

S P - 2173 (第147図)

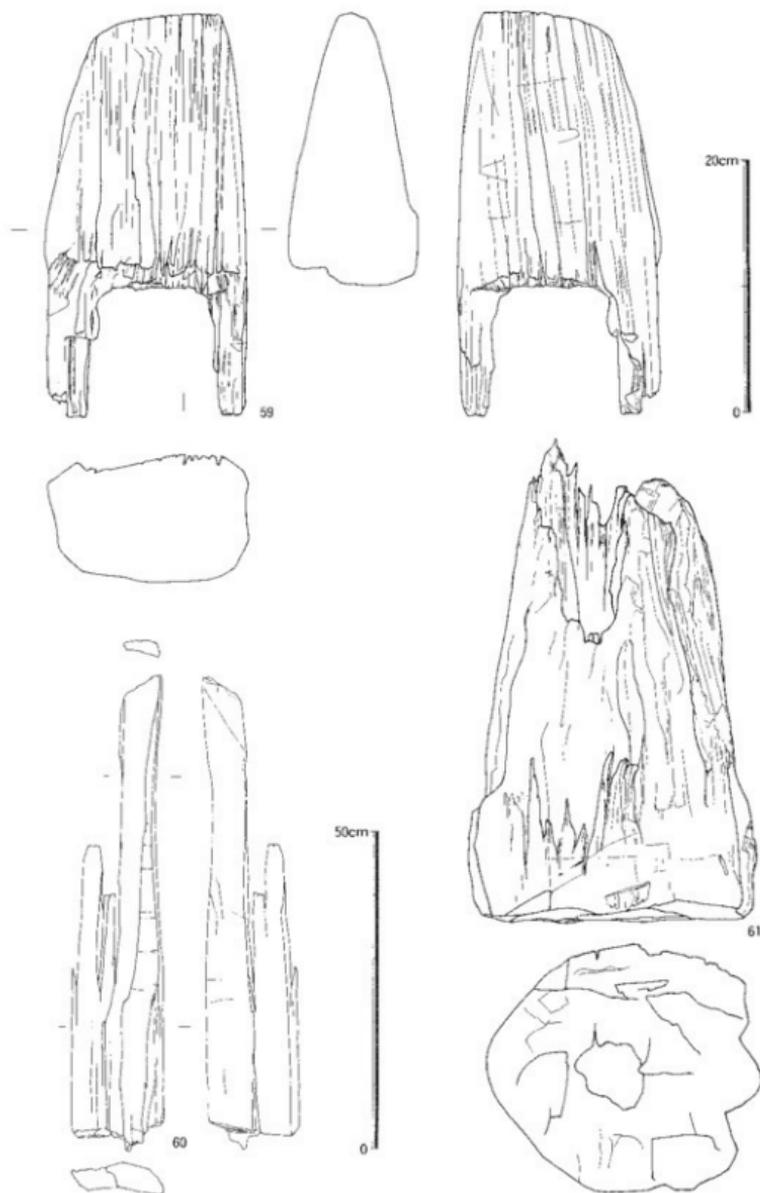
柱根(59)が出土している。面取りをされた角材で、柄穴と推定される穴が開けられて



第145図 S P - 1847 · 2108 · 2130出土木製品



第146图 SP-1714·1904·2164出土木製品



第147図 S P - 2004 ・ 2173 ・ 2214出土木製品

いたようで、何らかの構築部材を転用していると考えられる。柱根ではなく礎板として使用されていた可能性もある。

S P-2004 (第147図)

礎板に使用されていた板材(60)が出土している。表面に手斧による加工痕が認められる。

S P-2214 (第147図)

柱根(61)が出土している。円柱形で底部を平坦にしており、加工痕が認められる。

S P-2084 (第148図)

柱根(62)が出土している。柄穴が開けられていたようで、底部に斧状工具による加工痕が認められる。

S P-1905 (第148図)

礎板に使用されていた板材(63・64)が出土している。63は両面、木口とも丁寧加工が施されている。64は原木の周縁部を利用しており、板目取りである。

S K-84 (第149・150図)

杭(65~75、78・79)、棒状木製品(76・77)、木桶状木製品(80)が出土している。杭は自然木の先端を加工しただけで、樹皮が残存している。76・77は遺存状況が悪く、加工痕は認められないが、1部樹皮が残る。80も遺存状況は悪く、丸木の外縁部を削り貫いているようだが、加工痕は認められなかった。

S J-01 (第151図)

板材(81・83)、杭(82・84)が出土している。81は薄くて遺存状況が非常に悪く、加工痕は認められなかった。83も遺存状況は悪いが、中央部に楕円形の穴がある。杭は先端部に加工痕が認められ、84には樹皮が残る。

第4節 M・N区の出土木製品

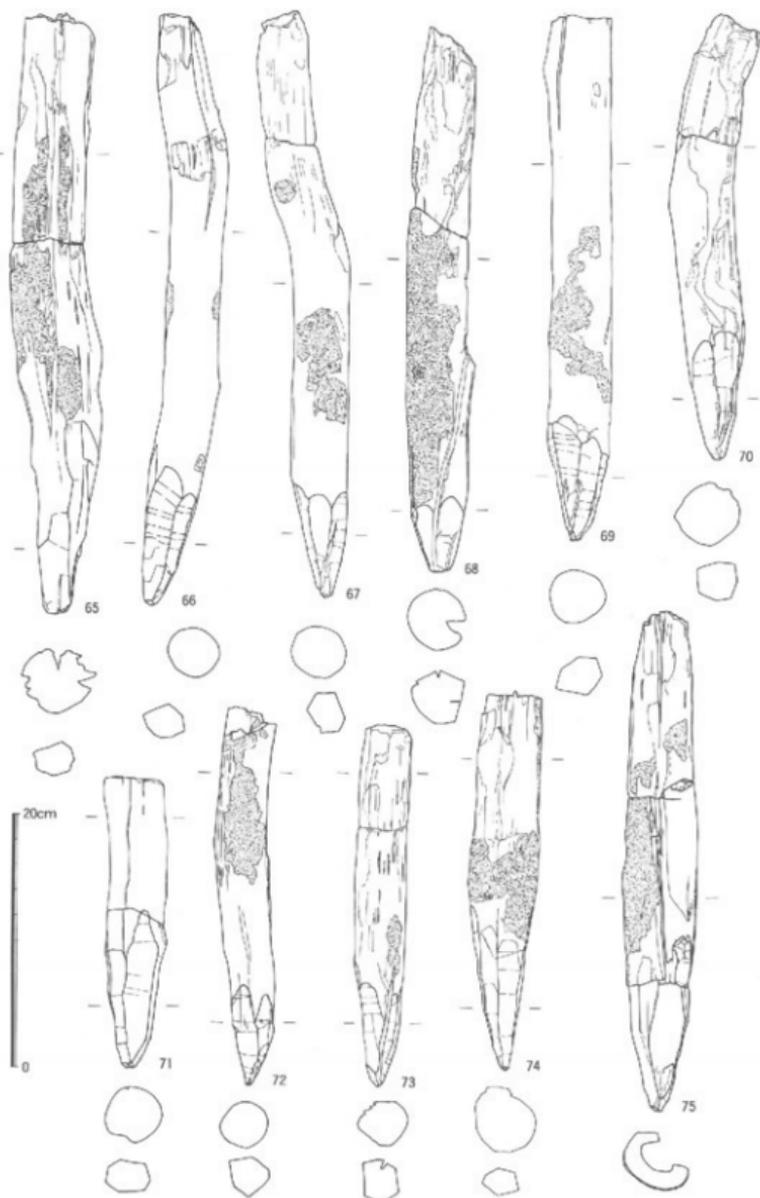
S T-01 (第152・153図)

S T-01は池と考えられる落ち込み状の遺構で、水性堆積の砂やシルトの混じる粘質土層から多くの木質遺物が出土しており、遺存状況も良く、その種類も多彩である。主な出土遺物には下駄(85・92)、編具(86)、球状木製品(87~89)、毬(90・91)、栓(93)、折敷(94)、曲物底板(95)、漆器碗底部(96)、柄杓の柄(97・98)などがある。

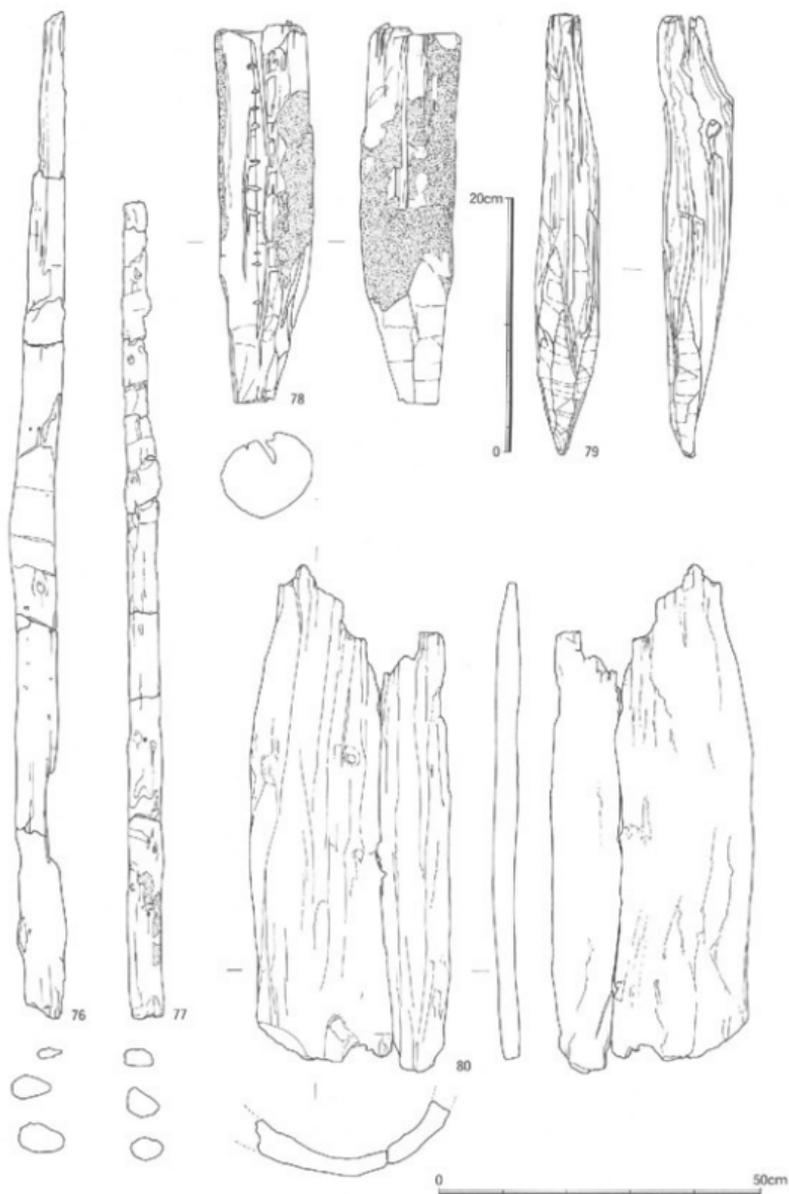
85・92は連歯下駄である。いずれも台は楕円形を呈しており、92の台表側の爪先部分、足指のあたるところは磨耗により窪んでいる。86は俗にツチノコと呼ばれる蓑などを編み上げる際に使用される踵である。87~89は木を球状に削り加工したものである。表面は丁



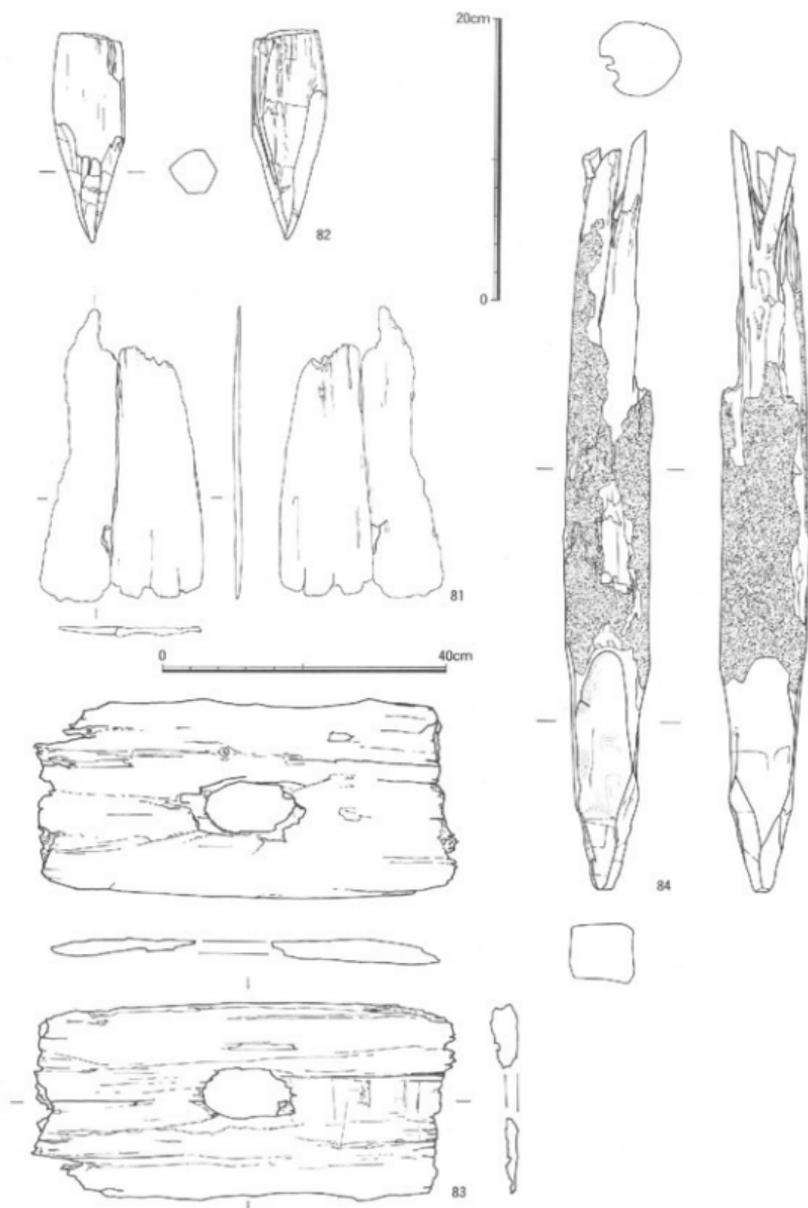
第148図 S P - 1905・2084出土木製品



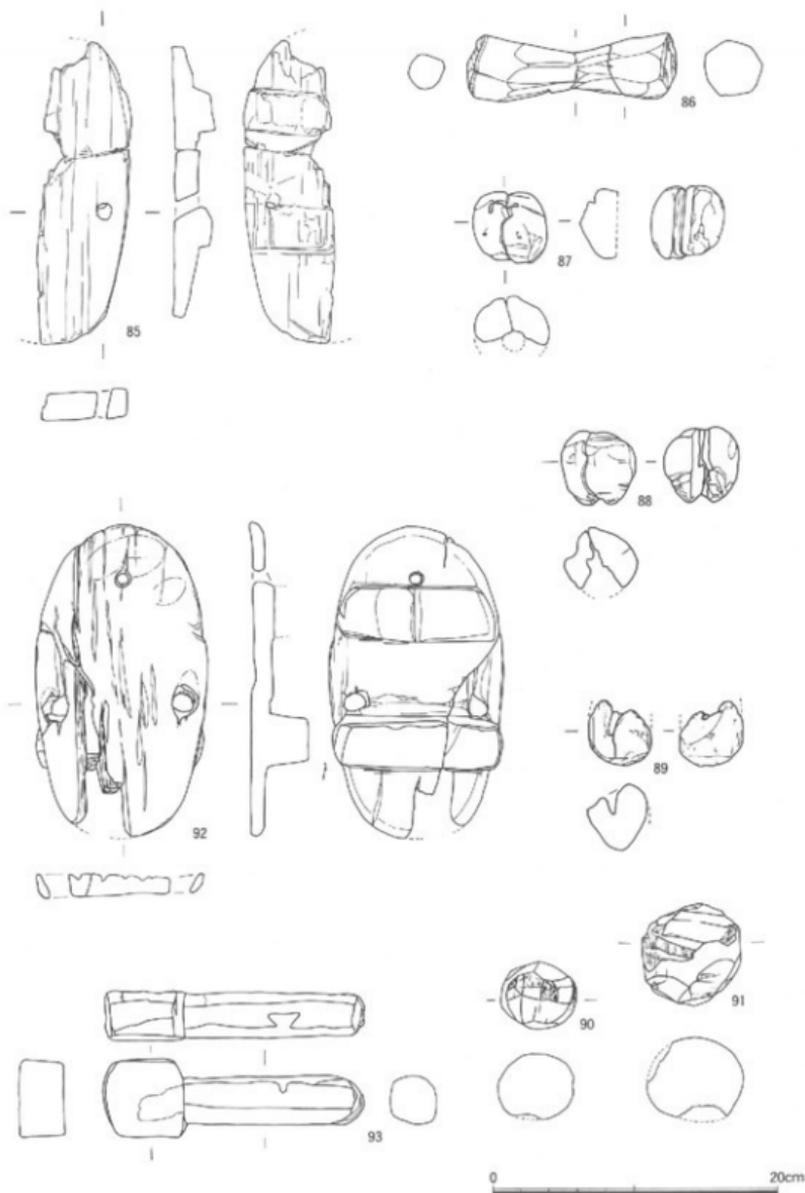
第149図 SK-84出土木製品(1)



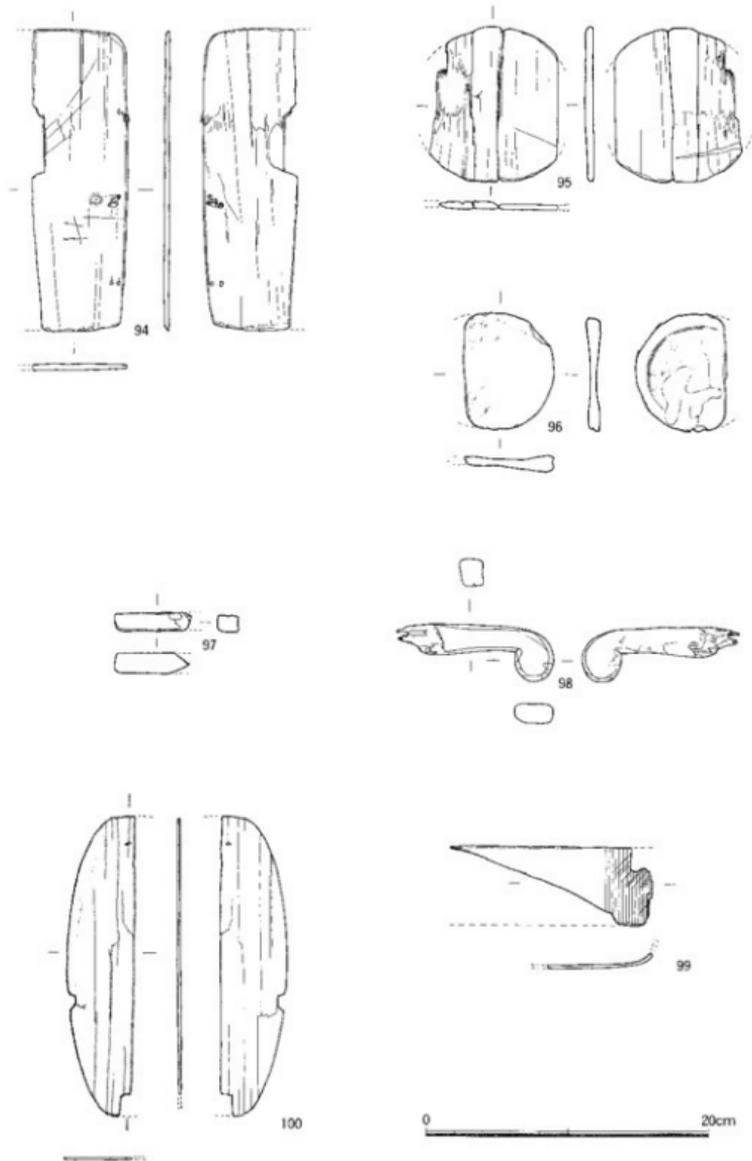
第150図 SK-84出土木製品(2)



第151圖 S J - 01出土木製品



第152図 ST-01出土木製品



第153圖 S T - 01・05出土木製品

寧に仕上げられており滑らかで、いずれも中央に径約8mmの穴が貫通していた痕跡が認められる。使用目的は不明である。90・91は球状を呈するが、削りが粗く穴はない。当時の遊戯の一種である「打毬」に使用される毬である。93は一木製で、棒状の穴へ差し込む部分と角形の握り部分からなる。94は破片であるが方形を呈しており、縁には樺皮が残る。95は小型の曲物の底板と考えられる。大きさから推定すると、柄杓の筒部分に使用されていたものか。96は遺存状態が悪く表面はかなり傷んでいるが、高台の削り出しと黒漆が僅かに認められる。97・98は同一個体と考えられ、97は先端部、98が持ち手の方で、端は雲形に作られている。

ST-05 (第153図)

曲物側板(99)、草履状木製品(100)が出土している。99は方形の曲物側板の破片で、屈曲部にのみ刻み目が施されているのがわかる。100は「金剛板」と呼ばれている当時の履物の破片である。左右対称の薄板を合わせて、これを芯板にして薬を編んで緒を付ける。外湾部に緒を付けるための挟り込みがあり、また芯板どうしを繋ぎ合わせるための穴が開いている。

SK-06 (第154図)

井戸の水溜に使用されていた曲物側板(107)が出土している。1重の側板を隠すように幅広の2枚のマワシが上下に付いており、内面の刻み目は縦方向である。

SK-10 (第154図)

杓子(104)が出土している。粗削りで加工痕がよく残り、未製品であろう。お玉の部分小さく、欠損しているようである。

SK-14 (第154図)

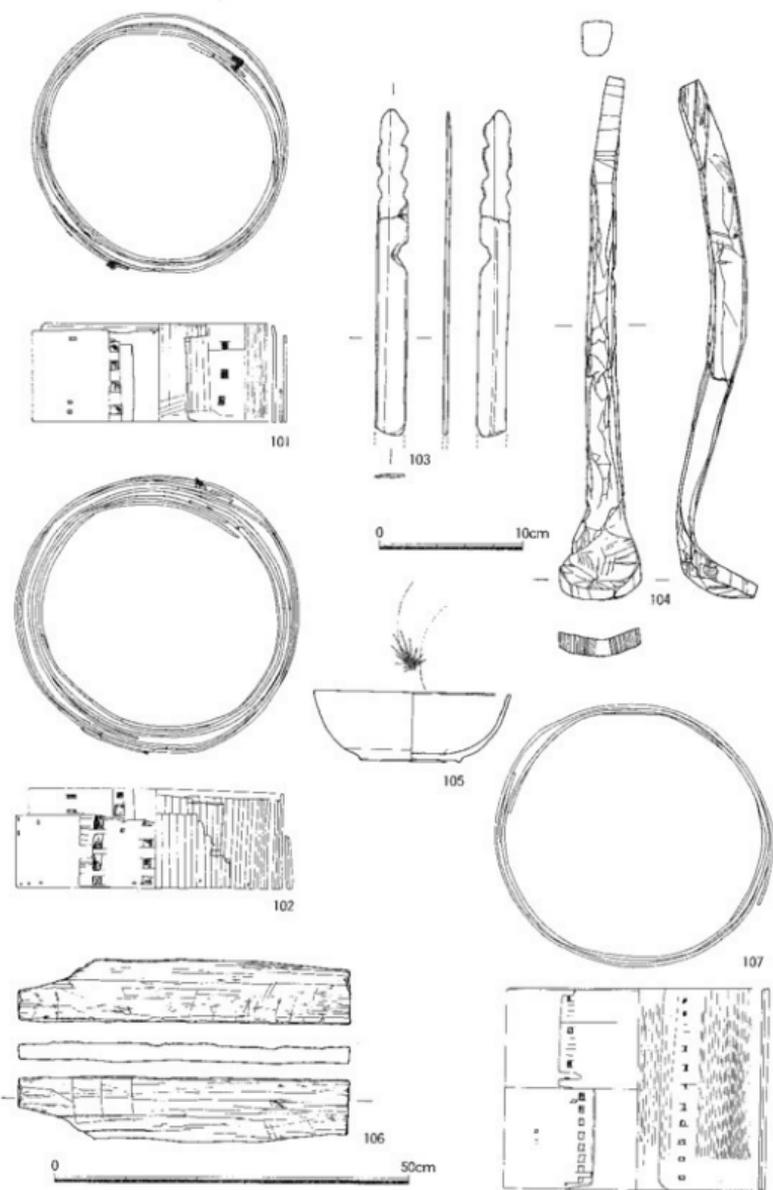
(103)は薄い板状で、左右対称に3箇所の挟り込みがあり、断面は両面の中央に僅かに稜が認められ菱形を呈する。1部に火を受けて焼け焦げた痕があるが、焦げ痕は片面のみである。用途は不明であるが、畜串か焦げ痕のあることから火鑽板の可能性もある。

SK-15 (第154図)

井戸の水溜に使用されていた曲物側板(101・102)が出土している。101は2重の側板に1枚のマワシが付けられている。内面の刻み目は縦方向で、下部に部分的に斜め方向のものが認められる。

SK-40 (第154図)

板材(106)が出土している。端を削って幅を細くしており、井戸側の隅柱の穴に差し



第154圖 S K-06・10・14・15・40、S D-45出土木製品

込み、横棧として使用されたものである。

SD-45 (第154図)

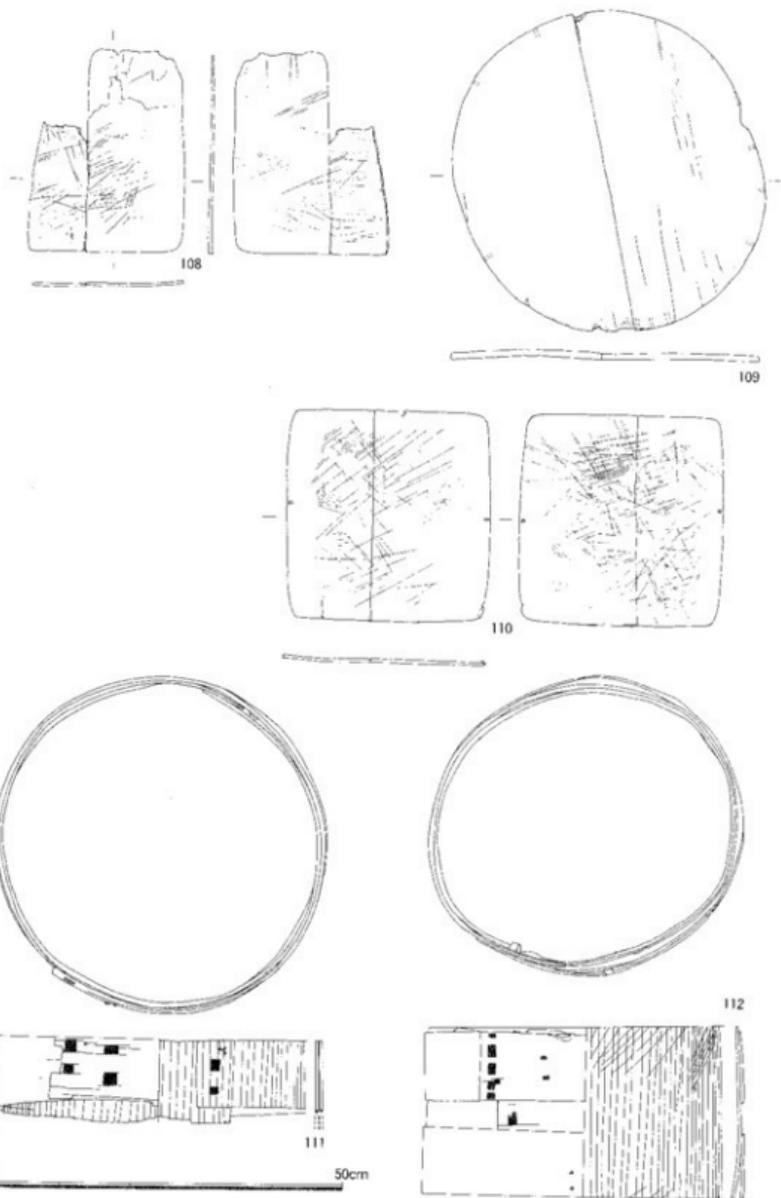
漆器椀(105)が出土している。低い高台を削り出し、全体に黒漆が塗られている。見込みには赤漆で篋文が描かれている。

SE-07 (第155図)

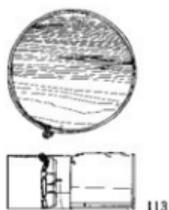
折敷(108・110)、曲物底板(109)、曲物側板(111・112)が出土している。108は欠損しているが110と同様に方形を呈すると考えられる。110には縁を固定する棒皮を通すための穴が、各辺の中央に4箇所認められる。108・110とも両面に多数の刃物傷が認められるので、組板に転用されていたのであろう。109には側板に固定させるための木釘穴がある。111・112は組み合わせられて、井戸の水溜に使用されていた。111は下半分が欠損しているが、112とはほぼ同じ大きさのものであろう。1重の側板に1枚のマワシで、内面には縦方向の刻み目が認められる。112は1重の側板に上下に2枚のマワシが付く。内面の刻み目は縦方向で、上下の1部に斜め方向のものが認められる。

SE-11 (第156～169図)

曲物容器(113)、曲物側板(114)、箱材(117～121)の他、井戸側の構築部材として板材、角材が出土している。113は小型の曲物で、底板が底面から約5mm位、上げ底気味に付く。水溜内から出土しており、水汲み用の容器として使用されていたものと考えられる。114は水溜に使用されていたもので、1重の側板に3枚のマワシが付き、3枚のヘギが差し込まれていた。側板にマワシを固定させるための木釘穴があり、また側板の底部には、下段のマワシから側板を貫通する穴が約20箇所あり、元来は底板が付いていたものと推定される。箱材は側板4枚(117・118・120・121)が組まれた枠の状態で、底板(119)は取り外され、側板の横に立て掛けた状態で出土している。5枚を組み合わせると平面形が長方形の箱になる。側板は両端に組み合わせるため凹凸状に加工が施されており、釘穴が認められる。底板の側縁部にも釘穴が認められるので、箱に組み合わせた場合、底板の上に側板が載る形状になる。側板、底板の外面には黒漆が塗られているが、短側板には楕形の、底板には帯状の、長側板には底板から続き舌状におわる、それぞれに漆のかからない木地の部分があり、そこには釘穴があるので、元々は別材が取り付けられていたことが推定される。側板の材は装飾的なものと考えられるが、底板の材は底板外面にある帯状の木地の部分が長側板のそれに続いており、釘で固定して底板が抜け落ちないための補強材であろう。このように底板に何らかの材が取り付けられていたとするならば、箱自体に脚がなければこ



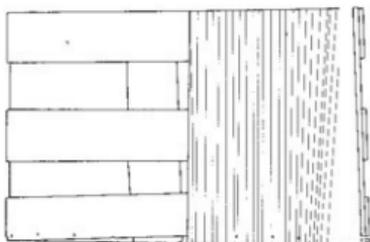
第155図 SE-07出土木製品



113



114



0 50cm



115



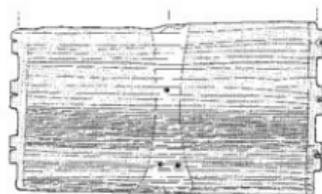
115



第156图 SE-11出土木製品(1)



117



118



119

0 50cm

第157图 SE-11出土木製品(2)

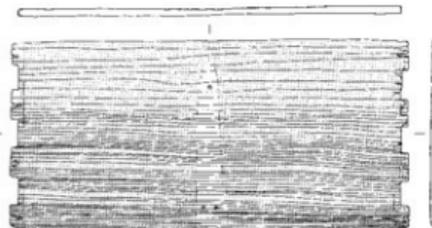


120

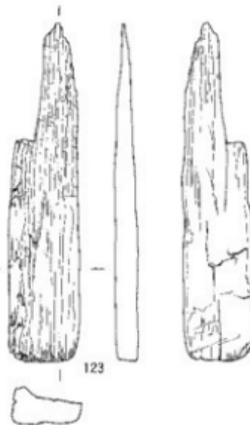
0 50cm



122

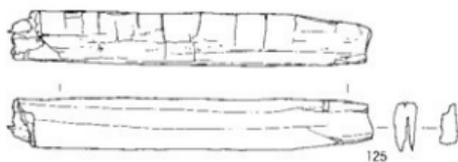
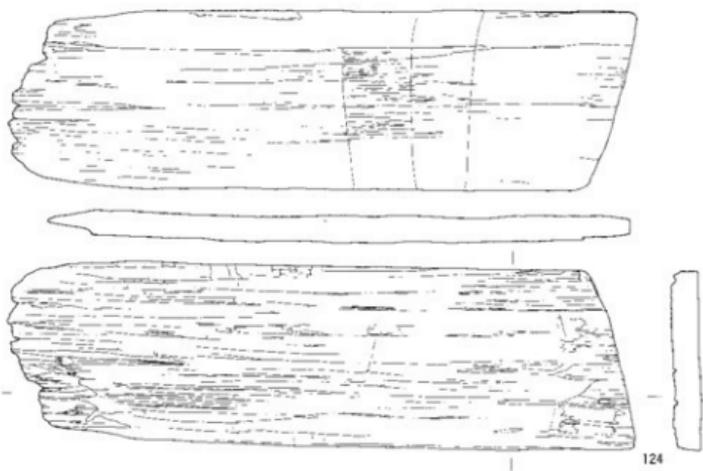


121



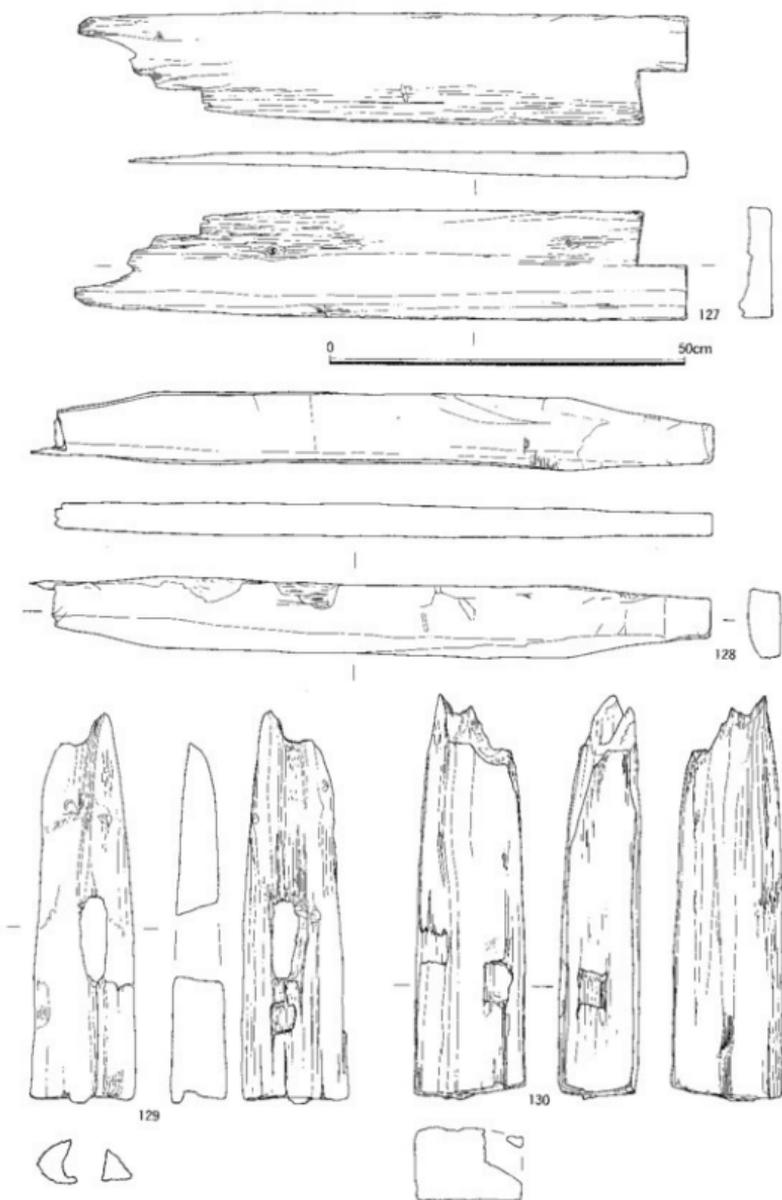
123

第158図 SE-11出土木製品(3)

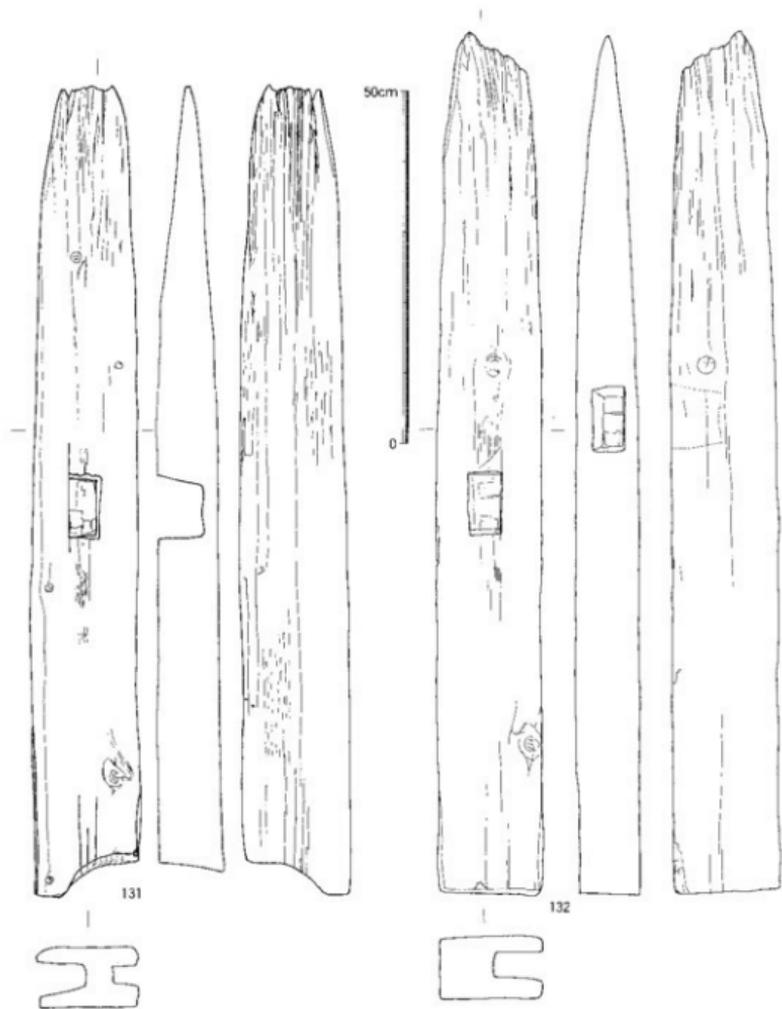


0 50cm

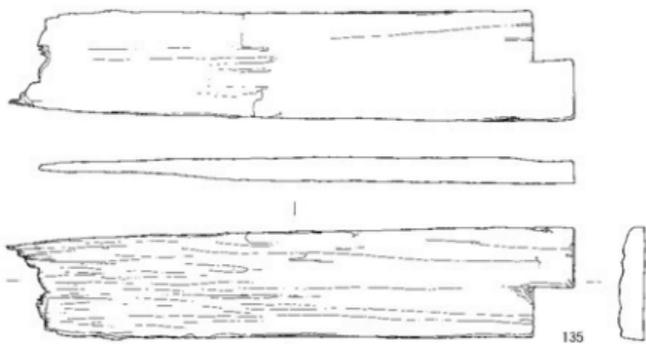
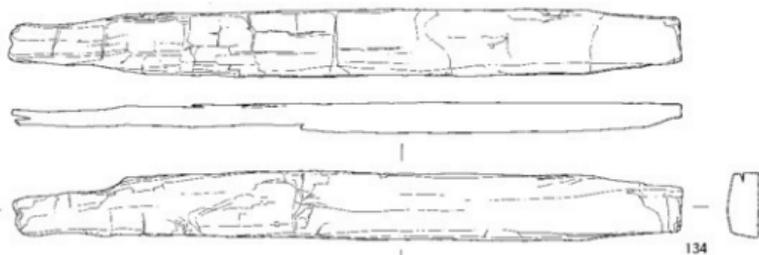
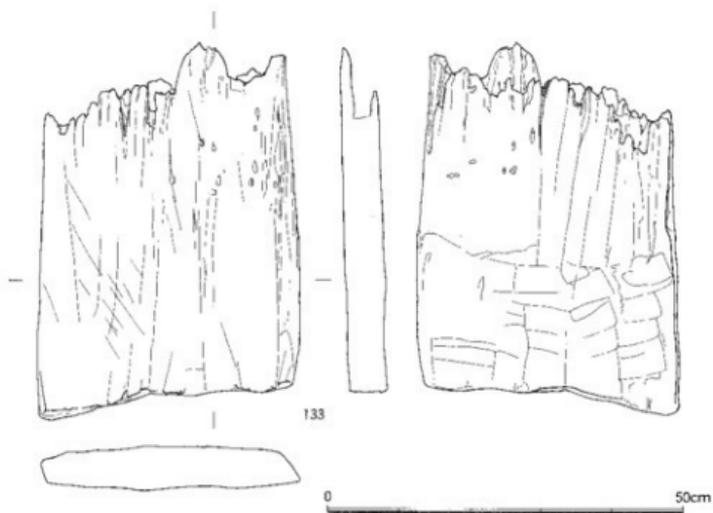
第159圖 SE-11出土木製品(4)



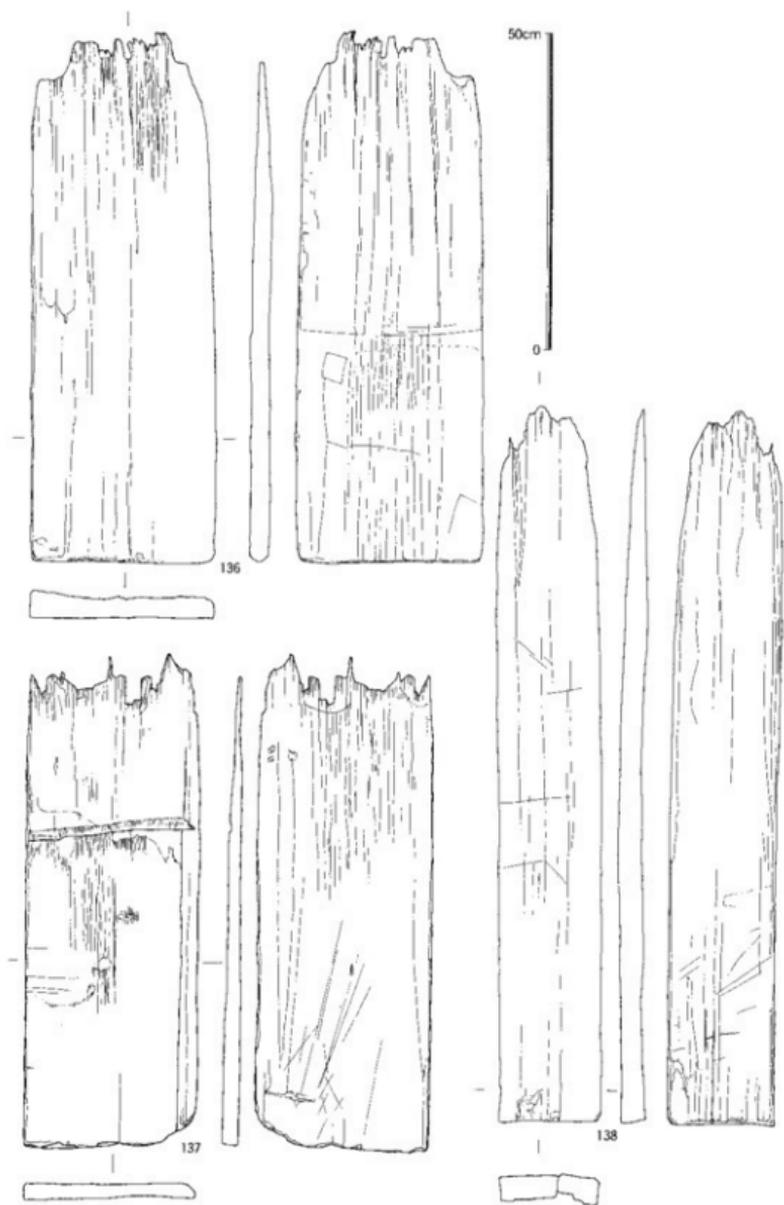
第160圖 SE-11出土木製品(5)



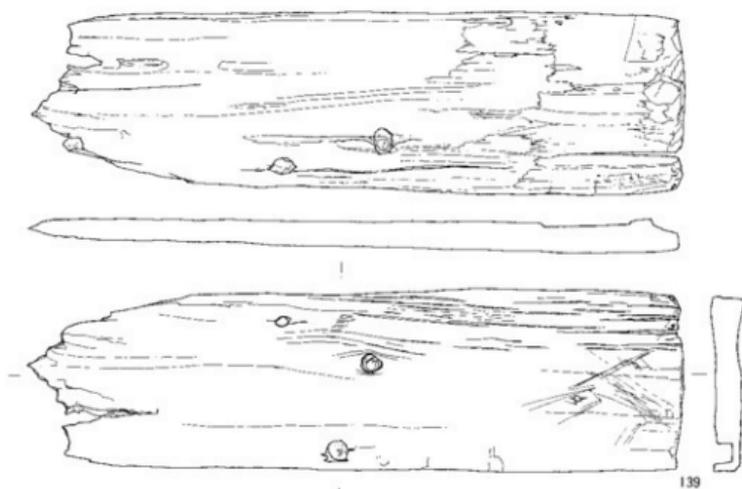
第161图 SE-11出土木製品(6)



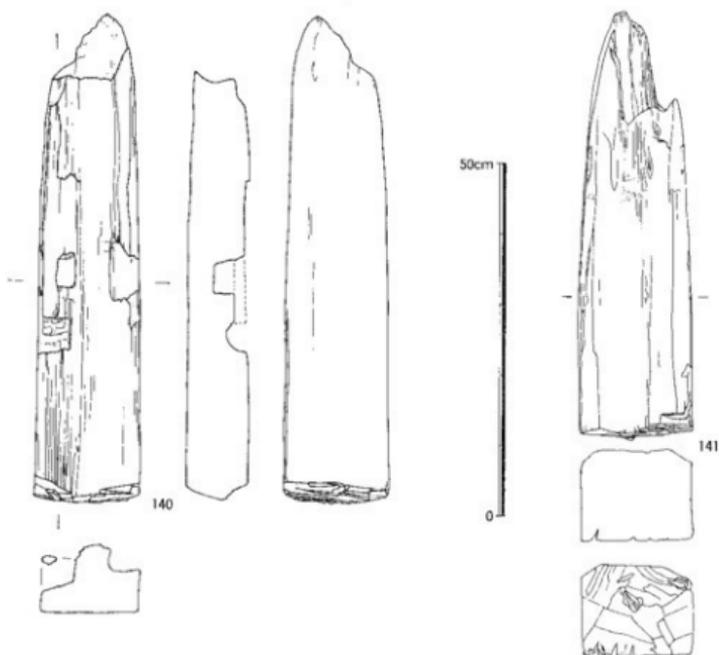
第162圖 SE-11出土木製品(7)



第163図 SE-11出土木製品(8)



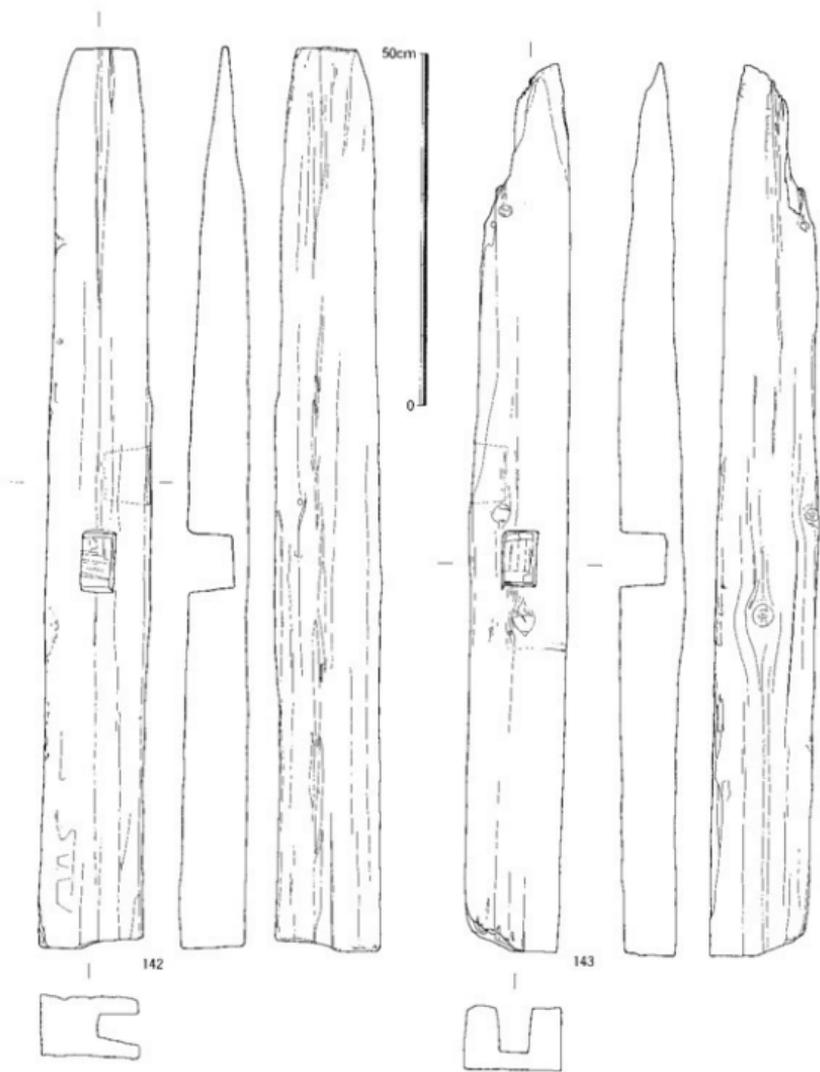
139



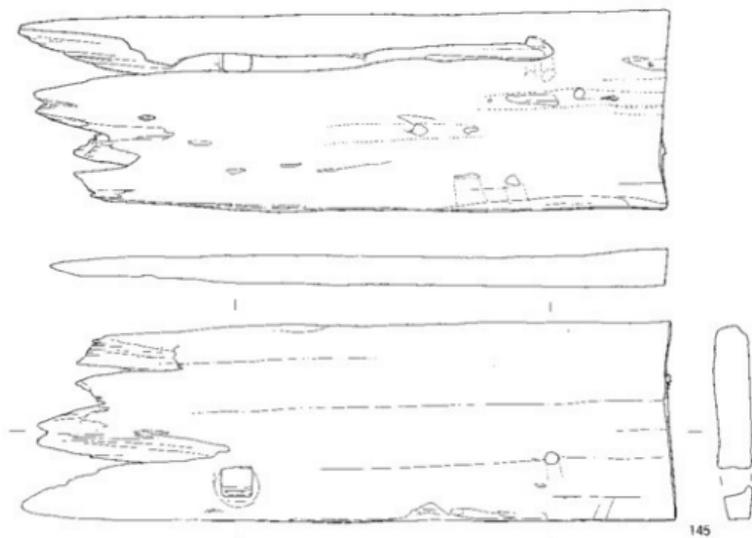
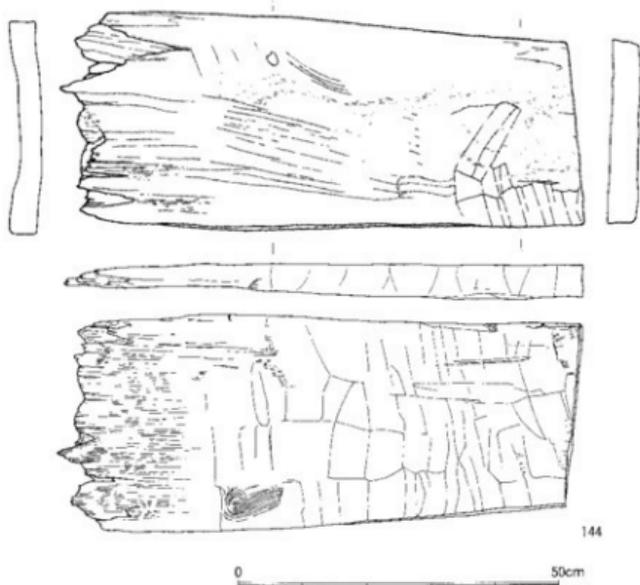
140

141

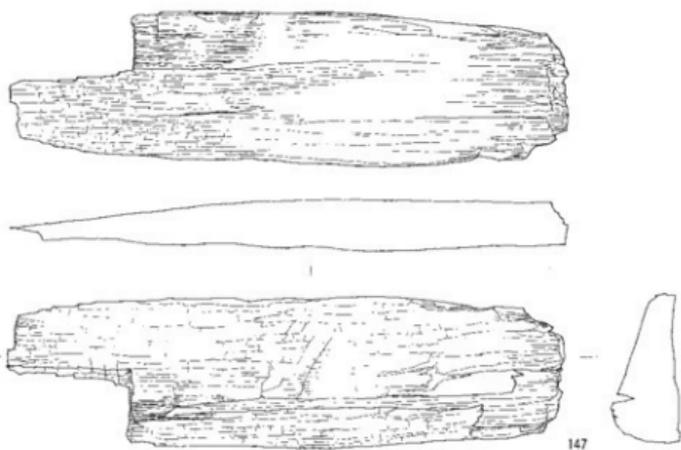
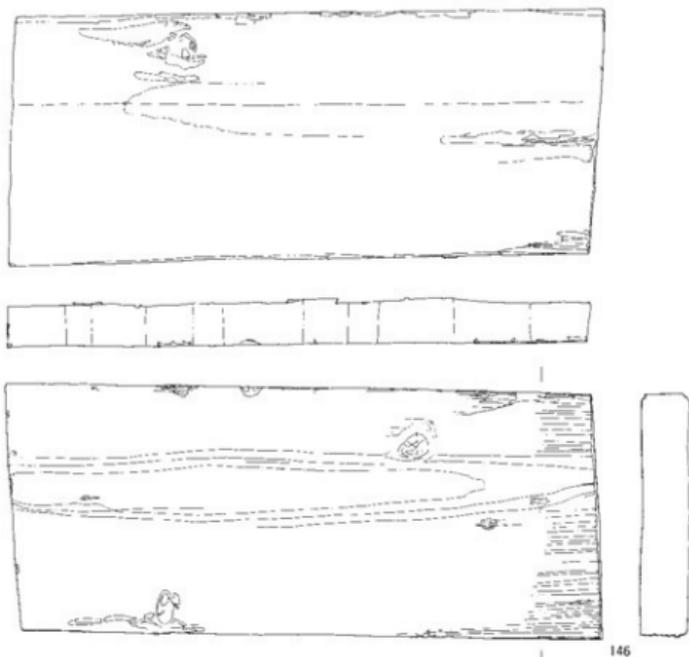
第164圖 SE-11出土木製品(9)



第165圖 SE-11出土木製品(10)

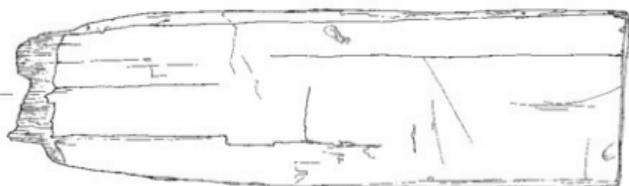
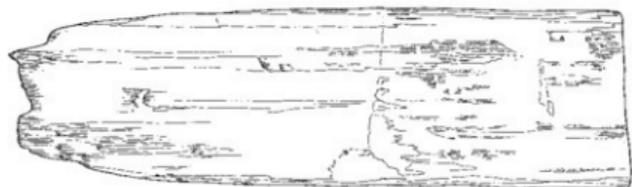


第166図 SE-11出土木製品(11)



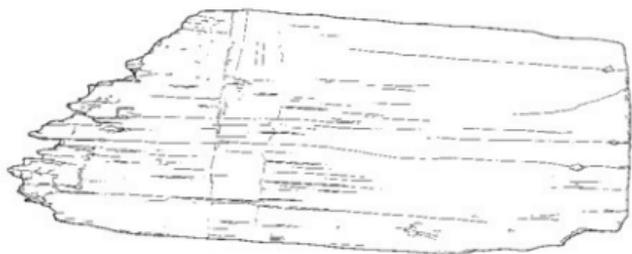
0 20cm

第167圖 SE-11出土木製品 (12)



148

0 50cm

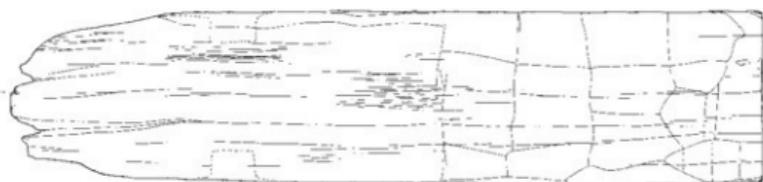
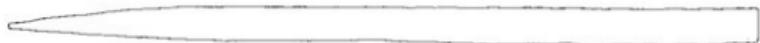


1

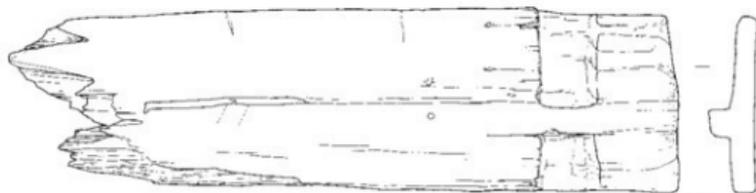
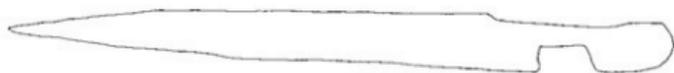
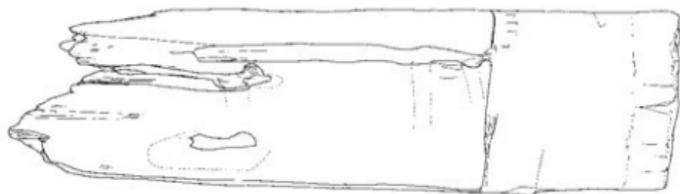


149

第168圖 SE-11出土木製品 (13)



150



151

第169図 SE-11出土木製品 (14)

のままでは不安定である。ところが底部には、四隅にも四辺にも脚を取り付けていた形跡が認められないので、側板に取り付けてあった別材が脚の機能を兼ね備えていたのではないかと考えられる。板材（115・116）は井戸の底面に敷かれていたもので、その上に曲物側板（114）が載せてあったので、側板の跡が円形に残っている。角材（131・132・142・143）は井戸側の隅柱に使用されていたもので、2方向から横棧を差し込むための穴が開けられている。井戸側は1度作り直されているようで、この他にも隅柱と思われる穴がある角材（129・130・140）が出土しており、こちらが最初に作られた井戸側の部材であると考えられる。この他に穴のない角材（122・141）が出土しているが、井戸側には使用されておらず、井戸側のさらに外側で検出されているので、井戸の覆屋の柱根の可能性も考えられる。板材（125・128・134）は横棧で、隅柱の穴へ差し込むため端部を加工している。板材（123・124・126・127・133、135～139、144～151）は井戸側の縦板に使用されていた。大きさ、形状の様々なものがみられ、井戸側を作るため色々な材を寄せ集めているようで、なかには縦板そのものの機能には必要のない加工が施されているものもあり、何らかの部材からの転用材であろう。127・135・147の端部には枠を組むような加工が施されている。150には側面の両側に長方形の穴が開けられており、151は片面に両側面からの挟り込みがみられる。その他の板材には特に加工は認められないが、124・136・137・149には、横棧によって擦れた痕跡が残る。

SE-13（第170・171・172図）

井戸側の縦板に使用されていた板材（152～157）が出土している。157は他と比べると大型で厚みがあり、片側の長側辺に反りを持たせるように作られており、何らかの部材からの転用材であろう。

SE-18（第172図）

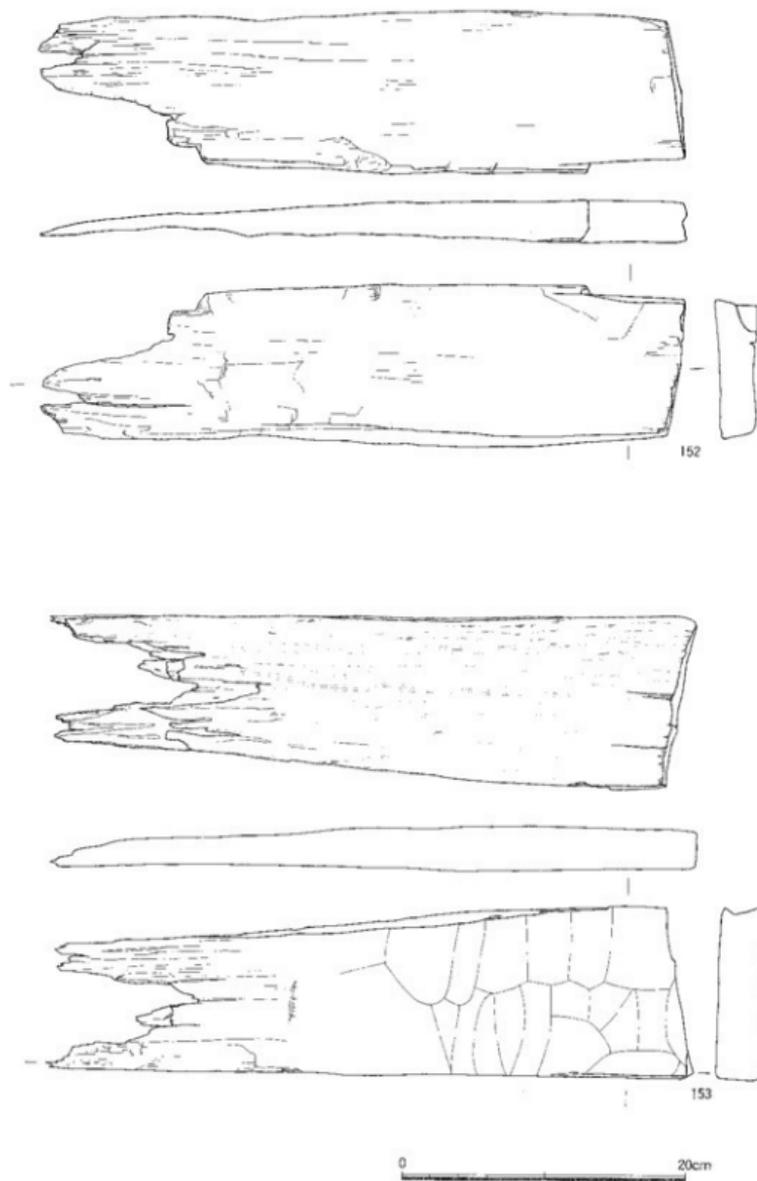
井戸の水溜に使用されていた曲物側板（158・159）が出土している。158はほぼ楕円形を呈しており、内面には格子状の刻み目が四隅の曲がり角にだけ認められる。159には縦方向と格子状の刻み目が認められる。

SP-157（第173図）

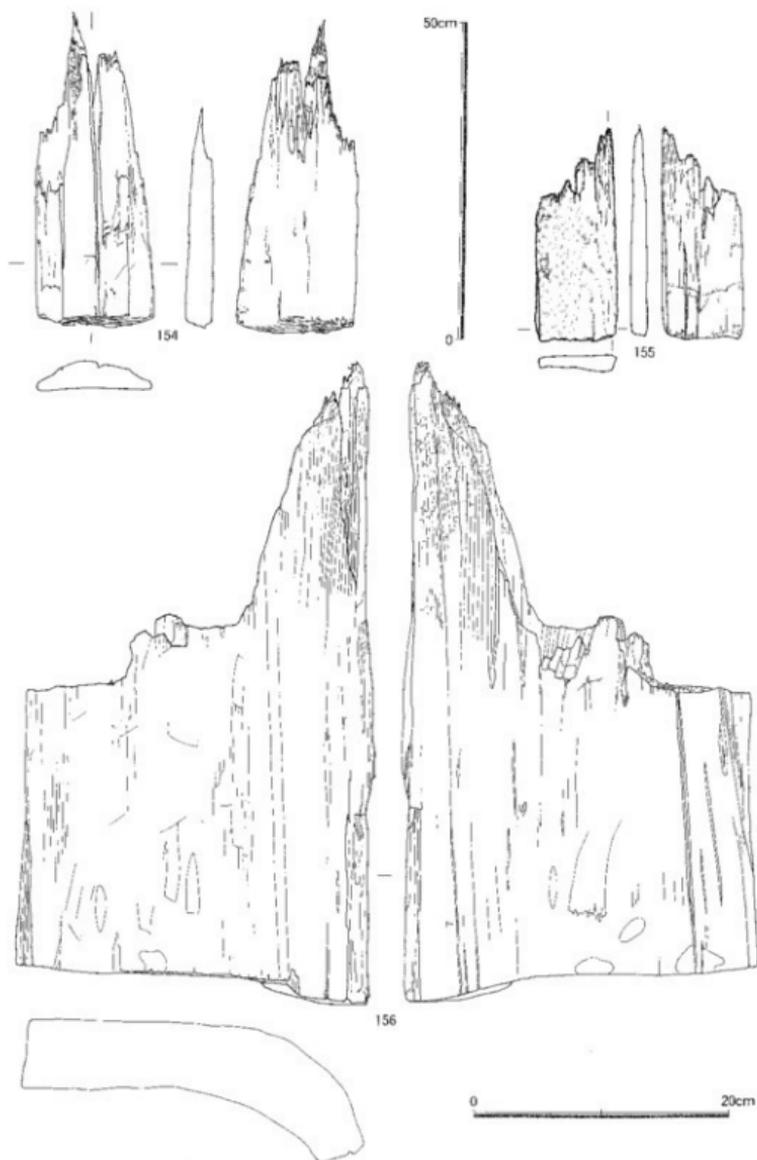
連南下駄（160）が出土している。台は楕円形で、表側は爪先の足指のあたる部分が、使用のため擦り減り、窪んでいる。裏側にはノミ状工具の痕が顕著に残る。

SP-1104（第173・174図）

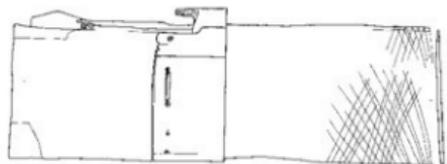
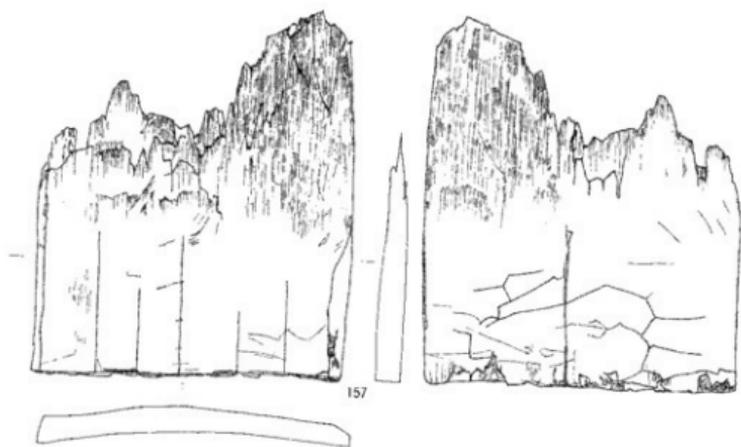
柱根（161・166）が出土している。161は面取り加工がなされ、明確ではないが断面正



第170圖 SE-13出土木製品(1)

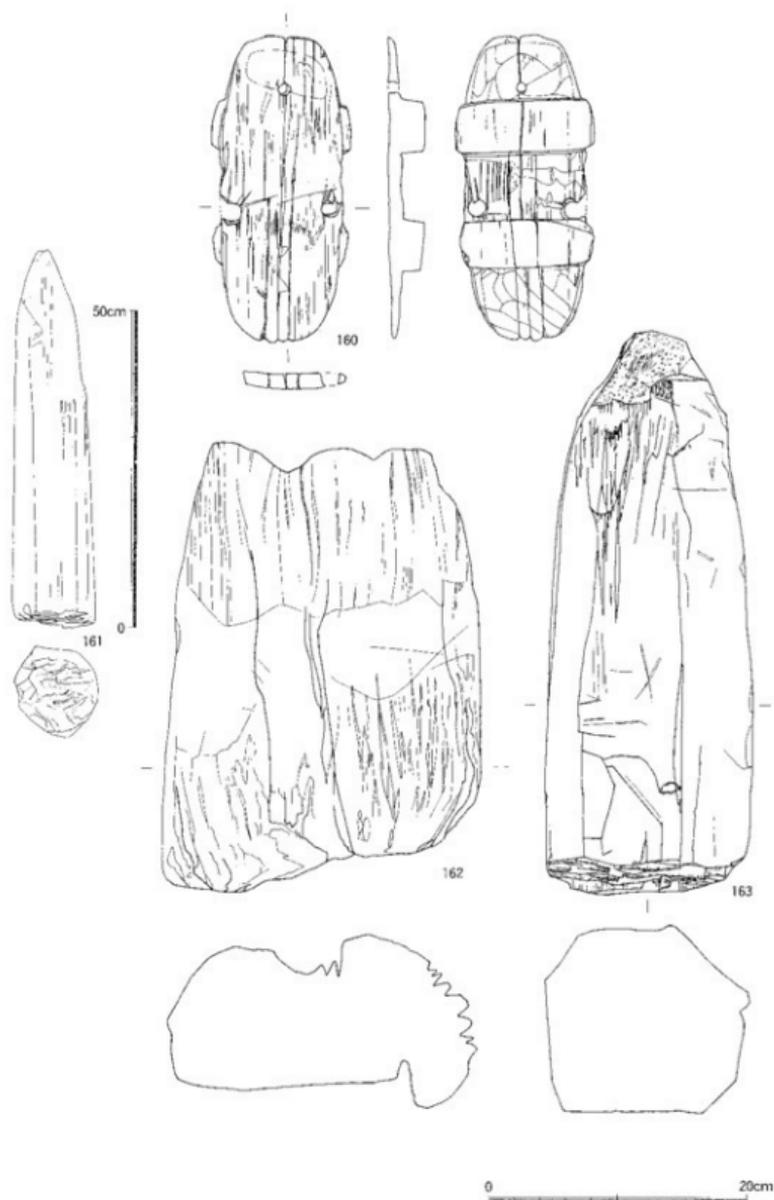


第171図 SE-13出土木製品(2)

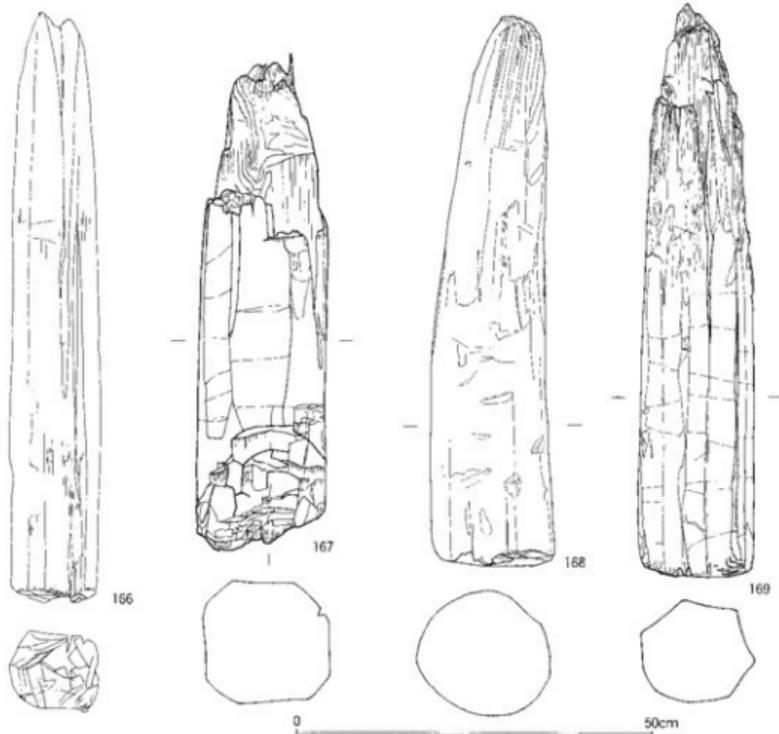
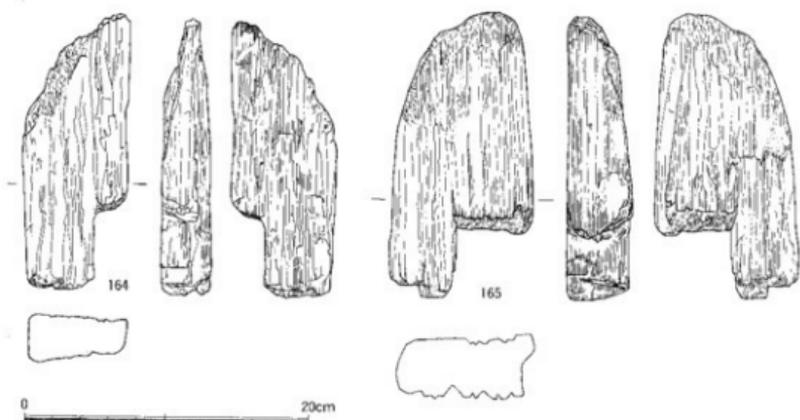


0 50cm

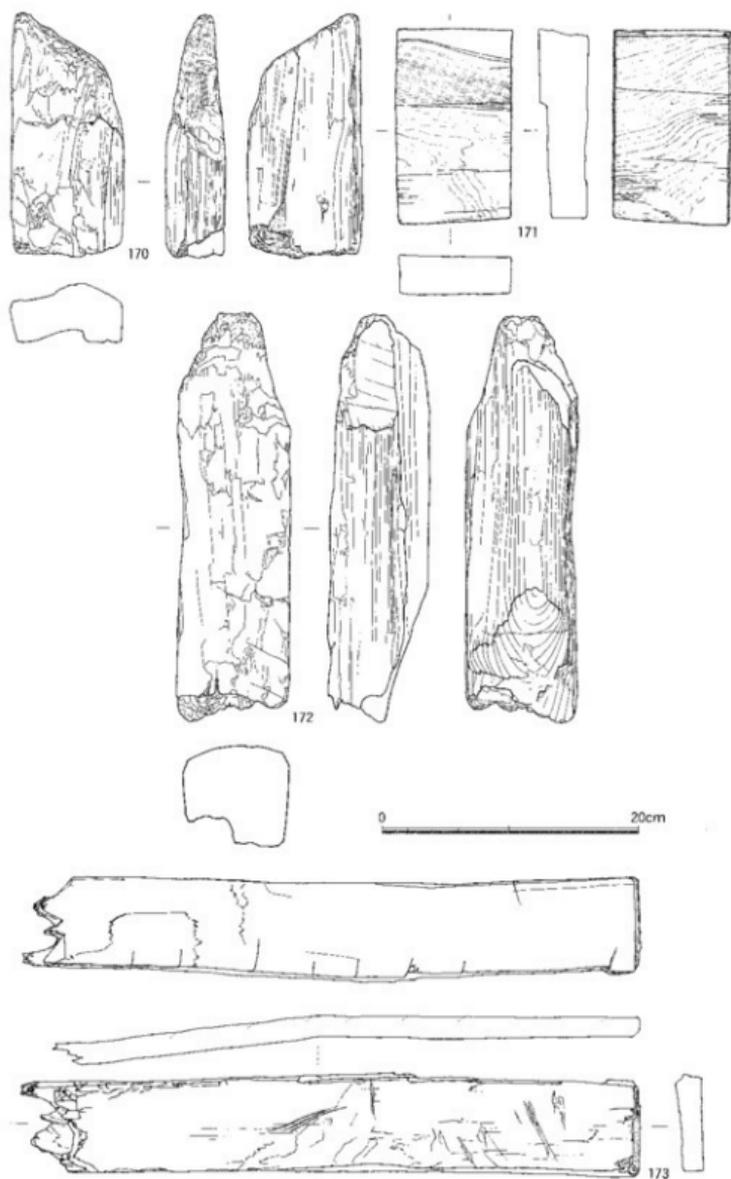
第172圖 SE-13・18出土木製品



第173圖 S P - 157 · 515 · 1104 · 1134出土木製品



第174図 S P - 451 · 619 · 1104 · 1152 · 1327出土木製品



第175図 SP-1221・1222出土木製品

六角形に近い形状に仕上げられている。166も同様にして、ほぼ正方形の形状に仕上げられている。

S P-619 (第173図)

礎板に使用されていた板材(162)が出土している。遺存状態は悪いが、別の材が密着していた痕跡が、木目に対して直角に認められる。

S P-515 (第173図)

柱根(163)が出土している。7面取りの加工が施されている。

S P-451 (第174図)

礎板に使用されていた板材(164・165)が出土している。両方とも穴のような加工が施されていたようで、転用材である。形状からすると鼻縁であった可能性もある。

S P-1152 (第174図)

柱根(167)が出土している。8面取りの加工が施され、断面形が隅切りの正方形に近い形状に仕上げられている。

S P-1134 (第174図)

柱根(168)が出土している。面取りはされずに、円柱形である。

S P-1327 (第174図)

柱根(169)が出土している。6面取りの加工が施され、断面正六角形に近い形状に仕上げられている。

S P-1221・1222・1223 (第175図)

重複した3個のピットから、礎板に使用されていたと考えられる板材(170・173)、角材(172)が出土している。

S P-1176 (第175図)

礎板に使用されていた板材(171)が出土している。

参考文献

- 市川秀之・鈴木寛子「第IV章第2節 西ノ辻遺跡出土の中世木器」『神笠・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要・IV』1987大阪府教育委員会
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1993広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1994広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1995広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅳ』1995広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
小谷方明『大阪の民具・民俗誌』1982文化出版局
西村歩「天川村曲物考」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要2』1994

第7章 まとめ

第1章第2節で述べているように住宅敷地内では、既に調査会による第Ⅰ・Ⅱ期調査、そして市教育委員会による都市計画道路部分の調査が実施されており、古墳時代～近世の遺構面が検出されている。今回の調査においても大方は同様の調査成果が得られているが若干相違点などもあるので、ここでは各時代ごとの遺構と遺物について既往の調査と比較し述べることでまとめたい。

1. 縄文時代

この時期の遺構は、既往の調査と同様に検出されておらず、また遺構面も存在しなかった。基本層序Ⅵ層の黒色粘土より下位の土層堆積状況は、シルト、砂層そしてまた黒色粘土という交互に堆積が繰り返されていることが観察され、この層は河内潟、河内湖による水性の堆積作用によって形成されたものと推定される。遺物は自然河川内やⅥ層を構成する砂層から縄文土器が出土しているがいずれも磨耗が激しく上方からの流れこみによるものであり、北東側にこの時期の遺構が存在するものと推定される。

2. 弥生時代

この時期の遺物は各包含層中に破片が散見する程度であり、既往の調査よりもさらに遺構面の存在する可能性は低いと考えられる。縄文時代と同様に、今のところ北東側に遺構の存在が推定されるに過ぎない。

3. 古墳時代

この時期の遺構は調査区を北東から南西方向に流れる自然河川や、単発的に土坑が検出される程度で、水田跡も南側のM区で辛うじて畦畔が検出されたに過ぎない。建物跡などの遺構は検出されず、第Ⅱ期調査区と比較して遺構、遺物の量は希薄になる傾向があるので、集落の中心からは外れるようである。自然河川はその出土遺物から古墳時代を通じて流れていたと推定され、後期になるとその幅を縮小している。河川内からは庄内式～布留式に比定される遺物が出土しているので、北東側にこの時期の集落の存在が推定される。水田跡は遺存状況が悪く、所属時期を明確にできるような出土遺物がほとんど無いため、時期の決定は難しいが、畦畔内から出土した土器から、今のところ古墳時代前期頃の時期を考えている。

4. 奈良時代～平安時代

この時期は、単一の遺構面としては検出していないが、M区で検出したS E-18がその出土遺物が8世紀後半頃の時期を示している。奈良時代末頃と考えられるが、この時期の遺構はこれだけであり、調査区全体としてはこの時期の遺構は欠落しており、既往の調査結果と同様の状況を示す。

平安時代の遺構も単一の遺構面として検出していないが、次の鎌倉時代の遺構面と同一面で検出されている。出土遺物の内容は黒色土器、緑釉、土釜などであり、その時期は10世紀末～11世紀頃を示しており、このことは集落の成立を平安時代の終わり頃に求めることができよう。なおこの時期の遺構、遺物が検出されるのはM区に顕著であり、K・L区ではほとんど検出されなかった。

5. 鎌倉時代～近世

今回の調査で最も多くの遺構、遺物が検出されたのが鎌倉時代である。遺構としては井戸、土坑、柱穴などが検出されており、柱穴などは無数あり、何回も建物が建替えられたことを物語っている。遺構の検出のされかたを見ると調査区の西側半分に集中しており、東側は鋤溝が見られ主に耕作地として利用されていたようで、居住地と耕作地とが明確に区別されていたが、その境界は深い溝によって区画されるわけではなく、浅い溝によって隔てられていたに過ぎない。集落の存在した時期であるが、出土遺物から推定すると平安時代末には既に集落は成立しており、途中廃絶されることなく引き続き13世紀末から14世紀初頭頃まで存続したことが出土遺物から推定される。14世紀代の遺構、遺物がほとんど検出されていないのでこの時期には廃絶されたようである。出土遺物を見ると調査区の北側のK・L区に行くほど新しくなる傾向を示しており、平安時代終わり頃に成立した集落が鎌倉時代に入ってから、北側にその範囲を広げていったことが推定される。集落の範囲であるが、近隣の発掘調査の結果から、さらに南西方向に広がっていることが考えられるが、当時、西側一帯には深野池が存在し、かなり池に近い場所で営まれた集落といえよう。M区で検出された池状の落ち込みS T-01やN・L区で検出された水路S T-02は、川船程度の大きさであれば十分通行可能な規模を持ち、深野池に続いていたのではないかと推定される。

この時期を代表する土器である瓦器碗は、黒色土器B類から発展する初現期（11世紀）のものから、衰退化に向かう（14世紀初頭）のものまで出土している。近くに産する楠葉型瓦器碗は古い段階で現われるが、12～13世紀代では大和型瓦器碗が主流を占めるよう

ある。ただ細部を見ると典型的な大和型瓦器碗と必ずしも一致するわけではなく形態は大和型に酷似するが、細かい手法において異なる点があるようである。

また、M区のSK-06では「東大寺」の刻印のある平瓦が出土しているが、この瓦は平安時代末（1180年）に平重衡の南都攻めによって焼失した東大寺を再建するため、大勲進職に任ぜられた俊乗坊重源が、東大寺造営料国となった備前国万富（岡山県赤磐郡瀬戸町万富東大寺瓦窯跡—国史跡）で焼かせたものである。同じくSK-06から出土した他2点の平瓦や、SP-1509・1515で礎板に使用されていた平瓦も、刻印は見られないものの、タタキメの文様から同窯で焼かれたものと考えられる。このように、東大寺で使用されるはずの瓦が当地で出土したことは、当地と東大寺との間に何らかの関係があったのかも知れない。因みに調査区の西側の小字名が「東大寺（ひがしおおてら）」、「西大寺（にしおおてら）」と称するのは興味深い。

13世紀末～14世紀初頭頃に廃絶された以後は集落が営まれた様子は無く、近世末までは田畑として利用されていたようである。

以上、既往の調査結果との比較で各時代ごとの遺構と遺物についてまとめたが、今回の調査では、当遺跡の集落が少なくとも平安時代終わり頃には成立し、鎌倉時代末まで存続していたという新知見が得られ、第II期調査で報告されている古墳時代中期の建物跡を考へ合せると、少しずつ場所を変えながらもさらに長期間にわたって集落が継続的に営まれていたことが明らかになった。今回の報告は、終始遺構と遺物の説明の羅列になった感が否めないが、各時代の遺構の性格の把握、遺物の検討や地理的・歴史的背景を含めたこれら遺跡の総合的な検討は、来年度刊行予定の最終報告書（第IV期の調査報告）において行ないたいと考えている。御容赦を乞う次第である。

遺物観察表

種別	品名	数量	色調	形態・特徴	調整・手法	遺物名
73	瓦器 筒 (複製) II-1	5.6	赤色	底部から外上方に開き1/2くらいのところから急勾配で外	外面	口縁部にヘラミガキ
		15.0	灰色	方に伸び端部は丸く終る 沈線あり 高台は逆三角形	内面	縞線ミガキと見込みに連続輪状のヘラミガキ
73	瓦器 筒 (複製) I-3	5.8	赤褐色	壁面に厚みがない 底部から外上方に開き端部は丸く終る	外面	指押さえの痕 細い分割ヘラミガキ
		14.8	灰色	高台やや下に沈線あり 高台は台形	内面	密な縞線ミガキ 見込みに連続輪状のヘラミガキ
73	瓦器 筒 (複製) I-3	5.0	赤褐色	底部から外上方に開いたのちやや内傾のところから直線的に伸び端	外面	3分割のヘラミガキ 口縁部にナグによる鋭い縦線
		14.8	灰色	部に丸く終る 小さな大ぶくれの縁部と見込 高台は逆三角形	内面	縞線ミガキと見込みに連続輪状のヘラミガキ
74	土器類の他類 複製3.1 複製5.0	3.1	赤褐色	底部底部から外下方へ下り端部は丸く終る	外面	ヨコナゲ
		5.0	灰白色	杯部不明	内面	
74	瓦器 筒 (複製) II-3	5.3	赤褐色	底部から外上方に開いたのちやや内傾のところから外上方にやや急勾配で伸	外面	3分割のヘラミガキ 指押さえ
		14.0	赤褐色	びる 口縁部で厚みをもった端部は丸く終る 沈線あり	内面	鋭い縞線ミガキと見込みに密な連続輪状ヘラミガキ
74	瓦器 筒 (複製) II-3	5.2	赤褐色	底部からゆるやかに伸び1/2のところから急傾斜に立ち上がり端部は	外面	口縁部に細い分割線のあるヘラミガキ
		14.7	灰色	丸く終る 口縁部は厚み 高台は1つ	内面	縞線ミガキと見込みに連続輪状のヘラミガキ
74	土器類の他類 複製5.8 複製7.7	7.8	赤褐色	「A」の字に開く筒状 内反する口縁部を有する	外面	胴部にも多数の指押さえ
		4.8	灰白色		内面	口縁部にヨコナゲ
74	瓦器 筒 (複製) II-2	5.1	赤褐色	壁面は厚み ゆるやかに開いたのちやや急勾配で伸び端部	外面	4分割の粗いヘラミガキ
		14.8	緑灰色	は丸く終る 端部に沈線あり 高台は台形 変形	内面	密な縞線ミガキと簡単な連続輪状のヘラミガキ
75	瓦器 筒 (大和) II-A(古)	5.3	赤褐色	底部からゆるやかに外上方に開き口縁部は直立気味で伸	外面	粗いヘラミガキ 口縁部にナグによる鈍い縦線
		14.8	灰色	端部は短く外反して終る 浅い沈線	内面	縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
75	瓦器 筒 (大和) II-A(新)	5.1	赤褐色	底部からゆるやかに開いたのちやや内傾をもって外上方に	外面	指押さえとわずかなヘラミガキ 口縁部にナグによる鋭線
		13.6	灰色	立ち上がり端部は丸く終る 端部上位に沈線あり	内面	縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
75	瓦器 筒 (大和) II-A(古)	5.1	赤褐色	底部からゆるやかに開いたのち角度をもって外上方に立ち	外面	指押さえと省略された粗いヘラミガキ
		14.6	灰白色	上がり端部はやや内側に終る 端部に沈線あり	内面	密な縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
75	瓦器 筒 (複製) II-3	5.2	赤褐色	底部からゆるやかに伸びやや内傾をもって外上方に開く	外面	指押さえと粗いヘラミガキ
		15.2	灰色	端部は丸く上位に沈線あり 高台は逆三角形	内面	縞線ミガキと省略された連続輪状のヘラミガキ
75	瓦器 筒 (複製) II-3	5.4	赤褐色	壁面より口縁部の方が器壁が厚い 外上方に伸びたのちやや急勾	外面	指押さえ 風化のためヘラミガキは不明
		14.6	灰色	配で立ち上がり端部は丸く終る 沈線は中下に流る	内面	縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
76	瓦器 筒 (大和) II-A(新)	5.1	赤褐色	底部より外上方に開いたのちやや内傾をもって外上方に伸びる 口縁部	外面	指押さえ ヘラミガキは認められない
		13.6	灰白色	やや厚し端部は丸く終る 高台は逆三角形 沈線あり	内面	淵部の大きい粗い縞線ミガキ
76	瓦器 筒 (大和) II-A(新)	4.6	赤褐色	丸底より内傾気味に外上方へ伸びたのち短く外反し端部は	外面	指押さえと粗いヘラミガキ
		14.1	灰色	丸く終る 沈線あり 高台より底部が突出 変形	内面	やや隙間のある縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
76	瓦器 筒 (大和) II-A(新)	4.5	赤褐色	丸底から内傾気味に外上方へ伸びたのち短く外反し端部	外面	指押さえと粗いヘラミガキ
		13.8	灰色	部は丸く沈線を有する ややびつな器形 変形	内面	やや密な縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
88	瓦器 筒 (複製) III-B	4.3	赤褐色	丸底から外上方へ伸びたのち短く外反し端部は丸く上	外面	指押さえと粗いヘラミガキ
		14.6	灰色	向きに沈線を有する	内面	やや隙間のある縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
88	瓦器 筒 (複製) III-B	4.4	赤褐色	底部から外上方に伸びたのち短く外反し端部は丸く沈	外面	粗いヘラミガキとナグによる鋭い縦線 高台は緩な肩り付け
		13.8	灰色	線を有する 高台より底部が突出するびつな器形	内面	粗い縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ
88	瓦器 筒 (大和) II-A(新)	4.1	赤褐色	丸底から内傾気味に外上方へ伸びたのちわずかに外反	外面	粗いヘラミガキ
		14.4	灰色	する 端部は丸く内側に沈線を有する	内面	隙間のある縞線ミガキと連続輪状のヘラミガキ

遺物観察表

館名	遺物ID	遺物名	器種	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
	21	瓦器 鉢 (大和) III-B	4.7 12.8	赤褐色	底面より内筒気味に外上方へ伸びたもの短く反する 腰部は丸く上向き	外面 内面	強いヘラミガキ 強い腰線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	SE-43
				灰色	に沈着を有する 裏面より底面が突出している部分			
	22	土師器 皿	1.4 5.6	赤褐色	扁平で底面から外筒気味に口縁へ緩き腰部は少し角ばる	ココナデ	ナデによる模様	SR-43
				灰白色				
	23	土師器 皿	1.1 7.6	赤褐色 灰白黄褐色	扁平で底面から外上方に短く伸び腰部は角ばる	口縁部ココナデ	ナデによる模様	SR-43
75	24	土師器 皿	1.5 8.1	赤褐色 灰白色	口縁は内筒気味 器形はいびつ 定形	口縁部ココナデ	ナデによる模様	SE-43
88	25	土師器 皿	1.3 8.6	赤褐色 灰白色	浅い平底から短く外上方に伸び腰部は角ばる	口縁部ココナデ	ナデによる模様	SR-43
	26	土師器 皿	1.3 6.4	赤褐色 灰白色	扁平な器形	口縁部ココナデ	肩直部にナデによる模様	SR-43
27	土師器 皿	1.3 8.4	赤褐色 灰白色	浅い平底から短く外上方へ伸び腰部は角ばる	内外ともにココナデ		SR-43	
76	28	瓦器 鉢 縁 (大和)	10.8 32.4	赤灰・灰色 赤褐色 新灰白色	造「ハ」の字に開く口縁部と垂直に伸びる底部をもち 口縁部は外傾する端部を有する 保存者	外面 内面	指押さえ 板ナデ 口縁部に7本/1cmのハケミ 体部板ナデ	SR-43
	29	瓦器 釜 (大和)	11.0 25.0 30.0	新灰白色 赤褐色 黒褐色	口縁部は「く」の字形に唇出し端部は内側に肥厚し は水平方向に伸び腰部は丸い	外面 内面	ナデ 板ナデ	SE-43
75	30	瓦器 鉢 (大和) III-B	4.4 14.1	赤褐色 灰白色	浅い器形 外上方にゆるやかに伸び口縁部はやや内筒気味 に立ち上がり端部は丸く終る 腰部に沈着あり	外面 内面	指押さえ 強い腰線ミガキと省略化された連結輪状のヘラミガキ	SE-42
	31	瓦器 鉢 (大和) III-B	4.5 13.2	赤褐色 灰色	いびつな形 浅く開いたのち口縁でやや外反し端部は 丸く終る	外面 内面	指押さえ 4分割ヘラミガキ 強い板ナデ 腰線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	SE-42
	32	瓦器 鉢 (大和) III-B	4.1 14.1	赤褐色 灰色	丸味をもつ底面から内筒気味に外上方に伸びたものも 反し端部は丸く上向きに沈着あり	外面 内面	口縁部に強いナデ 強いヘラミガキ やや凸な腰線ミガキと連結輪状のヘラミガキ	SR-42
	33	土師器 皿	1.5 8.4	赤褐色 灰白黄褐色	やや丸い浅い底面から外上方へ伸びたもの短く上方へ 立ち上がり端部は丸い	内外ともに口縁部はココナデ		SR-42
89	34	土師器 皿	1.4 8.0	赤褐色 灰白色	凹凸のある平底から外上方へ伸びたもの外反し端部は 角ばる	内外ともに口縁部はココナデ	底面に指押さえ	SR-42
	35	土師器 皿	4.1 8.1	赤褐色 灰白色	平底から外上方に短く伸び腰部は角ばる 口縁部に厚 みをもつ	口縁部にナデによる模様	底面に指押さえ	SE-42
	36	土師器 皿	1.3 8.2	赤褐色 灰白色	平底から器蓋を外上方へ短く伸び腰部は角ばる	内外ともに口縁部はココナデ		SE-42
75	37	土師器 皿	1.5 8.5	赤褐色 灰白色	扁平な器形で平底から上方へ短く立ち上がり端部は丸い	兼持している	ナデによる強い模様	SE-42
	38	土師器 皿	1.3 8.2	赤褐色 灰白色	平底から内筒気味に外上方へ伸び腰部は丸い	内外ともに口縁部ココナデ	底面に指押さえ	SE-42
75	39	土師器 皿	1.4 8.0	赤褐色 灰黄褐色	全体に厚みがある 底面よりゆるやかに外上方へ開き 端部はやや角ばる	口縁部にナデによる模様		SR-42
	40	土師器 皿	1.1 8.2	赤褐色 灰色	浅い平底から短く外上方に開き端部はやや角ばる 内面保存者	内外ともに口縁部ココナデ	ナデによる模様	SR-42

遺物観察表

標本番号	遺物名	部 種	長さ(φ)	色 調	形 態・特 徴	調 査・手 法	遺 産 名	
60	土師器皿	1.3 8.4	赤の巻 にぶい褐色	浅い平底から短く外上方に開き縁部はやや角ばる	内外ともに口縁部コソナデ	ナゲによる縁線	SK-44	
				底面からゆるやかに外上方に開き1/2位からやや向上きに	外面	指押さえと幅広いヘラミガキ	SK-64	
				縁部は赤反して終る 高台は低く薄な作り	内面	縁線に際限のある幅広い指線ミガキと縁状のヘラミガキ		
70	瓦 罎 筒 (大和) III-B	4.1 14.2	赤褐色 赤反白色	ゆるやかに外上方に開き口縁部は上向きに伸び端部は丸く終る 端部に沈線あり 高台は低く薄な作り	外面	指押さえと幅広いヘラミガキ	SK-64	
				赤褐色 赤反白色	内面	縁線のある幅広い指線ミガキと広い縁状のヘラミガキ		
70	瓦 罎 筒 (大和) II-A(新)	4.3 14.2	赤褐色 赤反白色	浅く開いた唇形 器型はうすいが口縁部はやや厚みをもち 端部に沈線あり	外面	指押さえと幅広いヘラミガキ	SK-45	
				赤褐色 赤反白色	内面	縁線のある指線ミガキと窄略化された縁線輪状ヘラミガキ		
80	瓦 罎 筒 (大和) II-A(新)	4.4 14.4	赤褐色 赤反白色	浅く開いた唇形 口縁部でやや上向きに伸び端部で少し反する 端部は上向きの沈線あり 高台は三角形	外面	指押さえとおわずかなヘラミガキ	SK-45	
				赤褐色 赤反白色	内面	やや密な指線ミガキと縁線輪状のヘラミガキの一部		
80	瓦 罎 筒 (大和) II-A(新)	4.5 14.0	赤の巻 灰 色	かたむびつ 底面から外上方に伸びたのちやや角度をもって立ち上がり 端部は赤反して丸く終る 端部の沈線と高台	外面	指押さえと幅広いヘラミガキ	SK-45	
				赤褐色 赤反白色	内面	やや密な指線ミガキ 窄略化された縁線輪状のヘラミガキ		
80	土師器皿	1.3 8.0	赤の巻 灰白色	浅い平底から外上方に短く開き縁部はやや角ばる	口縁部にコソナデ	狭いナゲによる縁線 底部に指押さえ	SK-45	
				赤褐色 赤反白色	少しむびつ 底面からはほぼ真横的に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部はコソナデ	底部に指押さえ	SK-45
				赤褐色 赤反白色	底面からゆるやかに外上方に開き口縁は内湾気味に端部は丸く終る	内外ともに口縁部はコソナデ	底部に指押さえ	SK-45
80	土師器皿	1.9 8.4	赤の巻 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開き縁部は丸く終る	内外ともに口縁部はコソナデ	底部に指押さえ	SK-45	
				赤褐色 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁は内湾気味で端部はやや角ばる 兜形	内外ともに口縁部はコソナデ	底部に指押さえ	SK-45
80	土師器皿	1.5 8.4	赤の巻 灰白色	扁平な唇形 平底から短く外上方に開き口縁へ伸びる	内外ともに口縁部はコソナデ	底部に指押さえ	SK-45	
				赤褐色 灰白色	平底から短く外上方に開き縁部はやや角ばって終る	口縁部はナゲによる縁線 底部に指押さえ	SK-45	
90	土師器皿	1.3 8.0	赤の巻 にぶい褐色	平底から短く外上方に開き縁部はやや角ばって終る	口縁部はナゲによる縁線 底部に指押さえ	SK-45		
				赤褐色 灰白色	底面から外上方に開き口縁部は丸く終る	内外ともに口縁部はコソナデ	底部に指押さえ	SK-47
90	土師器皿	3.5 8.6	赤の巻 灰白色	底面から外上方に開き口縁部は丸く終る	内外ともに口縁部はコソナデ	底面に指押さえ	SK-47	
				赤褐色 灰白色	脚部は外反する 器型は全体に厚い	唇部に外面を貼り付け		
90	瓦 罎 筒 (大和) II-A(新)	4.1 13.0	赤の巻 褐色	底面から外上方に開き口縁部で角度をもって立ち上がり端部は丸く終る 端部は赤反して丸く終る 端部に上向きの沈線	外面	多数の指押さえ 幅広いヘラミガキ	SK-48	
				赤褐色 赤反白色	内面	やや密な指線ミガキ 見込みに縁線輪状のヘラミガキ		
90	瓦 罎 筒 (大和) II-A(新)	4.3 12.6	赤の巻 赤反白色	底面から外上方に開き口縁部は中やや外反して丸く終る 端部に上向きの沈線	外面	指押さえ 幅広いヘラミガキ	SK-92	
				赤褐色 赤反白色	内面	やや密な指線ミガキ 形状不明のヘラミガキが見える		
90	瓦 罎 筒 (大和) II-2-1	3.6 11.2	赤の巻 赤反白色	底面から内湾気味に立ち上がり端部は丸く終る 沈線なし	外面	ミガキは認められず	SK-94	
				赤褐色 赤反白色	内面	縁線のある幅広い指線ミガキが見込みまで入っている		
90	青 磁 罎 筒 (奈良) I-1(新)	5.1×3.6	赤の巻 赤反白色	器型は薄く口縁部は外上方に向い端部は丸く終る	外面	指押さえと幅広いヘラミガキ	SK-94	
				赤褐色 赤反白色	内面	井筒の草花文		
90	土師器茶 碗 内径: 11.5 29.0	11.5 29.0	赤の巻 淡黄褐色 赤反白色	内湾する口縁部に上方に直立し外に肥厚する口縁端部を有する 脚は水平に伸びたあと下底気味	外面	指押さえ 脚部から口縁部にかけてタテハケ	SK-94	
				赤褐色 赤反白色	内面	指押さえ 口縁部にナメハケ		
90	瓦 罎 筒 (和歌山) II-3	5.9 14.2	赤の巻 灰白色	底面から内湾気味に開き口縁でわずかに外反し端部は丸く終る	外面	高台周面に多数の指押さえ 風化が激しい	SK-96	
				赤褐色 灰白色	内面	わずかの指線ミガキと見込みにジグザグのヘラミガキ		

遺物観察表

種別	種名	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺跡名	
77	61	土師器Ⅲ Ⅳ	3.1 12.8	赤褐色 灰白色	上管標のもの?	外面 内面	SK-95
	62	須恵器Ⅲ	5.7 20.8	赤褐色 赤褐色 赤褐色	腹部は上方にやや肥厚し外側面に垂直な面を成す	外面 内面	SK-91
	63	土師器Ⅲ	6.9	赤褐色 灰白-赤褐色 赤褐色	左右腹部の張り出しがびつ 作りが雑	外面 内面	SK-91
	64	土師器Ⅲ	2.7 7.0	赤褐色 灰白色	腹部は肉厚 外下方に開き端部は内湾気味に丸く終る	外面 内面	SK-97
	65	土師器Ⅲ	3.6 8.4	赤褐色 赤褐色	杯と台の高さの比1:2 杯の部分は内湾気味に立ち上がり 口縁部は外下方に開き杯縁部とも端部は丸い	外面 内面	SK-97
	66	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-A	4.6 14.0	赤褐色 赤褐色	口縁 平底から立ち上り外方に伸び口縁部でやや膨らみ立ち上がり 口縁部は丸く終る 底部は丸く終る 口縁部は丸く終る	外面 内面	SK-97
	67	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-A	4.6 14.0	赤褐色 赤褐色	全体にしっかりした作りで腹部はややびつ 腹部から内 側にかけて外反し端部は丸く終る 端部に沈線ある	外面 内面	SK-97
	68	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-B	4.6 13.6	赤褐色 赤褐色	底部からゆるやかに伸び口縁部内ナゲによる凹面有す 口縁部に沈線ある	外面 内面	SK-97
	69	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-B	4.3 13.4	赤褐色 赤褐色	ゆるやかに底部から外上方に伸び口縁部は丸く終るところからやや 上向きに立ち上がり端部は外反す 端部に沈線ある	外面 内面	SK-97
	70	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-A(新)	4.8 14.4	赤褐色 赤褐色 赤褐色	ゆるやかに開く腹部と外反する口縁を有する 沈線は 上位を走る	外面 内面	SK-97
90	71	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-A(新)	4.6 13.1	赤褐色 赤褐色	平底からゆるやかに伸び口縁部は丸く終る 端部に沈線 ある 横溝でびつ	外面 内面	SK-97
	72	土師器Ⅲ	1.7 4.3	赤褐色 灰白色	丸底で深みもあり口縁部は厚みをもた角ばる 完形	内外ともコナダ ナゲによる沈線	SK-97
	73	土師器Ⅲ	1.3 8.2	赤褐色 灰白色	均等な厚みで口縁まで続く 端部は丸い 完形	内外とも口縁部コナダ ナゲによる沈線	SK-97
	74	土師器Ⅲ	1.5 7.7	赤褐色 赤褐色	底部中央がわずかに突出している 口縁部は内湾し角ばる 完形	内外とも口縁部コナダ 低いナゲによる鈍い沈線	SK-97
	75	土師器Ⅲ	1.5 8.2	赤褐色 灰白色	平底よりわずかに唇出し短く外上方へ伸びる 端部は内湾気味で角ばる	内外とも口縁部コナダ 鈍い沈線	SK-97
	76	土師器Ⅲ	1.8 8.4	赤褐色 灰白色	ゆるやかに口縁まで伸びる唇部は口縁部に厚みをもつ 端部は内湾し角ばる 完形	内外とも口縁部コナダ 底部に指押え	SK-97
	77	土師器Ⅲ	2.6 13.4	赤褐色 赤褐色	平底から唇出しで外上方へ短く 口縁部は内湾気味でやや角ばる	内外とも口縁部はコナダ 唇部部に指押え	SK-97
	78	土師器Ⅲ	1.5 7.8	赤褐色 赤褐色	平底から短く伸び口縁部はやや内湾気味に丸く終る	内外とも口縁部コナダ ナゲによる鈍い沈線	SK-97
	79	土師器Ⅲ	1.8 7.5	赤褐色 灰白色	平底から伸び口縁部はやや内湾気味をもって外上方に開く	内外とも口縁部コナダ 唇部部にナゲによる鈍い沈線	SK-97
	80	土師器Ⅲ	1.4 8.2	赤褐色 灰白色	やや筒形 平底からゆるやかに伸び口縁部は丸く終る	内外とも口縁部コナダ 唇部部にナゲによる鈍い沈線	SK-97

遺物観察表

器名	種別	器種	高さ(m)	色調	形 態・特 徴	調 整・手 法	遺構名
90	土師器Ⅲ	81	1.2	赤褐色	平底からゆるやかに開き口縁部やや角度をもって立ち	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-97
			8.4	灰白色	上がり丸く終る		
		82	1.5	赤褐色	ややいびつ 平底から短く開き内湾する口縁をもつ	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁縁	SK-97
7.9	赤褐色	にぶい黄褐色					
90	土師器Ⅲ	83	1.7	赤褐色	横円形で平底からゆるやかに伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる鈍い縁縁	SK-97
			7.8	灰白色			
		84	4.4	赤褐色	形整化した高台から斜め上方に伸びる体部は口縁でわずかに	外面 口縁部やや強いナデ 1条のヘラミガキ 指押さえ 内面 器底の高い器壁と器底 器底に施された連続輪状ヘラミガキ	SK-100
14.4	赤褐色	に置いたのち短く再反する沈線は上端に位置する					
90	瓦 器 類 (大和) Ⅲ-A(新)	85	5.1	赤褐色	高台と底部の高さはいずれも 口縁部で厚みをもつ 明	外面 指押さえ 水平方向のヘラミガキ 内面 器底のある器壁ミガキと輪状の簡単なヘラミガキ	SK-101
			13.6	赤褐色	瞭な沈線有り		
		86	1.4	赤褐色	平底からゆるやかに口縁へ続く 端部はわずかに角	外面 磨耗している ナデによる縁縁 内面	SK-101
8.4	赤褐色	ばる					
90	土師器Ⅲ	87	1.3	赤褐色	底部中央がわずかに突出する ゆるやかに口縁へ開き	外面 磨耗している ナデによる縁縁 内面	SK-101
			8.6	灰白色	端部はやや角ばる		
		88	5.1	赤褐色	体部中央で器壁して体部と見込みの境に段を有する	外面 底部は磨削 内面 ヘラによる片磨り	SK-101
90	瓦 器 類 (大和) Ⅲ-A-B	89	5.7	赤褐色	底部から口縁まで均等な厚みの器壁は口縁部でわずかに	外面 体部1/2の高さまで3分割ミガキ 内面 器底に施したミガキ 簡単な連続輪状ヘラミガキ	SK-106
			14.6	赤褐色	に外反し内面に沈線をはさる		
		90	5.7	赤褐色	丁寧なつくりの高台と厚た丸みのある体部を有する	外面 鋭い3分割ミガキ 指押さえ 内面 やや隙間をもつ縁縁ミガキ 連続輪状ヘラミガキ	SK-106
90	土師器Ⅲ	91	2.6	赤褐色	平底から直立気味に器壁し口縁部は内湾し厚みは均等	内外ともヨコナデ 器底部に指押さえ	SK-106
			13.8	灰白色	である 完形		
		92	14.5	赤褐色	丸底から内湾し口縁部で「く」の字に器壁したのも再上方	外面 体部に斜めのハケメ 器底ヨコナデ 内面 指押さえ ヘラケズリ 2ヶ所に穿孔	SK-111
12.4	赤褐色	に伸び端部は丸く終る 斜角瓦葺きともに目立つ					
90	土師器Ⅲ	93	16.2	赤褐色	ほぼ球形の体部から内湾して伸びたのも口縁部で「く」	外面 体部に指押さえ 斜めのハケメ8本(0.9x) 内面 器底に原体底 ヘラケズリ	SK-111
			11.6	灰白色	の字に器壁し端部は内面に肥厚し丸く終る		
		94	4.6	赤褐色	平底から外上方へ伸びる	外面 風化している 内面 指押さえ 原体底	SK-120
90	瓦 器 類 (大和) Ⅲ-A(新)	95	4.9	赤褐色	低い高台から内湾し丸みをもって口縁へ続く	外面 指押さえ 3分割ミガキ 内面 やや密な器壁ミガキと時計回りの連続輪状ヘラミガキ	SK-131
			14.6	赤褐色	器壁と器底が上端に当たる 器壁は厚目で均等 完形		
		96	4.6	赤褐色	低く薄な高台から斜め上方に伸び口縁上端に沈線が高	外面 指押さえ 3分割ミガキ 内面 鋭い器壁ミガキと時計回りの連続輪状ヘラミガキ	SK-131
13.8	赤褐色	らる					
90	瓦 器 類 (大和) Ⅲ-A(新)	97	5.7	赤褐色	いびつであるが厚みのある器壁は口縁まで伸びる	外面 斜めに磨削する指押さえ 分割性のあるヘラミガキ 内面 密な器壁ミガキと時計回りの連続輪状ヘラミガキ	SK-132
			14.0	赤褐色	浅い沈線が上端に当たる		
		98	1.4	赤褐色	平底から器壁して短く外上方へ伸びる 端部は外反	外面 内外とも口縁部ヨコナデ 器底に指押さえ 内面 太いジグザグのヘラミガキ(2mm幅)	SD-59
8.8	灰白色	する					
90	瓦 器 Ⅲ	99	1.6	赤褐色	中央のややふくれた底部から短く伸び口縁部はやや外	内外とも口縁部はヨコナデ 内面 鋭いジグザグのヘラミガキ	SD-59
			8.6	灰白色	反する		
		100	1.8	赤褐色	平底から器壁して上方へ短く伸び口縁部は外反してわ	内外とも口縁部はヨコナデ 内面 太いジグザグのヘラミガキ(2mm幅)	SD-59
8.5	赤褐色	ずかに水平方向に伸びる 完形					

遺物観察表

遺物番号	遺物名	遺物種別	寸法(mm)	色調	形 態・特 徴	調 整・手 法	遺跡名	
79	101	瓦 葺 瓦	1.7	赤褐色	平底から屈曲して上方へ向い口縁は外反してわずかに	外面	SD-99	
			9.5	粉灰白色	水平方向に伸びる	内面		細いヘラミガキがそれぞれ4程度十字に置かる
	102	瓦 葺 瓦	1.5	赤褐色	平底から外上方へ開き端部は丸く終る	外面	摩耗している	SD-99
			9.6	粉灰白色		内面	判別できず	
79	100	瓦 葺 瓦 (大和B)	7.0	赤褐色	内湾する体部から口縁部でくの字に屈曲したもの端部は肥	外面	罫と口縁の間に指押さえ 罫は貼り付けナゲ	SD-99
			21.8	灰白色	厚し丸く終る 内側に凹縁を有する 罫は水平に伸びる	内面	は縁部はココナゲ	
	5.2	赤褐色	口縁部内湾欠陥 口縁部端は外に肥厚し外に一糸の状	外面	罫は貼り付けナゲ	SD-99		
	19.2	赤褐色	縁を成す 罫は水平方向に伸び端部は丸い	内面	板ナゲ 原形感がわずかに残る			
106	土師器(刀)	34.2	赤褐色			断面2等辺三角形	SD-99	
83	土 師 器 (大和)	丸大瓶口	4.7	赤灰白色	紡錘形		径0.4cmの痕欠	SD-99
			9.8	灰白色	丸底から外上方に伸び端部やや外反して丸く終る	外面	指押さえ 形状化した高台	SD-99
79	瓦 葺 瓦 (大和)	瓦一瓦	3.3	赤褐色	丸底から外上方に伸び口縁でやや上向きに立ち上がり	外面	指押さえ	SD-99
			10.0	灰白色	端部は丸く終る 端部に沈線流る 罫部は薄い	内面	縁部の開いた階級ミガキが底部へ続く	
92	100	瓦 葺 瓦 (大和)	3.8	赤褐色	扁平でややびつ ゆるやかに開いたのもやや上向きに立ち上	外面	指押さえ わずかなヘラミガキ	SD-99
			12.6	粉灰白色	り端部は丸く終る 端部に沈線流る 高台は薄	内面	縁部のある階級ミガキと簡単な溝状輪状ヘラミガキ	
	101	瓦 葺 瓦 (大和)	4.1	赤褐色	扁平な型形 外上方に開いたのも端部やや上向きに終	外面	指押さえ 数本のヘラミガキ	SD-99
	14.6	灰白色	る 端部に沈線流る	内面	やや縁部のある階級ミガキと溝状輪状ヘラミガキ			
111	瓦 葺 瓦 (大和)	4.2	赤褐色	平底から外上方にゆるやかに伸びたのも端部はやや外	外面	分節性のあるヘラミガキ	SD-99	
13.4	粉灰白色	反して終る 端部に浅い沈線流る	内面	階級ミガキと簡単な溝状輪状ヘラミガキ				
112	瓦 葺 瓦 (大和)	4.4	赤褐色	端部からゆるやかに開いたのもやや角をもって立ち上り端部は外反	外面	わずかにヘラミガキが残る	SD-99	
13.6	粉灰白色	丸く終る 直線と角に並ぶ 口縁部ナゲによる形を形成する	内面	縁部の開いた階級ミガキと明確な溝状輪状ヘラミガキ				
80	113	土師器(中)	2.4	赤褐色	平底から屈曲して浅「ハ」の字に伸び口縁部は厚みを	内外とも口縁部はココナゲ	屈曲部に指押さえが顕著	SD-99
			12.0	淡黄色	もも角ばって終る 兜形			
	114	土師器(中)	2.3	赤褐色	平底から屈曲して外上方へ開き口縁部では内湾しやや	内外とも口縁部はココナゲ		SD-99
			13.7	に高い褐色	角ばる			
79	115	土師器(瓦)	1.9	赤褐色	平底から逆「ハ」の字に屈曲して開き端部は丸く終る	内外とも口縁部はココナゲ	指押さえ多数	SD-99
			11.8	灰白色				
	116	平 瓦	横長 1.5×6.3	角縁-弱赤 に凸縁あり 赤褐色		凹縁	赤目の痕	SD-99
	4.0	灰白色	丸底からほぼ垂直に立ち上がる	凸面	縄目の痕	内外とも口縁部はココナゲ 底部に指押さえ	SD-99	
90	118	土師器(瓦)	1.5	赤褐色	平底から内側に屈曲し口縁はほとんど両行し角ばって	内外とも口縁部はココナゲ		SD-99
			6.0	淡黄色	いる			
	119	土師器(瓦)	1.4	赤褐色	平底から屈曲し短く内湾欠陥に終る	内外とも口縁部はココナゲ	ナゲによる縁線	SD-99
			7.7	灰白色 -直線褐色	端部は角ばる 兜形			
120	土師器(瓦)	1.2	赤褐色	平底から屈曲して外上方へ向かう 口縁部は厚みを	内外とも口縁部はココナゲ	ナゲによる明確な縁線	SD-99	
			7.6	淡黄色	もって角ばる 兜形			

遺物観察表

標本番号	遺物	目録	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺物名	
80	121	土師器皿	1.5	赤赤	底面より口縁部の方に厚みをもつ端部は角ばる 完形	口縁部はナゲによる縁線	SD-90	
			8.5	浅黄褐色				
	122	土師器皿	1.2	赤赤	底面中央がやや高い丸底からゆるやかに外上方へ伸び 口縁部は内湾気味で端部はやや角ばる	口縁部はナゲによる縁線	SD-99	
			7.7	淡黄色				
	90	123	土師器皿	1.5	赤赤	平底から屈曲し外反して口縁へ続く 端部は角ばる 完形	口縁部に鈍い縁線	SD-59
				8.2	浅黄褐色 帯灰白色			
124		土師器皿	1.6	赤赤	平底から屈曲し直立気味の端部を有する 端部は角ばる 完形	口縁部に鈍い縁線	SD-59	
			8.6	淡黄色				
125		土師器皿	1.5	赤赤	丸みをもち端部は内湾気味に終る	口縁部に鈍い縁線	SD-36	
			7.9	淡黄色				
126	土師器皿	1.3	赤赤	平底の底面より口縁部は外上方へ伸びる ややいびつ	口縁部はナゲによる縁線	SD-59		
		8.4	淡黄色					
92	127	土師器皿	1.5	赤赤	底面中央がすこし高くなり丸みをおびて口縁へ続く 端部は全体に厚い	口縁部はナゲによる縁線	SD-59	
			8.2	淡黄色				
	128	土師器皿	1.6	赤赤	平底から内湾気味に口縁へ続く 端部は尖る	口縁部はナゲによる縁線	SD-59	
			8.0	浅黄褐色				
	129	土師器皿	1.8	赤赤	平底から短く外上方に伸び端部は上方に伸びる 底面より口縁部の方が壁量は厚い	口縁部はナゲによる縁線	SD-39	
			8.2	淡黄色				
130	土師器皿	1.6	赤赤赤	平底から短く上方に伸び端部は内湾気味で丸く終る	磨耗している	SD-59		
		7.7	灰白色					
131	土師器皿	1.3	赤赤	扁平で口縁はごく短く外上方に伸びる	内外とも口縁部はヨコナゲ 断面部に鈍い縁線	SD-59		
		8.0	赤赤赤 に白濁した 黄褐色					
132	土師器皿	1.1	赤赤	扁平でわずかに屈曲し外上方に伸びる 端部は上方に向かう	内外とも口縁部はヨコナゲ	SD-59		
		8.0	淡黄色					
133	土師器皿	1.6	赤赤	いびつである 口縁部に厚みをもち内湾気味 端部は角ばる	内外とも口縁部はヨコナゲ	SD-36		
		8.0	浅黄褐色 帯灰白色					
134	土師器皿	1.2	赤赤赤	凹凸の激しい底面から短く隆起端部は丸く終る	内外とも口縁部はヨコナゲ ナゲによる縁線	SD-59		
		7.8	灰白色					
135	土師器皿	1.3	赤灰白色 赤緑黄色 帯灰白色	筒円形 平底から短く内湾気味に著く 端部は上向き	内外とも口縁部はヨコナゲ	SD-59		
		8.0						
136	土師器皿	1.4	赤赤赤	凹凸のある底面から短く隆起端部はやや角ばる	内外とも口縁部はヨコナゲ ナゲによる縁線	SD-59		
		8.1	淡黄色					
137	土師器皿	1.3	赤赤赤	平底からゆるやかに逆「ハ」の字に開き端部はやや内湾気味に丸く終る	内外とも口縁部はヨコナゲ ナゲによる鈍い縁線	SD-59		
		8.2	灰白色					
138	土師器皿	1.4	赤赤赤	凹凸のある底面からゆるやかに開く 内面底面にナゲによる凹面あり	内外とも口縁部はヨコナゲ ナゲによる鈍い縁線	SD-59		
		8.2	灰白色					
139	土師器皿	1.4	赤赤灰白色 赤	平底からゆるやかに開き端部は丸く終る 口縁部の壁量は厚め	内外とも口縁部はヨコナゲ	SD-59		
		8.0	赤赤赤 に白濁した					
95	土師器 (大和) 皿-A(新)	5.1	赤赤灰白色	鉢に似つて 底面からゆるやかに上向きに伸びた口縁の両側から 縁で立ち上がり端部はやや角ばる 浅黄あり	外面	押押さ文 3分刻の削いヘラミダキ	SD-68	
		14.3	赤灰白色		内面			やや密な器脚ミダキと横筋のない連続輪状ヘラミダキ

遺物観察表

種別	種名	群種	高さ(m)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺物名
80	瓦葺 棟 (大和) 群-A	5.1	赤褐色	底部からゆるやかに開いたのち口縁部は膨脹膨厚する	外面	指押さえ わずかなヘラミガキ	SD-68
		14.3	赤灰白色	端部下部に浅く沈線有る 高台の断面は台形	内面	やや密な磨練ミガキと太い連続輪状ヘラミガキ	
	瓦葺 棟 (大和) 群-B	4.8	赤褐色	底部からゆるやかに円筒状の口縁部から急激に立ち上がり	外面	指押さえ わずかなヘラミガキ	SD-68
		14.2	赤灰白色	口縁部はほぼ直線的に伸びる(丸み) 沈線あり	内面	密な磨練ミガキと密化された連続輪状ヘラミガキ	
81	瓦葺 棟 (大和) 群-A(新)	4.8	赤褐色	底部からゆるやかに開いたのち口縁部から急激に立ち上がり	外面	指押さえ 口縁部のヘラミガキに不鮮明	SD-68
		14.4	灰 色	は丸み(新) 口縁部は膨脹膨厚する	内面	やや密な磨練ミガキと密化された連続輪状ヘラミガキ	
	瓦葺 棟 (大和) 群-A(新)	5.1	赤色	底部から内湾気味に外上方に開き口縁部は直線気味に	外面	指押さえ 細い分断性のあるヘラミガキ	SD-68
		14.4	灰 色	立ち上がり端部は下向きに丸く終る 端部に沈線有る	内面	やや密な磨練ミガキと連続輪状ヘラミガキ	
82	瓦葺 棟 (大和) 群-A(新)	4.7	赤褐色	ていねいな作り 磨練は厚め 体積/2分のところから急	外面	口縁部に近いヘラミガキ	SD-68
		14.2	赤灰白色	勾配に立ち上がり端部は上向きに終る 端部に沈線	内面	密な磨練ミガキと太い磨練連続輪状ヘラミガキ	
	瓦葺 棟 (大和) 群-A(新)	5.3	赤色	全体的にながらいつ 口縁部内面コソナゲによる凹	外面	多数の指押さえ 分断性のないヘラミガキ	SD-68
		13.8	灰 色	面有す 端部上向きに終る 沈線あり 完形	内面	隙間のある磨練ミガキと長柄状ヘラミガキ	
83	瓦葺 棟 (大和) 群-A(新)	4.8	赤褐色	内湾する体部から1/2位のところで急勾配に立ち上がり	外面	指押さえ 粗いヘラミガキ	SD-68
		13.8	赤灰白色	り端部は上向きに丸く終る 端部に沈線有る	内面	隙間のある磨練ミガキと粗い連続輪状ヘラミガキ	
	白 磁 瓦 群-B	3.9	赤褐色	高台は重畳ぎみに立ち上がり体部は外上方に伸びてい	外面		SD-68
		5.7	灰白色	る 外面高台と底部付近は磨練	内面	体部下位に段を有する	
84	土師器中皿	2.6	赤褐色	平底から淵ハの半に急直し口縁は内湾し端部はやや内	内外とも口縁部はコソナゲ	SD-68	
		13.6	灰白色	びる			
	土師器中皿	1.6	赤褐色	平底から急直して外上方へ開く	内外とも口縁部はコソナゲ 器底部に指押さえ跡有る	SD-68	
		13.6	赤褐色 灰白色 赤灰黄色				
85	土師器中皿	2.4	赤褐色	薄い平底から外上方へ開き厚い口縁部は内湾し角ば	内外とも口縁部はコソナゲ	SD-68	
		13.5	灰白色	ている			
	瓦 葺 瓦	1.7	赤褐色	底部から外上方に伸び口縁部で外反し端部は上向きに丸	磨練している	SD-68	
		8.8	赤褐色 灰白色	く終る			
86	土師器皿	1.3	赤褐色 灰白色 赤灰白色	底部中央凹状より外上方へ伸び端部直行 丸く終る	磨練している	SD-68	
		8.7					
	土師器皿	1.5	赤褐色	平底から外上方へ広く伸び口縁は直行 端部はやや尖	磨練している	SD-68	
		8.6	灰白色	り気味 完形			
87	土師器皿	1.4	赤褐色	平底より外上方へ広く伸び口縁部は直行気味	磨練している	SD-68	
		8.5	灰黄色				
	土師器皿	1.3	赤褐色	平底より外上方に伸び端部は内湾気味 器形いびつ	磨練している	SD-68	
		8.7	赤褐色 灰白色				
88	土師器鉢	3.3	赤褐色	器形いびつ 淵は水平方向に伸び口縁部は内湾して立	外面	内外の1部に灰が行黄	SD-68
		19.0	赤褐色	上上がりその後外反 口縁部は内湾し折り返し	内面	磨練のための調整不明	
	深溝直壁	4.7	赤褐色	口縁部のみ 短い立ち上がりから口縁部部に水平方向	外面	内外とも口縁部コソナゲ	SD-68
		9.5	赤褐色 赤灰白色	に伸び丸く尖り気味に終る	内面		
89	深溝直壁	11.0	赤褐色	胴部よりやや下方に把手の痕跡部が浅る	外面	体割部にホコ目	SR-02
		7.4	灰白色	口縁部は直立したのも外反する	内面		
	深溝直壁	3.9	赤褐色	直立する口縁から屈曲をみせ扁平な大舟部へ続く	外面	口縁部ヘラクスリ 器底部に磨練あり	SR-01
		11.9	灰 色	口縁部は内湾する面を持つ	内面	ナゲ	

遺物観察表

品名	数量	重量(g)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物番号
82	161	5.3 14.0	青灰色	直立する口縁部から底面し丸みのある天井部へ続く	外面 天井部回転ヘラケズリ 唇部部に線線あり	SR-01
			赤灰白色	口縁部部は内傾し段をなす 厚く大きい	内面 ナデ	
	162	5.2 11.4	赤褐色	口縁部部は内傾する傾角を有す 直立する口縁部から	外面 天井部回転ヘラケズリ 唇部部の線線は無い	SR-02
			灰 色	屈曲して天井部へ 中央凹状のつまみを行う	内面 ナデ	
	163	3.3 13.2	赤褐色	平底からゆるやかに底面に深く外上方に伸びる 立ちあ	外面 底面は回転ヘラケズリ 受部立ちあがり回転ナデ	SR-01
			灰 色	がりはへの字に屈曲し端部は鋭く内傾する断面を有する	内面 ナデ	
	164	3.8 12.8	赤褐色	立ち上がりは鋭く「へ」の字に屈曲し端部は鋭く内傾する断面を	外面 底面は回転ヘラケズリ	SR-03
			灰 色	有する 受部はまっすぐに伸び断面三角形を成す 底面直	内面 ナデ	
	165	5.0 17.0	赤灰白色	大ぶりで厚みをもつ ゆるやかに内湾して伸び端部は	外面 内外とも口縁部ナデ	SR-04
			赤灰黄褐色	丸く終る	内面 中心から放射状にナデ	
166	16.5 11.6	赤灰白色	体部から内湾気味に伸び口縁部でくの字に屈曲したの	外面 ハケメ(厚体輪1.1cm)	SR-05	
		靑灰色	ち外上方に伸び端部は丸く終る 縁は楕に付着	内面 口縁部ココ方向にナデ 体部は斜めのヘラケズリ		
167	4.3 13.2	赤褐色	縁にややびつ 丸く膨らむ傾角のところが直線をもって立ち	外面 指押さえ わずかなヘラミガキ	SP-208	
		灰 色	上がり端部は(鋭く)裏は鋭く縁角で鈍化し直線	内面 型い(内縁ミガキと腹面縁のない)減縮輪状ヘラミガキ		
168	2.6 2.3	赤褐色	凹凸のある平底から外上方へ伸びたのも口縁部は上方	摩耗しているが口縁部にナデのあと	SP-209	
		灰白色	に伸び角ばる 完形			
169	1.1 8.1	赤褐色	平底からゆるやかに口縁に続き端部は内湾して角ばる	内外ともに口縁はココナデ 鋭い稜線をもつ	SP-210	
		灰黄色	完形			
94	170	1.4 8.1	赤灰黄色	平底から外上方に短く開き口縁部は直行気味 完形	内外ともに口縁部はココナデ	SP-211
			赤灰黄色			
	171	1.3 8.3	赤褐色	平底からゆるやかに外上方に開き端部はわずかに直行	ココナデ	SP-212
淡黄褐色						
172	1.9 12.1	赤灰黄色	平底から屈曲して外上方へ開き端部は直立し角ばって	内外とも口縁部はココナデ 底面に指押さえ	SP-213	
赤灰白色	いる					
173	4.3 13.6	赤褐色	ややびつ 底面からほぼまっすぐに外上方に開く	外面 多数の指押さえ ヘラミガキは不鮮明	SP-214	
		灰白色	口縁部でやや角度をもって立ち上がり端部は丸く終る	内面 一部にヘラミガキが残る		
174	1.2 8.4	赤灰白色	平底から短く開きやや内湾して角ばって終る	内外とも口縁部はココナデ	SP-215	
		赤褐色				
175	1.3 8.0	赤褐色	底面中央ややふくらんで口縁に達し「へ」の字に開き端	内外とも口縁部はココナデ	SP-216	
		淡黄褐色	部は丸く終る			
176	1.3 8.0	赤灰白色	平底から短く開き端部はやや角ばる 口縁部に稜線が	内外とも口縁部はココナデ	SP-217	
		赤灰黄色	やや滑い			
177	5.8 14.4	赤褐色	平底から外上方に立ち上がり端部は丸く終る 端部下	外面 口縁部に達し	SP-218	
		赤(白)褐色	方に反転する 高台は高く丁寧な作り	内面 断面なヘラミガキ 内面全体に達し		
178	5.1 14.6	赤褐色	平底からゆるやかに伸びたのも口縁部は急角度で立ち上	外面 指押さえ 口縁部に近いヘラミガキ	SP-219	
		灰白色	がり端部はやや内湾に終る 端部に稜線あり 高台に底の	内面 断面縁ミガキと磨光化された薄い減縮輪状ヘラミガキ		
179	長さ 2.30 最大径 1.7	赤	球状上型	径0.8cmの微孔	SP-220	
180	長さ 1.65 最大径 1.7	赤	球形状	径0.6cmの微孔	SP-221	
		灰白色				

遺物観察表

国名	種別	品名	数量(個)	色調	形態・特徴	調査手法	調査名	
85	94	181	土 磚 表寸 4.8 裏寸 3.3	赤褐色 灰褐色 赤褐色	紡錘形		径0.5cmの楕孔	直 貫
		182	瓦 器 筒 (大和) Ⅲ-C	3.9 18.2	赤褐色 緑灰色 赤灰白色	形骸化した高台から内湾し外上方に開く体形と外反	外面 凹凸のある帯状 指押さえと不規則なヘラミガキ 内面 整った直線ミガキが見込みまで続く	ST-02
		183	瓦 器 筒 (大和) Ⅲ-D	3.9 11.0	赤褐色 新灰白色	小ぶり 形をなさない高台から深い器縁が外上方へ伸	外面 指押さえ 口縁部にわずかに軽いヘラミガキ 内面 極めて粗かな直線ミガキ	ST-03
		184	瓦 器 筒 (和風) Ⅲ-1	3.5 11.4	赤褐色 暗灰色 赤灰白色	簡単な高台と厚みをもって終る口縁をもつ	外面 連続性のある指押さえ 形骸化した高台 内面 ミガキらしいものは2条	ST-02
		185	瓦 器 筒 (大和) Ⅲ-C	3.2 12.0	赤褐色 灰白色	高台より器縁の方が低い位置にある 形骸化した高台から	外面 指押さえ わずかにヘラミガキが認められる 内面 下十分に直線ミガキと省略化された連続線状ヘラミガキ	ST-02
		186	瓦 器 筒 (大和) Ⅲ-E	3.5 10.4	赤褐色 灰白色	形骸化した高台と底部は等しい位置にある	外面 高台と底部に指押さえ 内面 2〜3条の直線ミガキと線状のヘラミガキ	ST-02
		187	瓦 器 筒 (備前) Ⅲ-3	5.0 12.8	赤褐色 灰白色	低い高台から外上方に伸びわずかに屈曲して上方に伸	外面 連続性のある指押さえ わずかなヘラミガキ 内面 数条の直線ミガキ 見込みはジグザグのヘラミガキ	ST-02
		188	土師器中皿	2.5 11.7	赤褐色 赤褐色	平底から直立に近い立ち上がりのみせ、外反しながら	内外ともに口縁部はヨコナデ	ST-02
		189	土師器皿	1.4 8.4	赤褐色 灰白色	底部が厚く丸みがある わずかに屈曲して外方に伸び	強いナデによる模様をもつ	ST-02
		190	土師器皿	1.5 8.1	赤褐色 灰白色	平底からわずかに屈曲して短く外上方に伸びる	ヨコナデ	ST-02
85	95	191	土師器皿	1.5 7.5	赤褐色 灰白色 赤褐色	丸みのある底部から屈曲して外上方に伸び端部は薄く	内外とも口縁部ヨコナデ	ST-02
		192	土師器皿	1.6 8.0	赤褐色 赤褐色	丸みのある底部と厚みをもつ口縁を有する	内外とも口縁部ヨコナデ 強い模様をもつ	ST-02
		193	土師器皿	1.3 7.6	赤褐色 灰白色 青灰色	厚みのある平底から屈曲し短く外上方に伸びたち口	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる模様	ST-02
		194	土師器皿	1.3 8.5	赤褐色 灰白色	平底からゆるやかに外上方へ開く	内外とも口縁部ヨコナデ	ST-02
86	96	195	土師器皿	1.4 7.9	赤褐色 灰白色	扁平でいびつ 口縁に厚みがある 平底から屈曲して	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる模様	ST-02
		196	土師器皿	1.6 7.6	赤褐色 灰白色	平底から屈曲し短く上方に向かい口縁部は内湾気味に	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる模様	ST-02
		197	瓦 器 足置 Ⅲ 径 10.0 径 11.1	26.2 19.0 19.1	赤褐色 緑灰-黒色	扁平環状の体形にやや上向き短い脚を持ち口縁端部	外面 葉が密に不着 調整不明 脚部は貼り付け 内面 不明	ST-02
86	96	198	磁 石 長さ 11.8 厚さ 1.5	赤褐色 灰白色			陶器使用後	ST-02
		199	瓦 器 瓦	2.0 9.8	赤褐色 暗灰色 赤灰白色	底部中央がわずかに高く口縁部で反外する 細い直線	外面 底部に指押さえ 口縁部に4、5条のヘラミガキ 内面 4枚度ジグザグのヘラミガキが1手に渡られる	ST-02
		200	瓦 器 瓦	1.5 9.2	赤褐色 赤灰白色	平底から屈曲し外上方へ短く伸び口縁部がわずかに外反	外面 口縁部はヨコナデ 底部に指押さえ 内面 断崖なジグザグのヘラミガキ 口縁部直線ミガキ	SE-28

遺物観察表

調査年度	遺物	器種	重量(g)	色調	形態・特徴	調査手法	図録	
87	201	瓦器Ⅲ	2.1	赤褐色	深みのある丸底からゆるやかに外上方に向かい口縁部	外面	口縁部はヨコナダ 底部に指押さえ	SK-28
				9.8	赤灰白色	でわずかに外反する	内面	
87	202	瓦器Ⅲ	2.0	赤褐色	平底から外上方へ開き口縁部は外反する 端部は丸く	外面	口縁部ヨコナダ 底部に指押さえ	SK-28
				9.6	赤灰白色	終る	内面	
87	203	瓦器Ⅲ	11.6	赤褐色	平底から屈曲して外反し口縁部はわずかに水平方向	外面	口縁部ヨコナダ	SK-28
				9.2	灰白色	に伸びる	内面	
87	204	瓦器Ⅲ (大和Ⅱ-H)	5.3	赤褐色	「ハ」の字に開く高台は低い 厚みのある底部は内湾しな	外面	指押さえ 分岐性のあるヘラミガキ	SK-28
				14.8	灰白色	がら上方へ開く 口縁部でわずかに外反する 端部は平	内面	
86	205	漆器Ⅲ	13.7×7.2	赤褐色	円盤のみ	外面	縦溝文	SK-28
				赤褐色		内面	ナダ	
86	206	土師器Ⅲ	1.8	赤褐色	肉厚で口縁まで均等に続く	内外ともに口縁部ヨコナダ	SK-22	
				8.6	赤灰白色	端部はやや内湾する		
92	207	土師器Ⅲ	3.8	赤褐色	紡錘形	径0.26cmの胎孔	SK-31	
				9.8	灰白色			
87	208	黒土系土器Ⅲ 縄文系土器	5.6	赤褐色	黒土「?」あり大ぶりな器 内湾気味に立ち上がり	外面	口縁部わずかに傾し 胎り付け高台	SK-31
				18.2	赤褐色	り口縁は直行 端部は丸く終る	内面	
87	209	黒土系土器Ⅲ 縄文系土器	2.0	赤褐色	黒土「西」あり	外面	底部近くまでヘラミガキ	SK-34
				10.0	赤褐色		内面	
96	210	土師器Ⅲ	2.2	赤褐色	平底より屈曲して底部が立ち上がる 端部は内湾気味	内外ともに口縁部ヨコナダ	SK-56	
				12.4	赤褐色	に終る		
	211	土師器Ⅲ	2.1	赤褐色	平底から屈曲して口縁部は外上方に伸び端部は丸みを	内外ともに口縁部ヨコナダ その下に連続した指押え	SK-56	
				12.8	赤褐色	もって終る		
	212	土師器Ⅲ	2.2	赤褐色	平底の底部より口縁部がやや内湾する	内外ともに口縁部ヨコナダ	SK-56	
				11.9	赤褐色	端部は丸みをもって終る		
	213	土師器Ⅲ	1.3	赤褐色	高台は台形で胎り付け高台	外面	胎り付け高台	SK-56
				9.6	灰～赤褐色		内面	
	214	瓦器Ⅲ (楠葉Ⅲ-1)	3.9	赤褐色	底部は内湾して口縁に続く 端部内部に沈み込み	外面	口縁部わずかにヘラミガキ	SK-36
				12.5	赤灰白色	高台は断面逆三角形 全体にいびつ	内面	
	215	瓦器Ⅲ (大和Ⅲ-C)	4.2	赤褐色	やや外反する端部上方に浅い一糸の沈み	外面	多数の指押さえ 口縁部におわずかのヘラミガキ	SK-56
				13.2	赤褐色	断面逆三角形の胎り付け高台	内面	
216	土師器Ⅲ (黒書)	1.0	赤褐色	平底より口縁部が短く外上方に伸びる 端部は尖り	口縁部ナダによる鋭い縦溝 底部に墨書が認め	SK-56		
			8.8	赤褐色	気味		られる	
217	白磁Ⅲ Ⅲ-1	4.06	赤褐色	口縁で外反し端部は上向き面を成す	外面	ヘラミガキ	SK-56	
			13.3	灰白色		内面		
218	土師器Ⅲ	1.5	赤褐色	平底底部よりなめらかな内湾に伸びる口縁部に至る	内外ともに口縁部ヨコナダ	SK-56		
			8.7	赤褐色	端部は内湾へ肥厚 器形は整っている			
219	土師器Ⅲ	1.4	赤褐色	ややいびつ 平底から屈曲し外上方へ伸び端部はわず	内外ともに口縁部ヨコナダ ナダによる縦溝	SK-56		
			8.6	赤灰白色	かに外反する 均等に肉厚である			
220	土師器Ⅲ	1.1	赤褐色	平底から屈曲し短く外上方に伸びる 端部は丸く	内外ともに口縁部ヨコナダ	SK-56		
			8.2	赤褐色	終る			

遺物観察表

調査年度	遺物	種類	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺跡名
96		土師器Ⅲ	1.5 8.4	色浅黄褐色	やや肉厚 端部は丸い	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.4 8.4	褐色黄褐色 色浅黄褐色	全体に肉厚である 口縁部は外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.4 8.2	褐色白色 赤い黄褐色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く納まる	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.4 8.1	赤褐色 淡黄褐色	平底から屈曲して口縁部が外上方へ伸び端部は直行気味で丸く納まる	内外ともに口縁部はココナデ ナデによる鈍い縁線	SK-56
		土師器Ⅲ	1.3 7.9	赤褐色 淡黄色	平底からは外上方に伸び端部は丸く終る 器形いびつ	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.0 8.1	赤褐色 淡黄褐色	平底から外反しながら口縁へ 口縁ではわずかに水平方向に伸び端部は丸く終る 底部浅い	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.3 8.2	赤褐色 赤褐色	底部より口縁部が外上方へ伸びる 端部は角ばって肉厚である	内外ともに口縁部はココナデ ナデによる縁線	SK-56
		土師器Ⅲ	1.5 8.4	赤褐色白色 黄褐色 赤褐色	底部がすこし突出し口縁部は外上方に伸び端部直行気味で丸く終る	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.5 8.3	赤褐色 灰白～ 黄褐色	底部中心からゆるやかに外上方の口縁部に緩き端部は厚みをもって丸く終る	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.5 8.0	赤褐色白色 赤褐色 赤褐色	平底の底部より屈曲して立ち上がる 端部はやや丸みを帯びている	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.4 7.7	肉厚に 赤褐色 赤褐色	丸底気味の底部から口縁部にゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.4 8.0	赤褐色 赤褐色 赤褐色	口縁部がやや肉内す 肉厚	内外ともに口縁部はココナデ ナデによる鈍い縁線	SK-56
		土師器Ⅲ	1.3 8.4	赤褐色 淡黄褐色 黄褐色	平底の底部 口縁部と底部の境に明瞭な段がつく	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.3 8.1	赤褐色 淡黄色	底部より外上方へ伸び端部は尖り気味である	内外ともに口縁部はココナデ ナデによる縁線	SK-56
		土師器Ⅲ	1.5 7.9	赤褐色 淡黄色	平底から口縁部は外上方に伸び端部は丸く納められて いる 器形はいびつ 口縁部肥厚	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.0 7.5	赤褐色 淡黄色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は上方に向かう	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.5 8.2	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底から屈曲して口縁部は外上方へ伸び端部は角ばる 全体に肉厚	内外ともに口縁部はココナデ	SK-56
		土師器Ⅲ	1.7 8.2	赤褐色 赤褐色	丸底から口縁部へとゆるやかに外上方に伸び端部は尖りきみ 肉厚	内外ともに口縁部はココナデ ナデによる縁線	SK-56
		土師器Ⅲ	1.5 8.0	赤褐色 灰白色	底部から外上方へ伸び口縁部は内湾し端部は丸く終る	内外ともに口縁部はココナデ ナデによる縁線	SK-56
		土師器Ⅲ	1.2 8.3	赤黄褐色 赤褐色 淡黄褐色	底部から短く屈曲し口縁部端部は尖る	内外ともに口縁部はココナデ ナデによる縁線	SK-56

遺物観察表

標本番号	遺物	品名	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名
84	土師器皿	1.3	8.5	赤褐色	平底から外上方へ伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ココナダ 唇直部に美しい稜線	SK-36
				浅黄褐色			
85	土師器皿	1.3	8.6	赤褐色	平底から外上方へ伸び口縁部はわずかに内湾し端部は丸い	内外ともに口縁部ココナダ	*
				黒赤-黒褐色			
86	土師器皿	1.4	8.0	赤褐色	平底から外上方に伸び口縁部は内湾し端部は丸い	内外ともに口縁部ココナダ	SE-36
				赤褐色 赤褐色 赤白-灰色			
87	土師器皿	1.0	8.2	赤褐色	平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸い 器高は低く器壁は薄い	内外ともに口縁部ココナダ	SE-36
				赤褐色 赤褐色			
88	土師器皿	1.5	8.0	赤褐色	底面からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る 全体的に肉厚	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる美しい稜線	SK-36
				赤赤-赤褐色			
89	土師器皿	1.4	7.8	赤赤	全体にいびつ 平底から外上方へ伸び端部は直行気味 丸く締まる	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる美しい稜線	SK-36
				浅黄褐色			
90	土師器皿	1.2	8.2	赤赤	全体にいびつ 平底から外上方に伸び端部は丸く終る 灰白色	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる美しい稜線	SK-36
				赤赤			
91	土師器皿	1.3	7.7	赤褐色	平底から外上方へ伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ココナダ 唇直部にナダによる美しい稜線	SE-36
				赤赤, 黄色 赤白-灰色			
92	土師器皿	1.3	8.5	赤褐色	底面がやや凹凸している 口縁部は外上方に伸び端部はやや尖り気味	内外ともに口縁部ココナダ 唇直部にナダによる美しい稜線	SE-36
				赤褐色 赤褐色			
93	土師器皿	1.4	8.2	赤赤	肉厚で平底から屈曲して外上方へ伸び端部は丸く終る 浅黄褐色	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる美しい稜線	SK-36
				赤赤			
94	土師器皿	1.3	7.8	赤褐色	底面より屈曲し口縁部へ続く 器形はいびつ	内外ともに口縁部ココナダ 唇直部にナダによる美しい稜線	SE-36
				浅黄褐色			
95	土師器皿	1.3	8.2	赤褐色	平底より外上方へ立ち上がる	内外ともに口縁部ココナダ	SE-36
				赤褐色 赤白-褐色 赤白色			
96	土師器皿	1.0	8.0	赤赤	底面は少し凹凸が見られる 口縁は外上方へ伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる美しい稜線	SE-36
				灰白色			
97	土師器皿	1.6	7.8	赤褐色	丸底から外上方へ伸び端部は丸く終る 浅黄褐色	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる稜線	SE-36
				赤褐色			
98	土師器皿	1.4	8.1	赤赤	平底から屈曲し外上方へ短かく伸び端部に内湾し尖り気味	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる稜線	SE-36
				赤白-灰色			
99	土師器皿	1.1	7.7	赤褐色	厚みのある平底から屈曲し外上方へ開き口縁部は内湾し端部は丸く終る	内外ともに口縁部ココナダ 唇直部にナダによる稜線	SE-36
				赤白-褐色 赤白色			
100	土師器皿	1.2	8.0	赤褐色	平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く締められる	内外ともに口縁部ココナダ	SK-36
				赤白-褐色 赤褐色			
101	土師器皿	1.3	7.8	赤褐色	平底であるが底面中央部がやや上がり気味 口縁部が短く外上方へ伸びる 端部は丸く終る	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる美しい稜線	SK-36
				赤赤-黒褐色			
102	土師器皿	1.4	7.7	赤褐色	平底より短く外上方へ伸びる 両面は丸みがあり肉厚である	内外ともに口縁部ココナダ ナダによる稜線	SK-36
				灰白色			
103	土師器皿	1.4	8.0	赤灰白色	器形はいびつ 平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ココナダ	SE-36
				赤黄褐色 赤灰白色			

遺物観察表

種別	種名	製種	法量(a)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺構名		
96	土師器	土師器Ⅲ	1.3 8.4	灰白色 赤褐色 黄褐色	平底から外上方へ伸び端部は丸く納まる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.6 8.1	赤褐色 黄褐色 赤褐色	丸底からゆるやかな立ち上がりを見せ口縁部へ続く端部は上方へ伸び丸く納められている	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる美しい稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.5 7.6	赤褐色 赤褐色 灰白色	平底から屈曲して外上方に伸び口縁部は内側し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.5 8.2	灰白色 赤褐色	肉芽 平底から外上方に伸びる 口縁端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.4 8.4	赤褐色 灰白色	底部より外上方へ開く	内外ともに口縁部ヨコナデ 屈曲部にナデによる稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.5 7.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	底部より外上方に伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ 煮押え ナデによる美しい稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.2 8.3	赤褐色 赤褐色	丸底からゆるやかに外上方に伸び口縁はわずかに上へ尖り気味	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.2 8.2	赤褐色 赤褐色	平底から短かく屈曲し口縁は内側気味 端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる美しい稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.1 8.3	赤褐色 赤褐色	中央部が突出する底部から短かく屈曲し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ 屈曲部にナデによる美しい稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.2 8.2	赤褐色 赤褐色	中央部が突出する底部から屈曲し外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.2 8.2	赤褐色 赤褐色	丸底から口縁部はゆるやかに外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
		土師器Ⅲ	1.0 8.2	赤褐色 赤褐色	器形はいびつ	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
		89	土師器	土師器Ⅲ	1.3 8.5	赤褐色 赤褐色	中央の突出した底部から屈曲し端部はやや尖る	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる美しい稜線	SK-56
				土師器Ⅲ	1.4 8.4	赤褐色 灰白色	底部中央が突出しなだらかに内湾しながら口縁部へ続く 端部は上方に尖る	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
土師器Ⅲ	1.3 8.2			赤褐色 赤褐色	丸底からゆるやかに外上方へ伸び口縁は内側し端部は尖る	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
土師器Ⅲ	1.2 7.9			赤褐色 灰白色	器壁は均等に薄い 丸底からゆるやかに外上方に伸び、口縁端部は角ばる	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
土師器Ⅲ	1.3 7.5			赤褐色 赤褐色	平底から短く屈曲し口縁はやや角ばる	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		
土師器Ⅲ	1.3 8.0			赤褐色 赤褐色	肉厚で口縁まで均等に鋭く ややいびつである 底部にワラジ状の跡あり	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる美しい稜線	SK-56		
土師器Ⅲ	1.1 8.0			赤褐色 赤褐色	器形はいびつ 平底から外上方に伸び端部は直方気味で丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる美しい稜線	SK-56		
土師器Ⅲ	1.2 8.4			赤褐色 赤褐色	全体にいびつ 底部中央部はやや突出し口縁部は短く外方へ伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56		

遺物観察表

標本番号	種別	品名	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺物名	
96	土師器皿	1.3	5.1	赤褐色	丸底、口縁部に短く外方に伸びる 端部はやや内側に折曲する	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56	
			8.4	赤褐色	縁な作り 丸底から短く外方に伸びる			
		1.3	7.8	赤褐色	平底の底部、口縁部に短く外方に伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56	
90	土師器中皿	1.9	12.1	赤褐色	直底からなだらかに内折 端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ 唇部部にナデによる稜線	SK-56	
			11.8	赤褐色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は尖り気味 器壁内厚			
	土師器中皿	1.5	11.5	赤褐色	中央が突出する底部から屈曲して口縁部が外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ 底部に多数の指押え	SK-56	
			12.2	赤褐色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く終る 器形はいびつ			
	土師器中皿	2.1	12.2	赤褐色	平底から屈曲して外上方に伸び、端部は丸く終る 全体に肉厚	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線 底部に指押え	SK-56	
			8.6	赤褐色	肉厚で端部は丸みがある			
	97	土師器皿	1.3	8.2	赤褐色	平底から屈曲し外上方へ伸び口縁部は内湾し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる明瞭な稜線	SK-56
				8.4	赤褐色	平底から短く屈曲し口縁部は丸い		
		土師器皿	1.1	8.6	赤褐色	平底から屈曲し立ち上がる 口縁部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
				7.6	赤褐色	丸底から外上方に開き端部は丸い 器壁に厚みをもつ		
土師器皿		1.3	8.2	赤褐色	平底からゆるやかに屈曲し端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56	
			7.9	赤褐色	器形はいびつ 底部からゆるやかに内湾しながら立ち上がる 端部は丸く締められている			
土師器皿		1.2	7.9	赤褐色	丸底	内外ともに口縁部ヨコナデ 器形ナデによる明瞭な稜線	SK-56	
			7.8	赤褐色	丸底からゆるやかに外上方へ開き端部は丸く終る			
土師器皿		1.4	7.8	赤褐色	丸底からゆるやかに外上方へ開き端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56	
			8.0	赤褐色	高さはなく肉厚 端部は丸い			
土師器皿	1.5	8.2	赤褐色	平底より屈曲し短く立ち上がる 口縁部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56		
		7.8	赤褐色	平底より外上方へ旭かく開く 口縁部は丸く終る				

遺物観察表

種別	種名	量(μ)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺跡名
97	301 土師器Ⅲ	1.3 8.2	赤褐色 灰白-赤褐色 赤褐色	平底 底部が内湾知縁に立ち上がる 口縁端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	302 土師器Ⅲ	1.1 8.0	灰白-赤褐色 赤褐色 赤褐色	丸底より口縁部が内湾 端部丸く終る 肉厚	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	303 土師器Ⅲ	1.6 8.4	赤褐色 灰白-赤褐色	丸底より底部が内湾する 口縁端部は丸く終る ややいびつ	内外とも口縁部ココナデ ナデによる鈍い縁線	SK-56
	304 土師器Ⅲ	1.2 7.9	赤褐色 赤褐色 赤褐色	肉厚で扁平 口縁部はなだらかに立ち上がり端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	305 土師器Ⅲ	1.0 8.2	赤褐色 灰白色 赤褐色	平底から屈曲し短かく外上方へ伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	306 土師器Ⅲ	1.3 7.6	赤褐色 灰白-赤褐色	内面は厚削し調整不明	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	307 土師器Ⅲ	1.3 8.4	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底より内湾する口縁端部は丸く終る ややいびつ	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	308 土師器Ⅲ	1.2 8.1	赤褐色 灰白色	平底から口縁へと内湾し端部は上方につまむ	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	309 土師器Ⅲ	1.0 8.1	赤褐色 赤褐色	浅い平底から外上方に伸び口縁はやや角ばって直行する	内外とも口縁部ココナデ ナデによる鈍い縁線	SK-56
	310 土師器Ⅲ	1.2 8.2	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底から屈曲して外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ ナデによる鈍い縁線	SK-56
	311 土師器Ⅲ	1.4 8.1	赤褐色 赤褐色	丸底から外上方に伸び端部は尖る 器形は扁平	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	312 土師器Ⅲ	1.3 8.0	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に伸び端部は尖い	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	313 土師器Ⅲ	1.7 7.8	赤褐色 灰白色	丸底の底部口縁部はゆるやかに外上方に伸びる	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	314 土師器Ⅲ	1.2 7.8	赤褐色 赤褐色	平底から短く外方に伸びる やや楕円形 一部口縁部に窪の付着	内外とも口縁部ココナデ ナデによる鈍い縁線	SK-56
	315 土師器Ⅲ	1.6 7.7	赤褐色 灰白色	丸底から外上方に伸びる やや楕円形 口縁部に窪が付着	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	316 土師器Ⅲ	1.4 7.8	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底から外上方に伸び端部は丸く終る 窪付着	内外とも口縁部ココナデ 器形と 器底にナデによる縁線	SK-56
	317 土師器Ⅲ	1.4 8.0	赤褐色 灰白色	全体に向厚 平底から短く外上方に伸び端部は丸く終る 窪付着	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	318 土師器Ⅲ	1.6 8.2	赤褐色 灰白色	平底から屈曲し外上方に伸びる 端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
	319 土師器Ⅲ	1.4 8.2	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る 肉厚	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
320 土師器Ⅲ	1.2 7.8	赤褐色 赤褐色	いびつである 平底から短く外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56	

遺物観察表

種別	部名	部種	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名	
97	瓦葺	瓦	4.0	赤褐色	体部は内湾して口縁に続く 端部に沈線が一条走る	外面	兼押さえ 粗いヘラミガキ	SK-56
		口	12.8	灰白～白色 赤灰白色	断面は逆三角形の鋭角起り付け高台	内面	隙間のある墨線ミガキと大きい通気輪状ヘラミガキ	
	土師器	蓋	1.3	赤褐色	平底から外上方へ伸びる端部は直行気味で丸く終る	部	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
			7.6	浅黄褐色	形は楕円形に近い			
	土師器	蓋	1.7	赤褐色～赤褐色 赤褐色～赤褐色	丸底より体部が内湾気味に立ち上がる 器形小ぶり口縁端部は尖り気味		内外とも口縁部ココナデ ナデによる鋭い稜線	SK-56
			7.7					
	土師器	蓋	1.2	赤褐色～赤褐色 赤褐色～赤褐色	中央の突出する底部から器身し外上方へ開く 端部は丸く終る		内外とも口縁部ココナデ ナデによる明瞭な稜線	SK-56
			8.2					
	土師器	蓋	1.6	赤褐色～赤褐色 赤褐色～赤褐色	平底より器身し端部は丸く終る 深さがある		内外とも口縁部ココナデ	SK-56
			7.6					
	土師器	蓋	1.4	赤褐色～赤褐色 赤褐色～赤褐色	平底から内湾し口縁へ続く		内外とも口縁部ココナデ	SK-56
			8.5		口縁端部は尖い			
	土師器	蓋	1.2	赤褐色 赤褐色	平底から器身し短く外上方へ開き口縁端部は丸い		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56
			8.1					
土師器	蓋	1.3	赤褐色 赤褐色～赤褐色	丸底よりゆるやかに立ち上がる 端部は丸い		内外とも口縁部ココナデ	SK-56	
		8.0						
土師器	蓋	1.4	赤褐色～赤褐色 赤褐色～赤褐色	底部より器身し外上方へ開く 端部は丸く終る		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56	
		8.5						
土師器	蓋	1.3	赤褐色～赤褐色 赤褐色～赤褐色	底部よりゆるやかに立ち上がる 口縁端部は尖る		内外とも口縁部ココナデ 断面部にナデによる稜線	SK-56	
		8.4						
98	土師器	蓋	1.3	赤褐色 赤褐色	平底から器身し短く開く 端部は角ばる		内外とも口縁部ココナデ	SK-56
			7.9					
土師器	蓋	1.3	赤褐色 赤褐色	平底より短かく外上方へ開く 口縁端部は丸い		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56	
		8.3						
土師器	蓋	1.2	赤褐色 浅黄褐色 赤灰白色	平底から短かく外上方へ開き口縁端部は丸い		内外とも口縁部ココナデ	SK-56	
		7.7						
土師器	蓋	1.2	赤褐色 赤褐色 赤灰白色	平底より内湾し口縁端部は丸い		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56	
		8.4						
土師器	蓋	1.4	赤灰白色 赤灰黄色 赤灰白色	平底より外上方へ開く 底部にナデの跡の爪痕が円形に残る		内外とも口縁部ココナデ	SK-56	
		7.8						
土師器	蓋	1.3	赤灰白色 赤灰黄色	平底より口縁部は短かく外上方へ伸びる 全体にいびつである 端部丸く終る		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56	
		8.1						
土師器	蓋	1.3	赤褐色 灰白色～浅黄褐色	平底で器形は楕円形 端部は丸く終る		内外とも口縁部ココナデ	SK-56	
		8.2						
土師器	蓋	1.2	赤褐色 浅黄褐色	平底から器身し短かく伸びる口縁 端部は丸い 外面底部に細な粒土被合痕		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56	
		8.0						
土師器	蓋	1.2	赤褐色 灰白色	平底より短かく器身する口縁に角ばる		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56	
		8.8						
土師器	蓋	1.5	赤褐色 浅黄褐色	丸みのある底部より外上方へ伸びる 底部に爪痕が数ヶ所点在する 端部は丸く終る		内外とも口縁部ココナデ ナデによる稜線	SK-56	
		8.1						

遺物観察表

年代	種別	器種	法量(%)	色調	形態・特徴	調査・手帳	調査名	
80	土師器	土師器Ⅱ	1.1	褐色	底部中央が突出する 口縁部は短く外上方に伸びる	内外とも口縁部ココナデ ナデによる横線	SK-96	
			8.1	褐色	は直行し尖り突座			
80	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅱ-B	3.6	赤褐色	体部は内湾し口縁に鋭く 肩部に沈線が1条走る	外面	わずかにヘラミガキが残る	SK-96
			12.3	灰白-白	新断面三角形の突起付け高台	内面	隆起の付いた器縁ミガキと粗な輪状ヘラミガキ	
90	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅱ-B	3.8	赤褐色	体部は内湾し口縁部で上方へ立ち上がる 肩部に上向	外面	水平方向にヘラミガキが数条	SK-96
			13.0	赤灰白色	きの沈線 1条走る	内面	磨滅した器縁ミガキと太い連続輪状ヘラミガキ	
90	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅱ-B	3.9	赤褐色	体部は内湾し口縁に鋭く 肩部に沈線1条走る	外面	濃減性のある指押さえ ヘラミガキは認められず	SK-96
			12.9	赤褐色	断面三角型の小さな高台	内面	隆起の付いた器縁ミガキと太い連続輪状ヘラミガキ	
90	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅱ-C	3.7	赤褐色	体部は外上方へ開く	外面	指押さえ 水平方向のヘラミガキが数条	SK-96
			13.1	灰白色	肩部に沈線が1条走る 突起付け高台	内面	隆起の付いた器縁ミガキ 粗かな輪状ヘラミガキ	
90	土師器	土師器Ⅱ	2.3	赤褐色	平底から屈曲して立ち上がり肩部に直行し丸く終る	内外とも口縁部ココナデ ナデによる横線	SK-96	
			11.8	赤褐色				
90	土師器	土師器Ⅱ	2.2	赤褐色	平底から外上方に伸びる	指押さえ ナデによる横線	SK-96	
			11.7	灰白-灰黄色	口縁部は内湾する			
90	土師器	土師器Ⅱ	2.1	赤褐色	底部から口縁部へゆるやかに立ち上がり肩部は直行し丸く終る	内外とも口縁部ココナデ ナデによる横線	SK-96	
			12.0	赤褐色	丸く終る			
90	土師器	土師器Ⅱ	2.6	赤褐色	平底から屈曲して外上方に伸びる	指押さえ ナデによる横線	SK-96	
			12.0	赤褐色	丸く終る			
90	土師器	土師器Ⅱ	2.1	赤褐色	平底からゆるやかに内湾気味に立ち上がる 肩部は角ばる 器縁部は薄く体部は厚い	指押さえ ナデによる横線	SK-96	
			11.6	赤褐色				
90	土師器	土師器Ⅱ	2.1	赤褐色	底部中央部は非常に薄い 肩部は内湾する	内外とも口縁部ココナデ 指押さえ ナデによる横線	SK-96	
			11.7	赤褐色				
90	土師器	土師器Ⅱ	2.3	赤褐色	平底から屈曲して外上方に伸びる	指押さえ ナデによる横線	SK-96	
			11.8	赤褐色	丸く終る			
90	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅲ-3	3.5	赤褐色	内湾して立ち上がる体部	外面	水平方向のヘラミガキが数条	SK-96
			12.8	赤褐色	口縁部上部に浅い沈線が1条走る	内面	隆起の付いた器縁ミガキと粗かな輪状ヘラミガキ	
90	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅲ-B	4.1	赤褐色	いびつ 底部からゆるやかに外上方へ開き口縁部では直行し丸く終る	外面	高台より放射状に指押さえ 分割性のあるヘラミガキ	SK-96
			12.4	灰 白	直行し丸く終る	内面	隆起の付いた器縁ミガキが見込みまで残る	
90	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅲ-C	4.6	赤褐色	ゆるやかに開く体部 浅い沈線が1条 底部に厚みがある	外面	指押さえ わずかなヘラミガキ	SK-96
			12.9	灰 白	あり、粗なつくり	内面	隆起の付いた器縁ミガキと粗かな輪状ヘラミガキ	
90	瓦葺	瓦葺(大和)Ⅲ-C	4.1	赤褐色	いびつ 底部からゆるやかに外上方へ開き、口縁部は直行し丸く終る	外面	粗いヘラミガキ	SK-96
			12.2	赤褐色	上方へ伸びたの端部で外反する	内面	隆起のある器縁ミガキと太い連続輪状ヘラミガキ	
90	土師器	土師器Ⅱ	1.7	赤褐色	いびつな器形	内外とも口縁部ココナデ	SK-96	
			8.2	灰白色	丸底より内湾し立ち上がる 口縁部は角ばる			
90	土師器	土師器Ⅱ	1.5	赤褐色	平底 口縁部は内湾し肩部は角ばる	内外とも口縁部ココナデ	SK-96	
			8.2	赤褐色				
90	土師器	土師器Ⅱ	1.5	赤褐色	底部より屈曲し口縁部に折れ開く	内外とも口縁部ココナデ 底部は南部はやや角ばる	SK-96	
			8.0	赤褐色	口縁部は丸く終る 肉厚			
90	土師器	土師器Ⅱ	1.1	赤褐色	平底から屈曲して口縁部が外上方に伸びる 肩部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-96	
			8.1	赤褐色				

遺物観察表

種別	器種	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
80	土師器	1.6 8.1	赤褐色 灰白色	丸底でゆるやかに口縁部外上方に伸び端部は丸く納める 底部より口縁部の方が肉厚	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
		1.3 7.6	赤褐色 浅黄褐色 灰白緑色	底部から外上方に伸び端部は丸い	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる鋭い稜線	SK-56
80	土師器	1.1 8.2	赤褐色 灰白緑色	平底底部中央が高い 器壁薄く浅い 口縁部は外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56
		1.3 8.6	赤褐色 灰白緑色	底部から外上方に伸び端部は尖っている	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56
80	土師器	1.5 8.0	赤褐色 灰白緑色	丸底からゆるやかに口縁部へ緩きわずかに内湾する 口縁端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-58
		1.6 8.2	赤褐色 灰白色	丸底で全体に肉厚 口縁部はなだらかに外上方に伸びる 端部直行気味に丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
80	土師器	1.7 8.7	赤褐色 灰白色	体部から口縁部にかけていびつ 底部中央が高い 底部に若干稜線あり	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる鋭い稜線	SK-56
		1.6 7.9	赤褐色 浅黄褐色	全体に厚みが均一である 端部は丸く納められる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-58
80	土師器	1.3 8.2	赤褐色 灰白色	平底から屈曲し短かく外上方に開く 端部は上へ押される	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
		1.5 8.0	赤褐色 浅黄褐色	底部凹凸あり いびつな平底から屈曲し外上方へ短かく開く	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
80	土師器	1.4 8.1	赤褐色 灰白色	平底より反気味に上方へ開き端部は上へ向かう 肉厚 器内に近い	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
		1.5 8.2	赤褐色 灰白色	丸みをおびた底部 口縁部は外上方へ伸び端部は肉厚で上方に押される	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56
80	土師器	1.3 7.8	赤褐色 灰白緑色	器壁に凹凸がある 端部は上方に押される	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
		1.2 7.8	赤褐色 灰白色	全体に肉厚である 平底	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
80	土師器	1.1 9.1	赤褐色 灰白緑色	中央の突出した底部から外上方へ開き端部は上へ押される 浅く大きめの器形	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56
		1.3 7.9	赤褐色 灰白緑色	瓶内形に近い 丸底から短かく外へ伸びる	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56
80	土師器	2.1 11.7	赤褐色 灰白緑色	平底からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る 器形いびつ	調整さえ ナデによる稜線	SK-56
		2.0 11.1	赤褐色 灰白緑色	平底から屈曲して口縁部はゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る 器形いびつ	内外ともに口縁部ヨコナデ 底部に調整え ナデによる稜線	SK-56
		2.0 12.4	赤褐色 浅黄褐色	中央の高い平底から屈曲して口縁部は外上方に伸び端部は丸く終る	内外ともに口縁部ヨコナデ ナデによる稜線	SK-56
		2.4 12.0	赤褐色 灰白緑色	上げ底気味の平底から緩やかに外上方へ伸び端部は内湾する	内外ともに口縁部ヨコナデ	SK-56

遺物観察表

品名	種別	器種	重量(g)	色調	形態・特徴	調査手法	遺跡名
100	土師器	中皿	2.0	赤の灰白 ～洗黄褐色 赤黄灰色	平底から外上方へ伸び口縁に至る 端部は内湾する	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-56
			12.1				
		中皿	2.2	赤の赤～ 濃褐色 赤黄褐色 赤灰色	底部はとんど欠損 端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-56
			11.9				
		中皿	2.3	赤の赤 ～赤黄 ～赤黄褐色	平底から外上方に伸び口縁部に至る 端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56
			11.4				
		中皿	2.1	赤の赤	平底から緩やかに外上方に伸び端部は丸く終る 器形 いびつ	内外とも口縁部ヨコナデ 連続する指押さえ	SK-56
			12.2	洗黄褐色			
		中皿	2.3	赤の赤	丸みを帯びた底から外上方へ伸び口縁部に至る 端部 は丸く終る 口縁部内厚	内外とも口縁部ヨコナデ 連続する指押さえ	SK-56
			11.6	洗黄褐色			
中皿	2.2	赤の赤	やや両面が凹状を成している平底から外上方に伸び口 縁端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ 指押さえ	SK-56		
	12.2	赤～洗黄褐色					
中皿	1.7	赤の赤 洗黄褐色 赤灰白色	平底から外上方に伸び口縁部に至る 端部は上方に押される	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-56		
甗 甗 甗 (黒彩赤彩 I-2 類)	2.5	赤の赤～ 赤黄褐色 赤灰白色	高台断面は台形 縁のいびつ	外面 高台内面露出	SK-56		
	5.7			内面 見込みに片彫りの草花文			
99	土師器	皿	1.2	赤の赤 洗黄褐色	平底より内湾して狭く伸びる 端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56
			7.9				
		皿	1.3	赤の赤 洗黄褐色 赤灰白色	平底から外上方へ伸び端部は丸く終る 全体にいびつ	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56
			7.8				
		皿	1.1	赤の赤 灰白色	平底より外上方に伸びる 全体にいびつ	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-56
			8.3				
		皿	1.4	赤の赤 灰白色	平底より外上方へ伸びる 少し楕円形である 端部は丸 みがあり平面的に全体が尙厚である	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56
			7.9				
		皿	1.2	赤の赤 洗黄褐色	平底の底部より口縁は外上方へ伸び端部は厚みがあり やや突り気味 厚みがある	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-56
			7.9				
皿	1.3	赤の赤	作りが粗雑 底部に強い粗土粒の残存	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56		
	7.6	洗黄褐色					
皿	1.5	赤の赤 赤灰白色	丸底から内湾して伸びる 端部は丸く納められている	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56		
	7.8						
皿	1.5	赤の赤 灰白色	いびつで厚みのある形 端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56		
	8.3						
皿	1.3	赤の赤 灰白色	中心が高い平底から内湾して外上方へ伸びる端部は上方 へ押される	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-56		
	8.6						
皿	1.5	赤の赤 洗黄褐色	丸みを帯びた底部器底は内厚 口縁部はゆるやかに外 上方へ伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SK-56		
	7.8						
皿	1.2	赤の赤 洗黄褐色～ 赤黄褐色	浅い平底 端部は上方に押される	内外とも口縁部ヨコナデ 器底部にナデによる明瞭な縁線	SK-56		
皿	1.5	赤の赤 洗黄褐色	底部中央やや高い 端部は丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-56		
	8.2						

遺物観察表

種別	種名	図種	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺物名	
89	土師器Ⅲ	421	1.4	黒赤褐色	平底から屈曲し傾かく伸びる 端部は角ばる	内外とも口縁部ココナデ	SK-56	
			8.0	赤褐色		屈曲部にナデによる鋭縁		
	422	1.5	赤褐色	底部からなめらかに外上方へ開き端部に丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56		
90	土師器Ⅲ	423	1.0	黒赤褐色	平底から屈曲し傾かく上方へ伸びる 端部に厚みをもつ	内外とも口縁部ココナデ 屈曲部にナデによる鈍い鋭縁	SK-56	
			8.2	灰白色				
	424	1.0	赤褐色	底部からゆるやかに外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56		
425	1.5	赤褐色 灰白～ 淡黄褐色	底部中央が高い 内湾して口縁部へ鋭き端部は上へ押される	内外とも口縁部ココナデ				
90	瓦器Ⅳ (横突) Ⅲ-2	426	3.9	赤褐色	体部は内湾無縁に口縁に鋭く 端部に沈線一条出る	外面	多数の指押さえ	SK-56
			12.4	灰白～ 赤褐色	器形は小ぶり 断面逆三角形の斜り付け高台	内面	腰間の大きい凹線ミガキ 粗暗な輪状ヘラミガキ	
	427	3.6	赤褐色	体部は外上方へ伸び口縁は外反し端部に上向き沈線	外面	指押さえ 連続性のないわずかなヘラミガキ	SK-56	
		12.4	赤褐色	一条出る 断面逆三角形の斜り付け高台	内面	腰間の大きい凹線ミガキ ぎこちない連続輪状ヘラミガキ		
	428	3.8	赤褐色	体部は外上方に開き口縁部で垂直に立ち上がる 端部	外面	分断性のないヘラミガキ	SK-56	
13.3		灰白色～ 灰色	は上向きに浅い沈線一条出る	内面	腰間の鋭い浅な凹線ミガキと粗暗な輪状ヘラミガキ			
429	3.9	赤褐色	体部は外上方に開き口縁部で外反 端部に上向き沈線	外面	指押さえ	SK-56		
	13.0	赤褐色	一条出る 断面逆三角形の斜り付け高台	内面	腰間の方が大きい凹線ミガキと粗暗な輪状ヘラミガキ			
430	4.1	赤褐色	体部は外上方に開き端部に上向き沈線一条出る 器形は	外面	指押さえ ヘラミガキは2～3条のみ	SK-56		
	12.9	赤褐色	びつ 断面逆三角形の斜り付け高台がわずかに残る	内面	腰間ミガキは10段程度の深さ 粗暗な輪状ヘラミガキ			
98	瓦器Ⅳ (大和) Ⅲ-11	431	4.1	赤褐色	体部は外上方に開き口縁部でやや垂直に立ち上がり口	外面	指押さえ ヘラミガキは数条	SK-56
			12.9	赤褐色	縁で外反 端部に上向き沈線一条出る	内面	腰間の方が大きい凹線ミガキ 器形不明のヘラミガキ	
432	3.7	赤褐色	体部は外上方に開き口縁部でやや垂直に立ち上がり口	外面	指押さえ 分断性のあるヘラミガキ	SK-56		
	12.8	赤褐色	縁で外反 端部に上向き沈線一条出る	内面	体部下位に10段程度の深さの凹線ミガキ 粗暗な輪状ヘラミガキ			
433	2.1	赤褐色	平底から外上方に立ち上がり口縁部に至る 端部は丸	内外とも口縁部ココナデ 屈曲部に指押さえ	SK-56			
90	土師器Ⅲ	434	2.2	赤褐色	平底から外上方に伸び口縁部に至る 端部は尖り丸	内外とも口縁部ココナデ 指押さえ ナデによる明瞭な鋭縁	SK-56	
			12.4	赤褐色	器形ややびつ			
435	2.3	赤褐色	平底から屈曲して外上方に伸び口縁部に至る 端部は	内外とも口縁部ココナデ ナデによる明瞭な鋭縁	SK-56			
	12.0	赤褐色	尖る					
100	土師器Ⅲ	436	2.0	赤褐色	平底から外上方へ内湾無縁に伸び口縁部に至る 端部	内外とも口縁部ココナデ 指押さえ ナデによる鋭縁	SK-56	
			11.6	灰白色	に丸く終る			
437	1.9	赤褐色	平底から屈曲し外上方に伸び口縁部に至る 端部は丸	内外とも口縁部ココナデ 口縁部に鋭い指押さえ 指押さえ ナデによる鋭縁	SK-56			
	12.0	赤褐色	終る					
438	2.0	赤褐色	平底から屈曲し外上方に伸び口縁部に至る 端部は丸	内外とも口縁部ココナデ ナデによる鋭縁	SK-56			
	11.5	灰白色	く終る					
439	2.3	赤褐色	平底から屈曲して伸び口縁部に至る 端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ 指押さえ ナデによる鈍い鋭縁	SK-56			
	11.6	赤褐色	器形はやびつ					
440	2.2	赤褐色	平底から外上方に立ち上がり内湾の口縁部に鋭く 端	内外とも口縁部ココナデ 指押さえ ナデによる明瞭な鋭縁	SK-56			
	11.6	赤褐色	部に角ばる					

遺物観察表

調査年度	遺物	品名	長さ(cm)	色調	形態・特徴	調査・手法	産地
90		441 土師器中皿	2.2 12.1	赤褐色 灰白-灰褐色 黒褐色	中央が突出する底部から断面まで外上方へ開き口縁部に厚みをもち丸く終る	内外とも口縁部ココナデ 指押さへ ナブによる模様	SK-56
		442 土師器中皿	1.9 11.8	赤褐色 赤褐色 赤褐色 灰白色	平底から縁やかに外上方に伸び口縁に突る 底が浅い 口縁は内湾気味で端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ ナブによる明瞭な模様	SK-56
		443 土師器中皿	1.0 11.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底から内湾気味に立ち上がり口縁に至る 端部は上方につまみあがる	内外とも口縁部ココナデ ナブによる模様	SK-56
		444 土師器中皿	12.0 12.9	赤褐色 灰白-灰褐色 赤褐色	平底から内湾気味に立ち上がり口縁に至る 端部は内側に立ち出している 底が深い	内外とも口縁部ココナデ ナブによる強い模様	SK-56
		445 土師器中皿	1.8 12.1	赤褐色 灰白色 赤褐色	平底から縁部が大きく差ハの字形に開く口縁は端部は上方に向き内湾気味 底が浅い	内外とも口縁部ココナデ ナブによる模様	SK-56
		446 土師器中皿	2.2 12.1	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底から内湾気味に立ち上がり口縁に至る 底部に浅しい凹みがあり縁な作り 口縁端部内側に折り筋	内外とも口縁部ココナデ ナブによる明瞭な模様	SK-56
		447 土師器中皿	3.3 12.6	赤褐色 灰 色	平底から逆「ハ」の字に立ち上がる 口縁は端部でわずかに内湾し丸みをもって終る	外面 同型ナブ 内面 指ナブ	SK-56
98		448 瓦 磁 筒 (大和) 田-C	3.9 13.1	赤褐色 赤褐色 赤褐色 灰白色	体部は外上方へ開き口縁は外反気味 端部は上向きに沈線一条流る 断面は三角形の貼り付け高台	外面 黒なへらミガキ 内面 断面の大きい圓錐ミガキと粗かな連続線状ヘラミガキ	SK-56
		449 瓦 磁 筒 (大和) 田-C	3.4 12.2	赤褐色 赤褐色 赤褐色	体部は外上方に開き口縁は外反 端部に沈線一条流る 断面は三角形の貼り付け高台	外面 数本のヘラミガキ 内面 断面の大きい圓錐ミガキと粗かな連続線状ヘラミガキ	SK-56
100		450 土師器中皿	1.3 8.1	赤褐色 赤褐色 灰白色	平底から外上方に伸び口縁部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		451 土師器中皿	1.0 7.8	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底から短かく口縁部が立ち上がる 端部は丸い	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		452 土師器中皿	1.1 7.8	赤褐色 灰白色	平底から短かく外上方に伸び口縁部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		453 土師器中皿	1.5 8.0	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに口縁へ内湾し端部は丸く終る 器壁が厚めに肉厚	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		454 土師器中皿	1.3 8.0	赤褐色 灰白色	底面から外上方に伸び口縁部は内湾で丸く終る	内外とも口縁部ココナデ 強いナブによる模様	SK-56
		455 土師器中皿	1.4 8.4	赤褐色 灰白色	平底から外上方に伸び口縁部は内湾し端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		456 土師器中皿	1.6 7.5	赤褐色 赤褐色 赤褐色	内湾丸底からなだらかに外上方に伸び口縁部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		457 土師器中皿	1.2 8.4	赤褐色 灰白色	底面より短かく外上方に伸び 底部中央が浅い 端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		458 土師器中皿	1.2 8.2	赤褐色 灰白-灰褐色 赤褐色	平底からゆるやかに断面まで外上方へ開き端部は上方へ押さえ丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
		459 土師器中皿	1.2 8.4	赤褐色 赤褐色 赤褐色	平底から断面まで短かく外上方へ開き口縁部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ 強いナブによる模様	SK-56
460 土師器中皿	1.0 7.4	赤褐色 赤褐色	丸底から外上方へ伸び口縁部はわずかに丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56		

遺物観察表

調査年度	遺物	器種	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名	
88	100	土師器蓋	461	1.2 8.4	赤褐色 灰白色	平底から屈曲し短かく外上方へ開き口縁端部は厚みをもちわずかに角ばる	内外とも口縁部に強いナブによる絞線	SK-56
			462	1.1 8.2	内側赤褐色 外側黄褐色 赤褐色	平底から屈曲し極端に短かく外上方へ開き口縁部は角ばり端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ 屈曲部に絞線	SK-56
		土師器蓋	463	1.4 7.4	内側灰白色 外側白～ 黄褐色	平底から内湾し口縁部へ絞く 口縁部は内湾で丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
			464	1.3 7.6	赤褐色 灰白色 黄褐色	いびつな器形 平底からゆるやかに屈曲し外上方に開き、口縁端部は丸い	内外とも口縁部ココナデ 強いナブによる絞線	SK-56
		土師器蓋	465	1.2 8.4	赤褐色 黒褐色	平底より屈曲し短かく外反し口縁端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-56
			瓦葺筒 (大和) 皿-C	466	3.8 12.9	内面赤褐色 外側赤褐色 灰白色	器形はいびつで外側凹凸があり難な作り 端部にはし 向きの一本流線通る	外面 指押さえ 数条のヘラミガキ 内面 下方に凹部のある圓縁ミガキと螺旋状ヘラミガキ
		瓦葺筒 (大和) 皿-C		467	3.7 12.6	赤褐色 灰 色	口縁部は丸みがないがわずかに厚みがある 器形は直三角形 全周 小ぶりである 器形は直上向きに難な作り	外面 指押さえ 分割性のある板状ヘラミガキ 内面 隙間のある圓縁ミガキ 鷲計回りの連続輪状ヘラミガキ
			瓦葺筒 (大和) 皿-C	468	3.6 12.5	内側赤褐色 外側赤褐色 灰白色	体部は外上方に開き口縁で外反 端部は上向きの流線 一本通る 高台は逆三角形の斜り付高台	外面 指押さえ 分割性のある数条のヘラミガキ 内面 隙間の大きい圓縁ミガキと連続輪状ヘラミガキ
		土師器蓋		469	1.6 8.6	赤褐色 赤褐色	ていねいな作り 平底からゆるやかに外上方に伸びし 縁部は半直に立ち上がりやや角ばった端部で終る	内外とも口縁部ココナデ 強いナブによる絞線
			土師器蓋	470	1.5 8.2	赤褐色 灰白色	底部から外上方の縁部は直立し尖って終る いびつ	内外とも口縁部ココナデ
土師器蓋	471	1.1 7.4		赤褐色 赤褐色 灰白色	平底からまっすぐ伸びたのち口縁は内湾し端部は折返し角ばっている 器形は難判している	内外とも口縁部ココナデ ナブによる強い絞線	SK-58	
	瓦葺筒 (大和) 河内科) 筒形 皿	472	5.8 15.6 34.2	赤褐色 灰白色 赤褐色	内湾する体部から口縁部はくの字に開く屈曲し端部は外に肥厚する	外面 黄化のため口縁部調整不明 器形は斜り付ナブ 内面 板ナブ(断面幅1.3cm)	SK-58	
土師器蓋		473	1.8 8.0	赤褐色 黄褐色	平底より屈曲し短かく立ち上がる 端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-61	
	瓦葺筒 (大和) 皿-A(新)	474	4.0 13.8	赤褐色 灰 色	器形は薄い 平たく深い 直徑から外上方にゆるやかに開く く口縁上に流線あり 高台は逆三角形で低い	外面 高台より放射状に伸びる指押さえ 数条のヘラミガキ 内面 隙間の深い圓縁ミガキと連続輪状ヘラミガキの一部	SK-61	
土師器蓋		475	1.1 8.0	赤褐色 黄褐色	底部中央ふくらみ口縁は逆「ハ」の字に開く 端部は やや角ばる	内外とも口縁部ココナデ	SK-66	
	土師器中足	476	2.6 11.8	赤褐色 灰白色	平底より体部が外上方に立ち上がる 口縁部はやや肥厚し、端部は角ばる	屈曲部に指押さえ	SK-64	
土師器蓋		477	1.4 7.6	赤褐色 灰白色	口縁は逆「ハ」の字に開く開き端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-67	
	土師器蓋	478	1.4 8.0	内側赤褐色 外側黄褐色	小さな器部からゆるやかに逆「ハ」の字に開き端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナデ	SK-67	
土師器中足 (東播磨)		479	3.3 27.0	赤褐色 灰 色	体部はほぼまっすぐ外上方に開き端部は下外方に肥厚する	外面 凹板ナブ 内面 斜方内へのナブ 口縁部強ナブで凹面をもつ	SK-67	
	土師器蓋	480	15.0 最大径31.0	赤褐色 灰白色	丸底から内湾端部に立ち上がる 上から1/3くらいの所で最大径を をなし内湾して口縁部へ絞く 器形は難判	外面 調整不明 内面 ヘラミガキ 指押さえ 粘土塗きさびの痕	SK-70	

遺物観察表

種別	品名	種類	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名	
91	481	七律部葉	25.4	赤褐色	丸型から上方へ伸びた円錐状で最大径をなし内径したのち口縁部で直径に立ち戻ると同時に口縁部にもくぼむ。両面に縦筋あり	外面	調整不明	SK-70
			17.8	この上から		内面	底部に指押さえ ヘラミダリ 一部刻印	
			10.6	この上から				
101	482	白玉	厚さ 0.4	赤			碧玉製	SK 70
			厚さ 0.3	暗緑灰色				
			厚さ 0.4	赤				
91	484	土師部高杯	12.5	赤褐色	円錐から上方へ伸びた丸型で最大径をなし内径したのち口縁部で直径に立ち戻ると同時に口縁部にもくぼむ。両面に縦筋あり	外面	円錐部に縦筋をなす 杯から脚部にハケメの後ナデ	SK-80
			17.0	赤灰白色		内面	ヘラミダリ 一部に黒染	
			8.0×7.3	赤褐色		外面	指押さえ	
92	485	土師部高杯	8.0×7.3	赤褐色	円錐から上方へ伸びた丸型で最大径をなし内径したのち口縁部で直径に立ち戻ると同時に口縁部にもくぼむ。両面に縦筋あり	外面	指押さえ	SK-82
			8.0×7.3	赤褐色		内面		
			8.0×7.3	赤褐色				
92	486	土師部高杯	3.8×	赤褐色	2重口縁を成すが底部の形状不明 外側に明瞭な縦筋あり	外面	縦筋が濃く調整不明	SK-84
			15.0	赤褐色		内面		
			7.6	赤褐色				
92	487	土師部高杯	15.0	赤褐色	直立に近い傾斜から外反し口縁部は斜め上方へ折曲	外面	傾斜部にヘラミダリ 口縁部2段の楕円列点文	SK-84
			7.6	赤褐色		内面	傾斜部に根ナデ 口縁部に指押さえ	
			7.6	赤褐色				
92	488	土師部高杯	3.9	赤褐色	傾斜から「く」の字に開き底部は折り返し戻る	外面	傾斜部は斜め方向のハケメ 傾斜口縁部はココナデ	SK-84
			17.2	赤褐色		内面	指押さえ ヘラミダリ 粘土巻きあげの痕	
			17.2	赤褐色				
92	489	石	6.1	赤	中央に凹面がありその周囲は組成粒がなめらかになっている。下半分に削けた痕がある			SK-84
			11.2	赤褐色				
			11.2	赤褐色				
92	490	七律部	長さ 5.3	赤	円錐形		径0.7cmの横孔	SK-84
			幅 1.4	赤褐色				
			幅 1.4	赤褐色				
91	491	土師部高杯	11.3	赤褐色	口縁部近「ハ」の字に開き端部丸く終る	外面	風化が濃くヘラミダリがわずかに残る	SK-84
			20.0	赤褐色		内面	口縁部は縦方向のナデ粘土層露出部分に指押さえ	
			20.0	赤褐色				
91	492	土師部高杯	10.1	赤褐色	丸型から上方へ伸びた円錐状で最大径をなし内径したのち口縁部で直径に立ち戻ると同時に口縁部にもくぼむ。両面に縦筋あり	外面	傾斜部は縦方向のヘラミダリが全面に施される	SK-84
			10.1	赤褐色		内面	底部は縦方向ヘラミダリ調整は縦方向へハケメ 指押さえ	
			10.1	赤褐色				
102	493	土師部高杯	1.6	赤褐色	内径のある平皿から脚部して外上方へ伸び口縁部は丸く終る		内外とも口縁部はココナデ 指押さえ	SD-28
			10.3	赤褐色				
			10.3	赤褐色				
90	494	土師部高杯	1.3	赤褐色	底部中央がやや高く浅い平皿からゆるやかに短く外上方へ伸び傾斜は丸い		内外とも口縁部ココナデ	SD-28
			8.4	赤褐色				
			8.4	赤褐色				
90	495	土師部高杯	2.0	赤褐色	厚みのある平皿から脚部して厚みをもって外上方へ伸びる		内外とも口縁部ココナデ 指押さえ	SD-28
			10.3	赤褐色				
			10.3	赤褐色				
91	496	瓦器 碗 (大形) III C	3.0	赤褐色	皿込みから外上方へ伸びたのち口縁部でわずかに外反し	外面	調整不明	SD-28
			10.1	赤褐色		内面	傾斜の傾いた傾斜ミダリが見込まれて降る	
			10.1	赤褐色				
91	497	瓦器 碗 (大形) III-B-C	13.9	赤褐色	傾斜部は緩やかに外上方へ伸び傾斜部でわずかに外反し丸く終る 傾斜外面にシダの遺の痕	外面	シダの葉先が押しつけられた痕	SD-28
			14.2×8.6	赤褐色		内面	傾斜の大きい傾斜ミダリ	
			14.2×8.6	赤褐色				
91	498	土師部高杯	1.6	赤褐色	傾斜部は緩やかに外上方へ伸び傾斜部でわずかに外反し丸く終る		凹面内面とも縦筋が濃い	SD-28
			10.3	赤褐色				
			10.3	赤褐色				
91	499	石 鐙	長さ 5.5	赤褐色	脚から口縁部のみ残存 口縁部は内湾気味 端部に丸みをおびた面を成し終る 深石製	外面	調整先欠文	SD-28
			幅 3.4	赤褐色		内面		
			幅 3.4	赤褐色				
91	500	瓦器 碗 (大形) III-1	4.5	赤褐色	傾斜、口縁部は外上方へ伸び傾斜部は丸い 皿込みは平らで底面は浅三角型 1/3の深さ 口縁部は 全体的に施される	外面	指押さえ	SD-28
			19.7	赤褐色		内面	傾斜の傾いた傾斜ミダリと深石製状ヘラミダリ	
			19.7	赤褐色				

遺物観察表

国名	種別	品名	数量(n)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
95	土器器群	丸底 4.1	12.4	赤褐色	頸部から口縁部は外上方に、底部は外下方に伸びる	外面 摩耗している	SR-01
			12.4	淡褐色	底部縁部は薄い、頸部は内側に肥厚する	内面 胴部にユビナゲ、くへラケズリ	
95	土器器群	丸底 4.3	12.4	灰白色	平坦な天井部から内湾して下がる口縁部は頸部に内傾	外面 天井部に回転ヘラケズリ、口縁部とのあいだに線縁	SR-01
			12.4	赤褐色	する浅い凹面を有する、縁は鈍い	内面 ナゲ	
93	土器器群	丸底 5.1	5.1	赤褐色	丸い天井部からほぼ直線に下ったのも内傾する凹面を有す	外面 天井部に回転ナゲヘラケズリ、口縁部はヨコナゲ	SR-01
			12.0	灰白色	縁は鋭いが緩く下方に沈降する	内面 指押え、ナゲ	
93	土器器群	丸底 4.5	12.0	灰白色	平坦な天井部から緩やかに外下方に下り短く丸い縁を有し	外面 天井部に回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナゲ	SR-01
			12.0	灰白色	たのほぼ半直に下り頸部は内傾する凹面を有す	内面 指押え	
93	土器器群	丸底 5.2	11.2	赤褐色	立ち上がり内傾し、前部は内傾する圓形から直線に急がれる	外面 底部は回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナゲ	SR-01
			11.2	赤褐色	底部は直線に急がれ、頸部は丸い、底部縁部は丸いをもつ	内面 ナゲ	
93	土器器群	丸底 5.2	9.8	赤褐色	厚く丸みのある直線より外方に開いたのも肩倉して立ち上がる	外面 底部は回転ヘラケズリ、ナゲ	SR-01
			9.8	灰白色	口縁部は内傾する凹面を有する、底部は鋭く鋭い	内面 ナゲ	
93	土器器群	丸底 4.7	9.7	赤褐色	丸い底部から赤土上へ湾曲して立ち上がり口縁部は	外面 底部は回転ヘラケズリ	SR-01
			9.7	灰白色	内傾する凹面を有する、受部はわずかに丸くなる	内面 ナゲ、受部の内側は鋭いナゲで凹行	
93	土器器群	丸底 5.0	19.6	赤褐色	丸い天井部から下外方へ下りゆるやかに膨らみ、縁部は	外面 犬上部に回転ヘラケズリ、口縁部との境に線縁	SR-01
			19.6	灰白色	伸びる、口縁部は頸部でわずかに外反する	内面 ナゲ	
105	土器器群	丸底 5.1	24.6	赤褐色	平坦な天井部から内湾して下り口縁部ではほぼ直線に	外面 天井部は回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナゲ	SR-01
			24.6	灰白色	伸び頸部は丸く鈍る	内面 鋭いナゲ	
93	土器器群	丸底 4.5	12.0	赤褐色	天井部からゆるやかに外下方に下り浅く鋭い縁を有し	外面 天井部は回転ヘラケズリ	SR-01
			12.0	灰白色	たのほぼ直線に下り頸部は内傾する凹面をもつ	内面 丁寧なナゲ	
93	土器器群	丸底 4.6	10.4	赤褐色	立ち上がりは内傾して伸び頸部は丸く受部は外上方に	外面 底部は回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナゲ	SR-01
			10.4	赤褐色	伸び頸部は丸い、底部は深く丸い	内面 ナゲ	
93	土器器群	丸底 4.5	9.8	赤褐色	平坦な天井部から内湾して立ち上がり口縁部は	外面 底部は鋭い範囲に回転ヘラケズリ	SR-01
			9.8	灰白色	内傾する凹面を有す、受部は水平に伸び頸部は鋭い	内面 ナゲ	
93	土器器群	丸底 5.1	9.1	赤褐色	体部は楕円形の丸みをおびる、口縁部で「く」の字に	外面 胴と体部間に3本のヘラ横線と3本の波状文(6条)	SR-01
			9.1	赤褐色	開出し口縁は深く凸行する、底部は厚みがある	内面 口縁部はヨコナゲ	
95	土器器群	丸底 6.2	9.2	赤褐色	底部内面に黒皮が見られる	外面 胴のタタキ(3本/1cm)	SR-01
			9.2	赤褐色		内面 ヘラケズリ(原体幅1cm)	
95	土器器群	丸底 3.2	4.7	赤褐色	逆「ハ」の字に開く体部を有する、底部中央は凹む	外面 底部のくびれに指押え	SR-01
			4.7	赤褐色	気味を有し	内面 新ナゲ(原体幅1.6cm)	
93	土器器群	丸底 8.5	10.8	赤褐色	頸部は外上方に伸び、唇部は丸い、胴部は受部から外反、	外面 胴部におずかにハケメが復る	SR-01
			10.8	赤褐色	と外下方に伸びる、唇部は丸い、胴部中央に円形の透かし孔	内面 ヘラケズリ、指押え	
86	磁石	長さ 7.3 幅 3.6 厚さ 3.6	灰白色	表面の中央が少し凹状になっている	表面もた使用痕	SR-01	
95	土器器群	丸底 7.3	8.9	赤褐色	球形の体部と逆「ハ」の字に開く口縁部を有する	外面 胴1部、胴のハケメ	SR-01
			8.9	赤褐色	底部欠損	内面 新ナゲ、ヘラケズリ、口縁部は横方向の鋭いハケメ	
104	土器器群	丸底 6.5	26.0	赤褐色	体部から内湾し、口縁部で「く」の字に膨らんだの外	外面 体部にハケメ(原体幅3.3cm)	SR-01
			26.0	赤褐色	内湾する口縁部は内傾する縁部をもつ	内面 ヘラケズリ	
94	土器器群	丸底 4.5	4.5	赤褐色	円筒型に広がる胴部は頸部上方に4つの透かし孔が	外面 胴、胴部の境に指押え	SR-01
4.5	赤褐色	開出し	内面 胴底部に厚皮、透かし孔は外→内				

遺物観察表

調査年度	遺物ID	器種	質量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	記録番号	
95	521	土師器 浅鉢	口径 5.0	唇灰白～ 黒褐色	黒底あり 突出した底部は中央部が凹む	外面	肩のテラキメ	SR-02
			底径 4.3	唇灰白色		内面	ヘラケズリ	
94	522	土師器 二重	口径 5.1	唇白色	平底ね 黒底あり 底部から内側気味にほぼ垂直に伸びる	外面	手捏ね 指押さえ	SR-02
			底径 4.2	灰黄褐色		内面	指押え	
94	523	土師器 高杯	口径 9.0	唇灰白 唇赤褐色	脚部のみ残存 柱状部から裾部にかけて直曲して閉じる 黒底あり	外面	脚部の屈曲部に指押さえ	SR-03
			底径 6.4			内面	柱状部にヘラケズリ	
94	524	土師器 高杯	口径 10.7	唇白	杯底部で細くくびれ脚部部が大きく開き杯口縁部は薄く外反する	外面	杯部は横方向のヘラミゴト 脚部に黒のヘラケズリ	SR-02
			口径 11.0	唇灰白色		内面	杯部はナデ 脚部にわずかな布目のあと	
95	525	土師器 高杯	口径 10.3	唇灰白	口縁部は直曲して脚部に明確な面を有する	外面	摩耗のため調整不明	SR-02
			口径 11.3	唇灰白色		内面	屈曲部にユビナデ	
95	526	土師器 高杯	口径 11.4	唇白色	石炭安山岩製 淡黄色		上面の使用痕は顕著	SR-02
			口径 11.4	唇白色				
95	527	土師器 高杯	口径 8.0	唇白～赤褐色	頸部、肩部にヘラミゴト痕が集まっている	外面	内外とも指押え	SR-02
			口径 8.0	唇白～赤褐色		内面		
94	528	土師器 高杯	口径 9.0	唇白色	頸部から「く」の字に開く 唇部は内開しながら底部へと続く 底部は丸い	外面	底部から杯脚部にハケメ 口縁部はココナデ	SR-02
			口径 7.7	唇白色		内面	指押えと板ナデ	
94	529	土師器 高杯	口径 20.5	唇白色	球形の体部とくびれた口縁部「ハ」の字に開く口縁部は有する 脚部は内側に肥厚する	外面	体部に横方向のハケメ 口縁部はココナデ	SR-02
			口径 14.0	灰黄色		内面	指押さえ ナデ ヘラケズリ	
96	530	土師器 高杯	口径 6.7	唇白色	逆三角形で下部部はすり減った痕が認められることからSGIとセットと考えられる		下端に使用痕	SR-02
			口径 6.6	唇白色			破片	
105	531	土師器 高杯	口径 10.5	唇白色	中央表裏共に凹状(直径2～2.5cm)になっている		中央部に凹み	SR-02
			口径 3.6	唇白色			砂粒	
94	532	土師器 高杯	口径 16.6	唇赤褐色	口縁部は「ハ」の字に開く 脚部は「ハ」の字に開く 脚部は「ハ」の字に開く	外面	天蓋と体部にナデ 突帯と高台は粘り付け	SR-02
			口径 16.4	唇赤褐色		内面	天蓋と体部に指押えが鋭く	
96	533	土師器 高杯	口径 3.6	唇白色	サメカイト製			SR-04
			口径 2.7	唇白色				
96	534	土師器 高杯	口径 7.5	唇灰白～赤褐色	肩から上が残存 口縁部は「ハ」の字に開く 脚部は「ハ」の字に開く 脚部は「ハ」の字に開く	外面	口縁部から脚部にかけて段状にココナデ	SP-109
			口径 3.3	唇灰白色		内面	板ナデ 指押さえ	
96	535	土師器 高杯	口径 2.8	唇白色	体部破片 褐色	外面	粘りタタキ	SP-109
			口径 2.1	唇白色		内面	ナデ	
96	536	土師器 高杯	口径 4.7	唇白色	体部破片 褐色	外面	粘りタタキ	SP-109
			口径 3.9	唇白色		内面	ナデ	
98	537	土師器 高杯	口径 2.1	唇灰白～赤褐色	底部よりゆるやかに直曲して立ち上がり口縁に続く 脚部は丸く閉じる	内外とも	口縁部ココナデ	SP-109
			口径 13.9	唇赤褐色			ナデによる段縁	
97	538	土師器 高杯	口径 2.1	唇白色	平底から屈曲して外反気味に立ち上がり口縁は直存する	内外とも	口縁部ココナデ 屈曲部に指押さえ	SP-109
			口径 11.5	灰黄色				
97	539	土師器 高杯	口径 2.2	唇白色	平底から外上方へ伸びる 口縁部は外反し脚部は丸く閉じる	内外とも	口縁部ココナデ 屈曲部に指押さえ	SP-109
			口径 12.0	灰黄色			ナデによる段縁	
97	540	土師器 高杯	口径 1.5	唇赤褐色	丸底より外上方に伸びる脚部はやや突る	内外とも	口縁部ココナデ	SP-109
			口径 8.1	唇赤褐色			ナデによる明確な段縁	

遺物観察表

品名	種類	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
92	土師器Ⅲ	1.5 長さ 8.2 幅 0.8	黒褐色 灰褐色 赤褐色	ややいびつ 平底より外上方に伸び端部は丸く終る	内外とも口縁部指押さえ	92-176
	土師器Ⅲ	1.2 長さ 8.8 幅 0.8	赤褐色 灰褐色	平底より外上方に伸び端部は丸い	口縁部ナゲによる接線	92-185
	土師器Ⅲ	1.5 長さ 8.6 幅 0.8	赤褐色 灰褐色	平底より外上方に伸び端部は内湾し丸く終る 肉厚	口縁部ナゲによる接線	92-182
	土師器Ⅲ	1.2 長さ 7.9 幅 0.8	赤褐色 灰白色	浅い平底から内湾気味に外上方へ伸び端部は丸い	口縁部ココナゲ 底部に指押さえ	92-191
106	土師器Ⅲ	1.5 長さ 8.0 幅 0.8	赤褐色 灰黄色	深さがある平底から屈曲して外上方へ伸びる 端部は丸く終る	内外とも口縁部ココナゲ	92-187
	土師器Ⅲ	2.0 長さ 7.9 幅 0.8	赤褐色 灰黄褐色	凹凸のある底部から屈曲して外上方に伸び端部は丸い いびつな器形 定形	内外とも口縁部ココナゲ かなりいびつ	92-189
	土師器Ⅲ	1.2 長さ 8.0 幅 0.8	赤褐色 灰黄色	浅い平底から外上方に短く伸びたのち口縁部は上方に押され角ばる	口縁部ココナゲ ナゲによる接線	92-189
	鉄釘	長さ 7.3 幅 0.5 厚さ 0.4	赤褐色 黒褐色	錆の部分が少ない 頭部欠損		92-182
	鉄釘	長さ 3.8 幅 0.8 厚さ 0.4	赤褐色 黒褐色	頭部と先端部欠損		92-188
	不明鉄製品	長さ 4.9 幅 1.2 厚さ 1.5	赤褐色 赤褐色	円筒形		92-200
	不明鉄製品	長さ 5.6 幅 4.5 厚さ 0.8	赤褐色 赤褐色	丸い傘形の不明鉄製品 非常に薄い	鍔り金具?	92-201
	鉄釘	長さ 8.1 幅 1.9 厚さ 0.7	赤褐色 赤褐色	断面長方形 頭部と先端部欠損		92-208
	不明鉄製品	長さ 6.8 幅 1.3 厚さ 0.7	赤褐色 赤褐色	薄い	ノミ状工具の刃先か?	92-210
	鉄釘	長さ 11.4 幅 1.0 厚さ 1.5	赤褐色 赤褐色	頭部を折り返し先端部は欠損		92-211
	土師器Ⅲ	1.5 長さ 8.2 幅 0.8	赤褐色 灰黄色	浅い平底から外上方へ伸び端部は丸い 定形	口縁部ナゲ	92-204
	土師器Ⅲ	1.2 長さ 7.8 幅 0.8	赤褐色 灰黄褐色	底部中央がやや高い浅い平底部から内湾気味に短く外上方へのび端部は尖り気味 いびつな器形 定形	口縁部ココナゲ 底部に指押さえ ナゲによる接線	92-210
	土師器Ⅲ	1.2 長さ 8.0 幅 0.8	赤褐色 赤黄褐色	浅い平底から内湾して短く立ち上がり端部はやや尖り気味	口縁部ココナゲ ナゲによる接線	92-215
	土師器Ⅲ	1.3 長さ 8.0 幅 0.8	赤褐色 灰黄色	平底から外上方へ伸び端部は角ばる いびつな(楕円形)器形である	口縁部ココナゲ	92-211
土師器Ⅲ	1.2 長さ 8.0 幅 0.8	赤褐色 灰黄色	浅い平底から外上方へ短く伸び端部は角ばる	口縁部ココナゲ ナゲによる接線	92-212	
土師器Ⅲ	1.4 長さ 8.4 幅 0.8	赤褐色 灰白色	中央がやや高い平底から外上方に内湾気味に伸び端部は角ばる 定形	口縁部ココナゲ 屈曲部に指押さえ	92-215	

遺物観察表

年代	器物種別	器種	数量(n)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
106	土師器	土師器Ⅲ	1.6	赤褐色	平底から内湾意味に外上方へのび端部は角ばる 内湾	口縁部ヨコナデ 屈曲部に指押さえ	SP-258
			8.1	灰白色			
			1.6	赤褐色 淡黄色 形状白色	平底から外上方にゆるやかにのび端部は角ばる	口縁部ヨコナデ 屈曲部に指押さえ	SP-258
8.1		全体に厚い胎壁 いびつな器形					
96	土師器	土師器Ⅲ	1.5	赤褐色 黄灰色 形状白色	凹凸のある浅い皿部から外上方へのび端部は角ばる	口縁部ヨコナデ 直壁に近い指押さえ	SP-283
			8.3				
			8.8	赤褐色にぶい 黄褐色 赤褐色	「く」の字に屈曲する口縁部をもつ 端部は丸い	外面 頸部ヨコナデ 胴部は指押さえ 内面 口縁部板ナデ 胴体底あり 粘土の組合成	SP-180
96	土師器	土師器Ⅲ	4.8	赤い胎色 赤い胎色 赤い胎色	口縁は外方に屈曲し上方に面を有す	外面 黄な粘土質のあと 指押さえ 内面 ヨコナデ 板ナデ(胴体底)	SP-186
			15.2				
97	瓦器	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-E	3.2	赤褐色	端部は外反し沈線を有する	外面 口縁部ヨコナデ 指押さえ 形状化した高台 内面 6周するのみの盤縁ミダキ	SP-102
			9.7	灰白色			
			3.2	赤褐色	やや平らな底面から内湾意味に外上方に伸び端部は丸く沈線を有する	外面 指押さえ 高台はほとんど高さはない 内面 見込みに近い位置に数周する盤縁ミダキ	SP-284
10.3	オリーブ灰色						
97	瓦器	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-E	4.0	赤い胎色 黄褐色 黄褐色	底面からゆるやかに外上方に傾き口縁部では垂直に立ちあがり端部で外反する 端部上位に沈線が走る	外面 無なつくり 内面 隙間の多い盤縁ミダキ	SP-183
			12.9				
107	磁石	磁石	8.4	赤褐色		表面に使用痕	SP-187
			3.6	赤褐色			
4.9	赤褐色						
98	瓦器	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-F	8.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	口縁部は逆「ハ」の字に端部は内側に折り返し凹状の溝を成す 器は水平に伸び体部は薄い	外面 器が付着 体部調整不明 罫は貼り付け 内面 調整不明	SP-188
			22.1				
25.6							
97	瓦器	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-F	14	赤褐色 赤褐色 赤褐色	内湾する体部から口縁部は「く」の字に傾き口縁部は内側に折り返す 罫はほぼ水平 その先端は上や下がる	外面 罫部に段状のナゲが走る 罫は貼り付け 内面 指押さえのみ	SP-187
			25.5				
28.4							
97	瓦器	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-F	18.3	赤褐色 赤褐色 赤褐色	体部はわずかに内湾して口縁へと続く 口縁は内傾する端面を有する 罫は短くはねあがり端部は丸い面を有する	外面 連続する指押さえ 粘土の組合成 内面 板ナデ	SP-187
			20.0				
20.2							
98	瓦器	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-F	11.6	赤灰白色	平底 内湾割溝が深い	外面 わずかに指押さえが残る 内面 ナゲによる凹縁	SP-288
			11.4	赤褐色			
101	勾玉	最大径0.1	乳白緑色	ヒスイ製 中央より少しずれたところに穿孔	径0.6cmの穿孔	V層	
			厚さ 1.4				
92	土馬	最大径2.5	赤褐色 赤褐色 赤褐色	胴部胴部底の一部を欠失	胴部胴部底に指押さえ	IV層	
			厚さ 3.3				
96	土師	最大径2.1	赤	灰白-黄灰色	径0.6cmの穿孔	III層	
			厚さ 5.5				
96	石	最大径2.1	赤褐色 黄灰色 赤褐色	有蓋式 やや人型 サヌカイト製		II層	
			厚さ 3.7				
2.4							
0.6							
101	縄文土器	磁片	黄褐色～ 暗黄褐色		外面 内面	V層	
99	埴輪	最大径2.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	やや高めの高台は「ハ」の字形に開き端部は内傾する凹面をもつ	外面 有段の輪高台 全体に黄釉 内面	包帯	
			厚さ 8.3				
99	埴輪	最大径2.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	見込みに丸味をもつ	外面 高台は磨りだしのベタ高台 内面	III層	
			厚さ 5.5				

遺物観察表

品名	種別	部様	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
99	土師器	口縁部	浅黄 3.4	杏色粉	底部欠損 体部は玉縁状 内面底部近くに沈線一本走る	外面 口縁部より1.5cm~2.8cmまで施釉 内面 全面施釉	II層
		内面	17.5 赤0	灰白色			
108	土師器	底面	灰黄 2.5	杏色粉	底面より外上方に伸び口縁部へと続く 端部は直行し丸く終る	外面 凹輪ナゲ 口縁部に自然釉 内面	II層
		底面	12.0	赤0			
86	土師器	底面	2.3	杏色 灰白色 赤灰色	長く平らな底面より外上方に下がり口縁部で屈曲し直下に伸びる端部は丸い 上面は凹輪平な蓋蓋つまみ	外面 凹輪ナゲ つまみは貼り付け 内面	II層
		底面	13.2				
86	土師器	底面	6.5	杏色粉	やや厚めの底面から外上方に伸び3/4位のところから口縁部に直行し丸く終る	外面 摩耗しているが全体に板ナゲ 内面	II層
		底面	12.6	赤0			
86	土師器	底面	6.0	999-044 999-044 999-044	口縁部は「く」の字に開き端部は上方につまみ上げ口縁は肥厚して断面長方形を呈し一筆の沈線を成す	外面 頸部に縦のヘリ溝が6本残る 内面 不明	II層
		底面	21.4				
102	土師器	底面	1.2	杏色粉	平底から屈曲して逆「ハ」の字に開く	摩耗している 立ちあがり部分に強いナゲによる凹面が残る	ST-01
		底面	8.3	浅黄緑色	口縁端部は薄く丸味をもって終る		
		底面	1.4	杏色粉	中央部が少し盛りあがった平底と屈曲して短く伸びる	口縁部ココナゲ ナゲによる横線	ST-01
		底面	9.6	灰白色	口縁部を有する 端部は厚く角ばる		
		底面	2.3	杏色粉	丸底からわずかに屈曲して口縁部へ続く	口縁部強いナゲ	ST-01
		底面	4.5	灰白色	端部は厚みをもち外反する 完形		
		底面	2.0	杏色粉	高さがあり丸底から口縁へゆるやかに続く	口縁部ココナゲ	ST-01
		底面	9.1	灰白色	口縁部で厚みを増し丸味をもって終る		
		底面	1.5	杏色粉	平底から口縁部は短く屈曲して端部は丸く終る 完形	口縁部ココナゲ	ST-01
		底面	8.4	灰白色			
102	土師器	底面	1.8	杏色粉	丸底からゆるやかに口縁部へ続く	ココナゲ	ST-01
		底面	9.6	灰白色	端部は丸く終る 完形		
102	土師器	底面	1.6	杏色粉	平底から逆「ハ」の字に開く口縁部を有する	口縁部ココナゲ ナゲによる横線	ST-01
		底面	9.6	灰白色	端部は外反し丸く納められる 完形		
102	土師器	底面	1.5	杏色粉	平底で高さもなく扁平な器形である	口縁部ココナゲ	ST-01
		底面	8.6	灰白色	器壁もうすい 口縁部はわずかに外反する 完形		
102	土師器	底面	1.8	杏色粉	丸みのある底からゆるやかに口縁部へ続く	口縁部ココナゲ 底部に指溝あり ナゲによる横線	ST-01
		底面	9.8	赤0	端部はわずかに外反し丸味をもって終る 完形		
102	土師器	底面	1.6	杏色粉	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部ですこし外反する	口縁部ココナゲ	ST-01
		底面	9.5	灰白色	完形		
102	土師器	底面	1.8	杏色粉	平底から屈曲して外反気味に口縁へ続く	口縁部ココナゲ	ST-01
		底面	9.5	赤0	端部は丸く終る 完形	内周見込に平行ナゲ	
102	土師器	底面	2.0	杏色粉	丸底からわずかに外反する口縁部を有し端部は水平	口縁部ココナゲ	ST-01
		底面	9.3	灰白色	向にすこし伸びて薄い		
102	土師器	底面	1.8	杏色粉	丸底からゆるやかに口縁部へ続く端部は厚みをもって丸く外反気味である 完形	口縁部ココナゲ ナゲによる横線	ST-01
		底面	9.0	灰白色			
102	土師器	底面	1.8	杏色粉	丸底からゆるやかに立ちあがり口縁部へ続く	口縁部ココナゲ ナゲによる横線	ST-01
		底面	9.3	赤0	厚みは均等で口縁部で外反し丸味をもって終る		
102	土師器	底面	1.6	杏色粉	平底からわずかに屈曲して口縁へ伸びる	口縁部ココナゲ ナゲによる横線	ST-01
		底面	9.1	灰白色	器壁の厚みは均等 口縁部も厚くやや角ばる		

遺物観察表

品名	種別	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	記録名
102	土師器皿	1.5	赤褐色	少しびつではあるが丸底からなだらかに口縁部へ続	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	ST-01
		9.0	浅黄褐色	まわずかに外反し端部は丸く納められる 宛形		
	土師器皿	1.1	赤褐色	厚板割製 宛形	口縁部ヨコナデ	ST-04
		7.6	灰白色			
	土師器皿	1.8	赤褐色	丸底からゆるやかに外上方に開いたのも口縁の端部は	口縁部ヨコナデ	ST-04
		9.2	浅黄褐色	厚みをもたれ丸く終る 宛形		
	土師器皿	1.7	赤褐色	底部中央がやや高くなった底部からゆるやかに口縁部	内外とも口縁部はヨコナデ	ST-01
		7.3	灰白色	へ続く 端部は丸みをもって終る		
	土師器皿	1.8	赤褐色	丸底からゆるやかに口縁部へ続き端部は厚みをもって	口縁部ヨコナデ	SY-01
		9.2	灰白色	角ばる		
土師器皿	1.6	赤褐色	平底から屈曲し短く伸びる口縁部は端部でやや七方	口縁部ヨコナデ 強いナデによる鈍い縁線	ST-09	
	9.0	灰白色	に押される 宛形			
土師器皿	1.3	赤褐色	平底から足「ハ」の字に屈曲して短く伸びる口縁部は	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	ST-04	
	8.0	灰白色	有する 中央に小穴あり 宛形			
土師器皿	2.4	赤褐色	中央のやや高くなった底部から直立したあと大きく逆	新的方向に指押さえ一層 内面深込みにジグザグ状のナデが残る	ST-01	
	10.0	灰白色	「ハ」の字に開く 端部は丸く終る 宛形			
土師器中皿	3.2	赤褐色	丸底からゆるやかに立ち上がりを見せ口縁部へつづく	口縁部ヨコナデ 底部に指押さえ ナデによる縁線	ST-04	
	14.1	灰白色	端部は直行角で丸く納められる 厚みは均等である			
109	土師器中皿	3.1	赤褐色 赤黄褐色 赤灰白色	平底からゆるやかに屈曲し外上方に開き端部はやや内	指押さえ 強いナデによる縁線	ST-09
		15.6	赤灰白色	湾する 内面に煤が付着		
	土師器中皿	2.3	赤黄褐色 赤暗灰色 赤灰白色	口縁端部は丸みをおびている 内面に煤が付着	強い指ナデ	ST-01
		10.4	赤灰白色			
土師器中皿	2.2	赤褐色	平底からゆるやかに口縁部へ続く 端部は丸く納めら	内外とも口縁部ヨコナデ	ST-01	
	13.8	赤灰白色	れる 内面は全体に煤が付着			
103	土師器中皿	3.6	赤灰白色 赤黄褐色	平底から内湾して立ち上がり端部は内厚で丸く終る	口縁部ヨコナデ 強いナデによる縁線	ST-01
		14.8	赤黄褐色			
	土師器中皿	2.3	赤褐色	中央が盛りあがりを見せる底部から屈曲したのも外上	口縁部ヨコナデ 強いナデによる縁線	ST-04
		15.8	灰白色	方へ伸びる 端部は丸く終る		
土師器中皿	2.6	赤黄褐色	口縁部は外上方に向かって開き端部は丸い 底部の形	ナデ+指押さえ 器壁に凹凸が目立つ	ST-01	
	14.0	赤灰白色	状は不明 1部煤が付着			
土師器中皿	2.7	赤褐色	なだらかな立ち上がりを見せる体部とやや角ばった口	口縁部ヨコナデ 底部指押さえ多数	ST-01	
	14.2	灰白色	縁を有する			
土師器中皿	2.4	赤褐色	平底からゆるやかに外上方へ伸びる口縁を有する	底部に径0.4cmの押捺痕が不規則に残る	ST-01	
	14.6	浅黄褐色	端部は丸く終る			
118	紡錘 平 上辺 2.4 下辺 4.1	2.4	赤褐色		断面は7本の縦線(中に数本の赤線)、底面は6本の縦線の 断面を合わせて縦線 6本の凸状は上辺より高す	ST-01
		17.8+4.3	赤灰白色			
102	鬼瓦	2.5	赤褐色	ほぼ半穴状 立体感があるが仕上がりは悪い	表 目玉、鼻など盛り付け ナデ 底部はへら掻き 裏 板ナデ	ST-04
		17.8+4.3	赤灰白色			
104 110	瓦葺 筒 (大形) E-A-B	5.6	赤褐色	高台から内湾して体部は伸びる	外面 放射状の指押さえ 分割性のあるヘラミガキ 内面 ナデのあと環状ミガキと均等回りの溝状輪状のヘラミガキ	ST-01
		15.0	赤灰白色	端部で外反する 内面上位に化粧あり		

遺物観察表

調査年度	遺物	数量	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺物名
104	瓦器 輪 (大和) II-A-B	630	5.4	赤褐色	底部より口縁の方が厚みをもつ	外面 指押さえ 分割性のあるヘラミガキ	ST-01
		14.8	赤灰白色	口縁端にも厚みがあり丸い 沈線は下位にある	内面 やや密な濃緑ミガキと複雑な連続輪状のヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) II-B	631	5.5	赤褐色	僅くしっかりしたつくりである 沈線あり	外面 分割性のあるヘラミガキ 高台は粘り付け ナデ	ST-01
		14.2	赤灰白色	に高さはないが丁寧なつくり	内面 隙間のある濃緑ミガキと簡単な円状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) II-A	632	6.3	赤褐色	大きさが高さのない高台から内湾する体部が狭く	外面 分割性のあるヘラミガキ	ST-01
		15.5	赤灰白色	口縁内湾上位に沈線が1条出る 端部は丸く終る	内面 密な濃緑ミガキと時計回りの連続輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (柳葉) II-1-E	633	5.7	赤褐色	底部より厚みのある口縁部に沈線は細められず 高台	外面 体部2/3まで3分割ヘラミガキ	ST-01
		15.2	赤灰白色	に高さはないが丁寧なつくり	内面 ナデ、口のナデ 密な濃緑と太い連続輪状のヘラミガキ		
	瓦器 輪 (柳葉) II-1-F	634	5.9	赤褐色	深く凹線は深い 沈線がやや下方に落ち	外面 分割性のあるミガキ 高台は粘り付けナデ形成	ST-01
		15.0	赤灰白色	深く凹線は深い 沈線がやや下方に落ち	内面 密な濃緑ミガキと丁寧な連続輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) II-B	635	5.4	赤褐色	大ぶりでは密な厚みがある 沈線有り	外面 指押さえ 粗い3分割ヘラミガキ	ST-01
		15.5	赤灰白色	大ぶりでは密な厚みがある 沈線有り	内面 隙間の少しある濃緑ミガキ 太い連続輪状ヘラミガキ		
110	瓦器 輪 (大和) II-B	636	5.1	赤褐色	断面台形の高台と底部との高さは等しい	外面 分割性のあるヘラミガキ	ST-01
		11.8	赤灰白色	口縁部でやや外反し端部に丸い 沈線が1条出る	内面 密な濃緑ミガキと太い時計回りの連続輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (柳葉) II-2	637	5.4	赤褐色	大ぶり 凹線に厚みがある 高台はしっかりとしたつ	外面 指押さえ 分割性のあるヘラミガキ	ST-01
		16.0	赤灰白色	くり 口縁部に1条の沈線出る	内面 やや密な濃緑ミガキと太い連続輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) II-A	638	5.3	赤褐色	広い高台と外反する口縁部をもつ	外面 指押さえと3分割ヘラミガキ	ST-01
		15.0	赤灰白色	口縁端部は丸く納められ沈線は上位に落ち	内面 粗く密な濃緑ミガキと太い時計回りのヘラミガキ		
	瓦器 輪 (柳葉) II-1	639	5.5	赤褐色	丁寧なつくりの高台と口縁部にむかって厚みをもつ体	外面 体部3/4まで分割ヘラミガキ	ST-01
		15.4	赤灰白色	部 口縁端部は丸く沈線はやや下方に位置する	内面 密な濃緑ミガキと太い連続輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) II-A(古)	640	4.9	赤褐色	口縁部は外上方に向かって開く 外面に重むねの痕が	外面 粗い3分割のヘラミガキ 体部に指押さえ	ST-01
		15.0	赤灰白色	みられる 口縁部沈線出る	内面 やや隙間のある濃緑ミガキと単純な輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) I-C	641	6.1	赤褐色	広く高い高台から均等な厚みをもつ体部が口縁まで内	外面 体部2/3まで密なヘラミガキ	ST-01
		15.2	赤灰白色	湾して続く 内面には浅い沈線有り	内面 密な濃緑ミガキとワザワザのヘラミガキが巻きに重なる		
瓦器 輪 (大和) II-A(古)	642	4.6	赤褐色	広い高台に対して、器高はない 均等な厚みで口縁ま	外面 体部一底部まで粗いミガキ 丁寧な高台は粘り付け	ST-01	
	15.2	赤灰白色	で通し、端部はわずかに外反し内側に沈線が出る	内面 隙間の少しある濃緑ミガキと簡単な連続輪状ヘラミガキ			
瓦器 輪 (大和) II-B	643	5.7	赤褐色	高さはないが扁平な高台 底部より口縁部の方が厚みをもつ	外面 高台一底部へ放射状に指押さえ 4分割ヘラミガキ	ST-01	
	15.2	赤灰白色	縁端部はわずかに外反し丸く納められる 沈線が1条出る	内面 ナデナデ 密な濃緑と太い時計回りの連続輪状ヘラミガキ			
111	瓦器 輪 (柳葉) II-2	644	5.5	赤褐色	浅い沈線を有する口縁は丸みをもつ	外面 体部2/3以上に4分割のヘラミガキ	ST-01
		16.0	赤灰白色	高台は割落している	内面 隙間のある濃緑ミガキ 放射状の粗いヘラミガキが巻きに落ちる		
	瓦器 輪 (柳葉) II-2-B	645	5.4	赤褐色	口縁部の器壁がやや厚い	外面 分割性のあるヘラミガキ 断面正三角形の粘り付け高台	ST-01
		15.2	赤褐色	沈線出る	内面 密な濃緑ミガキと太目の連続輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (柳葉) II-2-B	646	5.0	赤褐色	「ハ」の字に開く高台のつくりは丁寧である 体部は	外面 体部1/2に分割性のあるヘラミガキ	ST-01
		15.2	赤褐色	ゆるやかに外上方に開く 沈線は2条残存	内面 密な濃緑ミガキ 器底に時計回りの連続輪状ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) III-C	647	3.1	赤褐色	形骸化した高台は底部に等しい高さになる	外面 粗いミガキがわずかに残る	ST-01
		12.3	赤褐色	ゆるやかに外上方につづく体部と丸みのある口縁部	内面 内面から見込に付く0.5mm幅の太い濃緑ヘラミガキ		
	瓦器 輪 (大和) III-C	648	3.1	赤褐色	扁平で小ぶり 口縁部浅い沈線が出る	外面 体部にヘラミガキがわずかに残る	ST-01
		12.6	赤褐色	扁平で小ぶり 口縁部浅い沈線が出る	内面 隙間の大きい濃緑ミガキ		
	瓦器 輪 (大和) III-C	649	3.4	赤褐色	小さくていびつな形 器壁が薄い 外反する端部上方	外面 口縁部に強い粘りナデ	ST-01
		12.4	赤灰白色	に0.2mm幅の沈線出る	内面 粗い濃緑ミガキ		

遺物観察表

図号	品名	数量	材質	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
111	瓦器 碗 (大和) Ⅱ-B	3.6	赤褐色	扁平な高さのない器形は高台高と底部がほぼ等しい	外面	重ね焼きの痕が残る	ST-01
		13.1	赤灰白色	口縁はわずかに外反し沈線が1条出る	内面	ナデの上に口縁部~底部に時計回りの彫いヘラミガキ	
	瓦器 碗 (大和) Ⅲ-C	3.6	赤褐色	底部から口縁まで器壁厚は均等である	外面	指押さえ わずかなヘラミガキ	ST-01
		12.0	赤灰白色	口縁部上方に沈線有り	内面	磨練ミガキと簡単な輪状のヘラミガキ	
	瓦器 碗 (大和) Ⅲ-C	3.6	赤褐色	口縁部は外上方に向かって開く 底部は上向きで沈線	外面	口縁部ナデ 体部に指押さえと数本のヘラミガキ	ST-01
		12.4	赤灰白色	らしきものあり 形骸化した高台	内面	隙間の大きい磨練ミガキと簡単な輪状のヘラミガキ	
	瓦器 碗 (大和) Ⅲ-C	3.5	赤褐色 黄灰色	扁平な器形 口縁部は外上方に向かってゆるやかに開く	外面	口縁部ナデ 体部に指押さえ	ST-01
		13.6	赤灰白色	高台は残らず	内面	磨練ミガキと連続輪状ヘラミガキ	
	瓦器 碗 (大和) Ⅲ-C	4.3	赤褐色 ~灰白色	形骸化した高台 沈線あり 内面に傷	外面	口縁部はココナデ おわずかにヘラミガキが残る	ST-01
		12.8	赤灰白色		内面	隙間の開いた磨練ミガキと簡単な輪状ヘラミガキ	
	瓦器 碗 (大和) Ⅲ-A	1.4	赤褐色	底部のみ残存 大きな高台で整っている	外面	調整不明	ST-01
6.0		赤灰白色		内面	見込みにジグザグのヘラミガキが格子に重なる		
瓦器 碗 (大和) Ⅲ-2	1.9	赤褐色	新玉三向形の張り付け高台で高さはあるが作りは雑	外面	調整不明	ST-01	
	5.4	赤灰白色		内面	見込みにジグザグのヘラミガキが斜めに残る		
瓦器 碗 (大和) Ⅲ-B	2.9	赤褐色	器壁は均等な厚み	外面	わずかにヘラミガキが残る	ST-01	
	4.3	赤灰白色		内面	丁寧な連続輪状のヘラミガキ		
瓦器 碗 (大和) Ⅲ-B	3.5	赤褐色	口縁部欠損 ゆるやかに丸い体部 「ハ」の字に開く	外面	ヘラミガキがわずかに残る	ST-01	
	5.0	灰白色	高台を有する	内面	大きな連続輪状のヘラミガキ		
瓦器 碗 (大和) Ⅲ-B	4.2	赤褐色	体部から口縁部に向かって外上方に開き口縁部で外反する	外面	口縁部は横ナデによる磨練	ST-01	
	13.4	灰白色		内面	隙間の少しある磨練ミガキ		
須恵製 碗 Ⅲ-A	4.9	赤褐色	口縁部は外傾する端部を有す 端部は上方に押される	外面	口縁部は強いナデ 体部にわずかな格子タタキ	ST-01	
	19.5	灰白色		内面	体部板ナデ		
須恵製 碗 Ⅲ-A	6.6	赤褐色 ~灰白色 黄褐色	口縁部は上外方に伸び端部はつまみ上げ肥厚外端部は断面直平面を成す	外面	体部に自然焼が残る	ST-01	
	38.4			内面			
103	瓦器 皿	2.2	赤褐色	底部中央がわずかに高い底部から口縁部は外反し端部	外面	底部に指押さえが顕著 唇部部に接線	ST-01
		9.7	灰白色	は上向き面をもつ	内面	見込みに密なジグザグのヘラミガキと口縁部に磨練ミガキ	
瓦器 皿	1.8	赤褐色	平底から磨練したのも短かく開く	外面	口縁部は横ナデ	ST-01	
	9.1	赤灰白色	口縁部は内傾で角ばる	内面	隙間の開いたジグザグのヘラミガキ		
瓦器 皿	1.9	赤褐色 ~灰白色	丸底から立ち上がりは角をもつ	外面	口縁部は強い横ナデ 唇部部に接線	ST-01	
	9.6	赤褐色		内面	見込みに密なジグザグと周辺は5~6本の磨練ミガキ		
瓦器 皿	1.8	赤褐色	平底から磨練して立ち上がりわずかに外反する口縁部	外面	口縁部に強いココナデ 底部に指押さえ	ST-01	
	9.8	赤灰白色	を有する	内面	ナデの上に0.2mm幅のジグザグのヘラミガキ		
112	瓦器 皿	2.0	赤褐色	ていぶいなつくり	外面	底部に指押さえ 唇部部に接線	ST-01
		9.4	赤灰白色	丸みのある底部から外反して立ち上がる	内面	幅のあるジグザグのヘラミガキ	
白磁 碗 Ⅴ類	5.1	赤褐色	口縁は玉縁状	外面	口縁部1~2mm下位まで磨練	ST-01	
	15.0	灰白色		内面			
七輪 器 Ⅵ類	3.2	赤褐色	口縁部よりゆるやかに「く」の字に開き端部は外傾する	外面	全体に厚付層のたため調整不明	ST-01	
	11.4	灰黄色		内面	ナデ		
瓦器 釜 Ⅶ類 山城F Ⅶ類	3.7	赤褐色	底体部欠損 口縁部は内傾しながら端部は平煎面を有	外面	磨練り付け ナデ 口縁部ココナデ	ST-01	
	3.4	赤灰白色	する 磨は水平方向に伸びる	内面	板ナデ		

遺物観察表

調査年度	遺物種別	品名	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
103	瓦葺器	瓦葺器	1.8	赤褐色	平底から口縁部は上方に伸び端部は角ばる	外面 口縁部はコナナ	ST-01
			9.6	赤灰白色		内面 ナデの上にジグザグのヘラミガキ	
	671	瓦葺器	1.5	赤褐色	平底から屈曲し口縁部で外反する	外面 口縁部はコナナ 屈曲部に線線	ST-01
9.0	赤灰白色	鈍なつくり	内面 見込みにジグザグのヘラミガキが格子に重なる				
103	瓦葺器	瓦葺器	1.7	赤褐色	底部から直立して口縁部で外反する	外面 口縁部強いナデ 屈曲部に線線	ST-01
			9.6			内面 強いジグザグのヘラミガキ	
	673	瓦葺器	2.0	赤褐色	大ぶくれで割壊した部分が多い	外面 口縁部はコナナ	ST-01
9.0	赤灰白色	口縁部外反	内面 見込みに太いヘラミガキが不規則に残る				
106	土師器	土師器	3.6	赤褐色	胴部は内側して立ちあがる 少しびれたのち外上方	外面 ナデ 杯底部押さえ ナデ	ST-01
			9.6	灰白色	へ伸び端部は厚みをもって丸く終る	内面 ナデ	
	674	土師器	4.1	赤褐色	胴部は外下方に突き端部は丸く終る	外面 杯底部中央より穿孔が1ヶ所	ST-01
6.6	赤褐色		内面				
112	土師器	土師器	4.4	赤褐色	胴部はゆるやかな両面をみせ端部はわずかに角ばる	外面 ナデ	ST-01
			9.2	灰白色		内面 ナデ	
	676	土師器	4.7	赤褐色	器種は不明 基部から胴部に以下外方に向かってまっす	外面 高台部分に連続する指押さえ	ST-01
9.4	赤褐色	ぐ伸び端部は丸く終る	内面 指押さえ				
100	土師器	土師器	1.0	赤褐色	平底から「ハ」の字に似かく屈曲した異形の皿	外面 底部に指押さえ ナデ	ST-01
			8.2	灰白色	端部は丸く見込みは平らである	内面 口縁部内側に折り返しナデ	
105	土師器	土師器	11.3	赤褐色	体部は底部からほぼ直立する	外面 ナデ及び胴ナデ(幅は11.3cm位)	ST-01
			11.4	灰白色	粘土色の板が残る	内面 体部ナデ 板は強い指ナデ	
105	磁石	磁石	4.5	赤褐色	使用面は凹状になっている		ST-01
			3.0	灰白色			
105	磁石	磁石	4.0	赤褐色	凹面に使用痕残る 108と同じ石		ST-01
			3.8	灰白色			
106	瓦葺器	瓦葺器	7.0	赤褐色	端部は内傾する平坦面を有する	外面 縦方向のヘラミガキ	ST-01
			49.3	赤褐色		内面 丁寧なヘラミガキ	
107	瓦葺器	瓦葺器	5.2	赤褐色	大きい器種は高台を欠損する 底部よりは口縁の方が	外面 指押さえ 分割性のあるヘラミガキ	ST-01
			15.8	赤褐色	厚みをもつ 口縁端部は丸く内面に浅い沈線が走る	内面 ナデのとびとびのミガキ 見込みに折返し線線とヘラミガキ	
107	瓦葺器	瓦葺器	3.8	赤褐色	小ぶりで口縁へ厚みを増す 高台より底部の方が低い	外面 高台貼りつけナデとわずかなミガキ	ST-01
			12.4	赤褐色	裏にある 白線は外反し沈線は上端部に位置する	内面 高台部へ通線ミガキ 見込みに折返し線線とヘラミガキ	
100	土師器	土師器	9.5	赤褐色	口縁端部は内傾する断面を有する 胴は上方にそる	外面 胴下に指押さえ 厚紙のため調整不明	ST-01
			25.2	赤褐色		内面 ナデ 調整不明	
100	土師器	土師器	4.2	赤褐色	胴部より「く」の字に突き端部は内側に折り返し、体	外面 ナデ	ST-01
			26.4	赤褐色	胴部に裏りがない	内面 ナデ	
107	瓦葺器	瓦葺器	1.5	赤褐色	底部欠損 口縁部で逆「ハ」の字に屈曲し口縁端部は	外面 口縁部コナナ 底部に指押さえ	ST-01
			11.6	灰白色	少し角ばる	内面 口縁部数本の屈曲ミガキ 見込みにジグザグのヘラミガキ	
106	土師器	土師器	6.8	赤褐色	口縁部で断面に立ち上がりその後外反 口縁端部は上	外面 体部はタケキ	ST-01
			18.8	赤褐色	方につまみあげ	内面 体部、胴部は板ナデ	
109	瓦葺器	瓦葺器	4.3	赤褐色	均等な厚みが底部から口縁まで続き口縁部はわずかに	外面 高台は丁寧な貼り付けナデ 口縁部にヘラミガキ	ST-01
			13.8	赤灰白色	外反し内面上部に浅い沈線が1条走る	内面 円形から底部へ膨張のあるヘラミガキ	

遺物観察表

調査年度	遺物	器種	数量(a)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺物名			
100	瓦部 椀 (大和) Ⅱ D	3.1 12.0	赤褐色	ゆるやかに底面から口縁へ続く器形は小さい	ほとんど 底面さのない高台 口縁上端部に沈線が走る	外面	凹凸の激しい底部、口縁部にわずかにヘラミガキ	ST-02		
			赤灰白色	平底から屈曲し逆「ハ」の字に広がる		内面	内面から底部へ離隔の大きい凹線ミガキ	ST-02		
100	土師器 中皿	2.0 15.6	赤褐色 赤褐色	平底から屈曲し逆「ハ」の字に広がる	端部はわずかに 角ばる	底部部にナダ		ST-03		
			1.5 9.5	赤褐色 赤褐色		平底から外上方へ広く伸びる	口縁部はいびつである		ナダ	口縁部ココナデ
			2.0 10.4	赤褐色 赤灰白色		外反から外上方へ開き口縁部は外反する	端部は丸く		口縁部ココナデ	底部に指押さえ
107	土師器 中皿	2.4 14.2	赤褐色 赤褐色	端部は丸く終る	口縁部に強いナダ			ST-04		
			3.5 12.2	赤褐色 灰白色	高台を有し内河して伸びる底部に厚みをもつ	口縁は	外面		口縁部にヘラミガキ	
107	瓦部 椀 (大和) Ⅱ-B-C	2.5 11.5	赤褐色 赤褐色	外反したのち直行する	沈線有り	外面	やや密な凹線ミガキ	見込みのヘラミガキは形状不明		
			1.8 9.2	赤褐色 灰白色		口縁部に底面に伸びる地上部にナダによる強い溝が走る	外面		ココナデ	
107	赤褐色 器 (大和) Ⅱ-A	6.7 14.4	赤褐色 灰白色	頸部から逆「ハ」の字に開き口縁端部で上方につきま	あげる	外面	肩部に幾許タタキ	口縁部は上方につきまみあげ		
			2.4 7.8	赤褐色 赤灰黄色		底面中央が高い底面から内角隅部に外上方に伸び口縁	内面		ナダ	
113	土師器 中皿	1.8 9.2	赤褐色 灰白色	底面から外上方へ伸びる器形	口縁部に厚みをもち端 部は外反し丸く終る	ナダ		ST-04		
			2.0 12.8	赤褐色 灰白～ 赤黄褐色		平底からゆるやかに外上方へ伸びる口縁を有する	口縁部ココナデ		底部に指押さえ	
107	瓦部 椀 (大和) Ⅱ-B	3.8 11.5	赤褐色 赤灰白色	形骸化した高台と底部はほぼ垂直い位置にある	調整は均 整な厚さを有し口縁部で内面に沈線が走る	外面	調整は均整な厚さを有し口縁部で内面に沈線が走る	ST-04		
			1.3 8.8	赤褐色 赤褐色		器形に厚みがあり平底から屈曲して外上方に伸び端部	ナダ		口縁部ココナデ	底部に指押さえ
107	土師器 中皿	2.0 12.8	赤褐色 灰白～ 赤黄褐色	平底から屈曲して外上方に伸びる器形と底面なつくり	角ばった端部を有する	口縁部ココナデ		ST-05		
			1.2 8.4	赤褐色 赤褐色		平底から屈曲したのち広く外上方へ伸びる口縁を有す	口縁部ココナデ		強いナダによる沈線	
107	土師器 中皿	1.5 8.6	赤褐色 赤褐色	完形 平底から屈曲して外上方に伸びる	底部に厚み をもちしっかりしたつくり 粗線あり	口縁部ココナデ		ST-05		
			1.7 9.2	赤褐色 赤褐色		完形 端部が斜めに残る	平底からなだらかに口縁		ココナデ	指押さえ
107	瓦部 椀 (大和) Ⅱ-C	3.8 13.0	赤褐色 赤褐色	形骸化した高台と底部はほぼ垂直い位置にある	調整は均 整な厚さを有し口縁部で内面に沈線が走る	外面	調整は均整な厚さを有し口縁部で内面に沈線が走る	ST-05		
			4.0 12.6	赤褐色 赤褐色		高台より底面が低い	均等な厚みで口縁部まで続く		外面	調整は均整な厚さを有し口縁部で内面に沈線が走る
114	瓦部 釜 (大和) Ⅱ-A	4.1 21.6	赤褐色 灰白色	口縁部はわずかに内傾し平地面を有し高台に伸びる	調整は均 整な厚さを有し口縁部で内面に沈線が走る	外面	調整は均整な厚さを有し口縁部で内面に沈線が走る	SK-01		
			2.0 10.4	赤褐色 赤灰白色		外反から外上方へ開き口縁部は外反する	端部は丸く		内面	板ナダの厚み

遺物観察表

種別	器名	器種	数量(n)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
100	土師器Ⅲ	土師器Ⅲ	2.3	赤褐色	口縁部の形状いびつ 口縁内面に深いナゲによる凹線	外面 粘土類の概 ナゲによる後縁 口縁部ココナゲ 底部はナゲを指押さへ 口縁部ココナゲ	SR-03
			14.8	赤灰色 赤灰白色	口縁部内面		
			1.3	赤褐色 赤褐色 赤灰白色	平底と厚化したのもち厚く口縁を有する 端部はやや角ばる		
109	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-B-C	瓦器Ⅲ	1.8	赤褐色	丸みをおびた底部からゆるやかに口縁へ続く 端部は	外面 口縁部ココナゲ 底部に指押さへ 内面 見込みに不規則なジグザグのヘラミガキが筋子に重なる	SR-02
			9.4	灰白色	わずかに水平方向に伸び丸く終る		
			6.4	赤褐色	丸みをおびた底部からゆるやかに口縁へ続く 端部は		
114	土師器Ⅲ (東播磨)	土師器Ⅲ	28.8	赤褐色	口縁部は外に肥厚し凹面を有する	外面 口縁部強いナゲ 内面 ココナゲ	SR-02
			3.9	赤褐色	扁平で小ぶり 口縁部は垂直に伸び浅縁が直る		
			12.8	赤褐色	扁平で小ぶり 口縁部は垂直に伸び浅縁が直る		
114	土師器Ⅲ	土師器Ⅲ	0.9	灰褐色 黄褐色 赤灰白色	平底から屈曲し短かく開く口縁部端部は丸く終る	外面 連続する指押さへ わずかなヘラミガキ 内面 隙間の大きい隠縁ミガキ ナゲ 底部屈曲部に後縁	SR-03
			7.6	赤褐色	体部から口縁にかけて外上方に伸びる		
			1.4	赤褐色 灰白色	体部から口縁にかけて外上方に伸びる		
			2.7	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部で内反する		
			13.0	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部で内反する		
			1.7	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部は厚みをもち丸く終る		
			13.0	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部は厚みをもち丸く終る		
			1.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部は厚みをもち丸く終る		
			8.5	赤褐色 赤褐色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部は厚みをもち丸く終る		
			1.8	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部は厚みをもち丸く終る		
			9.2	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁部は厚みをもち丸く終る		
			7.3	赤褐色	両面使用		
5.2	赤褐色	両面使用					
2.0	赤褐色	両面使用					
109	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-A(形)	瓦器Ⅲ	2.2	赤褐色 灰白色	浅いが大ぶり 器壁は薄い 環部は上方につまみあげ	外面 体部に指押さへ 分割のみられる粗いヘラミガキ 内面 やや凸な隠縁ミガキと太く帯状の連続輪状ヘラミガキ	SR-04
			15.6	赤褐色	浅いが大ぶり 器壁は薄い 環部は上方につまみあげ		
			4.2	赤褐色 赤褐色 赤褐色	やや浅く口縁部にかけてゆるやかな広がりを持って口縁部は厚みをもつ		
109	瓦器Ⅲ (播磨)Ⅲ-1-2	瓦器Ⅲ	4.3	赤褐色 赤褐色 赤褐色	やや浅く口縁部にかけてゆるやかな広がりを持って口縁部は厚みをもつ	外面 体部に指押さへ 分割のみられる粗いヘラミガキ 内面 やや凸な隠縁ミガキと太く帯状の連続輪状ヘラミガキ	SR-04
			14.3	赤褐色	縁部は厚みをもつ		
			14.3	赤褐色	縁部は厚みをもつ		
109	瓦器Ⅲ (播磨)Ⅲ-1-2	瓦器Ⅲ	3.0	赤褐色 灰白色	体部2/3位から上方に立ち上がる 浅縁あり	外面 1本のヘラミガキが口縁に残る 内面 やや凸な隠縁ミガキ 1本の輪状ヘラミガキ	SR-04
			8.0	赤褐色	体部2/3位から上方に立ち上がる 浅縁あり		
			8.0	灰白色	体部2/3位から上方に立ち上がる 浅縁あり		
109	瓦器Ⅲ (播磨)Ⅲ-1-2	瓦器Ⅲ	6.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	深く大ぶり器壁が厚く重たい 丸みのある器形	外面 器底3分割ミガキ 高台に貼り付け ナゲ 断面台形 内面 断面な隠縁ミガキと見込みにジグザグのヘラミガキ	SR-05
			15.1	赤褐色	深く大ぶり器壁が厚く重たい 丸みのある器形		
			15.1	赤褐色	深く大ぶり器壁が厚く重たい 丸みのある器形		
109	瓦器Ⅲ (大和)Ⅲ-1-2	瓦器Ⅲ	3.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色	深く大ぶり 環部上方に明確な沈線を施す	外面 3分割ミガキ 内面 器底な隠縁ミガキと連続的なジグザグのヘラミガキ	SR-08
			13.0	赤褐色	深く大ぶり 環部上方に明確な沈線を施す		
			13.0	赤褐色	深く大ぶり 環部上方に明確な沈線を施す		
109	瓦器Ⅲ (播磨)Ⅲ-1-2	瓦器Ⅲ	5.9	赤褐色 赤褐色 赤褐色	深く口縁部に厚みをもつ	外面 1本のヘラミガキ 高台断面台形 内面 断面な隠縁ミガキとジグザグのヘラミガキ	SR-06
			15.6	赤褐色	深く口縁部に厚みをもつ		
			15.6	赤褐色	深く口縁部に厚みをもつ		
109	土師器Ⅲ	土師器Ⅲ	1.4	赤褐色 灰白色	緩やかに開いた口縁部 端部は上方につまみあげ	外面 ココナゲナゲ 指押さへ 内面 「て」の字状口縁	SR-08
			9.2	赤褐色	緩やかに開いた口縁部 端部は上方につまみあげ		
			9.2	灰白色	緩やかに開いた口縁部 端部は上方につまみあげ		
109	土師器Ⅲ	土師器Ⅲ	1.5	赤褐色 灰白色	底部から体部に粘土層合の痕が残る	外面 ココナゲナゲ	SR-08
			9.6	赤褐色	底部から体部に粘土層合の痕が残る		
			9.6	灰白色	底部から体部に粘土層合の痕が残る		

遺物観察表

国名	遺物	器種	高さ(m)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
100	115	730 土師器皿	1.7 9.3	赤褐色 灰白色	底部から口縁にかけてゆるやかな曲線で外上方に開く 口縁部でわずかに外反する	ヨコナデ+ナデ 体部に指押さえ	SE-08
		731 常滑焼罎	丸底5 29.8	赤褐色 赤に白濁した 赤に白濁した	口縁部のみ残存 粘土粒の痕あり 口縁端部は三角形 となりナゲによる凹線をもつ	外面 ナゲ 内面 指押さえ	SE-09
		732 常滑焼鉢	3.1 14.6	赤褐色 灰白色	平底から屈曲し外上方に開き口縁端部に流行する	外面 ヨコナデ+ナゲ 内面	SE-09
		733 土師器皿	1.9 10.4	赤褐色 灰白色	平底から屈曲し外上方へ開く 口縁端部は上方へ押さ れる	ヨコナデ+ナゲ	SE-09
		734 土師器皿	1.6 8.2	赤褐色 灰白色	底部中央が高くなりゆるやかに口縁部伸びる 口縁端 部は厚みがあり上方へ押される	調整不明	SE-09
		735 正 器 埴 (大和) 第一A(美)	3.9 13.8	赤褐色 灰白色	扁平で体部から口縁にかけてゆるやかに外上方に開く 端部沈線あり	外面 口縁部にわずかにミガキ 指押さえ 内面 縁間のあるための凹線ミガキ	SE-09
		736 土師器皿	1.4 8.4	赤褐色 灰白色	扁平でいびつ 端部は丸く脚部がやや厚め	ヨコナデ 体部に指押さえ	SE-10
		737 瓦葺足盆	丸底13.0 21.1	赤褐色 赤灰白色 赤灰白色	底部から1/3位から張り出し2/3位から内押する 内外蓋・脚部 に長行蓋 脚部は丸い 三脚は三方に張り付けたれていた	外面 底部近くに指押さえ 内面 口縁部に赤ナゲ	SE-10
		738 土 師 器 足付土鍋	丸底10.9 24.9	赤褐色 赤灰白色 赤灰白色	体部は半球形で内押する口縁部に内縮する溝をもつ 蓋面で 「く」の字に重なる 三脚は三方に張り付けたれていた	外面 脚部つけ處に指押さえ 体部は斜めのハケメ 内面 口縁部ヨコナデ 体脚部は斜めのハケメが切りあう	SE-10
		739 瓦 葺 埴 (大和) 第一A(古)	4.3 14.2	赤褐色 赤灰白色	扁平で浅い 端部に沈線あり	外面 体部1/2にヘラミガキ 指押さえ敷面 内面 縁間のある凹線ミガキ 見込みのヘラミガキは形状不明	SE-10
740 瓦 葺 埴 (大和) 第二I-1	5.2 14.6	赤褐色 赤黒褐色	厚い縁部 端部に浅い沈線あり 高台は高さもあり形 も整っている	外面 体部2/3にヘラミガキ 張り付けた断面台形の高台 内面 敷面ミガキ 見込みはナゲがヘラミガキが着いた	SE-10		
741 白 磁 碗 第一-2類	7.3 15.1	赤色 灰白色	体部唇部は薄い 口縁部は玉縁状	外面 口縁より2/3の位置まで施釉 内面 見込み部分に施を有する	SE-10		
742 土師器罎	丸底4.8 15.8	赤褐色 赤灰白色 赤灰白色	体部から口縁にかけて内湾し「く」の字に開く 端部 は丸い	外面 連続する指押さえ 口縁部に強いナゲ 内面	SE-11		
743 土師器罎	丸底4.3 16.4	赤褐色 赤灰白色 赤灰白色	側部は「く」の字に屈曲する 口縁端部は赤に肥厚する	外面 ヨコナデ 指押さえ 内面 ナゲ	SE-11		
744 土師器罎	丸底3.1 20.6	赤褐色 灰 色	口縁部は外反 端部は上向きに面を成し中央わずかに 凹状を呈する	外面 ヨコナデ ナゲ 内面	SE-11		
745 土師器罎	丸底4.8 15.4	赤褐色 赤黒褐色 赤灰褐色	口縁部と体部の境から唇部が薄い 側部から「く」の 字に開き端部は丸める	外面 調整不明 内面	SE-11		
746 常滑焼下皿	丸底4.6 15.9	赤褐色 灰 色	中央の高い部分は体部の腹壁に比べてかなり薄い	外面 強いナゲ 内面 ナゲ	SE-11		
747 常滑焼下皿	丸底4.3 15.1	赤褐色 赤一灰色 赤灰白色	底部は平らで厚く体部外上方に伸びる 高台はやや斜めに開き高めである 断面台形	外面 全体に高輪 内面 ナゲ	SE-11		
748 常滑焼下皿	丸底4.8 15.5	赤褐色 赤灰白色	底部は平らで「ハ」の字型の高台 高台端部は水平な 平面を成す	外面 回転ナゲ 内面 回転ナゲ	SE-11		
749 赤土土師器 内石土師器	5.1 15.2	赤褐色 赤褐色	かなりいびつ 底部は浅い 熱を受けた痕あり 高台 より底部が低い位置にある	外面 指押さえ 内面 厚削して調整不明 通し	SE-11		

遺物観察表

編年	遺物	器種	寸法(φ)	色調	形態・特徴	調査・手次	遺跡名
110		750 土師器皿	1.6 10.2	赤褐色 灰白色	器壁薄く底部は上につまみ上げ丸く終る	内外とも口縁部ヨコナデ	SE-11
		751 土師器中皿	2.0 13.4	赤褐色 灰白色	器壁薄い 上向きに面を成す	内外とも口縁部ヨコナデ	SE-11
		752 土師器杯	40.9 器径6.4	赤褐色 赤褐色	高台実直に指押えの痕が残る 西台外側面に墨書 「廣正？」と書かれている	外面 黒いつけ ナデの高台 内面 ナデ	SE-11
		753 瓦器 椀 (大和) Ⅱ-1	5.5 15.0	赤褐色 赤褐色	底部から体部へゆるやかに開き口縁部は直立し端部で 外反する 端部に太い沈線が施される	外面 細いヘラミガキと指押え 断面正三角形の陥り付高台 内面 密な縞線ミガキ 太い同様の連続輪状ヘラミガキ	SE-12
110	116	754 瓦器 椀 (大和) Ⅱ-A(新)	4.9 14.6	赤褐色 赤褐色	器壁が厚くしっかりした作り 太めの沈線あり	外面 3分割の細いヘラミガキ 内面 やや密な縞線ミガキと太い断面正輪状ヘラミガキ	SE 12
		755 土師器小杯	6.4	赤褐色 赤褐色	杯の部分は器小柄 裏面は内湾して外下方へ下りたのち 1/3位より外反気味に下り端部は太い いびつな器形	外面 杯底部に多数の指押え 底部に微いヨコナデ 内面 縞線に指押え	SE-12
115		756 土師器皿	1.4 9.0	赤褐色 赤褐色	平底から屈曲し外上方へ伸びたのも外反して端部はや や角ばる	内外ともヨコナデ	SE-12
		757 瓦器 皿	1.8 9.6	赤褐色 灰 色	平底から屈曲し外上方へ伸びたのも外反して端部はや や角ばる	外面 口縁部にナデによる縞線 内面 延込みにジグザグのヘラミガキ	SE-12
108		758 土師器中皿	2.6 15.7	赤褐色 赤褐色	平底から屈曲し水平に近い口縁部は水平方向へ 伸びる 端部ははねあがり	ナデ 指押え 1部縁付直	SE 13
		759 土師器中皿	2.2 12.6	赤褐色 赤褐色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁部でわずかに内 湾する	口縁部ヨコナデ 指押え	SE-16
111		760 土師器皿	1.6 8.1	赤褐色 灰白色	全体にいびつ 底部から屈曲し立ち上がる 端部は上 方に押される	ヨコナデ+ナデ 底部指押え	SE-16
		761 土師器皿	1.6 8.8	赤褐色 灰白色	いびつな平底から内湾気味に立ち上がる口縁部はは ずかに角ばる	口縁部ヨコナデ ナデによる縞線	SE-16
		762 土師器皿	1.4 8.4	赤褐色 灰白色	底部からゆるやかに外上方に開く	ヨコナデ+ナデ ナデによる縞線	SE-16
		763 土師器皿	1.4 8.9	赤褐色 赤褐色	平底から屈曲して短く上方に伸びる口縁を有する 端部は内湾気味でやや角ばる	ナデによる異い縞線	SE-16
117		764 土師器皿	1.7 8.4	赤褐色 灰白色	底部から緩やかに外上方に開き端部に丸く終る	ヨコナデ ナデによる縞線	SE 16
		765 土師器皿	1.5 8.3	赤褐色 灰白色	丸底から屈曲して外上方へ開く 口縁端部はややつま みあげ 完形	口縁部ヨコナデ 底部指押え	SE-16
111		766 土師器皿	1.4 8.2	赤褐色 灰白色	底部からゆるやかな曲線で外上方に開く 端部は上方 に押される	ヨコナデ+ナデ	SE-16
		767 土師器皿	1.2 8.6	赤褐色 灰白色	底部からゆるやかに外上方に開く 底部は薄く体部か ら口縁にかけて厚みをもつ	口縁部ヨコナデ	SE-16
		768 瓦器 椀 (大和) Ⅱ-B-C	3.8 12.5	赤褐色 赤褐色	扁平でいびつ 端部に沈線が上向きに施される 底面 が高台より低い	外面 体部1/2まで3分割ミガキ 内面 杯底の間に密な縞線ミガキと密な連続輪状ヘラミガキ	SE-16
111		769 瓦器 椀 (福楽) 1-2-3	6.1 15.0	赤褐色 灰 色	しっかりした作りで器壁も厚い 底部からゆるやかに 外上方に開き口縁へ直行 端部に沈線になし	外面 体部に連続する指押え 内面 密な縞線ミガキ 連続的なジグザグのヘラミガキ	SE-17

遺物観察表

国名	種別	部類	数量(個)	色調	形 態・特 徴	観 望・手 法	記録名	
111	瓦 器 類	西側灰藍色 内面赤色	西側7.1	西側灰藍色 内面赤色	体部から口縁にかけて内側気味に伸び端部下20位の所で 所から直立する 端はやや水平 下に縁が付着	外面	わずかに曲押さえ 縁は貼り付けナゲ	SR-16
			内面15.4			内面		
	瓦 器 類	赤褐色 灰白色 赤褐色	赤褐色26.1	赤褐色 灰白色 赤褐色	体部から口縁にかけて内側に「く」の字に開く 口縁は端部で直 平に外へ 縁は少し7字形気味 端部ナゲによる凹縁	外面	口縁部ヨコナゲ 縁は貼り付け ナゲ ヨコナゲ	SE-18
			内面27.0			内面		
瓦 器 類	灰白色	灰白色7.6	灰白色 灰白色	体部から口縁にかけて内側に「く」の字に開く 口縁は端部で直 平に外へ 縁は少し7字形気味 端部ナゲによる凹縁	外面	口縁部に多数の指押さえ 縁は貼り付けナゲ 直な形のハケメが切り合う	SE 16	
		内面15.4			内面			
瓦 器 類	赤褐色 灰白色	赤褐色5.4	赤褐色 灰白色	体部から口縁にかけて内側に「く」の字に開く 口縁は端部で直 平に外へ 縁は少し7字形気味 端部ナゲによる凹縁	外面	口縁部の縦 口縁部ヨコナゲ	SR-16	
		内面22.0			内面			
113	土師器類	赤褐色 灰白色	赤褐色1.6	赤褐色 灰白色	底面からゆるやかに外上方に開き端部は上方につまみ あげ	内外とも口縁部ヨコナゲ	端部につまみあげ 各面に指押さえ 「て」の字状口縁	SE-17
			内面9.2			内面		
	土師器類	赤褐色 灰白色	赤褐色1.8	赤褐色 灰白色	丸底からゆるやかに外上方に開き水平方向に外に伸び たのちつまみあげ 端部はやや角ばる	内外とも口縁部ヨコナゲ	口縁部につまみあげ 各面に指押さえ 「て」の字状口縁	SE-17
			内面9.3			内面		
土師器類	赤褐色 赤褐色	赤褐色1.3	赤褐色 赤褐色	全体にいびつ 底面からゆるやかに外上方に開く	内外とも口縁部ヨコナゲ		SE 17	
		内面8.8			内面			
113	土師器類	赤褐色 灰白色	赤褐色1.6	赤褐色 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開きわずかに水平方向に 伸びたのち端部は上方につまみあげ	内外とも口縁部ナゲ	新しいナゲによる縁縁 端部につまみあげ 「て」の字状口縁	SR-17
			内面9.1			内面		
	土師器類	赤褐色 赤褐色	赤褐色1.3	赤褐色 赤褐色	平底からゆるやかに外上方へ開き水平方向に伸び端部 は上方へつまみあげ	内外とも口縁部ヨコナゲ	強いナゲによる縁縁 端部につまみあげ 「て」の字状口縁	SE-17
			内面9.2			内面		
土師器類	赤褐色 灰白色	赤褐色1.7	赤褐色 灰白色	底面から口縁にかけてゆるやかに開き水平方向に伸び たのち端部は上方にわずかにつまみあげ	口縁外周に強いナゲによる凹縁をもつ	「て」の字状口縁	SE-17	
		内面8.8			内面			
土師器類	赤褐色 灰白色	赤褐色3.0	赤褐色 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁部でわずかに外 反して端部は厚みをもって丸く終る 完形	内外とも口縁部ヨコナゲ	底面に指押さえとナゲ	SR 17	
		内面13.8			内面			
112	瓦 器 類 (燧石)	赤褐色 赤褐色	赤褐色6.2	赤褐色 赤褐色	底面は厚く全体に深く入り ゆるやかに外上方に開く	外面	体部2面にいびつ3分割ミガキ 貼り付け高台 太く厚い縁部ミガキ 0.3mm幅の平行ミガキが見込みに見よ	SR-17
			内面15.2			内面		
113	瓦 器 類 (燧石)	赤褐色 赤褐色	赤褐色6.4	赤褐色 赤褐色	縁部厚く深い 底面から外上方に開く 口縁部はほぼ直線 に立ち上がる 底面は浅い 高台は台形	外面	口縁部から底面まで縦向き3分割ミガキ 貼り付け高台 底面は縁部ミガキと長橋形の輪状ヘラミガキ	SR-17
			内面14.6			内面		
	瓦 器 類 (燧石)	赤褐色 赤褐色	赤褐色5.7	赤褐色 赤褐色	体部から口縁にかけて外上方に開く 口縁部は直行 高台は台形でしっかりした作り 底縁は浅い	外面	体部2面に矢の字3分割ミガキ 赤い縁部ミガキ 簡単な連続輪状ヘラミガキ	SR-17
			内面14.6			内面		
113	瓦 器 類	赤褐色 赤褐色	赤褐色9.8	赤褐色 赤褐色	丸底で底縁は厚い 口縁部はゆるやかに外上方に伸び端部 は外反し丸く終る	外面	口縁部にミガキ	SE-17
			内面2.3			内面		
112	瓦 器 類 (燧石)	赤褐色 赤褐色	赤褐色6.1	赤褐色 赤褐色	いびつな形 縁部厚く深い 体部から口縁にかけて外上方に開く 口縁部はやや垂直気味に立ち上がる 底縁は浅い 高台は台形	外面	多数の指押さえ 体部2面に3分割のヘラミガキ 底面は縁部ミガキ ジグザグのヘラミガキが認め難く見える	SE-17
			内面14.6			内面		
114	瓦 器 類 (燧石)	赤褐色 灰白色	赤褐色2.0	赤褐色 灰白色	平底からゆるやかに外上方に開き中央に窪み 天井部に⑤の遺物	外面	回転ナゲ	SR 18
			内面16.6			内面		
114	瓦 器 類 (燧石)	赤褐色 灰白色	赤褐色4.3	赤褐色 灰白色	平底から口縁にかけて外上方に伸び端部はわ ずかに外反 高台は「ハ」の字 底面高台に⑤の遺物	外面	回転ナゲ	SR 18
			内面15.0			内面		
118	瓦 器 類 (燧石)	赤褐色 赤褐色	赤褐色48.8	赤褐色 赤褐色	底面から体部にかけて内側 口縁部は内側角はって いる 端部に浅い流線有り	外面	ヘラミガキ(1.8mm幅)にヘラミガキが嵌められる ナゲ	SR-18
			内面18.3			内面		
119	瓦 器 類	赤褐色 灰白色	赤褐色17.3	赤褐色 灰白色	丸底から外上方に伸びたのち体部はまっすぐ伸び口縁部は 直へ半に直線し外上方に伸び端部は上方に押される	外面	縁部上縁部ハケメ(1.5mm/1.2mm)の縁部高台(1.8mm/1.2mm)	SR-18
			内面21.4			内面		

遺物観察表

館名	種別	品名	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	記録名	
115	790	土師器	2.4	赤褐色	器壁薄く口縁でわずかに外反し輪部は尖る		ハケメがわずかに残る	SE-18
			21.0	灰白色				
	791	白磁 碗 N-1 類	6.5	赤褐色	口縁部は外へ肥厚する	外面	内外とも口縁部から体部に施粉	SE-20
			16.6	灰白色		内面	見込みに浅い沈線が施る	
	792	瓦 蓋 筒 (大和) I-C-D	5.9	赤褐色	体部から口縁にかけて外方に開く 口縁部はほぼ直線に伸びる	外面	縁部の開いた分節性のあるヘラミダキ	SE-20
			15.0	赤褐色	底でやや外反 沈線あり 高台は「ハ」の字に開く	内面	赤い沈線ミダキ 見込みに分節的なジグザグのヘラミダキが若干に施る	
	793	瓦 蓋 筒 (大和) I-D	5.9	赤褐色	直立した口縁部から端部は外反する 器壁は厚く外面	外面	体部2/3までの分節ミダキ	SR-20
			14.2	灰白色	は凹凸が激しい 沈線は上位に位置する	内面	赤い沈線ミダキ 縁部で曲線化したジグザグのヘラミダキ	
	794	瓦 蓋 筒 (大和) I-D	5.4	赤褐色	底面から端部へゆるやかに開く 沈線あり	外面	体部2/3までのヘラミダキ	SE-20
			14.6	灰白色		内面	赤い沈線ミダキ 細いジグザグのヘラミダキ	
	795	瓦 蓋 筒 (大和) E-A-B	5.8	赤褐色	底面から外上方にゆるやかに開き2/3位からやや直立	外面	内面から高台までまばらなヘラミダキ	SE-20
15.0			赤褐色	気味に開く 沈線あり	内面	赤い沈線ミダキ 連続輪状ヘラミダキ		
796	土師器	赤褐色	1.4	赤褐色	底面からゆるやかに外上方に開く		口縁部内外ともココナデ	SE-20
			8.4	赤褐色	端部は丸く終る			
797	土師器	赤褐色	2.0	赤褐色	丸底から外上方へ開く 底面から口縁まで厚みは均等		口縁部は内外ともココナデ	SE-20
			9.0	赤褐色	である 完形			
798	土師器	赤褐色	1.9	赤褐色	中央の高い底面から外上方へ開きやや角ばった厚い口		口縁部は内外ともココナデ	SE-20
			9.4	赤褐色	縁を有する 完形			
799	土師器	赤褐色	2.8	赤褐色	丸底からゆったりと外上方に開き口縁部は厚みをも		口縁部は内外ともココナデ 底面に指押さ	SE-20
			14.4	赤褐色	て丸く終る			
800	土師器	赤褐色	2.8	赤褐色	ややいびつ 平底からゆるやかに外上方に開き端部に		口縁部ココナデ 底面体部に指押さ	SE-20
			15.8	灰白色	丸く終る			
801	瓦 蓋 筒	赤褐色	2.4	赤褐色	深みのある丸底からゆるやかに屈曲し外上方へ開く	外面	口縁部ココナデ 底面に指押さ	SE-20
			9.8	灰白色	口縁端部に丸く終る	内面	沈線は上部に凹凸が激しい 見込みにジグザグのヘラミダキが若干に施る	
802	瓦 蓋 筒	赤褐色	2.0	赤褐色	平底から直線に立ち上がり口縁部で水平に伸びる端	外面	底面に指押さ	SE-20
			10.8	赤褐色	部は丸く終る	内面	口縁部立ち上がりに凹凸が激しい 見込みにジグザグのヘラミダキ	
803	瓦 蓋 筒	赤褐色	2.0	赤褐色	凹凸の激しい平底から屈曲して直線に短く開く口縁部	外面	口縁部ココナデ 底面に指押さ	SR-20
			10.0	赤褐色	を有する	内面	口縁部立ち上がりに凹凸が激しい 見込みにジグザグのヘラミダキ	
804	平 瓦	赤褐色	長さ 45.0	赤褐色	四面両辺に虫取りが施されている	凹面	ヘラケズリ	SK-06
			幅 5.5	赤褐色		凸面	葉舟形のタタキ	
805	平 瓦	赤褐色	長さ 35.0	赤褐色	熱を受けた底があり葉が付着	凹面	ヘラケズリ	SK-06
			幅 17.4	赤褐色		凸面	葉舟形のタタキ	
806	平 瓦	赤褐色	長さ 30.9	赤褐色	凹面の両辺は虫取りが施される	凹面	ヘラケズリ 「東大寺」刻印1ヶ所	SK-06
			幅 5.3	赤褐色		凸面	葉舟形のタタキ	
807	瓦 蓋 筒 (東鑑系)	赤褐色	高さ 9.6	赤褐色	体部は外上方に伸び端部は外へ肥厚し丸く終る	外面	ナデ	SK-06
			26.0	灰白色		内面	ナデ 指痕	
808	瓦 蓋 筒 (東鑑系)	赤褐色	高さ 40.3	赤褐色	底面からまっすぐ口縁に伸びる 口縁端部は外へ肥厚	外面	ナデ	SK-06
			30.4	赤褐色	上方へ押され丸みをもち終る	内面	ナデ	
809	瓦 蓋 筒 (東鑑系)	赤褐色	高さ 33.3	赤褐色	段状口縁 外側する両面は凹状を成す	外面	調整不明	SK-06
			27.6	赤褐色		内面		

遺物観察表

国名	遺物	器種	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名	
118	810	青銅鏡	径 54.0 厚さ 22.0	赤褐色-黒色 中央に環状の窪み -反白色 銅目色	胴部内湾して外下方へ張り出す 端部は上方に肥厚し	内面	屈のハケメの上に横移動の平圧で押印(体部に3度)	SK-06
					外端部にはほぼ垂直な平面を成す	内面	ナデ 指押さえ	
116	811	土師器皿	1.5 8.3	赤褐色 淡黄色	中央が高くなった底部から肥厚して短く上方に伸びる	強いナデによる検線 屈曲部に明顯な検線		SK-06
					端部はわずかに内湾し丸みをもって終る 兜形			
116	812	土師器皿	1.6 8.0	赤褐色 淡黄褐色 赤灰白色	底部中央がやや高い平坦な器形	口縁部ヨコナデ		SK-06
116	813	土師器皿	1.5 7.8	赤褐色 淡黄褐色 赤灰白色	深さのある丸底からゆるやかに屈曲し口縁部で外反する	口縁部ヨコナデ		SK-06
116	814	土師器皿	1.5 8.2	赤褐色 淡黄褐色 赤灰白色	平坦な器形	口縁部ヨコナデ		SK-06
116	815	土師器皿	1.3 7.7	赤褐色 淡黄褐色 -反白色	平底からゆるやかに肥厚し上方に開く	口縁部ヨコナデ ナデによる検線		SK-06
116	816	土師器皿	1.5 7.7	赤褐色 淡黄褐色	底部からゆるやかに外上方へ開く	口縁部ヨコナデ		SK-06
116	817	土師器皿	1.4 7.7	赤褐色 淡黄色	平底から屈曲しゆるやかに広がる	口縁部ヨコナデ		SK-06
116	818	土師器中皿	2.5 12.2	赤灰白色 赤黄褐色	平底より肥厚し外反して口縁部に続く 端部はわずかに上方に押しされる	口縁部ヨコナデ 端部はわずかに上方につまみあげる		SK-06
120	819	鉄釘	長さ 7.7 幅 1.1 厚さ 1.1	赤 緑赤褐色	頭部は折り返し先端部は欠損 断面長方形			SK-06
120	820	土師器皿	1.7 9.4	赤褐色 淡黄褐色	底部からゆるやかに外上方に開いたのち口縁部で水平に伸び上方につまみあげ	口縁部ヨコナデ 体部指押さえ 「て」の字状口縁		SK-07
120	821	土師器皿	1.6 9.6	赤褐色 淡黄褐色	平底から外上方に開き端部は水平に短かく伸び丸く終る	口縁部ヨコナデ 指押さえ		SK-08
120	822	土師器皿	1.6 9.7	赤褐色 淡黄褐色	平底から屈曲し外上方へまっすぐ立ち上がる	口縁部ヨコナデ		SK-08
120	823	土師器皿	1.5 9.2	赤褐色 淡黄色	平底からなだらかに開く	口縁部ヨコナデ		SK-08
120	824	土師器皿	1.8 9.4	赤灰黄色	中央がすこし高くなった丸底から口縁へ内湾して続く 端部は丸い 器壁の厚みは均等である	口縁部ヨコナデ 強いナデによる検線		SK-08
120	825	土師器皿	1.6 8.8	赤褐色 灰白色	ややいびつ 平底から口縁へ内湾して開く	口縁部ヨコナデ		SK-08
120	826	土師器皿	1.6 9.0	赤褐色 淡黄褐色	器壁は少し厚め 底部中央はやや高くゆるやかに外上方に開く	口縁部ヨコナデ		SK-08
120	827	土師器皿	1.7 10.0	赤褐色 淡黄褐色	全体にいびつ 口縁までの高さがありなく全体に開いた形	口縁部ヨコナデ ナデによる検線		SK-08
120	828	土師器皿	1.8 8.8	赤褐色 淡黄色 赤灰白色	平底より内湾気味に伸びる体部とやや角ばった口縁を有する	ナデ 口縁部強いナデによる検線		SK-08
120	829	土師器皿	1.5 8.5	赤褐色 淡黄色	厚めの底縁からゆるやかに開く 兜形	口縁部ヨコナデ 端部はわずかに上方につまみあげる 「て」の字状口縁		SK-08

遺物観察表

調査年度	品名	数量	色調	形態・特徴	測量・手法	遺跡名	
119	土師器 630	1.7	赤褐色	中央が高くなった底部から内周縁部に口縁へと続く	ナデ ナデによる鈍い縁線	SK-08	
		9.2	洗黄緑色	縁部はわずかに内角する 定形			
120	土師器 831	2.9	赤褐色	器の全体形状は不明	外面	高台は厚みと高さがあり取り付けナデ 基部に強いナデ	SK-08
		12.9	洗黄緑色		内面	測量不明	
120	瓦葺足釜 832	12.5	赤褐色	口縁部は内傾し上方に縁部を有する 筒は短かくはく	外面	口縁部ココナデ 筒に貼り付け ナデ	SK-08
		18.8	洗黄緑色	あげ筋の上方に内面を有する	内面	板ナデ	
119	瓦葺足釜 833	11.1	赤褐色	底からゆるやかに外方に開き縁部したち上方へ内傾し縁部	外面	筒縁部貼り付けナデ 指押さえ	SK-08
		13.8	灰白色	に丸く終る 筒は水平方向に伸び内傾する縁部をもつ	内面	板ナデ	
120	瓦葺 834	4.9	赤褐色	体部からゆるやかに伸び丸い縁部で終る 洗線あり	外面	指押さえ 数本のヘラミガキ 断面は三角形の筒に高さ	SK-10
		1.2	赤褐色	高台ややいびつ	内面	密な縁線ミガキと簡単な輪状のヘラミガキ	
120	瓦葺 835	5.3	赤褐色	底部から体部にかけて外方に開く 口縁部はやや外反	外面	体部2/3に強い分筋ヘラミガキ	SK-10
		15.0	灰白色	し縁部に洗線あり	内面	密な縁線ミガキと簡単な連続輪状のヘラミガキ	
119	瓦葺 836	5.2	赤褐色	体部から外上方に開き口縁部はやや外反する 洗線は	外面	体部2/3に密なヘラミガキ	SK-10
		15.0	灰白色	上向き	内面	やや密な縁線ミガキ 簡単な連続輪状のヘラミガキ	
120	土師器 837	1.7	赤褐色	丸底から屈曲して短く外上方へ伸び口縁部は外反縁部で	口縁部ココナデ 基部部にナデによる縁線	SK-10	
		9.1	洗黄緑色	縁部はやや内角する			
119	土師器 838	1.4	赤褐色	平底から短く外反縁部の口縁が鋭く	口縁部ココナデ	SK-10	
		8.6	洗黄緑色				
119	土師器 839	1.0	赤褐色	平底から内側に屈曲して短い口に折り返した異形	折り返し内面は強いナデ	SK-10	
		11.0	洗黄緑色	最大径の位置でわずかに収縮をもつ			
116	土師器 840	1.8	赤褐色	平らな底部から屈曲し外上方に開き縁部は丸く終る	口縁部ココナデ	SK-10	
		14.0	灰白色		基部部強い指押さえ		
123	土師器 841	5.2	赤褐色	口縁部は外上方に伸び縁部は上方に凹面をもつ 筒は	外面	口縁部立ち上がり強いナデ 筒部に貼り付けナデ	SK-10
		17.2	赤褐色	長くはく水平に伸びる			
120	土師器 842	13.1	赤褐色	使用痕あり 器面使用したと思われる		SK-11	
		4.3	洗黄緑色				
119	土師器 843	2.7	赤褐色	立ち上がりは直立 器面断面は三角形を成し水平方向	外面	ヘラミガキ	SK-12
		8.0	洗黄緑色	に短く伸び基部部は強い	内面	ナデ	
120	土師器 844	1.7	赤褐色	筒で円筒して口縁へ続く縁部 縁部は丸く終る	口縁部ココナデ ナデによる縁線	SK-14	
		8.3	洗黄緑色				
120	土師器 845	1.6	赤褐色	底部からゆるやかに外上方に開き縁部は丸く終る 基部	口縁部ココナデ	SK-14	
		7.8	洗黄緑色	に強い			
120	土師器 846	4.1	赤褐色	縁部はわずかに外反する 洗線は上向きに走る 外面	外面	指押さえ 太い数本のヘラミガキ	SK-11
		14.0	洗黄緑色	に凹凸が強い 高台より底部の方が低い	内面	やや密な縁線ミガキ 簡単な連続輪状ヘラミガキ	
120	土師器 847	4.5	赤褐色	底部からゆるやかに外上方に開き口縁部は高台に底部の	外面	口縁部に数本のヘラミガキ	SK-11
		14.0	洗黄緑色	が低い位置にある 内面は口縁部部部一条の洗線をもつ	内面	集積しているが密な縁線ミガキと簡単な連続輪状ヘラミガキ	
120	土師器 848	4.0	赤褐色	底部からゆるやかに外上方に開く 洗線は上向きに走る	外面	口縁部に数本のヘラミガキ 指押さえ	SK-11
		14.0	灰白色		内面	隙間の開いた縁線ミガキと簡単な輪状ヘラミガキ	
120	土師器 849	2.4	赤褐色	平底より屈曲し外上方へ開き口縁部は丸く終る	口縁部ココナデ 底面はナデ	SK-11	
		12.9	灰白色				

遺物観察表

器名	器種	数量(口)	色調	形態・特徴	調査・手法	透視者
120	土師器中皿	2.6	赤褐色	ほぼ平らな底から外上方に開き端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線 指押さえ	SK-14
		13.5	浅黄色			
	土師器中皿	2.7	赤褐色	平底よりほぼ直立する唇部をみせ立ち上がる 口縁は丸く終る	口縁部ヨコナデによる鈍い縁線 底面に指押さえ	SK-14
		12.4	灰白色			
瓦 蓋 鉢 (大和) Ⅱ-A(漢)	瓦径 18.4	赤褐色	体部は半球形で口縁部は内縁する 先端の下方きになる 底面をめぐらす	外面 口縁部に段状のナデ 跡に疑り付けナデ 内面 口縁部ヨコナデ 体部斜めのハケミが切りあう	SK-14	
	内径 29.7	赤褐色 赤褐色 赤褐色				
瓦 蓋 鉢 (大和) Ⅱ-A(漢)	4.5	赤褐色	底面から外上方に開き端部は外反する 沈線は上を向いて走る	外面 連続する指押さえ 数条のヘラミガキ 内面 隙間のある隠線ミガキが円弧から見込みにおりる	SK-15	
	13.6	灰 色				
120	土師器中皿	1.2	赤褐色	平底から唇部して短く外上方に開く体部とやや角ばった口縁を有する	ヨコナデ 唇部にナデによる鈍い縁線	SK-16
		8.2	灰白色			
	土師器皿	1.6	赤褐色	丸底からゆるやかに口縁部へ続く 端部は丸く終る	口縁部ヨコナデ	SK-16
		7.8	灰白色			
土師器中皿	2.5	赤褐色	平底より唇部し外上方に伸び端部はわずかに外反する	口縁部強いナデによる縁線	SK-16	
	11.6	灰白色				
土師器中皿	2.0	赤褐色	平底から外上方へ開き端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線 口縁部は肥厚する	SK-16	
	11.6	灰白色				
119	瓦 蓋 鉢 (大和) Ⅲ-C	3.9	赤褐色	ゆるやかに外上方に開いて口縁部へ続く 端部に浅い沈線が一巡する 高台は底面より高い	外面 指押さえ 数条のヘラミガキ 内面 隙間のある隠線ミガキと数本の連続輪状ヘラミガキ	SK-16
		12.8	赤褐色 灰白色			
	瓦 蓋 鉢 (大和) Ⅲ-C	3.8	赤褐色	ゆるやかに外上方へ開き口縁部へ続く 端部上位に沈線が走る 高台は底面より高い	外面 指押さえ 数条のヘラミガキ 内面 隙間の少ない隠線ミガキ	SK-16
		13.4	赤褐色 赤褐色			
土師器中皿	瓦径 10.3	赤褐色	踵上から内面し口縁部続く 口縁端部は丸く終る 踵はなおおろ、端部は丸く終る	外面 踵の下方に窪みがある 内面 ハケミが塗されているが摩耗して不鮮明	SK-16	
	口径 36.8 器径 44.2	赤褐色 赤褐色 赤褐色				
121	土師器中皿	1.5	赤褐色	平底からゆるやかに外上方へ伸び端部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ	SK-21
		8.0	浅黄色			
	土師器皿	1.3	赤褐色	底面中央は少し高くゆるやかに外上方へ伸び内面端部の口縁部で端部は丸く終る 底面より端部の方が厚みに厚みがある	口縁部ヨコナデ	SK-21
		8.1	赤褐色 赤褐色			
	土師器中皿	1.2	赤褐色	扁平で短く立ち上がる口縁は内面してやや尖る	口縁部ヨコナデ	SK-21
		8.5	灰白色			
	土師器中皿	1.3	赤褐色	底面中央がわずかに高くなり、内面して立ち上がる口縁を有する	口縁部ヨコナデ	SK-21
		8.2	浅黄色			
	土師器中皿	1.4	赤褐色	平底から外上方へ開き口縁は内面端部にやや角ばる	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-21
		8.0	赤褐色 赤褐色			
	土師器中皿	1.3	赤褐色	底面より口縁部の方が厚みをもつ 端部は上方へ押しされる	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-21
		8.2	灰白色			
土師器中皿	1.5	赤褐色	薄い器壁で深さもある 口縁は内面しやや角ばる	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-21	
	8.1	赤褐色 赤褐色				
土師器中皿	1.7	赤褐色	丸みがあり底面より口縁の方に厚みをもつ 口縁部は向がる 完形	口縁部ヨコナデ ナデによる縁線	SK-21	
	7.0	灰白色				
土師器中皿	1.5	赤褐色	底面より口縁が厚みをもつ 端部は角ばる 完形	口縁部ナデ ナデによる縁線	SK-21	
	8.0	灰白色				

遺物観察表

図版No.	遺物	品名	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名	
121	土師器Ⅲ	Ⅲ-A	1.4	赤褐色	底部中央が高く内縁も薄く、口縁部は内湾するまで	口縁部ヨコナゲ ナゲによる絞縁	SK-21	
			8.3	灰白色	厚みをもって突る 兜形			
			1.9	赤褐色	平底からゆるやかに開き口縁部は内湾気味で端部は丸く納められる			底部に指押さえ
			12.5	赤褐色 灰白色				
			1.9	赤褐色	平底から外上方に開く 口縁部に厚みをもつ			体外中位にナゲによる絞縁 底部に指押さえ
			12.1	洗滌褐色				
2.1	赤褐色	中央が少し高くなった平底と屈曲し開く口縁部	内外とも口縁部ヨコナゲ ナゲによる絞縁					
12.2	赤褐色	端部は上方に押される						
1.7	赤褐色	平底から傾斜し短い立ち上がりをもせ内湾気味の口縁部	口縁部ヨコナゲ ナゲによる絞縁					
14.9	灰白・赤褐色							
120	瓦器 輪Ⅲ-B	Ⅲ-B	4.5	赤褐色	平底からゆるやかに開き端部は丸く終る 浅い沈線有り	外面 連続性のある指押さえ 数本のヘラミガキ	SK-21	
			13.4	黒色	ややいびつな形である	内面 隙間のある墨線ミガキと小さい連続輪状ヘラミガキ		
121	土師器Ⅲ	Ⅲ-B	1.5	赤褐色	異なる作り方 底部はやや高く内湾気味に開き端部は丸く終る	口縁部ヨコナゲ ナゲによる絞縁	SK-25	
			8.1	灰白色				
121	瓦器 輪Ⅲ-B	Ⅲ-B	4.0	赤褐色	ゆるやかに外上方に開き口縁部へ続く	外面 規則性のないヘラミガキ	SK-25	
			14.8	粉白色	端部上に沈線は出る	内面 隙間のある墨線ミガキ 見込みのヘラミガキは形状不明		
122	瓦器 足箱Ⅲ-C	Ⅲ-C	13.7	赤褐色	内湾する体部に内傾面をもつ口縁部が鋭く	外面 網結り付けナゲ つげ類と体部に指押さえの痕	SK-22	
			15.0	灰白色	三脚のうち一脚欠失 網は上方に短く伸びる	内面 ヨコナゲ(9本/1.2a)		
121	土師器Ⅲ	Ⅲ-C	7.0	赤褐色	口縁部は大きく逆「ハ」の下に開き端部は上方につまみあげ、外端面を有する	外面 肩部にハケメ(9本/1.0a)	SK-26	
			29.0	赤褐色		内面 数ナゲ		
121	土師器Ⅲ	Ⅲ-C	1.4	赤褐色	中央がわずかに高くなった底部と、屈曲して短く内湾する口縁 端部はやや角ばる	ヨコナゲ 口縁部ナゲによる絞縁	SK-27	
			8.1	灰白色				
122	瓦器 輪Ⅲ-C	Ⅲ-C	2.9	赤褐色	底部から鋭く開き器壁は内湾する 沈線あり いびつ	外面 連続性のある指押さえ かすかにヘラミガキ?	SK-27	
			12.4	灰色		内面 隙間のある墨線ミガキが口縁より見込みへおける		
121	瓦器 輪Ⅲ-A(新)	Ⅲ-A(新)	4.7	赤褐色	底部から口縁部にかけてゆるやかに外上方に伸び端部で外反 端部は上向き沈線は出る 器壁は薄い	外面 指押さえ 数本のヘラミガキ	SK-28	
			14.4	灰・灰白色		内面 やや隙間のある墨線ミガキ 見込みヘラミガキは形状不明		
121	土師器Ⅲ	Ⅲ-A	6.3	赤褐色	口縁部は外上方に伸び端部は内湾する平面をもつ	外面 体部に指押さえ 口縁部と体部の境に粘土層の痕	SK-28	
			10.6	赤褐色		内面 指押さえ		
122	瓦器 輪Ⅲ-C	Ⅲ-C	4.7	赤褐色	底部からゆるやかに外上方に開き端部は丸く終る	外面 連続性のある指押さえ 数本のヘラミガキ	SK-29	
			12.6	灰色	浅い沈線が上向きに走る 兜形	内面 隙間のない墨線ミガキが口縁より見込みへおける		
122	土師器Ⅲ	Ⅲ-A	2.2	赤褐色	平底からゆるやかに口縁部へ続く 端部は厚く丸みをもつ	口縁部ヨコナゲ 口縁部肥厚する	SK-34	
			12.5	灰白色				
			1.7	赤褐色	平底から内湾して鋭く口縁 端部はやや角ばる			
8.2	灰白色							
121	土師器Ⅲ	Ⅲ-A	10.8	赤褐色	平底から外上方に伸び端部で垂直な外方に肥厚する外端面を成す 器中央に1ヶ所注ぎ口をもつ	外面 口縁部から体部 ナゲによる鋭い絞縁	SK-33	
			27.1	赤褐色		内面 口縁部はヨコナゲ 指押さえ		
121	鉄釘	Ⅲ-A	4.6	赤褐色	頭部は折り返し先端部は欠損 断面長方形		SK-40	
			0.7	赤褐色				
0.4	粉余褐色							
122	瓦器 輪Ⅲ-A(新)	Ⅲ-A(新)	4.5	赤褐色	器壁は厚い 底部からゆるやかに開き口縁部はわずかに外反する 沈線は一巡せず	外面 体部1/3まで粗い3分割ミガキ	SK-46	
			15.0	灰色		内面 やや隙間のある墨線ミガキ 横断の連続状ヘラミガキ		

遺物観察表

調査年度	遺物	種類	重量(g)	色調	形 態・特 徴	調 整・手 法	遺物番号	
120	880	瓦 器 III (大和)	2.1 9.6	赤褐色 灰白色	平皿から垂直に立ち上がり口縁端部は外反して丸く終る	外面	口縁部ココナデ	SK-54
						内面	見込みにシラヂグのヘラミガキ	
	891	瓦 器 陶 皿-A(新)	4.7 15.8	赤褐色 刷灰白色	高台欠損 内湾気味に外上方に伸びた後直立 沈線一条出る	外面	体部に出まで分割性のあるヘラミガキ 指押さえ	SK-58
						内面	やや密な縞線ミガキ 見込み欠損	
	892	瓦 器 陶 皿-B(新)	4.0 13.4	赤褐色 刷灰白色	底面欠損 外上方に伸びたあと口縁部で直立気味にた ち上がり端部で外反する 一部に二重の沈線みられ	外面	連続性のある指押さえ 粗いヘラミガキ	SK-55
						内面	やや疎間のある縞線ミガキ 見込み欠損	
	893	瓦 器 陶 皿-A(新)	5.1 14.8	赤褐色 刷灰白色	高台部欠損 外上方に伸びる口縁部周辺に厚みがある 沈線は高い位置にある	外面	指押さえ 分割性のあるヘラミガキ	SK-55
						内面	やや密な縞線ミガキ 見込みの太直のヘラミガキが取付不明	
	894	瓦 器 陶 皿-B(新)	4.4 15.4	赤褐色 刷灰白色	高台部欠損 内湾ぎみに外上方に伸び口縁部でわずかに 外反 上位に沈線一条出る	外面	指押さえ 分割性のあるヘラミガキ	SK-55
						内面	やや疎間のある縞線ミガキ 見込み欠損	
	895	瓦 器 陶 皿-B(新)	4.8 14.4	赤褐色 刷灰白色	高台欠損 内湾ぎみに外上方に伸び口縁部で外反 沈 線一条出る	外面	不規則なヘラミガキ	SK-55
						内面	密な縞線ミガキ 見込み欠損	
896	土師器中皿	2.6 11.6	赤褐色 刷灰白色	凹凸のある底面からやや垂直に立ち上がり端部は外反 する	口縁部ココナデ	ナデによる縞線	SK-55	
122	土師器中皿	2.7 14.2	赤褐色 刷灰白色	平皿から居抜きゆるやかに立ち上がる 側部は丸い	口縁部ココナデ	底面に指押さえ	SK-55	
898	土師器皿	1.6 9.0	赤褐色 赤黄色	丸底からゆるやかに外上方に開き口縁ではわずかに外 反し端部は丸く終る	口縁部ココナデ		SK-53	
899	土師器皿	1.8 8.9	赤褐色 灰白色	丸底からわずかに居曲して短く外上方へ開く口縁 端 部はやや角ばる	口縁部ココナデ	ナデによる縞線	SK-55	
900	土師器皿	1.6 8.5	赤褐色 刷灰白色	平皿からわずかに居抜き外上方に開き端部は丸く終る	口縁部ココナデ		SK-55	
123	瓦 器 釜 大和B	5.6 24.0 28.4	赤褐色 刷灰白色	口縁部は「く」の字に居抜き端部は内側に折り返し縁 は水平方向に伸び端部は下方に肥厚	外面	胴部にびれに指押さえ 踵は取り付け ナデ	SK-55	
					内面	新ナデ		
902	瓦 器 釜 大和B	5.0 23.8	赤褐色 刷灰白色	体部は大きく内傾し口縁部へ傾く 端部は破損して形 態不明 踵は少しはね上がる	外面	踵は取り付けナデ	SK-55	
					内面			
903	瓦 器 釜 山城F	11.3 26.8 28.8	赤褐色 刷灰白色	口縁部は内方に伸び端部は水平の面を成し中央でわ ずかに凹面を成す 踵は短かい	外面	調整不明 踵下方に指押さえ	SK-55	
					内面			
124	土師器皿	2.6 10.8	赤褐色 ぶい褐色	中央がやや突出した底面から居曲して外上方に開く体 部と外反気味に丸く終る口縁を有する	外面	口縁部にナデによる縞線 口縁部肥厚	SD-25	
					内面			
905	土師器皿	3.7 15.0	赤褐色 赤黄色	丸底からゆるやかに外上方に向い口縁部で外反し端部 はやや角ばって厚みをもつ	外面	口縁部にココナデによる縞線	SD-30	
					内面			
906	平 瓦	9.9×10.1 厚さ 1.9	赤褐色 灰色		断面	赤目の底	SD-31	
					凸面	赤目の底		
123 121	土師器釜 新津C	7.5 17.2 21.1	赤褐色 刷灰白色	体部は直立して伸び踵は口縁端部と同位置にあっては ねあがる 踵上部は円状	外面	指押さえ肥厚	SD-31	
					内面	粘土接合痕		
908	土師器皿	1.8 7.5	赤褐色 灰白色	平皿から居曲して口縁部に向かって大きく外反する	ココナデ	ナデによる縞線 体部に指押さえ	SD-31	
124	土師器中皿	4.2 11.3	赤褐色 灰白色 刷灰黄色	ゆるやかに外上方に開く部部と取り付けた三方の縁を 有する	外面	体部中央にナデによる縞線 胴取り付け部に指押さえ	SD-31	
					内面			

遺物観察表

遺物番号	品名	規格	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名	
124	瓦 葺 瓦		1.9	赤褐色	丸底からゆるやかに外上方へ開き端部は丸く納められる	外面	指押さえ ナデ	SD-32
			9.1	灰色		内面	ジグザグのヘラミガキ	
124	土師器皿		2.5	赤褐色 浅黄褐色 赤黄褐色	平底からゆるやかに立ち上がり口縁部は外反して端部は丸く終る		口縁部にヨコナデ ナデによる發縁 底部に指押さえ	SD-33
			10.4					
124	土師器中皿		2.2	赤褐色	平底からゆるやかに外上方へ開き口縁部は内湾気味		口縁部にヨコナデ ナデによる發縁	SD-33
			10.4	浅黄褐色	端部はわずかに角ばる			
123	瓦 筒 瓦 (大和)		3.6	赤褐色	見込みは平らで「ハ」の字型の高台	外面	外内面とも風化している	SD-33
			6.5	灰白色		内面		
124	土師器皿		1.3	赤褐色	中央のふくらんだ底部から外上方へ開き端部は丸く終る		口縁部にヨコナデ	SD-39
			8.0	淡黄色				
124	土師器皿		1.4	赤褐色	中央ふくらんだ底部よりゆるやかに外上方へ伸び端部は丸く終る 器壁は厚い		口縁部にヨコナデ	SD-39
			8.6	淡黄色				
124	土師器皿		1.4	赤褐色	平底から器壁して短く外上方へ伸びる 端部は内湾気味		口縁部にヨコナデ	SD-39
			8.3	淡黄色	輪でやや角ばる			
124	土師器皿		0.9	赤褐色	中央が高い平底から内湾する口縁部が鋭く 端部は角ばる		口縁部にヨコナデ 風化している	SD-39
			8.5	淡黄色				
124	瓦 葺 瓦 (大和)		3.8	赤褐色	平たくいびつ 底部から外上方にゆるやかに伸び端部へ続く 上位に沈線	外面	数条のヘラミガキ	SD-39
			12.7	灰色		内面	沈線の開いた他種ミガキ 簡単な連続輪状ヘラミガキ	
124	土師器皿		1.6	赤褐色	丸底から器壁して短く外上方へ伸びる 端部は丸く終る		口縁部にヨコナデ	SD-40
			8.4	赤い褐色				
124	土師器皿		1.5	赤褐色	平底からゆるやかに外上方へ伸び内湾気味の口縁 端部はやや角ばる		口縁部にヨコナデ	SD-40
			8.2	淡黄色				
124	土師器中皿		1.8	赤褐色	中央の高い底部からゆるやかに外上方へ伸びたのちやや外反し端部へと続く		口縁部にヨコナデ 底部に指押さえ	SD-41
			12.2	赤い褐色				
124	土師器中皿		2.1	赤褐色	少々いびつな平底から器壁し口縁は上方につまみあげ		口縁部にヨコナデ	SD-42
			11.0	赤黄褐色	端部はやや角ばる			
124	土師器中皿		2.0	赤褐色	平坦な器形で平底からゆるやかに外上方へ開く 端部は外反し丸く終る 器壁は薄い		口縁部にヨコナデ	SD-42
			11.5	赤黄褐色				
124	瓦 葺 瓦 (大和)		3.8	赤褐色	底部からゆるやかに外上方へ開く 端部にある沈線は淡く上向き	外面	指押さえ 規則性のないヘラミガキ	SD-42
			12.8	灰色	に近る 全体がややいびつ 高台もいびつ強い	内面	口縁から見込みまで隙間の大きい器壁ミガキがおきる	
124	瓦 葺 瓦 (奈良)		3.8	赤褐色	底部から外上方にゆるやかに開く 沈線は不明瞭	外面	連続性のある指押さえ ヘラミガキは認められず	SD-42
			12.6	灰色		内面	隙間のある器壁ミガキ 連続輪状のヘラミガキ	
124	瓦 葺 瓦 (大和)		3.8	赤褐色	いびつ 底部よりゆるやかに外上方へ開き端部で外反する 沈線は上位に近る	外面	規則性のないヘラミガキ	SD-42
			12.8	灰色		内面	隙間の大きい器壁ミガキ 太い連続輪状のヘラミガキ	
124	土師器中皿		2.0	赤褐色	中央がやや高い底部から外上方へ開きやや角ばった端部で終る	内外とも口縁部ヨコナデ	ナデによる發縁	SD-43
			14.4	黄灰色		底部に指押さえ		
124	土師器中皿		2.9	赤褐色	凹凸の激しい底部から外上方に向かい口縁部は厚みをもって丸く終る		口縁部にヨコナデ ナデによる鈍い發縁	SD-43
			14.4	灰白色				
120	土師器中皿		5.3	赤褐色	異形(?)不明	外面	指押さえ	SD-43
			5.3	赤褐色		内面	指押さえ	

遺物観察表

図版No.	遺物	図型	寸法(mm)	色調	形 態・特 徴	調 整・手 法	透視名	
125	930	地上土層部 溝内6V型	5.2	赤褐色	見込みから内側壁は外方に伸び端部は反し太い。沈線かど	外面	分割性のあるヘラミガキが口縁から高台まで築される	SP-01
			15.6	灰 色	うき物断つかない。凹線がある。高台は長く「八」の字型	内面	太いヘラミガキが底に築ける。見込みはジグザグのヘラミガキ	
125	931	地上土層部 溝内6V型	5.9	赤褐色	底から丸底をもち、見込みからゆるやかに外上方に際と端部にやや内反	外面	太いヘラミガキがわずかに築る	SP-01
			17.4	暗灰色	して丸く、端部は凹線が直線になる。高台は狭くて入り口である	内面	外面と同様の太いヘラミガキ	
125	932	土師器皿	1.3	赤褐色	底部中央部にややくぼんでいる。口縁部はゆるやかに		口縁部にヨコナゲ ナデによる縁線	SP-01
			8.8	灰白色 赤褐色	外方向に広がって端部は上方につまみあがる		「て」の字状口縁	
125	933	土師器皿	1.4	赤褐色	平底から唇部上方に伸びたのち水平方向に開いて端部		口縁部ナデによる縁線 指押さえ	SP-01
			9.6	灰白色	は上方につまみあがる		「て」の字状口縁	
125	934	土師器皿	1.3	赤褐色	平底から唇部して水平方向に伸び端部は短く上方へつ		口縁部ナデによる縁線 「て」の字状口縁	SP-01
			9.6	灰白色 赤褐色	まみあがる			
125	935	土師器皿	1.5	赤褐色	平坦な底面 やや凹凸が激しい 外上方にゆるやかに		口縁部ヨコナゲ 狭いナデ	SP-01
			9.6	赤灰白色	開き水平に伸びたのち端部は丸く終る 定形		口縁部底面に指押さえ 「て」の字状口縁	
125	936	瓦 葺 割 (大和) 溝-E-C	4.4	赤褐色	底面からゆるやかに外上方に開く 高台は低く雑な作り	外面	造形性のある指押さえ 分割性のあるヘラミガキ	SP-01
			13.6	灰白色		内面	期間の開いた凹線ミガキ 簡単な透線輪状ヘラミガキ	
125	937	土師器盆 口径 29.2 溝内C2	8.1	赤い縁部	体部直立のみ 縁部はわずかにほねあがる 口縁部	外面	縦方向に工具のあと 跡は貼りつけ	SP-01
			24.0	赤い縁部	短く内傾する	内面	ナデ	
125	938	土師器盆 口径 24.0 溝内C2	6.2	赤褐色	口縁部端部は内側へせり出す 跡は水平方向へ伸び端		端部に指押さえ 跡に粘土塗合あととヨコナゲ	SP-01
			16.8	赤褐色	部はやや内側に反っている		内面	
125	939	土師器盆 口径 31.4 溝内B1	6.0	赤い縁部	口縁部は「く」の字に屈曲 跡は水平方向に伸び端部		ヨコナゲ 跡は貼り付けナデ	SP-01
			40.4	赤褐色	はやや肥厚		内面	
125	940	瓦葺足置 口径 11.4 厚さ 2.4	11.2	赤褐色	内側する体部と水平に短く伸びる跡を有する 口縁部	外面	製法部に指押さえ顯著 跡は貼り付けナデ	SP-02
			18.6	紅 色	部は中央わずかに凹状の面をなす 集付着	内面	指押さえ数ヶ所	
133	941	平 瓦	11.4 厚さ 2.4	赤褐色	砂粒が目立つ		断面凸面とも風化が激しい	SP-37
127	942	瓦 葺 割 (大和) 溝一B	4.5	赤褐色	簡単な高台とゆるやかに外上方に伸びる体部を有する	外面	指押さえ	SP-75
			13.6	赤灰白色	口縁はわずかに外反し沈線は上端に位置する	内面	やや隙間のある凹線ミガキ	
127	943	瓦葺足置 口径 11.7 厚さ 14.7	11.7	赤褐色	短い跡が水平に伸び口縁部は内側し内にやや肥厚する	外面	製法部に指押さえ顯著 跡は貼り付けナデ	SP-118
			14.7	赤褐色	脚は3方向に付くと考えられる	内面	指押さえ 板ナデ(ハケメ)	
127	944	瓦 葺 皿	1.5	赤褐色	丸底から唇部して外上方に開く 端部は丸く終る		指押さえ 口縁部ヨコナゲ	SP-106
			8.5	灰~灰白色			内面	
126	945	瓦 葺 皿	1.7	赤褐色	丸底からわずかに唇部して短く外上方に伸び口縁端部		口縁部ヨコナゲ	SP-106
			8.8	灰白色 赤褐色	は反折する		内面	
127	946	土師器皿	1.6	赤褐色	丸底からゆるやかに口縁部へ続く 端部はやや内はる		口縁部ヨコナゲ 底面に指押さえ	SP-106
127	947	土師器皿	1.4	赤褐色	底部中央部がわずかに高くになっている 口縁部は内側		口縁部ヨコナゲ 底面に指押さえ	SP-106
			8.8	赤褐色	気味にやや内はる			
127	948	土師器皿	1.3	赤褐色	扁平な器形 口縁部は丸く終る		口縁部ヨコナゲ	SP-106
			7.7	灰白色				
127	949	土師器皿	1.5	赤褐色	器底は厚めで平底からゆるやかに立ち上がる 端部は		口縁部ヨコナゲ	SP-106
			8.4	赤褐色	丸く終る			

遺物観察表

調査年度	遺跡	図名	出量(m)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺跡名	
127	900	土師器Ⅲ	1.4	赤褐色	底部中央がやや窪くなる	ゆるやかに外上方に開き端	口縁部ココナデ	SP-106
			8.2	淡黄色	底丸く終る			
		1.5	赤褐色	平底からゆるやかに内湾し短く上方へ向かう	端部は	口縁部ココナデ	SP-106	
127	902	土師器Ⅲ	1.4	赤褐色	扁平な器形で直壁したのも外上方へ開く	端部は丸く	口縁部ココナデ	SP-106
			8.0	灰白色	終る			
		1.4	赤褐色	扁平な器形で直壁して外反気味に端部へ続く	端部は	口縁部ココナデ	SP-106	
138	904	土師器Ⅲ	1.4	赤褐色	扁平な器形で直壁して外反気味に端部へ続く	端部は	口縁部ココナデ	SP-106
			8.2	淡黄色	丸く終る			
		1.4	赤褐色	扁平な器形で直壁して外反気味に端部へ続く	端部は	口縁部ココナデ	SP-106	
133	905	土師器Ⅲ	14.0	赤褐色	底部が外反する	端部は丸く終る	外面 内面	SP-38
			7.2	淡黄褐色				
		1.5	赤褐色	底部中央が高くなるゆるやかに外上方に開き端部は丸く終る		口縁部にココナデ	SP-78	
127	907	瓦器Ⅲ	1.6	赤褐色	平底からゆるやかに外反し短く上方に伸びる	端部は	外面 内面	SP-131
			9.1	赤灰色	尖り気味			
		1.2	赤褐色	平底からゆるやかに外上方に開き口縁端部は角ばる		口縁部にココナデ 指押さえ	SP-151	
127	909	土師器Ⅲ	1.6	赤褐色	平底から直壁し口縁端部はわずかに内湾し尖る		口縁部にココナデ	SP-161
			8.1	淡黄色	完形			
		1.8	赤褐色	丸底からゆるやかに外上方に開き水平方向に伸びたのちに内湾する	端部はわずかに上方につまむ	口縁部にココナデ	SP-208	
133	901	土師器Ⅲ	15.1	赤褐色	口縁部は短く直立し端部は外反して稜線を有する		外面 内面	SP-203
			16.5	赤褐色				
		4.4	赤褐色	高台より底部の方が低い位置にある	ゆるやかに外上	外面 内面	SP-203	
12.6	赤褐色	方に伸び口縁部で外反する	流線は上端部に位置する					
136	903	土師器Ⅲ	14.0	赤褐色	短く「ハ」の字に開く高台から内湾気味に立ちあがる		外面 内面	SP-244
			8.8	赤褐色	底部を有する			
		5.3	赤褐色	均等な厚みの器壁が内湾しながら口縁へと続く	流線	外面 内面	SP-203	
14.0	赤褐色	に端部よりやや下に位置する	端部は丸い					
127	905	土師器Ⅲ	1.7	赤褐色	平坦な形で口縁部で水平方向へ伸び端部でわずかに上		口縁部にココナデ	SP-266
			10.2	灰白色	力へつまみあがる			
		1.8	赤褐色	器壁は薄く口縁部で水平方向へ伸び端部は短く外上方		口縁部にココナデ	SP-266	
127	906	土師器Ⅲ	1.6	赤褐色	口縁部に厚みをもち内湾する		口縁部ココナデ	SP-270
			9.3	淡黄褐色				
		1.6	赤褐色	口縁部で逆「ハ」の字壁に開き端部は外反し上向き		外面 内面	SP-295	
22.0	赤褐色	平面を成す						
138	909	土師器Ⅲ	10.2	赤褐色	底部は直立気味口縁部で大きく屈曲		外面 内面	SP-280
			20.4	赤褐色	外端部は外傾しわずかに内湾を成す			

遺物観察表

調査年度	遺物	種類	数量(個)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
126		鉄製鍔先	長×幅1.1 厚 3.0		ひず型		SP-320
		銅製鍔先	24.2 7.5	赤褐色 灰白色	外上方に伸びたのも短く外反し端部は丸く厚みがある	外面 回転ナデ 内面 回転ナデ	SP-322
		土師器鍔	長7.4 幅13.6	赤褐色 赤褐色	端部以外に肥厚し上部に面をなす	外面 ナデ(布地のあと) 指押さえ 内面 ナデ	SP-428
127		瓦 磁 筒 (和原) 1-2	6.3 15.8	赤褐色 赤灰白色	高台は高さのある断面形 厚みがあり底部から口縁ま で均等 端部直行 沈線無し	外面 高台の上方に太めのミガキが不規則に残る 内面 外周同様のヘラミガキが見込み近くに認められる	SP-425
		銅製鍔先	4.5 10.8	赤褐色 青灰色	「ハ」の字に開く高台と外反意味の口縁部を有する 端部は丸い	外面 高台は斜り付り 体部口縁部はナデ 内面 ナデ	SP-426
		土師器皿	1.0 9.2	赤褐色 浅黄褐色	体部口縁部は外上方に伸びたのも短くほぼ水平に開き 端部は上方につまみあがる	口縁部ヨコナデ 端部はわずかに上方へつまむ 「て」の字状口縁	SP-428
		土師器皿	1.7 9.4	赤褐色 灰白色	いびつではあるがわずかに屈曲し口縁は上方につまみ あがる	口縁部ヨコナデ 端部は足人のわずかに上方へつまむ 「て」の字状口縁	SP-433
		土師器皿	1.7 9.6	赤褐色 浅黄褐色	平坦な器形で口縁部は水平方向に伸びたのも上方へ短 くつまみあがる	口縁部ヨコナデ 端部上方へつまみあが 「て」の字状口縁	SP-434
128		瓦 磁 筒 (橋本) 1 2	5.8 15.8	赤褐色 赤灰白色	厚みのある器型は「ハ」の字に開く高台から、外反意味の 口縁まで均等である 端部よりやや下に深い沈線が一歩通る	外面 表面に施す4分割ヘラミガキ 内面 太めの筒状のある器型ミガキ 見込みはジグザグのヘラミガキ	SP-431
		土師器鍔	長 15.8	赤褐色 赤褐色	体部内湾しながら伸び口縁部立ち上がり部に面をもち 外反する 端部も上向きに凹面を有する 外面に窪む面	外面 体部に多数の指押さえ 内面 板ナデ	SP-435
129		土師器鍔	長25.0 幅 15.6	赤褐色 緑色	口縁部で「く」の字形に開き口縁部で短く外反 端部 は丸い	外面 調整不明 内面	SP-436
		土師器鍔	長 9.4 幅 16.2	赤いぶき 赤いぶき 赤いぶき	体部は内湾しながら伸び口縁部は外上方へ 端部は内 傾する面を成す	外面 多数の指押さえ 内面 板ナデ	SP-437
130		銅製鍔先	3.5 11.9	赤褐色 赤褐色	平底から外上方へ開いたのも口縁部は外反し丸く短 い	外面 口縁部はヨコナデ 強いナデによる縁線と凹面 内面 器底部に指押さえ	SP-438
		土師器鍔	長23.5 幅 14.0	赤褐色 浅黄褐色	外上方に伸び口縁部でわずかに直立その後外反し端部 は尖り意味	外面 口縁部に強いナデによる縁線 指押さえ 内面 不明	SP-439
129		黒土土器入 敷内系直胴	5.1 14.9	赤褐色 赤褐色	高い高台から内湾して立ち上がる体部と直行する 口縁を有する 細い沈線あり	外面 連続する指押さえ 内面 細い縁線ミガキ 見込みはジグザグのヘラミガキ	SP-436
		黒土土器入 敷内系直胴	4.2 12.7	赤いぶき 赤いぶき 赤褐色	端部薄く小ぶりである 端部内側に沈線一歩通る	外面 体部に指押さえ 口縁部のみ指す 内面 見込みジグザグ等文 全面に施し	SP-438
130		黒土土器入 敷内系直胴	4.7 15.0	赤いぶき 赤褐色 赤褐色	大きな器形 断面は三角形の小さな高台 内湾する体 部と外反意味の口縁を有する 細い沈線が通る	外面 指押さえ 口縁部に施し 内面 縁線ミガキ強化不可 全面に施し	SP-436
		黒土土器入 敷内系直胴	4.7 14.8 4.9	赤褐色 赤褐色 赤褐色	器型は薄い 内湾意味に外上方に伸びる端部内面に浅 い沈線一歩通る	外面 連続する指押さえ 内面 器な縁線ミガキ 器なジグザグのヘラミガキ 全面指す	SP-438
130		黒土土器入 敷内系直胴	13.2 4.0	赤褐色 赤褐色	薄い器型で見込から端部に直行する	外面 指押さえ 体部2/3に施し 内面 見込みに細いジグザグのヘラミガキ 全面に施し	SP-438
		黒土土器入 敷内系直胴	5.3 15.6	赤褐色 赤褐色	内湾意味に外上方に伸びる 端部内側下に沈線一歩 通る	外面 体部に指押さえ多数 口縁部のみ施し 内面 縁線ミガキと見込みジグザグのヘラミガキをわずかに全面に施し	SP-438

遺物観察表

国名	種別	器種	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺跡名	
130		黒土直土器	4.1	灰白-紅褐色	内側気味に外上方に伸びる 底部内側下位に沈没し残	外面	指押さえ 口縁部わずかに傾し	SP-436
		腹内系直器	15.0	黒褐色	歪歪る 高さわずかに異なる	内面	見込みのジグザグのヘラミガキは大い 全面に傾し	
142		土 罐	長さ 5.2 最大径1.0	赤褐色 灰白- にぶい褐色	紡錘形		中心に径0.4cmの紐孔が穿たれる	SP-435
		黒土直土器	高さ0.7 最大径7.5	赤褐色 褐色	内面が黒く燻されミガキが施されている	外面	底部にヘラ状工具で文字を刻む	SP-436
129		土師器杯	3.6 15.6	赤褐色 黄褐色	底部外面に文字「真」が施されている	外面	口縁部に内外ともにヨコナゲ 強いナゲによる模様 連続する指押さえ	SP-439
		土師器中皿	3.0 14.2	赤褐色 灰白色	少しいびつな平底からゆるやかに外上方へ伸び外反気味に口縁部へ続く 端部は丸く終る	底面	に指押さえ	SP-721
130		土師器杯	3.4 15.2	赤褐色 明褐色へ にぶい褐色	底部からゆるやかに外上方に伸び端部で内傾 尖り気味 外内とも指押えが多く残る		摩耗している	SP-538
		土師器皿	1.6 9.6	赤褐色 灰白色	底部からゆるやかに外上方に伸び口縁部で水平に開いたのも端部は丸く終る		口縁部にヨコナゲによる凹面 指押さえ 「て」の字状口縁	SP 538
128		瓦 葺 筒 (大形) 皿-1	4.5 14.6	赤褐色 赤灰白	底部から口縁部へゆるやかに外上方に伸び口縁端部で垂直に立ち丸く終る 底部が高台より低い	外面	指押さえ 分割性のある幅広いヘラミガキ	SP-532
		赤灰白				内面	やや隙間をもつ連続ミガキと連続輪状ヘラミガキ	
138		鉄 釘	長さ 4.4 径 1.8 厚さ 1.8	赤褐色 明赤褐色 暗赤褐色	錐が多数 頸部を折り返している			SP-601
		瓦 葺 筒 (標準) IV-2	2.9 10.4	赤褐色 赤灰白	形数化した高台から内湾しながら口縁へ続く 端部は尖り気味で沈没は無し	外面	指押さえ 口縁部はヨコナゲ	SP-580
129		土 罐	長さ 7.5 最大径0.8	赤褐色 褐色	紡錘形		中心に径0.3cmの紐孔が穿たれる	SP-672
		鉄 釘	長さ 9.5 径 1.9 厚さ 1.9	赤褐色 暗赤褐色	錐 頸部欠失			SP-734
112		土師器皿	1.3 8.3	赤褐色 灰白色 赤黄褐色	平底よりゆるやかに短く内湾し端部は丸く終る		口縁部にナゲ	SP-717
		土師器皿	1.8 8.0	赤褐色 淡黄色	平底より距離し短く立ち上がり端部は丸く終る		口縁部にヨコナゲ	SP-727
131	129	土師器皿	1.5 8.0	赤褐色 灰白色 赤黄褐色	底部よりゆるやかに外上方に開く 端部は丸く終る 口縁部に厚みをもつ		口縁部にヨコナゲ	SP-727
		土師器皿	1.7 8.0	赤褐色 淡黄色	厚さのある底部から外上方に伸び端部は丸い		口縁部にヨコナゲ	SP-727
131	129	土師器皿	1.6 8.2	赤褐色 灰白色 赤淡黄色	平底より距離し外上方へ伸びる 変形		口縁部にヨコナゲ	SP-727
		土師器皿	1.5 8.3	赤褐色 灰白色	底部から端部まで内厚で均質		口縁部にヨコナゲ	SP-727
131	129	土師器皿	1.8 8.1	赤褐色 赤黄色	底部から鈍く屈曲し外上方へ伸びる 口縁部に厚みが あり端部は丸く終る		口縁部にヨコナゲ	SP-727
		土師器皿	1.9 8.0	赤褐色 にぶい褐色	底部から鈍く屈曲し外上方へ伸び端部は上方に押される		口縁部はヨコナゲ ナゲによる鈍い模様	SP-727

遺物観察表

標本番号	種別	若種	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手加	図録番号
121	1010	土師器皿	1.5	赤褐色	偏平で小さい。口縁は内湾気味	摩耗している	SP-267
			8.1	灰黄褐色			
	1011	土師器皿	1.8	赤褐色	ゆるやかに口縁へ立ち上がり頸部は丸く内湾する	口縁部はココナデ	SP-267
			8.1	灰黄色			
	1012	土師器皿	1.8	赤褐色	いびつ	口縁部はココナデ	SP-267
			8.2	灰黄褐色			
	1013	土師器皿	1.7	赤褐色	肉厚で口縁に内湾する	口縁部はココナデ	SP-267
			8.0	灰黄色			
	1014	土師器皿	1.4	赤褐色	口縁部で内湾し底部はやや角ばる	口縁部はココナデ ナデによる線縁	SP-267
			8.2	灰黄褐色			
1015	土師器皿	1.5	赤褐色	底部より口縁部の方が厚みをもつ 口縁部に内湾する	口縁部はココナデ 口縁部に厚みをもつ	SP-267	
		7.9	灰黄色				
1016	土師器皿	1.9	赤褐色	小さく丸みがある 器形は整っている	ナデ ナデによる線縁 口縁部から底部にナデ	SP-267	
		7.9	灰黄色				
1017	土師器皿	1.5	赤褐色	平底から短く内湾する 底部に尖り気味	口縁部はココナデ	SP-268	
		8.2	灰黄褐色				
1018	土師器皿	1.8	赤黄褐色	平底からゆるやかに上方へ開き口縁部へ続く 頸部	口縁部はココナデ 紋部に押押え	SP-270	
		9.2	灰白褐色				
1019	土師器皿	2.0	赤褐色	少しいびつな平底からゆるやかに上方へ伸び口縁部	口縁部はココナデ 底部に押押え	SP-270	
		10.0	灰黄褐色				
1020	土師器皿	1.7	赤褐色	厚みをもた底部に凹凸は見られるが深さがある	摩耗しているが口縁部にナデによる線縁	SP-270	
		8.1	灰白色				
1021	土師器皿	1.7	赤褐色	丸みのある底部と内湾する口縁を有する	摩耗しているが口縁部にナデによる線縁	SP-270	
		8.2	灰白色				
1022	土師器皿	1.4	赤褐色	器壁は薄い 屈曲し短く立ち上る口縁部 その頸部	口縁部はココナデ ナデによる線縁	SP-270	
		8.4	灰白色				
1023	土師器皿	1.4	赤褐色	偏平で底部はうすい 口縁は内湾さみ	摩耗している	SP-270	
		8.1	灰白色				
1024	土師器皿	1.5	赤褐色	いびつ 器壁の厚みは均質ではない	口縁部はココナデ ナデによる線縁	SP-270	
		8.0	灰白色				
1025	土師器皿	1.5	赤褐色	偏平である 口縁に内湾し角ばる	口縁部はココナデ ナデによる線縁	SP-270	
		8.1	灰白色				
1026	土師器皿	1.2	赤褐色	偏平 底部より口縁の方に厚みをもつ	摩耗している	SP-270	
		8.2	灰白色				
1027	土師器皿	1.4	赤褐色	楕円形 口縁部は内湾する	摩耗している	SP-270	
		8.1	灰白色				
1028	土師器皿	1.6	赤褐色	偏平な器形で口縁は短かく内湾する	摩耗している	SP-270	
		8.4	灰黄色				
1029	土師器皿	1.5	赤褐色	偏平な器形 短く立ちあがる口縁は内湾する	口縁部はココナデ	SP-270	
		8.0	灰白色				

遺物観察表

図録番号	遺物	器種	数量(個)	色調	形態・特徴	調査・手法	遺物名
130		土師器皿	1.3	赤褐色	丸みがあり口縁部は内湾する	摩耗している わずかにナデのあと	SP-798
			7.9	灰黄色			
		土師器鉢	1.7	赤褐色	丸みのある器形で口縁部は内湾する	口縁部はヨコナデ	SP-799
			8.9	灰黄色			
		土師器皿	1.4	赤褐色	扁平で底部から屈曲し短く外上方へ開く 端部は丸い	摩耗している	SP-799
		土師器蓋	1.5	赤褐色	底部から外上方へ開く 端部は丸い 兜形	口縁部はヨコナデ	SP-799
			7.9	灰白色			
土師器皿	1.3	赤褐色	平底から屈曲し垂直な立ち上がりをもつ	摩耗している	SP-799		
		土師器皿	1.4	赤褐色	厚みは均等 丸みがあり口縁部はやや丸がる	摩耗している	SP-799
			8.6	灰白色			
土師器皿	1.3	赤褐色	扁平で口縁は厚みをもつ	摩耗している	SP-799		
		土師器皿	1.7	赤褐色	丸底から内湾して口縁部へ伸び端部は尖る	口縁部はヨコナデ ナデによる模様	SP-799
			7.9	灰白色			
132		土師器皿	1.3	赤褐色	平底から短く屈曲する扁平な型	口縁部はヨコナデ ナデによる明確な模様	SP-799
			8.2	灰白色			
		土師器皿	1.4	赤褐色	扁平で口縁は内湾する	口縁部はヨコナデ 屈曲部にナデによる模様	SP-799
			7.9	灰白色			
		土師器皿	1.5	赤褐色	整った器形 口縁部は内湾する	口縁部はヨコナデ 屈曲部にナデによる模様	SP-799
			8.4	灰白色			
		土師器皿	1.6	赤褐色	扁平な器形 器壁は薄い 口縁は内湾がみで尖る	口縁部はヨコナデ	SP-799
		土師器皿	1.4	赤褐色	扁平で厚みは均等 口縁端部は上方に押される	口縁部はヨコナデ 屈曲部に明確な模様	SP-799
			8.4	灰白色			
土師器蓋	1.5	赤褐色	整った器形 口縁は内湾	口縁部はヨコナデ 屈曲部に鈍い模様	SP-799		
		土師器皿	1.5	赤褐色	丸みのある整った器形 口縁は内湾し丸くなる	口縁部はヨコナデ 屈曲部に模様	SP-799
			8.1	灰白色			
瓦 葺 桶 (大和) 皿-B			4.0	赤褐色	形整った器形と底部は厚い高さがある 内湾しながら立ち上	外面 不規則なヘラミダシ 口縁部はヨコナデによる鈍い模様 内面 間隔のある縦線が 認められるヘラミダシがわかる	SP-800
			12.2	粉白色	がりわずかに底面をみせて外反する 波線は上位に位置する		
土師器皿	1.2	赤褐色	平底から屈曲して短く立ち上がり口縁部は厚みをもつ	口縁部ヨコナデ	SP-800		
		土師器皿	1.2	赤褐色	平底からゆるやかに内湾して短く立ち上がる	底面に指押え 口縁部ヨコナデ	SP-800
			7.4	灰白色	口縁は薄く尖り気味		
土師器皿	1.4	赤褐色	底部中央がわずかに突出しゆるやかに屈曲したのち短く上方に伸びる 口縁端部はやや尖る	底部に指押え 口縁部にナデによる鈍い模様	SP-800		
土師器杯			123.6	赤褐色	底部欠損	指押えが連続する 口縁部はヨコナデ	SP-800
			14.6	灰褐色	内湾する体部とわずかに外反する口縁を有する		

遺物観察表

図号	遺物	器種	重量(g)	色調	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
133	瓦器類 (雑器) Ⅲ-5	1060	3.7	赤褐色	いびつ	外面 指押さえ 規則性のないヘラミガキ 内面 歪い凹線ミガキが確認する	SP-803
		1051	3.7	赤褐色	形状化した高台と内周しながら伸びる体部 わずかに	外面 指押さえ 数本のヘラミガキ	SP-803
		12.2	赤灰白色	外反する口縁部を有する 明瞭な凹線が一巡する	内面 口縁から見込みまで一巡する凹線ミガキ		
133	土師器類	1052	1.2	赤褐色	平底から短く外上方へ伸びる	口縁部はヨコナデ 口縁と立ち上がり直線部に絞線	SP-805
		8.0	灰白色				
133	瓦器類 (雑器) Ⅲ-10-C	1053	3.9	赤褐色	平底から「ハ」の字に屈曲したのも外上方へ伸び	外面 体部に指押さえ 口縁部に強いナデによる凹面が生じる	SP-805
		13.3	赤褐色	縁に続く 端部はやや角ばる	内面		
		1064	4.0	赤褐色	均等な厚みで口縁まで続く 形状化した高台と外反す	外面 指押さえ 数本のヘラミガキ	SP-805
133	瓦器類 (大和) Ⅲ-10-C	12.6	灰白色	口縁部を有する 端部上位に沈線一巡	内面 縁間のある凹線ミガキ 簡単な連続輪状ヘラミガキ		
		1056	5.0	赤褐色	高台より底部が低い位置にある 簡単な高台と凹面	外面 指押さえ	SP-811
		12.5	赤褐色	ある蓋盤 口縁上部に浅い沈線が施される	内面 やや縁間のある凹線ミガキ 連続輪が外周する形いヘラミガキ		
133	瓦器類 (大和) Ⅲ-C-D	1066	3.9	赤褐色	器壁は薄い 高台より底部の方が低い	外面 連続する指押さえ 数本の不規則なヘラミガキ	SP-812
		12.2	赤灰白色	口縁部で外反し沈線は上端部に位置する	内面 縁間の大い凹線ミガキが口縁より底部におり		
		1067	3.8	赤褐色	高台と底部が等しい位置にある 厚みのある蓋部から外上	外面 不明瞭なヘラミガキ	SP-812
133	瓦器類 (大和) Ⅲ-B	12.0	赤灰白色	方へ開く体部 口縁部では外反気味 沈線は上位にあり	内面 やや縁間のある凹線ミガキ 簡単な連続輪状ヘラミガキ		
		1058	2.4	赤い褐色	器壁は薄い 内周気味に外上方に伸びる 高台は短く	外面 指押さえ 高台は貼り付け	SP-823
		2.2	灰白色	小さな	内面 見込みにおおかにヘラミガキ 内面に施し		
133	瓦器類 (大和) Ⅲ-B	1059	3.0	赤褐色	高台に高さがある ゆるやかに外に伸びる	外面 高台は貼り付け ナデ	SP-823
		14.8	赤灰白色	丸く終る	内面 わずかにヘラミガキ 内面に施し		
		1060	2.0	赤褐色	底部中央が突出し口縁部は外上方へ向かう 端部は丸く	口縁部はヨコナデ	SP-826
133	土師器類	7.8	赤褐色	に凹線 納められる 完形			
		1061	2.3	赤褐色	底部中央が突出し口縁部は外上方へ向かいわずかに外	口縁部はヨコナデ ナデによる絞線	SP-826
		8.3	赤褐色	反したのも端部は丸く終る			
133	土師器類	1062	1.7	赤褐色	底部中央がわずかに突出し口縁部は外上方へ伸びる	口縁部はヨコナデ ナデによる絞線	SP-826
		7.8	淡黄色	は丸く終る			
		1063	2.4	赤褐色	平底から内周気味に外上方へ伸びたのも短く外反し	底部に指押さえ 口縁部にヨコナデによる凹面	SP-826
133	土師器類	11.5	淡黄色	部はやや角ばる	口縁部ヨコナデ		
		1064	2.7	赤褐色	平底から外上方へ伸びる	底部に指押さえ 口縁部にヨコナデによる絞線	SP-826
		11.0	淡黄色	角ばる			
133	土師器類	1066	2.6	赤褐色	平底から屈曲し外反して口縁へ続く 端部は外へ肥厚	底部に指押さえ 口縁部ヨコナデ	SP-826
		22.2	赤い褐色	し外伸する端部を有する 内面に沈線あり			
		1066	2.5	赤褐色	平底からゆるやかに外上方に伸びる	底部に指押さえ	SP-826
133	土師器類	15.0	灰白色	丸く終る			
		1067	1.4	赤褐色	扁平な器形で端部は内周する	指押さえ	SP-826
		8.0	赤褐色				
133	土師器類	1068	3.5	赤褐色	平底から内周気味に外上方に伸びる	外面 高台は貼り付け 断面台形	SP-826
		10.7	赤褐色		内面 赤いヘラミガキ 見込みは凹線による連続輪状ヘラミガキ		
134	土師器類	1.5	赤褐色	底部から屈曲して外上方に立ち開き	口縁部はヨコナデ ナデによる絞線	SP-919	
		8.4	灰白色	角ばる			

遺物観察表

調査年度	遺物番号	器種	重量(g)	色調	形態・特徴	周繋・手法	遺物名
134	1070	土師器皿	1.6 8.5	赤褐色 灰白色	平底からゆるやかに口縁部に狭く 肩部は丸く内湾する	口縁部はヨコナゲ ナゲによる縁線	SP-919
	1071	土師器皿	1.7 8.5	赤褐色 灰黄色	底部中央が少し高くなっている 屈曲して外上方に短く開き口縁は内湾する	口縁部はヨコナゲ ナゲによる明瞭な縁線	SP-919
	1072	土師器皿	1.5 8.4	赤褐色 灰白色	底部中央が少し高くなり屈曲して外上方に短く開き口縁は直立	口縁部はヨコナゲ 屈曲部にナゲによる明瞭な縁線	SP-919
	1073	土師器皿	1.5 8.3	赤褐色 灰黄色	底部中央がわずかに高い 屈曲して外上方に伸びたのも口縁部は内湾する	口縁部はヨコナゲ ナゲによる縁線	SP-919
	1074	土師器皿	1.3 8.4	赤褐色 灰白色	底部中央が少し高くなっている 屈曲して外上方へ伸びたのも口縁は内湾	口縁部はヨコナゲ	SP-919
	1075	土師器皿	1.4 8.4	赤褐色 灰白色 赤灰黄色	平底からゆるやかに外上方へ短く伸びる 口縁は内湾		SP-919
	1076	土師器皿	1.3 8.8	赤褐色 灰白色	底部中央がわずかに高くなりゆるやかに外上方に伸びる 口縁は内湾		SP-919
	1077	土師器皿	1.5 8.4	赤褐色 灰白色	底部中央がわずかに高く屈曲したのも口縁部は直行	口縁部はヨコナゲ	SP-919
	1078	土師器皿	1.4 9.8	赤褐色 灰白色 赤灰黄色	平底より屈曲して外上方に短く開く 口縁は直行	立ち上がり屈曲部にナゲによる縁線	SP-919
	1079	瓦 葺 瓦 (和瓦) V-1	3.9 14.0	赤褐色 灰白色	形骸化した高台と偏平な器形 口縁に波線は無し 端部は外反する	外面 微押え 凹凸のある形骸 口縁は強いヨコナゲ 内面 0.3mm程度の深いヘラミガキが見える	SP-1009
134	1080	黒土器土台 器内赤土台	4.3 16.8	赤褐色 暗紅色	低い高台と内湾しながら外上方に伸びる口縁部を有する 見込みの広いもの 肩部は薄く丸い	外面 連続する指押え 貼り付け高台 内面 器縁と連続輪の重なる形骸 見込みはジグザグヘラミガキ	SP-1164
	1081	土師器杯	2.6 10.2	赤褐色 灰褐色 赤灰褐色	平底からゆるやかに屈曲し外上方に開く 肩部は薄く口縁部は外反して端部は丸く終る	外面 口縁部はヨコナゲ 内面 口縁近くにおわずかにヘラミガキが認められる 沈線あり	SP-1178
	1082	土師器杯	3.5 15.3	赤褐色 明赤褐色 粉紅色	低い高台 ゆるやかに逆「ハ」の字に開き口縁部は外反気味で端部は上方へつまみあげ	外面 口縁部はヨコナゲ 数本のヘラミガキ 内面 前のヘラミガキがわずかに見える	SP-1078
135	1083	土師器皿	1.4 8.1	赤褐色 灰黄色	底部より口縁の方が厚みがある 平底から屈曲して外上方へ内湾部は丸い	口縁部はヨコナゲ 屈曲部に明瞭な縁線	SP-1188
	1084	土師器皿	1.5 8.2	赤褐色 灰白色	平底からゆるやかに外上方へ開き口縁部は内湾気味で丸く終る	口縁にヨコナゲ	SP-1188
	1085	土師器皿	1.5 8.4	赤褐色 灰白色 赤灰黄色	平底から屈曲し短く直行する	厚紙にしている	SP-1188
	1086	土師器皿	1.4 8.0	赤褐色 灰白-緑褐色	偏平な器形で短く外上方へ伸び口縁は内湾する	口縁部ヨコナゲ	SP-1188
	1087	土師器皿	1.4 7.8	赤褐色 灰黄色	平底から屈曲し外反気味に口縁へ狭く	立ちあがり屈曲部に縁線	SP-1188
	1088	土師器皿	1.3 7.7	赤褐色 灰黄色	偏平な器形 口縁部は内湾し丸く終る	厚紙にしている	SP-1188
	1089	土師器皿	1.6 7.8	赤褐色 灰黄色	円内のある底部から屈曲し外上方へ伸び端部は内湾する	口縁部はヨコナゲ 屈曲部に縁線	SP-1188

遺物観察表

種別	種名	器種	数量(a)	色調	形態・特徴	調査・手法	透視名	
135		1000	土師器皿	1.3 7.8	赤褐色 赤黄色	底面中央が少し高くなり唇縁は薄い	口縁部はヨコナデ	SP-1189
		1001	土師器皿	1.5 7.8	赤褐色 赤黄褐色	丸底よりわずかに唇面をみせし縁端部はわずかに内湾する	口縁部はヨコナデ 唇面部に絞縁	SP-1188
		1002	土師器皿	1.3 8.4	赤褐色 赤黄褐色	縁形はいびつ	口縁部はヨコナデ	SP-1187
		1003	土師器皿	1.3 7.8	赤褐色 灰白-淡褐色	ゆるやかに内湾して口縁に絞く	摩耗している	SP-1186
		1004	土師器皿	1.8 8.2	赤褐色 灰白-緑褐色	ゆるやかに内湾しながら口縁へ絞く	摩耗している	SP-1185
136		1005	土師器皿	1.6 9.6	赤褐色 灰白色	大ぶりな器形 ゆるやかに外上方に開き口縁端部は上方へつまみあがる	底面に指押さえ 口縁部はヨコナデ 端部は上方に つまみあがる 「て」の字状口縁	SP-1184
		1006	土師器皿	1.8 9.6	赤褐色 灰白色	平肉な底面から唇面したの外上方に開く 口縁端部は上方へつまみあがる	底面に指押さえ 口縁部にヨコナデ 「て」の字状口縁	SP-1183
136		1007	土師器皿	1.9 9.5	赤褐色 灰白色	厚みのある丸底からゆるやかに外上方へ開き口縁端部は上方へつまみあがる	底面に指押さえ 口縁部にヨコナデ 「て」の字状口縁	SP-1182
		1008	土師器皿	1.8 9.6	赤褐色 灰白色	深い平底から唇面し外上方へ立ち上がり口縁端部は上方へつまみあがる	底面に指押さえ 口縁部にヨコナデ 「て」の字状口縁	SP-1181
		1009	土師器皿	1.8 9.6	赤褐色 灰白色	厚みがあり 口縁部に段をなす 端部は上方へつまみあがる	口縁部はヨコナデ ナデによる明確な絞縁 「て」の字状口縁	SP-1180
		1100	土師器皿	2.2 10.0	赤褐色 灰白色	丸みのある底面より口縁部が外上方に伸びる 端部は厚く丸く絞る	口縁部はヨコナデ 底面に指押さえ	SP-1179
136		1101	土師器皿	1.7 9.4	赤褐色 灰白色	丸みのある底面と外反する口縁を有する 端部は厚みがありやや角ばる	口縁部はヨコナデ	SP-1178
		1102	土師器皿	1.9 10.3	赤褐色 灰白色	平たい底から外反気味に口縁が伸びる 端部は上方に押さされる	口縁部はヨコナデ	SP-1177
		1103	土師器皿	2.1 10.1	赤褐色 灰白色	丸みのある底面からわずかに唇面し外反する口縁部 端部は角ばる	口縁部はヨコナデ 立ちあがり唇面部に絞縁	SP-1176
136		1104	土師器皿	1.4 9.5	赤褐色 灰白色	丸みのある底面と段をなす口縁部を有する 端部は上方につまみあがる	口縁部はヨコナデ ナデによる明確な絞縁 「て」の字状口縁	SP-1175
		1105	土師器鉢	3.6 11.4	赤褐色 灰白色 赤褐色	内湾する体部と直行する口縁をもつ	外面 ハナメ(7末/1.34) 内面	SP-1174
131		1106	赤褐色 灰白色 赤褐色	4.1 6.8	赤褐色 灰白色 赤褐色	高台は丸みのある台形の内湾して体部は立ち上がる 口縁部欠損	外面 深なヘラミガキ 貼り付け両向 全面に磨し 内面 深な磨減ミガキ 見込みはジグザグ 全面に磨し	SP-1304
		1107	土師器皿	1.5 8.1	赤褐色 灰白色	平底から唇面して外上方へ開く 口縁部でわずかに外反 端部は角ばっている	口縁部はヨコナデ 唇面部に明確な絞縁	SP-1303
		1108	瓦 筒 (大和) 灰白(赤)	4.9 14.8	赤褐色 灰白色	底部欠損 内湾して立ち上がる体部と外反する口縁部を有する 端部1辺に絞縁は付する	外面 浅磨する磨研丸の上に分節性はあるが深なヘラミガキ 内面 磨ししているが赤い磨減ミガキ 見込みは浅磨減ヘラミガキ	SP-1302
		1109	土師器鉢	4.5 16.0	赤褐色 赤褐色	高台部より口縁上端部に面をなし内側に肥厚する	外面 口縁部ヨコナデ 唇部に指押さえ 内面 口縁部ヨコナデ 体部ユビナデ	SP-1301
		1110	土師器鉢	4.5 16.0	赤褐色 赤褐色	高台部より口縁上端部に面をなし内側に肥厚する	外面 口縁部ヨコナデ 唇部に指押さえ 内面 口縁部ヨコナデ 体部ユビナデ	SP-1300

遺物観察表

調査年度	遺物番号	器種	数量(n)	色澤	形態・特徴	調整・手法	遺跡名
130	1110	瓦 管 蓋 (大和) B	高さ 6.6	赤褐色	短い筒は上方に反り口縁は「く」の字に屈曲し肩部は	外面 頸部に指押さえ、口縁と貼り付けた筒はコソナデ	SP-140
			直径 31.6	灰白色	内側に折り返し肥厚する	内面 板ナデ 厚縁あり	
	1111	平 瓦	長さ 17.3	赤褐色	煤付着	凹面 ヘラケズリ 側面に屈取り	SP-140 (133)
			幅 22.4	赤褐色		凸面 葉井形タタキ	
	1112	瓦 管 輪 (大和) B-C	高さ 3.7	赤褐色	高台より底部が低い位置にある 口縁部でわずかに外	外面 指押さえ とぎれとぎれの雑なヘラミガキ	SP-140
			直径 13.8	赤灰色			
	1113	瓦 管 輪 (柳屋) I-2	高さ 6.1	赤褐色	しゅかりとした高台から均等な厚みの体部が内折して立ち	外面 高台貼り付けナデ 3分割ミガキ 底面に×印	SP-135
			厚さ 15.0	赤灰白色			
	131	平 瓦	長さ 16.4	赤褐色		凹面 ヘラケズリ	SP-135
			幅 9.9	赤褐色			
	1115	平 瓦	長さ 22.5	赤褐色	煤付着	凹面 ヘラケズリ	SP-135
			幅 22.5	赤褐色			
142	1116	土 輪	高さ 3.8	赤褐色	紡錘形	中心に径0.2cmの孔が穿たれる	SP-601
			最大径 3.3	赤褐色			
	1117	土 輪	高さ 4.5	赤褐色	紡錘形	中心に径0.3cmの孔が穿たれる	SP-114
			最大径 3.9	黄褐色			
1118	土 輪	高さ 3.9	赤褐色	紡錘形	中心に径0.3cmの孔が穿たれる	SP-135	
		最大径 3.8	灰色				
1119	段 輪 ?	直径 3.4	赤褐色	卵形		SP-407	
		厚さ 3.9	灰褐色				
143	1120	黒色土製 内系口輪	高さ 5.5	赤褐色	頸部が厚くしゅかりした作り 体部から外上方へ伸び	外面 内外とも厚縁している	田原
			最大径 14.6	赤褐色			
	1121	土製小皿	高さ 2.1	赤褐色	ややびつ 平底から逆「ハ」の字の口縁を有し肩部	口縁部はコソナデ	田原
			直径 12.0	灰白色			
	1122	七輪型蓋	高さ 4.6	赤褐色	口縁部は体部よりくの字に屈曲し外方に広がって肩部は	内外とも口縁部コソナデ 厚縁のため他の調整は行	田原
			直径 19.0	黄褐色			
143	1123	瓦製口輪	高さ 6.0	赤褐色	内湾ぶみに外上方に伸び口縁でやや外反 肩部は丸く	外面 ナデによる深い横縁	田原
			直径 13.0	灰白色			
	1124	磁製輪蓋	高さ 3.6	赤灰白色	高台は低めの輪高台で内縁する端面を有する	外面 高台は貼り付け	田原
			直径 19.7	赤灰白色			
1125	磁製輪蓋	高さ 1.8	黒色	高めの輪高台をもつ丁寧な作り	外面 高台は貼り付け	田原	
		直径 6.3	赤褐色				内面
1126	磁製輪蓋	高さ 1.9	赤褐色	厚みと丸みのある器形 円筒状高台をもつ	外面 高台に胴状の糸切り痕	田原	
142	1127	土 輪	高さ 5.5	赤褐色	紡錘形	中心に径0.6cmの孔が穿たれる	田原
			最大径 5.9	赤褐色			
			直径 4.6	赤褐色			
1128	土 輪	高さ 4.4	赤褐色	紡錘形	中心に径0.4cmの孔が穿たれる	田原	
		最大径 4.9	黄灰色				
1129	土 輪	高さ 5.1	赤褐色	断面「丁」字形	側面中央にV字の溝がある	田原	

遺物観察表

国名	遺物	部 種	重量(g)	色 調	形 態・特 徴	調 整・手 法	遺構名	
140	1130	緑釉陶器	2.4	色の味黄～ 灰白色	体部は外方に大きく広がりがり口縁は外反する 端部は尖く終る 底の円板状高台	外面	口縁部は回転ナデ 高台は削り出し	日曜
			14.4	黄褐色		内面		
138	1131	砂 陶 器	上辺径2.0	赤 灰黄褐～ 黄褐色	全体に摩耗している 滑石製	外面	中心に径0.6cm程度の孔が上辺下辺から繋される	日曜
			下辺径0.7			内面		
142	1132	土師器杯	3.0	赤褐色 灰白～ 淡黄褐色	平皿から逆「ハ」の字に屈曲して外上方に伸びる端部は 尖り加味	外面	連続する指押え 口縁部はヨコナデ	日曜
			10.6			内面		
143	1133	瓦 器 類 (大和?)	3.6	赤褐色 灰白色 影灰色	底面から内側縁に外上方に伸びる端部は鋭い 蓋部全体が「ハ」 の字型に近く 口縁に深い凹溝一列通る	外面	体部2/3まで太いヘラミガキと細いミガキが重なる	日曜
			8.2			内面		

木製品観察表

図版No.	種別	遺物No.	器 種	遺物名	遺構内での使われ方	法 量 (cm)			特 徴
144	134	1	欄 台	SE-87		7.6(径)	0.8(厚)		縁辺が高く、中央に金属が残る
		2	折 敷	SE-36		28.5	7.5	0.6	曲物内より検出 刃物傷多数
		3	折 敷	SE-36		31.4	6.6	0.8	墨書あり 片面に無数の刃物傷
		4	曲 物	SE-34	水 溜	36.0(径)		17.5(高)	内面の刻み目は粗い 縦じ皮残存
		5	曲 物	SE-36	水 溜	38.4(径)		9.2(高)	内面に縦方向の刻み目 縦じ皮残存
		6	曲 物	SE-36	水 溜	27.2(径)		10.5(高)	5の下端として検出 木釘穴が残る
145	135	7	笥 材	SE-41	井 戸 側	39.0	24.5	1.7	箔紙の切り込み部分に漆が残る 樹種はスギ
		8	笥 材	SE-41	井 戸 側	36.1	23.0	1.5	7、9と同仕様
		9	笥 材	SE-41	井 戸 側	36.6	21.3	1.6	7、8と同仕様
145	136	10	枕	SE-41	井 戸 側	49.2		4.0(最大)	先端に加工痕
		11	枕	SE-41	井 戸 側	45.3		3.7(最大)	先端に加工痕
		12	枕	SE-41	井 戸 側	55.7		3.5(最大)	先端に加工痕
145	137	13	枕	SE-41	井 戸 側	55.4		3.7	先端に加工痕
		14	曲物底板	SE-42	水溜と井戸側の間にしきつめる	48.1	23.5	1.3	縦じ皮が残る 多数の刃物傷残る
		15	曲物底板	SE-42	水溜と井戸側の間にしきつめる	44.4	14.5	1.5	縦じ皮が残る 多数の刃物傷残る
145	137	16	曲物底板	SE-42	水溜と井戸側の間にしきつめる	42.0	24.0	1.0	木釘穴が縁辺に残る
		17	曲 物	SE-42	水 溜	46.5(径)		31.6(高)	1重の銅板に2枚のマワシ 縦じ皮、木釘残存
		18	曲 物	SE-42	水 溜	32.6(径)		21.2(高)	2重の銅板と1枚のマワシ
146	138	19	角 材	SE-42	井戸側の横棧	89.6	6.2	4.5	両端に目違いの物を切る
		20	角 材	SE-42	井戸側の横棧	84.9	6.6	5.9	19と同仕様
		21	角 材	SE-42	井戸側の横棧	82.0	6.8	5.7	樹種はアスナロ
		22	角 材	SE-42	井戸側の横棧	78.6	6.8	3.7	
		23	曲物底板	SE-42	水溜と井戸側の間に敷く	48.8	24.1	1.4	縦じ皮が残る 弧形にくる 無数の刃物傷
		24	曲物底板	SE-42	水溜と井戸側の間に敷く	37.6	21.0	0.9	木釘のあとが縁辺に残る 弧形
146	145	25	不明品	SE-42	水溜と井戸側の間に敷く	37.2	30.8	1.3	中央に円形孔 周縁部より3cm内側でゆるい径差をつくる
146	146	26	曲 物	SE-42	水 溜	22.2(径)		15.2(高)	小ぶりだが残存状態良好 紙板は厚く、 周縁は斜めにカット 縦じ皮のそばに 「井(井?)」の刻印 樹種はヒノキ
147	139	27	不明品 納版?	SE-43		27.3	11.1	3.7	方形の穴に歯が3ヶ所残る 穴は計7ヶ 所 中央は貫通する 破損箇所を補修し たつ状の木皮がわずかに残る
		28	椀 椀	SE-43		9.4	4.2	0.9	樹種はツゲ
		29	曲 物	SE-43	水 溜	45.2(径)		22.8(高)	1重の銅板に2枚のマワシ 銅板を補修した小穴が多数 縦じ皮残存
147	140	30	角 材	SE-43	井戸側の横棧	84.9	6.9	4.4	納部分が別材とこすれた痕が残る
		31	角 材	SE-43	井戸側の横棧	82.8	6.6	3.4	30と同仕様
		32	角 材	SE-43	井戸側の横棧	84.1	6.4	6.2	2方向から木組穴が施される 手斧あとが顕著

木製品観察表

図番No.	押印No.	遺物No.	器 種	遺 蹟 名	遺構内での使われ方	法 量 (cm)			特 徴
147	140	33	角 材	SE-43	井戸側の隅柱	81.6	8.7	6.0	32、34と同仕様
		34	角 材	SE-43	井戸側の隅柱	78.0	8.7	6.5	32、33と同仕様
148		35	曲 物	SE-44	水 溜	43.6(径)		16.9(高)	2重 縦じ皮残存 タテの割み目
147		36	曲 物	SE-44	水 溜	38.0(径)		17.0(高)	1重の割板と2枚のマワシ
148	141	37	曲 物	SE-44	水 溜	46.0(径)		29.6(高)	1重の割板と2枚のマワシ 縦方向と斜めの割み目が施される
147		38	曲 物	SE-44	水 溜	53.2(径)		30.8(高)	1重の割板に3枚のマワシ 縦方向と斜めの割み目が施される
148	142	39	曲 物	SE-46	水 溜	36.8(径)		18.2(高)	1重の割板と1枚のマワシ 縦じ皮、木釘が残存
		40	曲 物	SE-46	水 溜	33.6(径)		18.2(高)	1重の割板と2枚のマワシ
		41	曲 物	SE-46	水 溜	33.6(径)		15.6(高)	1重板 木釘穴数ヶ所
		42	曲 物	SK-98	水 溜	45.6(径)		23.0(高)	1重の割板と2枚のマワシ 縦方向と斜めの割み目
		43	曲 物	SK-98	水 溜	52.1(径)		31.7(高)	1重の割板と3枚のマワシ 丁寧な縦じ
		44	杭	SR-02	護岸用? (SR-02の研)	27.9		6.6	SR-02から数本検出される
151		45	不明品	SR-02		20.8		3.6	先端は鋭く尖る
149	143	46	曲 物	SE-23	水 溜	45.6(径)		31.6(高)	1重の割板に2枚のマワシ 4.8cm幅のヘギが縦に4ヶ所 そのうち1枚は一端が舟形に削られる
		47	曲 物	SE-24	水 溜	34.0(径)		17.0(高)	1重の割板と2枚のマワシ 48の下段として検出
		48	曲 物	SE-24	水 溜	36.5(径)		14.1(高)	1重の割板と1枚のマワシ 47の上段として検出
149		49	木 臼	SK-61	礎 板	26.2	24.9	10.0	上端に木芯より放射状の溝が残る 木表面上半分に手厚の痕 50、53、54と同個体
149	144	50	木 臼	SK-61	礎 板	26.1	16.4	6.1	49、53、54と同仕様
		51	曲 物	SE-30	水 溜	33.0(径)		21.7(高)	割板、マワシとも縦じが丁寧で残存 状態良好
149	145	52	納 杓	SK-68		14.6(径)	11.3(高)	59.0(柄)	曲物から柄が抜けなかったための木釘が残存 柄と曲物部のすりへりから右利き使用痕?
		53	木 臼	SP-2108	礎 板	30.0	24.0	10.0	49、50、54と同仕様
		54	木 臼	SP-1847	礎 板	27.4	17.2	9.2	49、50、53と同仕様
150	146	55	柱 根	SP-2230	柱 根	64.7		27.2(径)	木口に手斧痕が顕著
		56	柱 根	SP-1904	柱 根	21.4	15.6	14.0	三方向から抉りが施される
151		57	柱 根	SP-1714	柱 根	25.4	11.7	11.2	
151	147	58	扉 縁	SP-2164	礎 板	30.6	17.2	6.9	ドーナツ型
		59	柱 根	SP-2173	柱	32.3	15.7	10.3	
150		60	板 材	SP-2004	礎 板	76.6	14.5	4.0	
150		61	柱 根	SP-2214	柱	38.6	23.6	19.4	中央は空洞になっている

木製品観察表

国産No	邦産No	遺物No	器 種	遺物名	遺構内での使われ方	法 量 (cm)			特 徴
150	148	62	柱 根	SP-2084	柱	32.5	17.2	10.6	複雑な決りが施される
		63	板 材	SP-1906	礎 板	18.0	12.0	3.4	
		64	板 材	SP-1906	礎 板	24.0	14.8	6.3	中央部に貫通穴
149		65	杭	SK-84		42.1		6.8(径)	先端に加工痕
		66	杭	SK-84		47.4		4.6(径)	先端に加工痕
		67	杭	SK-84		46.8		4.4(径)	先端に加工痕
		68	杭	SK-84		43.7		5.3(径)	先端に加工痕
		69	杭	SK-84		42.5		5.3(径)	先端に加工痕
		70	杭	SK-84		35.6		5.0(径)	先端に加工痕
		71	杭	SK-84		23.3		4.8(径)	先端に加工痕
		72	杭	SK-84		30.3		4.0(径)	先端に加工痕
		73	杭	SK-84		28.9		4.1(径)	先端に加工痕
		74	杭	SK-84		30.0		5.4(径)	先端に加工痕
		75	杭	SK-84		40.2		5.6(径)	先端に加工痕
		76	棒状木製品	SK-84		162.0		8.0(径)	貫通する小穴が数ヶ所
		77	棒状木製品	SK-84		132.0		5.6(径)	76と対で使用?
		150		78	杭	SK-84		30.6	
79	杭			SK-84		35.3		5.2(径)	先端に細かい加工痕
80	木製杖木製品			SK-84		81.3	30.8	2.0	木製の可能性 弧形にくりぬく
81	板 材			SJ-01		47.2	30.0	1.6	
82	杭			SJ-01		14.8		5.2(径)	先端に加工痕
149		83	板 材	SJ-01		61.2	28.2	4.0	中央の楕円形の穴に杭が入った状態で検出
		84	杭	SJ-01		52.6		6.2(径)	先端に加工痕 木皮が残る
152	132	85	下 駄	ST-01		21.8	6.2	2.9	楕円形の透歯下駄 裏面の穿孔は後歯の前に位置する
		86	編 具	ST-01		14.8	3.9	2.4	中央が細くなり、全体に粗い削りあと
		87	球状木製品	ST-01		5.2(径)			中央に丸い溝がある 浮子?
		88	球状木製品	ST-01		5.2(径)			中央に丸い溝がある 浮子?
		89	球状木製品	ST-01		4.8(径)			球を刃物で切り落としている
		90	籠	ST-01		5.3(径)			削りが粗い
		91	釜	ST-01		7.0(径)			削りが粗い
		92	下 駄	ST-01		22.5	12.1	4.0	台幅が広い楕円形の透歯下駄 台表に足指の板 台裏は曲取
		93	埴	ST-01			18.4	5.7	残存状態良好
		153	153	94	折 敷	ST-01		21.2	6.8
95	曲物底板			ST-01		10.6	8.6	0.4	内端欠損
96	漆器柄底板			ST-01		8.1	6.4	1.0	
97	柄杓の柄			ST-01		5.3	1.2		先端部分別と同一個体
152		98	柄杓の柄	ST-01		10.8	1.9		97と同一個体 雲形に成形
153		99	曲 物	ST-05		14.4	5.6	0.2	楕円形容器の側板

木製品観察表

図録No.	種別No.	遺物No.	部 種	遺物名	遺構内での使われ方	法 量 (cm)			特 徴
103	153	100	扉懸状人型扉	ST-05		21.6	4.6	0.2	2重の板と纏じる小穴が両端にあったと思われる「金剛板」
		101	曲物	SK-15	水 溜	35.2(径)		13.7(高)	2重の側板 縦と斜めの刻み目 102と組み合わせた状態で検出
161	154	102	曲物	SK-15	水 溜	40.0(径)		13.6(高)	2重の側板 2重のマリシで構成
		103	漆 巾	SK-14		29.8	1.8	0.4	上部側面内角があり2ヶ所に焦げたあと
		104	杓子	SK-10		37.6		5.8	お玉の部分が小さい 粗削り
		105	漆器脚	SD-45		13.8(径)		4.8(高)	黒漆地に朱赤でモチーフは笹
		106	板 材	SK-40		47.9	9.0	2.8	
		107	曲物	SK-06	水 溜	38.0(径)		28.6(高)	1重の側板と2枚のマワシで構成 上下マワシ板の結びは逆 刻み目は縦
		108	折敷	SE-07		28.9	21.6	0.6	無数の別物部 組板に転用?
153	155	109	曲物底板	SE-07		46.9(径)		1.0	やや楕円形 2つに割れている
		110	折敷	SE-07		29.2	28.4	0.6	縁皮が3辺に残る 別物部多数
		111	曲物	SE-07	水 溜	46.4(径)		12.0(高)	2重の側板 刻み目は縦
		112	曲物	SE-07	水 溜	44.6(径)		25.1(高)	111と組み合わせて検出 1枚の側板と2段のまわし板 刻み目は縦+斜め
		113	曲物容器	SE-11		17.8(径)		8.0(高)	114の曲物内で検出 水汲みに使用?
156	156	114	曲物	SE-11	水 溜	53.3(径)		34.0(高)	1重の側板と3枚のマワシ 縦の刻み目 7.5cm幅のヘギが3枚 下辺に木釘穴残る 出土曲物の中最大を測る
		115	板 材	SE-11	曲物の底板	55.6	34.4	3.9	116と組み合わせて114の曲物の底板として検出
		116	板 材	SE-11	曲物の底板	59.5	34.6	4.0	115と同仕様 曲物のあとが残る
		117	箱 材	SE-11	井 戸 側	49.5	30.0	1.0	118, 120, 121と組み合わせて箱組み 片面のみ黒漆塗布、パチ形に木地が残る 短側板
154	157	118	箱 材	SE-11	井 戸 側	49.6	27.5	1.1	117と同仕様の短側板 117, 118と120, 121は凹凸状の加工
		119	箱 材	SE-11	井 戸 側	65.0	29.9	1.1	底板? 釘穴が残る 帯状に木地が残る
154		120	箱 材	SE-11	井 戸 側	64.8	30.0	1.2	片面に舌状に木地が残る 凹凸状の加工 長側板
155	158	121	箱 材	SE-11	井 戸 側	64.6	30.0	1.1	120と同仕様 長側板
		122	角 材	SE-11	井 戸 履 版	70.5	16.0	13.4	底辺に加工痕が残る
		123	板 材	SE-11	井 戸 側 履 板	64.5	18.0	5.8	
		124	板 材	SE-11	井 戸 側 履 板	100.0	28.6	5.0	裾部が斜めにカット 下辺より1/3位置に割材でこすれた痕
157	159	125	板 材	SE-11	井 戸 側 履 板	58.4	8.0	3.8	
		126	板 材	SE-11	井 戸 側 履 板	57.2	30.0	4.4	

木製品観察表

図番No	標記No	遺物No	器種	遺構名	遺構内での使われ方	法 量 (cm)			特 徴
157	158	127	板材	SE-11	井戸側壁棧	57.1	15.4	4.5	135と同仕様
		128	板材	SE-11	井戸側壁棧	55.8	10.6	4.8	両端を細く削る 125、134と同仕様
		129	角材	SE-11	井戸側壁柱	56.4	15.0	8.0	130と同仕様
		130	角材	SE-11	井戸側壁柱	58.0	15.4	10.6	129と同仕様 2方向から挟り
157	159	131	角材	SE-11	井戸側壁柱	117.0	15.4	9.2	132と同仕様 3方向から挟り
		132	角材	SE-11	井戸側壁柱	122.0	15.0	9.2	131と同仕様 2方向から挟り
156	160	133	板材	SE-11	井戸側壁板	54.2	37.0	6.3	片面に手斧あとが顕著 126と類似
		134	板材	SE-11	井戸側壁棧	97.0	9.4	4.4	両端が細く削られる 125、128と同仕様
		135	板材	SE-11	井戸側壁棧	81.1	15.5	3.6	相欠きの納が削られる 127と同仕様
157	161	136	板材	SE-11	井戸側壁板	84.5	29.0	3.2	片面に別材でこすれた痕
		137	板材	SE-11	井戸側壁板	79.4	27.2	2.5	別材でこすれた痕
		138	板材	SE-11	井戸側壁板	111.7	16.5	5.2	
		139	板材	SE-11	井戸側壁板	93.8	25.9	4.2	円形の挟りが数ヶ所に残る
159	162	140	角材	SE-11	井戸側壁柱	70.0	15.0	9.0	複雑な木組穴
		141	角材	SE-11	井戸側壁	61.4	15.8	13.1	裾部に加工痕 122と類似
157	163	142	角材	SE-11	井戸側壁柱	128.1	15.0	9.5	2方向から挟り 132と対角線の柱
		143	角材	SE-11	井戸側壁柱	126.0	14.1	10.0	2方向から挟り
155	164	144	板材	SE-11	井戸側壁板	82.4	35.2	5.4	両面に手斧痕が顕著
		145	板材	SE-11	井戸側壁板	100.8	30.4	5.6	木目に平行して虫喰い穴?
156	165	146	板材	SE-11	井戸側壁板	45.7	20.0	3.7	木口に手斧あと
		147	板材	SE-11	井戸側壁板	43.6	12.0	5.4	四角い挟り
		148	板材	SE-11	井戸側壁板	88.6	25.2	4.1	
		149	板材	SE-11	井戸側壁板	88.7	33.7	3.6	片面に別材の痕
158	167	150	板材	SE-11	井戸側壁板	120.0	26.2	6.0	両側面に四角い挟り、片面に手斧のあと
		151	板材	SE-11	井戸側壁板	107.6	29.2	9.2	片面に両端から深い挟り
156	168	152	板材	SE-13	井戸側壁板	45.3	11.8	3.0	
		153	板材	SE-13	井戸側壁板	45.5	12.6	3.2	片面に手斧痕
160	169	154	板材	SE-13	井戸側壁板	49.5	18.8	4.5	断面カマボコ状
		155	板材	SE-13	井戸側壁板	34.6	12.8	2.6	
159	170	156	板材	SE-13	井戸側壁板	50.6	28.5	5.5	厚くL字に屈曲する 転用材?
		157	板材	SE-13	井戸側壁板	59.6	49.3	4.0	
161	171	158	南円形曲物	SE-18	水 溜	69.3(径)		24.2(高)	丁家なつくり 隅丸にのめめの対み目
		159	曲物	SE-18	水 溜	33.8(径)		18.7(高)	径の内面より縁出 縁の隅ら目 着し表1月止め
		160	下駄	SP-157		24.2	9.7	2.8	楕円形の差面下駄 足指の厚板板が台表に、台裏にノミあとと顕著
		161	柱根	SP-1104		59.6	13.4	14.3	
172	172	162	板材	SP-619	礎 板	35.2	24.6	13.0	遺存状態悪い 横方向に別材の痕
		163	柱根	SP-515		45.0	16.1	14.9	
		164	板材	SP-451	礎 板	19.5	7.7	3.5	四角い挟り
		165	板材	SP-451	礎 板	20.0	10.5	4.7	四角い挟り
		166	柱根	SP-1104		85.3	13.3	12.7	

K区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (ca)	厚さ(m)	平面形	時代	遺跡		遺物		備考
							溝	礎	埴	瓦	
SD-03	4、14	第1	115、1,580	21	—	近世	—	—	—	—	水路 L・M区へ続く
55	8、18	第1	137、1,660	4~23	—	近世	6	1	—	—	水路 SD-90に合流 L区に続く
87	1、11	第1	165、3,180	12~30	—	近世	—	—	—	144	水路
88	1、2	第1	117、1,700	7~25	—	近世	—	—	—	—	水路 SD-87に合流
89	3、13	第1	82、2,100	14	—	近世	—	—	—	—	水路 SD-88に合流 SD-91を合流
90	14~18	第1	50、3,750	4~12	—	近世	—	—	—	—	SD-03、56に合流
91	11、12	第1	38、1,430	7	—	近世	—	—	—	—	竈溝?
99	8、18	第2(上)	385、1,565	5~22	—	13	22	2、4	93	79、80、85	排水溝?
98	6、16	第2(上)	182、1,560	13~21	—	12末~13初	22	3	93	81	区画溝?
92	20	第2(上)	48、656	17~58	—	中世	—	—	—	—	
SB-34	18	第2(上)	75、88	51	楕円形	12末~13初	8	5	87,134	74,134	動物
35	19	第2(上)	102、95	53	不整形	12末~13初	—	—	87	74	井戸形跡残存せず 土坑?
36	18	第2(上)	93、102	66	不整形	12末~13初	9	—	134	144	動物
37	9	第2(上)	98、116	60	隅丸方形	中世	—	—	—	—	井戸形跡残存せず 土坑?
38	8	第2(上)	131、134	78	不整形	12末	10	5	87	74	井戸形跡残存せず 土坑?
39	7	第2(上)	112、105	40	不整形	12末~13初	11	—	87	75	井戸形跡残存せず 土坑?
40	7	第2(上)	105、116	49	不定形	13前	—	—	87	—	井戸形跡残存せず 土坑?
41	19	第2(上)	108、105	76	隅丸方形	13前	12	—	135,136	144,145	井戸側と動物
42	8	第2(上)	252、230	122	隅丸方形	13前	13	6	80、137~9	75、145、146	井戸側と動物
43	8	第2(上)	307、143	94	隅丸長方形	12末~13前	14	5	388、138、140	76,147	井戸側と動物
44	18	第2(上)	193、150	76	隅丸方形	13前	15	—	89,141	147,148	動物、石
45	18	第2(上)	163、165	54	不定形	13前	16	—	89	76	井戸形跡残存せず
46	18	第2(下)	192、142	108	不定形	12末~13初	23	—	89,142	76,148	動物 5段以上
47	18	第2(下)								76	
SK-90	10	第2(上)	116、151	55	半円	中世	—	—	—	—	
91	20	第2(上)	155、43	16	半円	中世	—	—	—	—	
92	19	第2(上)	140、160	64	円形	13初	17	—	90	—	
93	19	第2(上)	136、127	52	円	中世	—	—	—	—	
94	18、19	第2(上)	135、88	21	不定形	13後	18	—	90	77	
95	1	第2(上)	215、273	144	隅丸長方形	近世?	19	—	90	77	庭に枝が束ねられた状態 枝有り
96	9	第2(上)	73、82	41	円形	13前	—	—	90	—	
97	18、19	第2(上)	272、273	52	隅丸方形	12末~13前	20	4、7	90	77	瓦状の植物遺体、石
98	8、9、18、19	第2(上)	187、215	130	不定形	中世	21	7	142	148	井戸構造を有する(動物、2段)
131	18	第2(上)	101、105	3	円形	12末~13初	—	—	91	78	
99	15	第2(下)	140、168	36	長円形	中世	24	—	—	—	内部に燃こ焼?の石
100	15、16	第2(下)	612、254	99	隅丸方形	13初~前	—	—	91	—	
101	5、15	第2(下)	221、251	64	楕円形	13前	—	8	91	—	
102	15	第2(下)	120、113	36	円形	中世	—	—	—	—	

遺構番号	地区	遺構面	規模 (cm)	厚(a)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押込	戻版	押込	戻版	
SK-103	5	第2(下)	99, 88	49	隅丸方形	中世	—	—	—	—	
104	5	第2(下)	90, 89	68	円形	中世	—	—	—	—	
105	6	第2(下)	61, 68	80	円形	中世	—	—	—	—	
106	5	第2(下)	77, 83	35	円形	中世	—	—	—	—	
107	13	第2(下)	72, 67	11	円形	中世	—	—	—	—	
108	18	第2(下)	158, 178	84	不定形	12後	—	—	91	78	
109	8	第2(下)	91, 76	42	円形	中世	—	—	—	—	
110	19	第2(下)	125, 138	71	円形	中世	—	—	—	—	
111	20	第2(下)	159, 138	57	不整形円形	古墳前	25	8	91	78	
112	14	第2(下)	72, 74	42	円形	中世	—	—	—	—	
113	14	第3	97, 49	12	楕円形	古墳	—	—	—	—	
114	14	第3	124, 85	15	—	古墳	—	—	—	—	
115	15	第3	65, 58	17	円形	古墳	—	—	—	—	
116	16	第3	173, 83	33	楕円形	古墳	—	—	—	—	
117	17	第3	145, 122	27	楕円形	古墳	—	—	—	—	
118	7	第3	92, 88	40	円形	古墳	—	—	—	—	
119	7	第3	88, 159	18	楕円形	古墳	—	—	—	—	
120	7	第3	58, 55	17	円形	古墳以前	—	—	91	—	
121	19	第3	83, 100	31	半円	古墳	—	—	—	—	
122	19, 20	第3	132, 206	10	隅丸方形	古墳	—	—	—	—	
123	20	第3	118, 287	15	不定形	古墳	—	—	—	—	
124	20	第3	75, 83	8	半円	古墳	—	—	—	—	
125	20	第3	129, 102	43	隅丸方形	古墳	—	—	—	—	
126	20	第3	217, 96	33	隅丸方形	古墳	—	—	—	—	
127	6, 16	第3	97, 105	12	円形	古墳	—	—	—	—	
128	10	第3	120, 208	25	楕円形	古墳	—	—	—	—	
129	2	第3	98, 144	33	楕円形	古墳	—	—	—	—	
130	4	第3	108, 112	42	円形	古墳	—	—	—	—	
SR-01	7, 17	第2(下)	490, 1,545	79	—	古墳後	—	9	—	82	
02	7,17,18	第3	690, 1,560	15	—	古墳前	26	12	—	82	
03	1,2,3,13,14	第3	196, 3,940	33	—	古墳以前	—	—	—	—	
07	14, 15	第3	470, 620	47	—	古墳以前	—	—	—	—	
08	5, 15	第3	185, 1,140	60	—	古墳以前	—	—	—	—	
09	10, 19	第3	200, 2,090	30~60	—	古墳以前	—	—	—	—	
10	10, 20	第3	238, 1,650	25	—	古墳以前	—	—	—	—	
11	3,13,14	第4	165, 1,500	49	—	弥生以前	—	14	—	—	
12	1,2,11	第4	430, 2,200	80	—	弥生以前	—	—	—	—	

L区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (cm)	長さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押垣	図版	押垣	図版	
SD-03	1, 7	第1	100, 1,790	3~20	---	近世	---	---	---	---	K, M区に続く
54	1~6	第1	120, 5,720	6~21	---	近世	27	15	---	---	O区に続く 枕列 石
55	4, 10	第1	125, 520	12~25	---	近世	---	---	---	---	K区に続く
31	4, 11	第2(上)	70, 195	2~20	---	中世	---	---	---	---	M区に続く
39	3, 9	第2(上)	135, 1,370	5~16	---	13段	---	---	102	91	M区に続く
56	11, 12	第2(上)	20, 380	6~17	---	中世	---	---	102	-	
57	6, 12	第2(上)	42, 1,300	2~8	---	中世	---	---	---	---	
58	4, 10	第2(上)	145, 1,870	4~12	---	中世	---	---	---	---	
59	11	第2(上)	90, 760	22~31	---	13段~14	---	---	---	---	K区に続く ST-01につながる
60	5	第2(上)	39, 470	3~9	---	中世	---	---	---	---	
61	11	第2(上)	86, 154	14	---	13段~14	---	---	---	---	
62	11	第2(上)	44, 184	11	---	中世	---	---	---	---	
63	11	第2(上)	46, 324	7~11	---	中世	---	---	---	---	
64	6	第2(上)	72, 594	5~10	---	中世	---	---	---	---	
65	6	第2(上)	22, 180	6	---	中世	---	---	---	---	
66	6	第2(上)	50, 432	7~12	---	中世	---	---	---	---	
67	5	第2(上)	34, 400	7	---	中世	---	---	---	---	
68	2, 8	第2(上)	175, 1,960	4~20	---	中世	---	---	---	---	K区に続く
69	3, 4	第2(下)	53, 1,235	6~38	---	古墳	---	---	---	---	
70	3, 4	第2(下)	50, 446	6~11	---	古墳	---	---	---	---	
71	1,2,8	第2(下)	26, 117	2~11	---	中世	---	---	---	---	
72	11, 12	第3	45, 412	4~32	---	古墳前	---	---	---	---	
SE-22	12	第2(上)	64, 52	51	楕円形	13段	29	18	95	---	遺物と石
23	12	第2(上)	98, 88	65	不整形	中世	---	---	143	---	井戸形跡残存せず
24	11, 12	第2(上)	106, 102	41	円	中世	---	---	143	---	井戸形跡残存せず
25	5	第2(上)	100, 124	72	楕円形	中世	---	---	---	---	井戸形跡残存せず
26	5	第2(上)	87, 82	40	円	中世	---	---	---	---	井戸形跡残存せず
27	5	第2(上)	108, 92	72	円	中世	---	---	---	---	井戸形跡残存せず
28	6	第2(上)	224, 195	118	楕円形	12前	30	18	95	80, 87	井戸形跡残存せず 須恵器遺
30	2, 3	第2(上)	88, 80	65	円	中世	31	---	144	---	遺物
29	3, 4	第2(下)	132, 128	69	円	中世	37	---	---	---	遺物 黒色土器
31	3	第2(下)	172, 140	52	不整形	10前	38	24	95, 133	87, 92, 97	遺物 古銭
SK-56	3	第2(上)	180, 295	101	不定形	13	32	20	96~100	88~90	商業上地 遺物大量に出土 建物遺体
57	9	第2(上)	366, 500	44	隅丸方形	中世	---	---	---	---	
58	12	第2(上)	78, 138	35	隅丸方形	13段	---	---	101	---	
59	10	第2(上)	164, 210	13	不定形	中世	---	---	---	---	
60	9	第2(下)	122, 106	3	不整形	中世	---	---	---	---	
61	3	第2(下)	192, 102	64	不定形	13前	33	18	101, 144	149	礎石、礎石 3個のピット重複

遺構番号	地区	遺構区	規模 (m)	長さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							挿固	図版	挿固	図版	
SK-63	2, 3	第2(下)	102, 74	6	不定形	中世	—	—	—	—	
54	9	第2(上)	98, 82	39	円形	中世	—	—	101	—	
65	9	第2(上)	112, 100	61	円形	中世	—	—	—	—	
66	10	第2(上)	86, 90	36	円形	中世	—	—	101	—	
67	10	第2(上)	330, 440	12	不定形	13前	34	18	101	—	燃上焼じる
68	12	第2(上)	75, 70	86	円形	13前	35	19	—	149	納約出土 井戸?
69	10	第2(上)	40, 86	16	半円	13前	—	—	—	—	
70	2	第2(下)	166, 172	56	円形	古前	90	24	101	91	白玉出土 植物遺体 炭化材
71	6	第2(下)	78, 44	49	半円	中世	—	—	—	—	
72	6	第2(下)	116, 164	54	隅丸方形	中世	—	—	—	—	
73	5	第2(下)	146, 200	39	不整円	中世	—	—	—	—	
74	8	第2(下)	156, 120	19	隅丸方形	中世	—	—	—	—	
75	7	第2(下)	53, 109	30	楕円形	中世	—	—	—	—	
77	6	第2(下)	83, 84	11	半円	中世	—	—	—	—	
79	3	第3	136, 150	42	小整円	古前	—	—	—	—	
80	3	第3	105, 90	21	円形	古前	41	—	101	91	
81	2	第3	238, 254	51	不整円	古前	—	—	—	—	
82	9	第3	297, 383	73	不定形	古前	—	25	101	—	
83	9	第3	193, 198	40	不整円形	古前	—	25	101	—	
84	9, 10	第3	990, 700	66-100	不定形	古前	42	26, 27	102, 149, 150	91, 92	
ST-02	11, 12	第2(上)	1,500, 300	72	—	13前-後	36	—	95	86	水路 SD-59につながる
SJ-01	5	第3	350, 232	49	不定形	古前?	44	38	151	149	杭・板材多く出土
SR-01	5, 6, 10, 11	第2(下)	168, 5,200	42-86	—	古後	40	23	103	86, 93-95	
92	5, 6, 10, 11	第3	381, 2,680	14-65	—	古前	43	26, 29	104, 143	93-96, 151	
95	2, 8	第4	490, 1,925	53	—	弥生以前?	—	—	150	96	

M区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (cm)	厚さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押区	段版	押区	段版	
SD-01	9	第1	95, 120	16	—	近世	—	—	—	—	
02	10	第1	29, 64	5~9	—	近世	—	—	—	—	遺構
03	2, 11	第1	115, 158	1~21	—	近世	—	—	—	—	K・L区に続く
04	2, 11	第1	90, 166	14	—	近世	—	—	—	—	
05	11, 17	第1	80, 595	2~27	—	近世	—	33	—	—	
06	11, 15	第1	55, 373	3~15	—	近世	—	33	—	—	
07	6~15	第1	120, 1,760	7~26	—	近世	—	—	—	—	
08	6, 15	第1	40, 970	4~16	—	近世	—	—	—	—	遺構
09	6, 15	第1	95, 1,422	2~8	—	近世	—	—	—	—	遺構
10	6	第1	41, 215	—	—	近世	—	—	—	—	遺構
11	8, 17	第1	34, 350	2	—	近世	—	—	—	—	遺構
29	16	第2(上)	84, 1,684	4~10	—	中世	—	—	124	124	
30	7, 16	第2(上)	72, 2,330	9~29	—	中世	—	—	124	124	
31	6, 15	第2(上)	105, 775 80, 1,340	8~24	—	11末	—	—	124	123, 124	L区に続く
32	6, 15	第2(上)	88, 195	2~20	—	12後	—	—	124	124	
33	6	第2(上)	58, 1,020	7~40	—	12後	—	—	124	123, 124	
34	15	第2(上)	37, 700	3~9	—	中世	—	—	—	—	
35	5	第2(上)	48, 302	19~23	—	中世	—	—	—	—	
36	6	第2(上)	47, 456	12~29	—	中世	—	—	—	—	
37	5, 6	第2(上)	60, 514	4~10	—	中世	—	—	—	—	
38	13	第2(上)	63, 1,020	5~13	—	中世	—	—	—	—	
39	4, 13	第2(上)	104, 1,358	16~57	—	13前	—	—	124	124	L区に続く
42	6	第2(上)	130, 306	10~24	—	12末~13前	64	47	124	124	
43	14	第2(下)	32, 135	8	—	中世	—	—	—	—	
44	4, 13~15	第3	193, 253	10~14	—	古墳~奈良	—	—	—	—	
45	4	第3	122, 342	66	—	中世	—	66	124, 154	123, 161	
46	6	第3	83, 288	10~19	—	古墳~奈良	—	—	—	—	
47	5~8, 12~14	第3	135, 515	5~27	—	古墳前	—	—	—	—	
48	15~17	第4	38, 1,660	2~6	—	奈良以前	—	—	—	—	
49	7, 14~15	第4	66, 3,110	7~18	—	奈良以前	—	—	—	—	
50	2~3, 12	第4	70, 2,360	3~9	—	奈良以前	—	—	—	—	
51	1, 2, 10	第4	75, 4,680	1~6	—	奈良以前	—	—	—	—	
52	10	第4	70, 572	5~12	—	奈良以前	—	—	—	—	
SB-03	17	第2(上)	206, 218	104	隅丸方形	13前	46	36	114	—	遺物 石積み井戸裏
04	6, 7	第2(上)	178, 187	182	円形	13初	47	37	114	109	井戸側と遺物
05	4	第2(上)	334, 221	103	円形	中世	—	—	—	—	井戸形跡残存せず
08	15	第2(上)	226, 220	66	不整形円形	11末~12初	50	36	115	108, 109	遺物
09	14	第2(上)	216, 206	68	長円形	12後~13初	51	—	115	—	遺物3段
10	14	第2(上)	137, 119	55	長円	12	52	38	115	109	井戸形跡残存せず 土坑?

遺構番号	地区	遺構面	規模 (ca)	長さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押戻	図版	押戻	図版	
SR-11	15	第2(上)	167, 170	144	方形	12末~11初	53	39, 40	116, 156~169	110, 163~159	井戸側と曲物 箱神
12	15	第2(上)	185, 243	80	不定形	12末	54	—	116	110	井戸形遺構存せず 井戸抜き取り跡?
13	13	第2(上)	195, 175	110	半円	11後	65	41	116, 170~172	108, 159, 160	井戸側と曲物
14	6	第2(下)	151, 143	76	円形	中世	—	—	—	—	井戸形遺構存せず 土坑?
15	6	第2(下)	73, 205	35	半円	中世	—	—	—	—	井戸形遺構存せず
16	15	第2(下)	139, 240	58	不定形	12前~13初	68	56	117	111	曲物3段
17	2	第3	192, 188	37	円形	11後~12初	72	64	117	111~113	井戸形遺構存せず
18	4	第3	280, 230	47	長円形	8後	73	65, 67	118, 172	113, 114, 161	楕円形曲物 横溝遺器蓋破
19	14	第3	191, 210	59	円	平安	—	—	—	—	井戸形遺構存せず
20	4	第3	165, 170	64	隅丸方形	11末~12初	74	67, 68	118	115	板材 石 井戸抜き取り跡
21	4	第3	130, 130	52	円	12	75	67, 69	—	—	曲物と石積み井戸側
SK-01	1	第1	80, 70	8	円形	近世	—	—	—	—	野井戸?
02	13	第1	75, 120	8	楕円形	近世	—	—	—	—	野井戸?
03	6	第1	60, 100	—	隅丸方形	近世	—	—	—	—	野井戸?
04	15	第1	60, 150	—	隅丸方形	近世	—	—	—	—	野井戸?
06	17	第2(上)	248, 201	136	不定形	13前	56	42, 43	119, 120, 154	116~119	井戸構造を有する 曲物5段 石
07	16	第2(上)	166, 204	54	円	中世	—	—	120	—	—
08	16	第2(上)	184, 152	56	不定形	13中~後	67	44	120, 133	119	—
09	16	第2(上)	84, 143	19	半円	中世	58	44	—	—	井戸構造を有する 石積み井戸側?
10	16	第2(上)	162, 300	50	楕円形	12後	—	—	121, 154	109, 110, 153, 161	—
11	16	第2(上)	68, 268	26	〃	中世	—	—	121	—	—
12	7	第2(上)	96, 95	54	隅丸方形	中世	—	—	121	119	—
13	7	第2(上)	73, 145	16	不定形	中世	—	—	—	—	—
14	15	第2(上)	165, 176	110	半円	12末~13前	59	44	121, 154	120, 161	井戸構造を有する 曲物5段 石
15	15	第2(上)	98, 92	64	楕円形	13前	60	44	121, 154	—	井戸構造を有する 曲物2段
16	15	第2(上)	117, 138	46	楕円形	13前	—	—	121	119, 120	—
19	14	第2(上)	152, 134	36	円形	中世	—	—	—	—	—
20	14	第2(上)	110, 54	63	半円	中世	—	—	—	—	—
21	14	第2(上)	183, 173	130	不整形	13	61	45	122	121, 122	井戸構造を有する 曲物6段
22	14	第2(上)	100, 125	64	隅丸方形	13前	—	—	122	121, 122	—
23	15	第2(上)	81, 40	44	半円	中世	—	—	—	121	—
24										121	—
25	14	第2(上)	110, 96	52	不定形	13前	62	46	122	121	井戸構造を有する 曲物
26	14	第2(上)	75, 32	19	半円	10中	—	—	122	121	—
27	14	第2(上)	72, 81	66	不定形	13中~後	63	46	122	121, 122	井戸構造を有する 曲物
28	14	第2(上)	57, 86	20	楕円形	中世	—	—	122	121	—
29	14	第2(上)	79, 78	30	円形	13前	—	—	122	122	—
30	13	第2(上)	110, 44	16	半円	中世	—	—	—	—	—
31	5	第2(下)	74, 110	45	楕円形	中世	—	—	—	—	—

M区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (㎡)	深3(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							障壁	図版	障壁	図版	
SK-32	5	第2(F)	72, 77	26	円形	中世	—	—	—	—	
33	5	第2(F)	79, 79	16	円形	中世	—	—	—	—	
34	5	第2(F)	58, 55	24	円形	13後	—	—	122	122	
35	5	第2(F)	58, 60	50	円形	13初	69	56	122	122	
36	6	第2(F)	230, 130	36	隅丸方形	中世	—	57	—	—	土溝墓?
37	13	第2(F)	132, 129	16	円形	中世	—	—	—	—	
38	6	第2(F)	78, 105	10	隅丸方形	中世	—	—	—	—	
39	6	第2(F)	98, 81	72	楕円形	13前	70	58	—	—	非戸構造を有する 遺物、石
40	6	第2(F)	45, 115	49	楕円形	中世	—	—	122, 154	—	
41	6	第2(F)	120, 120	76	不整形	13	71	59	—	—	非戸構造を有する 遺物
42	6	第2(F)	121, 9	1	楕円形	12	中世	—	—	—	
43	16, 17	第2(F)	94, 92	15	隅丸方形	中世	—	—	—	—	
47	11	第3	230, 182	15	不定形	中世?	—	—	—	—	
48	11	第3	144, 158	17	不定形	中世?	—	—	—	—	
49	2	第3	84, 128	16	隅丸方形	中世?	—	—	—	—	
50	13	第3	75, 72	22	円形	中世	—	—	—	—	
51	13	第3	70, 63	21	円形	中世	—	—	—	—	
53	2	第3	72, 60	13	円形	中世	—	—	—	—	
ST-01	4, 5	第2(F)	1,670, 1,000	80	不定形	11末~12初	—	54, 55	109~112 152, 153	109~106, 138 152, 153	
03	6	第2(F)	250, 460	40	不定形	13後	—	—	113	—	
04	4	第3	498, 426	48	隅丸方形	13前	75	67	113	107	
SP-01	7, 8	第2(上)	404, 356	26~44	不定形	11末~12初	65	48	—	—	
SI-01	7	第2(上)	—	—	—	10末~11前	66	47	125	125	
02	6	第2(上)	—	—	—	12後	67	—	125	125	

N区

遺構一覽表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (ca)	長さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押戻	図版	押戻	図版	
SD-05	2	第1	80, 600	2~27	—	近世	—	—	—	—	
12	1, 2	第1	25, 345	2	—	近世	—	—	—	—	築溝
13	1	第1	22, 192	—	—	近世	—	—	—	—	築溝
14	1	第1	21, 140	—	—	近世	—	—	—	—	築溝
15	1	第1	21, 150	—	—	近世	—	—	—	—	築溝
16	1	第1	20, 178	11~23	—	近世	—	—	—	—	
17	2	第1	22, 80	—	—	近世	—	—	—	—	築溝
18	〃	第1	31, 955	3	—	近世	—	—	—	—	築溝
19	4, 5	第1	38, 515	2	—	近世	—	—	—	—	築溝
20	〃	第1	35, 403	3	—	近世	—	—	—	—	築溝
21	〃	第1	35, 424	4	—	近世	—	—	—	—	築溝
22	6	第1	80, 550	7~16	—	近世	—	—	—	—	
23	8	第1	38, 515	5	—	近世	—	—	—	—	
24	〃	第1	110, 770	3~7	—	近世	—	—	—	—	
25	〃	第1	143, 359	5~7	—	近世	—	—	—	—	
26	4, 5	第1	218, 264	14	—	近世	—	—	—	—	竪状遺構
27	5	第1	155, 208	3~11	—	近世	—	—	—	—	竪状遺構
28	2	第2(上)	42, 418	5~13	—	中世	—	—	—	—	
40	3	第2(上)	125, 400	3~6	—	13初	—	—	124	124	
41	4	第2(上)	70, 426	5~13	—	中世	—	—	—	—	
53	5	第2(上)	102, 146	15~17	—	中世	—	—	—	—	
SE-01	1	第2(上)	222, 239	82	平門	12	—	—	114	—	井戸形態残存せず
02	2	第2(上)	150, 186	50	隅丸平門	13初	—	—	114	109	井戸形態残存せず
06	1	第2(上)	136, 112	64	不定形	13	48	36	—	—	遺物
07	1	第2(上)	200, 170	149	不定形	13初	49	38	155	153	井戸掘と遺物3段 SE-01に接れる
SK-06	3	第2(上)	90, 122	43	隅丸方形	中世	—	—	—	—	
54	5	第2(上)	150, 186	34	竪門形	13初	—	—	123	—	
55	〃	第2(上)	130, 172	54	不定形	12後~13初	—	—	123	122, 123	
44	7	第2(下)	118, 219	15	不定形	中世	—	—	—	—	
45	〃	第2(下)	73, 92	8	半門	中世	—	—	—	—	
46	〃	第2(下)	83, 89	15	門形	13初	—	—	123	122	
ST-02	5, 6	第2(上)	212, 484	70	—	13前~後	—	—	113	106, 107	
05	5	第2(下)	260, 400	62	不定形	13初	—	—	113, 153	107, 153	

O区

遺構一覧表

遺構番号	地区	遺構面	規模 (㎡)	深さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押洞	図版	押洞	図版	
SD-54	3、6	第1	152、1,530	13~34	—	近世	76	30	—	—	水路 杭列の跡
73	6	第3	37、600	3~8	—	古墳以前	—	—	—	—	
SK-76	3	第2(下)	67、72	29	不整形	中世?	—	—	—	—	
78	4	第2(下)	74、80	61	隅丸円形	中世?	—	—	—	—	
85	6	第3	71、76	42	円形	古墳以前	—	—	—	—	
86	5	第3	120、135	36	不整形	古墳以前	—	—	—	—	
SR-03	1,2,4	第3	256、2,250	59	—	古墳以前	—	32	—	—	
04	1	第3	200、520	52	—	古墳以前	—	32	—	—	

P区

遺構番号	地区	遺構面	規模 (㎡)	深さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押洞	図版	押洞	図版	
SD-81	2、3	第1	96、105	33	—	近世	—	—	—	—	水路
82	1	第2(上)	50、375	5~8	—	中世	—	—	—	—	
83	1	第2(上)	55、365	26~30	—	中世	—	—	—	—	
84	2	第2(上)	56、70	10	—	中世	—	—	—	—	
85	4	第2(下)	20、165	10~15	—	中世	—	—	—	—	
86	2	第2(下)	100、140	16~22	—	中世	—	—	—	—	
SE-32	2	第3	100、100	29	円形	12前-後	—	—	87	73	井戸形跡残存せず
SK-88	2	第2(上)	160、160	35	不定形	中世	—	—	—	—	板材
89	1	第2(上)	125、165	11	不定形	中世	—	—	—	—	

Q区

遺構番号	地区	遺構面	規模 (㎡)	深さ(m)	平面形	時代	遺構		遺物		備考
							押洞	図版	押洞	図版	
SD-74	4	第1	17、250	26	—	近世	—	—	—	—	
75	3	第1	180、230	24	—	近世	—	—	—	—	
76	3	第2(下)	225、235	—	—	中世	—	—	—	—	
78	4	第3	500、355	28	—	中世	—	—	—	—	
79	3	第3	280、412	31~50	—	古墳以前?	—	—	—	—	
80	4	第4	240、384	9~21	—	古墳以前?	—	—	—	—	
SK-87	3	第2(上)	113、96	52	円形	中世	—	—	—	—	

報告書抄録

ふりがな	きたしんまちいせきだいさんじはっくつちょうさがいようほうこくしよ							
書名	北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書							
副書名	府営大東北新町住宅建替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次	_____							
シリーズ名	_____							
シリーズ番号	_____							
編集者名	黒田淳							
編集機関	大東市北新町遺跡調査会							
所在地	〒574 大阪府大東市新町13番30号 ☎0720-73-3521							
発行年月日	1997年(平成9年) 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたしんまちいせき 北新町遺跡	大阪府 大東市 北新町	27218	45	34度 43分 34秒	135度 38分 24秒	Ⅲ-1次 1990年11月27日 ↓ 1991年5月18日 Ⅲ-2次 1991年7月29日 ↓ 1992年2月14日 Ⅲ-3次 1992年7月13日 ↓ 1993年3月3日	M・N区 2544㎡ L・O・ Q区 2071㎡ K・P区 2034㎡	府営大東 北新町 住宅 建替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
北新町遺跡		縄文時代	自然河川		縄文土器		ヒスイ製勾玉出土	
		弥生時代			弥生土器			
	集落跡	古墳時代	水田跡、自然河川 土坑		土師器、須恵器		手埴形土器、白玉	
	集落跡	奈良時代	井戸		土師器、須恵器		須恵器墨書蓋杯	
	集落跡	中世	建物跡、井戸、 土坑、柱穴、溝 屋敷地の区画溝 水路、池		土師器、須恵器 瓦器、輸入陶磁 器、緑釉・灰釉 陶器、国産陶磁 器、瓦、木製品 銅銭		溝で区画された集落 広範囲に検出 10世紀末～13世紀末 頃まで存続 「東大寺」の刻印の ある平瓦出土(岡山 県万富瓦窯産、重源 の東大寺再建に関連 する)	
	畑、耕作 地	近世	東西方向、南北方 向に走る水路		染付などの陶磁 器類			

北新町遺跡第3次発掘調査概要報告書(本文編)

大阪府大東市北新町所在

1997年3月

発行 大東市北新町遺跡調査会

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

